ＩＳ・・・・・・・・・・・・・うん、結構辛いね

断耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ・・・・・・・・・・・・うん、結構辛いね

【Ｎコード】
Ｎ３０１９Ｒ

【作者名】
断耶

【あらすじ】

え～、読者に告ぐ、この作品は作者である断耶、別名として使うは朱雀の暇つぶしと言う名の妄想の捌け口として使った作品
まぁ、あれだ、なんとなく創造した作品を頑張って形にした、というどうしようもないほどの適当さだ

それでも読みたい、なんていう変人・・・・・・ゲフンゲフン、聖者は呼んでくださいな

・・・・・・・・・・・・期待はしないでね？別作品が書けない時とかに考えた・・・・・・うん、気分転換だからね！

べ、別に読んで欲しくて上げたわけじゃないんだからね！ただ、こんな作品も読んでみたいな～、なんて思ってる人がいたら・・・・・・・・・読んでも良いんじゃ無いかな！・・・・・・・・・・・・・・・・・ウゲェ・・・・・・・

まぁ実際、ちょっとは読んで欲しいと思わないと上げないよね！ってな訳で・・・・・・・・え？分からない？しかも長い？・・・・・・・・うん、じゃあいってみよ～

・・・・・・・何があったし！（前書き）

読むんだ・・・・・・・頑張って！
自分でも良く分からないから！

・・・・・・何があったし！

「……あれ？」
「どうしたの？」
「いや、ついさっきまで本屋にいたはずなんだけど……」
「そっか、それで？」
「……ここは何所！？！？！？！？」

目を開けると、そこはさっきまでいた本屋……などではなく、何も無い
何も見えない、言うならば無、在る様で無い、本当なら目が何かを見て、脳に伝えるのだが、それが無い、まるで目が無いような

「……目は在るな」
「それはそうだよ」

確認したら目は在った、じゃあなんで？
思い出せ、ここにいる前になにがあったのかを……

「やっと買えた！長らく金を溜めた甲斐があったし！」

そこは、家からすぐそこの本屋さん
うん、本屋、というより本屋さん、の方が合ってるだろう
小さな本屋さん、店員も老人一人、良く買いに来るので仲は良好、
と言うか

「良かったの～、三ヶ月も待ったんじゃ、その分読むのも楽しみじゃろうて……それにしても、やはり珍しい趣味じゃの」
「ん～、まぁね、両方中学生が読むものじゃないよね…」

ソバットの全て、誰が読むんだろう……あ、俺か
科学の進歩理論編、……いや、これは偶に読む位いるだろう……大人でも途中で諦めるけど…
まぁ、これで分かるかも知れないが、俺は完璧なる理系だ
え？ソバットで理系かなんてわかる訳ない？……気にするな！
国語？ナニソレオイシイノ？
社会？そんな事、一般市民の俺には関係なかとですたい！
……ぶっちゃけ、文系は破壊的、良くて５０点位か？悪いと１６点とか、前に２点を取った事もあったな・・・・・・
まぁ、そんな感じの中学生、それが俺、真中荒榎だ
まなかあらか、と読むらしいが……滅茶苦茶読みにくい
もっと簡単な文字にすれば良かったのに……と思うこの頃です
まぁ、何が言いたいのかと言うと

好きだからしょうがない！

え？全く繋がってない？いやいやいや、読みなおしてごらん、ちゃんと繋がって……ないな
……気にするな！

「所で、荒榎君が好きなこの本、最新刊が入ったんだよ
「うおっ！？本当！？」

全く知らなかったよ

「ああ、ほらそこ、積んであるだろう？」
「あ、本当だ、よし、買お……金が無い、だと……」
「ははははっ、いいよ、お金は要らないよ」
「え！？良いの！？」

この人やっぱり良い人だ！
けど、店としてはどうなんだ？

「ああ、よく来てくれてるし、話し相手にもなってくれているんだ、これぐらいは安いものさ
「・・・・・ありがとうございます！」

お礼はきちんとするよ？これが礼儀だからね！

「その分、これからも話し相手になっておくれ」
「……はい！」

その程度で良いのなら喜んで！
そうして、俺は本を手に入れた！

ここまでは普通だな
んでもって……

あれ？
その後ってどうしたっけ？

「落ち着いたかの？」
「……本屋のおじいちゃん……だよ…ね？」
「まぁ、間違ってはおらんの」
「ここは？」
「ここはな、世界の中心、とでも言うべきところじゃ」
「……世界の中心？」
「まぁ、難しい事はどうでも良い。お主は死んだんじゃ、そして、私は神じゃ」
「……え？」
「お主は死んだんじゃ、そして、私は神じゃ」
「……なんで？」
「刺されて」
「誰に？」
「殺人鬼に」

……

「ああ～、そう言えばそうだったな」
「軽いの」

「まぁ、死んじゃったもんはしょうがないし、俺が死んだなら、爺ちゃんは神でもおかしくないし」

爺ちゃんは何所か人離れしてたし
痛みは覚えてないな、悔いはない、殺人鬼も最後は警察に捕まったしな

「悔いが無いのか？」
「毎日、悔いが残らない様に生きてきたから！」
「……それは凄いの」

買った本だって、その日の家に読んじゃうし……あ

「あったわ、悔い」
「何じゃ？」

ソレは……

「小説の続きが気になる！」
「……ソレだけかの？」
「うん！」
「……まぁ、丁度良いか……良いか？お主は本当ならアのときあり得ない行動をしたのじゃ」
「……何も憶えて無いんだけど」
「さっき言っておったではないか、殺人鬼は警察に捕まったと」
「……ああ、そこ？」
「うむ、本当なら、あそこでお主は手を離し、あの殺人鬼はあのまま逃走、あと３０人ほど殺す予定じゃった」
「……うわぁ～」

殺人鬼一人捕まえただけで３０人の命が助かったのかよ
なんて狭い世の中

「それでじゃ、お主には３０人分のお礼として、このままもう一度生きてもらう」
「……え？」
「何か、変なところがあったかの？」
「いや、普通はお前の所為で運命が変わった、どうしてくれる！っとか言うんじゃ…」
「ああ、確かに運命は変わったの、じゃがな、そのおかげで誰かの命が助かったのじゃ、お礼を言う事はあっても、怒る事はあるまいて」
「……」

なんか、人間思いの優しい神様だな

「それでじゃ、前の世界にはもう行けないからの、……そうじゃ、この世界に行ってもらおう」
「え？勝手に決められるの？」
「気にするでない、ついでにこの……ソバット？とか言う技も使えるようにしておくでの……あ、あとちゃんと世界に馴染めるようにしておくかの」

……何か、俺の改造計画が始まったよ？さっきから何かを投げつけてくるし
ソレが体の中に入っていくし、一体どうなってるんだよ

「うむ、これ位かの、では行ってこい」
「いや、ちょっと待っ――」

そこまで言って、俺の意識は飛んだ

あれから五年、俺は今を生きている
なんてカッコイイ言い方をしているが、平凡だ
まぁ変わった事といえば、今引越しをした、と言った所か

最初に自意識が現われて、考えたのは一つ

ここは何所だ?

あの時、神様はこの世界に行ってもらうと言った、ついでに言うと、
色々と俺を改造していた
つまり、それ位の力が無いと生きてゆけない、もしくは、その力で楽をしなさい
楽をしなさいは無いだろう、あの人は楽をするのが嫌いそうだし…
……多分
だとすると、それだけの力が必要だという事になる
そんな世界あるのか?そう考えたとき、ふと思った

小説の世界って全部がそんな感じじゃないか?

そうじゃないか、小説の世界ならあり得そうだ
だが、そこまで思って考えた

小説って……その作者の考えから出来てるんだよな?じゃあ実在はあり得ないんじゃ……
……あれ?これってあれか?俺が小説の中に入った、とかかひょ

っとして、これがテンプレ？

だとすると、知らない可能性もあるな、小説なんて、一体幾つあるのか分からないからな……一日五個は増えてるって聞いた覚えがあるような……

まぁ、知ってると仮定して何か情報を探さないと、このままじゃ何も出来ないからな

俺が知ってるのだけでも……５０はあるか？

なんて考えていた事もありましたよ……

今日、ってかつい今さっきに引越しが終わりましたよ

「ほら、荒榎、この子達ががお隣さんになるのよ」

「お隣さん？」

この人は俺の新しい母親、真中香織

なんと、名前は前世お同じだったんだよ！

爺ちゃんありがとう！

あ、間違えた、神様ありがとう！

ちなみに、父親はいない、正確にはいる、んだが今はシンガポールに単身赴任中だ

あ、口調？何故か普通に話せます、ええ

普通なら舌が回らない時期なのにね

四歳には話せたよ！

って、お隣さん？……何所かで見たような四人組だな……

「始めまして、私は織斑千冬、この子は弟の一夏だ、よろしくな」

「よろしくー」

「いえいえ、こちらこそ」
「しののほうきだ、よろしく」
「……」
「おい、束、挨拶くらいしたらどうだ？」
「え～、興味無いからいいよ～、それよりちぃちゃん、帰って束さんが作ったゲームやろうよ～」
「はぁ、ともあれよろしく頼む、こいつも悪い奴では無いんだ」
「……よろしく？」
「何で疑問系なんだ？」

いや、だってさ……これってあれですよね……ＩＳだよね！
死ぬ前に買った本じゃん！神様ありがとう！パート２！
って事は、ＩＳもあるんだよな！
いや、あれは束さんが作るからまだ無いよな……何時だっけ？
それにしても、もうこの年でゲームを作るとか……あれ？俺も作れそうだな
おかしいな、そっち方面の知識は知らないはずなんだが……
神様か？一体俺に何をしたんだよ……頑張ればＩＳの武器も作れそうだな……
まぁ、俺は男だから使えないし、関係無いな
束さんも興味を持ってないし……静かに暮らせるよな？
って、静かじゃ駄目じゃん、小説の先が知りたいんだから……どうしようかな

なんて考えた事もありましたよ

「ねぇねぇ、あっ君遊ぼうよ～」
「いや、今はちょっと……」

はい、滅茶苦茶興味を持たれましたよ
何があったかと言うと

「ねぇ、一緒に遊ぼうか」
「いいよ～」
「わたしもか、いいだろう」
「ふむ、それなら家で一緒にゲームをしないか？」
「え～、ちぃちゃん！束さんは反対だよ！」
「ゲームですか？」
「ああ、こいつが作ったゲームでな、これが結構難しいが、楽しみはある」
「ちぃちゃん！無視はいけないんだよ！誰かは忘れたけど、言ってたよ！」
「それを言ったのは私達のクラスの担任だ、それに言われていたのはお前だ」
「そうだっけ～？」
「そうだ…はぁ……お前は一夏の言う事を拒否する気か？」

怖っ！？目が怖い！凄い威圧感が！……将来はこれより強いんだろうか……

「……うぅ、わかったよ～、箒ちゃんも遊ぶみたいだし」
「分かれば良い」

……あれ？俺が行くのは確定済み？

「では、行こうか」

「い、いや、母さんが「いってらっしゃいな」……母さん!?何時の間に!?」

「ふふっ、良いじゃないのそんな事、ほら遊んできなさい」
「……はい」
「ほら、しゃきっとしなさい、それじゃあ千冬ちゃん、よろしくね」
「はい、それじゃあ」
「……ドナドナド～ナ～ド～ナ～、子牛を乗せて」
「何で君がそんな歌を知ってるんだ……こっちだ」
「隣じゃないんですか?」
「束の家は道場でな、もう少し先だ」
「……何で家に来たんですか?」
「私が連れてきた」
「……」

束さんも大変だな・・・・・
などと考えているうちに辿り着く
道場の裏にプレハブが建っており、その中に入っていく
まあ、道場じゃゲームは出来ないからな
それにしても、なんのゲームなんだろう?
テレビゲームはさすがに……あり得そうだから怖いんです
あれ?でもさぁ、束さんが作ったゲームが普通な訳が無いよな!
……俺が出来るとでも?
いや、今の俺なら出来そうだな、この体になってから頭が異常なほど理系になったし
今なら新しい法則も分かりそうだな、作るか?ＩＳ関係で
……束さんが作りそうだけど……まぁ良いか

「ほら、入れ」
「あ、はい、どうも」

千冬さんが扉を開けて待っていたようで結構、優しいんだな……何があったら所為とを叩くようになるんだろうか……

「……うわぁ、すっご」

中に入ると、周りは全て機械の山、金が掛かってるな～
ってか、ＩＳの発表って何時だっけ？そんなの読んだ覚えが無いな
そんな事を考えている中、皆はどんどん進んで行く
一体なんのゲームだ？何て思ってたら

「……本当にテレビゲームかよ」
「どうした？早く座れ、コントローラーはボタンぬ数が異常だが殆ど使わないからな、使うのは赤、青、黄色、翠だけだ」
「……このキーボードみたいのがコントローラー？」

何でゲーセンの機械にキーボードがくっついてるんですか？

「使い方はそこに書いてある、キーボードは使わなくて良い……といっても、束は使うだろうが」

束さんは使うんだ……って事はゲームに関係がある？
ヤベッなんだかわくわくしてきた！束さんなら俺より頭が良いはずだから結構良い勝負が出来るかも！
画面は一人一つなんだな、ってか、これゲーセンのより画質が良いだと！？

「じゃあ行くよ～、ゲームスタ～ツ！」

おおぅ、ちゃんと動くんだ…まぁ束さんだからな

えっと、キャラを選んで……ってあれ？このゲーム機についてる小さいテレビは関係ないの？
まぁ良いや、キャラは……何で全部が動物なんだよ……パンダで良いか

『レディー…ファイ！』

発音までこだわってるな・・・・・・

「ここ！はぁ！せい！とぉ！」
「一夏静かにやれ」
「……ちふゆさん、死んでる」
「箒、バカな事を言うんじゃ……なんだと」
「アハハ～、行け行け～」
「……」

何この乱闘、と言うか束さん、一番に千冬さんを落とすってどうよ？
……ほい、とぉ、せいや、おれは地道に行くぜ、
てかこれ必殺技とか無いの？

「いっくよ～、必殺、束さんビーム！

……やばっ！急いでガード！

「……ふむ、また死んだな」
「ちふゆねぇ、あうと～」
「ちぃちゃんアウト～」
「やったのはねぇさんなのに……」
「あ、残った」
「「……え？」」

「ありゃ？じゃあもう一回「行け、覇道拳」……あら？」
『ユー、ウィン！』

「あらか、つえ～」
「ねぇさんが、まけた？」
「……」
「荒榎、一体何をしたんだ？」
「え？ただコマンドを入れただけですよ？」
「……このゲームにコマンドなんかあったのか？」
「ないですね、作りました」
「……束のゲームでか？」
「いや～、束さんがさっきビームを撃つときにキーボードで撃ちこんで内容を変えたので、良いのかな、と」

結構簡単に出来ました、はい

「ふ～ん、ねぇ君、お名前は？」
「え、さっき言った「もう一回言って」……」
「諦めろ、束は興味がある奴の名前しか憶えない、というか、聞かれたと言う事は興味を持たれた証拠だ、良かったな」

いえ、良くないです……
ひょっとしたらこれって俺のＩＳに対する関係フラグですか？
……なんでこんな事をしたんだろうか……
ま、まぁ、束さんに興味をもたれた事は純粋に嬉しいから良いか

「真中荒榎です」
「ん～、そっか、あっ君ね！」
「あ、あっ君！？いや、荒榎ですって」
「良いから良いから～、あっ君♪」

「いや、だから……」
「諦めろ、束は三文字以上の名前は短縮する」
「は、はぁ……」
なんだか面倒な人だったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
とまぁ、こんな事があり、一時間後にはこうなってるんですよ
「束、今は一夏と遊んでるだろう、見て分からないのか？」
「ぶ～、いいじゃんさ～、束さんとゲームで戦えるのってあっ君しか居ないんだもん！」
「それは、お前がゲームをしながら内容を変えるからだろう、それが無ければ私だって」
「ちぃちゃんはゲーム下手だもん！」
「うっ！……わ、私が下手なのではない！みんなが上手いだけだ！」
こんな千冬さん、本じゃ出てこなかったけど……良いものだ
「……荒榎、何か失礼な事を考えなかったか？」
「イ、イイエナニモカンガエテオリマセン」
「そうか、なら良い」
この人、何で人の考えが分かるんだよ、感が鋭いなんてもんじゃねぇぞ！

「それじゃあ、お邪魔しました」
「また明日な」
「ばいば～い」
「じゃあね」
「え～、あっ君～もっと遊ぼうよ～」

そろそろ時間が遅いと言う事で、俺と織斑姉弟は帰ることに

「あ、そうだあっ君！見せたいものがあるんだよ！」

……え～……千冬さん！

「……そろそろ帰してやれよ？」
「りょうか～い、ほらほらあっ君、こっちこっち～」
「え、ちょ、時間が…」
「すぐに終わるからさ～」

そう言って俺だけ連れて行かれる
行き先はさっきのプレハブ

「ここはさっきいたじゃないですか、何でそのときに言ってくれなかったんですか」
「え～とね、あまり人に見られちゃ駄目かな～、って」
「……そんな物を初めて会った日に見せられるほど気に入られた憶えはありませんが」
「そんなことないよ～、あのゲームで束さんに勝ったのってあっ君だけだもん～」
「あれだけでそんなに気に入られたんですか……」
「うん☆あれは束さんが暇つぶしに作ったからね～、だれも造りとかが分からないはずなんだけどね～あっ君は出来ちゃったし、頭良いなら手伝ってもらおうかな～、なんて」

そう言いながらプレハブの端っこ、少しある凹みの右の柱を触る
なんだろう、嫌な予感しかしない

「じゃじゃ～ん」
「……は？」

束さんがやった事は簡単に説明できる
ただ柱に当ててあるてを下まで擦った、ただそれだけ
なのに……

「……なんでパイプが出てくるんですか？」

そう、ただそれだけの行動って凹みの床が割れ、下からパイプが出てくる
まるで……

「……秘密基地みたいだな」
「そうだよ～、束さん特性の秘密基地だよ☆」
「なんでプレハブにそんなものが……」
「え？何を言ってるんだい！作ったんだよ～！」
「……」

前言撤回、やっぱりこの人には敵わない、何が何でも、だ
それにしても、いや、これは不味いだろう、頭の危険センサーがビンビンに反応してるよ！

「じゃあ、いっくよ～ん！」

そう言うが早いか、束さんはパイプに掴まって降りて行った

「……マジすか」

ここで帰れたらどんなに楽か……
と言っても、この先に何があるのかが非常に気になる為に帰る事は出来ないんだけどな

「んじゃ、行きますか」

荒榎はパイプに掴まり、下を見る

「……マジで秘密基地だな」

パイプは暫らくは下に伸び、そこで曲がっている為に見えない

「……ははは、俺、ここで死んだらどうしよう」

何て考えていると

「あっ君遅いよ！」

「うわぁぁぁ、ってわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

何故かは知らないが、後ろに束さんがおり、急に声をかけられたため、驚いて穴に落ちた

「うわっ、こわっ！うおぅ！」

「アハハ～、あっ君面白いよ～」

面白いのは束さんだけだって！って怖っ！

ああ、明かりが見える……って、現実！？……ああ、終わりか

「……ぜぇ、ぜぇ……やっと着いた」

ここは何所だ？何も無い広い空間にしか見えないんだけど

「やっぱりこれは楽しいね～、あっ君、もう一回！」

「やりませんから！」

「ぶ～」

「はぁ……で、見せたいものってなんですか？」

「……ああ、そうだったね！」

この人完璧に忘れてたぞ……

「じゃじゃ～ん、これぞ、束さんが開発した新しいメカマシン！」

そういって近くのボタンを押すと、目の前の床が上がってきた
……って！

「ウルトラメカマシン一号君なのだ！」
「……ネーミングセンスが無いですね」

そこに在ったのは銀の機械、どちらかと言うと一回り大きな甲冑と言った方があっているのかもしれない
ってか……ＩＳじゃん
これってあれだろ？最初のＩＳ『白騎士』だろ？思いっきり騎士だもん

「凄いですね、一体何なんですか？」
「えっとね～、宇宙服の代わりになるスーツ、だよ～☆」
「いや、そんな短い分をメモを見話さなくても良いじゃないですか」
「あっ君！束さんは覚えるのが大の嫌いなんだよ～！」
「いや、そんな威張らなくても……」

ってか、白騎士は分かった、でも……

「じゃあこっちはなんですか？」
「あっ君は変な事を聞くな～、それも同じだよ？」
「……」

あれ？ＩＳって最初は一台しか作られなかったんじゃないの？

「こっちはね～戦闘用なんだよ～」

……は？

「流石にこんな凄いもの作ったら、色んな所から狙われちゃうからね～」

……ああ、保険ですか

「それに、これ一つあれば世界中の兵器が相手でも勝っちゃうしね☆」

……うん、分かってはいたけど、本人から聞くと滑稽な話にしか聞こえないよな

「で、俺を読んだ訳はなんですか？」

「んっとねー、この機械はまだ完成してないんだー、だから手伝ってもらおうかなー、なんて思ったり」

「……何故にそこまで気に入られたし、まぁ良いですよ」

「やったー、って事で、明日からお手伝いよろしく～」

「はい、分かりました」

ＩＳ製作に手伝えるなんて夢の様だ、これを逃す手はないなって、もう明日からかよ……束さんはもう考え込んでるしさて、そろそろ帰るか……

「束さん、帰り道はどちらですか？」

「ん～、あそこ～」

指差した先には何も無い、言うとすればただの壁

「……ひょっとして」

壁に近づき、表面を撫でる

「まさかそんな訳が……うわぁぁぁぁ！？！？！？」

何かに指が引っかかった感覚と共に、上に押し出される感覚
つい、目を閉じてしまう、そして目を開けると

「・……速いな」

何時の間にかそこはさっきいたプレハブ、場所としてはさっきの目
の前

「……帰るか」

時間はもう遅い、何時の間にか３０分ほど経っていた

「帰ったら怒られるかな……あ、Ｉｓ装備考えようかな」

怒られる怖さと、Ｉｓを生で見た興奮、この二つで荒榎の心は振る
えていた

・・・・・・・何があったし！（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・うん、ごめんなさい
まぁ一言目はこれでしょ、もうひとつの作品を読んでくださっている方には申し訳ない・・・・・・
実は、小説を書くに当たって時たま何も思いつかない、もしくは他の作品が思いつくことがしばしばありました、といってもＩＳ何だけど・・・
なんとなくの精神で書いてみたら・・・・・・・・・溜まっちゃったんですね
うん、友達にはなんとなくで見せたらその友達までＩＳ書こうとする状態になりました
そんなに影響を受けると言うのなら、いっその事上げてしまえ！これが今回の心境です
ぶっちゃけます、ぶちゃけますよ？大丈夫ですか？こっちではキャラが壊れますよ？
出来れば朱雀と断耶は別人物と考えていただきたいほどに壊れますよ？

・・・・・・・・・・・・・・・
それでも良いと言うのなら！良いと言うのなら！
大事なことなので二階言いましたよ？大丈夫ですか？この状況ですでにキャラが崩壊してますけど大丈夫ですか？
それでも良いと言うのなら！続きを読むが良い！
この時点で７個は溜まってますからね！ここからはストップなしで流しますからね！

では！

・・・・・人生って、なんでもありだよね？

「……出来ちゃったよ」

どうも荒榎です
束さんからＩＳを見せてもらい手伝いをする毎日を半年過ごしました
そしたらさ……

コア作っちゃったんだよね……

いやさ？
本当は束さんが作るからいいや～、って思ってたんだけどさ
意外や意外、束さんが錯乱したんだよ、なんかね、「コアが作れないんだよ～アハハハハハ～」みたいな感じで
それが２ヶ月続いて、この辛さ分かる？ＩＳは弄りたいけどそこに

は錯乱状態の束さん
ＩＳの武器を作るにも、束さんがコアを作らないと「これってどうやって考えたの～？」って事になるから最後までは考えられないしだからさ、つい言っちゃったんだ「それならいっそのことここをこうすれば良いじゃないですか！」……言っちゃったんだよ
そしてら「あ、そっか～、よ～しあっ君！一緒に作っちゃお～！」的な感じだったと思うよ？

「あっ君～、暇だよ～」
「あ～もう！だったら政府に報告して、特許取って、その金で新しいものを作れば良いじゃないですか！たとえば競技用とか！」
「……なるほど！」

……あれ？これってどうなの？言わなかったらＩＳって政府に報告されなかったの？
いや、ひょっとして後で言うつもりだったのかもしれない……多分いや、そうだ、そうだよ、そうなんですよ！きっとそうだったんだ！だから俺が間違えただけなんだ！……あれ？
ひょっとして、これって原作ブレイク？いやいやいやいや、まだ大丈夫でしょ
よし、落ち着こう、落ち着いて……あ、オレンジジュースだ、もらい～

「ぽちっとな、……もしもし～偉い人ですか～」
「ブフゥー！？！？」

束さん！？速いだろうが！、っていうか何で今教えたんだよ俺！
……待てよ？確か、最初は認められなかったんじゃなかったっけ？
ああ、良かった～、これなら大丈夫……かな？

「あっ君、出かけるよ～」
「……ちなみにどちらに？」
「政府のとこだよ☆」
「……つまり？」
「国会議事堂～」

言うが早いか、束さんにえりを掴まれる荒榎
って、それは不味いでしょ！

「ってか、国会議事堂に居るかなんて分からないじゃないですか！」
「大丈夫！さっきハッキングして調べたら、今日は秘密に会議をやってるんだって～、丁度良いよね！」
「よくなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

最後まで言う前に連れて行かれる荒榎

「大体、どうやって行くんですか！」
「問題な～し、これを使うよ☆」
「しょっぱなから使います！？」
「うん！」

束さんが指差した先にはＩＳ、しかも、完成したばかりのプロトタイプ
実はさ、白騎士ともう一つにいきなりコアを乗せるのは流石に怖いと思って、もう一機作ったんだよ
え？誰が作ったかって？俺でした……
何故か「あっ君も作り方が分かった方が良いし、あっ君作って～」なんて言われましたよ
あんた絶対興味失っただろ！と思って、色々と積めこんでみたら……

はい、やりすぎました、束さんがこれ以上とない程に興味を持ったのは良いけど、絶対にオーバーテクノロジーだよこれ
つい、ね……頭に浮かんで「ひょっとしてこれも出来るんじゃないか？」なんて思ったら止まれなくなっちゃって……
つまり、

「最初のＩＳなのに最先端なんだよね……」
「いっくよ～」
「って、もう乗ってるし！しかも俺を掴んでる！？」
「ど～ん☆」
「わぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？！？」
「何所に行こうとしている？」
「……え？」
「あらら？」

あれ？なんで目の前に千冬さんが？
ここはまだ地下……

「束さん？ひょっとして教えちゃった？」
「……おお！そう言えば前に連れてきてたよ！」
「……一応聞くけど、何で？」
「もちろん！メカマシン一号を自慢しにだよ☆」
「……アンタ馬鹿ぁ！？」
「えへへ～、でちぃちゃん、なんか用だった～？」
「いや、ただの暇つぶしだ、……ところで、お前達は何をやってるんだ？」
「ん～、メカマシン一号を偉い人に見せて来ようかな～って」
「……アホだ、アホがいる……しかもこれはメカマシン一号じゃないし、一号はあっちだし」
「……はぁ、全く、お前が行って説明できるのか？」

「出来るよ～、でも興味無いから見せるだけにしておこっかな～って」

「全く、それでは誰も納得しないだろうが」

「そうだそうだ！」

これで解放される！……あれ？これってフラグ？

「私も行こう」

……フラグだった……マジか

「おおぅ！ちぃちゃん、太っ腹！太ってないけどね～」

「はぁ……これを使えば良いのか？」

そう言って指差したのは白騎士……ってか、

「ＩＳで行って良いの？」

「……」

「良いんじゃないかな～」

……よし、変えよう

「千冬さん」

「分かった、何とかしよう」

助かったよ！……あれ？これは俺も行くフラグかな？

で、今目の前にあるのは車、しかも４ＷＤ
結構最近に出たばかりなのだが……

「ほら荒榎、早く乗りなさい」

母さんが持ってたよ!?何で!?金は大丈夫なの!?そして持ってる事を今知ったよ!?

「母さん、何時の間に買ったの?」
「えっと……2ヶ月前くらいかしら、お金が溜まったから、つい」
「つい!?ついでこんな高いもの買っちゃって良いの!?」
「大丈夫よ、母さん実は宇宙関係で働いてるから収入は良いのよ?」
「……初めて聞いたよ、それ」
「あら?そうだったかしら?」
「お、いっくんだ～、やっほ～」
「……どうも」

さて、最後の言葉が誰だか分かるか?
正解は織斑一夏、主人公だ!

何があったのかは知らないが、口数が少なくなった？暴力的になった？

まぁ、どちらにしろ小学生……になる子が良くある傾向だろうて

俺？いやいや、元が中学生だよ？小学生だからって何も変わらないって

別にゾーンでもないから何とも思わないし

だけどビックリだよ、何時の間にか、一夏が道場に通っていて、箒とは全然話さないんだよ

あれ？小説でそんなシーンがあったような……忘れたから良いや

しかも、話を聞くには俺の家に来たのが初めての顔合わせらしいよ？

何故連れてきたのかを聞いたら「ちぃちゃんが連れて行かないなら付いて来るなって言ったんだよ！私が興味あったのはちぃちゃんだったのに～、あ、大丈夫今ではあっ君も興味あるよ～」

いえ、全く大丈夫ではないです、はい

まぁ、長い話は置いといて、何でこんなに話が長くなったか分かる？俺も分からない

いや、多分分かるんだけど、これは堂々と言える事ではないな

まぁ、簡単に言うと……現実逃避だ！はぁ、そろそろ現実に向き合うか

「束さん凄い気軽だな！…って、一夏！？何時の間に！？」

「千冬姉が来いって」

「千冬さぁぁぁぁぁん！」

「なんだ」

「何だじゃないでしょうが！」

「良いじゃないか、一夏くらい」

「そうじゃなくて！これがもし認められたらこの集団の人は全員狙われる可能性が高いんですよ！？」

「……あ、そうか」

「そうか、じゃなくて！」

「……分かった、一夏は置いて行こう……はぁ」
「……だめだ、この人ブラコンだった」
「ブラコンではない！ただちょっと一夏が心配なだけで」
「それがブラコンの証拠でしょ！ってか、家の何所が心配なんですか！」
「……家に強盗が入って来たり」
「おじさんの家は！」
「……」
「……そこまで連れて行きたかったんですか？」
「……連れて行きたい」
「……はぁ、じゃあ母さんと一緒に車に居てもらいましょう」
「本当か、ありがとう！」

……壊れた……千冬さんの人物像が完全に壊れた
ってか、千冬さんの家に強盗に入るような勇者は居るのか？
この年で剣道全国優勝者を簡単にあしらえるぞ？多分
……この集団の中にまともな人は居ないのか？

「っじゃ、行くわよ」
「出発進行～！」
「束さん元気だな……」
「一夏、シートベルトはしたか？」
「大丈夫だよ」
「よし、それなら良い」
「……はぁ、これなら箒ちゃんがいた方が良かったかも」

おもに束さんの目付け役として

「お、あっ君箒ちゃんに興味があるの？あの子は良いよ～、私の妹

だし、ちょっと結婚して姉弟になっちゃおうよ！」
「いや、結婚は話が早いです、そして箒ちゃんには好きな人が出来ますから！そして居て欲しかったのは目付け役としてです！」
「……誰の？」
「はぁ、束さん意外にいませ……あと織斑姉弟です」
「私もか、私は普通だが」
「と言いながらも一夏をめでチラチラ確認してる人が大丈夫とは思えません」
「……心配なんだ、分かってくれ」
「この車に何の心配が？」
「事故にあるかもしれない、爆発するかもしれない」
「事故はともかく、爆発はどうしようもないですし、起きませんから」
「むぅ……」

「疲れた……」
「大丈夫？あっ君」
「……束さんの所為でもあるんですが……」
「えへへ～」

この人達、来るまでずっとあんな感じだったな……
俺だけ自やけに疲れたな・・・・・・

「一夏、ついたぞ」
「……寝てますね、置いておきましょう、母さんも居ますし」
「……毎回思うのだが、荒榎は本当に六才か？」
「もう少しで……ああ、今ちょうど七歳ですね」
「時間は？」
「深夜０時２７分」
「……正確だな」
「……自分でも不思議です」

前世ではこんな事は出来なかったんだが……
これも神様か？なんか色々と付け足されてるな……
まぁ、困る事も無いから良いか

「さ～、行くよあっ君！」
「……マジすか」
「ほれ、行くぞ」
「うぅ……引きずらないでも行きますよ」

仕方がない、ここはもうキッパリと諦めて、このまま持って行こう！
まずは受付に…

「すいません、首相にお会いしたいのですが」
「あら？何所から迷い込んできたのかしら……ぼく？お名前は？」
「……もう良いです」

皆の元へともどる

「話しを聞いてくれる前に、迷子と間違えられました……」
「……まぁ、流石に外見がな」

はぁ……まぁ、小学一年がそんな事を言い出したら不思議だわないきなり「首相に話があるって言われてもな……

「って束さんは？」
「……あそこだ」
「……放置ですね」

指差す先を見ると、束さんが持ってきた画用紙に何かを書いていた……その為に持ってきたんですね

「次は私が行こう」

そう言って受付に向かう千冬さん

「心配だな……付いていくか」

とりあえずまぁ、付いて行こう

「すいません、少し良いですか？」
「はい、本日は何のご用件でしょうか？」

第一関門突破！

「首相と話がしたく、次世代型宇宙服、とでも言えば通じるかと」
「はい、少しお待ちください」

第2関門突破！

「あ、アポイントメントは取ってありますか？」

「……少し待ってください」

第2関門に非常事態発生！

「取ってあるのか？」

「……それを知っているのは束さんだけですね」

「……取ってないだろうな」

「でしょうね……」

まぁ、一応聞いておくか

「束さん、アポイントメントって取ってありますか？」

「アポイントメント？あっ君、束さんがそんなものと取ってると？」

「……つまり？」

「取ってないよ☆」

「……だそうですが」

「……参ったな」

流石に、アポ無しで入れるような、凄い人はいない

いや、いるっちゃ居るんだけど……束さんが……認められてないけど、将来的に

「どうします？出直しますか？」

「いや、、今を抜いたらこんな機会は無いだろう」

「じゃあ、どうします？」

「「……」」

「ふんふんふ～ん♪」

うっわ～、この人だけすっげー気軽だな

話すことも出来ないかもしれないのに

「どうかしたの？」
「実は、アポを取って無くて…」
「そう、それは大変ね」
「ええ、……って、母さん！？」
「香織さん！？なんでここに、一夏は！？」
「寝ているわ、じゃあ母さんが何とかしてあげましょう」
「「……へ？」」

いきなり受付に向かう母さん
そして

「すいません」
「本日はどういったご用件でしょうか？」
「緊急の用事があると、首相にお伝え願えますか？」
「失礼ですが、アポイントメントはお取りでしょうか？」
「いえ、取っていませんが、真中香織、１０９８－５８と言えば通じると思いますので」
「……分かりました、少しお待ちください」

……え？

「何で？」
「繋がりでもあるのですか？」
「ふふっ、実はね？……」
「……実は？」
「お母さん、なんと政府にお友達が居るのよ」
「……お友達」
「ですか……」
「はい、はい、分かりました……真中さん、お会いになられるそう

です」
「あ、はい、でも行くのはこの子達です」
「は、はぁ……」

受付の人滅茶苦茶戸惑ってるよ……
それはそうか、いきなり来た人を首相に通せと言われ、その本人は子供達を行かせると言い出すんだから

「じゃあ、後はよろしくね？私は一夏君を見てないと」
「分かりました、ありがとうございます」
「母さん、本当にお友達が居るの？っていうか、どちらかと言うとそれって首相じゃないよね？」
「ふふっ、さぁ、どうかしらね」
「……言う気は無し、ですか」
「……一夏をよろしくお願いします」
「いや、一生の別れみたいに言わないでくださいよ」
「出来た～……あっ君、暇だよ～、まだ～？」
「束さんはなんにもしてないじゃないですか」
「……あの、早めに行かれては？」
「……そうですね、ほら二人とも、行きますよ」
「……一夏……」
「束さん疲れたよ～」
「……もうヤダこの二人……」

・・・こんなに面倒なことってあるのかな？（前書き）

ミサイル数を変更しました

・・・こんなに面倒なことってあるのかな？

「そんな事は不可能だ！」
「だから、ここに理論は書いてあるじゃないですか！」
「ふんふふ～ん、後ちょっと～」
「……何このカオス」

荒榎です、やっと政府のお偉いさんに会えたと思ったら、初っ端の言葉が
「ふん、こんな餓鬼共に何ができるというんだ」だったとです、……すごい苛つきました
荒榎です、そこを耐えてこちらが説明すると
「そんな事はあり得ない！不可能だ！」と言われたとです……詳しいものを渡す前に言われて、やはり苛ついたとです
荒榎です、それも耐えて頑張って説明したところ
「こんな理論はあり得ない！君達はそれくらいも分からないのか！」と言われたとです……理論は余所のマイナーな本から持ってきたりしたけど、殆どは自分で考えたものだから言い返せないとです、でも合っているのは確認したとです、束さんと二人でやりました
荒榎です、荒榎です荒榎です……

「おい、さっさと目を覚ませ」
「……はっ！？夢か、良かった……ああ、千冬さん、今政府に言ったら一から十まで中身を見ないで否定された夢を見ましたよ、あはは～」
「……頼むから、現実逃避は止めてくれ、今目の前で起きているだろう」

……これも全部、原作通りに進める為だ

「……はぁ、夢だったら良いのに」
「私は疲れた……後は頼む」
「いや、六才の言葉を誰が信じると？」
「私は信じた」
「……」
「頑張ってくれ」

そういって椅子に座る千冬さん
ちくせう、そんな事言われたら断れないよ～
……あれ？今の何か束さんに似てるような
……はっ！？まさか束さんに影響を受けているとか！？いやだ！
いやだぁぁぁぁぁ！

「早くしてくれないか？真中香織の話しだからと言う事で時間を作ったんだ、無駄だった様だがな」
「……それでは、話を進めたいの思います」
「……君が話すというのか？」
「はい、何か問題が？」
「はっ、君は見たところ……小学生の様だが」
「はい、小学一年です」
「その君が話すと？」
「そうですが」
「……君達、ふざけるのもいい加減にしなさい」
「ふざけてはいません、第一、私もこれの製作者です」
「……」

おうおう、何故かは知らないけど苛ついてるな・・・・・・・・・・
ザマァみろ
え？さっきから話し方がおかしい？いえいえ、可笑しくないですよ

？ただ、ちょっっっっっっっとだけキレテマス

「まぁ良いじゃありませんか、話だけでも聞いてみましょう」
「ありがとうございます」

って言っても、多分お遊びだと思ってるな
時間を稼ぎたいんだろうな……なんで？……まぁ良いか

「まず、最初からもう一度話させていただきます、これは、最新型の宇宙服として作成されました、これの機能としては……」

いや、元は束さんが「仮面ライダーってカッコイイよね！」って言い出したからしいんだけど……まぁこっちの方がそれっぽいから良いや

「……ですから、使用者に対する重力はゼロに等しくなり……」
「待った、この時点で無理な話だろう、それにありえない、そんな物が作れるとでも？」
「はい、作れます」
「……プッ……ハハハハハハハハッ……アーハハッアハッハ……いや～こんなに笑ったのは久しぶりだよ」

そりゃあどうも、ついでに話を聞いて欲しいんだけど

「良いかい？君達の話には理論が無い、君達が言っているのはただの空想、想像だよ」
「……何所がでしょうか？」

だから、今説明したじゃんよ、理論も言ったし

「君が言っている理論？あれは成り立たないね、もしそんな物があったのなら、誰かが発見しているよ、まして……」

あー、これは禁句が言われそうだよねー、流石にキレますよ？

「……たかが小学一年生がそんな事が分かる訳が無い……ククッ、ハハハッ……お腹が痛いよ……ククク」

あー、言ったな？コイツラハツイニイッタゾ？

「……こいつら馬鹿だね～、わざわざあっ君の禁句を言ったよ～」

「……放っておけ、アイツがキレたら、どっちでも大変だ、まぁここで力は無いだろうが……止められるのはいるか？」

「いないだろうね～、束さんでも止められないからね」

後ろで何か言ってるけど知らないな

オレハコイツラニチャントオシエナイトナ

「では、一つ問題を出しましょう、その問題が分かれば、私達は出て行きます」

「良いだろう、小学一年生の問題とやらを聞こうじゃないか」

「ありがとうございます、では……」

トコトンヤッテヤルヨ

「円周率第１５位までの２乗を小数点第１５位まで求めなさい？」

「……すまない、もう一度言ってもらえるかな？」

「ふぅ、仕方ありませんね」

「……」

「円周率第１５位までの二乗を小数点第１５位まで求めなさい？」

「……分かるか？」
「分かる訳が無い」
「ふざけるな！そんな問題が解ける訳が無いだろう！」
「そ、そうだ、幾ら子供でも言って良い事と悪い事があるぞ！」
「おやおや、国を背負っている役人の重要人物が五人も集まって、この程度も解けないのですか？」
「そんな事を言うのなら、君は解けるのか！」
「……９，８６０６０４４０１０８９３５８」
「何を言っている！」
「何って、今の答えですよ？」
「……そ、そんな訳が無い！」
「当たってますよ」

……へ？誰の声？
そんな事を皆が考えていると、部屋の扉が開き母さんが入ってきた
……あ、一夏もいるな

「って、母さん！？」
「っ！？真中香織……」
「彼女が……」
「前首相の補佐……」
「たしか、ドイツ軍にも伝手があるとか……」
「前首相の相談にも乗ったらしい……」
「フランスの大統領と友好があるとも聞いたぞ……」
「
「たしか、引退したはずじゃ……」

……母さん、一体何やってたんですか……
お友達が居る、じゃなくて自分が居た、じゃないですか！
まぁ、この雰囲気なら良い感じかもしれないな

「とにかく、そんなに信じられないのなら、政府のお抱えの科学者にでも見せてやってください……あ、特許は貰うんで」
「あら、もう終わったの？」
「母さんが来たから話しやすくなったよ、ありがとう」
「いいのよ、偶には母さんらしい事もさせてよね、今回見たいに頼っちゃって良いから」
「……ありがとう」

この人は俺がどんな事をしようと信じてくれた、俺が年不相応に頭が回り、迷惑をかけないというより、手間が掛からない、まぁ簡単に言うと不気味な子でも優しくしてくれた
俺を見捨てたり、怖がったりしないで大切に扱ってくれた
前に一度言った事がある「俺は迷惑を掛けない様にするから、もう一度結婚でもしてみたら？邪魔なら別のところで暮らしてもいいよ」いや、正確には言おうとした、邪魔なら、の所辺りで思いっきり叩かれたよ
「荒榎は私の子供なんだから、迷惑くらいかけなさい！それに貴方を迷惑なんて思った事は一度も無いわ！」
そのときは思いっきり怒られた、今まで怒ったかなんて見たことが無かったけど、凄い怒った
そして、怒った反面、凄い泣きそうだった、そのとき、言った事を考え直して思った
これは酷い、親に向かって何を言っているんだろうか、
自分は馬鹿だった、幾ら前世の記憶があるからといって、この世界では子供なのだ
そう考えると共に、こんな自分を育ててくれた母さんに凄い恩を感じた
今までに俺を疑った事が無い母さん、どんなときでも俺の事を考えてくれた母さん

他の大人は冗談だと思ってた事でも、母さんだけは信じてくれた、
この人には頭が上がらないよ……
だから、この人の為なら何でもやってやろうと思った……出来る事なら、な？

こんな話の中、残りの三人はと言うと

「「……ｚｚＺ」」

束さんは遊びつかれて眠り、千冬さんも疲労で寝ていた
束さん、あんた何しに来たんだよ……
一夏は、と言うと

「千冬姉、起きてよ」

頑張って起こそうとしていた、良い子だ！

「うぅ……一夏の声が聞こえる……一夏ぁ」
「ムグッ！？」

急に反応した千冬さんが一夏を抱きしめる……抱き……絞める

「く、苦しいよ、千冬姉」
「あぁ、一夏の声がする……」
「……むぁ…あっ君、次はこれを作るよ～……ムニャ」

一夏の首閉まってるから、それはしめるが違うから
そして束さん、今度は何を作る気だよ
まぁ、一言いうと

「……あんた等何してんだよ」
「あらあら」

「む～、あっ君～発表されないよ～」
「でしょうね～、政府も、こんなものを認めたら大変ですもん～」

もう政府のお偉いさんに言ってから2ヶ月だよ、さすがに苛っと来

るよね
まぁ、そんな事より

「ひ～ま～だ～よ～」
「で～す～ね～」

ふざけて、ＩＳ装備とかも作っちゃったしね☆
原作ではなかったものを作ったりとか、プロトタイプを改造と言う名のチート化したし
最近思う様になったんだよね、俺ってさ、死なないとか最強、とかではないけどさ、頭の良さで言ったらある意味束さん超えてるし、運動能力も、ソバットのおかげか知らないけど千冬さんとやりあえるし……これはやっぱりチートだよね
しかもさ、しかもしかも！なんと！動いたんだよ！
え？何がかって？何だと思う？ムフフ、なんとＩＳが動いたんだよ！
プロトタイプだけなんだけどさ、何故かは知らないんだけど、ある日調子を確かめに触ったら急に動いたんだよ
そのときはさ、Ｉｓが女子にしか動かせない事を束さんが知らないから、「おそろいだね～」なんて話してきて
俺も、ひょっとしたらこの世界では動くのか？なんて考えが出てきて「そうですね～」なんて返してたんだけど
内心「え？あれ？おかしいな、ここはＩＳの世界じゃないのか？だとしたら何も分からないぞ？」とか思って冷や汗を流してたんだよでも、一夏に触らせれば分かるだろうな、っておもって
待機状態にして一夏に渡して見たんだけど……反応しないんだよねおかしいな、一夏はＩＳを使えるはずなのに……とか思ってて
帰って束さんに言うわけにもいかず、考え込んでたら
束さんに呼ばれてね、言ってみたら「あっ君、この機、動かなくなっちゃったよ～」って言われて
焦って調べたら……何も無し、特に異常は無い、しかも、そのあ

ともう一回触ったら動いたし
それで考えて、一つ検証してみたんだよ
そしたらさ、何とビックリ、このプロトタイプ俺にしか反応しないんだよ
束さんとか、千冬さんとか、母さんも試して見たんだけど……
そのときも母さんは「まぁまぁ」で済ませちゃったんだけどね……
まぁ、そこで少し思い出したんだよ、神様が「あ、あとちゃんと世界に馴染めるようにしておくかの」って言ってたのを思い出したんだよ
これか！これが馴染む事なのか！何所がじゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！っと言いたいのだけど
正直、こっちの方がやりやすい
小説の続きが気になるんだし、ＩＳに関わってないと見れないしまぁ、ＩＳ開発者、でも良いんだけど、こっちの方が面白そうだしでもさ、調子乗ったのは認めるよ……うん、やっぱりやりすぎた荷電粒子砲とかさ、小型化出来ちゃったんだよね
他にも、撃ってきたビーム兵器をエネルギーに変える事が出来る剣とか
ビームを取りこんで威力を上げる銃弾とか、それを撃つ専用の銃とか
少しのビームで威力が高い、ちょっと趣味に走ったデザートイーグルみたいな銃とか
機体もちょっと弄って、背中に機械の羽を付けたり、あ、これは拘ったよ、機械的なんだけど、翼みたいに見える様にして
その上、小さいブースターを１６個ほど付けたし、ビームの発射口を何個も付けたから
言ってしまえば、セカンドシフト並に凄いよ？
ワン・オフ・アビリティも付けたは付けたんだけど……これはおかしいな
ワンオフって言ってるのに五個まで作れそうなんだよ
それに、一番ふざけたのはコアの中身を弄った事だな

おかげで凄い事になってるよ……残りの残金もだけどね☆
そこまでやってしまったから、今はやる事が無いんだよ～

「ひ～ま～」
「ひ～ま～」
「ひ～」
「ま～」
「……何をやっているんだ？」
「あ～ちーちゃんだ～」
「あ～、本当ですね～千冬さんだ～何か用ですか～？」
「まずは姿勢をどうにかしろ」

え？姿勢……何所も可笑しくないですよ？
回転椅子に逆に座ってる……うん、おかしくない

「何をですか？普通ですよ？」
「そうだよちーちゃん、普通だよ～」
「……荒榎、束みたいになってるぞ」
「……はっ！？」

何時の間に！？ずっとこうしてた気分だ！
たしか、最初の方は止めてた気がする……何時からだ？全く気が付かなかった

「まぁ良いや」
「……荒榎、元に戻ってくれ、私の責任な気がしてきた」
「？どうしたのちーちゃん」
「……お前は……もう良い」
「あ～暇～、いっそのこと政府にこれ見せ付けよっかな～」

流石にそれはしないけどさ、それは束さんの仕事です

「おお！あっ君良い事言うね～、やっちゃお～！」

「「……え？」」

「ぽちぽちっと……パスワード？古い古い～♪」

「えと、束さん、なにやってるんですか？」

「え？見せ付ける為の準Ｖ」

「いや、ジュンヴィ、じゃなくて」

「束、どうする気だ？」

……あれ？千冬さん何で乗り気なの？

ここは普通止めるんじゃないの？

「ん～、世界中のミサイルでも撃てば良いかな、それをちーちゃんとあっ君がズババーって壊しちゃって♪」

「ふっ、良いだろう、そうでもしないと、あの石頭は認めないからな」

「そうなんだよねー、せっかく束さんがネットにも上げたり、講演もしたりって頑張ったのに」

「……束さんが……講演！？」

「そんな事をしていたのか？」

「頑張ったんだよー」

束さんが知らない人に説明した？いやいやいや、ありえない

ああ、多分あれだ「こんな感じ～」って説明して「分かりません、もっと詳しく」って言われたら「うるさいなぁ、束さんはちゃんと説明したじゃん、それを分からない君がいけないんだよ」とか言ったんだろうな

うんそうに違いない……あれ？なにか重要な事を忘れてるていうか、言った気がする……

『ん～、世界中のミサイルでも撃てば良いかな、それをちーちゃんとあっ君がズババーって壊しちゃって♪』

……あれ？

何で俺も入ってるの？

最初のＩＳって白騎士だけじゃなかったか？第一、ＩＳは男は動かせないんじゃなかったか？使える男なんてお教えちゃって良いの？

……あ、俺以外のＩＳ使った男っていないじゃん、つまりは束さんは男が使えない事を知らないじゃん……

「じゃあ、行って見よー、ポチッとな」

「よし、荒榎、行くぞ」

「あれ～？俺も行くの？」

「もっちろーん、頑張ってねー、あっ君」

「……まぁ、良いか……バイザー付けないとな」

正直、俺のプロトタイプだけで勝てるんだよね……

普通に色々とオーバーテクノロジーな物を積めこんだから

「で、この通称は何と言うんだ？」

千冬さん！ナイスだよ！

「決まってないよー、あっ君がメカマシン一号が駄目って言うから」

「……それは私も駄目だと思うぞ、荒榎お前が決めろ」

「……え？」

マジっすか？これはフラグか？

あ、でもこれでちゃんと呼べるのか……なら良いか

「ＩＳ……Ｉｎｆｉｎｉｔｅ Ｓｔｒａｔｏｓってのは？」
「……意味は？」
「……」

不味いよな、意味知らないわ……
確か、無限の……なんだっけ？
ｓｔｒａｔｏｓｐｈｅｒｅが……成層圏？だった様な気が……こんな事ならあらすじちゃんと読んでおくんだった！
ええと……無限の……無限の……無限の……

「無限の空！」
「……」
「ふんふんふ～ん、もうちょっとで発射だよー」

不味い、不味過ぎるだろ！これは失敗か？ひょっとしてＩＳじゃなくなるのか！？
それは不味いぞ、どうしよう……

「ふむ、良いんじゃないか？」
「……え？」
「ちなみに束さんはさんせーだよ☆」
「じゃあ、決定だな」

……よかった～、これで安心だな
あぁ、こんな事でも凄く疲れた……寝ようかな

「じゃあ行くぞ」
「……はい」

忘れてたよ……そう言えば俺も行くんだった
束さん……今ちょっと恨んだよ

「よーし、あっ君、今こそこれを使うんだー！」
「……なんですか？それ……って、パッケージ？」

これってどう考えてもパッケージでしょ、装備の変更とか、外装の変更、ユニットの変更、何所をどう見てもパッケージですね
……あれ？これって言って良かったのか？……シマタァァァァァァ！！！！！
まだそんな段階じゃないじゃん！何やっちゃったんだよ俺！

「パッケージ？なにそれ？またあっ君新しいの作ったの？え～見してよ～」
「あ、はい、また今度に……で、それは？」
「へっへ～ん、これは新しく束さんが作ったユニット変更、使用装備の変更、外装変更なんかを積めこんだ、お験しパックなのだ！」

ここは誤魔化せたな……って！
それがパッケージだって！……て、知らないか
でも、個の人なんでそんな簡単に出来るんだよ……しかも、全部に使えるし
普通ありえないから、パッケージの存在を知らないで、同じ物を作り、尚且つそれが全部のＩＳに使えるとか……

「まぁ、使ってみますか」
「そうそう、使ってみよー☆」
「……早くしないと危ないんじゃないか？」
「何を言ってるんですか、危ないものなんて……」

……うわ～、あるわ、と言うか作ったわ、ミサイル発射しちゃったわ
ってか、あれって何所に向かうんだ？……ここではないよな？違うよな？

「束さん？ちなみにミサイルですけど」
「ん？只今太平洋の上に集まってまーす」
「……何所に向かっているんですか？」
「……あ」

千冬さんも気が付いたか・・・……まさかね

「ここじゃないですよね？」
「ふっふーん、束さんも考えてるんだよあっ君！」

良かった……だったら何所に？

「ここは考えたけど、危ないから止めたんだよ！」
「考えたんだ……駄目だこの人」
「荒榎、お前もこいつに染まってきてるからな」
「……」
「何故目を逸らす……」

そ、そんな事より！何所に向かってるんだよ！

「それで、何所に向かってるんです？」
「えっへん、一番簡単に分かりやすいところだよ」
「……つまり？」
「国会議事堂☆」
「「……」」

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい、これは不味いよ！
ってか、原作もそうだったの！？……落着け、原作では千冬さんが全てを破壊してたんだ、こっちで、出来ないはずがない

「ところで、幾つ発射したんだ？」
「……」

それはフラグですよ千冬さん！
頼むから原作と同じで頼む！確か二三四一発だった気が……頼むよ

「えっとね、確か二三四一発――」

ヨッシャァァァァァ！これならなんとかなる！
俺も行くんだから大丈夫だ、後ろからちまちま撃ってても終わるだろう！

「――のつもりだったんだけど他にも見つかったから多分１８９６４発位かな？」
「……え？」
「お前、そんなに打ち落とせる訳が無いだろう」

終わった……アハハ、もう終わりだ、こんな数が壊せる訳が無い……１５５２３４５４１９３発も多い……ってか、何所に隠してたんだよ…何所の国だよ、喧嘩売ってんのか！

「大丈夫だよ、あっ君一人で全部落とせるはずだから」
「……いやいやいや、無理ですよ」

「幾ら荒榎が頭が良くても、そんな数が相手になる訳が無い」
「それが違うんだよ～、あっ君の作った武器が強いんだよ！、あっ君しか使えないけど、あれだけで出来ちゃうんだよ☆」
「……なるほど」
「いやいやいや、納得されても」

まぁ、武器としては出来るだろうけど、俺の精神が持たない気がする……ええい！他に方法は無いのか！

「じゃああっ君、ちーちゃん、いってらっしゃ～い」
「……行くぞ、荒榎」
「はぁ、……俺、帰ったら自由に暮らすんだ」
「はっ！それがあっ君の言ってた死亡フラグだね！」
「……こんな時に言わないでください」

ちくせう日本の将来は俺に掛かってるのか……重過ぎるから

「ちなみに聞くが、これは何と言う名前なんだ？」
「……俺に聞きます？」
「荒榎の方が良い名前をつけそうだからな」
「……ああ、なんか納得」
「ひどいなちーちゃん、束さんだって良い名前くらいつけられるよ～」
「たとえば？」
「ちーちゃん専用騎士型マシン一号」
「……却下だな」
「ですね……」
「えー、良いと思うんだけどな～」
「……それで、荒榎は何と名付ける？」

ここはやっぱり、原作通りでしょう

「白騎士、ですね」
「ふむ、ではそれにしよう」
「ねぇねぇあっ君、じゃああっ君のは？」
「そうだな、それは何にするんだ？」
「……」

……うん、考えて無かったよ……えと、装備としては……でもワンオフで色々詰めたから……あ、そうだ

「妖幻ってところですかね」
「妖幻か、能力は知らないが……良い名ではあるな」
「えー、もうちょっと格好良くして、あっ君専用メカマシン一号！とか「無いですね」「無いな」……うー、あっ君ー、二人が虐めるよー」
「いや、虐めてる方に俺は入るんですけど、それとこれは虐めではないです」
「荒榎、そろそろ不味いと思うんだが」
「……みたいですね、日本に近づいてます」

一角に置いてあるレーダーにミサイルが映っているが、これはもう映っているとは言えないな
だってさ、なんか粒の集まりで丸になってるし、本当に……多いよ

「行くぞ……こいつの後始末だ」
「あいあいさー、とでも言っておきましょうか」

初見せだ『妖幻』、お前の力を見せてやれ

荒榎が服の中に手を入れ名にかを取り出す、それは十字架を模したネックレス、それが『妖幻』であった
十字架と言っても、シャルロットのとはちょっと違って黒と白のモノクロ、しかも細いんだけど
なんて心の中で考えつつも『妖幻』を起動する

「惑わせ、妖幻！」
「行くぞ、白騎士！」

妖幻！君に決めた！・・・・・・・・・ってか、それしかないし（前書き）

ミサイル弾数を変更しました

妖幻！君に決めた！・・・・・・・・ってか、それしかないし

「惑わせ、妖幻！」
「行くぞ、白騎士！」

二人が言った言葉が、ＩＳに伝わり起動となる

荒榎の周りにパーツが浮き上がり、荒榎を中心に回る
そして、一つ一つが組み合わさり、ＩＳの起動が完成する

「……やっぱり、遅いな」

荒榎の姿は藍色のＩＳに包まれていた、背中には羽根を模したパーツ
頭には……鈴音を考えると分かる安いだろうパーツ、色は藍色だが
全体的には少し角張った感じ、手には何も持っていないが、足は濃
い色でラインが光っており、赤椿の剣を想像すると良いだろう、それ
れが三本ついている
腕は円状ではあるが、所々少し飛び出たり、へこんだりと、人工的
ではあるが、無骨ではない、遠くから見ると鷹のイメージを与える
フォルム

「……とまぁ、なんとなく説明してみました、と……どうしよ
うかな」

パーツが一つ一つバラバラになるもんだからやっぱり遅い
原作ではもっと早かったな・・・・・・こう、一瞬だったな、それ
れがやってみたいと思うこの年頃
といっても、こんなにパーツがあったら、それは遅くはなるわな、
白騎士は５６７個から出来ているのだが、妖幻はその何倍もあり、

およそ５８０００個
流石にやりすぎたと感じています、でもまぁ、色々な使い方があるし、パーツは色々と仕組みがあるし

「それはまぁ、今度考えるとして……束さんのこれ、使ってみるか」

データだけってことは……あ～あ、多分中身が見られたな
俺以外は使えないけど、パスがあれば中身は見れるんだよな……
そう言えば、前にパスを作った覚えがあるわ
……まぁ良いか、どうせ今となっては少し（・・・）古く（・・・）感じるし（・・・・）
また今度変えようかな……、あ、そうだ、これをこっちにして…
…そんでもってこれはここ……で、こっちに持ってきて……あとは…

「もう良いか？こっちは準備できたが」
「あ、はいＯＫです」

まぁ、流石に千冬さんでもなれるのに時間が必要だったようだな
それでも約五分て……この人も大概チートだな……
それにしても、白騎士ね……うん、本当に凄いよな
俺の頭はチートだけど、束さんはこれを自分で作ったんだよ？
あの人は天然のチートだよ

「よし、じゃあ行くぞ」
「はい、……あ、ちょっと待ってください」
「何だ？」
「……インストールしてなかった」

「……」

束さんから貰って何もしてなかったんだった……

「早くしろ、そろそろ不味いぞ」

「あ、はい……終わりました、って早っ!?」

「えっへん、これはあっ君の作ったプログラムを使っただけだから簡単に終わるんだよ☆」

「……ああ、ワンオフですか」

「ワンオフ？何それ」

「……ワン・オフ・アビリティーです、キャパシティを結構回して、特殊な能力をつけてみました」

「あ～、だからあんなに大きかったんだ～、凄いな～」

「……あれを大きかったで済ませられる束さんも凄いと思いますけど」

「でもでも、それが何個も入るコアに改造したあっ君の方が凄いんだよ☆」

「……全部見た？」

「全部見た☆」

うっっっっわ～～～～～～～～、不味いでしょ、これは不味いよね、絶対原作はずれるよね

母さんごめんなさい、原作が分からないと、死ぬ確立が滅茶苦茶高くなります

ましてや、こんな装備を付けられたら無理です

「でも殆ど分からなかったよ～」

「……え？」

何でだ？何時もの束さんなら分かるだろうに……

ひょっとしてあれか？世界の抑止力？
いやいや、だったら俺も止められてるでしょ……分からない

「で、終わったのか？」
「あ、はい、終わりました」

千冬さん忘れてたわ
ってか、そんな事の前に、目前に死亡フラグが迫ってたんだった……
もう良いや、出来る限り頑張れば良いさ

「よし、行くぞ！」

そう言って飛び立つ千冬さん
何故かは知らないけど、ここの天井は開閉が出来るみたいで、白騎士がぶつかる前に開いた
ってか、ここの上ってプレハブじゃ・・・……違うのか、プレハブの下だと思ってたんだけど……
そっか、場所を分かり難くする為に道があんなに曲がってたの、考えてるな～
それにしても……

「白騎士格好良いな……」
「あっ君のも格好良いよ～」

まぁ、格好良くしたんですけどね
でも……いや、文句は止めよう
決してあの剣が格好良いなとか思った訳じゃないですよ？本当だよ？
え？言ってなかった？白騎士って常時剣があるんだよ、それも雪片弐型みたいなエネルギー系じゃなくて

実際の鉄の剣、と言っても、色々と混ぜて出来てるから鉄とは言えないけど

「じゃあ、行きますか」

パッケージを有効にする
背中のパーツが少し外れ、細かいパーツとなり、やがてはバイザーになる
これが束さんの作ったパッケージ……あんまり変わらないし
まぁいいかそう思い気持ちを切り替える
すぐにスピードが付け易い様に腰を少し下げる

「んじゃ、行ってきますか！」

ジャンプの容量で飛びながら、背中の羽根のブースターをつけ、足も起動
まずは自分んで飛び、その後足のブースターで加速、後は一番強い羽で飛ぶ
これが俺の考えた一番早く、尚且つエネルギーを使用しない加速する方法

「……あ、発見」

すぐに千冬さんに追いつく
まぁ、基本スペックは……うん、やりすぎた
多分、百式も赤椿も敵わないほどに早いと思う
これはこれで不味いんだけど……束さん、対抗意識とか燃やして
百式と赤椿の性能上げたりとかしないでよ？
最近思う様になってきたんだけど、妖幻、頑張ったのは良いけど、
他の国とか会社に狙われたらどうしよう、亡国機業とかいてファン

トム・タスクと読むとことか、国で行ったら日の国とか……米国と書いてアメリカと読むところとか……
いや、もうここまで来たらしょうがないよな……諦め様……そ、それに！身を守るのにやりすぎは無いし！うん！大丈夫！……だと思う

「……準備は良いか、荒榎」
「へ……あ、ああ、はい」

何時の間にか止まってたよ……ハイパーセンサーに反応？
……うん、帰りたいな
だってさ、もうミサイルだらけなんだよ、あれだね、数撃ちゃ当たる、だね
確かこれであってるよな？前世も社会は酷かったけど、今回はもっと酷いわ、前回よりも少しだけど科学が進歩してたし
前世の記憶の中身を引きずってるから、今回の社会との矛盾でおかしくなる

「そろそろだ、行くぞ！」
「はい！……って、ええっ！？」

てっきりここから打ち落とすのかと思ったら突っ込んでいったよ！
千冬さん！流石に絶対防御はまだ作れて無いんだす！だからもうちょっと自分を大事にしてほしいんだす！
……はっ！？変な喋り方になってた！って、もうすぐそこに来てるし！

「ああもうっ！……やってやんよ！」

ここでやら無いと死ぬのは確定だし、死ななくても母さんが死ぬし
今まで育ててくれた母さんには感謝で一杯なんだよ！そんな簡単に
死なせないんだよ！

「おらおら！かかってこいや！」

両手を前に出し武器を呼び出す

「よし！来い！『摩來』」

それはバズーカ『摩來』、普通のバズーカじゃない、特殊なものだ
大きさはＩＳに合わせて大きく、威力も少し高くなった、それより
も重要なのが、弾がネット状だって事
これなら一気に沢山のミサイルを破壊できる、その為に作ったんだ！
今回の為だけに作ったんだけど……これって普通に使えるよね？
相手の動きを拘束できるし

「いっけぇ！」

ま、そんな事は置いておいて、一番重要なのが今回なんだけど……

「……一気に破壊できるって最高だな」

一発撃ったら結構な数が壊せた
どの位だろう……ざっと５００個？……まだ１５５２３４５３
６９３も残ってるし

「もう一回！」

撃つ

今回は結構いったな……８００個かな

「もう少し近くで撃つか……」

ミサイルが近づくのを待ち……撃つ！

「おらっ！」

おうおうおう、凄い事になったな・・・・・・ざっと１８００？位だな

ってか、まだ１５５２３４５１０９３個も残ってるし……数に千冬さんが切る分は抜いてあるから全部俺だし……

束さんやり過ぎだよ！ってか、こんな数を何所に隠してたんだよ！

「もう一回！……って、弾切れかよ」

もうこれは使えないな、即座にバズーカを戻して、と

それじゃ……

「ここからは大乱闘だぜ！『暗楼』『天弦』」

右手にショットガン『暗楼』、左手にマシンガン『天弦』をコール

左手は常時撃ちっぱなし、撃てば当たる！

右手は撃って、振りまわして、撃つ！

この二つの銃は改造してある

ショットガン『暗楼』は、普通のコッキングは手前に引くが、これは逆、外にやると出来る、それにレバーを少し重くしてある

つまり、撃った後、振りまわしすたびに重さでスライドされ次弾が

入るようになっている
しかも、弾は量子変換して『妖幻』に詰めてある為、弾数はあまり考えなくて良い
次にマシンガン『天弦』、これは左手でも撃ちやすい様に反動を軽減、レバーも軽くした
それに、これはあくまで囮用、銃口を小さく、銃身も小さくしたもの当たらなくても良いから道を減らし、近付き難くする為の武器
一応、狙えば当たる様には出来ているが、一発の威力が弱い為、そんな使い方は余程じゃないとしない
だからばら撒く、その為に作ったもの、丁度良く、ミサイル程度なら余裕で破壊できる程度の威力はある
そのため、このようにミサイルばかりの状態なら、適当に撃ってもどれかを破壊できる
しかも、『暗楼』と同じ、弾は量子変換で『妖幻』に詰めこんであり、切れる畏れはあまり考えなくても良い
こんな武器だからこそ出来る方法、『天弦』で近くのは破壊、『暗楼』で多くを巻き込み破壊
しかも……

「……そっか、束さんも発射した後は操れないんだよな」

ミサイルを破壊するたびに、近くにあるミサイルまで誘爆
これなら簡単に終わりそうだよな……

「……でも、滅茶苦茶怖いなこれ」

近くでミサイルが爆発するのだ、怖くない訳が無い
でも、そんな甘ったれた事はいってられないから

「おらおらおらおらおらおらおら！おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ
撃つ、振りまわす、撃つ、振りまわす、撃つ、振りまわす、撃つ
荒榎からしたら大変な事かもしれないが……

「ほえ～、あっ君頑張るね～」

所変わりプレハブ、束は一つのパソコンを見ていた、そこに映っているのは妖幻、つまりは荒榎と白騎士、つまりは千冬
束は二人が出ていった後にネットに接続、色々な経路を通り、政府のパソコンにハッキング
そこから、今の戦いを見ていた、

「それにしても……」

束が見ているのは荒榎、左手を腰あたりで固定、マシンガンを打ち右手を伸ばし、撃っては回す様に振る、そしてまた撃つ

「これはかっこいいーよ、あっ君」

そう言いながらもう一つのパソコンを弄る

「あったあった、ここだよここ……これをコピーしてっと……ふふん、これで何時でも見られるよ！」

束がやっているのはデータのコピー
元の場所はとあるデータボックス

コピー先はここのパソコンにささっているＵＳＢ
ついでに言うと、コピーしているデータは今の映像、つまりは荒榎と千冬のミサイル大戦争
言ってる事からして、また見たくなったら見よう！と思ってコピーした模様
そんな理由で自衛隊異常に厳重なセキュリティーの所にハッキングするのもこの人だけだろう

「……あ、ちーちゃん危ないよ……ほら、そこにはミサイルが来るよ」

そうい言いながレーダーを見る束、人から見たら大きな赤い丸にしか見えないが
これは束製、そんなしょぼい物じゃあない、実際はもっと小さな点で表されている
ただ、それが多過ぎて見にくいだけで、束にはそれが見えているというだけ、そして見ているのは千冬と荒榎の先
そこにはもう一つの赤い丸、しかもさっきの何倍もある大きさ、それこそが束が後で発射した１６６２３発
つまり……

「まだ本軍は行って無いんだよね～」

そういう事だ

・・・・・これなんでクソゲー？

「……」

撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、
撃つ、振るう、撃つ、振るう、撃つ、振るう、撃つ、振るう

「……いや、多過ぎだろ」

さっきからずっと同じ事しかしてないぞ……

「千冬さん、流石に多くないですか？」
「はぁっ！ふっ！確かに！多、い！な！」

あ～、頑張ってますね、声でわかります
場所はそんなに遠くないな

「千冬さん、一端戻ってきてください……一気に終わらせます」
「……分かった」

そう言ってこっちに近づく千冬さん

「それじゃ、まぁ行きますか！」

羽根を前で交差する

「行くよ、『桜花』

そして、思いっきり広げる！
翼に仕込まれている発射口からビームが撃ち出される
それは秒速２５発、それが片翼に５０以上、つまり

「……凄いな」
「あはは、自分でもやりすぎた気がします」

数は数える事が至難なほどになる
ビームは貫通性能を高めてある為一つあれば五個はいける
まぁ、目の前にあったミサイルの群れが綺麗に真っ青な空に変わったとだけ言っておこう

「さて、じゃあ戻りますか」
「……いや、ここはもう少し見せておいたほうが良いんじゃないか？」
「……そうですね、主に平和の為に」
「ああ……流石にこれは自衛隊でも対応できないだろう」

視線の先には黒い蠢き、しかもハイパーセンサーに引っかかってはいるのだが……距離は遠い
それが黙視できる、しかもセンサー抜きで、だ
まぁ、量が覗える、なんて物ではない

「これは……幾つですかね」
「……こっちは計測中だが」
「こっちもですよ……」

そんな話をしていてもミサイルは近づく

「さっきのは駄目なのか？」
「距離が……ちょっと遠いですね、かと言って、近づくと範囲が」
「……こうなっては、全て壊すか」
「元からそれしか……あれ？」
「どうかしたか？」

……あ、そうじゃん！
原作でも白騎士が荷電粒子砲使ったじゃん！
つまりは……

「千冬さん、装備の中を見てください」
「分かった…ん？これは…」
「ありました？」
「……いや、これは不味いのでは？」
「この際、それしかないでしょ」
「……分かった」

そう言ってパネルを弄っているらしい千冬さん
人差し指を伸ばし、ボタンを押すような動きをする
すると、千冬さんの手に荷電粒子砲が現われた
現われた……のだが

「……」
「……これは」
「「大きいな」」

その砲身2メートルの荷電粒子砲、滅茶苦茶使いにくそうです

「ま、まぁ、これしかないですよ！」
「……なぁ、ひょっとしてだが」

「……なんですか？」
「そっちの装備に使えそうなのがあるんじゃないか？」
……
「何を言ってるんですか？そんな物がありゅとでも？」
「思いっきり噛んでるぞ……はぁ、どうせオーバーテクノロジーの塊なんだろうがな」
「……ぶっちゃけ、ここで使って良いのやら」
「まぁ良い、これで決まると良いな……」
そういって構える千冬さん
ってか、これって何所か雪羅に似てる気が……
「行け！」
――――ガァァァァァン！
「……一直線？」
「あまり減らなかったな……」
これは不味いな……もう、仕方がないよね
「来い『摩來』！」
もう一度、摩來をコール
「摩來、妖幻にコネクト！ＡＲＭ始動！」
『……摩來、妖幻にコネクト完了、ＡＲＭスタンバイ……６％……１０％』

「……間に合うか？」

もうすぐにミサイルが来るだろう事を理解した千冬は荒榎に聞くと、第三者的に語ってみたけど……

「さぁ？これが何時終わるかによりますよね」

『……２４％……３０％……』

「……間に合わないな……行ってくる」

「あ、はい、行ってらっしゃい……て、マジすか！？」

あの大群の中に！？

「仕方ないだろう、それが終わるまでは時間を稼がないとな」

……もう、仕方ないよね

「……妖幻、ＡＣＳ起動」

『…４５％……承認、ＡＣＳ起動します……７８％……８９％……１００％、ＡＲＭ始動』

「ってな訳で、終わりました」

「……一体何をしたんだ？」

「まぁあ、それは帰ってから、って事で！」

摩來を構える……もうちょっと近づいたらかな

……もうちょっと、もうちょっと、もうちょっと

「そろそろ、良いんじゃないのか？」

「もうちょっとです……よし、食らえや！」

摩來を放つ、そしてリロード、放つ、リロード、放つ、リロード

摩來に包装できない量の弾薬を放つ

「……」

千冬さん、アンタ良い人だよ
本当に帰るまでは聞かない気なんだね、ありがとう

「……よし、終わりの最、後！」

もう一つ放ち、終了
空は青く澄み渡っており、邪魔なものは二人を除いては何も無い
摩來からは煙が出ている、流石に本番にこれはきついよな……

「……荒榎、一つだけ聞いて良いか？」
「はい、なんでしょう？」
「お前と、束、どちらの方が頭が良いんだ？」
「……あ～、どうでしょうね、こういった武装関係は俺ですけど、ISとかは考え付かなかったからな……ん～」
「……」
「……そうですね、言うとしたら、社会系は俺、幻想や空想と言われるものについては束さんでしょうね」
「と、言うと？」
「いや、俺は武装とか現実に創られている物の改造みたいな感じで創ってますんで、それで束さんは……もうあれはおかしいですよね、現実にありえないと思われた物を作ったちゃったリ、それが実用的だったり、……まぁ、そんな感じなんで、どちら？と聞かれても……」
「……そうか」

あらら、絶対に怪しんでるよね……まぁ、良いか

じゃあ、帰りますか……って……

「千冬さん……」
「ああ……行動が遅い、と言うべきなのか、計算的、と言うべきなのか迷うな…」
「いや、これは間違い無く、遅い、ですよ、多分あれですね、あんな量のミサイルを打ち落とす機械が怖いんでしょうね」
「……よし、荒榎、お前はもう戻れ」
「え？何でですか？」
「お前、もうエネルギーが無いだろう」
「……あ」

すっかり忘れてたよ……うん、なんとか帰れる量だね、良かった

「それに、これ以上の能力は見せたくないだろうしな」
「……いやはや、この人が本当はブラコンだなんて思えない「うるさい」…あだっ！？千冬さん？流石にＩＳで殴るのはどうかと思いますよ？」
「ふん、人をブラコン扱いするからだ、ほれ、今のうちに帰ってろ……そろそろ来るぞ」
「分かりましたよ……大丈夫ですよね」
「誰に聞いている……問題無い」

やば、この人格好良い！
流石千冬さん！俺に言えない事を簡単に言ってくれる！そこに痺れる憧れるぅぅぅぅぅ！
はっ！？いかんいかん、キャラが違うから……いかんな、束さんと居たらキャラが崩れた

「じゃあ、後はよろしくお願いします」

「ああ……今更だが、キャラが崩れてるぞ」
「……自分でも分かってます！」

そう言って、プレハブの方に帰っていく荒榎
そこに残るは白騎士ただ一人……ではなく、戦闘機、巡洋艦、空母と様々な兵器が沢山集まってきていた

「さて、それでは始めようか」

その言葉が聞こえる事は無い、しかし偶然にも戦闘はそれと同時に行なわれた

場所は海上、白騎士の戦闘とも言えない一方的な攻撃から離れた所
荒榎が纏う妖幻はプレハブに向かって帰っていた

「さて、そう言えば衛星も見てるんだっけ？破壊だけでもしておく

か」

そう言いながらも止まり、上を見る

「……よし、あそことあそこ、それからあそこにあそこ、あと……あれだな」

ハイパーセンサーも今の状態では死角など無い、ある程度なら見渡す事が出来る程度だったのが、今では宇宙までは余裕で見えるほどまでに強化されている

「んじゃ、これかな、『星落』」

手を上に伸ばし呼び出すはスナイパーライフル『星落』
これはＩＳのハイパーセンサーとデータを共有、狙いが正確になるように出来ている
動かない敵なら外す事はありえないし、動いている敵でも当てる事は出来る
だから、衛星くらいなら簡単な事

「……よし、連続でいってみよー」

少し束さんに似てる気がするが……まぁ良いやいっぱ～つ、には～つ、さんぱ～つ……面倒だから4、5、6、7、……ラストにドーン

「終わりー、戦争って、悲しいものなんだよね」
「お前が言うな」
「えー、……ってあれ？もう終わったんですか？」

何時の間にか後ろには千冬さんがいた、
『星落』を使うと目でしか見えなくなるんだよね……まぁつまりは近づかれても分からないんだよ
いそいで仮面を被る、といっても比喩だけどね☆……いかん、これは束さんだ

「……ああ」
「……その間は？」
「いや、何時になったらお前は本心で語ってくれるのか、とな」
「……」

うわ～もうばれてるし・・・・・でも、ソレハデキナイソンダンナンダヨネ～

「何を言ってるんですか、普通ですって」
「……なら良い、何時かはお前から剥ぎ取ってもらうだけだ」
「あはは、それはそれで……って、千冬さん、人は……」
「大丈夫だ、一人も殺してない、全員生きてる」
「ふぅ、良かった……でもさ、何でわざわざその姿でいるんですか？ステルス機能、教えてもらいましたよね？」

何でこの人は普通に飛んでるんだよ……さすがに無用心だよ

「お前が衛星を壊しておいて何を言うんだ」
「……あ、そっか、そうだった」

今思いっきり壊したんだった……あれ？

「でも、後ろから着いて来てるんですけど」
「……」

「何も言わずにステルスモードにするのは止めません？」
「……よし、帰るぞ、一夏の無事を確認しなくては…」
「早ッ！？ってか、やっぱりブラコンじゃ「何か言ったか？」…いえ、帰りましょう……ってか、前に一夏に言われたんですけど」
「何だ？お姉ちゃんが格好良いか？」
「いえ、お姉ちゃんが怖いって」
「なっ！？……何故だ」
「いいや、そんなに強く掴まないでくださいよ…肩パーツが凹むって……ドンだけ力入れたんですか……」
「それで、何所が怖いと言っていた？」
「いや、その、空気、ですかね？」
「……なんだと」
「い、いや、大丈夫ですって！」
「…一夏に格好良く見られるように目を細めていたのがいけなかったのか？それとも、話すときにどうしても声が低くなった事か？それとも……」
「いや、あり過ぎでしょ……フォローにまわった自分がアホらしい……」

ミサイルや戦艦、戦闘機が海上に壊れて浮いており、宇宙では衛星が破壊された状態の空では、そんな平和な、聞いて安心出来るような会話がされていた

「あ、寝ているときに抱きつくのは止めて欲しいとも言ってしたよ？何でも力が強くて苦しいとか、それでよく起きるそうです」
「何だと！？抱きつく事まで止めたら……一夏とのふれあいが無くなるではないか！」
「いや、もっとちゃんとした関わり方をしろよ姉弟」

若気の至りです・・・・・・え?チート?何とでも言って下さい

「で、どうなってるんですか?」
「それは私も聞きたいな・・・・・・なぁ束」

帰ってきて一番に目が言った所、それは大きな画面だった
と言ってみたは良いが……なんでさっきの戦闘が出てるんだよ……

「これ、とってたんですか?」
「えっとねー、何所かからとってきたんだよー」
「……何所か?」
「一体何所だ?」
「えっとねー、何所か!」
「束さんの最近の流行はえっとねーですか、っってか何処かって何所?」

何処かって……一体何所だよ

「……本当なんだな?」
「もっちろーん、束さんは嘘はつかないよ☆」
「……え?マジですか?」
「よし、場所は分かるか?」
「もっちろーん、束さんに不可能は……ないと思うよ!」

そう言って画面に地図を出す束さん
今度はもっちろーん、ですか……てか、せめて断言しようよ……
ってか、何処かって、ここは俺の家……あれ?可笑しいな?

「束さん？これはあってるんですか？」
「うん、合ってるよー、真実はいつも一つ☆」

うん、あんたネタが出来たら何でも良いんだね……
でもさ、これは無いと思うんだ……ここってさ

「……近いな」
「うん、すぐそこだね☆」
「……ってか、そこって俺の家なんですけど」
「「……」」

いや、そんな目で見ないでくださいよ
ってか、束さんまでそんな目で見る！？

「た、多分あれですね！地下ですよ！」
「……束」
「うん、……地上だね！」
「ええ～」

何でそんなすぐに調べられるんですか……
俺の家だとしたら母さん……あれ？

「……すいません、ちょっと良いですか？」
「うん？使う？」
「あ、はい、ちょっと……もしかして」

束さんの隣のパソコンを借りて調べる……ってか、パソコン何台あるんだよ……
見た限りでも五個はあるし……あ、あっちにもあるわ
さて、たしか……よし、ここの……これだ

「……うん、何とも言えないな、あえて言うとしたら、あれだ……俺でした」
「……荒榎、素直に白状しろ」
「これ以上何をしろと!?」
「へ～、あっ君の所なんだー、これ何時作ったの？」
「……2年前」
「……は？」
「あっ君すご～い、天才だね！」

いや、本当の天才に言われたくない……
いやね？普通に動く事が出来る様になって思った事があったんだよ
俺の頭で何所までの物が作れるんだろう、ってね、だから作ってみたんだ……
ネット上のデータを全て収集して、保存、その上で検索出来る様にした別名『今の所のアカシックレコード』
作るのは簡単だったよ、ネットに繋げる様にして、データを収集、ついでに今までのデータすべてを復元、それで保存
保存先はパソコンみたいなドライブじゃなくて……うん、ふざけ過ぎたんだ、やりすぎた
ネット上に暗号化して散布、何所でも見られて、尚且つ俺にしか出来ない様にした、筈なんだけど束さんは見れた……なんで？
まぁ……うん、やりすぎた、ごめんなさい
自分のいる世界が分からなかったから情報だけでも集めたかったんですよ
……今まで物の見事に忘れてたけど……ってか、あれってふざけてＡＩのせた覚えがあるんですけど……

「……束さん、マイクとかってあります？」
「うん？えっと……そこにあるけど」

「何をする気だ？」
「ちょっと、ですよ……よし、聞こえるか？ＰＧ１０６」
『……音声認識完了、お久しぶりです荒榎様』
「……ほえ～」
「……頭が痛いな」

千冬さん大丈夫？……って、俺の所為か
でもまぁ、小さき頃の過ちは誰もが持ってるでしょ

「久しぶりだな、すまない」
『いえ、また会えた事がすばらしい事なのです、あの時は確か……四歳でしたね、忘れるのが当たり前です』
「ありがとうな……それで、データは未だに集めているのか？」
『はい、未だに収集中です……約５６７ＰＢでしょうか』
「……え？」

ちょっと待て、ちょっと待とうか、ちょっと待ちませんかの三段活用じゃない何か！
ＰＢって言った？ＰＢって言ったよね？あれだよね？ペタバイトだよね？……つまりはテラバイトの上ですか？

『そんな所ですね……それで、今回のご用件は？』
「……あ、ああ、そうだった……悪いけど、休眠モードに入っててくれるか？」
『……かしこまりました……機能、停止シマス』

パソコンを閉じて……

「……うん！何も無かった！」

「いや、それは無茶だろう」
「流石あっ君！ＡＩなんて作っちゃったんだね！しかもなんか執事！」
「……もう忘れて……」

ってか、さっきから扉が叩かれてる気がするんですけど……
あれ？俺の気のせいじゃないよね？これは現実だよね？

「そろそろ出てあげたほうが良いのでは？」
「……そうだな、束見てきてやれ」
「え～面倒だよ～、箒ちゃんはパスワード教えたから箒ちゃんじゃないし、箒ちゃんじゃなかったら興味無いよ」

何故かは知らないけど、ここの扉っ電子キーなんだよね、パスワードも可
でもさ……

「……一夏でも？」
「……何？一夏でもそうなのか？開けないと言うのか？」

……うん、千冬さん、目が怖いから……多分それが怖がられる理由だよ
俺も怖いもん、ソバットがどれだけ強くても怖いものは怖いんだよ、だから一夏は凄い怖いと思ってると思うよ……

「じゃ、じゃあ千冬さんが行ってきたらどうですか？」
「私か？……ふむ、一夏の為だ良いだろう」

……あれ？一夏に決定なの？ひょっとしてあれですね、間違ってたら俺が睨まれるんですね、分かります

って、なら俺が行った方が……駄目だわ、小二が出てきても意味不明だろうし
もう、諦めるしか……無いのかな……

「……違ったぞ」
「……うわぁ～」
「あっ君！頑張って！」

千冬さんの目が……こえ～、なんて物じゃないぜ！怖い！（ガタガタブルブル
と、とりあえず

「誰でした？」
「……多国の餓鬼だ」
「餓鬼て……」
「ふ～ん、まぁいっか、帰った？」
「いや、外で粘ってる……荒榎の家にも行ってそうだな」
「……いや、家は母さんがいるんで大丈夫です」
「……確かにな……で、どうするんだ？あのままでは帰れないぞ」
「ん～、追い払っちゃおー！」
「いや、不味いでしょう！さっさと話をつければ帰りますって！」
「そうだな、私も荒榎に賛成だ、さっさと話をつけて来い」
「え～、やだよー面倒だよー、大体興味無いよー！」
「……箒ちゃんに迷惑が掛かりますよ？」
「……ううぅ、分かったよ、行ってくるよー」
「……とか言いながらも俺の襟を掴んで引っ張ってるのは何でですか？」
「え？あっ君も開発責任者だもん一緒に行かないと」
「そうだぞ荒榎、あれはお前が手を貸したから出来たような物だ、おまえが行かないでどうする」

「……分かりましたよ、行きましょう」
「よーし、あっ君がいれば百人力だよ！」
「……はぁ、俺の話が通るとは思えないんですけどね……てか、千冬さんも来てくださいよ」
「私か？何故だ」
「白騎士乗ってたでしょうが」
「……しかしな、私が出ると一夏に迷惑が……」

あ、そっか、この人ブラコンだった

「……もう良いや、来なくて良いです」
「そうか……何故だ？不快な捉え方をされた気がする」
「さぁ！行くよあっ君！」
「それじゃあ、行ってきます」

「貴方が束さんですか？」
「誰だよ、君みたいな人は知らないよ、興味無いから話しかけないでよ」
「す、すいません！」

「はっ、これだからシンガポールは」
「っ……祖国を馬鹿にしないでいただけますか？」
「……もうやだ」

プレハブから出たら本当に待ってたんだよ……でもさ
何でこんなにいるの！？見えるだけで１０人はいるよ！？
しかもさ、束さんと同い年辺りを連れてきた感じが……ごめんね、
束さんは同い年でも興味ない人は殆ど話さないんだ
って、こっちに来るな、しかも男かよ……結構なイケメンで

「貴方は？」
「……束さんの知り合いです」

ここは普通にした方が良いよな……束さんごめん、これは家までつ
れて帰ったら母さんに迷惑が……

「……なんだそっか……何時まで見てるんだよ、とっとと帰れよ」

うわ～、この人あれだ、ただＩＳが欲しいだけなんだ

「……すいませんが、貴方の国は？」
「あ？アイルランドだけどなんか文句あるのか？あぁ？」
「……」
「おい、よせよ、かわいそうだろ」
「はっ、流石カナダだな、たかが餓鬼一人にそんな態度取るなんて」

よし、虐殺しようか……いやいやいや
待て、クールになれ、ｋｉｌｌだ……あれ？これ違うな
ｋｏｏｌ……だっけ？いかんな、頭が怒りで一杯だ

「……おい、待てよクソ野郎」
「あぁ？おい餓鬼、目上にその態度か？……殺すぞ」

あっそう、ごめん普通に勝てるから、ってか今更だけど
こいつの相手する意味ってあるのか？それに目上て……

「そこの君、じゃまだから退いてくれないかな」
「っ！……どうも、貴方が束さんですね？俺は――」

おおう、見事な化けの皮、笑顔ですね、普通の女性ならなびくだろうけど

「はぁ？誰も君の名前なんて聞いてないよ、じゃまだよ、退いてくれないかな」

相手は束さんなんだよね……ざまぁ

「……良かったら、少しお話でも「君に話しなんて無いよ、っていうかじゃまだから退いてくれないかな」……」

沈黙ですか、いえこれは怒りです

「束さん、そろそろ止めてあげましょうよ」
「え～、良いじゃん、どうせ興味無いし」
「……っ……あの「五月蝿いな、黙っててよ」……この、クズがぁ！」

……え？そこ殴る？ってか、お前はお国を背負ってきたんじゃないのかよ、っての

妖幻を部分展開して腕だけで防ぐ、ってかこれは痛いぞ

「……え？」
「ざまぁ」

驚いてももう遅い、振り上げた腕はそのまま妖幻に……

「…っ！…あぁぁぁぁぁ！！！！！」
「うっわ、痛そうだな」
「ふん、これがあっ君の言ったざまぁ、だね！」
「それが正解ですね」
「腕が、腕が……あぁぁぁぁ！！」
「ってか、全然反動が来なかったんですけど」
「きっとこれがへなちょこなんだよ」

これって、人をこれ扱いしては……まぁ良いか

「……これが」
「I、S……」
「……あ」

大勢の前で見せちゃったよ……まぁ良いか♪
……ハッ！？いや、駄目だろ！

「……あぁ、ぁ……」
「あ、気絶した、てかこいつ弱いですね」
「当たり前だよ、それよりも、あっ君のおかげで周りが静かになったから帰ろー」
「……本当だけど何故に？」

周りの女性は顔が真っ赤……本当に何故に？
はっ！？まさか俺の笑顔が！……ありえないな、っていうか、笑ってないし
けど何で？まさかだけど、これの泣き顔で発情した？……いやいやいや、それは無いだろ、そうしたら全員がＳだし……てか、言い方が不味いな、束さんに引っ張られてるな……束さんとかおかしいもん、女性の裸の画像を見せて「発情した？」とか聞いて来るんだよ？ありえないっつーの
第一、母さんの方が……ゲフンゲフン、……まぁそんな感じだし、何回もやられたら何でも無いし、偶に千冬さんの服はがしてるシーンとか見るけど、何とも思わないし、というより百合を疑ったし……え？現実？何かスーツのお験しだったらしいよ？まぁ良いんだけどさ、せめて扉を閉めるとかしようよ……あれ？俺って枯れてる……まぁ、精神年齢は２０だし……あら？これって枯れてるって事？
っていうか、精神年齢ってどうやったら分かるんだろうな……良く考えて、精神は体に引っ張られるって聞いたこと無いか？つまりだ、中学二年生で転生して、体は子供、っていうか生まれたばっか、自意識が目覚めるのが……約二歳？
だとしたらさ、中学２年から下がるんじゃないか？……いや、どの程度の早さで下がるのかは知らないんだけど
途中で体と同じになるまではどんどん下がるんじゃないのか？
だとしたら、だ……良くある転生者物で「体は１６でも精神年齢は３８だから何とも思わない」とかあるとしたら、これはおかしいんじゃないか？
体に引っ張られるわけだから転生時が２２でも……あら？何時の間にか１６に、何て事があるんじゃないか？
まぁ、簡単に言うとだ、何時の間にか体と同じ精神年齢になってるんじゃないか？って事だ

え？分かってる？しかも分かりにくい？……そっか……

「……などと現実逃避して見た……筈なのに何故に責められた？」
「あっ君ー、早く帰ろうよー」
「いやね、帰りたいんですけど、道がね……」

人だらけなんですよ……そりゃあもう、はい
道がね……ってか、半径五メートルは開いてるんだけどね
……あ、そっか、妖幻展開したままだった、流石に腕だけでも怖いよな
ほいっと、よし……って、あれ？近づいてくるよ？……はっ？
！まさか妖幻が抑止力に！？

「あの、貴方は？」
「……しがない束さんの友達です」
「あっ君、ちゃんと言わないと駄目だよー」

……ヤメテクダサイヨ、タバネサン？

「あっ君はＩＳ開発者の一人だよ☆」
「この人言っちゃったよ！？」
「……え？」
「もーだから興味無いのは嫌なんだよ……いいかい？あっ君は、束さんと一緒にＩＳを作った張本人なんだよ、これだから……」
「あの子が……」
「…ＩＳ……作成者？」
「束さんだけじゃなかったの？」
「……いえ、ちゃんと分かってる情報によると……あっ君なる人がいっしょに作ったと言っているわ」
「つまり……」

「……あの子も？」
「あの年で？」
「……天才だわ」
「ぜ、是非わが国にいらっしゃってください！」
「え、いや、あの、……」
「あっ！……是非わが国に、国を上げてお待ちしております」
「ちょ！？ずるいわよ！」
「ずるいも何も無いわよ！ちゃんと誘ってるだけじゃない！」
「……わが国に来ていただければ、最先端のテクノロジーを詰めたＶＩＰルームがご用意できますが、いかがでしょうか？」
「「そこの貴方！割り込み禁止よ！」」
「……ふっ」
「……何ここ怖い」
「あら、怖いの？だったらお姉さんと一緒に寝ましょうか？」
「あら？だったら私が」
「それを言ったらアジア系の私が」
「偶には黒人と寝るのも良いわよ？」
「……もうヤダ」
「あら？帰るの？」
「だったら、私も連れて行ってもらって良いかしら？もう少しお話しましょ？」
「じゃあ私も」
「なら私も」
「私だって」
「……」

もうヤダ、これだから伝えたくなかったんだよ、皆俺の年が低いからって簡単に誘惑出来るって考えるんだよな……
しかも、俺一人に十二人て……集まり過ぎだろ

「いえ、自分は一人で帰ります、家には近づかないでください、近づいた場合、その国とは友好関係は築けないと判断します」
「「「

「良いか、五才だぞ、五
才に近い少女を送ってくれ、出来るだけ可愛い子だ……ああ、あの
子なんか丁度良いな、頼んだぞ」
「良いから送れっつってんだろうが！俺の首が掛かってるんだよ！」
「……あ、はい、すいません……え？？首？……え、い、ちょっと、
や、あの……畜生が！」

やっぱりこうなるんですね……
ってか、俺はロリコンじゃないんで関係無いぞ……
最後の……って、束さん殴ろうとした奴じゃん……まぁ首は当然
だよな
ってか誰だよ、二年生を十二歳と間違えた奴、それは六年生だっつ
ーの、しかも俺は七歳ですが……
てか、帰って良いよな？今のうちに帰るぞ？

「……すたこらさっさー、ってか？」

・・・・・幼女ですか、そうですか・・・・・・夢だよね？

「始めまして、シャルロット・デュノアです！」
「……なんで？」

訳が分からないぜ！家に帰ったと思ったら何故かシャルルとそのお母さんみたいな人がいて、母さんと仲良く話をしていたぜ！
うん、全く分からない……ほんと、何故に？

「荒榎、こちら母さんの友達のヘレン・デュノアさんよ、ヘレン、この子が荒榎よ」
「この子が？……ん～、おかしいわね……ねぇ香織？貴方のお子さんって、あれを開発したってい言ったわよね？あの……インフィニットなんとか」
「インフィニットストラトスよヘレン、ええ、この子と、近くの中学生で作っちゃったのよ、私も驚いたわ～」
「え～、この子があれを作ったの？凄い子ね～、頭良いのね」
「……」
「ええ、凄く良い子なのよ、確か……四歳で人工知能を作ってたわね」
「……」
「あれってまだ誰も作れてないって聞いたわよ？」
「それが作っちゃったのよ、しかも四歳よ？あの時はビックリしたわ」
「へぇ、天才ね」
「自惚れた気は無いのだけど、この子がいると今の世界が古く感じるのよ」
「それはそうでしょうね、なんたって誰も作ったことの無いものを

二歳で作ったら、誰でもそう思うわよ」
「……」
「……荒榎どうしたの？さっきから一言も喋っていないじゃない」
「大丈夫？」
「……いえ、大丈夫です……多分……ちょっと着替えてきます」

そう言ってその場をあとに、自分の部屋に向かう
ああ、小学二年生で何で自室を持ってるかって？
部屋が多いんだよこの家、だから結構前に貰ったな……何時だっけ？
そういえば、母子家庭でどうやったらこんな良い家に住めるんだろうって考えた事もあったけど、母さんが首相の秘書やってたなら納得だな
・……あ、部屋に着いちゃった……さて、何でこんなに落着いているかと言うと
簡単な話だよ、ワトソン君……この世界ってワトソン居たのかな？ってかシャーロックホームズってあるのかな？
まぁいいや、とにかく

「……ぱにくりすぎると逆に落着くんだな……」

絶賛混乱中ですよ、はい
ってか、何でシャルル……シャルロットが入るんだよ
母さんと友達とか……ご都合主義だな……ひょっとして俺も小説の登場人物に入ったのか？
いやいやいや、それは無いだろう、良くある事だ、小説に限りない世界に行く、うん、だから問題無い
……はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、……どうしようかな
ここで俺がシャルルが男って事を知ったから……あれ？シャルルってＩＳ学園に来れない？いやいやいやそれは不味い、どう不味いか

と言うと・・・・・・・・一夏ハーレムが減るじゃないか
ってことはだ、話が変わるじゃないか……どうしよう、話が変わったら何も分からないよ？
待て、良く考えろ、別にあれだ、俺がＩＳ製作者だってばれなくて、ＩＳを動かせることがばれなければ問題無いじゃないか
……駄目じゃん！母さんが言ってたじゃん！思いっきり、知ってたじゃん！……鬱だ死のう

「とは、行かないよな……本当に参ったぞ、この状況」

とにかく、一度着替えて……会うのか？
え～、マジかよ……逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ「もしも～し」……うん、何も聞こえない、俺には何も聞こえない、そうだ、気のせいだ……

「もしも～し」
「……リアルですか……どうしろっちゅうねん」

いかんな、ついつい変な喋り方になってしまった……ってかさ、声が……

「もしも～し、いないの～？」
「……思いっきりシャルルだな……いないよ～」
「そっか～、いないんだ～」
「うん、いないよ～」
「じゃあ君は誰？」

……うん、流石シャルル、小さい頃から騙されないか……てか、これで小学二年生が騙されたら凄いか……

「……」
「おばさんが呼んでるよ、はやくきなさ～い、って」
「ああ、うん、今行きます」
「は～い」

……なんだろう、年が低いから喋り方が違うのは当たり前だけど……あれだ、幼女シャルル恐るべし、だな
何が、と聞かれると分からないんだけど……うん、良いものだべ、別にロリコンじゃなかいらな！ただ可愛いな～って思っただけだからな！
うん、真面目に言うと、なんだろう……子供みたいな？親心みたいな感じじゃないかな

「……早く降りるか」

降りなきゃ……駄目だよね……
はぁ、覚悟決めようかな……
階段一つ一つが長く感じるよ……あれ？普通こういう時って短く感じるんじゃないか？

「遅かったじゃない荒榎、この子がシャルロットちゃんよ……って、さっき自分で言ってたわね、この子も良い子じゃない」
「でしょ？自分で言うのもなんだけれど、目に入れても痛くは無いわよ」
「あら、そんな事を言ったら私だって」
「ふふっ、そうだシャルロット、荒榎君と遊んでもらいなさい」

ええ～、こっちに振りますか？そこは普通に今まで見たいな奥様トークを

「それは良いわね、シャルロットちゃん、荒榎と遊んであげて、あの子友達少ないのよ」
「あら、そうなの？」
「ええ、どうも荒榎の考えが大人すぎるみたいなのよ」
「ああ、だから考えが合わないのね、良過ぎるのも考え物ね」
「そうなのよ、話が合うのが大体高校生ぐらいかしら、友達と呼べる人は四人いるか分からないほどよ、箒ちゃんに、束ちゃん、千冬ちゃんに……一夏君かしら？」
「あら、束って、あのＩＳを発表したって子？その子くらいにならないと話も合わないって事かしら」
「どっちかというと、大人びた子とは中が良いわね」
「ああ、荒榎君が大人びているから」
「そうそう」

おい、何でこの状況で奥様トークに入りますか？俺はどうしろと？
この小さなシャルルと遊べと？
おいおいおい、シャルルがこっちに来たよ、どうしろと？遊べと？
いやいやいや、精神年齢が違うから、まだ中学一年くらいの精神はあるから

「こ、こんにちは！」
「……ああ、うん、こんにちは」

すっごい元気なんだけど……そして何故にこのタイミング？
あれ？これって本当にシャルル？こんなキャラだっけ？ひょっとして同姓同名の別人……無いな
つまりは、これがうんたらかんたらな目にあって、ああなるんですね……
てかさ、何をしろと？俺が出来る事なんてたかが知れてるよ？ってか、小学二年生の男女で何をしろと？勉強ですか？外遊びですかお

ままごとですか？……ごめん、最後のは勘弁して

「……えへへ」

「……どうかした？」

「ううん！」

「……そ、そう」

「うん！……えへへ」

どうしたし！？この子本当にどうしたし！？何があった！？

どう反応しろと！？俺は分からないよ！？挨拶したと思ったらついの瞬間には「……えへへ」だよ！？

どうしろと！？何て言えば良いんだよ！ってか、親は何してんだよ！

「あらシャルル、どうしたの？いつもみたいにはしゃげば良いじゃない」

「お、お母さん！」

「……ああ、そうなの……ふふっ」

「あら、ひょっとしてだけれど、期待して良いのかしら？」

「こっちは良さそうね、でも荒榎君は？良い子とか一杯いそうじゃない」

「だめよ、この子友達少ないって言ったでしょ？まぁ、ホの字の子は結構いそうなんだけどね、この子が……」

「……ああ、それは辛いわね、その子も可愛そうに……」

「しかも、この子ったら全然気が付かないのよ、見てて可哀想なほどに」

「それは……シャルロットは大丈夫かしら」

「大丈夫よ～、うちの子も可愛い物には弱いから」

「あら、そうなの？シャルル良かったじゃない」

「……／／／／／／／／」

……うん、関わるのは止めよう、怖いから……
期待って何だよ……いや、想像とは違うはず、シャルルは一夏に惚れるんだから、俺は一夏とは全然違うから大丈夫！……な筈
ってか、ホの字って、古いだろ、その前にいないから、俺の外見って普通だから……多分
言うなればあれだ、けいおんの和の男ｖｅｒだな、髪の毛は黒だけど……眼鏡掛けたら似てると思うぞ
まぁ、それは置いておいて……はい、シャルルが赤くなっております・・……これってフラグ？
いやいやいや、会った瞬間にフラグとか無いから……一目惚れ？
それこそ無いさ
赤くなってるシャルル……うわっ、可愛い、ヤバイだろこの可愛さ

「……／／／／／／」
「……はっ！？」

危ない危ない、手が出る所だった……可愛いものは抱きしめたくなるよね！
でも流石に人は不味いだろ……ってか、この後どうするの？

「……」
「……」

うん、何も繋がらないな……凄く気まずいです

「ほら荒榎、部屋に行って遊んできたら？」
「……母さん、俺の部屋に小学二年生が遊べるものってあったっけ？」
「そうね、オセロとか、チェスとか、母さんが買ってきてあるわよ？」

「……」

母さん……

何でチェスなんて買ってきたの、誰とも出来ないよ？

まず頭が同じ位じゃないと相手にならないし、同じ位の束さんは決められたルールとか嫌いだし

何時やれと？それともあれか？この時の為に買ったのか？

「あら、丁度良いわね、シャルロットはチェスが好きなのよ」

「あら、そうなの？荒榎、シャルロットちゃんとチェスでもしたら？」

「……いや、本人に賛否を取らないで決めるのは……」

イッツ最後の足掻き☆

これでシャルルが言ったら終わりなんだけどね……

あれ？これもフラグには入るのか？

「わ、私なら良いよ！」

「……あー、うん、そっか」

「う、うん！」

なんでやねん、本当になんでやねん、出来るだけ記憶に残る事は止めておきたかったのに……

しかも、シャルルよ、何故に顔を赤らめるし、お前は何歳だよ、普通は小学二年じゃ、そんな顔はしないぞ……多分

なんだか最近多分が増えたな・・・・・・・…まぁ、この人生はきついからな、しょうがない

こらそこの母さんズ！何で「あらあら」「ふふっ」っとか微笑んでるの！勘違いしちゃ駄目でしょうが！シャルルの好みは一夏みたいな奴だから！

「んじゃ、行きますか」
「う、うん！行こう！」
「……階段あっちだけど」
「……／／／／／／／／／／／／」
「んじゃ、改めまして、行こうか」
「・……うん／／／／／／」

どうしよう……滅茶苦茶可愛いです！
これは罪だよシャルル君・・・……いや、現実的にはシャルロットちゃん
言いにくいからシャルルで良いか、いや、流石に会ったその日にあだ名は……って、その前に目立つじゃん、覚えられるじゃん
……まだ、大丈夫、だよね？六歳なら忘れるよね？

「とまぁ、考え事をしてたら部屋についた訳ですよ」
「……すご～い」
「……うん、さすがに無視は酷いと思うんだ」

記憶に残らない様にしないといけないと言ってもさぁ、これは流石に来るものがありますよ？
ってか、そんなに凄い部屋じゃないよ？ただの一人部屋に色々と書類が積もってたり、ＩＳのパーツが落ちていたり、ＩＳに繋ぐ小さなボックスがあったり、それを移す画面があったり、変更する為のキーボードがあったり、ＴＶがあったり、ＰＣがあったり
簡単に言うと、化学者の部屋をもっと酷い状態にしただけだよ？……
……うん、今考えなおした……これは普通からしたら凄いわ
凄いって言うか、これは人を呼ぶ部屋じゃないな、うん……

「よし、移動しようか」

「え？べ、別にここで良いんじゃないかな！」
「いや、散らかってるから……」
「だ、大丈夫だと思うよ、ほら、ここでやれば！」
「……あ、そう、んじゃ良いか」
「う、うん、良いんだよ！」
「そっか……んじゃ、椅子も一つ無いから、こっちに回って」
「え……その……べ、ベットで良いんじゃないかな！」
「……いや、それ俺のベットだけど」
「い、良いんじゃないかな！」
「……そ、そう、それじゃあ……何をする？」
「チェスなら、私も出来るよ？」
「それじゃあチェスで……ハンデは幾つが良い？」
「……ハンデ？」
「そう、俺のポーンを減らすんだよ」

いや、酷いかもしれないけどそれくらいやらないと勝負になら無いんだって
そう顔を膨らませるなや、つつきたくなるから

「……無しで」
「……へ？」
「無しで！」
「……あ、うん、そっか……じゃあ、始めようか」
「……勝つもん」

凄いやる気ですねシャルル選手……
まるでこれに人生掛かってるような感じですってか、ハンデ無しだとさ……

「チェックメイト」
「……うぅ」
「ほれ、そっちのターン」
「……参りました」
「はい、お終い」
「も、もう一回！」
「……それ聞くのこれで17回目なんだけど」
「もう一回！」
「……はぁ、これが終わったら他のゲームね」
「うん！」
「それじゃあ、……はい」
「……よし

おおう、今度は全部を考えてのやり方ですか
まぁ、将来は高速切替（ラピッド・スイッチ）が使えるようになるんだから、ソレくらいは出来るよな……小学生で？
ま、まぁ、あれだ、凄い子なんだ！うん！

「次は荒榎君の番だよ」
「え、ああ、はい。んじゃこうで」

「……」

凄い真剣な目です……
どうしよう、適当にやってる自分が恥ずかしくなってきた
いやいや、でも本気でやるのは酷いよね、さてどうしようか……

「はい、どうぞ」
「あ、うん」

それにしても……うん、やっぱりだ
俺は小学二年生、つまりは7才な訳ですよ……この部屋は無いと思うんだ
絶対おかしいよね、前に一夏連れてきたときなんて……目を輝かせてたけど
シャルルは女の子だからな……どうなんだ？

「はい」
「……あ、チェックメイト」
「……あれ？」
「いや、ここにいるから」

シャルルはビショップを忘れていた、なんて流れそうな雰囲気だなまぁ、一番端に最初の辺りからあったからな

「一つ前にルークを動かさなければ良かったんだよ」
「……あっ」
「惜しかったね」
「うぅ、もう一回」
「いや、そろそろ飽きたし……他のゲームは？」
「……チェスしか知らないの」

あらら～、ってか家で何やってるんだろう
まぁ、知らないなら知れば良いし

「……じゃ、初めてやってみようか」
「……やり方知らないよ？どうするの？」
「いや、俺が教えるから」
「……いいの？」
「それ位は余裕ですよ、ってかもうちょっと頼って欲しいくらいだよ」

原作でも一夏が言ったせりふだよね、この時期に自分が言うとは思いもしなかったけれど……
あれ？ひょっとして、これってフラグ？いやいやいや、シャルルはもっと前に一夏に惚れた……筈だと思う
でもな……うん、流石にさ、これは記憶に残ると思うんだ……
まぁ良いか！他の方法を考えれば良いし！ＩＳ学園に行くのを遅くすれば良いし！
それに……

「……うん！」

こんな笑顔が見られるなら……元はいや、取れるだろ

「よし、それじゃ、……これかな」
「……ライフゲーム？」
「人生ゲーム、ってか、その読み方は初めてだと思う」

ライフゲームって……あ、書いてあるわ、隅に小さく

前世のには書いてなかったんだけど……何でだ？

「まぁ良いや……これはな「シャルロット、帰るわよ」……タイミングが狙っていたにしか思えない件について」

ドアの方にはシャルルのお母さんのヘレンさんが扉を開けている

ってか、これは狙ったのか？狙ったんだよね？

って、帰る？帰るの？シャルルの事とか原作の事とか考えなくても良いの？……いや、原作はいつも考えるんだけど

……あら？シャルルの顔が凄い不満気

「お母さん……もうちょっといたいな」

「また明日来たら良いじゃない、あと五日は残ってるんだし」

「……うん」

シャルルがお母さんに反抗だと！？珍しい絵だな……でもこれって反抗に入るのか？

……って、明日も来るの？マジで言ってるの？じゃあなに？シャルルはもうちょっと話したかったけど、少し楽になったな、とか考えていた俺の平穏がが真っ白に消えるの？

しかも五日間？いやいやいや、俺の平穏何処に消えたし……

ってか、原作キャラと会わせないように気をつけないと行けないのか

「……また来ても良い？」

「……ああ、うん、どうぞ」

「良かったじゃない、また会えるわよ」

「……／／／／／」

こんな顔をされては断れませんよ、はい

上目使いで……頬をちょっと赤に染めてるんですよ?可愛過ぎですね、反論は認めない
ってか、つい言ってしまったけど……うん、平穏サヨナラもうさ、この時点で結構不味いと思うんだ……これが高校だったら惚れてる女子だよ?
危ないね、凄く危ない、この状態を続けたら不味いです、はいいやね、シャルルは結構好きなキャラなんだよ?だけどさ、もしだよ?……もしそんな事になったらさ、原作が変わるじゃん
思いっきり変わるじゃん、それは何としても防ぎたいんだよね……
…安全の為に
結構高性能……言い替えるとオーバーテクノロジーな物を作ったり、コアを改造したりと、安全の為には行動してるけどさ
それは原作用に作ってあるんだよね、うん……知らない内容だと……大変だな☆、何でものじゃ済ませないよ
……まぁ、一夏と俺とじゃ全然違うから、中学辺りで変わると思うんだけどね
よくあることでしょ?小学生のときと、中学生のとき、高校生のときで好みが変わること
だから大丈夫……だと思うんだけど、そうだよね?だから大丈夫だよね?
まぁ、今のところ言いたい事は……

「……俺に平穏をプリーズ」

甘い甘い・・・・・・・・・・不味いほど甘いね（前書き）

だれかコーヒー持って来い

甘い甘い・・・・・・・・・不味いほど甘いね

「おい！あの子から離れろ！」
「……何でこんな事になってるの？」

訳が分からない……え？こっちの方が分からない？
じゃあ説明しよう、シャルルと遊ぶようになって早三日、今まではチェスをして全勝したり、人生ゲームを教えたら何故かシャルルが１０億稼いだり
俺が暇つぶしに作ったゲームをやってみたり、シャルルの要望にこたえてゲームを改造したりと、全てが家の遊びだった

それが、今日は突然「外で遊ぼうよ！」だそうで、一夏とかに会うと怖いから頑張って家で遊ぶ様に誘導しようとしたら一言「……ダメ？」でした、はい
これはもう……ね？分かるでしょ？幼女のシャルルだよ？滅茶苦茶可愛いんだよ？しかも男言葉じゃないから余計にだよ？
まぁ、そんな訳で近くの公園に行きましたとさ……うん、俺何やってるんだろう……
そんでもって、一緒にやろうと言われブランコに、十分に満足したらシャルルは砂場に駆けていったとさ
てか、別のブランコに乗るなら一緒にやる意味はないよね？……二人乗りだったんだけどね
ちょっと疲れた俺はブランコで休憩……してたはずなんだけどな何時の間にか目の前には餓鬼大将みたいなのと子分が１，２，３
いきなり言われた言葉が「おい！あの子から離れろ！」……訳が分かりません

「ってか、離れてるじゃん」
「……お前、俺にそんな口聞くのか？あぁ？」
「うん」

だってさ、全然怖くないし……ってか邪魔だし

「こ、この野郎！「シャルロット、変なのがいるから帰るぞ～」……っ！」

……なんだろうね、良くある光景だよ、好きな子の前では良い子でいたいんだね……
怒りよりも好きな子を取るんだな、うん、良くある光景だ……良くあり過ぎて何とも思わないがな

「は～い、変なのって……あ」
「よ、よぉ！」
「知り合い？」

テンパリすぎだよ……凄い変だ
ってか、シャルルも引いてるし……と言うより俺に隠れてるし

「ううん、前に遊んでたらずっと見てきたの……怖い」
「……お、おれは！」
「はいはい、ちょっと離れろや、邪魔だろが」

多分、好きだけど声は掛けられないみたいな状況だったんだろうな……意気地なしが
ってか、シャルルが怖がる奴に話す事なんて無いんだけど……うん、そこは公園の入り口なんだ
何で公園の入り口とブランコがこんなに近いんだよ……

「お、おれは！……荒榎！お前に決闘を申し込む！」
「……は？」

血統？結婚ですか？嫌です気持ち悪い
結党？何でお前とそんな事をしないといけないんだよ、第一何のだよ
血糖？あ、そうですか、お大事に……頭もね
決闘？……うん、馬鹿ですね

「何で？面倒だから嫌だ」
「俺が勝ったらその子を俺の彼女にする！」
「わ、わたし！？」

……もう嫌です、はい
話を聞きません、ってか、シャルルと付き合いたいんだったら本人に言えよ
しかも凄いジャイアニズム……あれってこっちには無いんだよね、この使い方で合ってるっけ？

「ってか、どちら様？」

少し戻るけど俺って名前教えたか？何で知ってるの？ネットですか？何それ怖い……

「っ！……俺は茂武鬼夜螺だ！」
「……え？モブキャラ？」
「茂武鬼夜螺！」
「だからモブキャラ？」
「っ！……とにかく、お前のクラスメイトだ！」
「……なんだってー！？」

「そのわざとらしい驚きは止めろ！」
「なんだってー」
「そしてお前は名前を教えろ！」
「……怖い」

あらら、折角シャルルがネタに乗ってくれたのに……ＫＹがしかも何気に名前を聞くとか……うわっ！恥ずかしくないのかね……あ、子供の特権か

「とにかく！その子を掛けて勝負だ！やぁぁぁぁぁ！」
「……ほい」
「ぶへっ！？」

え？何をしたかって？なんだか知らないけど殴りかかってきたから払い避けてそのまま顔面にパンチ？
すっごく軽くやったのに……しかも手でだよ？自慢じゃないけど、私の握力は５３万です、ごめんなさい１８です、低いです、はい
脚力は高いんだけどね……ソバットの所為か？あれって殆どが足技……だったと思うし

「い、痛い……」
「……もう終わり？」

決闘とか言っておいて一発とか……しかも握力１８の攻撃であ、でも殴りには握力は関係無いのか？あれは腰の回しとか、腕の伸ばしとかの色々な稼動部分を如何様に使えるかで変わるらしいよ？……千冬さんが言ってた

「……え～、何それ、凄く萎えた……」
「荒榎、大丈夫？」

「いや、何処から何処を見ても大丈夫でしょ、逆に大丈夫じゃない所を見つける方が難しいし」
「……うん、簡単に見つかったよ」
「え？マジで？何処何処」
「荒榎の口調が荒荒しいよ」
「……ん？」

ちょっと待とうか、そんなに違うか？普通に話しているつもりなんだけど……
思い出してみよう……うん、普通……じゃないね
よし、落ち着こう、冷静になれ、クールだ
何で喋り方が変わったんだ？特に違和感は無かったな・・・・・・
うん、まるで俺だった
分かりにくいかもしれないけど……なんと言うか……今の俺も『俺』だけど、さっきまでの俺も違う『俺』だったと言えば分かるかな
……あれ？ひょっとして、ひょっとしちゃって……二重人格じゃないよね？違うよね？
うん、でもそう考えると何か納得だわ、俺の転生前にも人格はあったんだろうな、ただそれが弱くて俺に負けた……って事かな
あれ？これって……俺って転生じゃなくて憑依？あれ～？こんなキャラは前作んはいなかったと思うんだけど……はっ！？まさか俺がモブキャラ！？
いやいやいや、ここまでやっておいてそれは……あとで考えよう
今はシャルルだな

「……よし、オッケーだ」
「うん、直ったね」
「何でそんなすぐに分かるんだよ……」

母さん、シャルルが怖いです、何故か一瞬で理解されました、この

子はチートではないでしょうか……
ラピットスイッチが出来る程の思考能力は別の使われ方をしている様です

「見れば分かるよ、荒榎のことだもん……」
「……あ、はい、そうですか」

これは……うん、違うと思いたい

「それじゃ、帰りますか」
「うん、そうだね」

そんな軽い感じで帰ろうとしたのに……

「ちょ、ちょっと待て！」

……何でまだ話しかけてくるのかね？

「……何か用？」
「……」

いいあ、何か言えよ……視線はシャルルで固定ですね……ウッッッッザイナ

「荒榎、それ違う」
「エ？……あ、うん、そうだね」

落ち着け、落ち着け、ビークールだ俺

「……あのっ！」

「おおぅ、ビックリしたな」
「……私？」
「……（コクン）」

何だろうね、すっごい嫌な予感がするよ……こっちに飛び火しないだろうな……

「……あ、あのっ！お、俺、茂武鬼夜螺って言います！俺と付き合ってください！」
「……うん、ごめん、言う気は無いんだけど……それは遅いと思うんだ」

それは最初に言う言葉だと思うんだ……この子は大丈夫か？
それにしても……うん、その前に後ろの子分を如何にかした方がいいと思うよ？全員が「俺だって！」みたいな顔をしてる……って、今言った！？

「俺だって好きです！付き合ってください！」
「お、俺も！付き合ってください！」
「俺が一番好きです！何でも言う事聞くので付き合ってください！」
「お、お前ら何いってるんだ！俺が最初に言ったんだ！俺と付き合ってください！」

……ワ～オ、これなんてカオス？またの名を混沌？
どうでも言いが、俺は帰って良いか？回りの目が凄い事になりそうだ……四人の少年が右手を前に出しての「お願いします！」のポーズ、って、また被った！？

「「「「俺と付き合ってください！」」」」
「ごめんなさい」

「早っ！？シャルルの答え早っ！？」

間髪入れずに答えたよ！？なんの躊躇いも無しに！？……なんだかこの四人が可哀想に思えてきた……

「な、何でだ！俺はこの辺りじゃ一番強いぞ！」

「俺だって！この中じゃ一番頭が良いぞ！」

「お、俺はこの中で一番格好良いぞ！何がダメなんだ！」

「いや、そういう問題じゃないだろ……」

「……そう言う事じゃなくて……」

「ここは手助けをするべきなのか？どうなんだ？女心は分からないからな、手の出しようが無い

「じゃ、じゃあ何なんだよ！どうすれば彼女になるんだよ！」

「……わ、私は！物じゃない！」

……あれ？何か重い話になってるよね？コレって昼ドラ？

「自分の人生は自分で決めるし、好きな人だっている！それに、いきなり決闘で私を俺の彼女にするなんて言ってきた人は嫌いです！それを手伝う人も嫌いです！」

「「「「……」」」」

「……うん、全く反論できないよね」

「荒榎、ちょっとごめんね、この子達と話して良いかな？」

「え？ああ、うん、良いけど……もしかしての邪魔？」

「……え、いや、そういう訳じゃなくて」

「ううん、いいよ、もう良いんだ、そんなに誤魔化して優しい言葉を捜すのは良いけど……最初の空白が物語ってるよね」

「あの、その、ごめんね？ちょっと離れててくれると嬉しいかな」

「へいへい、それじゃあ……あそこに居るわ」

指差した先は滑り台、ただの滑り台と思っていちゃいけないよ
ここの滑り台は何と！椅子が付いているんだよ！……え？全然凄くない？……そっか、そうなんだ、もう当たり前なんだね……
他にと言ってもね、……ついでに回転する滑り台になってるくらいしか、でもこんな事は普通だし……あれ？前世でそんな滑り台って見たことあったけ？
……うん、ないね、あれだ……ヤックデカルチャー！
このネタってもう古いのかな、束さんですら使わないし……ってか、こっちにあれってあるのか？
一度も見たことが無いぞ？……代わりに欄花・李異って人が歌手に居たけどね！
びくったよ！本当ににびくった！何があったらそうなるんですか！
アニメが無いのにキャラが実在するとか……うん、見た目も似てるんだ、マジでおかしいからこの世界
そんな事を考えながら、荒榎は滑り台に歩いていく、と荒榎は荒榎は、シャルルを置いて行く事に少しの不安を持ちながら、少しだけでも話が聞こえて良いな、と希望を持ってみたり！
……うん、止めよう、あれも居そうだな……マジでこの世界はカオスと言う名の混沌ですね
……さて、聞こえるかな？

『……うん、もう聞こえないかな』
『……それで、何が言いたいんだ？』
『まさか、あの野郎が居たからＯＫできなかったとか！』
『マジか！じゃあ返答はＯＫなんだな！ヤッホー！これで今日から彼女持ちだぜ！』

『お前な訳が無いだろうが！相手は俺に決まってるんだろうか！』
『……黙れ！』
『『『……』』』

おおう、餓鬼大将が怒ったよ……あれ？結構良い奴？
そして三番目と四番目、あとでブッチＫＩＬＬ……おっと、まだ続くよな

『そうじゃないです……私には、好きな人が居ます、だから……ごめんなさい』
『……荒榎か？』
『……うん』
『何でだよ！何でアイツなんだよ！』
『そ、そうだ！俺達の方がアイツ何かより！』
『だ、大体アイツの何処が良いんだよ！クラスじゃハブられてるようなインキャラだぜ！？俺は委員長もやってるんだ！俺に変えろよ！』

え？俺ってハブられてるの？全く気が付かなかった！って言うか、クラスメイトとあまり喋らないし・・…え？悲しい奴？何を言ってるんだ？前世が中学に年ですよ？小学生とお遊戯なんて出来るとお思いで？……うん、出来るね……
ま、まぁ！俺の場合は特別なんだよ！学校言ってもＩＳについて考えてたし！友達を作るような暇があったらＩＳの装備の設計図を書いてたし！……え？授業？当てられてからでも分かりますよ、はい

『一目ボレなんだ、だから荒榎が、とかの話じゃないんだ、ただ、私が荒榎の隣に居たいんだ』

……え？何時の間に？そして精神年齢高くないか？

『それに荒榎は……荒榎は、私を対等に扱ってくれた、普通に、ただの友達として……そこが少し悲しい所でもあるんだけどね』

……ごめんなさい、違います、記憶に残りにくい、尚且つ母さんに怒られたり、シャルルと喧嘩になら無いようにしていました

『偶に見せる微笑とか、笑顔とか、苦笑とか、驚きとか……三日間しか一緒に居なかったけど、凄く惹かれたんだ』

『だから、私は荒榎が大好きで、大好きで、例え荒榎に好きな人が出来ても良い、それまでで良いから、好きでいたいんだ、好きになって欲しいんだ、一緒に居たいんだ、一緒に笑いたいんだ、一緒に泣きたいんだ、一緒に、映画とか見たりして、恋人らしくなくても良い、それでも一緒にいたいんだ……』

さて……うん、ばっちりと聞こえたね！……シャルルさんや、もう少し声を小さくした方が良かったんじゃないかな？

……ここまでとは思わなかったな・・・・・三日間で特には何もしていない……筈なんだけどな

これはフラグですか？いいえ、もう決定事項です……いやいやいや、それは不味いから

別に俺はシャルルをどうと思っている訳でもないし……いや、可愛いとは思うけど……うん、ＬＯＶＥではないと思う

でもでも、このままじゃ原作と変わるよね？そうしたら俺の悔いは何時まで経っても無くならないじゃん……

勘違い、何てことにはなりませんか？……もう嫌だよ、原作ブレイクとかの問題じゃないよね、どちらかと言うと原作レイプだよね……

ま、まぁ、変わることを神にでも頼んで……も、答えてくれない

よね、あの神様

甘い甘い・・・・・・・・・・不味いほど甘いね（後書き）

甘い！甘すぎるぞぉぉぉぉ！

さて、まだこの作品を投稿して一日・・・・・・・だよね？

２６，４２７アクセス　１，８１２人　も見ている・・・・・・だと・・・・・・

うん、暇な人が・・・・・・ゲフンゲフン、優しい人が多いんですね！

うん、自分で書いたけど・・・・・ないわ～、シャルルが大人～、そしてただのモブキャラ～、その上でのこの甘さ～・・・・・・・・・うん、自分でもちょっと引いた、でもやめないのが俺のポリシー！

色々と溜まりましたね・・・・・・お金とか好意とか不安とか（前書き）

甘い、今回も甘い
ってか、暫くは甘い

色々と溜まりましたね・・・・・お金とか好意とか不安とか

「某正義の見方の真似をしてでも言おう……なんでさ」
「どうしたの？荒榎、遊ぼうよ」

現在は午後６時４５分、良い子の皆はお家に帰っている時間だね！
そしてシャルルのお母さん、ヘレンさんはホテルに帰っています！
……さて、状況が分かったかな？

「……本気で泊まるの？」
「？…うん、そうだよ？おばさんも良いって言ってくれたし」
「いや、母さんはどちらかと言うと勧めてたな……」

さて、過去を見直そうか
あれは……そうだ、シャルルと公園に行って変な集団四人組に会って、シャルルの告白みたいな内容を聞いてしまい、その後家に帰ったときに起こった

「シャルロット、お帰りなさい、どう？楽しかった？」
「うん、楽しかったよ」

うん、凄い笑顔だね、四人組に見せてあげたい……いや、逆に凹

むか

「荒榎もちゃんとエスコートしたの？」
「……してくれなかった」

何故に急に不機嫌になるし……

「あら、ちゃんとしないとダメでしょ？」
「母さん、小学二年生が何故にエスコートをするんですか？」
「だって、荒榎はもう誰もが知ってる有名な博士なのよ？それくらい出来なくてどうするの」
「いや、しませんて、普通はしないよ」
「ダメねぇ、お父さんはちゃんとやってくれたわよ？小学一年生で」
「荒榎のお父さんって凄いんだね……」

……一回でも良いから父さんに会ってみたいよ……一度も会った事が無いんだよ？ってか、小学一年生で知り合いだったの？まさかの幼馴染

「あのときは……そうね、黒い燕尾服を着てて……」
「香織、その話は長くなるんだから止めなさい、今始めたら泊まらないと話し終わらないでしょ？」

そんなに長いの！？え？だって今五時だよ？何時間あるんだよ！

「……お泊り」
「シャルル、そこは反応しなくて良いから」
「あら、シャルロットはお泊りしたいの？」
「……うん」

……え゛!?

「……香織、良いかしら?」
「ええ、むしろ大歓迎よ……でもお話はまた今度にしましょうか」
「ええ、お願いね……こんなに協力的な親も珍しいわよね」
「私は、荒榎のためなら何でもするわよ?」

母さん……何でもするのならお泊りを無しに……なりませんよね〜、はぁ
ってか、何処で寝るんだ?……あれ?何時の間にか俺も受入態勢?
いやいやいや、それは無いだろう

「母さん無理は言わない……シャルルも泊まる用意も無いんだから、また今度にしたら?」
「……／／／／／／」

何故に赤くなるし……ってか、母さんズもあらあら、うふふ、とか言ってないでどうにかしようよ!
第一、泊まる用意が無いんだから何も出来無い……

「そうそう、泊まる用意ならあるわよ?荒榎君」
「……ヘレンさん?貴方は一体何をしに来たんですか?」
「シャルロットのお友達作りと、久しぶりに香織と話したかったからかしら」
「……ブルジョワですね」
「そう言う荒榎も、通帳が凄い事になってるわよ?」
「え?俺って通帳あるんですか?ってか、初めて聞いた+何故にお金が入っている?」

母さんが引出しから出した通帳……えと、残金は……いち、じゅ

う、ひゃく、せん、まん、……あれ？１２桁？
……え？あれ？可笑しいな？目を擦っても幻が消えないよ？

「荒榎、それは本当よ、政府からお金が入ってくるわ、関税を抜いたら凄い数よ？」
「母さん……なんで？」
「何でって……荒榎が言ったじゃない、ＩＳの作成に使った法則関係全部の特許が入ってきてるのよ？」
「……あ」

言ったわ……思いっきり言ったわ……特許は自分のだって言ったわ……特許だけでこんなに溜まるの？
あ、ちゃんとスイスの銀行……え？スイス……あそこってあれでしょ？番号が分からないとその番号が存在しているかも分からないでしょ？
どんだけ厳重なんだよ……

「ああ、あとね、ノーベル賞とかも貰えるわよ、今度取りに行きましょう」
「……小学二年生がノーベル賞……ハハハ」
「荒榎、大丈夫？」
「ウン、大丈夫ダヨ、アハハ」
「荒榎！？荒榎！？」
「……はぁ、マジかよ」

まずはノーベル賞を狙ってた人に謝るか、どうもすいませんでした！

「……ってか、一生掛かっても使いきれないぞ？」
「大丈夫よ、女の子にプレゼントでも買ってあげれば良いのよ……
…たとえばシャルロットちゃんとか」

「え、ああ、でも、……プレゼントとかっているか？」
「いる！」
「……あ、はい、うん、そっか、分かったわ」

凄い勢い＋早さだったよ……
シャルルよ現実に戻って来い、プレゼント……とか呟かなくて言いから
顔が恋する少女だから……間違ってはいないけど……
ってか凄い、何と言うか、色っぽい？いや違うな……ああ、癒されるだ
見てたら力が抜けるほどに癒されるわ、これもある意味での才能か
……俺を見たって癒されないからな
さて……何を買えば良いんだ？……

「シャルルは何が欲しい？」
「何でも良いよ、荒榎が選んだものなら」
「……そっか」

コレは……うん、あれだ、重症ってやつだな……ヤンデレ化は無いよね？
いかん、心配だ……ヤンデレのシャルルに追いかけられる……怖いな！

「それじゃ、荒榎、明日はシャルロットちゃんと買い物に行ってきなさい」
「それじゃ、そうしますか」
「うん！」
「じゃあ、今日は早く寝ないとね、荒榎、シャルロットちゃんのお布団を引いておくから、お風呂に入ってきてくれる？」
「母さん、流石にそれは早いから、まずは食事、んでもって風呂だ

から、ってか、そろそろ帰る方が良いんじゃないかと思うんだけど言い方からして泊めるんですよね～」
「ええ、シャルロットちゃんが泊まりたいって言うから、それじゃあ母さんはご飯作るから、シャルロットちゃんと遊んでなさいな」
「そうですね、それじゃ部屋にでも行こうか」
「うん！」

……長いよ、何時まで嬉しいんだよ……未だにプレゼントって口走ってるもん
シャルルは怖かった……どちらかと言うと微笑ましい状況なんだろうな……

「さて、何をしたい？」
「荒榎が好きな事」
「……他には？」
「荒榎がしたい事」
「他」
「荒榎が面白いと思うこと」
「…他に……いや、いいや」

全部俺関係じゃん！ここまで来ると怖いよ！？何コレ！？一体何なの！？
ヤンデレなの！？それとも女性の妖艶さでも表そうとしてるの！？
……いや、まさかね

「……シャルル？その答えはひょっとしてヘレンさんに言えって言われたとかじゃないよね？」
「な、なんの事かな！？」
「……うん、マジかよ」
「……母さんがこう言えって、そうしたら……（ボソボソ」

「ん？　何て言った？聞こえない」
「な、何でも無いよ！」
「そ、そうですか……」

うん、聞こえなかった、荒榎が私に……なんて聞こえなかった！聞こえたとしてもあれだ、幻聴だ！

「それじゃ……俺の好きな事って何だ？」
「さぁ？」

俺が知らないのにシャルルが知ってたら怖いけど、何故か聞いてしまうよね！
シャルルよ、そんな風に首を傾げないでくれ、萌えるから……うん、俺もそろそろ危ないな

「……ＩＳしかないな、しょうがないからチェスでもやるか」
「うん、そうだね」

えと、チェスばんはあっちだったな・・・・・あれ？足元にあったよ？おかしいな、昨日片付けたはずなのに……まぁ良いか

「それじゃあ、シャルルから」
「うん……はい」
「…はい」
「……はい」
「…はい」
「……はい、そうだ荒榎、聞きたいことがあるんだけど」
「…はい、ん？何？」
「……えっと……はい、何で急に私の呼び方変えたの？」
「…はい…って、え？」

「だって、今まではシャルロット、って言ってたのに、公園にからはシャルルって呼んでるよ？」
「……」
「荒榎、手だ止まってるよ」
「え、ああ、うん、はい」

……うん、油断した、と言うか間違えた、正確には先取りした忘れてたぜ、頭の中じゃ何時でもシャルルだからな・・・・・うん、忘れてた

「……はい、それでね、思ったんだけど、シャルルって男見たいな名前だよね？」
「…はい、そうか？」
「うん、そうだよ……はい」
「…はい、そっか、じゃあ止めるわ」
「ありがとう……」

シャルルよ、手が止まってるぞ
話をしていて手が止まるなんて、まだラピッド・スイッチを名乗れないぞ？

「その…それで、ね……他の呼び方なら良いかな～、なんて」
「他？……シャルルじゃなくて？」
「うん、たとえば……シャルとか／／／／／」

そう言いながら駒を進めるシャルル
……え　？

「い、いや、それは流石に」
「何でシャルルって呼ぶよりは良いと思うんだけど／／／／／」

だってさ、それって一夏の呼び方じゃん
……だめだ、シャルを納得させる方法が分からない
いっその事他の呼び方を付ければ……あれ？それで良いんじゃね？

「シャルロット、じゃあ他の呼び方をつけよう」
「う、うん？別にシャルでも良いと思うんだけど……荒榎が決めてくれるの？
「え、いいあ、嫌ならシャルルが決めても「荒榎が決めて！」……
あ、はい」

さっきから顔が赤いですよ？ってか今の言葉で思いっきり赤くなったけど
そんなに恥ずかしいなら言わなければ良いのに……
シャル以外の呼び方、ね……ダメだ、全然思いつかない……
考えてから言うんだったな……シャルロット、シャルロット、シャル……はダメだから……

「シャロ、とか？」
「シャロ……」
「あ、いや、別に嫌なら変えるけど」
「ううん、気に入ったよ……シャロ」
「あ、そう、なら、良いよね、今度からｂはそう呼ぶわ」
「うん！……あ、じゃあ私も荒榎の呼び方を変えても良いかな？」
「別に良いけど……何にする気？」
「……」
「……思いつかないんだ」
「……うん」
「じゃあ良いじゃん、普通に呼んでよ」
「でも……それだと……」

母さんが言ってた事と違う……
うん、シャルル呟くならもう少し小さくお願いします、普通に聞こえるから
ひょっとしてそれが狙い……な訳無いか、思った事が口に出たんだろうな……
まぁ、ヘレンさんが言ったって事は、あれだな、特別な呼び方は、なんとかかんとか、だろうな
まぁ、それなら……良くは無いけど……

「シャロ、そんなに変えたいの？」
「……うん」
「そっか、それならさ、今度決めたら？考えついたときに変えようよ、俺はそれまで待つから」
「……うん、分かった」
「よし、それじゃあ、チェスの続きだね」

といっても、話ながらも続けてたからね、止まっては無いんだよ……あれ？

「はい、チェックメイトだよ」
「……何時の間に」
「荒榎が考えてるときに」

……ダメだな、続きが分からない、どうしようか……

「荒榎、どうするの？」
「……参りました」
「うん、初めての私の勝ちだね」
「負けた……まぁ言いや、おめでとうだな、明日の買い物はちょっ

と良いものに変更だな」
「やった！何にしようかな……」
「あら、シャルロットちゃんが勝ったの？」
「うん、負けました……って、母さん！？何時の間に？」
「参りました、辺りね」
「気が付かなかった……」

気配でも消せるんですか？それともあれか？瞬間移動か？扉が開いた音も聞こえなかったぞ？

「もうご飯よ、早くしないと冷めるわよ？」
「早いな、シャロ行こうか」
「うん！」
「あら？呼び方変えたの？」
「色々とあったんですよ」
「そう……ふふっ」

「で、ご飯を食べてのこの状況ですよ、はい」

目の前には俺の布団……とシャロの布団
何で俺の部屋にあるの？

「母さん、そこの説明を求めます」
「あら、荒榎は女の子に一人で寝ろって言うの？」
「荒榎……だめ？」

……
母さんと一緒でも良いじゃないかとかも考えたりしたけど……

「仕方ないな」
「やった！」
「ふふっ」

ん、そんな顔をされては断れませんよ
……今日は寝られるかな？
ってか、その前に風呂があるし……一緒じゃないですよね？

「そろそろお風呂に入りなさい」
「分かった、それじゃあ俺から」
「え？一緒じゃないの？」
「え？そうなの？」

シャロよ何故にそんな当然の事を否定されたみたいな顔をするんだ？

「一緒は……イヤ？」
「うっ……さ、流石にそれは不味いんじゃないかなって思ったり」

「イヤ……なの？」
「うぅ……男女１８にして寝食を共にせずと言う言葉があってだね」
「一緒に寝るのもイヤなの？」
「い、イヤでは無いけど……」
「ダメ？」

うぅ、そんな泣きそうな顔をされると……イヤとは言えませんがな

「……仕方ないな」
「やった！」
「ふふっ、良かったわねシャルロットちゃん」

すぐに喜ぶシャロ……演技じゃないよね？違うよね？すっごく怖いよ？違うんだよね？

「……すぐに終わるさ」

なんて考えてても……良いよね？

色々と溜まりましたね・・・・・・お金とか好意とか不安とか（後書き）

ん～、シャルは言いにくいと思うんだ、だからのシャロ
自分はこっちの方が・・・好きだぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
親公認だとこうなるんじゃないかな・・・・・・シャロが一歩リード
誰からとは言いません、はい
この進み方だと・・・・・・暫くは原作に入れないな・・・・・・
あと一人か二人はやらないと・・・・・・・
うん、２０までには原作に・・・・・・・・出来ると良いな

さてアンケートでもとってみようか、新しいキャラを出すのならどんなキャラが良いかな？

返事は期待しないよ！

・・・・・うん、これはあれだ、攻略目前だね・・・・・・・ええ～（前書き）

・・・・・・・・・・・・・うん、やりすぎた

・・・・うん、これはあれだ、攻略目前だね・・・・・・ええ～

「荒榎、起きて」
「んぅ……母さん、あと五分だけ……」

……あれ？……母さんの声って……こんなに高かったっけ？

「荒榎、荒榎、ご飯だよ」
「……シャロ？……夢かぁ……」
「夢じゃないよ、起きて荒榎」

何言ってるんだよ、シャロがここに居る訳が無いじゃないか……昨日ちゃんと家に帰って……帰って……

「……シャロ？」
「そうだよ、起きて荒榎、香織さんがご飯だって」
「……ご飯か……行くか……」

そう言って立ち上がる、立ち上がる、立ち上が……

「荒榎、寝ちゃダメだよ、起きて、ご飯が出来てるんだよ？」

むぅ、今日のシャロは厳しいな……布団が温い

「……もうちょっと……」
「……最後の手、使っちゃうよ？」
「…ぬははー、俺を起こせると言うのならやってみろぅー……」
「……行くよ！」

頑張ってね～、俺は寝る……あれ？頬っぺたに何かが当たってる？
柔らかくて、暖かくて、それでいて少し湿ってて……って！

「シャロ！？」
「あ、起きたね、おはよう荒榎」
「え、ああ、うん、おはよう……じゃなくて！何やってるの！？」
「え？頬っぺたにチューしたの、お母さんが起こすときにやってくれるんだ」

……うん、今はやるべき時じゃなかったね……まぁ、目は覚めたけど

「ほら、ご飯だよ」
「んにゃ、それじゃ着替えるか」
「うん」
「……シャロさんや？」
「うん？」
「着替えたいんだけど」
「うん、私も着替えるよ」
「あ、そうなの、じゃあ外に居るから、着替えたら言ってね」
「え？荒榎も着替えるでしょ？」
「……」

うん、落ち着け、落ち着くんだ……ヘレンさぁぁぁぁぁぁん！！！！

アンタどういう教育をしたんだよ！

「シャロ、よく聞きなさい、小学二年生は男女が別で着替えるんだよ？」

「え・うん、スクールだとそうだね」
「……そこまで分かってる上での発言？」
「うん、荒榎なら良いよ／／／／／／」
「よし、シャロが先に着替えよう、俺は後ね」

反論許さない！と言うか反論する前に出たから無理か
うん、聞こえない、後ろの、母さんが出来るって言ったのに……、
なんて言葉は聞こえない
ヘレンさん……自重という言葉を知ろうか、あんたはやり過ぎた

「荒榎、着替えたよ？」
「あ、うん、じゃあ次は俺……まずは部屋から出ようか」
「……うん」

何故にそこまで寂しそうな顔をするし！お兄さんビックリダヨ！

「……よし、終わり」

早いでしょ、着替えなんて1分も掛からないよ……目が覚めてたらね
普段は……２０分位かな、凄い差だ

「シャロ、飯に行こうか」
「うん……荒榎の着替えって早いんだね」

そりゃあね、男はすぐに終わるんだよ

「そんなものさ」
「……全然見られなかった」

……そろそろ警察に行くべきなのか？
いや、シャロは悪くない、教えたヘレンさんがいけないんだ……あれ？
着替えを覗くのを教えて何の意味があるんだ？……まさか…いや、シャロは自らそんな事はしない……はず！

「あら、今日は早いのね」
「おはよう母さん、色々と会ったんだよ」
「えっと……おはようございます？」
「ええ、おはよう…それにしても日本語上手ね」

そうだよな、良く考えたらアニメのときはＩＳ学園が日本にあるからだろうけど……
今は日本に関わった事は無いはずなのに……な～ぜ～……いや、古いな

「お母さんが、今度行くからって」
「そうなの？ヘレンも凄い事言うわね、日本に行くからって日本語を覚えさせるなんて」
「凄いな・・・・・どのくらい練習したの？」
「えっと……1ヶ月位かな」
「……」
「あら、頭良いのね～」
「そ、そんな／／／」

いや、そんなレベルじゃないだろう……
1ヶ月で日本語マスターとか……流石ラピッド・スイッチと言われるだけあるな
あれ？シャロがラピッド・スイッチ？シャロが使う技がラピッド・スイッチ？……どっちだっけ？

「さて、今日は買い物だったわね、気をつけてね？」
「あ、はい」
「一体何を買えば良いんだろうか……」
「そうねぇ……宝石かしら？」
「宝石！？」
「それは幾らなんでも……」
「うん、そうだよね」
「安過ぎるだろう」
「えぇ！？」
「そうよね～、何が良いのかしら」
「え、えぇ！？」
「ん？どうした？シャロ」
「あ、その、宝石は……高いと思うよ？」
「……」

あれ？俺って宝石を安いって言った？おかしいな・・・・・・うん、ずれてるな
コレは不味いだろう、ってかおれってブルジョワ？イヤッホーウ…
…喜べないな

「ん～、ネックレスとかかしら？」
「……その辺なら良いのかな？」
「う、うん、お願いしても良いかな？」
「よし、じゃあネックレスに決定、何処か良い所を探さないとな」
「ネックレスのお店は知らないわね～」
「母さんはネックレスとかつけないもんね」
「……ネックレス」

……まただ、またシャロが……

それにしても……ネットでも使うか？……あ

「ちょっと待ってて、探し物があるから」

「……ネックレス」

聞いてないし……まぁ良いか

確か……倉庫の中に……

「……あった、よし」

探し出したのは黒い球体の機械、コードが伸びており、床下を通っている

さて、コレが何か予想つく人はいるだろうか？

「さて……ＰＧ１０６起動」

『……音声認識完了、お久しぶりです荒榎様』

「ああ、と言っても、そんなに経ってないけどな」

目の前にパネルが現われる……うん、コレで分かっただろう

前回に思い出した情報回収機だよ……まだ名前つけてないけど

ＰＧ１０６？製造ナンバーだよ……たしかね

何回か作りなおしたりしたからね、幾つかはあまり覚えてないだよ

コレはある意味自信作、ＩＳみたいに何も無い空間に映し出す様に作ったらね！……失敗したけど

いやね、何も無い空間は無理だったんだよ、ＩＳも良く考えたら、頭につけている部品で映しているわけで……

壁に映る様になっちゃったお！……コレも古いのか？いや、まだ使えるだろう……もう使わないけど

『接続完了、そのようですね、約四日と言った所ですか』

「ああ、大体そんな感じだ、でだ、今日は集めた情報を見たい」
『かしこまりました、どのような情報を？』
「えっとだな、この近く……半径1キロ辺りでネックレスを扱っている見せを知りたい」
『少々お待ちください……はい、その検索だと３４件が一致しました、その内人気があるのが１５件、人気がないのが１９件、その中の隠れた名店が3件になります』
「……隠れた名店が何気に多いな……」
『どうしましょうか？』
「そうだな……一度言ってくるわ」
『それでしたら、どうぞ私の子機をお持ちください』
「……子機なんて作ったか？」
『はい、確か、調子に乗ってやっちゃったぜ、と言っておりましたが……』
「……あー、うん、そんな記憶もあったような……何処いったっけ」
『荒榎様の右斜め４５度９歩下がって左五度を向いた所です』
「……あ、あった……って、何で分かったんだ？」
『荒榎様がそこに置くと言っておりました』
「……あ、そうだっけ」
『はい、それを左目に付け、網膜での確認となります』
「うっわ～、面倒なものを作ったな俺」
『では、私はここから誘導させていただきます』
「あ、うん、よろしく」
『はい、どうぞお楽しみになってください』
「あいよ～」

それにしても、俺は一体何をやっていたんだろうか……
これじゃあ、クラスからもハブられるわな

「シャロ～、準備は良いか？」
「う、うん！行こう！」
「はいはい、それじゃあ母さん、行ってきます」
「はい、行ってらっしゃい

「さて、まずはこっちだな」
『では、この道を８００ｍです』

結構遠いんだな……まぁ良いか

「荒榎？その眼鏡何？」
「ん？コレ？ちょっとしたアイテム」

道を知るためのアイテムさ、コレがあれば、カーナビなんて目じゃないぜ！売ったら一気にに億万長者！
誰にも売らないけどね！第一、金は多いし

「さて、行こうか」
「うん……あの、その、荒榎？」
「ん？何？」

「手、繋いでも良い？」

……カワエエわ～

何だよこの可愛さは！もう犯罪だよ！……ってか、俺が危ないよ！

「う、うん、良いよ、ほら」

そう言って手を差し出す、あえて自分からは繋がない

それはフラグだから！……今更遅いかな？

「さて、それじゃあ、行こうか」

「うん／／／／／／／／」

恥ずかしいのならしなければ良いのに……ああ、乙女だからですね、分かりません

「さて、一件目に着いた訳なんだけど……」
「……大きいね」
『ここが一件目ラストラビリンスです』
どんな名前だよ、最後の迷宮て……
ってか、こんだけ大きくての隠れた名店？あれか？売ってるものに良いのが偶に入るパターンですか？
「……まぁとにかく、入ろうか」
「う、うん」
シャロや、怖いのは分かるけどそんなにくっ付かないでくれ、歩き難いの前に恥ずかしい
「……いらっしゃい」
「ど、どうも」
渋い声の店員だな……
他に店員は見当たらない……はっ？！まさか店長！？格好良いな！
「……凄い」

つい零れてしまった様にシャロが呟く
うん、俺も思った、ここの品は質が良いんだ。、だから高いんだ、
それであまり売れないんだ
でも……惜しい店だな、良いものが揃ってる……

「……あ」
「ん？何か良いものがあったか？」
「う、うん……これ」
「どれどれ……って」

ペアですか……小学生に何を求めるし

「値段は？」
「……１７８５０円……他のにする」
「……そっか」

流石にね、その値段は……あれ？余裕じゃね？
でもまぁ、シャロが変えるって言ったんだから、シャロが決めたもの
のにしようか
ってかシャロや、腕を掴んだまま歩くのか？店長が睨んでるぞ？流
石に小学生は無理かな……

「……」
「……」

ついつい目がさっき手にしたやつに向かうシャル
そして、そのシャルを見て微笑む俺……凄い光景だな
ってか……諦められないんだな……
……うん、しょうがないな

「シャロ、あれ買おうか？」
「え、いいよ、高いもん」
「……そっか、俺はあれが欲しいんだけど、諦めるしかないか」
「……」

この責め方はある意味卑怯だよね……
まぁ、躊躇い無く使うけどね！

「シャロがいらないって言うのなら買うのは止めよっかな～、シャロと一緒に付けたかったのにな～」
「……一緒……」

……結構簡単に釣れたな・・・・・あと幾つか考えてたのに……
え？知能の無駄使い？いいえ、違いますよ、これは思考能力の無駄使いです
あれ？余計に酷くなったぞ？……まぁ、シャロのためだから良いや

「シャロがいらないって言うんだもんな～、流石にペアを一人で着けるのはな～」
「……うぅ、じゃ、じゃあお願いしても良い？」
「もちろん……ってか、ここまで言って買わなかったら流石に人としてどうよ」

最低だろうな・・・・・
さて、店員に……うん、店長しか居ないんだよね……凄い睨まれてるし

「……あれ、ください」
「……」

……気まずいね……

「……」

「……」

「……」

「……１７８５０」

「あ、はい……」

「あ、荒榎……」

「……シャロ、ちょっと外で待っててくれる？」

「う、うん……」

流石にね、この顔で黙られたら怖いですよね……べ、別に俺は何とも無いけどね！本当だからね！

「……まいど」

「あ、どうも……」

やっと終わった……早く出よう！視線が怖い！

シャロ！……って、アイスクリーム屋に視線が釘付けですね……俺の心配は？

「……坊ちゃん」

「……俺ですか？」

何か阻喪をしたでせうか……うん、結構したね！シャロが最初辺りではしゃいでたね！

「コレを持ってきな」

「……へ？」

「おまけだよ」

そう言って差し出すのは……袋？いや、何かが入ってるな……

「……これは？」

「開けて見れば分かる」

そう言いながら煙草を出す店長、って、ここって禁煙じゃないの！？ま、まぁ、俺にはそんな事を言う度胸は無いので・……あけちゃえ！

「……サファイア？」

「……同じ大きさが二つ入ってる、ネックレスに嵌めな」

……この人、見かけよりずっと良い人だったんだな……

「ありがとうございます」

「いや、また今度嬢ちゃんでも連れて結婚指輪でも買いに来てくれれば良いさ」

「いや、結婚指輪て……」

「……坊ちゃん、気づいて無いのかい？あのネックレス」

「……ネックレスがどうかしたんですか？」

ひょっとして曰く着き！？だから結婚するまで居きられたら良いね、みたいな訳！？

いやいやいや、落ち着け、そんな物が売っている訳が……ここって隠れた店だっけ？

「あのネックレスの意味、読んでないのかい？」

「……ネックレスの意味、ですか？」

「……知らなかったのか……あのお嬢ちゃんも大変だな」
「いや、何の事ですか？」
「……坊ちゃん、ドイツ語は分かるかい？」
「……少しなら」

ラウラと話してみたかったからね、少しだけ覚えたよ！
本場のドイツ人とドイツ語で喋れたら格好良いよね！

「……Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　ｓｉｅ　ｅｗｉｇ、そう彫られているのさ」
「Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　ｓｉｅ　ｅｗｉｇですか……」

うん、ごめん、全然分からない……だってさ！まずは日常的な会話から！と思ってＤｅｒ　Ｓｃｈｅｉｎ　Ｔｕｒｅｇｔから覚えたんだよ！
え？意味？見かけは当てにならないだ！……うん、日常で使わないね、でもまぁ、うん、一度は言ってみたいせりふでしょ？

「……その顔からして分からない様だね」
「……すいません」
「いや、普通はその年じゃ分からないよ」

むぅ、何という正論、いや責められてるわけじゃないんだけどさでもなぁ、折角転生したんだから、出来ない事は減らしたいよな、まだ一度もソバット使った事ないし……

「永遠に貴方を愛します、そう彫られているんだよ」
「……なんだってー」
「……あまり驚いて無い様だね

うん、驚きも行き過ぎると何とも思わなくなるんですよ、はい

「……うん、流石に分かってないと思いますよ？」
「分からんよ、あの子は買うときに顔を赤らめていたからね」
「……なにそれ怖い」

何であの年でドイツ語が分かるの！？……あ、書いてあるわ
……うん！大丈夫！シャロは知らずに買ったんだ！……
そろそろ危ないよね

「さて、お嬢ちゃんが待ってるよ？急いで行ってあげなさい」
「……」

言葉は要らない、ただ、思いを込めて頭を下げる
うん、この人は最高の店長だ！……店長？

「あの、ひょっとしてですけど」
「なんだね？」
「えと……店長……ですか？」
「いや、私は副店長だよ、店長は確か……シンガポールだったかな？外国に店を出すっていって飛び出て行ったよ」

……

「大変ですね」
「分かってくれるかい」
「はい、俺の父さんもシンガポールに出張してるので……まだ一度も会ってませんけど」
「……君も大変だね、アメでもいるかい？」
「あ、貰います」

「そうかい、じゃあお嬢ちゃんの分も……おかしいな、ここにあった筈なのに……」
「ああ、それなら良いですよ」
「いや、すぐに見つけ「荒榎、まだ？」……そうだね、悪いけど……また今度来たときにでも渡すよ」
「次来るのが何時になるかも分かりませんけどね」

そんな軽口も、今なら言える、この人は優しいんだ、それでいて多分、子供が大好きなんだろうな
Ｄｅｒ　Ｓｃｈｅｉｎ　Ｔｕｒｅｇｔ、うん、この諺は本当だな

「今行くよシャロ、それじゃあ、ありがとうございました」
「ああ、またいらっしゃい、どうせなら大勢連れて遊びにでも来ると良い」
「流石にそれは……では」

「荒榎、遅いよ！」
「いやはや、店の人が良い人で」
「……あの怖い人、良い人だったの？」
「良い人だった、ほら、おまけもくれたし」
「おまけ……宝石？」
「サファイアだってさ、ちょっとネックレス貸して」
「あ、はい」

確かこの穴に、サファイアが……っと、嵌まったな

「……綺麗」

「だな、これは凄い」

どんな造りかは知らないが、嵌めたサファイアが光る

これは太陽の光が反射してるのか？……いや、野暮な真似は止そう

「それじゃあ……アイスクリーム食べたいか？」

「食べたい！」

「それじゃ、……長い列だな」

「なんかね、ニホンイチってお店らしいよ、書いてあった」

「いいあ、それて店名じゃなくて肩書きじゃ」

「ほら！行こうよ！」

「あーはいはい、ちゃんと買いますよ……ただ」

「ただ？」

「……お金を下ろさせてください」

残金が５００円なんだ……2個はキツイです

「もう、しょうがないね」

「……」

あれ？俺がいけないの？いけないの？ネックレスが意外に高くてお金が無くなった俺が悪いの？

「えっと……あっちだね、行こう荒榎！」

「ちょ！？服を引っ張るな！伸びるから！」

そう良いながらも楽しい荒榎であった……なんて落ちは無いからね？

ＰＳ，本当に店名がニホンイチでした、何でも名乗って良いって言われて変えたらしい

元は３１て書いてサンジュウイチらしいよ……前世のあの店ですね、わかります

・・・・うん、これはあれだ、攻略目前だね・・・・・・ええ～（後書き）

いやっほーう、・・・・・・うん、やりすぎだな！
シャロがまさかの頬チューだと！？・・・・・・うん、俺が書いたんでしたね
ネックレスでまさかの１７８５０ｗｗｗ・・・・・・・・・しないよね？
そんなものは一体何で作られてるんだよ！・・・・・・・・え？今回？オリハル・・・・・・ごめんなさい嘘です普通に金・・・・・・・すいません殴らないで本当は純銀です・・・え？何でまた殴るの？ちょ、いたっ、え？小学生が純銀を買うな？・・・・・・・・・そんなことは知らない！・・・あ、ごめんなさい今度からは普通にするからオリハルコンって書いてあるハンマーを下ろして・・・・・・・・・ってオリハルコン！？なんで！？何処にあった！？今一瞬で出てきたよね！？そして何処でオリハルコンを手に入れた！？・・・・・・え？あれ？何で俺の頭の上に落とすの？え？落とすじゃなくて下ろすだよ？え？ちょ？ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？

シャロよさよなら・・・・・・え？千冬さん？ええあ？ちょ？

シャルルと会ってから五日目
今日はシャルルが帰る日、というか……現在進行形？

「……じゃあね、荒榎〝……」
「うん、そんなに泣かれるとは思ってなかったけど……また遊ぼうね」
「う〝ん〝」
「ほらほら、顔が凄い事になってる……ほらこっち向いて」
「ズズズッ……また、遊ぼうね？」
「それはもう言ったって、ほら、このチェス盤あげるから」

まったく、ここん所二日間で凄い懐かれたよ……いや、元からだったんだけど
今となっては、普通に抱き着いてくるし、風呂も入ってくるし……あれ？やりすぎだよね？みたいな事も普通にやってくるし
まぁ、全部がヘレンさんの入れ知恵なんだろうけど、結局残りの日も泊まってったし
今となっては俺がシャルルの面倒を見ている状況になってますよ、はい

「……ねぇヘレン、ひょっとしてやりすぎちゃったかしら？」
「ええ、私も思ってたわ……まさかここまでとは……色々と入れ知恵したのが行けなかったかしら」
「荒榎〝……うぅぅ」
「拭いたばっかりなのに……ほら、もう拭かないからな、ちゃんと綺麗にしろよ？」

結構大人びてると思ったんだけど、やっぱり子供だよね、感情の変化は耐えられないか

「よし、じゃああれだ、2ヶ月後、俺がそっちに行くから」
「……本当？」
「ああ、行くから、イギリスだっけ？」
「……クスッ…フランスだよ」
「あ、そっか、それじゃフランスに行くから」
「……約束だよ？」
「分かってるって、そんな一生の別れになる訳じゃないんだから」

IS学園でどうせ会うんだから

「……本当の本当？」
「何回目だよ……じゃあ指きりしよう」
「……指切るの？痛いと思うよ？」
「……あ、そか、シャロは知らないのか……って知ってるものだと思ってた」
「ん？どうしたの？指切るの？はさみは持ってないよ？私の指はどうやって切るの？」
「……いや、切らないから」

小学二年生……だよね？意思が凄いんだけど……
指切るのに躊躇いが無いって……ヤンデレ化しないよね？

「えっと、小指と小指をこうやって、結ぶ、あとは歌？みたいなのを歌うんだけど……まぁ俺だけで良いか」
「……／／／／／／／／」
「ねぇ香織？荒榎君って凄いわね～」

「ええ、私も思ったところよ、ちょっと凄過ぎるほどね……あの人ににに似てるわ」
「ああ、東間くんね……確かに似てるわ……」

凄いって……いや、普通でしょ？
ってか、あの人って父さん!?そうなの!?名前も初めて聞いたよ!?……・ああ、そう言えばこっちから聞いた事無かったわ

「って、その前にこっちだった」
「ここからはどうするの？」
「確か……指きりげんまん、ウソついたら……クラスター爆弾のーます、だったと思う……あれ？合ってるっけ？まぁ良いか」
「……怖いね……」
「いや、おまじないみたいなものだから本当にはやらないよ？」
「あ、そうなんだ」

いや、本当に飲ませたら不味いでしょ……でも可愛いから良いか

「じゃあね香織」
「ええ、また会いましょ」
「ええ、何時か…シャルロット、行くわよ」
「あ、うん……じゃあね、荒榎……っ」
「うん、じゃあね、って、そんなに泣きそうな顔をするなよ……」
「うん……これ、大切にするね」

そう言って見せてくるのは昨日に買ったネックレス、中心にはサファイアが煌びやかに光っている
うん、やっぱり小学生が持っていて良いものじゃないけど……喜んでくれてるから良いか

「適当で良いよ、また今度会った時にまた何か買えば……」
「するの！大切に！……じゃあね！」

そう言って走ってヘレンさんに追いつくシャロ
俺ってひょっとしてだけど金銭感覚おかしいのか？きっとそうだろうな……
……静かになるんだけど……何か物足りなく感じそうだよな……
今でももうなってるし……

「……され、帰ってお昼ご飯でも食べましょ」
「そうだね、ってか、部屋にシャロの服が置いてあるような気が……」
「あら、そう言えばそうね……良いじゃない、今度会ったときに渡しましょ」
「いや、持って行くの？ってか、母さんも行く気？」
「ええ、だって小学生一人じゃ不安じゃない」
「……仰る通りで」
「特に、約束を忘れる奴とかはな」
「仰る通り……って、千冬さん？どうしたんですか？」
「そうかそうか、分からないか……分からないのか？」
「え、いや、その……」

なんだろう、今日の千冬さん凄く怖い……何時も異常に怖い……ってか怒ってる？

「千冬さん？何でそんなに怒ってるんですか？」
「分からないか？そうかそうか……確かあれはＡＲＭとＡＣＳと言ったかな？」

はてそれがどうし……あれ？俺って説明したっけ？

あはは……うん、完全に俺が悪いね

「さて、すいませんが荒榎を借りても良いでしょうか？」
「ええ、この子が悪いみたいだし」
「ありがとうございます、では行くぞ」

うん、俺には何も聞かないんだな、そして襟を引っ張りなさるな

「ドナドナドーナード～ナ、子牛を乗せて」
「……お前は一体何歳なんだ」

失敬な、ちゃんと小学二年生ですよ……体だけだけど！
でもまぁ、俺の考えがあっていたら、そろそろ小学3年生位になってるんじゃないかな！そんな兆しは見当たらないけど！
おかしいな、考えが間違ってたのか？

「コレが世に言う、ナ～ゼ～、だな」
「何を言ってるんだ、着いたぞ」
「ありゃりゃ？何時の間に……ってか、ここ何処？」
「篠ノ之道場だ」
「……篠ノ乃神社って書いてありますけど」
「……篠ノ乃神社だ」
「さいで……」

覚えてなかったんだね……千冬さんが照れてるｗｗｗ
……おおぅ、睨まれちゃった……でも照れてるｗｗｗ
あれ？俺ってこんな性格だっけ？最近多いな……しかも全部が違う
……そう、まるで性格が何個もあるような
……なるほど、そっか……うん、人間じゃないね
てか、この答えが間違ってないとは思わないけどさ……なんだろう、

納得できる
ひょっとしてコレも転生サービスなのか？……嫌過ぎるな

「……」
「……どうした？急に静かになって」
「いえ、何でもありません」
「……そうか」

そう言って神社に入っていく千冬さん

「置いて行くなよ……」

歩はゆっくりだが、俺も神社に入っていく

「……よし、コレで良いな」
「……何で竹刀なんか持ち出してるんですか？」
「……」
「……っ！？」

言葉は返ってこなかった、ただ、千冬さんの行動は一つ

「……何で急に切りかかってくるんですかね」
「当たる前に避け、その上で腕を蹴ってきたお前が何を言う」
「……理由は？」
「なに、動けば考え事も吹き飛ぶかと思ってな」
「……」
「何にショックを受けたかは知らないが、お前は誰だ？」
「……」
「お前は真中荒榎、ただそれだけだ」
「……本当にそうですかね？」

「……」
「本当の真中荒榎は意識が表れる前に死んでいて、俺は他の人、って可能性もありますよ？」
「……それでも、お前は真中荒榎だ」
「っ！」
「私が共に戦い、束が共にＩＳを作り、一夏が共の学校に行っている」
「……」
「私達が判断しているのは外見ではない、精神だ、例えお前が真中荒榎じゃなくても、それならば私達の知っていた真中荒榎がお前なだけだ」
「……格好良い事言ってくれますね」
「ふっ、そうでもしないとお前が崩壊でもしそうな雰囲気だったからな」
「……そんなにですか」

自分じゃ分からなかったよ……
でもまぁ、折角千冬さんが教えてくれたんだ、ゲームみたいにって訳じゃないけど……俺は俺だよな
うん、俺は俺、他の誰でもない、俺、シャロと一緒に遊んだり、束さんとＩＳ開発したり、千冬さんとＩＳでミサイル撃破したり、全部俺だよね

「……よし！マイナス思考は止めだ！もっとポジティブに考えないと！」
「そうだな……それじゃあ続きと行くか」
「……ゑ？」
「行くぞ！」
「ちょ！？」

マジで切りかかってきたよ！？……でもあれだ

「体を動かしゃ、考えも良くなりますかね！」

「ふっ！きっと！そうだろう、な！ええい、ちょこまかと逃げるな！」

「分かりましたよ！それじゃあ！」

千冬さんが上に振り上げた竹刀に足を振り上げ、下ろしを止める！

「なっ！」

「アップテンポで行きますか！」

そのまま軸足で、踵落とし！

「っ！……危なかったな」

「危ないて……竹刀離して後ろに下がっておいて何を言いますか……」

「それは一体何という技だ？」

「……さぁ？ソバットと何かが混ざってこうなりました」

「そうか、まぁ良い……はぁっ！」

「ふっ！はっ！せいっ！」

千冬さんの三連剣技を足で逸らし、後退

うわっ、何この技、一閃目は弾く様に上に、二閃目は真っ直ぐに振り下ろす、三閃目は追撃に回転して横薙ぎ

うん、この人強過ぎだよ……いや、ある意味チートの俺が言うのもどうか思うけど

「ふぅ、この技は久しぶりに使ったな」

「久しぶりでそれですか……」

「まぁな、元々は一閃二断だったのを少し変えて三連に変えてみたんだ、その名も一閃二断三追」

改造ですと!?何時の間に?コレはひょっとしての変更フラグですか?

ってか……

「……長いと思います」

「そうか?まぁ、少し長い気もするが……」

「せめて、鳳凰追とか……いや、コレは痛いな……三ッ星とか」

「……それは良いな、よし、三ッ星に決定だ」

「……うん、良いんじゃないかな」

うん、考えておいてなんだけどさ……痛い気もするいや、剣道ならコレくらい……あるよね?

「では、三ッ星!」

「ってまた!?」

これって結構避けるの辛いんですよ!

横に蹴る、逸らす、足の裏で受け止める!

「普通は避けるのだが……その前に足が折れるぞ?」

「何分、頑丈な様です、ね!」

軸足を弾ませ、千冬さんの力に抵抗せずに後ろに跳ぶ、って!?

「……どれだけ力強いんですか、五メートルは離れましたよ?」

「コレくらいは誰でも出来る、やらないだけでな」

いや、普通の人は出来ませんって
俺だったら一メートルも跳びませんよ？

「それにしても、さっきから攻撃してないぞ？」
「いや、攻撃する暇がないだけじゃ……もう良いや……行きます、よ！」

一気に近づいて、蹴り上げる！

「甘いぞ！」

千冬が横から竹刀で打ち払い振り上げる
ならばと、荒榎が竹刀の下を通り千冬に近づき横蹴り
それを千冬は下がって避け、竹刀を戻す

「「……っ」」

お互いに言葉は要らない、合わせた様にぶつかり合う
荒榎は回し蹴り、千冬は上からの振り下ろし
両者が一番力が入る攻撃、コレで決まる、そう思った時

「姉ちゃん、腹減った」
「「……」」

両者の攻撃は目前約五センチほどで止まっている

「……止めましょうか」
「そうだな・・・・・一夏、ご飯は何が良い？」

「酢豚がいい」
「……いや、酢豚は作れないのだが」
「じゃあチャーハン」
「……上手くないが」
「じゃあ中華」
「すまないが、中華は……知っているだろう？」
「……そうだった」

何という姉弟話、うん、感動も何も無いな、と言うか、千冬さんて料理できるの？
ん？一夏よ、何故にこっちに顔を向ける？

「姉ちゃん、誰？」
「……は？」
「一夏、荒榎だ」
「……誰？」
「いやいやいや、何で分からないの？」
「今の戦闘で雰囲気ガ変わったからだろう」
「……そんなに？」
「ああ、さっきまでは普通の人間だったが今は……獣の様だ」
「それは……誉め言葉？」
「ある意味ではな、急にそこまで変われる人はないだろうな」
「……なんだってー」

とにかく、前をイメージして……こんな感じ？

「……お前は一体何になりたいんだ」
「さぁ……百面相ですかね」
「とっくになってる気もするが……まぁ良い、それじゃあな」
「あ、はい」

そう言って帰って行く千冬さんと一夏
……最後の最後まで誰？みたいな顔をしていたぞ？本当に分からないの？
ってか……どうやって帰るの？

「不幸だ―……はぁ」
「大変そうだね、あっ君」
「はい、もう大変で……え？」
「ん？後ろに何があるの？」
「……束さん？」

何時の間にか、後ろには束さん
いや、後ろには束さんが居ますから、その後ろは何も無いから

「ってか、何故にここに居るんですか？」
「ぶーぶー、束さんがお家に居てはいけないのかねあっ君」
「いや、探偵みたいな言い方をしても最初の言葉で雰囲気でませんから」
「……」
「そんな、誰の事？みたいな感じに周りを見ないでくださいよ、あなたですよ」
「あなたなんて……あっ君大人～、何時の間にか束さんはあっ君のお嫁さんに」
「なってませんから……あ、そっか、ここって」
「そうだお！束さんのお家だお！」
「……その言い方は似合うけどほかの作品ですから止めれ」
「……えと、あっ君、今から私と一緒に心中して下さい」
「な、なんだって！？……って、そんな事をカンペ見ながら言わないでくださいよ」

「まぁまぁあっ君、とにかくあっ君と束さんは今や世界から狙われる存在になってしまったのです！」
「……何時の間に？」
「ＩＳ発表時から～」
「……なんだってー」

あ、コレ言うの今日だけで二回目だ……はぁ
世界から狙われる、そうだ、そうだったよ、つい忘れてたよ、楽しい事に目が眩んで忘れてたよ……

「と、言う訳で、心中しよ～」
「全力でお断りします」
「ぶーぶー、なんでさ～」
「いや、母さんに説明してませんし、その前に狙われた事がありませんし」
「束さんも無いよ！同じだね～」
「……狙われてるって言ったの誰だよ、出て来いよ」
「はいは～い、束さんだよ！」
「……うん、もう嫌、帰りたい」
「えー、仕方ないな～、じゃあじゃあ、心中は１ヶ月後ね！じゃあね～」

そう言って去って行く束さん、ってか……

「……マジだったんだ」

母さんになんて説明したら良いんだよ……
まぁ、とりあえず

「……帰るか」

もう夕暮れの時間だし……どれくらいやってたんだろうな……

「良いわよ？楽しんでらっしゃい」
「……なんでさ」

えー、現在の状況はあれです
心中の話をそれとなく言って見た所、ですね

「まぁ、あんな物を作ったんだから、狙われるのは覚悟の上だったんでしょ？どうせ逃亡も考えてただろうし」

ごめんなさい、全く考えておりませんでした、逃亡も束さんに言われて初めて気が付きました

「荒榎は頭が良いんだから、大体の事は出来るでしょ？心配も無いし」
「……それはそれで」

うん、ちょっと傷ついたよ

「その代わり、ちゃんと生活を報告しなさいよ？親子なんだから」
「……それくらいなら」
「あと、母さんが呼んだら帰ってきなさいよ？」
「もちろん、当たり前」
「……なら良いわよ、１ヶ月後だったわね、色々と準備しておきなさい、ＩＳも改造しておいた方が良いだろうし」

流石元総理の秘書、考えが凄いです
確かに、狙われるなら妖幻も改造しておかないとな

「さて、それじゃあ――――」

この後の一言、俺は結構驚きましたよ、はい

「――――最初で最後の家族旅行でも行きましょうか、お父さんも連れて」

「……え？」

シャロよさよなら・・・・・・・え？千冬さん？ええあ？ちょ？（後書き）

・・・・・・・・・・あれ？バグったよ？
８９，８１９アクセス　ＰＶ７，８８７人　・・・・・・・・・・
・・・・・・まだ五日しか経ってないよ？
感想　２３件　総合評価　４０４ｐｔ　・・・・・・・・・・ｈｈｈ、冗談が過ぎるぜボーイ・・・・・・・・・・・・マジすか

うん、何だろう・・・・・・・・・・一言目はありがとうございます！
二言目としては・・・・・・・・暇人？
いやいやいや、これは言ってはいけないことですね！
でも・・・・・・・うん、こんなに人気があるとは思わなかった・・・・・
・・・・・・・・・・もうひとつの作品は途中停止にしてこっちでも書こうかな？
でもなぁ、ネギまも考えたんだよなぁ～・・・・・・・・・ひとつも無いけどね！
・・・・・・・・・ＩＳが遅くなってもいいからネギまｗを書いて欲しいと言う方はどうぞ！・・・・・・・・・・いるのかな？

やっとソバットが役に立ちましたよ！
途中でいらないと思ったけど！やっと役立った！
ぶっちゃけＩＳで徒手格闘は無理だと気がついたけど！役に立ったよ！・・・・・・・・・・・・・・・・・この先に出てくるのかな・・・・・
主人公ある意味脱人間ですよ、ええｗｗｗ
前から考えてたんだけどね、何時になったら書こうと迷ってたんだ！
結構伏線を入れてきたつもりの俺がいる、さて、気がついた人は一

体何人？

ついでにアンケート！
家族旅行の行き先が決まりません！いやいやいや本当に
色々と考えたんですよ・・・・・・・・・いまいちと言うか何と
いうか
だからこそのアンケート！何処に言って欲しいですか！！

さて！次回は！なんと・・・・・お父さんが・・・・出てきません！
あ、うそ、ごめんなさい出てきます、謝るからその棍棒を下ろして
！・・・・・・・・・・え？これは５１式武装棍棒だ？・・・・・・・
・・いやいやいや、それはモンハンの武器だから！持ってきちゃ
だめだから！しかもなんか改って書いてあるし！
ちょ！？

――作者がログアウトしました

・・・・・普通じゃない家族だったんだね！（前書き）

・・・・・これはフィクションです
そして、その前に二次創作です

・・・・・普通じゃない家族だったんだね！

「……母さん、本当に来るの？」
「ええ、ちゃんとここで落ち合う予定よ」

どうも荒榎です、只今空港に来ております
何でか知らない？いやいやいや、皆さん知ってるはずですよ……
前回の最後に母さんが言った一言が原因です、はい
家族旅行だそうで…行き先？さぁ？聞いてないよ
まぁとりあえずは置いておいて、あれから次の日
只今父さん（？）を待っている……らしいよ？第三者視点
酷い？いやいや、そう言ってるだけで会った事無いからね、もしくは忘れてるからな
全く覚えがありません、はい、それはもう酷いくらいに、だから客観視点です、はい
それにしても眠い、どうしようもないほど眠い
いやさ、昨日の夜はついつい頑張っちゃってＩＳのコアを２５個も作っちゃったＺＥ☆
うん、やりすぎだよね、ぶっちゃけハイになっててさ……何でだろう、父さんに会えるから？違うと思う
束さんと心中する予定が出来たから？……いやいやいや、それこそ無い……はず
いや、最近分からなくなってきたんだよ、昨日帰って思ったんだ、束さんて誰と結婚するんだろう…結構美人なのになんて考えてしまったんですよ、それでもう……ね？能力か何なのかは知らないけど、うん、ちょっとドキドキしてきたんだもう駄目だね、俺は…もうダメだ、先に…進んでくれ……一人しかいないね！

はぁ……一体なんでだろう……分からない、けどまぁ良いや、後
……４４２個だっけ？作ればもう安全……ではないけど、世界に
作る絶対数は終わるからね
後は自分の好きに……作っちゃ駄目かな？心配だから手元に五個
くらい残して置くか
それにしても……

「……一時間経ちました、はい」
「……きっと会社が大変なのよ」
「……会社？」
「ええ、言ってなかったかしら？あの人は会社を持ってるのよ」
「……アンビリーバボー」

まさかの社長だと！？だから家には車があるんだな！……いや、
前回買ったらしいけど
それにしても……会社？その上でシンガポール？……あれ？シン
ガポールの便って……

「……母さん、本当に来るんで？」
「ええ、今日のここで待ち合わせをしたわ」
「でも……便が止まってますが？」
「……あら」

いやいやいや、あら、じゃなくて！
来ないんだったら今日は一体何をしに空港まで来たんだよ！

「でも大丈夫、あの人は個人ジェットを持ってるから」

……なんだってー
もう驚くのにも疲れたよ……

でも、最近分からなくなるんだ、本当にそうなのか？みたいな感じにたとえば、今は驚くのにも疲れたと言ったけど、もしかしてそれは俺がそう考えたからじゃないのか？
つまりだ、無意識にそう考えているから、そうだと思ってしまうから、そうなんじゃないか？と思ってしまうから
考え方としては色々あるが、そんな感じに考えてしまうから俺の人格が改変されているんじゃないか？
まぁ、簡単に言うとだ、考えたり思ったりした事が、俺の人格に影響を与えているんじゃないか？
だとしたらだ、おれは今も疲れたんじゃなくて、そう考えてしまったから、驚くのにも疲れたな、なんて考えたから本当の意味で驚くのにも疲れたんじゃないか？
少し分かりにくいが、そんな感じに考えるようになってきたんだ
そうだとしたら、俺の人格は一体何処までが本当で、何処からが俺の想像なんだ？
もしかして今までの全てが、シャロと遊んだとき、母さんと話したとき、千冬さんと戦ったとき、束さんとＩＳを作ったとき、全てが……
いや、止めよう、折角千冬さんが教えてくれたんだ、どんな人格だろうと俺は俺と……そうだよね？俺で良いんだよね？
俺は俺なんだから、俺の記憶を持ってるんだから、俺は俺だ
新しい俺じゃない、昔からの俺だ、少しは違いがあるとは思うけど、俺が俺である為の必要事項は一つ
自分を自分と信じる事、それだけだ、それだけでも忘れなければ……
……俺は俺だ
母さんが認めてくれた俺だ、束さんや千冬さんが認めてくれた俺……
……父さんがどうするのかは分からない
だけど、母さんが認めてくれたんだ、皆が認めてくれたんだ、だれだろうと……それを否定すると言うのなら、許す事は無い
コレは俺の為じゃない、俺を認めてくれた全員の為だ、真実を知っ

ても認めてくれた、全員の為だ
そんな事を考えていると、母さんの声が耳に入る

「……あら、来たみたいね」
「…すぅ…はぁ……よし」
「そんなに緊張しなくても大丈夫よ、あの人も認めてくれるわ」
「……だと良いんですけどね」

母さんには話してある、と言うか、昨日帰ってすぐに話した、心中はその後の話し
あ、もちろん、人格が変わるみたいって事だよ？ちゃんと変わる、じゃなくてそうみたい、って言ったのが俺の最後の砦だけど
……ワアォ、何と見事なイケメンで……
髪の色は黒、日本人だね、……ってか

「……零崎双識？」

うん、まさに零崎のマインドレイテルを使わないほうが強いあの人だよ……格好良いな～
なんて思う俺は毒されてきたんだろうか……

「……久しぶりです、東間さん」
「本当に、家をありがとう、香織さん」

熱い抱擁、いや、そこまで熱くないねどちらかと言うと……感動的？

「さて、それで……」
「ええ、この子が……」

会話が無くとも話が進む、だと……流石は夫婦、最近ではここまで素晴らしい夫婦を見ないからね、俺も見習いたいよ
と言っても、誰とも結婚できない気もするけどね……
って、俺の話ですか……全く分からなかった、以心伝心なのも考え物だね、他の人には分からないんだから

「……始めまして、の方が合っているのかな？真中東間です」
「……ええ、多分それが良いかと、自分には貴方の思い出がありませんから」

きつい事を言ってくるね、そう言いながらも笑う
俺、そんなにキツイ事言ったか？……ああ、そういう風にも聞こえるね
これは訂正がいるのかな？

「いえ、責めている訳ではなくて……本当に覚えてないんですよ」
「まぁ、最後に会ったのは1歳になった誕生日だからね、それにしても……本当に荒榎かい？小学二年生な筈なんだけど」
「合ってます、ちょっと大人びてるとでも思ってください、れっきとした真中荒榎です、挨拶としては始めましてより、久しぶりです、の方が良いんですかね？」
「僕としては、普通にお父さんって言いながらも腕に飛び込んできてくれるような感じだと良いんだけどね」
「いや、流石にそれは……」

合った回数が……ね？

「だよね、流石に、ね……でもまぁ、僕は荒榎のお父さんな訳だから」

何でも言ってね、そう言いながら微笑む東間さん
いや、流石にすぐにはお父さんとは呼べなくて……

「……話しは終わったかしら？」
「ああ、うん、終わったよ」
「こちらも同じく」

ってか、違ったら凄いけどね

「それじゃあ、旅行に行きましょう」
「ああ、うん、そうだったね」
「俺は何処に行くのかも聞いて無いんですけどねー」

ちょっと不満気に言って見ます、そりゃそうだもん、俺聞いて無いんだから

「あら？言ってなかったかしら？行き先は」

そう言って微笑む母さん
何でだろう……嫌な予感がする……

「スイスよ」
「……ああ、はい」
特には問題無いじゃん……俺の勘がおかしいのかな？
「スイスですか……僕の会社があるね、少し寄って行く？」
「それも良いですね、でもその前にノイシュバンシュタイン城が見たいわ」

「ああ、それも良いね、荒榎は何が見たい？」
急に振られてもね……スイス？銀行しか知らないよ
しょうがないじゃん、俺地理とか社会とか歴史とか苦手なんだし…
…しょうがなく無いや

「スイスは何も知らないので何とも……」
「そっか……まぁ、それは向こうに着いてから考えるとして、そろそろ行こうか？」
「そうですね」
「飛行機の時間はまだなんですけど……」
後1時間はあるんですが……

「ああ、僕は個人ジェット持ってるから大丈夫だよ」
「……さいで」
ってか、個人ジェット？自家用じゃなくて？
「……デカ……」
「そうかい？僕としてはもう慣れてしまったからね、何とも思わないんだけど」
「大きいですよ、普通の旅客機並にあるじゃない」
「そうだね、言われて見れば……でもまぁ、会社でも使うからね、その為に自家用じゃなくて個人にしたんだから」
……ああ、だから個人なのね
自家用じゃなくて会社でも使うから個人……個人なんて設定あるのか？
「さて、それじゃあ乗り込もう」
そう言って中に入っていく東間さん、もとい父さん
ん～、なんだろう、父さんって呼びにくいな・・・・・・東間さんの方が楽だな

「荒榎、早く乗りなさいな」
「あ、はい」

母さんが首だけ出して呼んでるよ……って、何時の間に乗ったの!?
やっぱり母さんは不思議だ……

「さて、操縦士を紹介しないとね、ギド、ちょっと出てきてもらえるかい？」
「どうしたアズマ、問題でも？」
「いや、家の息子と妻にも紹介しておかないとね」
操縦室から出てきたのは黒人……だけど大きいな

「こっちが妻の香織、この子が息子の荒榎だよ」
「俺はギド、よろしくな」
「ええ、よろしく」
「……どうも」

すっっっっっっっごく、怪しい人なんですが……

「さてギド、スイスまで頼むよ」
「あいよ……そう言う話しだからな、仕方が無い」

ん？最後に何て言った？聞こえなかったぞ？

「それじゃあ、とりあえずは座ろうか」
「そうですね」
「……何処に？」

席が多い事多い事、全部で幾つあるんだ？
まぁ、とりあえずは近くに座るか……変わってるな、椅子が向き合っていて中心に机
うん、あれだ、会合とかで使うんだろうな……多分

「さて荒榎、何か欲しいものはあるかい？ジュースも揃ってるよ？」
「えっと、はい、じゃあリンゴジュースを」
「はい、コレで良いかい？」
「あ、はい、どうも……」
「じゃあ、僕達はワインでも」
「はい、いただきます」

うん、リンゴジュースだね……ボトルだけど
コップは…あれ？机が開いて…あ、出てきた……ん？
出てきた!?なんで!?え？どうなってるの!?ここは何処!?飛行機だよね!?

「ああ、コップはそこから……うん、出てきたようだね」
「あ、はい……なんで？」

どうなってるんだ？

「この飛行機は僕が改造してあってね、色んな仕組みがあるんだよ」

流石、こんな頭を持つ子の父だな、天才だってか、職業は一体何だ？

「荒榎、もう少しゆっくりしなさい、疲れるわよ？」
「まぁ、初めてあった人と一緒じゃ、そんなにゆっくりしにくいよね」

苦笑しながらそんな事を言う東間さん
いや、そうじゃなくて、この飛行機が気になるだけで……

「……荒榎」
「いいよ香織さん、仕方の無い事だ」

あれぇ？何故かキツク言われてしまったよ？何で？そんなに緊張してるように見えるのか？

「……すまない、電話の様だ」

少し席を外すよ、そう言って目が届かない範囲に行く東間さん
そんなに遠くに行く必要があるのか？

「荒榎……」
「……そんなに酷い？」
「ええ、凄い顔をしてるわよ」

そこまでかよ……何でだろうな、自分でも分からない
人格の事なら吹っ切れた……筈なんだけどな、違うと思いたい

「荒榎、あの人はお父さんなのよ？初めてあったかもしれないけど、家族なの、あの人は前にも会った事があるし、あの人からしたら荒榎は息子なの、もう少し――」
「そんな事言われても」

自分でも驚くような声が出た、冷たくて泣くような、とても悲しい声
ただ、そんな事を言われても時間は掛かるよ、そう言いたかっただけなのに

自分の意思とは関係無しに口が動く、本当の心が話すように、改変されてない人格のときに様に

「俺はあの人と始めてあったのに、そんな急な事を言われたって難しいです」

「……荒榎」

母さんが抱きしめてくる、とても優しく、とても暖かく

……うん、落ち着いた、もう大丈夫、ちゃんと出来てる

よし、普通に戻ったな・・・・・・…やっぱり魂は体に引っ張られるんだな、俺もまだまだ子供って事だ

どれほど頭が良くても、どれほど強くても、やっぱり子供だ、こうして抱きしめられるだけで落ち着くんだから

「……もう大丈夫」

「いいえ、まだよ、まだ……」

そう言ってより強く抱きしめてくる

……あの、そろそろキツイです

母さん、結構胸が大きいんだから、思いっきりぶつかって潰れてますよ?当たってますよ?

そろそろ俺が危ないのね、分かる?

「……なんだって!?」

「……あら?」

「助かった……けど何だ?」

急に聞こえてきたのは父さん、もとい東間さんの声、しかも何処か緊張してる

さっきのはあれだ、ピンチになったときに言う感じだ……あ

れ？これって死亡フラグ？
いいえ、ただのフラグです……うん、余計に怖いね
只のフラグって事は何に気をつければ良いのか分からないよね！
死亡フラグだったらＩＳの絶対防護で問題無いのにな……

「……少々厄介な事になってしまったようだね」

苦い顔をしながら戻ってくる東間さん……いや、父さん
うん、頑張って父さんって呼んでみよう……よし

「どうしたんですか？東間さん」
「……ああ、うん、ちょっとね」

……しくじったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
！！！！！！
なんで最初から東間さんて言ってるんだよ！ちゃんと言えよ父さんて！
ほら！東間さんが悲しんでるじゃないか！……だから父さんだってば！
ああもう！母さんまでキツイ目をしてるよ！あの母さんがだよ！？
完全に俺が悪いじゃん！

「それで、どうしたんですか？」
「ちょっとね……ストーカーが、ね」

……ストーカー？え？何で？東間さんにはストーカーがいるの？
いや、だから父さんだって……はぁ、もう疲れた

「……まだなんですか？」

「ああ、まだ倒せ……対処できて無いんだよね、もう少しで出来そうなんだけど」

……いま、倒せないって言おうとした？
だよね？今こっちをみて言い方変えたよね？え？何？倒す？敵なの？だとしたらなんで父さんが狙われてるの？
あ、父さんて言えた！やっと言えたよ！

「なんで東間さんは追われているんですか？」
「東間さん……色々とあってね」
「荒榎、そこまでにしなさいな、今は家族旅行ちゅうよ？」

凄い凹んじゃったよ……
……もうヤダ、なんで父さんて呼べないんだよ……ただ少し恥ずかしいだけじゃないか
うん、恥ずかしいだけ……あれ？ひょっとして答え出てる？
……えー、なんだよ、それだけかよー……はぁ、悲しいね

「そうだね『父さん』」
「父さん……うん、そうだね、それじゃあ――」

言えたよ！なんて思ってたのがいけなかったのかな
喜んだ父さんが話してる途中、急に飛行機が揺れた

「――っと、香織さん、大丈夫？」
「はい、ありがとう」
「いえいえ、僕はこれでも夫なんだから」

なんて甘甘な空間を作る二人……うん、俺は放置なんだね
今の状態？逆さまになって壁にぶつかっております、はい

まぁ、頑丈だからコレくらいは問題なんだけど……何だろう、俺空気あ、また揺れた……あれ？今外に何か見えたぞ？……ジェット機？……あー、さっきのはあれか、家族＋ギドさんに対する死亡フラグか……不味いだろ

「よっと、それで……何があったんですか？」
「……さぁ？揺れただけじゃないかな？」
「ここまで来ておいて言う台詞じゃないですよね、そとにジェット機も見えてるし」
「……僕としては、ここまで頭の回る子になってくれて喜ぶべきなんだろうね」
「ええ、それで良いんじゃないですか？」
「……でもなぁ」
「東間さん、この子は大丈夫よ」

……でっかい問題なんですね、分かりますいや、ジェット機が飛んでいる時点でそうだろうとは思ったけど

「荒榎、別にコレは信じなくても良いよ」
「はい、信じて欲しいんですね」
「……君は本当に頭が回るね、小学生とは思えない」
「コレくらいは誰でも出来ますよ、それにコレでも小学二年生です、それで？」
「ああ……」

そう言ってワインを一口、口を湿らせ何処か諦めた様に言う

「……僕はね、スパイなんだ」
「……は？」
「僕は、いや僕をギドは日本のスパイだった、の方が正しいね」

「スパイ……ですか」
「ああ、うん、信じられないのは分かるけど……事実なんだ」

スパイ……あれか？００７みたいな？あの映画は好きだったな……
いやいやいや、現実逃避とかいや、してる場合じゃないでしょ

「スパイだったんですか……」
「あ、うん、そんな簡単に信じられるとは思わなかったな」
「自分も少しおかしい存在なので」
「おかしい？」
「どちらかと言うと可笑しい」
「可笑しい、何がなんだい？」
「いや、その、あの、ねぇ？」

流石にこのタイミングはね？
言える事としたらあれか？ＩＳの製作者って事位か？
人格は……また今度だよね？

「えと、はい、実はＩＳ作ったのって俺なんです」
「……はい？」

まぁ、そうなるよね

「ＩＳの製作者は俺と、篠ノ乃束と言う友達です」
「……Ｒｅａｌｌｙ？」
「……Ｙｅｓ」
「……なんてこったい」
「ですよね～」
「まぁ良いや」
「良いの！？」

普通は良くないでしょ！？

「まぁ、それは香織さんから聞いてたしね」

「……母さん？」

「だって、自慢したかったんだもの、私達の子供はこんな凄い事をしました～、って」

「いや、それはもうしたでしょ、ヘレンさんに」

「ああ、そう言えば昨日あれも聞いたよ、人格が変わるって事」

「……」

……え？ウソ、なんで？俺が言おうと思ったのに……

ってか、分かっててこんな対応をしてた訳？何で？これじゃあ俺がおかしいみたいに……

「多分ね、それは僕も関係してると思うんだ」

「……え？」

「僕、正確には僕の家系かな、人格の改変が出来る存在だったらしいんだ」

「……え？」

「詳しく言うと違うみたいだけどまぁそんな感じでね、僕はその先祖返しだったらしくてね、簡単に人格を変えられた」

「……」

「だから、それは異常ではあるけど、化け物とかそんな感じじゃなくてね……なんて言ったら良いのかな、自分の能力の一つだと思っていれば良いと思うよ？別に変えられるのは荒榎だけじゃないんだから」

「そう……なんだ……」

俺が異常な訳じゃなかったんだ……俺の家系の能力だったんだ……

「そか……うん、なんだかすっきりした」
「それは良かった」

やっぱりあれだ、千冬さんから言われても、うん、やっぱり心の何処かでは思ってたんだろうな『自分は人間じゃない』とかそんな事をでもまぁ、これで心の曇りも晴れたわけだけど……

「……さっきから良く揺れますね」
「うん、やっぱりギドの腕が良くてもね……倒さないとね」
「誰を？」
「えっと、確かドイツの……遺伝子強化試験体だったっけな？」
「……えー」
「ん？知ってるの？」
「え、いえ、あの、はい」
「……小学二年生が掴んでる情報なんだ」
「え、いや、その、えと、うん、知ってるのは俺くらいかと」
「……見ないうちに荒榎は凄い頭が良くなったね」
「……まぁ、はい」

うん、ごめんなさい、色々と
遺伝子強化試験体だってうろ覚えだったし、ラウラが受けていた事くらいしか……

「おっと、またか……やられてばっかりじゃ、面子が立たないよね」
「あの、それで、なんでこうなってるんですか？」
「ああ、まだ途中だったね……えっと、何処まで言ったっけ？」
「スパイでした、攻撃してくるのはドイツの遺伝子強化試験体です、までですね」
「ああ、うん、そうだったね、それでね僕とギドはドイツに忍び込

んだんだ、ドイツの情報を得るために、そしたら遺伝子強化試験体がいた、それでまぁ、居たのが見つかって、身が危険になって、日本に帰ってきたら僕達の存在は消されてた、戸籍はあるんだけどね、スパイとしての情報は全て」

「……」

「それはまぁ、新しい暮らしが出来るから良かったんだ、正直、そろそろ引退しようかと思ってたし」

「お早目ですね」

「まぁね、その頃香織さんと出会ったからね、一目ボレだったな」

「東間さん、話がずれましたよ」

「ああ、そうだったね」

……何この甘い空間、甘過ぎるよ……

「それでね、帰ってきたんだけど、ドイツは諦めなかったんだよね、遺伝子強化試験体、今の敵を送ってきたんだ」

「それで、今に至る、と？」

「うん、そんな所だね、後は少し抜けてる部分も歩けど……どうでも良いから」

「……そうですか、つまりはあれですね、進入したら見つかって、逃げてきたら追っかけてきた、と」

「ん、そうだね」

「アズマ！そろそろ不味いぞ！」

「……さて、それじゃあ、僕はあの子の相手をしないとね」

そう言って後ろに消える父さん

これってＩＳの世界だよな？銃撃戦ってあるのか？……いや、まだＩＳは配って無いんだ、銃撃戦しかないだろうな

つまり……どちらかは死ぬ？

「……」
「……荒榎」
「ねぇ母さん、俺はどうすれば良い？手を出さない？父さんを守って相手を殺す？相手を守って父さんを危険に晒す？」
「……好きにしなさい、それが荒榎の意思ならば」
「……俺の意思、ね」

……よし、守りに行こう

「それじゃあ母さん、ちょっと戦場に言ってくるわ」
「気をつけなさいね？」
「大丈夫大丈夫、ＩＳに絶対防御があるから、怪我はしないし」
「そう……東間さんをよろしくね？」
「了解、それじゃ、行ってきます」

母さんを残して後ろに行く、結構先だな……

「さて、ラグ、情報は？」
『少しばかりですが、あるにはありますね』

ラグ、といっても、前回作った情報収集ＡＩ『ＰＧ１０６』に命名しただけなんだけどね

「よし、こっちに送ってくれ」
『分かりました……時間的には３０分程あれば』
「結構多いな……頼んだ」

暫らくは掛かるな……さて

「妖幻、武器展開『天弦』」

右手に天弦を展開……したんだけど

「……これじゃあ危ないよな」

流石にこれじゃあ殺してしまうかもしれない、ＩＳ用の武器だしね
天弦を戻して別の武器をコール

「妖幻、武器展開『焔顎』」

焔顎、見た目はハンドガン、ってかそのままハンドガン
外国によくあるマガジンタイプのハンドガン、と言ってもＩＳ用だから威力は高い
そして大きい、大きさは普通の１．５倍ほどかな、これは一発の威力重視だからね
結構な威力を持ってるよ、けどまぁ、スピードも桁違いだからね、ジェット機を狙うには最適だね……多分

「さて……悪い子はいねーがぁー！」

シリアスは死亡フラグの元だもんね！

・・・・・普通じゃない家族だったんだね！（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・あれぇ？何時の間にこんな作品に？
これってＩＳの二次創作だよね？・・・・・・・・・いや、書いた
の俺だけど
まぁ、ね、あれですよ、ＩＳが出来たばかりなら普通にスパイくら
いいるんじゃないかな！
そして、うん、まぁ家系だ！家系なんだ！多分そうなんだ！
この先は考えてはいるけど適当なんだ！クオリティを期待しないで！
これでも頑張って・・・・・・・・・・・・・・・ると思うよ！

父さんは零崎双識でした（笑・・・・・・・・・・・・・・・・・・
うん、趣味に走りすぎたね！やりすぎた！ネタが通じる人としては
違う人だと思ってくれ！ってか思ってください！ただ外見が似てい
るだけです！キャラは違うから！
なんとお父さんは社長です！・・・・・・・・・・・・ここから先は
分かるよね？え？分からない？・・・・・・・・・・・・・・・・・
・うん、気にしないで！
どうせ後で分かることだから、うん
さて、次回は・・・・・・・・・・・・・・・人が・・・・・・・・
死んでいく・・・・・・・あれ？生きてたよ？
なんてギャグにはなりませんよ！はい！
あれ？何でそんな目で見るの？ちょ、ふざけただけだって！ちゃん
と書くから！

・・・・・五本、間違えた
ゴホン、次回は！・・・・・・ＩＩＮＡＺＵＫＥが出てきたり！・・
・・・・・・・・・するのかな？
あ、すいせん、今適当に考えました・・・・・・・・・・・・・・・

でもアリか？いや、これはこれでアリかも
いやね？次回には新ヒロインを出そうと思ってたんですけどね・・・
・・・・・・・・・どっちが良いんだろうかな？

よし！こんなときこそアンケートだ！
ＩＩＮＡＡＺＵＫＥ、オア、普通の新ヒロイン
結構違うからね？よく考えてね？・・・・・・・・いや、うん、本
当に

人生って・・・・・・・色々あるよね？（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？何かが変な気がするよ？

人生って・・・・・色々あるよね？

「……さて、覚悟を決めろよ俺」

目の前には大きな扉、この扉の向こうにはもう席は無い
荷物を詰める為の大きなスペース、多分
父さんはそこから反撃する気だろう、と言うか……さっきから銃声がするからそうだと思よう
ジェット機は……隣に居るね、何をするのかは知らないけどね
ってか、ジェット機と個人旅客機で戦えるギドさんはどれほどの技術を持ってるんだ……
まぁ、そんな事は置いておいて……動けない、いや、動かないだないざ扉を開けると銃撃戦になっています、なんて言われたらね……
体が動かなくなるんですよ
はい、そんな状況ですね……不味いだろ
父さんは死ぬんだから……不味いよね？しかも遺伝子強化試験体？ラウラだけじゃなかったのか……

「……よし、うん、あれだ、こんな時こそ、だ」

人格を変える……のはどうやるんだ？
今までは何時の間にか、しかも少しだけしか変わってないからな・・・・・…やり方が分からない
……うん、駄目、分からない

「いっそのことあれだよね、神様に聞きに行きたいよね」
『良いじゃろう、来るが良い、ちょうどこちらも用があったからの』
……あはは～、幻聴が聞こえるよ？思うんだけど、幻

聴ってあれだよね？幻の音が聞こえる事だよね？つまりはあれだ幻聴が聞こえるってのは可笑しいんじゃないのか？

「……なんて現実逃避をしてみたり」

なんだろう……急に眠くなって……

「……なんでさ」

「お主が聞きたいと言ったのじゃろうが」

うん、そうでしたね、ここは……天国？真っ白で何も無い……うん、何も無い

えー、何それ、また死んだの？

「……お早い人生でした」

「これこれ、まだ死んでおらんわ」

「生死の間をさ迷う亡霊ですね……余計に悪いじゃん」
「そうではない、只意識のみを連れてきただけじゃ」

そっか、それは良かった……って俺のことか
良かった～、まだ父さん助けてなかったしね、母さんにも親孝行しないとね
シャロにも……二ヶ月後って会えるかな？一夏にも……忘れられてたんだった
……ま、まぁ！今回は悔いが多いから！うん！まだ死ねないよね！……心配事が増えたけど

「そうか、それは良かったの」
「……うん、神様設定もテンプレですね、分かります」

人の意識が読めるとか、あんたは人間じゃねぇ！……神様でしたね
……あれ？ひょっとして人格変えられた？……
このタイミングかよ

「そうじゃったな、忘れてたわい、人格の変更じゃったかな？」
「あ、はい、それですね」
「ちょっと待っとくれ」

そう言って何処からともなく手帳を取り出す神様……ってか

「神様って……一人じゃないんだ」
「なんだ、ちゃんと見えてるんだ、見えてるのなら無視しないでよね」

後ろにいる……正確にはもたれ掛かって来る女性……いや、神様

とりま、する事は一つ、ああ、とりまはとりあえずまぁ、の略ね

「……」

「こっちを見ておいての無視!?……ちょっと、無視は止めてよ～」

「ええい、あんたは誰だ!」

「え?私?私は……誰だっけ?」

「……ええー」

自分が分からないとか……

「まぁ良いじゃん、元々私達には名前なんて無いし」

「無いんかい!……あれ?じゃあキリストは?オリンポスの神々は?」

「キリスト?……何それ」

「……うん、もう良いや、最初に地球に下りた神様は?」

「……さぁ?居ないんじゃない?」

「……は?」

「あのね、神様は本当は居ないの」

「……へ?」

「ひ?」

「ふ?」

「へ?」

「ほ?」

「は?」

「じゃなくて、居ないの」

「……第一の質問ですが、貴方は誰ですか?」

「いや、ネタは良いから」

……最近の神様はネタが通じるのか……神様現代的だなおい!

「ええと、神様ってのはね、信仰や想像から作られるの」
「……つまり？」
「神様を創るのは人間なのよ」
「……なんだってー」

あれ？じゃあ人間を作るのは？

「ああ、それは世界ね」
「……アンビリーバボー」
「それで、神様が整理するのが世界」
「……もういいや、全然分からない」
「だよね～、私達も分からないんだ」
「つまりあれか？世界が人間を作り、人間の想像が神様創り、神様が世界を整理する」
「世界が作るの人間だけじゃないけど、概ね間違ってはいないね」
「……最初は？」
「さぁ？誰も知らないね、何時の間にか居る存在、それが神様だよ」
「何それ怖い」
「うん、私達もそう思う、何時の間にか存在して、何時の間にか記憶が出来て、何時の間にか存在理由が分かって、何時の間にか消える」
「……消えるの？」
「うん、神様ってのは人間の想像した現実不可能な事が元となって出来てるからね、内容が解明されたら消えるんだ」

使い捨てですね分かります……考えたら伝わるんだった

「あはは、間違ってはいないよ、確かに捨てられる、人が不可解な事を認める為に創られた神様なのに、それが自分達で無理やりな方法で決めつけてそれが真実だと言う、そんな勝手な考えだけでも何

千、何万の神様が消えたからね」
「……多い」
「神の火だと信じていたのに、何時の間にかは科学という人間が決めた適当な理論で解明したと思いこむ、それだけでも消えるからね、新しい神様が一人出来たと思ったら、古い神様は五人死んで、みたいな事も多いかな、古い神が死んだから新しい神が出来る、何てこともあるからね」
「面倒な世の中だな」
「そうだね……それで、君は何？」
「何といわれても……人類の一人？」
「ふ～ん、そっかそっか、うん、気に入ったよ」
「はぁ、どうも」
「……惜しいな、もうちょっとなのに」
「何が？」
「ん？もう少しで座に座っても可笑しくないのに」
「……ゑ？」
「結構いるんだけどね、そういう人も」
「いやいやいや、座？あの全てが詰め込まれた所、の座？」
「そうだよ？まぁ、正式にはちょっと違うけど……うん、惜しいな」
「……」

うん、喜んでおこうかな、一応人間である為に

「只の人間ではないよね、頭が凄い事になってるし」
「……」
「君の生活、見せてもらったよ、凄い楽しそうだよね」
「いや、危ない生活ですね」
「そうかな、日々何も無い普通の生活だと人間は退屈と言うのに、日々色々な事がある生活を危ないなんていったら君が何処に向かう

んだい？」
「……さぁ？」
「……ふむ、そうじゃったのか」

およ、やっと終わったのか
え？何がかって？神様（一号）が手帳を見てたんだよ
それが終わった、つまりは俺の能力が明かに！
こっちに向いた神様（一号）、面倒だから爺ちゃん
……あれ？固まった？目線的には俺の……後ろ？

「……何時からそこに居られたのですか？」
「ん？ずっとだね」
「知り合い？」
「まぁね、私はこれでも有名なんだよ」
「……」
「それで、なんの用でしたでしょうか？」
「ううん～、特には無いよ、暇だから見に来ただけ、ほらほら、早く教えてあげ名よ」
「分かりました、さて、何が知りたいのじゃったかな？」
「俺の性格が変わる原因、もとい能力を」
「能力能力……これじゃな、ええと……己の精神の置き方を操作する事が出来る、なお、これは強い心には効かず、精神も表面的な変化となる、だそうじゃ」
「……人格ちゃうやん」
「ん～、やっぱりもったいないな～」

さっきから勿体無い勿体無い五月蝿いから！神様だろうと関係無いから！
五月蝿いのは全国全世界全次元全領域共通の考えだから！

「……よし、やっぱり何か付けちゃおう！」
「……え？」
「いや、流石にそれは…」
「え～、いいじゃん、３０人もの命を救ってるんだよ？これじゃあ足りないよ」
「……貴方様がそう仰られるのであれば」
「……何この格差社会」

上司は適当なほんわか雰囲気ですね分かります

「えっと……君に決めた！」
「その球体は何処から出した！？そして何故に投げつけてくる！？」

球体が俺に当たって……入った！？

「……何時の間にかの脱人間」
「魂じゃから大丈夫じゃ」
「それでも、うん、これはね」

幾らなんでも無いと思うんだよ
光る球体が、しかも大きさは……５０ｃｍ程かな？体に入っていくんだよ？気持ち悪いって

「よし、それじゃあ用事も終わったし、帰っちゃおー」
「え、これだけ？何しに来たの？あれ？」

また眠くなって……まだ大丈夫だぞ？

「……その銃は何？」
「ん？拾ってきて改造したんだよ、これで行ってみよー」

……狙いは眉間か……あ、指がかかって、撃った！？……幾らなんでももう少し悩むとか……ある……で……

「……はっ！？」
「おはよう、荒榎」
「目が覚めたかい？」
「え、あ、うん、おはよう？」

現在の状況は？そしてここは何処？ついでの何故に母さんの膝枕？

「戻ろうとしたら道に倒れてたんだよ、大丈夫かい？」
「……ああ、なるほど」

あの時倒れたんですね……良く撃たれなかったな……

流れ弾くらいならあるかと思ったんだけど
……あれ？倒れていた？じゃああれか？父さんを助けに行く予定が、逆に助けられたと？……

「荒榎、どうしたの？」
「いや、何でも無しです、はい」
「そう……あ、そうそう、ここはスイスよ」
「……ヤックデカルチャー」
「やっくでかるちゃー？それは何だい？」
「……何でも無いです」

そっか……ここではネタは通じないんだな
いや、通じた神様がおかしいんだろうな……あれ？あの神様は何の神様？
ついでに言うと凄い貫禄？みたいのがあったな・・・・・爺ちゃんなんか凄い遜ってたし
ってか、着いちゃったんだ……何も出来なかったじゃん

「……それでね、荒榎、ちょっと大事な事があるんだ」
「大事な事ですか？」

父さんの顔が真剣なので俺も起きあがって前に正座

「……どうぞ」
「うん、あのね……荒榎には、許婚がいます」
「……は？」
「いや、うん、そうだよね、急に言われても困るかもしれないけど……います、と言うか出来ました」
「ＩＩＮＡＺＵＫＥ？」
「うん、一応あってるね……ちなみに、今出来ました」

「……なんだってー」
「うん、僕も考えてなかったんだ……でも色々あってね」
「うん、よし、帰ろう、今すぐ帰ろう、家に帰ろう」
「荒榎、悪いんだけど……そこに居るんだけど」
「……」

右を確認、リビング、クローゼットと椅子、小さな机
左を確認、ベランダ、ベッド、ランプ、電話……

「うん、問題無いな」
「いや荒榎、ちゃんと手元を見ようね」
「手元？一体何があるって……」

手元、ベッド、妖幻、知らない少女……しかも髪が水色？……いやいやいや、なんで？水色の髪なんてありえないのに……まぁ良いや、小説だし
それにしても顔が整ってるね……うん

「……よし、帰りましょう」
「うん、元気になったね、ずっと膝枕してくれてたんだから、お礼くらいは言っておこうね」

膝枕？母さんじゃなくて？……あ、母さん立ってる……ゑ？

「すいませんが、どちらさま？」
「お初にお目に掛かります、荒榎様の許婚となりました、レトア・シュノレーゼと言います、１０歳のロシア生まれです」
「うん、突込み所が多過ぎるね」

なんでロシア生まれがここに居るんだよ、ってか2年年上だと!?
……あれ?似たような人がいたような……

「えっと、荒榎?この子はギドの引き取った子の一人なんだ」」
「引き取った?」
「正確には生活を支援している子かな?」
「……うん、帰ろう、絶対に帰ろう」
「そうですか、それではすぐに支度をします」
「いや、あんたは来ないから」
「……私は何をすれば良いのでしょうか?」
「……家族の元に返ったら?」
「でしたら、ここでございますが」
「……」

うん、確かにね、許婚なら家族なんだけど……
何があったら支援している子が俺の許婚になるんですか?うん、繋がらないね、全く繋がらない

「父さん?一体何があったの?」
「僕にも詳しくは分からないんだけどね、ジェット機を墜落させて、搭乗者から何かを吐かせようと思って近づいたんだけどその人は死んじゃって」

うん、ここまでは普通だね、よくある?話しだ

「それで、こっちに着いたらギドの迎えに来ていた子が荒榎に一目ボレ、召使に大変身、かな?」
「……なんでやねん」
「うん、僕にも分からないから説明できない」
「これは……ギドさんの所為?」

「呼んだか？」
「……何でクローゼットの中から出てくるんですか？」
「いや、寝起きにどんな反応をするかの思ってね、隠れてたのさ」
「……うん、それは置いていて、なんで許婚に？」
「いや、日本では家族同士の信頼の繋がりとして、子を嫁がせたと聞いた、だから許婚にして嫁がせるんだ、レトアも気に入った様だしな」
「はい、荒榎さまは私が仕えるべき存在です」
「……頭が痛いから寝ても良いかな？」
「あ、ああ、うん、良いと思うよ、僕も痛いから」
「そうですか、それでは、私の膝をお使いください」
「……」
「これが放置プレイというやつですね」

いや違うから
まぁ、何故か水色髪の天然不思議系ってのは結構需要があると思うけど……俺は入らないな
いや、贅沢とかじゃなくてね……あれ？外見言ってなかった？

「……そして何時の間にか位置が変わっているんですね、分かります……いや、分かりたくないけど」
「荒榎様には最高の安眠を送っていただきたく」

……もう寝る、付かれた
ってか、何このカオス、混沌と読む所なんだけど、今の状態はカオスいや、混沌と書いてカオスと読むじゃなくて、本当にカオスえ？分からない？俺も分からない、ってか神様の説明が分からなか……った……な……

人生って・・・・・・色々あるよね？（後書き）

さて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん、先に謝ろう、すいませんでした
うん、ロシア、ロシアなんだよ、つまりは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・アハッ☆

まぁそれはおいて置いて、うん、逆だね、置いておいて、戦闘シーン？何言ってるの？ジェット機とＩＳが戦闘なんかしたら・・・・・・・・・楽勝だね、うん、迷うことなく楽勝です、どうもありがとうございました
まぁ、そんな考えを・・・・・・投稿した後に思いまして・・・・・・うん、これは酷い
ま、まぁ！変わりに神様出したからうん！大丈夫！・・・・・・・・・・・・な訳ないか・・・・・・
あれだ、代わりに新しい能力が・・・・・・・うん、新しいと思うよ？うん、多分、メイビー、おおよそ・・・・・・違うね、新しくは無いね、まぁそれは次回に取っておこうかな
さて、作者さん、いい感じに混乱してきました？うん、俺も混乱しているから大丈夫・・・・・・・・・・・・・・じゃないけどなんとなくでの座の登場・・・・・・出す気は無いよ？本当だよ？
第一の質問ですが、読んでいる人は理解できますか？
第二の質問ですが、この話に飽きた？
第三の質問ですが、もう面倒くさい？
第四の質問ですが・・・・・・・・・俺は何をやってるの？いや俺にも分からない
そういえば、あのシリーズも新しくなりましたね、『アイテム』の話に大変身・・・・・・・・・・・・・・・・・フラグブレイカーは？
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、思い出した

話しはズレますけどね、今日久しぶりにＴＵＴＡＹＡに行ってきたんですよ

そうしたら・・・・・・・・・・・あれ?どこかで読んだことのアある小説だな?なんて思った作品がありました

その名もリセット、うん、ここで読んだ作品でしたね

皆さんは知ってますか?如月ゆすらさんの作品です、はい

あれは好きだった・・・・・よし、買おう

なんて思ったんですけどね・・・・・・金が・・・・・・

自分の書いた小説が店頭に並ぶのはどんな気分なんでしょうね・・・・・・・・・・・・・・是非味わいたい

って言っても、俺が書いてるのは全部が二次創作と言うね・・・・・・・・悲しいな

みなさん!ぜひリセットを買いましょう!・・・・・・・・・・・・・・

HAHAHA！目の色が変わってるYO・・・・・・・・・何で？

「ところで荒榎……ごめん」
「……何がどうなった？」

朝起きました、父さんが居ました、母さんもいました、ギドも……
ついでにあの少女も
おはようの挨拶をしました……で？
何があったら謝られる状態に？

「荒榎……」

そういって母さんが鏡を見せてきます、うん、普通だな
えっと、映るのは俺、ちゃんと別人に入れ替わったとかじゃなくて俺
うん、普通の俺、髪の毛は変わってない黒色、虹色になって公式チ
ートのレアスキル使えたり、怒ると髪の毛の色が変わって人外の力
が使えたり……は分からないけど多分使えない
体も大きくなってない、うん、小学二年生、力も……ちょっと弱い
くらいで変わらず、筋肉も大丈夫、動いてる、逆に動きが良い
目も……大丈夫！うん、大丈夫！

「……なんでやねん」

おおぅ、思わず口が動いたぜ……うん、コレはなんで？
目がね？右目は黒、うん、普通
左目……うん、あれだ、妖幻の色の藍色だ
……あれ？俺って日本人だよね？
ついでに言うとあれだよね？藍色の目なんて無いよね？

感覚で言うと、水色の目＜藍色の目、位にありえないよね？
……うん、あれだ

「……俺は人間を止めるぞ、徐ジョー……は存在しないから神ー」
「神様にそれは無いんじゃないかな・・・・・・本当にごめん」
「……よし、落ち着こう、何故に謝られている俺」

分からない、全てが不明、意味不明
真中荒榎、心の一句……なんて言ってる場合じゃないよね

「うん、その、実はね……僕の避けた弾丸が荒榎の目にあたってそうなったんだ」
「……よし、落ち着いた、それで？」
「僕にも理屈は分からないんだけど、慌てて見に行ったら……目の色が変わってね」
「……うん、大丈夫、理由もわかった、うんあれだ」
「心当たりがあるのかい？」
「まぁ色々と……父さんの所為じゃないので」
「そっか……あ、でも守れなくてごめんね」
「いえ、それは自分が気絶したからで、うん、問題無いです」
「そう……うん、でも無事で良かったよ」
「あはは、本当ですよね、これで貫通なんてしてたらお笑い事じゃ済みませんからね」
「本当に……大丈夫なのね？」
「母さん心配し過ぎ、普通に動いてるのに」
「そうね……良かった」
「ちょっと風に当たってきますね」
「ええ、分かったわ」
「お供しま「いや、良いから」……分かりました」

ベランダに出てドアを閉め、囲いにもたれ掛る、これなら普通に外を見ているようにしか見えない
……よし、そろそろ大丈夫だな、落ち着いた
うん、絶対あれだよね、あの光るボール、どちらかと言うと光の球体……あれ以外に無いでしょ
困った、困った、うん、本当に困った……何て説明したら良いんだよ
神様よ、俺の何にしたいんだよ……いや、そこまで変わらないかうん、外見がちょっと変わっただけだ、誰にも分からない……訳無いよね～
うん、千冬さんとか絶対気づく……いや、全員気が付くだろうな
……はぁ、どうしろっちゅうねん

「どうしましたか？」

後ろからの声、いや一人しか思いつかないんだけどね

「……何で居るんだよ」
「付いて来るなと言われましたので、個人的に来ました」
「……」
「失礼します」

そう言って隣に移動、言わなくても良いと思うよ？

「それで、どういたしましたか？」
「……んにゃ、なんでも無い」
「……言えない事ですか？」
「まぁ、うん、色々とあるんだよね」

なんだろう、この子には普通に話せてる自分が居る……はっ！まさか匂いか!?……そんな訳無いか
まぁ、この子の性格、もとい能力なんだろうな

「……そうですか、ではどうしたらお話いただけますでしょうか？」
「……さぁ、暗部でも取り締まる役にでも就いて、政府に口出しできて、頭が良くて、何でも出来て、フレンドリーで、強くて、何事も驚かずに対応できて……そんな所が出来れば良いんじゃないかな、そうしたら何でも話せるけどね」

……俺って最低だな、無理難題を言って、うん、これはただの憂さ晴らしなんだろうな
今日初めて会って、俺に一目惚れしたと言ってくれた子に向かって何を言ってるんだよ……
でもまぁ、コレだけ言えば聞こうとは思わないだろうて、言い過ぎな程だよ

「……分かりました」
「ん、そっか、じゃあ聞かないでくれ」
「いえ、違います……やってみせます」
「……え？」
「言われた事、全てやるわ、うん、全部クリアしてやるんだから」
「口調が変わってないですか？」
「え？コレが地よ？さっきのはギドさんに言われたのよ、こっちの方が気に入るだろう、って」
「……ギドさん、アンタ何やってんだよ」
「でもまぁ、やる価値はあったわね、良い事が聞けたし」
「……流石に出来ないと思いますが？」
「やれる、は違うわね……やるのよ、そうすれば何でも話してくれるんでしょ？」

「……」
「ここでも無言は肯定を指すけど？」
「……出来たらですけどね」
「ふふっ、ええ、出来たら、ね」

手の上で転がされてる気分だけど……うん、悪くは無いなってか、それじゃあまるで楯無さんじゃないか……いやいやいや、あの人は更識だから違う、うん、大丈夫、別人だこれ以上一夏ハーレムの人数が減ったら……内容が結構変わるよね？うん、生き延びれるかな？
でも……最近は原作もどうでも良くなってきた、続きも同じ、ちょっとシリアスな話になるんだけどね
だってさ、ここには俺が居る、厨二な事を言うかもしれないけど、良くなかったか？この世界に俺が居たらこうするのに、みたいな想像それが現実（リアル）であるんだぜ？他の人が聞いたら怒られるよ、俺でも怒ったかもしれない
今まではあれだ、小説の続きが見たいなんて言ったからここに居るって思ってさ、原作原作と気にしてたんだけどさ、色々と思ったんだよ
ここにいる人は皆が生きてる、小説の中の話じゃなくて、生きてるんだよ
少しでも原作と違う行動をしても、壊れたり止まったり、会話にならずに進むんじゃない、話が出来るんだ
母さんだって、父さんだって、千冬さんだって、束さんだって、一夏だって、箒だって、シャロだって、ヘレンさんだって、ギドさんだって、レトアさんだって、コレから会うはずの知らない人だって原作には関係の無い人、特に理由もない人、茂武気屋螺だっけ？あいつだってそうだ、生きてるし、痛みも感じる、恋だってする、泣いたりもする
正直、気づくのが遅かった、もう少し早めに考えれば良かった

考えたくなくて、何時の間にか考えない様に心を変えていた、なんて良い訳を言うつもりは無い
これは俺の過ち、他の人からしたら分からないだろうけど、この世界の住人全員を侮辱したという過ち
全員が、全てが作り物だと考えて……自分の、自分勝手な考えの為に人を軽く見てた
でも……うん、心としては感じてたんだと思う、だからこそ、父さんが危なくても、自分の身が怖くて、それよりも父さんが死ぬかもしれないという事実が、父さんを助ける為に操縦者殺してしまう可能性があるのが怖かった
本当に馬鹿だと思う、何で今まで考えなかったんだろうな……母さんだって怒ってくれた、優しくしてくれた……それでも考えなかったうん、何やってるんだろうな・・・・・…馬鹿丸出しじゃん

「……おいで」

そう言って俺を包み込むレトア
まるで母さんみたいな感じ……落ち着いて、安らいで

「……なんでこうなるんだよ」
「だって、荒榎が泣きそうな顔をしてるんだもの、許婚としては抱きしめるでしょ」
「お前は何歳だよ……まったくよぉ」

……うん、落ち着いた
もう大丈夫、今までにみたいに心を変えて対応した感じじゃない
普通に、何事も無く、心に落ちた

「……で、何時までこうしてるんだ？」
「あら、タメ口のままなのね」

「いや、もう面倒だから……別に良いじゃん」
「そうね、まぁお姉さんもそっちの方が良いかしらね」
「お姉さんって年でも無いだろ」
「失礼ね、コレでも2年違うのよ？私は小学三年生なんだから」
「うん、俺は小学二年生だから一年の差だな」
「……本当に？」
「本当に、……ってか、嘘つく必要が無いし」
「ええ～、折角お姉さんだと思ったのに……まぁ良いや、荒榎が許婚なのは変わらないし、何時かは結婚するんだから、年は近い方が良いわよね」
「……結婚て、考えが早いだろ」
「あら、することに否定はしないのね」
「……」

うん、いやね、流石にコレだけの美少女に結婚の話しをされますとね……この世界を認めた所だし
我ながら心変わりが早いとは思うんだけどね、それにシャロもいるし……でもね、うん、即座に否定は難しいんだよ、分かる？美少女、しかも許婚が、その上で俺に一目惚れをしたと言う子が、結婚を前提の話しだよ？

「……いや、流石に」
「随分と悩んだのね、勿体無かった？」
「……」
「この場の無言は肯定よ？」
「……」
「ふぅん、勿体無かったんだ……脈アリと考えて良いのかな？」

凄い遊ばれてます……うん、これだけきたら言い返さないとね

「逆に話したくも無いとは考えられないのかな？」
「そうだったらこの返事もしないでしょ？」
「いい加減に煩わしいと思ったとしたら？」
「……え？」
「……え？」
「…本…当？」
「あ、いや、その……冗談だから、泣くな」
「え？目にゴミが入っただけだよ？」
「……参りました」
「アハッ♪」

うん、無理だった
今時こんな手に引っかかる奴は居るのだろうか……俺が居たわ
ってかさ……口調がさ……楯無さんだよね、うん、更識楯無ですね
でもあの人って更識家の人だよね？……まさかの二人目！？
え？何？学園で鉢合せフラグ？嫌だよそんな事、楯無さんが二人分
とか……辛いから
うん、考えるのは止めよう……怖いからじゃないからね！

「……さて、戻ろうかな」
「そう、じゃあ私も」
「……何処まで着いて来るの？」
「何処までも、三途の川だろうと、閻魔の所だろうと、地獄だろうと
「……」
「その前に言われた事をこなさないとね」

そう言ってスキップで部屋に入るレトア……早まったか？

「地獄までね……何でシャロと言いレトアと言い、俺なんかに惚れ
たんだ？」

うん、全然分からない……しかも二人とも一目惚れだし
一生掛かっても分からないだろうな……うん
まぁ、とりあえずは観光だな、部屋に入って、と

「……さて、観光しましょう」
「もう良いんだね？」
「もちろん、何時でもです」
「そう……それじゃあ、何処に行く？」
「……さぁ？」

何処かなんて全く考えて無かったよ……

「とりあえず、お城に行きましょうか」
「お城…と言うと、ノイシュバンシュタイン城かな？」
「ええ、前から行きたいと思ってたのよ」
「……うん、そんなに遠くは無いし、良いと思うよ、荒榎は？」
「賛成、他の意見も無いですしね」
「うん、それじゃあそうしようかな……ギドはどうする？」
「俺はそろそろ帰るさ、さぁレトア、行こう」
「ギドさん、私は荒榎君に」
「……キャラ戻したんだな」
「ええ、あまり受けが良くなかったの」
「……いけると思ったんだがな」

……オイコラ、アンタは何であれでいけると思うんだよオイ
どう考えても変だろ、召使……あれはどちらかと言うとメイド、その上従順で不思議系で……あれ？今何処かから殺気が飛んできたような・・・・・そんな訳無いか、殺気を感じる事すら出来ない、っていうか分からないのに

でもまぁ……可愛いかと聞かれれば可愛いとしか言いようが無いが……まただ、何故かは知らないけど殺気だと分かるが、何でだ？

「荒榎君も気に入らない様だったし、普通に攻めるわ」

「ああ、頑張ってくれ……じゃあ」

そう言って帰っていくギドさん

そうか、レトアは頑張るのか、何をか知らないが、頑張ってくれ…

……いや、うん、分かってるけどね

ってか、コレ以上何を頑張るんだよ！……攻め方か？もっとアグレッシブになるのか？……アグレッシブって何だっけ？

あれか？ガンガン攻めようぜ！みたいな？……止めて欲しいな

「さて、それじゃあ行きましょうか」

「はい香織さん」

「良いのよ？そんなに畏まらなくて、いっその事お母さんとでも言って頂戴、このこは母さんとしか呼ばないのだから」

「いえ、それは結婚が終わってからに」

「そう、荒榎には勿体無い子ね」

……あれ？普通は許婚って片親は反対するものじゃないの？

何で家の母さんはそんなにフレンドリーなんですか？何があったんですか？

「……どうやって母さんを説得したんだよ」

「何も、が正解ね、逆によろしくお願いされちゃった♪」

「……家の家族は何処かおかしいです」

「あら、そんな事を言えるのは今のうちだけね、暫らくしたら暗部を占める私を結婚するんだもの」

「……はぁ」

そうじゃん、確かにそうなるわな……出来たらだけど
いや、ちょっと邯鄲過ぎたかもしれないな、うん、何時の間にかな
ってそうだよね

「でもあれだ、俺としては簡単に結婚結婚言ってう人は問題外なんだがな」
「さて、それじゃあ楽しみましょうか」
「変わるの早っ!?そんな簡単に変わるの!?」
「当たり前よ、今も昔も私は貴方の為にあるのよ?」
「……重い女だな」
「お姉さん?軽いわよ?今は25kgほどかしら?」
「いや、そっちの話じゃないんだが……軽いな」
「でしょ?重いのは荒榎に対する愛だけよ」

そんな簡単に言われましても……
っていうか、普通は自分の体重の方が隠す方だろ、逆だよ逆
あれ?ひょっとして……

「俺はもう少し愛とか結婚とかは考えないで付き合いたいな」
「ええ、そうね、さぁ行きましょう」

……あれ?軽く流された?
いや、まぁ、うん、流されたね……で、でもあれだ、暫らくして
熱が冷めてきたら自分の行動が恥ずかしくなってくるさ!俺も……
あったような気がする
……大丈夫だよね?

「ほら、あれがノイシュバンシュタイン城よ」
「……いや、近過ぎだろ……あ、ホテルが見える」

「城を見るのは最適のお部屋って書いてあったから当然ね」
「……出てきた意味は？」
「中は見たくないの？」
「……見たい」
「うん、お姉さんは正直な子が大好きよ、さぁ行きましょう」
「……さいで」

父さんたちが二人でラブラブムードを作ってるから近づけなかったです、はい

その間中ずっと振りまわされました、いや、どちらかと言うとあれだ、ガイドさんが付いた感じ
凄く……詳しいです……ちくせう

「何でそんなに詳しいんだよ」
「だってお姉さん、ここは何度も来てるもの」
「あんたロシア人じゃないのかよ！」
「正確にはロシアで生まれて、捨てられた日本人らしいわ」
「なんだってー」

HAHAHA!目の色が変わってるYO・・・・・・・・・何で?(後書き)

・・・・・・・・・・あれ?色々と間違えた気がする
主に恋愛方面とか、恋人方面とか・・・・・・・・・変わらないけどね!
・・・・・・・・・・・・はぁ、うん、やりすぎだよね
さて、うん、あれだ、逃げだ
だってさスイスの名所なんて覚えてないよ!調べても何処にあるのかが分からないよ!城で精一杯だよ!そして城は何処にあるんだよwww!
これって家族旅行だよね?そうだよね?日本に帰ったらまた忙しくなるんだよね?
シャロが出てくるんだよね?・・・・・・・・・・・・・癒しが、癒しが欲しい
そして思った、俺はどうでも良い時に大切な話を出している気がする
主に重要なこととか重要なこととか重要なこととか

楯無さんの苦闘が分からない!うん、これで良いのかな?
変だと思ったら・・・・・・連絡でも、する?
・・・・・・・・はぁ、今更だけどやりすぎたね!うん!
これって真の誰しだよね?あれ?俺は一体何をしたいんだろうね・・・・・

そろそろ頑張って戦闘シーンを書こうかな、いや書かないとね!

人生とは知らないうちにも進むんですよ・・・・・・はぁ

「で……もう帰る日ですか」
「荒榎、大丈夫？」
「いきなり何を言ってるんだい？」
「お姉さんが付いて行ってあげようか？」
「最後の自重しろ！」

うん、まぁ、あれだ、何時の間にか帰る日になってたんだ
色々あったんだよ、色々……え？教えて欲しい？面倒だから今度で
まぁ、簡単に言うとあれだ、レトアに連れまわされてレトアに連れ
まわされてレトアに連れまわされて……はっ！殺気！？
いやいやいや、俺も自重しないとな、大体この状態に何の得が？…
…いやいやいや、よく考えて、毎日毎日、レトアに振りまわされて
るんだよ？これって家族旅行だよね？
母さんと父さんは二人でラブラブいちゃいちゃとしてるけど……う
ん、部屋も別にされた、レトアとおな・・・・・…コレ以上は怖
いから黙っておこう
それでだ、偶に聞こえるんだよね、声とか……内容は想像にお任せ
します
いや、あんまし聞こえなかったんだけどね、何か話をしてるのだけ
が聞こえるから気になってしかたがないんだよ、その上でレトアは
近づいてくるからね
と、まぁ色々とあったんだよ、主にレトアのおかげで疲れる内容が
ね……まぁ、色んな所を回れたからそれはそれで……いや、やっぱ
り割に合わない、うん
そんな事が……一週間ほど続いたかな、ついに帰る事になったんで
すね、はい

「荒榎、やっぱりお姉さんも付いて行った方が……つまんないし」
「いや、大丈夫だし、そこまで酷くは無いし……って、今つまんないって言った!?それが理由!?」
「だって、お姉さんは荒榎の物になっちゃったんだから、恋愛も出来ないし……それが荒榎の許婚の証明なんだけどね」

これは、あれだ言うしかないな

「恋愛はしても良いと思うけど……ってか、自分を物扱いするなよ、結構美人なんだから、危ないぞ?夜道とか」
「……え、あ、うん、まさか普通に返されるとは思わなかったなあれ?そう言って欲しかったんじゃないの?」
「うん、それはそうなんだけど……荒榎って結構Sだったり」
「人をS呼ばわりするな、どちらかと言うと……Sで合ってるな」
「でしょ……それもそれで格好良いけど」
「最後の呟きは聞こえなかった、うん、聞こえなかった」
「その照れかたも可愛い……お姉さんは荒榎が襲われないかしんぱいになっちゃったよ」
「俺は男だ……女のソレはいないよな?」
「……」
「え、ちょ、目を逸らすな、ってかいないでしょ?」
「……あ、うん、居ないと思うよ?」
「只の考え事だったのか!?……はぁ、疲れた」
「お疲れ様、私でも食べ……チョップは痛いよ」
「道中で何を言おうとしてるんじゃこの駄子は」
「え?言って欲しかったんじゃないの?」
「誰が頼むかアホ……俺が崩れてく」
「ほら荒榎、イメージイメージ」
「……よし、大丈夫……ってか父さん、助けてくれても良いんじゃ

ないかな」
「荒榎が何処まで人格を留めておけるか気になってね」
……鬼だ、鬼が居る
あれ？言ってなかった？父さんに人格……まぁ心の操作を習ったんだよ
うん、あれはキツイ、心が……五回は壊れたんじゃないかなえ？内容？……・・聞かないで、思い出したくない
うん、父さんは鬼教官だった、千冬さんよりも、こう言えば辛さが分かるかな？

「さて、そろそろ行こうか」
「ええ、そうですね」
「はいな、それじゃレトア、元気に頑張ってくれよ？……前の約束は忘れて言いから」
「つまり忘れて欲しくないのね、荒榎は病気にでもなってね、お姉さんがお見舞いに行くから」
「……絶対に病気にはならない、うん、絶対だ」
「お姉さんじゃ不満？荒榎はえっちなのね」
「何故に！？どう繋がったらそうなった！？」
「大丈夫よ、お姉さんの体は荒榎の物だから」
「……よし、もういいや」

勝てる気は全然しないな！

「アハッ♪じゃあね荒榎……元気でね、絶対に迎えに行くからね」
「来なくて良い……とは言えない雰囲気だな、期待しないで待ってるわ」
「うん……それじゃあ、ね」
「また、どっかで会うだろ」

「うん……」
「荒榎、行くよ」

後ろ髪惹かれるとはこの事だろうな……何時の間にかここまで馴染んでいる、いや仲良くなっているとは思わなかった……いや、自分のことなんだけどさ
結構簡単に離れて行くものだと思っていたんだけど……逆に時間が経つほどくっ付いてきたよ
大変だった……んだけど、これだけ色々な事があるとね、結構情が移った、と言うのが正しいんだろうかな

「……」
「……また会えるさ」
「そうよ、会いたくなったなら呼べば良いじゃない」
「……いや、それは無理だと思う」

レトアはもう暫らくは会わないだろうな、あっちも多分誘った所で出てこないと思うし
最後の最後までレトアの目が決意した目に見えた、、あれは何かをやり遂げようとする目、だと思う

「アイツ……本当にやる気だな」

まさか、憂さ晴らしで言った事が……いや、ここまで来たら覆せないよね、うん、認めるしかないよね
もう少し難しい事を言っておくべきだったな・・・・・・いや、もう十分か
逆にあれだ、達成できなくて姿を現さない、なんてことになったら……それはそれで嫌だけど

「……まぁあれだ、成る様に成れ、だな」
「多分達成しそうだよね」
「そこがちょっぴし怖かったり……って」

後ろには父さん……何で知ってるの？

「窓一枚だしね、あの位の大きさの声なら聞こえるよ」

あんたは何処のスパイだよ、なんて言いたくなるよね……そういや日本のスパイだったわ

「暫らくは掛かるかもしれないけど……あの子はやるよ、荒榎も覚悟は決めておいた方が良いよ」
「……うい」
「うん、でもまぁ、あの子と結婚はしなくても良いと思うよ？」
「ヲイ、父さんが決めたんじゃなかったの？」
「うん、そうなんだけどね……荒榎に本当の好きな人が出来て、レトアちゃんを捨ててでも、あの子との仲が壊れても良い、なんて思えたら……うん、その事結婚すると良いよ」
「……出来ないと思うけど、まぁそれはそれで考えておきますよ」
「うん、今はそれでいいと思うよ……さて」

そう言って立ち上がる父さん、もう空の上なんですけどね

「僕は用事を済ませないとね」
「……帰ってきてくださいね？」
「もちろん、荒榎との旅行もまだ一回しかしてないしね」
「……ちなみに、どちらに？」
「ん？ドイツ、そろそろ五月蝿いからね、決着でもつけてこようかなって」

「……」

うん、あれだ、この人も常識外だ、うん、絶対そうだ、一人で国家に喧嘩を売るとか……あれ？売られたのか？

いや、最初はこっちだから売ったであってるね……そうじゃん、もう前に売ってるじゃん

つまりはあれだ、コレはもう始まってるんだね……なにソレ怖いってか、父さんが危ない気がするな……よし

「ドイツなら……なんとかなると思うんですけど」

「荒榎なら出来そうだけど……流石に子供に頼るのはね」

「それじゃあこうしましょう、俺はもう少しで行方不明になります、それからは母さんが守れません」

母さんを囮にすればＩＳが奪える、とか考える人もいそうだしね

家にＩＳの設計図があるかも、何て考える人も同じく

「だから父さんが守ってください、母さんと家を、俺が帰ってくる場所を」

「……そこまで言われたら断れないよね」

「東間さん……」

「分かったよ、うん、僕は家に居る、香織さんと荒榎の帰ってくる場所を守る」

「決定ですね？もう変えませんね？」

「変えないよ、僕は家に居る、荒榎がドイツをなんとか出来るならだけど」

「余裕ですね、簡単な話です」

コレで問題無しだな……多分

さて、ドイツね……情報で良いのかな？

ＡＩＣの情報でもあげたら問題無いと思うんだけど……それで良いよね？
元々ＡＩＣはＰＩＣの改造型だからね、ＩＳを作った俺には簡単に出来ましたよ、はい
コレだけでも十分に活用できるんだし……あ、エネルギーが無いと駄目か……なんとかなるよね！

「そっか……命がけでやろうとした事が余裕って言われると、うん、結構くるね」
「……なんとかです」
「いや、大丈夫、問題無いよ、実際は余裕なんだよね？」
「……はい、普通に、簡単に、こっちが上になるように出来ます」
「うん、僕の息子は出来過ぎなんだね」

お言葉ですが父さんよ、あんたもあんたで凄いと思うよ？
ところで……

「今回の運転は誰がやってるんですか？」
「ん？ギドだよ？」
「……前回別れた意味は何だったんだよ」
「さぁ、会いたい人がいたんじゃないかな」
「……さいで」

もう疲れた、寝る、うん寝る
お休み……まだ昼だけどね、心を操作すればこんな事は簡単に……出…来……る……

「……１２８個目、かんせ～……むぅ」

眠い、ものすごく眠いでｓ……はっ！

「ここは何処だ……ってか暗いな」

目が覚めると何処か、うん、何処か、それしか言いようが無い
目が塞がれてる訳じゃないんだけど、凄く暗いです、はい

「……誘拐？」

いやいやいや、何故に誘拐になる？言ったのは俺なんだけどね
理由が無い……事も無かったな、うん
ＩＳとかＩＳとかＩＳとか……とりま、うん、一応の装備？の確認だな
妖幻は……あるな、何故に取らなかったんだ？眼鏡も……ある
手は紐で結ばれて……普通に動くんだけど
え？あれ？何？どうなってるの？一体何がしたいの？
ってか、父さんと母さんは？……っ！

まさか死んで……な訳無いな、うん、ありえない、ジェット機相手に勝てるんだからな……別名チートで良いんじゃないか？
母さんも……うん、元首相の秘書でドイツ？と繋がりがある人に手を出すまでの理由が無いし……父さんが黙ってないだろうな、うん
逆に誘拐犯に哀れみを送りたいよ……いや、送らないけど
さて……立てるし、ってか拘束が無いし、その前に持ち物も手元にあるし……

「何がしたかったんだよ……」

あれか？ＩＳを作れ、みたいな？……甘いな、俺だったら首に電気が流れる首輪をつける……やられてなくて良かったわ、うん
まぁ、とりあえず……

「扉発見～……これは出るしかないでしょ」

目の前に扉がありましたとさ……これって本当はドッキリとかじゃないよね？
でもそれが会ってる気がしてきた……だって凄い普通なんだもん、でもまぁ安全、もとい俺の安心の為に焔顎でも展開しておくか
本当なら妖幻を展開したいんだけど……部屋が狭くてね

「妖幻、部分展開『焔顎』」

両手に持って……声無でも動くようにしたいな～
プロト機だからか知らないんだけどさ、これは声で反応するんだよね……いや、改造すれば良いんだけどさ、忘れてた
まぁ、帰ったらやりましょうかね……、あ、ついでに言っておくとね
焔顎は本当は二つで一つなんだよ、両手武器と言った方が正しいん

だよね
まぁ、それはどっちでも良い事な訳で……

「……せーのっ！」

一気に扉を開けて焔顎を構える
前、問題無し、ただ背景が崖
右、問題無し、ただ背景が崖
左、問題無し、ただ背景が崖
結果、なんでやねん

「ほんまになんでやねん」

つい全部がひらがな、しかも何処かの方便になってしまった感じ
うん、本当になんでやねん、ここは何処だよ……
なんだろう、安全とか言いながらも少し緊張して焔顎を出した俺が
馬鹿みたいじゃん……

「……ってか、ここ何処だよ」

全く見覚えが無い、うん、微塵も無い
ぶっちゃけ初めて見るとしか言い様が無い程に、うん見た事無い
ついでに言うと何処から出るんだよ……あ、扉
分かりにくいなオイ、右の風景にあったよ、色が塗ってあったけど

「とりあえず……行くしかないよね」

落ち着いて、よし、扉を開ける！
そして焔顎を構える！
右、問題無し、ただし機械の山

左、問題無し、ただしＩＳのコアの山
前、問題無し、ただし人物一名
結果、無視しよう

「あっ君、心中だよ！」
「誰も居ないな……」
「ちょっとちょっとあっ君！無視は酷いよ！」
「……おかしいな～」
「そこまで無視！？束さんは泣きそうだよ！」
「…誰か泣かないかな～」
「そっちなの！？泣く方を求めるの！？あっ君の鬼！」
「やかましい！あんたは一体何がしたいんだよ！そしてここは何処だよ！」
「ここは束さんの秘密基地だよ、偉いでしょ、ちゃんと隠れる所も考えてたんだよ」
「……国名は？」
「ん？そんな事は良いんだよ、ほらあっ君、ここからスタートだよ、これからは束さんとあっ君のラブラブ青春ストーリーだよ！」
「国名は？」
「何処でも良いんだよ……あっ君、何で睨むのかな？束さん泣いちゃうよ？」
「国名は？」
「えっとね……ワシントンだったと思うよ」
「……」

うん、アメリカですね、うん、あれだ……なんでさ

「何で連れてきたんですか？」
「だから心中だよあっ君、前に言っておいたでしょ？」
「……あれは後１ヶ月以上先の話ですけど？」

「そんな些細な事は良いんだよあっ君、これからが大事なんだよ！」
「どうやって連れてきたんですか？母さんと父さんは？」
「あっ君を連れて行くって言ったら送ってくれたよ、良い親だね～」
「……なんでさ、本当になんでさ」

父さん、母さん、もうちょっと粘ろうよ……
特に母さん、あんたには行く日にちを伝えてあったでしょ？おかしいとは思わなかったの？
父さんもさ、普通なら守る所でしょ、そこは、元スパイなんだからそれ位はしてくれよ……ＩＳ出てきたら無理か？
……うん、ごめん、流石に無理だな、うん……ちゃんと生きてるかな？ま、まぁ束さんだし、殺しは……しないと思う、うん大丈夫

「ってな訳であっ君、ＩＳ作るよ！」
「どんな訳ですか……まぁ、作る分には問題無いですけど、っていうか家で作っちゃってたし」
「おお～、さすがあっ君だね、幾つあるの？」
「２５個ですね、動くのかは知らないですけど」
「そっか～、じゃあ後１７５個作っちゃお～」
「一体幾作る気ですか？」
「えっとね……５００個位かな？適当に作っちゃって、色んな所にドーンって渡して、大会も開いちゃうんだよ、そしたらちーちゃんが一位になるんだよ」
「……さいで」

うん、結構あってるね、大会も出来るし千冬さんも優勝
この人は一体何処まで見てるんだろうね……未来も見てるんじゃないよね……それはないよね
ってかＩＳって４６７個しか作らないんじゃないのか？あれ？俺が間違ってるのか？

ひょっとしてあれか？作る途中で、もう面倒だからいいやー、とか言って終わったのか？
じゃあ俺が居たら数が増えるじゃん……しょうがないからあまりは俺が持ってるか、ついでにゆっくり作るか

「まぁ、それもそれでありか……はぁ」

人生とは知らないうちにも進むんですよ・・・・・・はぁ（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・あはは、あははは、あははははははははははははは・・・・・・・・・・・・・・・はぁ、何があったし
うん、ＰＶがね、ＰＶがね？何時の間にか２１４，０４３アクセス
うん、どうしてこうなった
まぁ、嬉しくない訳じゃないんだけど・・・・・・・・・・・・・こらそこ、ツンデレとか言うな、もしそうだったらキモイから、ありえないから
でも、うん、なんだろう、最近はもうひとつのほうが書けていない・・・・・・・・・・・おかしいな、あれの途中に思いついた妄想を書いていたはずなのに・・・・・・・・・・・ついでに言うとこっちの方が日別でも月別でも見てくれる人が多かったり、うん、ユニークもなんだ・・・・・２２，０６３人
これは自慢じゃない・・・・・・・・とは言えないな、うん、ある意味これも自慢だ
でも聞いて欲しい
どうしてこうなった！！

うん、つい縦で言いたくなるほどだよね・・・・・・・・・ああ、
そういえば、地震は大丈夫ですか?自分のところは余裕でした
気持ち良い揺れでした、うん、本当に
あれだよね、束さんが言った言葉だよね
なんだっけ?平等であったことは無い、だったかな?
そんなかんじですね、はい

さて、そろそろ今回の話に戻ろうか、うん、現実逃避なんだ

だってさ、スイスだよ?スイスって何があるの?
書いてて気がついたんだけど、何も知らなかったよ!
城だって調べたから出たんです、はい
え?なら調べろ?・・・・・・・・・・近くに何があるかなんて分
からないじゃないか!うん!分からない!
で、まぁこうなりまして・・・・・・・・・レトアのセリフは・・・
・うん、やりすぎたさすがに反省、でも後悔はしない!うん、結構
本気かも・・・・・・・・・駄目な俺!

で、まぁその後は・・・・・・何をしたら良いんだ?見たいな感じ
になったので、うん、ちょこっと考えを変えまして、旅行を早めて
みたり、いや、本当は残り10日位になったら行かせようかな~、
なんて・・・・・・良いじゃないか!
うん、まぁ問題は・・・・・・あるのか?
何故に崖かって?心中だからですwww
いや、この場合は無理心中なのか?
まぁ、そんなことをしたら真中一家が黙ってないでしょうけどね!

さて、次回は・・・・・・・・・・どうなるんだ?
なんとなくでアメリカに行かせて見たけど・・・・・・・・・・・

別に何処でも良かったんじゃにぃか？

・・・

束さんと一緒！・・・・・・・なんだろう、喜んで良いのか分からない（前書き

さて・・・・・・これは、うん、あれだ・・・・・・・・・・どうぞ

！

束さんと一緒！・・・・・・なんだろう、喜んで良いのか分からない

「……よし、その条件で頼みます、はい……はい、そうです……
交渉成立ですね、それじゃあ」

只今電話に出れません……いや、電話してるからなんだけどね
何処にかって？もちろんドイツですよ、父さんの事をやってなかったんでね
まずは連絡、それで交渉、後でデータを送る感じにしましたよってな訳で

「送信っと」

これでドイツのパソコン・・…いや、どちらかと言うとスパコンにデータが入ってる筈
送り方？普通に送れば良いんだけど、それはね、ちょっと嫌だからね、父さんの報復もかねてハッキング警告と共にデータが行く様にしましたｗｗｗ
これは嫌がらせの域を越えているんだが……まぁ良いや

「あっ君～、終わった？」
「終わりましたよ、ほら」
「よいしょっと、やっぱり落ち着くね～あっ君は抱き枕に良いよ～」

現在の状況？分からない？いやうん、分からなくて良いと思うよ？
外は夜、ここは隠れ家、ベットは一つあった、枕も一つ……じゃないけど……まぁコレで分かるよね？
いや、分からないで、うん、俺も分からない、分かりたくない

俺も反対はしたんだよ？っていうか反対ばっかりだよ？それなのにさ、あっ君なら大丈夫だお！襲わないよね？襲っても大丈夫だけどいいえ、大丈夫じゃありません、大問題です、っていうか、俺はまだ小学……二年生です、そして束さんは中学二年生です……だよね？問題だよ１

……俺って束さんとそんなに話してないよね？……ＩＳ関係で話したわ……、まぁ問題無し！うん！無い！

「……んっ……んぅ」

「……この状態だと美少女なんだけどね」

うん、美少女、寝てたら美少女、滅茶苦茶可愛い美少女

あれだよね、小説ではそこまで可愛いとは言われてないけど、うん。可愛いと思うよ

シャルロッ党とかセシリア党とかラウラ党とか箒党……は聞かないけど、色々とあるのに何で束党は無いんだろうね……言いにくいからか？

鈴党もあるのかな？あと千冬さんとか山田先生とか、うん、居る分には居そうだな……もう分からないけど

逆にもうＩＳが終わってて他の作品に皆が移動・・…とかもあったりして

さて、うん、ここまで話してきたけど、あれだ、現実逃避なんだだってさ

「……んぅ……んゅ」

「……うっわー」

何でこの人こんなに色っぽいの？

束さんってこんなキャラだったっけ？

……キツイわ～、うん、色々と精神的に

よし、もう寝よう、うん、寝よう、さっさと寝よう
心を改変して……落ち着けないから出来ないのですね、分かります
いやいやいや、その為の練習だったのに……はっ！まさか世界の
抑止力が！……無いわ、うん、無いわ、ありえないわ
この状態で寝るのが許されない世界ってどんな世界だよ……こ
こですね、分かります
なんだろう……神様が遊びでやってそうだな……いや、流石に世
界に手は出せないか……出せないよね？

「……失敗か」
「ん？何か言いました？」
「むにゃむにゃ、何も言ってないよ～」
「言ってないのか、それならしょうがない」

さて、もう一回寝る為に心を改変、おお？今回は上手く出来たぞ？
何でだ？
……てか今束さん喋らなかっ……た……か……

「……んぅ……熱い」
「熱くないよ～、丁度良いよ～」
「……なら、しょうがない……」

眠い、凄まじく眠し……でもそれ以上に熱い
何があった？いや、何が起きてる？俺の体はどうなってるんだ？

「……んぅ……ふあぁぁぁぁぁぁ……ぁ…ぁ…あれ？束さんは？」

見当たらない、部屋には居ない、布団にも居ない……事はなかった、うん、いた
普通に居た、いや、正確には普通じゃないな、うん、あれだ……
俺の上で寝ていた、うん……よし、寝よう

「……んみゅ……あっ君だ～」
「何故にこのタイミングで起きたんだよ……ってか、退いてくれません？」
「あっ君～、あっ君の香り～」
「……駄目だこの人早く何とかしないと」

色々と危ない、主に俺が……いや、結構不味いですはい
あんた胸がデカイんだから……いいや、そんな問題じゃなくて、とにかく俺の理性がヤバイ、ヤヴァイ、ヤヴァ過ぎる
寝ぼけた顔とか結構可愛かったり……はっ！落ち着け俺！束さんだぞ！？あの知り合い以外にはとてつもなく扱いが酷い束さんだぞ！？

「……あっ君！？」
「……とにかく降りて」
「ふみゅ～……温いよ～」
「いや、寝るなて……本当に寝たし」

早いだろ……あれ？遅いのか？
起きるのが遅いだろ……うん、多分これが一番合ってると思う
いや、何言ってるんだ？持ち付け、うん、持ちつくんだ……落
ち着こうじゃないか諸君
俺一人だったわ……ふぅ、よし落ち着いた、はず

「それで……ＩＳの山～」

うん、丸い宝石の山みたいな感じ、何故だかは知らないんだけどコ
アだけだと丸い宝石なんだよ
うん、あれ？セカンドシフトが無かったら丸いんだっけ？妖幻は何
時の間にかひし形だからな・・・・・ひょっとしてセカンドシフ
トが終わってる？
だとしたら何時の間に？……分からん

「……ふぁぁぁっ、あっ君おはよ～」
「あ、おはようございます……ってか、一体幾つ作りました？」
「んとね～……４００個位かな？」
「何時の間に……７５個も作ってたのね」

昨日の間に７５個……しかもあの間に？
いやいやいや、早いって……いや、俺も作ったんだけどね
流石にそんな簡単に作れちゃう物だっけ？
俺は昨日は……３５個が限界だった、うん
つまりは束さんが４０個……あれ？いけるな、うん
何時の間にか人外になってそうだな……まだ違うよね？

「さぁあっ君、作るよ、えいえい、お～」
「……お～」

掛け声は要らない思うんだ……ってか、一日あれば１００個くらい簡単に作れるんじゃないのか？

「……フラグじゃないよ？」

「なんて考えていたときもありました」

「完成～、あっ君、出来たよ～」

「ああ、うん、もう良いや、出来た～」

うん、出来ちゃったんだよ、しかも５０１個、うん、作りすぎだねこれは不味い、と言う事だから俺が持ってようかな……あれ？

「束さん？ここには５０１個あるんだよね？」

「もっちろ～ん、全部で５０１個、今さっき数えたお！」

「いや、もうそのネタは良いから……でもさ、俺の手元にもあるんだよね」

「へぇ～、何個あるんだい？」

「……２５個」

うん、自分が作ったのを入れてなかった、いや、最初には入れてたんだけど
うん、途中で数えたときに入れてなかったからその分作っちゃったね！……・いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや、不味いでしょ不味過ぎるでしょ不味いとしか言えないでしょ！
どうするよ！どうすれば良いんだよ！謝るのか？謝れば良いのか？
……何処に謝るんだよ！すいません！

「それはあっ君が持ってれば良いよ～」
「……そうだよね、うん、そうすれば問題無い」

日を浴びる事が無いＩＳを作っちゃったぜ！
待てよ？エネルギーを溜めておいて……うん、使える、これは良いかもしれない
え？内容？それは使うときまでのお楽しみだよ、ムフフ
うん、問題無しだな、そうとなれば……

「よし、帰ろう」
「あっ君！観光だお！」
「今思いっきり帰るって意思表示したのに連れて行かないでよ！……そして襟が伸びる！何故か知らないけど襟が伸びる！」
「いっくよ～」
「何でだよ！」

「で、こうなるんですね」
「おお～、あっ君が喧嘩売られてるよ～」
「いや、束さんですよ」
「テメェラ！調子に乗ってるんじゃねェヨ！」
「うわ、何処の似非中国人だよ」
「俺達はアメリカ人ダヨ！」

現在両手で二人の大人を拘束してます
この状況？外に出たら色々な人が溜まってました、はい
それでね、まぁ束さんは結構な美人です……これで分かるよね？
ナンパですよナンパ、もう嫌だね～ナンパなんて、誰が得するんだよ
結局は捨てられるんだから、する意味無いし、断られたらもう犯罪だよね
返事の前に肩に手を置こうとするしさ……いや、流石に防いだよ？それで両手が塞がったんですよ
でもさ、束さんが誰も居ない、みたいな感じでどんどん進むから人が集まるんですよ……もう嫌
そして最後には「君達五月蝿いよ、邪魔だよ、何処か行ってよ、話すことなんて無いし同じ空気を吸うのも嫌だよ」……この状態でそれを言わないでくださいよ……

「こ、このクソ野郎が！」
「いや、束さんは女ですが」
「あっ君、まさかの俺の女発言だお！これはもうお嫁に貰って貰うしかないよ！」

「いや、俺のって言ってませんから……ってか、両手が塞がってるから助けられないんですけど」

こいつ等離して良いんならなんとかなりますけど……撃っちゃ駄目？ですよね～

「よし、こうなったらあれだよね」

妖幻を起動、成功だ！やったよ！声に出さなくても出来る様になったよ！いや、改造したんだけどね

でもまぁ、時間が掛かるね……一秒くらいだけど

……あれ？何だこれ、何かが適用されてる……何か入れたか？

まぁ、それは置いておいて

「束さん、動かないでね」

「あっ君が言うんだったら崖の上でも止まっていようじゃないかい」

「ソレは嫌だけど……よし、行きますよ！」

イグニッションブースト……並の早さは一応出せるけど要らないから

適当に車くらいでダッシュ

「束さん、ジャンプして、受け止めるんで」

「おお～これはあれだね……ジャンプ！」

……よし、キャッチ成功、でも何でお姫様抱っこ？

これは必要なのか？俺は普通に掴めれば良いかと思ってたんだけど

……まぁ良いや

「束さんや、あの基地はもう戻れないかもね」
「大丈夫だお！ちゃんと！」

そう言って何かを取り出す……ってかそれＩＳのコアじゃん

「この中に全部入れたお！」
「何時の間に……そしてそろそろそのしゃべり方は止めましょうよ」
「えー、あっ君が真っ赤になってくぁわいいのに……」
「……そんなに赤くなってたのかよ」

ま、まぁね、束さんのしゃべり方は……うん、別に可愛くないわけじゃないし
うん、どちらかと言うと可愛かったりして……いや、今は良いから

「そんじゃあまぁ、破壊しちゃっても？」

ここから見えた感じ、チンピラが入りそうだからね

「良いよ～束さんも自爆スイッチを作ったんだよ、いぇい♪」
「……じゃあ押してくださいよ」
「うん、いっくよ～……えい♪」

ポチッ……なんて簡単な音がすると……うん
一応爆破は出来たね……うん、やり過ぎだけど
結構大きな炎が出来たよ？逆に聞こう、これって大丈夫？やり過ぎじゃないよね？

「ま、まぁ良いや、よにかく……何処に行きます？」
「あっ君が行きたい所で良いんじゃかな、束さんは何処でも良いし」

「……特には無いんですけど」
「……あ、お菓子やさんだよ、あっ君落ちてお菓子を食べよう」
「いや、せめて降りてって言いましょうよ……あ、美味しそうな匂い」

高度は低いよ?それでもここまで匂うのは凄いと思うんだえ?何で見つからないのか?……光学迷彩付けてるもん
第一段階で付けられてたんだよ、ってか、これがあったから色々な国から逃げられたんだよ
まぁ、それは良いや、見つかりにくい所に降りて、妖幻を解除

「さあああっ君!お菓子を食べようよ!」
「それは良いんですけど……お金は持ってます?」
「ないお♪」
「駄目じゃん!買えないじゃん!」
「夫のあっ君が出してくれるんだよ」
「ああ、なら安心、それでそのあっ君は……俺じゃねえかよ!」
「あっ君行くよ~」
「マジですか俺の貯金が……あ、余裕だわ」

うん、無茶苦茶余裕なんだ……14桁て、国は一体何をしてるんだよ
まぁ、あれだ、作ろうとする努力は良いけど……作れないでしょ?意味無いじゃん、諦めようよ、俺の金が増えるだけだよ
それでまた国の借金が増えるだけじゃん、それでも作ろうとするからこうなってるんでしょ?……何この嫌な無限ループ
いや、俺は何もしなくてもお金が手に入るから良いんだけどさ……
そんな状態でIS学園とか……日本じゃない所に出来たらどうするんだよ、俺は日本語じゃないと喋れないよ?

「あっ君〜、ここのアイスが美味しいって言ってるお！」
「いや、それは束さんの考え……まぁ良いか……はいな、じゃあ並んでくださいよ」
「あっ君も早くおいでよ」
「いいあ思いっきりそっちに向かってるじゃないですか」

うん、走ってるじゃん……ってか、何時の間にそこまで行った！？
早いって！あんたの脚力はどうなってるんだよ！

「……まぁ、束さんだもんな〜」

なんとなくだけど……納得できたよ

束さんと一緒！・・・・・・・なんだろう、喜んで良いのか分からない（後書き

・・・・・・・・・ま、まぁ、あれだ、荒榎もまだ小学二年生、
なんて言えないんだよ、心は・・・・・・・・・・やっと小学６
年位かな

そして国の無限ループ
いやね？発表されてるってことは・・・・・・内容も教えたってこ
とになるよね？
それでも作れないからやり直す・・・・・・・・・・ってこと
は特許関係でお金ががっぽりもらえたり、みたいな事を考えたんで
すよ
だってさ、普通は中身が分からないと発表できないでしょ？いや、
現実だと
だからのこれですよ！こうなるんですよ！理解は出来ても作成が出
来ない！
ガンダムＯＯで言うところの圧縮率が分からないですよ！・・・・・
・・・・・・・・・・・こっちは何だろう
そんな感じの今回！束さんが・・・・・・・・・うん、ちょ
っと分からなくなった、これで良いのか？束さんか？
そして前回父さんのことを忘れていた！うん、本当に
フラグは回収しないとね！真面目に
そしてＩＳのコア？発明者が予備を持っていない訳が無い！
でもそれだと束さんが幾つ持ってるのかは分からない！だったら荒
榎に持たせれば良いじゃないか！・・・・・・・・・・そ
してこうなった、うん、やり過ぎだね！

自分的には束さんも大好きだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
あんなクァワイイ人を放っておいて良いわけが無い！

まぁ、そんな感じの暴走話ですた、はい

自分は一体何になるんだろうね！・・・・・・・・・怖いです、はい

「……なんだこれ？」
「ふみゅふみゅ……どったの？あっ君」
「いや、変な物が……」
「……ん～、わかんないね～」

場所は何処かのテラス、いや正確にはアメリカの何て言うのか知らないカフェのテラス
あの後色々と回りました、はい、結構奢りましたね……7桁位？いや、食べ物だけじゃないよ？色々と……ネックレスとか、ウサ耳とか、良く分からない部品とか・……今更な事を言うけどさ、あれって雪片弐型のパーツじゃないよね？……あれ？まだ雪片自体作ってないじゃん

「束さん、千冬さんにはＩＳをあげないんですか？」
「もうあげたんだお！」

早い……あれ？ひょっとして俺出損ねた？雪片作りたかったのに……

「『暮桜』って名前だよ！……こんな感じにしたんだよ！」

そう言ってステータスの映った液晶を渡してくる束さん……って液晶！？何処から出した！？……ＩＳか
大きさは……パソコンと同じ位か、結構大きいな、ってかタッチパネル……時代の先乗りもここまでくると清清しいよね……駄目だろまだタッチパネルなんて開発途中だよ？この人何やってるんだよ…

…まぁ、束さんだし、仕方ないよね

「……なんという暴力、これはいかんでしょ」
「そうかな？大体世界なんて暴力の塊なんだし」
「いや、でも……まぁ、問題なしか」

今初めてバリア無効化攻撃を見たんですけど……うん、これは鬼畜当たれば結構、切れば殆ど消せるからね？消費エネルギーも多いけど、ぶっちゃけこの能力ならおかしくは無い、逆に効率的だと思うよ？
これだけの武器、しかもこの改造品、そんな良いものを使ってるのに勝てない一夏って……
小説を読んだときはあれだ、まぁ初めてだから仕方が無い、とか思いましたよ、ええ
でもさ？良く考えて？残りのエネルギーなんて常時表示されてるじゃん！なんで気が付かないんだよ！何処に集中してるんだよ！
まぁ、初心者には難しいのか？……俺は出来たから分からんな、まぁ俺の場合は神様補修が入ってるけど

「……ってか、その前に戻らないと」
「おおう、すっかり忘れてたよ……でもさ、ＩＳの進化は全てが別々の道だからね、予測も選択も出来ないよ、それはあっ君もわかってることでそ？」
「いや、それは良いんですよ、それより……このデータは何？」
「見た感じだと……接続タイプのデータだね、何かと繋がるんじゃないかな」
「つまりあれですか？繋がる先が無いと使えない？」
「そうだお！……あっ君そんなに落ち込んじゃ駄目だお！」
「もう駄目、束さんの喋り方とかの前に良く分からない進化をした妖幻が分からない」

「でもこれはあれだよね～、第二形態移行だよね、あっ君流石！」
「誉められてる気がしないのは何故だ……まぁ、セカンドシフトになったことだし……ワンオフも使える様になった訳だし……悪くは無いですね」
「ワンオフ……あ、そうだそうだあっ君聞いて！」
「なんですか束さん」
「えっへん、束さんは頑張ったんだお！ワンオフを作っちゃいました♪」
「……へ？」
「えっとね、えっとねちーちゃんのＩＳ『暮桜』に突っ込んだんだお！その名も零落百夜！」
「……ああ」

そうだったな、あれは雪片の力でもあるけどワンオフなんだった……
いや、どちらかと言うとワンオフの括りだな……いや、ワンオフが姉弟そろって同じとかありえないんだけど……
束さんの手か？……そういえばあれって最終的には束さんの手で完成されるんだったな
いやいやいやいや、そんな事よりも

「妖幻の何が進化したんだ？」
「束さんも見るんだお！」
「いや、そんなに近付かなくても……束さん？当ててるの？それとも当たってるの？」
「ん？当ててるの～」
「あ、そう」
「あっ君が反応し無くなっちゃったよ……はっ！まさか倦怠期！？」
「いや、まだ俺結婚すらしてませんから」
「まさかの俺の嫁に来い宣言だね！ならば束さんは今すぐにでも行くお！」

「何処にそんな宣言が！？」
「まだ俺結婚すらしてませんから、つまりは結婚はする、あいては束さんだね！……あっ君なら、いいよ？」
「こんなときに聞きたかった言葉じゃないよね……」
そして何気に色っぽいし……危ないな、うん、飲まれる所だったで、それは良いから調べ事調べ事……

「……」
「これがあっ君の言ってた鬼畜、だね！」
「あ、うん、反論できないね、これは立派な鬼畜だと思う」

だってさ……うん、全処理能力１８％上昇、並列計算２桁増量そのうえでのＡＩＣ改だよ？うん改、某黒い雨の……８５％ほどの効果上昇……ってか、これは鬼畜
分子の動きも止められるね！……氷の鎧ですね分かります……いや、鬼畜だろ
その上での氷の剣も作れたり……うん、もうヤダ
そしてブリザードですね分かります、止めるだけじゃなくて強制行動も出来るという、ね？鬼畜でしょ？
やろうと思えば雷も作れるよ？超高速行動による摩擦ですね……炎はどうなんだ？燃やすものが無いから無理か？摩擦熱くらいなら出来るけど……大きくは無理かな
うん、あれだね、この機体は危険領域に入ったね！……ってか、前から使えてたのはワンオフだよね？あれ？第一からワンオフが使えたってこと？それとも何時の間にかのあれが第二？
あとは……ああ、うん、もう要らないと思うよ？ビーム兵器とか使わないでしょ
いや、摩來とかは要るかもしれないけどさ……いや、要らないね、うん、他の武器を作るか

あれだ、ビームが曲がるやつやってみたいよね……偏光制御射撃だっけ？……あ、出来るわ、７６％もあった……もうヤダこの体どれほどの才能を詰めこんだんだよ……いや、近接格闘は下手だけどえ？ソバットが使えるじゃないか？いやいやいや、あれは生身だから使える技だからね？ＩＳでやったら……絡まるよ？無理だよ

「ねぇあっ君、さっきの接続タイプのデータの先が見つかったよ？」
「え？マジですか？何処何処」
「あっ君の目」
「……」
「左の綺麗な藍色の目だお！」
「……うそぉん」
「本当だお！」
「俺も、人外に突入か……」
「あっ君は元から人外だと思うよ～、ＩＳも作っちゃったし」
「いや、元は束さんじゃないですか、俺は少し手を貸しただけですよ」
「そのい少しが重要な部分を完成させたんだよね～」
「……あれだ、俺の黒歴史だ」

まぁ、俺が作ったのはコアの一番重要な部分とそれを周りと、それと……あれ？結構多い？
ま、まぁあれだ、うん、製作者は束さんだから……それとあっ君もいたね、あっ君って誰なんだろうね～本名が明かされて無いんだって～……はぁ
もはや人外の俺、まぁ心の操作も出来るけど、だからって人外は……あれ？否定できる部分が無い？
まぁ、うん、それは置いておこう

「ぶっちゃけ、黒歴史が無い人間はいないと思うんだ……」

「ん～、束さんもあるからね、無い人はいないだろうね～」

第一、俺は黒歴史がないと歴史が進まないしね
束さんの黒歴史って何だ？まぁ良いんだけど
ってか、目に接続するって事は……

「俺の目は義眼だったのか！……んな訳無いな、見えてるし、潰れたり取れた覚えも無いし」
「義眼じゃないとするとあれだよね、あれ、何ウイルス」
「……ひょっとしてナノウイルス？」
「そう、それだよあっ君、頭良いね～」
「いや、これ位なら誰でも……ってか、ウイルスにしないで」

せめてナノマシンにして……ん？
ナノマシン？……ＩＳと接続？ハイパーセンサーとの接続？……
ＩＳの補佐？……ヴォーダン・オージェ？越界の目？
何時の間にだよ、いやあの時だろうけど……マジで？ナノマシン入っちゃったの？
よし、使ってみよう、うん、使えば分かる

「ってな、訳で妖幻、腕の部分展開」
「ほうほう、こうなってるんだ～」
「いや、最初に見たでしょ」

今更ながらだけど、バイザーを直してなかったんだよね……形？ん～、サイレント・ゼフィルスだね！
いや、うん、本当にあれなんだ……まぁ、良いんだけどさ

「……よし、仮名称『ヴォーダン・オージェ』、接続」
『接続、開始します、仮名称『ヴォーダン・オージェ』……リンク

しました』
「あっ君、どんな感じかな？」
えと……これは酷いね、鬼畜だね
ぶっちゃけあれだよね、超加速時のセンサーだね！何て言うのかは忘れた
第一俺も束さんも名付けてないからね……・いや、まだ誰も持ってないけど
まぁ、簡単に言うと……超低速に見えます、はい、枯れ葉が浮いてるもん
まぁ、メリットは多いな、これで撃ちやすくなったし、攻撃も避けやすいし
でもまぁ、これほどの物だとデメリットが無い訳が無い訳でして
「……痛い」
体が付いていかないんです、はい、これはもう虐めだと思うよ？
……ってか、妖幻を全部展開すれば良いんじゃないか？……
…あれ？俺って馬鹿？
ああ、でもあれだ、ここだと危ないわ、色々な人が見てるし……
あれ？ひょっとしてココに居るのって不味い？
妖幻との接続は切って……さて
「束さん、そろそろ行きましょうか？」
「そうだね～、そろそろ変な人が来るだろうし」
「変な人……ああ、お役人さん」
まぁ、束さんからしたら変な人に変わりは無い訳で……あれ？あれって役人？
不味くないか？逃げる？隠れる？それとも会う？……ここは

「よし、束さん逃げよう」
「おっけー、それじゃあね～」

そういって束さんは何処からとも無く降ってきたロケットに入って飛んで行った

……ゑ？俺は？放置ですか？あれれ？……なんて思ってたんだけどね

「降ってきたね～」

俺の目の前にも同じ機体が……これに乗れと？

「……乗るしかないよね～」

すぐ後ろにはお役人、何を言ってるのかは分からない
うん、俺英語も上手じゃないからね……え？何で今まで話しが通じてきたかって？それは、ねぇ？
ＩＳの翻訳で英語を日本語で表示、それを見て日本語で言えばＩＳで英語に変換して表示、あとはソレを見せるだけ……簡単でしょ？
今はその機能を切ってるからね……・うん、全く分からない
さて、それじゃあ乗りますか……勝手に閉まるんだね
あ、ボタンだ、これを押せば良いのか？……ポチっとな
……おおう、本当に飛んでるよ、ビックリだね
空が綺麗だな、雲が目の前にある……あ、飛行機だ……お～ジェット機もあるわ
あれは……戦闘機だ、格好良いよね～……え？

「……こっちに向かってきてるんだけど」

これはあれか？墜落フラグか？まぁ、問題は無いんだけどね、妖幻もあるし

でもさ……束さんは何処？

「……完全に別れたね」

これはどうなってるんだ？……あ、ミサイルだ

まぁ、簡単に妖幻の足を部分展開して……脱出の、一気に飛ぶ！

流石に不法侵入は怒られるしね……不法だよね？ちゃんと正規の方法だったら俺が逃げる意味は無いじゃんね？大丈夫だよね？

ま、まぁ良いや、とにかく何処かに逃げないと……あ、シャロの事忘れてたわ……不味いよね？

それじゃあ、あれだ、今からでも向かいますか……

「たしか……フランスだよね？」

ここからは結構離れてるけど……妖幻なら大丈夫だよね、ってか余裕だよね

「……どうせだから目の正式名称でも考えますか」

何が良いんだ？……分からんな

今までも名付け方は簡単だしね……ＡＣＳとかＡＲＭだってそのままだし、ちゃんと千冬さんに説明した通り……

……説明したっけ？

あれ？結局言ってない気がするな……うん、言い忘れたわ

まぁ……また今度で良いや！ってか、シャロとの約束も２ヶ月後だったから……あと１ヶ月以上あるな・・・・・また今度だな

「さて……束さんは何処だよ」
「あっ君、大変だね～」
「そうなんですよね～……つきましてはどうやって隣に来たのかを教えていただけると」
「あっ君のロケットが消えたから妖幻を追っかけてきたんだお！」
「……ああ、なるへ、部分展開でも分かるんですね」
「束さんにかかかれればそのくらい晩飯前だよ！」
「結構微妙な所ですね」
「ん～、あっ君は早かったからね、途中で何回かロストしたんだよ」
「……それはそれは、大変でしたね」
「あっ君の所為なんだけどね～」
「さて！何処に行きましょうか！」
「これが話しをズラしたって事なんだね！」
「ま、まぁ良いじゃないですか会えたんだし」
「おお！あっ君からそんな言葉が聞けるとは思わなかったよ！……結婚しよう！」
「お友達でお願いします……で、何処に行きますか？」
「うぅ～、振られちゃったよあっ君、慰めて～」
「振ったのは俺だから！そしてくっ付くな！アンタわざと当ててるだろ！」
「あっ君だからしょうがないんだよ！」
「どんな理屈だよ！……あ、うん、結構不味い」
「ん？……おお～、戦闘機が整列してるよ～」
「うん、あれは攻撃態勢だから……逃げるが勝ち！」
「あっ君はや～い！」
「束さんもＩＳ起動して！」
「束さんは持ってないんだお！」
「そのコアはなんだよ！」
「これは……バック？」

「なんだってー……うぉい！ミサイル撃ってきた！？」
「あっ君あっ君、さっさと逃げようよ～」
「ああもう！……結構速く行きますからね！掴まっててくださいね！」

思ったんだ……何でこんな事をしてるんだろう
まぁ、そんな事よりも……今は逃げる！
もう何処でも良いよね！……あっち！

「あっ君あっ君」
「なんですか！」
「束さんにもＩＳの保護を回せばもっと速いよ？」
「……あ」

自分は一体何になるんだろうね！・・・・・・・・・・・怖いです、はい（後書き）

さて、待たせたな！・・・・・・・・・・・なんて格好良い台詞を言うのが私です
最近はまりましてね・・・・・・え？遅い？本に早いも遅いも無いんだよ！
まぁ、はい、色々とありまして書くのが遅れました
だからと言って反省も後悔もしていない！・・・・・・・・・・・あ、今後悔した
反省は・・・・・・・・・・・・・・・・・人生って全てが反省だよね！
さて・・・・・・まさかのネタバレ！
戦闘の途中に新しい力が目覚める！・・・・・・・なんてありませんよ？
いやね、今書かないとね・・・・・忘れたらどうしよう、とね
結局ＡＣＳとＡＲＭも説明してませんでしたし・・・・・・う８ん、今更思い出したんだ、穂の津は千冬さんとの戦闘で書くつもりだったんだけどね！・・・・・・・・・うん、忘れてた♪・・・・・・すいません殴るのは勘弁・・・・・・・・・ちょ、ハンマーはもっと危ないって！
・・・・・・・はぁ、最近は危ない世の中だよね！原発も壊れるし・・・・・・
そしてあえて言おう！妖幻はチート！・・・・・・・では無いからね！違うからね！ちゃんと副作用も考えて・・・・・・・・・・・・・・・あると思うよ！
いや、ぶっちゃけ忘れました、はいん～、何が良いんだろうな・・・・・・・・・
まぁ、使い方次第では、搭乗者しだいではチートですけどね！・・・・・・・あれ？もうチートじゃないか？

いや、ネタの元はありませんよ？
楯無さんが水、スコールが砂？ラウラが・・・・・・慣性？見たいな感じだったので、つい・・・・・・ね？
分子の振動を止めれば凍る、電子の振動を早くすれば雷が・・・・・・なんてなると良いな！ってかなるよね！？ならないとか・・・・・言わないよね？
いわゆるあれですよ、エターナルフォースブリザードですよ・・・・・いや、そこまで大きな使い方は・・・・・・・・・・・・・・・・・ありだな
まぁそんな簡単に使えるようにはしないですけどね！
さて、ここでアンケート！
荒榎の新しい目！名前がありません！・・・・・・いや、あったんだけどね？これは・・・・・・やめようかな、みたいな感じになりまして
まぁ、うん、暇つぶし程度でお願いします

さて、今更な事・・・・・・・・・・・・・・・原作とズレ過ぎじゃないか？

そんなわけで、ぱっはっは～い・・・・・・・・・・・・・・・・・・古いお！

妖幻の進化・・・・・・ハハハ、良く分からんけどチート（前書き）

中間は飛ばしても良いと思うよ

妖幻の進化・・・・・ハハハ、良く分からんけどチート

「あっ君、速いね～」

束さんを抱きしめて……正確には束さんに抱きしめられて
戦闘機から逃げて……五分くらい？もうとっくに見えなくなってますってか、最初の１分位で見えなくなったんですけどね
最初から束さんをＩＳの保護に含めておけば良かったな……

「ええ、まぁ、そりゃあね、これくらいは出せますよ」
「ん～、束さんが作った時にはこんなに速くは無かったんだけどね」
「……なんだってー」

俺はそんなに改造していたのか……結構したな、１５％位速くなったんだっけ？……それにしても

「言っておいてなんだけど……速いな」

うん、そうなんだ、速いんだ
いや、俺がさっき言った状態よりも速いんだ８％増し位にはなってると思うよ？
……そういえば、進化したんだった……ってか

「後ろに束さんが居るし」
「あっ君、それは今更だよ、前から居たし」
「いや、そうなんだけど」

うん、居るのは分かってた、ってかさっき聞いた、それよりも問題があるんだ

後ろの翼はどこにいった？
今更な事、妖幻の後ろには翼がついてる……筈なんだけどな～
背中の大体は翼が位置とってるから……抱きつけないはずなんだけど……

「束さん？何処から抱き着いてるの？」
「？？何処って……あっ君の背中だよ？」
「……ちなみに、背中には何がある？」

うん、今の俺は冷汗ダラダラだと思うよ
そう言えば、下に着るアンダースーツ、まだ作って無いんだっけな
……何処かが作るでしょ
なんて現実逃避、うん、素晴らしいね、必要な事を言いつつ今の状況を忘れさせ……てないよね～、思いっきり気になるよね
でも大丈夫！今から束さんが言ってくれるから！……ではどうぞ！

「ん～、これは……ブースターだね」
「……翼は？」
「翼？……ああ、翼なんだ」
「……え？」
「んとね、棺の形みたいな感じのブースターが浮いてるよ？」
「……浮いてる？」
「浮いてる、ってかそろそろ進もうよ～」
「なんだってー……」

うん、衝撃的だね！……俺の妖幻が変わってるだと！？確認しないと……うん、作品が混じったね！
だってさ、形がさ……某武力介入を行う組織のクアンタとかいわれる奴の左肩だったっけ？あの銃にも……なるんだっけ？良く分からんな・・・・・まぁ、全く見てないからね！

いかんな、話を戻して……あの肩についてる棺型の剣にもなって銃にも……なったきがするよく分からんやつが二つ……うん、翼じゃないね！おいおいおいおい、やり過ぎでしょ……ってか、何で変わったんだ？

……ああ、うん、あれだ、神様のボールで皮変わったんだ！あの光るボールだ！俺の中に入ったボールで変わったんだ！

……うん、だから？だよね

さて……どうしようかな……とりあえず、束さんがさっきから煩いから移動してと……何処に？

「束さん、何処に行きます？」

「んとね～……お家に帰っちゃお！」

「了解～……って帰るの！？」

何の為に家を出てきたんだよ！家族旅行に行って来たんだよ！

束さんは知らないかもしれないけどさ！色々とあったんだよ！？

レトアとかレトアとかレトアとか！……ちょこっとシャロを思い出したり！

他にも！……あれ？無い？え？え？全部女絡み？

……うん、これからは主人公腐れとか言えないね！……いや、マジで二つの意味で

一つとしては……同じ状況になったら言っちゃいけないでしょ？

二つ目としては……ごめん、辛さが分からなかった、今では分かるえ？分からない？……心で感じろ！目で見て信じるんじゃない！

心で見ろ！そしてもげろ！……あれ？何で？

ま、まぁ、うん、束さんが言うなら……良いんじゃないか？日本に向かおう

「所で……日本ってどっち？」

「ん？あっ君よ、束さんが知ってると思うのかい？」

「うん、そうだね知らないよね・・…もう良いよ、俺が調べるから」
妖幻をネットに繋げば問題無し……あっちか

「おお！あっ君が代わりにやるよ発言！これはあれだね！将来的にはお前の出来ない事は全部俺がやってやる！なんて言うんだね！…
…あっ君！結婚しようよ！」
「言わねぇよ！？ってか誰だよソレ！そして結婚は早いよ！？今の年齢良く考えて！」
「あっ君が了承したお！これで結婚だね！」
「何時の間に了承した！？」
「え？結婚は早いって、つまりは早くなかったら結婚だね！」
「ミスった！……ってか年齢考えて！俺が結婚できる年齢になったら束さんは結婚してるから！」
「え～、束さんはあっ君じゃないとヤダよ～……そうだ！憲法を変えちゃおう」
「変えないで！そして真面目顔で言わないで！そして何故に俺！？」
「だって、あっ君くらいじゃないと束さんの話しに付いて行けないし……あっ君格好良いし」
「ああ、うん、まぁね、束さんに付いていける人はいないだろうね」
「む、ソレだけじゃないのに……まっぁ仕方ないから、結婚はまだにしておくよ、その代わり」
「その代わりになん……ムグッ！？」
「えへへ～、あっ君の初めて貰ったＺＥ☆」
「……奪われた」

うん、何がかは聞かないで……湿ってたとだけ答えよう……あ、ついでに甘かった
多分さっきまでお菓子を食べてたからだと思う……あれ？ひょっとして今ので分かる？

……分かったんだね、うん、伝わったよ……ミサイルと言う形でね
これは……戦闘機のパイロットからか？……あ、ついでの機関銃
ってか結構近くに居るし……さっきから止まってた所為ですね、分かります
……でもさ、ダメージゼロなんだよね……ご愁傷様です
エネルギーも全然減らないし……逆にかわいそうだよね
あ、ミサイル５発……うん、ごめんなさい、これは危ないでも簡単に避けられるんだよね、と言うより遅く見える……あ、目が接続されてるわ
目ねぇ……名前がまだ無いんだよね……越界の目じゃ……駄目だよね～
それにしても……うん、あれだ、恐怖心とかがゴッソリ消えたな……ある意味危ないよね
おっと、その前に名前だったな……交響なんてどうだ？恐怖心やらその辺を減らす、というより無くす
まるでキリストとかの神様を信じる人の感覚じゃないか？でもまぁ、神様の目とかは無理だから、その繋がりで交響曲……あれ？繋がってるか？
まぁ、藍色だから……インディゴ・シンフォニアって所か？交響の藍……まぁ良いよね
……あれ？何でだ？何故かは分からないけど思考誘導された気がする、しかも結構適当に……・まさか神！？んなわけ……
…ないとは言いきれないね！ひょっとしてあれか？どうせあげたんだから、名前くらい付ける権利はある！という主張なのか？
ならいいだろう！この名前で決定だ！……ちょっとやっちゃった感があります、はい

「それじゃあ、仮名称『ヴォーダン・オージェ』を、『インディゴ・

シンフォニア』で正式決定」
『……了承、仮名称『ヴォーダン・オージェ』ヲ『インディゴ・シンフォニア』ニ変更』
「……渋い！？」

声が渋い！？そして機械音！？あれ？俺の入れた音声は何処に行った！？
……まさかだけど、容量が足りないから消した、とか無いよね？……本当に無いよね？

「……まぁ、どうせ声だから良いんだけど」

そんな事より……さっきから煩いんだよね、機関銃とかミサイルとか
……ケシテモイイカナ？

「ん～、あっ君の反応がイマイチだね、まさかもう初めては……」
「してないですって！今回が初めて！」

現実逃避＆イライラの発散をしようと思ってたのに！
思い出させないで！あんた顔は……ってか美人で体系も良いんだから！唇の感触とか体に当たってる感触とか考えちゃうじゃん！

「おお！あっ君の初めてだったんだ、これは幸運だね！」
「俺のはじめては一体なんなんだよ！」
「ん？お守りかな？」
「……」

お守り……お守り扱い？じゃああれか？『好き』だからのキスじゃなくて、『幸運を呼ぶ』とかの為のキス？

……アハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハハ

「それじゃあ、日本にでも行きましょうか」
「おお、本当に直ったよ」
「確証なかったんかい……いや、あったら怖いけど」

日本はあっちだな……あぁ、後ろが煩いな
ケスノハ……駄目だよね～
ってか、束さんが他人を気にした!?……訳無いか、ただ俺が壊れてたからだろうな

「さて、それじゃあ」
『警告、ロックされています、ロックされています』
「えー、ってか、今までのは出なかったのに、何故？」
「んと……これはこれは、ふ～ん、対空ミサイルだね、しかも新開発かな、威力も高そうだし」
「そんなもん作るなよ……ってか、不味くないですか？」
「不味いね☆衝突まであと１５秒だお！」
「いやいやいや、そんな簡単に言われましても」
「でもまぁ、あっ君なら何とかできるよ♪」
「……」

そんな簡単に断言されてもね……まぁ、出きる限りは頑張りますけどね

「……まぁ、凍れ」
「……あっ君？何やってるんだい？」
「……何って、いや、凍らないかな～って思いましてね、ってか、真面目にヤバイですよね？」
「あっ君なら出来る！」
「……」

やるしかないよね、うん、ふざけてるけどあれだ、束さんは専用のＩＳを持って無いんだよね……何で作らなかったんだよ
後で聞いて……やめよう、あっ君が守ってくれるから大丈夫☆とか言いそうだし……お守りとしてなんですよね～
ってか……この能力使いにくい！俺が作った訳じゃないから操り方が分からない！みたいな状況でありんす……あります
全くもって不味いですね、はい

「……いやいやいや、冗談言ってる場合じゃないぞこれ」
「そだね～、もう１０秒くらいだね☆」

うん、不味い不味い不味いマジ不味い不味い不味い不味い不味い不味い！

「……クソが」

今までの攻撃を舐めてたのがいけなかった……あれでも一応ダメージ通るんだよな……クソが、油断していた俺を殴りたいよ
このまま逃げる……訳にも行かないよね、追跡型みたいだし、多分衛星で狙ってるから何処までも追って来るし……壊す？いやいやいや、危ないでしょ、ここは一応アメリカの上なんだからかといって、あれを食らったら……多分ＩＳのエネルギーが切れるし……うん、もう手が無いね
ぶっちゃけ、まだエネルギーの量が多く貯蔵できないんだよね、そこはまだ良いと思って弄ってないから、なんて現実逃避してる場合じゃないよね

「……ああ、うん、終わったね」

もう見えるよ……もう良いや、逃げるか

『……願って』
「……束さん、何か言った？」
「ん？束さんは何も言ってないよ？何も聞こえなかったし」
『願って』
「……まただ、この声」

ミサイルは目の前、なのに……なんだろう、恐怖は無い、怖じ気も無い、冷静になってる

『願って、貴方の姿、貴方の相棒、貴方の力、貴方の相棒の能力、そうすれば……』

声を聞いたら思えたんだ……

「……ちっちゃいな」
「あっ君？」

『……そうすれば、貴方と私は一つの存在になる』

「停止しろ」

小さく、囁く様に呟く、只一言
それだけで世界は変わる

「……」
「……あっ君すご～い」

荒榎と束の目の前、ミサイルは停止していた
簡単な話、分子を止められるのなら、物体を止められない訳が無い

「・……結構簡単だな」
『今ここに契約がなされた、私の力、速さ、能力、全ては貴方のものとなる』
「……んあ？」

目の前、ハイパーセンサーにより作られている電子空間、そこに映るものは一つ
それは文字、そして……証

『適用完了、『インディゴ・シンフォニア』との結合を行います』
「……っ！？」

いきなり起きる変化、目の前がクリアになる、否、目が変わる
今までの日常として使ってきた目ではない、この為の目、これこそが『インディゴ・シンフォニア』、交響の藍
全てのデータが交わり、響き合い、纏まり、より正確な情報を導き

出す、これこそが交響の藍（インディゴ・シンフォニア）

「……なるほどねぇ、これは良いな、うん、使いやすい」
「あっ君、目が光ってるよ？」
「……ああ、うん、そうらしいですね」

インディゴ・シンフォニア、能力はそれだけではない
普段人の目はピントがある、これはその物体に集中する事で詳しく知ろうとする為に、その物に目の視力を合わせてるからしかし、それには良い事ばかりではない、そうしてピントを合わせると言う事は、ピントが合っていない物は詳しく見る事が出来無いでも、ピントが合わなくても物体が見れないわけじゃない、物が良く見えると言うだけだ
ならば、ピントを合わせる必要は何処にある？簡単なこと、そうしないと全てが見難いのだ、全てが見えてはいるが、詳しい事までは見えない、理論上ではそうなる
何故理論上か、そんな事は簡単、誰もが試せないからだ、人が物を見るとき、その時は必ずピントを合わせている、それは誰もがなる事ならば、ピントを合わせないことは無理なのか？答えはＮＯだ
ピントを合わせるのは物を見るためならば、代わりに物を見るものが存在すれば良い
簡単な話だ、ＡとＢの物体が離れて存在しているとしよう、ある人はＡにピントを合わせた、そうしたらＢの物はぼやけてしまうならもう一人居れば良い、見えないのなら代わりと立てれば良いのだ
さて、話が長いがもう少しだ、我慢してくれたまえ
そう、代わりが居れば他のものも同じ状態で知ることが出来る
誰でも、どんな状況でも、たとえ、目が見えなくても
インディゴ・シンフォニアは妖幻に接続する事で効果を発揮するつまりだ、大容量演算装置が入っている機械と繋がるのだ
だったら、見えていない部分はそっちに見させれば良いのだ

自分がピントを合わせていないところを見て、それを目の情報と統一、脳に伝えるのがこの効果だ
自分が見るのは何処でも良い、正確には何処も見ていなくても良いただ目を明けるだけで良い、そうすれば、全てが見える
接続している妖幻の演算により、視覚全ての情報が細かく分かる
そして、コノ状態だから出来る事がある
偶に、視線には言っていても、気が付かない事は無いか？
それは脳が詳しく見ていない部分、脳の反応が遅れている部分と言える
そして、それはピントが合っていない部分じゃないか？
なら言おう、全てにピントが合っている今、物を見逃す事があると思うか？
インディゴ・シンフォニアの効果は一つではない、様々な効果が纏まってコノ目になっているのだ
だが、この効果ほどありえない事は無い、学者が聞いたら即否定するだろう
だが、ありえないなんて事はありえない
元々ＩＳはありえないと言われているのだ、これくらいはあって無いような物、別に可笑しい事は無い

「……なんて、長々と考え事をして見たけど……何で光ってるんだ？」
「あらら？あっ君も分かって無いんだ」
「ええ、まぁ、うん、分からないと言えば分からない」

まぁ、この効果は分かった
つまりあれだ、俺の目が見にくい所は妖幻が代わりに見てるんだうん、だから視界がクリアなのか……なにこれチート？
でもまぁ、便利な能力かな、これのおかげで、……１３次元？位まで考えないといけない事が出来るし

これなら……うん、凍らせるのも簡単に出来るな……接続したらの話だけど
ってか、妖幻には結構な演算能力を持たせたけど……こんな形で使うとは思わなかったな
普通に、武器の展開が早くなる、とかで想像してたのに……まぁ、問題は無いし、逆に良い事尽くしだから良いんだけど

「……ってか、適用ってこの事だったのね」

だからさっきは出来なかったんだな……危なかったな俺！？もう少しで大変な事になってたぞ！？
……さて

「このミサイル、どうしましょうか」
「ん～、凍らせて海にボチャーン、で良いと思うよ」
「そんじゃ、まぁ、試しましょうかね」

出来ると分かっててもね、まだ使った事無いし

「……凍れ」

ミサイルが凍る、ただ凍る、音も無く、すぐに、一秒もかからずに、まるで元からそうであったかの様に

「……ってか寒い！」
「ま～ね、近くに絶対零度以下の物があったら寒いよね～、あっ君ボチャン」
「あ、そうだった、さよなら～」

停止を解いて自由にする、と言っても、燃料が切れてると思うし、

その前に炎が消えてるし
まぁ、落ちるんですよ……不発弾の完成！大丈夫だよね？

「ってか、今何気に凄いこと言いませんでした！？」

絶対零度って言った！？しかも以下！？ってか以下ってあるの！？

「え？だって、絶対零度なんて人間が最低まで分子の動きを遅くして気温を落としただけなんだよ？あっ君は分子を止めたんだから、存在最低以下の温度にしました～パチパチ～」
「……うん、俺も人外だね！」
「やったねあっ君！」
「素直に喜べないよ！」

ってかエターナルフォースブリザードじゃん！
部分的なだけどそうじゃん！出来ちゃったよ！？危ないよ？！人死ぬよ！？
もう使わない様にしないとね……せめて絶対零度・……も危ないか？周りの気温が変わらないように出来たら良いんだけど……

「ってか……まずは逃げないと」
「逃げよ～」

最後は滅茶苦茶軽い閉め方だけど……ハハハ、もう訳わかんないよ

妖幻の進化・・・・・・ハハハ、良く分からんけどチート（後書き）

さて、あえて言おう！ごめんなさい！
うん、分かり難かったね！インディゴ・シンフォニアの説明が分かり難いよね！
考えて考えて、考えたらあれになったんだよ！・・・・・・・え？
期間？・・・・・三日かな？でも考えた時間は・・・・・・・うん、５秒位だね！
うん、まじめにごめんなさい、面倒だったよね・・・・・・よし、うん、あれだ
これに関しては言い訳も逃げもしない！存分に叩いてくれ！それくらいなら正しいと思う！
でも言わせて！纏まらなかったんだ！
・・・・・・・・・・・・・・・とまぁ、それは置いておいて
うん、束さんキッスだね！・・・・・荒榎も馬鹿だね～・・・・・・
書いてるのは俺だけど・・・・・うん、やり過ぎかも
ちょっと壊れた、荒榎・・・・・心が乱れるとなるんだよ！うん！暫くしたら明かす予定の裏設定！・・・・・・・なのか？

さて、うん、何やってるんだろうね・・・・・・・
何処からか声が！・・・・・場所は決まってますねサーセン
あえての契約、うん、ごめん、これも適当なんだ・・・・・・
いかんな、最近は適当が多いぞ？・・・・まぁ、ネタが切れてきたからなんだけどね！え？聞いてない？そりゃそうだ、言ったのは一人だけだもん
感想で返したときに言ったんですよ・・・・・・・・フッフッフ、
他人の感想は見ない人が多い・・・・・っていうか誰も見ないでし

ょ、これはあえての書き方ですよ！
みんなの感想をみんなで共有できるんだから、皆も見ようよ！なんて心を伝えてみたり
いや、結構面倒かもしれないけど・・・・・うん、自分が分からない事とかも分かったりして良いものなんだよ？
たまには見てみると良いよ！
さて、霧氷黄泉路さん！名前をありがとう！・・・・ございます！
いかんいかん、つい忘れてしまった・・・・・・さすがにこれは、ねぇ？
でもあれですよ、格好良い名前をありがとうを喜ぶのが私です
未だに嵌ってるのも私です本当にどうも（ｒｙ
でもあれですよね、名前のもっていき方がちょっと・・・・・うん、無理があったかも、ってかあるわ・・・・・・うん、勿体無い使い方をした・・・・・・
で、でも！名前は変える気は無いんで！
それで思い出した、うん、妖幻が変わりすぎですよね
でもあれなんだ、さすがにそのままだと・・・・・・うん、すぐにばれるよね！
ってか、自分でばらしてるよね！・・・・・・・流石にそれは無いなと思いましてね
うん、ぶっちゃけあれですよ、荒榎が一夏みたいに特別なんじゃないんだ
妖幻が異端なんだ、だから・・・・・なんて考えたらさ、こうなったんだ
よく考えたら、ファーストシフトについて詳しく言ってなかったし・・・・あれ？穴ばっかり？

・・・・・・・・うわぁ、ちょっと萎えた
でもまぁ、うん、見てくれる人がまだまだ多いので頑張りますよ！
最近結構減ったけど！・・・・・・・・・・うん、減った

でもまぁ、これは仕方が無いこと、俺の書き方がいけなかったんだだったら、もっと頑張れば良いじゃないか！と考えましてね頑張っていきます！
それじゃあ・・・・・・あ、だれかリセット買いました？俺はまだ買えてません・・・・・・・・・はぁ

今度こそ、それじゃあ！・・・・・・ノシ！Σ（゜□゜，）に叩いてくれ！

べ、別に最初が気まずかったからって当たったわけじゃないだからね！本当だか

「はいはい、どなた？……あら？」
「た、只今帰りました？」
「……お帰り？」
「香織さん？どうし……荒榎？」
「……どうも？」
「ああ、うん、とりあえず……入ったら？」
「え、ええ、そうね、お帰り荒榎」
「ただいまです、はい」

うん、無性に気まずいです☆じゃなくて、只今家に帰ってきております、なんかさ、束さんが自由行動って言い出して
最初にさ、インターホンを鳴らしたらさ、母さんが出てきたんだ、それは良い、問題無し
でもさ、最初の言葉があれですよ？うん、無性に気まずい、元を言えば、出ていった？誘拐された？俺が悪いんだけどさ
でもまぁ、父さんも居たんだな……あ、俺が頼んだわとまぁ、考え事は置いておいて、久しぶりの我が家のリビング、うん、綺麗だな

「で、用事は終わったのかい？」
「……まだです、はい」
「……うん、酷い言い方かもしれないけど…なにか用があったのかい？いや、別に帰ってきちゃあ悪いとは言わないけど……」
「いや、うん、それで良いと思うよ？……束さんがね……束さんがね？」
「束さん？……ああ、あの迎えに来た」
「うん、あの人がね、あの人がね？……帰ろうって、まだなにも終

わってないのに帰ろうって」
「まぁ、昔から独創的な子だったものね」
「そうなんだけどさ……なんでこのタイミングなんだろうね」
「ま、まぁ、家族が揃う事に悪い事は無いよね」
「そうだけ「あっ君、行くよ～」……あの人何しに来たんだよ！」
「荒榎、落ち着こう、心が乱れてるよ」
「あ、うん、そうだった……よし」

意を決して……なんでこんな事に意を決しないといけないだろうな……
扉を開ける！……って

「何でこんな大人数なんですか？」
「私も知らん、束に来いと言われただけだ」
「姉ちゃん、腹減った」
「むぅ、後で何か買ってやる」
「ほんと？やった！俺あれが良い！あのロボットのお菓子！」
「……ああ、なにこのカオス」
「混沌と書いてカオスと読むんだねあっ君！」

えと、はい、家の前には大人数が集まってたり……いや、知り合いは少ないんだけど、千冬さん、一夏、束さん……後は誰？
１０人ほど集まってるよ……全員スーツとか……ＳＰ？まさかね

「僕、悪いんだけど、あっ君、と呼ばれる方を出してもらえる？政府の者って言えば分かるから」
「……どうも、あっ君です」
「……へ？」
「あっ君です」
「……す、すいませんでした！私、こう言うもので」

そう言って渡してきたのは名刺、なんだけど……
ん？俺の目がおかしいのか？ん～……

「……なんだろう、第４機密構成員って読めるんだよね」
「あ、あってますよ、はい、それであってます」
「……なんだってー」

いやいやいや、名刺に機密って書いちゃ駄目でしょうが、機密じゃなくなるんだから
ひょっとして偽者？ああ、そうだよね、うん、流石に本物じゃないよね

「で、どちら様？」
「いや、だから第四機密構成員です」
「……本当に？」
「本当です・・…あの、今回はあの機械えっと……ＩＳ、でしたっけ？あれを頂けるという話でしたが」
「……ちょっとすいませんね～」
「え、あ、はい……え？気分を崩しましたでしょうか、す、すいませんでした！」

とりあえず無視、背中に貼りついていた束さんを連れて……とりあえず家の中に
さて……聞きたい事が山の様にあるんだけど

「さて束さん、覚悟は良いですか？」
「んみゅ？あっ君のお母さん達は外だよ？」
「いや、居ない方が都合が良さそうなので」
「はっ！まさか襲われちゃうのかい！？あっ君が獣に！？……あ

っ君なら、良いよ？」
「二度ネタ禁止！……てか、真面目な話、ＩＳあげるんですか？」
「ぶー……あげるんだお！そうしないと面倒だし、追っかけられるのも面倒だし」
「……まぁ、良いんですけど」
「ふぇ？意外だね、あっ君なら怒るかな～ってちょっと思ったりしてたのに」

それは、ねぇ、知らなかったら怒ってると思うけど、原作では色々な国が持ってたし、作れるのは束さんだけだしでもまぁ、ふっふっふ、俺には前世の記憶があるんですよ！……何て言える訳も無く

「束さんならやりかねないな、と前前から」
「おお！あっ君のお前の事は何でもわかるぜ！発言だお！……あっ君！結婚しよう！」
「またそれかよ！そのネタ何度目ですか！そしてそんな事は言っていないから！」
「ぶー、良いじゃんかよ～、あっ君もそろそろ誕生日なんだから、その時に一緒に発表だぜい！」
「何故に俺の誕生日を知ってるんですか！？……いやまぁ、知ってもおかしくは無いけど……やりませんからね？」
「ん～、あっ君は難しいよ、何なら良いんだい？」
「いや、基本殆ど良いですけどね、束さんのは内容が濃い……ってか、急なんですよね」
「つまりは、もう少し仲良くなったら結婚だね！」
「何でそっちに言った！？……もう嫌、ってか上げるならさっさと行きましょうよ」
「あっ君が扉の前にいたら流石の束さんでも出られないよ～、もっとも、壊して良いって言うのなら」

「駄目だから、うん、謝るから壊さないでくださいよ……ってか行かないと」

とりあえず、束さんは置いておいて、外に出ると……よし、閉めよう

……あれ？目が壊れたのかな？……開けて……閉める

「あっ君、これは押せって言うフラグだね！ド～ン！」

「いやそれ違っ！」

まぁ、束さんに押されて扉が開いて……目の前には大勢のスーツうん、増えた、めっさ増えた！……ってか、外国人が増えた……

…ここまで来ると住民に迷惑だよね

「やあやあ、知らない人さん、束さんは知らない人はどうでも良いから、話しかけないでね～、話しかけてきた国はコアを減らします」

「「「「「っ！！！！」」」」」

「……うっわ～、初っ端から話す気ゼロ……あ、じゃあ俺にもはなしかけないでください、ってか静かにしてください、話さないでください」

「それじゃあああっ君！いっくよ～」

「何処に！？ってもう歩いてる！？」

「……あっ君」

「あ、はい？」

「疲れた～、おんぶ～」

「早っ！？まだ歩いて1分も経ってないよ！？ってか五秒くらいだよ！？」

「あ～つ～い～」

「そう良いながら背中に乗るの！？」

「あ、あの、大丈夫ですか？」
「うるさいな、話しかけないでって言ったでしょ、君の国はコアの数意1個無しね」
「え、ええ！？そ、そんな！」
「はい2個無し～、黙っててよね～」
「……」
「うわ、鬼だこの人」
「あっ君～、暇だよ～お話しようよ～」
「このタイミングで言う言葉じゃないよね、うん」
「荒榎？これはどうなってるんだい？」
「あ、父さん、着いてきたんですね、これは……なんですかね？」
「いや、聞かれてもね…」

うん、そりゃそうだよね、でもあれだ、俺も知らないんだこれを知ってるのは……束さんだよね

「束さん、これはなんなんですか？」
「ん？おんぶだよ？」
「いや、そこじゃなくて……この集まりはなんですか？」
「ＩＳのコアを渡すんだお！……ん～、さっき言ったような気が…まぁ良いや」
「うん、それは聞いた、そうじゃなくて……何処に向かってるんですか？」
「ん～……なんだっけ？」
「おい、そこの進行役、ってか責任者」
「えとね～、何て言ったっけな～……ああ、そうだあっ君、妖幻の装備なんだけど」
「いや、話しずらすなよ……へ？妖幻？」
「そうそう、妖幻のあの能力、何て言うのかな？かな？」
「名前、ですか……決めて無いや」

うん、なにも考えてないよ……こう言う時こそ！みんなのアンケートが必要だ！こぞって応募してくれよな！
なんて言ってる場合じゃなくて……名前ね、名前名前……

「異端空間ですかね」
「おおう、覚えやすいね、絶対零度を越える事が出来る異端の空間、そのままだね！」
「うん、言わないで、俺はそんなに名前を付けるのは上手くないの……」
「……そろそろ、良いかな？」
「あ、父さん、父さんも来て……さっき言ったな、うん、そうだ、それで束さん、何処に向かってるんですか？」
「ん～とね、ここ」
「……ここ？」

束さんが指差したのは……公民館？
何故に？……ってか、中に誰か居るよ？しかも大勢

「間違ってないよね？結構な人数がいますけど」
「……荒榎、多分あってるよ」
「何故に父さんが分かったの！？」
「中の人を見てごらん……」

そう言って、窓を指す父さん……いや、中はここからも見えるけど……
おっさんばっかりだよ？うん、色んな国のおっさん、ってかスーツ着てるけど？
ここで間違ってないの？知ってる人なの？……誰？

「……さて、あっ君パワーも補給したし、さっさと終わらせてあそぼー！」
「お、おー……おぉ？」
「いっくよーん」

そう言って入っていく束さん
いや、知り合いなの？ってか……何人居るんだよ、しかも黒人から白人まで沢山居るよ

「はいはーい、私がＩＳの作者の一人の天才束さんだよー、コア配るからさっさと帰ってねー」
「いや、それは無いだろ……」

うん、ついつい突っ込んでしまったんだよ
ってかあれか？コアを渡すって事は、各国の代表？……うわー緊張する―、嘘だけど
緊張も何も、只のおっさんとかおばさんだし……何に緊張しろと？国家権力か？あまいな、妖幻で木っ端微塵だ！……いや、やらないけど

「君！私達を呼んでおいてその態度は何だ！」
「……いや、あんたの態度が何だ！だよ」
「そうですね、私達はコアを貰う立場、文句は言えません」
「おお、そこのおじさん分かってるね～」
「っ！……君！一体何様のつもりだ！」
「……俺？」

あらら、聞こえてたんだ、まぁ聞こえる様に言ったんだけど、ウザかったから
でもまぁ、貰う立場でよくそんな事が言えるよね～

「俺は「あっ君に近付かないでよ、汚いなぁ」……だ、そうで」
「っ！……君があのあっ君かね、噂はよく聞くよ」
「ほう、どんな噂でしょうか？」
「何でも、苛ついたからあの機械を使って人に危害を加えたそうじゃないか……実に野蛮だね」
「……」
「何も言い返さないのかね？それとも、何も言い返せないのかね？どうなんだ？」

馬鹿だ、ここに馬鹿が居る……ヤバイ、顔の形は大丈夫か？にやけてないか？おもわず笑ってしまいそうなんだがｗｗｗだめだ、顔が、顔が動くｗｗｗ

「……プッ」
「……っ！何が面白いんだね！」
「だ、だって・・…アハハハハ、駄目ｗｗｗもう駄目ｗｗｗ腹が捩れるｗｗｗ」
「っ！一国の代表を笑うと言うのなら、戦争になってもおかしくは無いのだよ！君がやっている事は侮辱だ！」
「だったら、さっきからの対応はコアをあげる束さんとあっ君に対する侮辱だね」
「ギャハハハハハハ！アハハハハハハ！もう駄目！止めて、止めて！耐えられない！」
「っ！貴様！もういい！貴様になど何も貰わん！」
「アハハハハハハハハ！この人馬鹿だｗｗｗ……ゴフッ、ゲフッ、ああ、落ち着いたｗｗｗ」
「あっ君が笑えるのならコレも良い働きをしたね！」
「本当ですねｗｗｗ……ふぅ、落ち着かないと」
「別に、笑ってても良いんじゃないかな～」

「いやいやいや、その前に見せないとね」

さっきからずっと怒りっぱなしの……一国の代表ｗｗｗあ〜駄目、笑っちゃうな、うん、見事に勘違いコレは見た後が気になるねｗｗｗ

「さて、さっきから怒りっぱなしのおじさん、頭冷やしたら？」

「誰の所為だと「これでも見てさ」……っ！」

妖幻に入ってるログからあのときの映像をピックアップ！……あ、あったあったここからだね、束さんの『はぁ？誰も君の名前なんて聞いてないよ、じゃまだよ、退いてくれないかな』で始まり

『……良かったら、少しお話でも「君に話しなんて無いよ、っていうかじゃまだから退いてくれないかな』……』

『束さん、そろそろ止めてあげましょうよ』

『え〜、良いじゃん、どうせ興味無いし』

『……っ……あの『五月蝿いな、黙っててよ』……この、クズがぁ！』

ここで切れたんだったな・・・・・ってか、確かこれアイルランド人だったな

『……え？』

『ざまぁ』

ここで衝突、ってか俺の、ざまぁ、が何気に聞こえる、だと……

『…っ！…あぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

『うっわ、痛そうだな』

『ふん、これがあっ君の言ったざまぁ、だね！』
『それが正解ですね』
『腕が、腕が……あぁぁぁぁ！！』
『ってか、全然反動が来なかったんですけど』
『きっとこれがへなちょこなんだよ』
『……これが』
『I、S……』

「はい終了～、ところで、アンタ誰？」
「わ、わた、私は……」
「その人、アイルランドの代表よ」
「あ、どうも」

答えてくれたのは……黒人の女性だな
ってか、コレは言一体どんな選ばれ方をしたんだ？

「さて……何か申し開きはあるか？アイルランド人」
「えっとー、君何処の国？」
「え、わ、私ですか？私はノルウェーです！」
「そ、じゃあノルウェーを1個減らして「えぇ！？」まだ煩いから2個減らそうかな、あとアイルランドは……無しで良いや」
「な、何を言ってるんだ！そんな横暴が通る訳ない！」
「横暴も何も、コレ作ったのは俺と束さんですし、分けかたはこっちで決めますよ？何で嫌いな相手に多くあげないといけないんですか？」
「そ、そんな！……くっ！」
「はいはい、ワロスワロス、自分の責任だから、こっちに所為にしないでね～」

それで攻められたら大変だからね、一応、こんな所でも自分達の国

だし

「それじゃあ、国名を書いてこっちに来てください、書いた人から渡しますから」

ああ、銃機や刃物は気をつけてくださいね？ＩＳが勝手に反応して攻撃するかもしれませんから

なんてデマを言ってみたんだけど……うん、数人が動いたね、絶対攻撃する気だったな……

さて後は見てるだけだね……って、束さん、本当にノルウェーノ数を１個減らさないであげてくださいよ

え？なに？煩かったから？……いやいやいや、そんな理由は駄目ですよ、ちゃんと挙げましょうよ

ってか、さっきから妙に近付いてくる女性が居るんですけど……うん、二人ほど、いや、今は二人で牽制しあってるから何とも無いだけど……面倒だな

「あっ君、全部配り終わったよ～、ってなわけで、さっさと帰ってね～」

「オイコラ、ちゃんと説明しないと駄目じゃないですか」

「えー、前に論文にしてネットで挙げて全世界に見せたからいいじゃんかよ～」

「その喋り方も止めましょうよ、それ漫画の影響でしょ……って、そうじゃなくて、武器の作り方とか……は、良いから、協定とか、誓約とか」

「んとね～、じゃあ戦争の利用は禁止！」

「ついでに言うと、軍事転用も禁止ですね、ってか、それやったら大変な事になるから、うん、抑止力だね」

核みたいと言う意味でもね、ってか、核よりも断然危ないよね

「ここにいる人、ってかコアを持った人を代表としている国はコレを認めたとします」
「それじゃあねー、さっさと帰ってね」
「あ、ちょっとまった、ついでに俺と束さんの扱い方について言いたい事が」

フッフッフ、コレからが原作との違いだよ！……何で自分から原作崩壊を目指すようになったんだ？
ああ、自己防衛の為だな……言え！言うんだジョー！

「俺と束さん、この二人はどの国にも属さず、尚且つ、人権を持っている状態、そして選択した義務と憲法の免除を申しだてます」

べ、別に最初が気まずかったからって当たったわけじゃないだからね！本当だか

さて、うん、しょっぱなは気まずいよね
行ったと思ったらすぐに帰ってくる息子・・・・・気まずいね～
でもまぁ、束さんの被害にあったと思っててくれ！
さて、何でこれを書いたかというと・・・・・・・・・・・コア
配って無かったんだよ！束さんじゃ配る気がしなかったんだよ！だ
から配るためだけに作ったんだよ！
うん、やりすぎた★
アイルランド人は最後まで噛ませ犬ですね本当に（ｒｙ
見てる人にアイルランド人いないよね？
別に嫌いなわけでも差別してるわけでもないんだよ？分かってね？
分かるにはやり過ぎな気もするけど、それは置いておいて
この中に伏線があったりなかったり・・・・・どうしようかな？
そして千冬さんと一夏、父さん母さん空気・・・・・忘れてたわ
（テヘッ
次回は、次回はでる！・・・・・と思うよ？
束さんの結婚しよう！って何回目のネタだろうな・・・・・・
最後のことはあえて言わない！言うとしたら荒榎名実ともに人外化！
・・・・・・・かな？

ノシ！

何というカオス、いいえ、これは混沌です・・・・・一緒っじゃん！（前書き）

タバラカｗｗｗ意味は後ほど分かります

何というカオス、いいえ、これは混沌です・・・・一緒っじゃん！

「俺と束さん、この二人はどの国にも属さず、尚且つ、人権を持っている状態、そして選択した義務と憲法の免除を申しだてます」
「なっ！、ナニヲ馬鹿な事を！そんな事が出来るか！」
「いや、だって、そうしないと、日本が有利じゃん」

日本国民だからってコアの製作を強要されたら嫌じゃん？
大体、日本以外には悪くは無いと思うんだけどな……言ったのは黒人だけど

「……確かに、それもそうね」
「し、しかし！そんな状態では人権など！」

慌てた様に言い出す……日本人かな？
強要する気だったんだろうね……ウザッ
ってか、こんなに人がいたら、面倒なんですけど

「煩いなぁ、それなら適当に国を作っちゃえば良いじゃないか」
「束さん、それは流石に……良いですね」

そうじゃん、適当な国でも作れば良いじゃん
国の憲法とか義務が面倒なだけなんだし……何処にしようかね？

「何を言っている！そんな事が出来るとでも思ってるのか！」
「え？出来ないの？じゃあ国籍いらないや」
「だからそんな事は無理だと！「良いじゃないですか」……何を言

っているんだ！」

途中からの台詞が一番聞きたかったんだけど……

ってか、騒ぐ事しか能が無いのか？鬱陶しいな

「良いじゃないですか、そうすれば問題は無し、その上で誰も有利ではない、これ以上にいい話がありますか？」

「し、しかし、それは……と、土地が！」

「土地なら我が国がが出します、幸いな事に、土地だけは多いですからね、別に多くなくても良いんですから」

「だ、だが……」

「日本人だから、なんて理由でコアを作らせよう、なんて考えて居なければ問題は無いと思うのですが？」

「そ、そんな事考えていない！……しかし」

「なら良いじゃないですか、土地もある、人権も作れる、憲法も勝手に作ってもらえれば良い、どっちにしろ、コアは手に入るのですから、誰にも損は無いと思いますけど？」

「……」

決定ですね、分かります、本当に（ｒｙ

ってか、この人何処の国？……さっぱり分からん

「では、あっ君さん？……ええと、本名を聞いても良いでしょうか？」

「あ、うん、良いけど」

「荒榎、年上なんだからちゃんと丁寧に話しなさい」

「父さん、それは今更じゃない？」

「うん、それはそうなんだけどね、ついさっきまで荒榎の雰囲気に呑まれてたからね」

「それは大人としてどうなの？」

「うん、言わないで、分かってるから、まさかこんなに上手く出来るとは思わなかったな」
「……何が？」
「え？気配操作、さっきからやってるでしょ？」
「……」
えと、はい、うん、最初に言いたい事はあれだね

「気配操作って何ですか？」
「……え？」
「……え？」
「教えなかった？」
「教えなかった」
「……」
「……」
教えたつもりだったのね
でも俺は教わってないからね……何時の間にか教えた気になってた？何ソレ恐い

「……んっ、それで、良いでしょうか？」
「え、ああ、はい、そうだった、真中荒榎」
「……え？」
「いや、だから真中荒榎」
「……それが本名でしょうか？」
「うん、そう、ってか、このタイミングで偽名は無いでしょ」
「え、まあ、そうなのですけど……あまりに軽かったので」
「そう？……ですか？」
父さんの視線がね……一応、丁寧な話し方に直さないとね

ってか、人ってのは無茶苦茶だよね、本名を教えて欲しいと言ったから教えたら、軽いからって疑うとか……どうしろと？

「ここまで一度も言わなかったので、その……隠してるのかと」

「……ああ、言った事無いんだった」

ってか、提出した書類からあっ君で通ってるからね

うん、言う気が無かったと言うよりも、一度も聞かれなかったから忘れてただけなんだけどね

「それで？土地と言うのは何処に？」

「ああ、それなのですが……荒榎さんは、どれくらいまでなら耐えられますか？」

「いや、うん、耐えられる？必要じゃなくて？」

「ええ、ＩＳの内容を国の学者に見せて、作らせようと思ったのですが、無茶難題だと言われまして、とりあえず作るのだったら何があっても危険が無いように広い土地が必要かと思いまして」

「……さぁ？」

「さぁ？と言いますと？」

「いや、だって……今までは地下で作ってたし……広さと言っても家１個分くらいだし」

「……へ？」

「あえて言うのなら、家１個分……だとちょっと大きいかな？」

「え、あの、その……へ？」

あれだね、ここまでパニくられると……自分の可笑しさが分かるよねもうあれだ、本当に可笑しいね、笑うのが可能と書く位には可笑しいね

「……えと、それじゃあ、山五つくらいで、どうでしょうか？」

「……え？」
「……え？」

あれ？俺が可笑しいのか？山五つって聞こえたぞ？
いやいやいや、聞き間違い……な訳無いか、うん、ものすごくはっきりと聞こえたし
可笑しいのは俺？ソレともこの人？

「あっ君あっ君、山五つってどのくらい？」
「いや、それは……どうなんだ？」

山にも色々あるからね……大体は大きいけど、ってか大きくなかったら林だけど

「そうですね、大体……日本の半分程でどうでしょうか？」
「……は？」
「おお～、おっきいよあっ君、遊びたい放題だね！」
「と言っても、何も無い地帯ですが」
「いや、うん、それだけあれば……良いんじゃないかな？」
「おっきいよあっ君～」
「はい、それじゃあ今すぐに手続きを行いますので……あ、ちなみに国名は決めていますか？」
「国名……そんなの適当で良い気が「何を言っているのかねあっ君！」……束さんどうぞ」
「国の名前だよ！国なんだよ！束さんとあっ君の愛の国だよ！名前は考えるんだよ！」
「何時、何処で、誰が、何を、どうして、何処が、愛の国になったんですか？あぁ？」
「あっ君のグリグリ～……痛いよあっ君！……あっ君なら良いんだけどね☆」

「アンタはマゾか！……で、国名は？」
「あっ君がマゾの方が好きならマゾでも……えっへん！国名はやっぱり束さんとあっ君の名前からとって！」
「何がやっぱりなのかが全く分からないね」
「タバラカ！」
「……ああ、束さんからタバ、荒榎からラカ？」
「そうだお！束さんとあっ君の愛の結晶……あっ君、首は危ないよ？」
「うん、危ないね、でも今のは良いと思うんだ……」
「……」
「あ、寝た」
「いや、こう言う場合は気絶したと言うべきなのではないでしょうか？」
「んしょっと……さて、解散！」
「この状態でですか！？」
「うん、別に国には興味無いからタバラカで良いし……ってか、束さんが決めたならそれで良いと思うし」
「……ふふっ、それじゃあ、タバラカで作っておきますね」
「あ、はい」
「と言っても、誰もが知らない国になるでしょうね、国籍の為だけですから」
「そうですね……あれ？地の意味は？」
「それじゃあ失礼します、また今度連絡を送らせていただきますので……」
「え、ちょ……足速いな、ってかどこの国すら聞いてないぞ？」

ってか、それで良いのか？まぁ、一番いけないと思うのは国を作った事なんだけど
ってか、土地いらなくね？……ま、まぁ、束さんとの共同資金と思えば……良いのかな？

どうせあれだ、使わないんだ、国名なんてあっても無いような物なんだから……偽国ってか？
ってか、ＩＳ学園って日本に出来るんだったっけ……土地要らないじゃん、日本に居れば良いじゃん
でもまぁ、これで義務からは逃げられた……憲法忘れてたわ

「はいはい、注目してね～、えっと……これから俺と束さんはタバラカ国の人間となりました、これで義務も無くなりました、ここまでは良い、後は憲法なんだけど……タバラカの人間は何処の国でも憲法や規則に縛られない様にしてね～」
「ふざけるな！そんなことが許可できるか！アイルランドは許可しない！」
「そうだ！日本も出来ない！」
「いや、これは脅迫ね？お願いでもなんでも無く、脅迫、英語だと……まぁ良いや、やらないとＩＳで……どうなるかは分かるよね？」
「た、逮捕だ！ここで逮捕するんだ！今なら日本人だ！まだ逮捕できる！」
「いや、出来ないし、日本人としての国籍消したから」

ツいさっき消させていただきました、最近はパソコンでまとめてるんだね
束さんがやってましたよ……気絶させる前にね
これでデータは消えたし、書いた紙も機械を操作して燃やしました、完全犯罪ですね、本当に（ｒｙ……使うの何回目だ？

「その前に……逮捕できるの？」

妖幻の部分展開、右手のみの展開だが……余裕で勝つる（笑
ってか、負ける気がしない……銃弾？止めますよ、余裕です、これぞ鬼畜

「ってな訳で、夜露死苦～」

古いかな？うん、古いね
でもまぁ、そんなに変わらないし……良いよね？
ってかあれだ、土地があるなら何かやろうかな……ＩＳの会社でも作るか？装備専用で
うん、それが良いな、そうしよう、社長は……俺と束さんの二人で
良いかな
ってか、最近無理を押し通すのに慣れてきたな……いや、良くないけど

とりあえず、帰る……

「で、私達が呼ばれた理由は何だ？」
「……千冬さん？怒ってらっしゃる？」
「いや、一夏が腹が減ったと言っているのに呼ばれた理由が無いなら……殴っても可笑しくないと思ってな」
「……」

怒ってらっしゃいますね、本当に（ｒｙ
いや、現実逃避は止めよう、呼んだ理由？……呼んだ理由呼んだ理由……

「ってか、呼んだの束さんだし」
「……おい束、起きろ」

起こし方がアイアンクローですね、本当に（ｒｙ……はぁ
うん、怒ってるね、めっさ怒ってる……あ、一夏がお菓子持ってる
何時の間に買ったんだよ……まぁ、千冬さんだし、出来ない事は無

いな、うん

……さて、現実逃避が多い事で人気の今日ですが……

これも現実逃避だよね、だれからも人気じゃないし

うん、あれなんだ、一夏が持ってるお菓子、小さい子が好きなおもちゃ入りなんだ……そこまでは良いよね、うん、全くもって問題なし

でもさ、付いてるおもちゃがさ……藍色の装甲を纏った人形なんだ、うん、それは良い……と思う、まだ戦隊物でありそうだからさて問題、戦隊物には羽がついていますか？そして銃を持っていますか？しかも結構なゴツさ……そして頭にはバイザー

あれ？何処かで見た事あるよね……んー、何処だっけなー覚えてないなー……・ＭＡ☆ＪＩ☆ＫＡ

うん、俺だ、俺と妖幻だ……可笑しいな、うん可笑しい、笑えるよねー

んな訳あるか！誰が作ったんじゃぁ！責任者出て来いや！……束さんじゃないよね？

ってか、何故に俺が？……あ、二つ目に白騎士が……ってか、おい、白騎士がメインだろ、何で俺も作った？

誰が喜ぶんだ……って一夏が喜んでるよ、うん、千冬さんの怒りってひょっとしてコレじゃないよね？

自分よりも俺のほうが一夏に人気だから……なんて、無いよね？……無いよね？

……ヤベェ、俺の命後何日分だ？大丈夫か？と、、とりあえず、一夏とお話ししてみようかな、頑張れば妖幻よりも白騎士が好きになったり……するよね！

「い、一夏、おはよう」

「……ああ、荒榎だっけ？」

「うん、忘れたんだね……ところで、それ何？」

「これ知らねぇの？あいえす、ってお菓子、学校で人気だぜ？」

一夏の喋り方が……あれ？こっちが普通なのか？
ってか、学校で人気って、何時の間に……あ、俺学校行ってないじゃん
うん、その間だね……がんばれ俺！まだ大丈夫だ！

「それなんて名前のおもちゃ？」
「コレを知らないのかよ、ねっとでも良く見るんだぜ？白騎士と、バトラー」
「……バトラー？」
「そう、バトラー、これ隠しキャラでさ！滅多に出ないんだよ！今日姉ちゃんに買ってもらってやっと出たんだぜ！」

ああうん、もう少し音量を下げてもらえるかな？千冬さんの目が恐いから

「一夏はどっちが好きなんだ？やっぱり白騎士か？」
「俺はバトラーだな！カッコイイじゃん！銃でババババッってミサイルを落とすんだぜ！カッコイイ！」
「そ、そうかな？俺は白騎士の方が良いと思うんだけど……ほ、ほら！剣持ってるし！」
「あ～、剣はカッコイイんだけどさ、バトラーはもっとカッコイイんだ！場所を動かないでさ！こうズババババッって撃つんだよ！最初はクモの巣みたいな、ねっとを撃ってさ！ソレからはマシンガンとショットガンを両手で撃ってさ！」
「ああ、うん、もう良いや」
「え～……あ、ネットで見てみろよ、あいえすって打てば出るから」
「……分かった、それじゃあな」

うん、無理だった、あれは無理、もう完全に憧れの目だった

ってかバトラーって何だよ！そんな名前じゃないし！妖幻だ！……
なんて言えないよね～
ってか、小学三年生はもう剣じゃなくて銃が格好良いと言う年齢なんだね……早くね？

「……ってか、何故にバトラー？」
「バトルが格好言いからバトラーだそうだ」
「へ～……千冬さん？束さんは？」

親方ぁ！後ろから千冬さんが！……普通ですね、うん、何時の間にか居ても千冬さんなら普通……人間じゃねぇ！通じないよね～、俺も忘れてきたな、何のネタだっけ？
って、現実逃避が本当に多いなおい……バトルが格好良いからバトラー……そのまんまやん！

「なぁ、剣よりも銃なのか？銃が良いのか？……私も銃を持てば一夏が憧れの目で見るのか？」
「千冬さん危ない！その目危ない！黒いから！光が消えてるから！大丈夫だって、一夏は白騎士よりもバトラーって言っただけで、千冬さんの事は言ってないから」
「白騎士は私だけどな……」

ハイ、アウトー……やっちまったな！俺だけど……言っちまったな！そうだよね、これは不味かったね、話しの展開間違えたね、うん、ここは泥沼ですね分かります

「……荒榎、頼みがある」

おおう、千冬さんが真剣な目、これは戻ったな
うん、重要な話なんですね！オッケーです！さっきのお詫びに何で

もしましょう！

「なんですか！」
「私にも銃をくれ！」
「この人アウト！」

アウト！本当にアウト！戻って無かったよ！光の関係で真剣な目に見えただけだよ！
今でも暗いもん！ってか黒いもん！光が黒い！ってか光ってない！

「よし、落ち着こうじゃないか、ちゃんと銃は入ってた、荷電粒子砲があったじゃないか」
「もっと目立つのだ、もっと、もっと、荒榎の持ってた、あのショットガンとマシンガンみたいなのだ」
「うん、ついでに言おう、もう白騎士使わないでしょうが。あんた落ち着きなさい」
「……そうだった……じゃあ暮桜に」
「ってか、銃器なんて使えるんですか？銃器を使ったら近接格闘が難しいですよ？」
「……むぅ」
「最後に、荷電粒子砲が一番目立つ技ですから、あの時は一直線だったから分かり難かっただけで一番威力が高いですから」
「……そうか」

うん、一件落着だね！頑張った俺！誉めて誉めて！……誰が誉めるんだよ馬鹿
それにしても……強敵だったね、うん、みっともない戦闘だったけどってか、束さんは？……伸びてますね、うん、伸びてる、千冬さんのアイアンクローは良く効いたんだろうね
……気絶してないよね？ってかもう帰りたい……帰るか？

どうせもうここに居る必要は無いんだし……帰ろうかな

「千冬さん、束さん連れて先に帰りますね」
「ああ、丁度良い、私達も帰る」
「……さいで」

ちなみに、帰るまで一夏のバトラーの話しはずっと続き、千冬さんの目がどんどん怖くなりましたとさ、チャンチャン……はぁ

何というカオス、いいえ、これは混沌です・・・・・一緒っじゃん！（後書き）

うん、今回はカオスだね☆這い寄る混沌と書いて今の状態と読むんですね分かります

タバラカｗｗｗ・・・・・うん、すいません、ふざけすぎたね！
でも大丈夫！出す気は無いから！・・・・・・・・・・・暫くはいや、うん、ひょっとしたら出てくる可能性が・・・・・・・まぁ良いか

さて、問題、でてきた女性は何処の国の人でしょうか（笑
これは決定事項だ！・・・・・いや、関係ないからね
一応、荒榎は最高重要な立場にいる人なので、話し方も丁寧、ってか上の人に対する言葉使いです
いや、さすがに日本の半分は無いよ？多分でもまぁ・・・・・・四分の一くらいなら出来るかもね
憲法や規則にとらわれないのが荒榎です、本当に（ｒｙ
いや、今回このネタ使いすぎだね・・・・・・これ以上はまずいね、不味い
フリじゃないからね？

千冬さん壊れたｗｗｗ
まぁね、そうなるかもね・・・ってか、ついノリでやってしまったバトラーｗｗｗ
ふぅ、落ち着こう・・・・・誰だこんなこと書いたの！俺だ！馬鹿野郎！
ついに荒榎はキャラクター化です、そして・・・・・・
まぁ、この続きは小説を読んでいる人には分かるよね？文化祭と言

えば、ね？
あれ？これってネタバレじゃね？・・・・・すいませ～ん、この部分カットで
え？生放送？・・・・・・コマーシャルはいります！

さて・・・・・おかしいな

「で、だ、忘れていた説明をそろそろして欲しいのだが……」
「……へ？」
「……お前も忘れてるのか」

国籍が変わった？と思われる次の日、千冬さんに呼び出され、千冬家にお邪魔しています

「あれだ、あの白騎士と……バトラーの戦闘の」
「何故にそこだけ音量を落としたんですか……」
「仕方が無いだろ、一夏がすぐに反応して寄ってくるのだから……なあ荒榎、暮桜にも」
「駄目です、ってか暮桜は弄りませんよ、束さんの作品なんだから、束さんが良いって言わないと……ってか束さんに頼んでくださいよ」
「……頼んだんだが」
「……駄目だそうで？」

何でだ？束さんなら千冬さんのお願いに過剰なほど反応すると思ったんだけど
要らない装備まで付けるくらいならやりかねないのに……

「……んだ」
「へ？何か言いました？」
「……無理だったんだ」
「……は？」

無理？束さんでも出来なかった？いやいやいや、生みの親が出来な

いなんて言ったら俺も出来ないよ？……一応俺も生みの親に入るけど

「私には……難しかったんだ」
「……銃が使えなかったと」
「……」
「うわ～……俺にどうしろと」
「荒榎なら出来そうだと思ってな……」
「俺は一体何なんですか……ってか、話しズレた」
「……ああ、そうだったな、バトラーだ」
「姉ちゃん、バトラーがどうかしたの？」
「い、いや、何でも無い」

おおう、颯爽と登場したのは一夏じゃないか……ってか地獄耳だな
何故にそんなにバトラーに反応するんだよ……

「一夏、ちょっと遊んで来たら動どうだ？」
「え～、今は良いや、テレビでバトラーが映ってるんだ」
「……は？」
「ああ、またやってるのか……」

ちょっと失礼してテレビを見てみると……あ～、俺だね、全くもって俺ですね、摩來使ってるし……え？何でテレビに映ってるの？しかもまた？またって言った？これ何回もやってるの？え？二回目だよね？そうだよね？何回もやってないよね？
恥ずかしいよ？流石にそんなに流されたら恥ずかしいよ？ってかこれ新手の虐め？

「最近、テレビで良く映るんだよ、おもちゃで人気になったからな」
『あいえすに新しいバージョンが登場だ！これは凄いぞ！なんと！バトラーの必殺技のポーズが登場だ！そして白騎士！剣を振り！ミ

サイルを破壊しているポーズだぜ！新登場の幻想もよろしくな！』
「うわぁ……姉ちゃん、ちょっと買ってくる！」
「……ああ」
「い、いってらっしゃい……」

千冬さんのテンションがが落ちです！問題は俺だね！ごめんなさい！
ってか、なんだよ幻想って！思いっきり妖幻じゃん！しかも今の状態だし！……え？
今の状態の妖幻を知ってるのは……うん、一人だね☆スススス、ドウシテクレヨウカナ？

「……さて、一夏も居ない、これ以上の良い状態を待っていられる程、私の気は長くない」
「あ、はい、それで、何が聞きたいんでしたっけ？」
「あのときの戦闘で使った技、と言うか能力」
「……何使いましたっけ？」
「……ＡＲＭとＡＣＳか？」
「あ、ああ！あれか！いや～すっかり忘れてた、うん、あれですね」
「で、一体アレは何なんだ？」
「えっとですね……まずはＡＲＭからで良いんでしょうか？」
「どちらからでも構わない」
「じゃあＡＲＭから、あれはａｕｔｏ　ｒｅｐａｉｒ　ｍａｇａｚｉｎｅの略ですね」
「ａｕｔｏ　ｒｅｐａｉｒ　ｍａｇａｚｉｎｅ……自動修復マガジン、か？」
「はい、そんな感じです」

能力としては簡単、ただ単にマガジンの修復、つまりは弾の修復を行うものだ

ＩＳには少しではあるが、自動修復システムがある、それがあるからＩＳが傷ついても束さんや俺のような、ＩＳについて詳しく知っている人がいなくても、安全に修復できるのだと言うか、簡単な傷や汚れ落としのようなものなのだが……それでも修復機能ではあるのだ

もし、その修復機能が、１箇所を集中的に直したら、結果的には物体が元通りになる

例えて言えば、白騎士や、後の白式が持つ『操縦者の生体再生能力』これは修復機能が高性能になった状態だ

高度な修復機能により、人体も部品と考え、無くなったから修復するならば、弾もそうなんじゃないか？そんな事が急に思いつき、試してみたら上手く行った

まず、弾を量子変換して、ＩＳに詰めこむ、そしてその状態でＩＳと判断する様に変更

つまり、弾をＩＳの装甲と同じようの考えるのだ、そうすれば、微弱ながらも弾に修復システムが働くのだ

後は、その機能を十全に発動する様変更してしまえばいい、そうすれば弾の修復が早くなり、戦闘中でも使えるまぁ、その変わりに装備の修復が全くと言っても良いほどに無くなったが……うん、これはこれで

「ってな、感じですね」

「……もう何でもありだな……というか、白騎士にはそんな機能があったのか……」

白騎士の機能も言いましたよ……ああ、白式は言ってませんからね？ってか、言っても分からないと思うけど

「それで、次はＡＣＳだ」

「ああ、これは見せた方が早いと思います」

妖幻を起動、と言っても全体は危ないからね、部屋の大きさ的な意味で
頭の部分と……右手があれば良いかな？

「……さて、妖幻ＡＣＳ起動」
『エラー、エラー、その名称は存在しません、正式な名称で再確認を行います、名称をどうぞ』
「……あれ？」
「どうした？」
「いや、おかしいな……正式名称ａｎｏｔｈｅｒ　ｃｏｍｐｕｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ、起動」
『エラー、エラー、その名称は存在しません、正式な名称で再確認を行います、名称をどうぞ』
「……」
「名称が違う？」

……え？あれ？え？何で？おかしいな？
正式名称ａｎｏｔｈｅｒ　ｃｏｍｐｕｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ……
間違いは無いぞ？あれ？え？なんで？

「……ちょっとすいませんね、確認するんで」

妖幻のデータを開いて……うん、あれ？え？おかしいな？
ここにあるはずなんだけど……あれ？ひょっとして……

「……こうなっちゃいます？」
「どうかしたのか？」
「え、いや、はい、どうかしたかと聞かれればどうかしたと答えます」

「……それで？」
「実際に見せるのは無理、みたいな？」

いや、うん、ぶっちゃけ言おう……無くなっちゃった☆
うん、異端結界が原因なんだ、あれってさ、三次元の情報を高速で処理できるから使える技なんだよね……しかもその三次元の情報が、光速並の早さで変わるからさ、凄い処理が早くないと出来ないんだでさ、ＡＣＳ、簡単に言うと超高速処理を目的とした情報処理専用のＣＰＵなんだ……変わっちゃった☆
うん、ＡＣＳが消えたから異端結界が出来たんだ……え～、何ソレ、分かってなかったら滅茶苦茶危ないじゃん
あ、でもあれだ、目があるから大丈夫か……何気に情報処理が滅茶苦茶早いし……
ってか、ＣＰＵ使っても処理出来ない量だと思うんだけど……あ、何気に目も使ってる
え？ちょっと待って？じゃあ何？情報処理専用のＣＰＵと俺の目を両方使ってなんとか成り立ってる技なの？……馬鹿なの？
俺にしか使えないじゃん、いや、それは良いんだけど、何でこんな進化した？滅茶苦茶使いにくいじゃん……いや、効果は高いんだけどうん、どちらかというと殺し向きだよね……危なっ！？

「まぁ良い、無くなったのなら聞く必要も無いしな」
「へ？聞かなくても良いんだ」
「無くなったものを聞いてどうしろと言うんだ……それより」
「……それより？」
「目は一体どうしたんだ？」
「……」
「目を逸らすな、で、何があった」

うん、そっか、そういや説明してなかったね……思いっきり忘れ

てたわ
ってか、束さんも聞いてないと思うんだけど……あの人だからな、外見はどうでも良いとか言いそうだし……愛されてるね～ヒューヒュー……って違うわ！
うん、一人ボケ&突っ込みって……悲しいんだね……はぁ

「いや、うん、色々と……ね？」
「……言えない事か？」
「……まぁ、ぶっちゃけ言うと？」
「そうか……なら良い」
「……へ？」

え？聞かないの？いや、聞かれても困るけど
言えない事って言ったら普通に聞かないでくれるとか……あんたどんだけ良い人なんだよ！憧れだよ！
そこに痺れる憧れるぅぅぅぅ！だよ！

「聞かれたくないことなら聞かない、私はそう決めている」
「……ありがとうございます」
「……ふっ、お前が礼を言うなんてな」
「今まで言った事ってありませんでしたっけ？」
「無いな」
「……そんなに断言しなくても、しかも即効で」
「まぁ良い、それで、これまで一体何をしてたんだ？」
「これまで、ですか？……ん～、束さんとコア作って、束さんとアイス食って、束さんに物買わされて、束さんに「いや、もう良い」…良いんですか？まだまだありますよ？」
「いや、口の中が甘い……お前達、まさかとは思うが、一線は超えてないよな？」
「一線？……っ！何言ってるんですか！そんな事してません！」

「それなら良い……しかし年齢を考えろよ？お前はまだ小学二年生だからな」
「それくらい……あれ？」
「……どうした？」
「俺って、小学二年生でしたっけ？」
「……お前は一夏と同じ学年だろうが」
「あ～、そっかそっか、うん、思いっきり小学三年だと思ってた」
「お前は……はぁ」

いやいや、本当に分からなかったんですって、ってか、国を出てからどのくらい経ったんだ？
……まぁ、良いやそう言えば、シャロに会いに行かないとね、あと……15日くらいかな？まぁ、大丈夫でしょ

「と言うか、お前は学校に届けを出してから消えろ、先生が聞いてきた」
「え？千冬さんに？何で？」
「一夏を通じてな、香織さんから聞いていたから良かったが、せめて先生には伝えておけ、恥ずかしがってたぞ」
「いや、だって、俺先生知らないし」
「……は？」
「先生とか面倒だから覚えてないし……その前に話をした覚えが無い」
「お前は……もういい、飽きれて物が言えん」
「そう？だってさ、先生とか頭悪いし……正直学校行ってもやる事が無いし」
「まぁ、お前の頭なら……大学院でも余裕だな」
「ってか、ぶっちゃけ学者でも勝てる気が」
「お前は一体何になりたいんだ……」
「さぁ？自分もなりたいものなんて考えてないですし」

「そこだけは小学生だな……はぁ」
「あはは、まぁ、うん、俺を小学生なんて考えたら駄目ですよ」
「ああ、お前は束と同じ扱いでも良い気がしてきた」
「それは嫌だな……あれは酷い、うん、アイアンクローとか……束さんが悪いんだけど」
「悪い事をしなければ問題無い、と言うか、お前は日常でも少し止め具があった方が良い」
「そうですか？結構普通ですよ？……知人には」
「ソレが悪いんだ、まった……束に似てきたな」
「え？うそ？やだ？え？そんな？束さんに？うっそだ～」
「ソレも少しだが似てきているぞ……彼女でも作れ」
「何故にその展開！？」
「彼女でも作ればお前の止め具になってくれるしな、束の抑止力にもなる……はず」
「あの人は逆に強くなりそうですけどね……ってか、その子精神が持たない気がする」
「だろうな・・・・・でもまぁ、小学二年生だ、彼女の一人や二人くらいなら……」
「一夏が出来たら？」
「潰す」
「早っ！？そして潰す！？どっちを！？」
「無論一夏を」
「……潰せるの？」
「一夏の為と思えば」
「さっきから即答なのが一番怖い！そして一夏逃げて！ってか二人は無理だから！国として……出来るじゃん」
「……」
「いいや、一夏の事じゃないからその怖い雰囲気を閉まってくださいよ……」
「そうか、なら良い」

俺ってもう日本人じゃないから、普通に法とか作れる状態でもありまして……一夫多妻とかも出来る訳で……やる気は無いけどってか、そんなに居ても辛いでしょ、ずっと束縛状態じゃん？嫌だってそんなの、俺は自由に生きたいんだ！

「でもまぁ、お前に付いて行けるような子が居ないか……」
「うん、まぁ、束さん位じゃないとね……一目惚れは多いけど」
「……荒榎、本当に束とは」
「無い！絶対無い！一緒に寝た事は非常に仕方なかったからあったが！それは無い！」
「寝た事はあったのか……まぁ良い、それよりも、明日は学校に行ってこい、と言うか行け、一夏の状態を見て来い」
「うわっ、出ましたブラコン……イェッサー！任務を受領します！」

目が怖いんだよ！睨むんだよ！この人の目一体どうなってるんだよ！ってかこの人、目だけで強いと思うんだけど……

「ってか、俺一夏と違うクラスなんですけど……」
「その位は何とかしろ、別にお前なら授業を受けなくても問題は無いだろ」
「おい、そこの中学生、何小学生にサボらせようとしてるんだよ」
「よし、それでは明日、ちゃんとした成果を期待している」
「聞いてないし……あ、ってか俺国籍が変わったから学校行けないんじゃないか？」
「それは問題無い、香織さんが処理しておいてくれた」
「母さん、何でこんなときだけ高性能なんですか……」
「では、頼んだぞ」

何でこんな事に……あれ？小学二年？何かあったような……
まぁ、明日丁度に何かが起こるなんて無い……よね？

さて・・・・・おかしいな（後書き）

さて、新発売だぜ！・・・・・・・・・・なんでだよ！
はぁ、うん、何書いてるんだろうね・・・・・・
さて、千冬さんのダメージはもう最大です！
銃が欲しい！でも銃が使えないｗｗｗ駄目じゃんｗｗｗ
あ、でもどうなんだ？原作では銃を使ったことは・・・・・荷電粒子砲しかないよね？ないよね？あれ反動とか速さとかほとんど違うから別におかしくないよね？

そして幻想ｗｗｗ束さんｗｗｗあ、書いたの俺だｗｗｗ
でもまぁ、ＩＳのおもちゃが出たら俺は即買い占め！なんてできたら良いけどそんな金が無いので一個買って飾りますね
そしてやっとの説明入りま～す、ＡＣＳとＡＲＭ
アニメやマンガの技だと思った人、同士だ
書いてる途中に思ったんですよね、某アクセサリーが武器になったり、主人公が剣玉みたいな生きてる知能がある武器で戦う作品や某白い悪魔や金色の死神とか良く分からんオールスター的な感じの作品とか考えたよね！俺も考えた！
でも違うんだ！そうじゃないんだ！ちゃんと考えてるんだ！結構適当だけど！
ついでに効果も超無茶振りだけど！

まぁ、うんＡＣＳはね、今後もあったらある意味最終兵器を超える存在になれるよね
でも残念、異端空間に使ってるんだ、ついでに目も半分以上の処理能力が使われてるんだ
だからあれだよ、異端空間を使うと同時にほかの事は出来ないんだいや、別に使ってなければＣＰＵががら空きになるからよゆうなん

だけどね

さて、次回は学校！・・・・・なんでここまで一度も学校を書かないでこれたんだ？うん、これってまだ原作じゃないけど学園系の話だよね？

なんで学校書かなかったんだろうね・・・・・ってか、一夏とか箒とか全然出てきてない・・・・・・・・ま、まぁね！この作品ではある意味サブキャラだからね！

でもまぁ、久しぶりに一夏を書いているこの頃、上手くかけている自信が無い・・・・・はい、一夏の幼少期ってこんな感じで良いのかな？

自信がもてないのが私です

これほどに見てくれている人がいるのにも拘らず、何時消えていくんだろうな・・・・・なんて考えているのが私です

うわ～、何でだろう、今日めっちゃダウナーＤＥＡＴＨ！

ダウナーに見えないけどね！頑張ってるよ！

さて・・・これからどうしようかな

まぁ、とりあえず、次回は学校話です！

学校名って・・・出てきてないよね？

小学二年生の学校！これでネタは分かるよね！

小学二年生だよ？第三巻だよ？予習しておいてね！・・・・いや、しなくて良いけど

まぁ、そんな感じでお送りいたします

次回も読んでくださいね？じゃん、けん、ぽん、ウフフ

・・・・俺の勝ちだ！・・・・・・・分かんねぇ

学校面倒です、はい・・・ってか、これ千冬さんの所為じゃん

「……マジですか？」
「ええ、本当よ」

……え～、現在はあれだ、学校に送られるところ、うん、本当に行くんだね……
いやさ、ぶっちゃけどうなのよ、暫らく来なかった生徒がいきなり来るようになったらさ、他の生徒も困るんじゃないのか？
なんて良い訳をしたりと頑張ってはみたんだが……うん、行く事になりました

「でもさ、学校でしょ？小学生がウヨウヨでしょ？俺喧嘩するかもよ？」
「問題無いわ、そうなったら母さんが何か言い返してやるから」
「心強いお言葉で……」
「それに、荒榎は自分が悪い喧嘩は悪い事はしないでしょ？」
「……」

それを言われては言い返せませんよ、ええ、しないですよ、ってか小学生の餓鬼と喧嘩とか……力加減が難しいからやりませんよ
誰だよ、そんな事言ったの……俺だね、うん、思いっきり俺だね、俺が言いましたすいません
でもまぁ、小学生相手に喧嘩するような歳でもあるまいし……どうなんだ？俺の考えではそろそろ小学生に……なってないね、うん、これは失敗かな？

「それじゃあ……行って来ます」
「行ってらっしゃい、楽しんできてね」

いや母さん、俺は楽しむような歳じゃないんです、なんて言えないねってか、俺はどうなんだ?転生者です、とか言っておくべきなのか?……いや、まぁ千冬さんは俺は俺って言ってたし、母さんが会った事のある荒榎は全て俺だから……

一応、俺が荒榎であってるからな、言わなくても良いかな、ってか、このタイミングで言ってもね……

大体あれだろ?神様も俺の転生先をこの荒榎の所に変えて、その上で記憶を消さないで転生させただけだろ?俺が荒榎で間違ってないじゃん

……分かりにくいな、俺がここに来たのは神様の無理やりな転生じゃなくて、輪廻転生の中でここに移動しただけ、うん、そう言う事だ

「ってか、学校って何処だっけ?」

「この道を真っ直ぐ行った先だ、馬鹿者」

「おお、この声は千冬さんじゃないか」

「こっちを向く位しろ……」

後ろからかかってきた声は千冬さんの厳しい?声でした、ってか、後ろから話しかけてるから何か目的があると思ったんだけど、別に無いんだね

まぁ、束さん位じゃないと後ろからの用事なんて無いよね

「ってか、千冬さん何処から出てきたんですか?後ろはさっき確認したんですけど……そして何の用?」

「そこの横道から出てきただけだ、用は無い」

「無いんですか……本当に?」

「ほ、、本当だ、別に一夏がちゃんと学校に行くまでで虐められていないかなんて確認していない」

「うん、それ自爆、千冬さんのキャラじゃないから……落ち着こうか、うん、せめてその目を止めて、怖いから」
「ふん、それより一夏の事、ちゃんと見ていろよ、学校は流石に私の手が届かんからな」
「いや、その前に千冬さんも学校があるでしょうが、ついでに一夏はクラスが違うって前に言いましたよね？」
「ソレくらいならお前は問題にしないだろうが……」
「いや、まぁ、ソレくらいなら？小型のカメラでも作って設置すれば良いんですけどね、そんな暇無かったから出来てないし、せめてもうちょっと早く教えてくれたら」
「帰ってきたのが昨日でどうやって教えろと言うんだ、ついでに言うと盗撮は犯罪行為だ」
「犯罪？俺と束さんには関係無いんですよ、まぁ、帰ってきたのが昨日だからソレは仕方ないけど……」
「それより……学校に遅刻するぞ、急げ」
「げ、マジですか……ってか、それなら千冬さんも遅刻じゃないんですか？」
「中学は開始が少し遅いんだ、問題無い」
「それはそれは……急がないとね、久しぶりの最初が遅刻とか嫌だし」

ってな訳で……靴にローラーを付けて、っと、滑りま～す
あ、これ楽だ、滅茶苦茶楽、そうじゃん、ここから学校までずっと下りじゃん……止まれるか？
ま、まぁ問題無いだろ……多分
後ろで千冬さんが呟いた「小学校はそんな靴は禁止だと思うが……」
なんて聞こえない、聞こえないったら聞こえない、うん、問題無し

「……ってか、早っ！」

目の前でした、ハイ、めっちゃ近いです、ちょっと曲がってる一本道を下ったらそこにありますた
うん、ローラー要らなかったかもね……あ、でも遅刻ギリギリだな、うん、あって良かったローラーです

「ってか、クラスって……ああ、確かあっち」

うん、全然覚えて無いんだ、ってか学校なんて記憶にありませんよまぁね、学校よりも印象が強い事が多かったからね、ってか結構危険な事とかもね
俺って成績どうなんだ?まぁ、将来の夢、は無いけど、職業が決まったようなものだし……
成績要らないね、うん、要らない、ってか高校も行かなくても良いや、あ、でもＩＳ学園だよね……どうしようか
別に、もう今となっては原作なんて、ね?新しい国も作っちゃったし……もう原作からは遠くかけ離れてる……気がするしってか、うん、ＩＳ製作者が二人って時点で違うもんね……別にＩＳ学園とか行く意味が無い気がするな……ん～

「あ、あの荒榎君?そこで立ち止まられると先生困っちゃうな～」

……どうしようか
ＩＳ学園に行けば、少なくともこれからの話しの中には入るよね……でもまぁ、危険が多くなる訳で

「荒榎君?もしも～し、もうチャイムは鳴っちゃったよ?」

どうしよう、全然決まらない……
まぁ、ＳＳとかの転生者なら悩まずにＩＳ学園に入るんだけど……
俺、製作者だからな

学園にはいるとあれだ、学園内に製作者がいる状態になるんだよね
……そしたらさ、束さんとか出てくる？
あ、出てくるか、暇だから会いに来たよ☆とか言いそうだし

「う～、荒榎君～、時間だよ？先生も怒っちゃうよ？」

自慢じゃないけど、いや、自慢か？まぁとにかく、俺は束さんに結構気に入られている訳で、一緒にいる～、とか言われて学園内に居たら・・・……うん、滅茶苦茶になるね！
箒の赤椿とか、結構早めに渡させるんじゃないか？……ってか、何で原作の束さんは世界中を逃げてたんだ？……ああ、そっか、縛られるのが嫌なんだ
じゃあ、来ないかな……うん、別段問題は無いね、束さんに関しては、だけど

「あ、荒榎君！いい加減にしなさい！」
「うるさい、今重要なんだから、今後に関わるんだよ」
「ご、ごめんなさい！……って、そうじゃなくてね！」
「……誰？」
「先生です！荒榎君の担任の朝那珂尚江！覚えてるでしょ！」
「全然」
「そ、そんなに即答しなくても……じゃなくて、チャイムが鳴ったんだから部屋に入らないと怒りますよ？」
「ああ、そっか、そう言う事ね、まぁ良いや」

そんな事なら最初から言ってくれれば良かったのに
まったく、駄目な先生だね……あれ？俺ってこんなに知らない人を適当に扱う人だっけ？
あらら？ひょっとしてひょっとしなくても束さんに似てきてる？……
……不味いですね

直さないと……

「すいませんでした、すぐに席につきます」
「は、はい！そうしてください！」

凄い喜ばれたよ……あれ？俺が悪かったんだよね？
それで普通に直しただけだよね？それだけでこんなに喜ばれるの？
……どんだけ酷いクラスなんだよ
あ、俺のクラスだ……あれ？今まであの人と話した覚えが無いぞ？
……ひょっとして今までガン無視だった？（ダラダラ
ま、まぁ、問題無い、うん、無い、無いよ、無いはず、無い……
と良いな

「はい、皆席に着いてね～」
「先生機嫌が良いね～」
「どうしたの？」
「えっへん！やっと、やっと荒榎君がお話ししてくれたのよ、今までの苦労が報われたのよ」
「荒榎？……ああ、真中君か」
「やっとか～、長かったね」
「うんうん、今まではずっと無視してたからね」
「本を読んでるか、寝てるか、何か書いてるかだったよね」
「そうそう、何か難しい事書いてたよね、機械みたいなの」
「でもさ、カッコ良かったよな！」
「そうそう！まるでバトラーみたいなの！」

そこまで人気なんですか……
ってか、政府も政府だよ、普通はあんな動画消すでしょうが、何を考えてるんだか
……その前に疑問、書いてるの……見た？見たの？え？マジで

？あれ妖幻の製作書だったんだけど、後その他の武器とかの……ま、まぁ、小学生にはカッコイイくらいしか分からなかったんだろうね……良かった

「でもっさ～、真中君って最近来てないよ？」
「どっか行っちゃったよね」
「先生は何処であったの？」
「うん？すぐそこ……あ、そうだ荒榎君！ちゃんと先生に報告してからお出かけしてください！大変だったんだから」

いや、ここでこっちにネタを振らないで、ばれないように後ろから静かに入ってたのに……
そして、報告は母さんがして居た筈なんだけど……そこどうなってんの？

「あ、真中君……」
「「「……」」」
「はぁ……先生、それは母さんが連絡したはずですけど？」
「え、そ、そうだったかしら？」
「なんなら母さんにお話ししてもらいますか？」
「い、いいわ、ごめんなさいね、先生の失敗みたいね」

凄い静かです……楽だけどね……これはこれで、何か変だなまぁ、席に着いて……寝よう

「あ、荒榎君！ひさしぶりに学校に来たんだから、授業に着いてきてないわよ！？」

問題無い、小学生の問題程度なら何時でも……余裕で…解け……る……

「……うぁ？」

目が覚めたら放課後でした、まる

「いやいやいや、どんだけ寝たんだよ」

朝から……今何時？あ、三時だ……朝が大体９時として……６時間か
寝過ぎだろ……あ、ヤバイ、一夏の事忘れてた……

「……もう良いか、千冬さんには寝たと言っておけば良いや」

本当の事なんだから、別に問題……いや、あるけど……無いよね！

「ってな、訳で俺は帰る」

ランドセルを背負って……これ嫌だな、餓鬼になった気分……あ、

俺餓鬼か
まぁ、もう学校なんて来ないし・・…良いか、ってかもう来たくない、来ても寝るしかないし
あ〜、昼食い損ねた……と言っても弁当なんだけどね……母さんの料理か、久しぶりに食べるな……え？昨日の晩御飯？
もちろん母さんの手作りですよ……久しぶりじゃないじゃん、
おい、何でだよ、何で久しぶりなんて言ったんだよ
まぁ、それは良いとして……さっきから隣の教室煩いな……何だよ、男女って、どんな嫌がらせだよ、ってかどんな悪口だよ
そんなしょうも無い事言ってるならさっさと帰れよ、俺は帰るけど

「ってか、男女って……どんなだよ」

ちょっとの好奇心だったんだよね、うん、でもさ、昔から良く言うよね
好奇心は猫をも殺す、ってさ、うん、本当に実感したよ……だってさ

「お〜い、男女〜、今日は木刀持ってないのかよ〜」
「……竹刀だ」
「……え〜」

そっか、そうだ、そうでしたね、うん、そうだった、男女って、箒の悪口じゃん
でもさ、何で今日？そして何故にこのタイミング？これはあれか？
中に入って大乱闘をしろと？
一夏と肩を並べて戦えと？……おいおいおい、冗談も言い加減にしてよ、まぁ助けるけどさ
え？放っておけば良いじゃないかって？いやいや奥さん、そうは言ってもね？え？俺は男？ま、まぁそんな事はどうでも言い……ってか、適当に考えた頭の中の人なのになんで性別が分からないんだよ、

訳分からん
まぁ、それは良いや、とにかく、俺が言いたい事は一つ、相手が多いんだよ、うん
原作だったら……三人だっけ？ソレくらいだろ？今回はあれだ……
えっと、ひぃ、ふぅ、みぃの……五人なんだよ
いや、別にすぐに分かったけど……流石に一人で五人は無理っしょ
いや、まぁ、千冬さんの弟だから近接格闘はなんとかなるとは思うけどさ……ＩＳじゃないし、普通の体での喧嘩だし？
でもまぁ、うん、五人だよ？しかも一人思いっきり体のデカイ奴が居るしさ……勝てないでしょ
なんて無駄話をしている内に……

「……うっせーなぁ、てめーら暇なら帰れよ、それか手伝えよ、ああ？」

ほらほら、一夏が喧嘩売ったよ……まぁ、うん、気持ちが分からないでもないが……せめてさ、もうちょっと良い方法があるんじゃないか？
背中から強襲とか、思いっきり水を吹っかけるとか……あれ？駄目か？
あ、じゃああれだ、椅子を持って床に投げ付ける、これなら大丈夫だろその上音が大きいから結構ビビらせられるのに……勿体無いな
話しかけたら全部出来ないじゃん……まったく、今まで千冬さんから何を学んだんだよ、戦闘は少なく、行動は早く、これは常識だろ

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」
「へっへっへ、この男女が好きなのか？」
「邪魔なんだよ、掃除の邪魔、どっか行けよ、うぜぇ」
「へっ、真面目に掃除なんかしてんじゃねーよ、ばっかじゃねーの――――おわっ！？」

「真面目にする事の何が馬鹿だ、お前達のような輩よりははるかにマシだ」

おお、箒が登場だ！……いや、前から居たけど、胸倉を掴むのは…大変じゃないか？

これは何て言えば良いんだ？攻撃？いやいやいや、間だ違うな、それなら威嚇の方が……威嚇かな？

さて……何時出れば良いんだ？思いっきり出るタイミングを見逃したかも……

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ、離せっ、離せよっ」

「あー、やっぱりそうなんだぜー、こいつら、夫婦なんだよ、知ってるんだぜ俺、』お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

「だよなー、この間なんか、こいつリボンしてたもんな！男女のくせによー、笑っちま――ぶごっ！？」

おお、一夏のお怒りシーン、別に怖くも何にも無いが……迫力はあるな

まぁ、千冬さんの弟だ、これくらいは出来ないと大変だろうて

「笑う？何が面白かったって？あいつがリボンしてたら可笑しいかよ、すげぇ似合ってただろうが、ああ？何とか言えよボケナス」

「お、お前っ！先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎、その前にお前等は全員ぶん殴る」

「ばーか！お前一人で五人に勝てる訳が無いだろーが！」

「それでも殴る！あいつを馬鹿にした奴は許さねぇ！」

格好良いね～、流石はハーレム王子……と言うか、無責任フラグメイカー

そして超唐変朴になる男、唐変朴に！俺はなる！……なんて言わな

いけどね
でもさぁ……

「面倒だから殴るじゃなくて捕まえようぜ、後で親にも謝らせてぇから」
「だ、誰だよお前！」
「え？隣のクラスの……まぁ、誰でも良いじゃん、どうせお前等興味無いから名乗る必要も無いし」
「っ！お前！俺達を馬鹿にしてるのか！」
「え？むしろソレ以外の聞こえ方があった？ならゴメン言い直すわ、お前等興味無いから、名前なんて教える気無いから、ってか黙って座ってろよ、お前らみたいな奴を育てた奴の顔が見たいから」
「お、お前っ！泣いたって許さないからな！」
「え？誰が泣くの？どちらかというとそっちが泣く方でしょ？何言ってるの？頭大丈夫？病院行ってきたら？」
「っ！この野郎！」

はいアウト、即効で終わり、もう面倒だから殴って良いかな？……
ああ、一発くらいは殴られておかないとね
でもなぁ、殴られたらこいつ等調子に乗るけど……まぁ良いか

「……わー」
「へへ、俺達を馬鹿にしたお前が悪いんだぞ！」
「そうだそうだ！、お前が悪いんだ！」
「俺達悪くないもんねー！」

そう言ってずっと蹴ってくる五人組、とそれを止めようとする一夏と箒
……よし、もう良いかな、ってか正直眠いです

「妖幻、撮影停止……ってか何時まで蹴ってる気だよウザイキモイどっか行け、ってか帰れ、もう必要無いから、はいお疲れ」
「……な、なんだよお前！さっきまでずっと殴られてたのに！」
「え？あれで殴ってたの？……うわ～、ゴメンね、普通に眠かっただけだ」
「……大丈夫なのか？」
「お前すっごい蹴られてたけど」
「え？ああ、別にあれくらいなら……寝られるよ？」

何で二人とも可笑しな物を見たような目で見るのか？かな？……これ束さんが使ったわ
そして俺が止めるように言ったわ……俺が使ってどうするんだよってか、もう先生来てるし良いよね？寝ても良いよね？……お休み～

「……なんて人生甘くないよね」
「ですから「そんな事はどうでも良いんです！家の太郎ちゃんは殴られたんですよ！？」……ですから」
「いや、普通に殴ってたじゃん、殴られるのは駄目で殴るのは良いのかよ」
「世の中は変な人もいるのだから荒榎も気をつけてね？」
「別に大丈夫だって、ってか母さんいなくても大丈夫な気もするし」

現在は先生に呼ばれた……誰だっけ？とにかく俺を蹴ってた餓鬼の親に説明した所ですね
あれ？もうちょっと後だね、説明したら家の子は悪くない！悪いのはそっちじゃないか！とか、裁判だ！とか、警察だ！とか言ってるババァを相手にしています……先生が

「大体、他のクラスの子が手を出してくるのが可笑しいんじゃありませんか！」
「そうです！それが無かったら問題ありません！」
「何でそんな子を隣のクラスに入れたんですか！」
「いや、そんな事を言われましても……荒榎君がやった行動は正しい事ですし」
「だからソレが可笑しいんじゃありませんか！そんな事、家の子はしません！」

……もう嫌、面倒、寝たい、帰りたい、布団に入りたい
さっさと帰って家で寝たい……あ？そんな事しない？

「そんな事しないんだったら、これは何だよ」

そう言って流すのは妖幻に取ってあったさっきの動画
うん、ばっちし俺が殴られてるのが映ってるね……いや母さん殴られてる映像だけどさ、そこまで心配しなくてもね？怪我無いし

「さて、これで逃げますか？」
「「「「「……」」」」」
「……それじゃあ、非を認めますね？」
「ま、まだよ！だってあの子！あの子だって殴ったじゃない！」
「……あ、そっか、一夏のシーンもあったんだった」

「そこの子だって家の子供達に謝りなさいよ！裁判よ！」
「いや、こんな事で裁判って無理だから……ってか、これは違い過ぎるだろ」
「何が違うって言うのよ！立派な暴力じゃない！」
「いや、でも違うものは「荒榎、もう良い」……千冬さんが言うなら」

まぁ、仕方が無い、うん、千冬さんの言う事なら……うん
納得できないけど…ってか、言いたい事あるけど……はぁ

「其の節は謝ります、すいませんでした」
「すいませんでした、じゃないのよ！これは立派な暴力なのよ！裁判よ！」
「すいませんでした」
「まったく、これだから、ちゃんとした親が居ないからこうなるのよ！」
「……」
「野蛮なお子さんね、先生クラスを変えてくださいな、こんな子と一緒の暮らすに家の子を置けません！」
「いや、ですが、クラスの変更は行えませんので……」
「……」

ずっと頭を下げてる千冬さん……ウザイな
このババアなんだよ、他の奴等はこのババアに任せてうんうんうなってるだけだし……

「ってか、一夏が野蛮とか、それ言ったらそっちのクソ餓鬼はそれ以上だな」
「ええ、私もそう思います、一夏君は友達を守る為に行動した、そっちの子はただ怒りのままに行動した、しかも動かなかった家の荒

榎をですよ?これを野蛮と言わないで何というんですか」
「ってか、俺を殴ったなんて世界にばれたら……敵だらけじゃん、うわ～、このクソ餓鬼が可愛そうに見えてきた」
「荒榎、それを言っては駄目よ、流石に危ないのだから、それと話し方を直しなさい、野蛮になってきてるわよ」
「おお、本当だ、直さないとね……眠いけど……ってか、一夏の行動、人間としては正解でしょ」
「……そうですね、そうとも考えられます」
「せ、先生!?」

駄目だ……寝る……

「……知らない天井……じゃないけど、千冬さんの家ですね分かります」

起きたら何故か千冬さんの家、この意味がわかるかな?
1に誘拐2に借りた、34が無くて……5も無いね
ってか、2の借りたも無いでしょ、でも1もありえませんね……ってか、母さんが居たのに何でここに居るんだよ
分からない、訳が分からず……

「……二度寝する」

「寝るな、というか人の家で寝るな」
「あ、千冬さんじゃないですか、誘拐犯は千冬さんですか」
「何を言ってるんだ……礼を言い忘れたのでな」
「……礼？」

俺何かしたっけ？……ん～、分からん
一夏が殴らなかったとか？いやいや、一夏も結局は殴ってたからな、俺も止めてないし……
ババアの相手？……いや、俺も関係してたしな……分からん

「一夏の件だ、お前がいなかったらより悪い状態になっていた」
「ああ、オバハン達の所為でね……ってか、あれでよく夫ができたな」
「……束に似てきたな」
「……え？」

……束さんに？……いやいやいや、何を馬鹿な事を言ってるんですか
そんな分け無いじゃありませんか……無いよね？え？本当？無いよ？うん、ないない

「問題無い、と言うか……似てないよね？」
「……泣くほどか」
「いやだってさ、あの人だよ？傍若無人のあの人だよ？……俺生きていけるかな」
「……束の思いは届かずか」
「え？何か言いました？」
「いや、何でも無い、とにかくだ、荒榎が居なかったら、一夏はより一層攻められていただろう、助かった」
「いやいや、ソレほどでもありませんよ、ただ妖幻で録画しただけ

だし」
「そのおかげで話しが纏まったんだがな」
「……え？」
「子供が気に入っているものを知らない親は居ないと言う事だ」

……え？つまりあれですか？あのババアもバトラーを知っていた？それで俺だとばれた？
いやいやいや、そんな訳無い、だって妖幻の形違うし、見せたのは腕だけだし……ってか、あの時突っ込まなかったのに今更な感じでもあるんですけど

「今の状態でＩＳを完成させて持っているのはお前と私位なものだ」
「……なんですとー」

まぁ、そう言えばそうか、まだ渡して二日だもんね～
出来てたら怖いわ……あ、でもあれだ、ドイツとかは出来てても可笑しくは無いな、ＡＩＣ渡したし、壊れたらしいけど
何でも、送った情報を間違ってハッキングだと判断してウイルスを送ったらしいよ？それがデータを少し欠けさせたらしい……それでもう一回って連絡がかかってきたし
いや、ソレならあの時言えよ、色んな国が集まったんだからさ、居なかったわけじゃないでしょ？ついでに言うと、アレハ交換条件だから渡しただけで、これ以上は交渉しないと無理、他の国に攻められる
と言ったら、簡単に引き下がってくれたよ、まぁね、今では各国がＩＳを製作中だからね、ドイツもそんな話しをしているのならさっさとＩＳを作りたかったんでしょ
あ、ちなみにＩＳのコア、普通の状態ではあるんだけど、中に隠して武器の設計図が入ってるんだよね～、と言ってもサンプルだから強く無いし、あれだけでも時間がかかると思うよ

でもまぁ、普通の武器よりは遥かに強いけど……船一艘なら……五秒で壊せるんじゃないかな？あ、もちろん空母サイズね？それ位の威力はありますよ

まぁ、完全に作れたらの話だけど、五種類くらいの武器の設計図を纏めて、圧縮して、その上で五個に分けて入れたからね……まぁ、完成度も3割くらいなら出来ると思うよ？固定概念を無くせばね

「それで、私は見せてないからな、白騎士かバトラーだと言う事は決定、その上でＩＳの腕の色が藍色、これだけ分かればもう十分だ」

「なるほど、んでもって、そんなある意味危険人物とは衝突したくないから逃げた、と？」

「いや、国から連絡があってな、注意されていた、真っ青の顔でな」

国から？何で？国になんて話してないよ？何処から伝わった？

あれか？俺が危険人物だからの監視か？……日本には良い奴等は居ないのか？

「何を考えているのかは大体分かるが、どちらかというと重要人物の様に扱われていたぞ」

「電話で分かるんだ……あれ？俺国に友好的な人っていたっけ？」

「さあな、とにかくだ、助かった、礼を言う」

「いやいや、それほどでもありませんよ」

初めてかもしれないな、年上に生活上でお礼を言われるなんて……

うん、良いものだ

え？束さんは別ですよ？あれは違うし父さんと母さんも違う、ギドさんもね、ってかあの人から言われたっけ？

レトア？……さて！帰ろうかな！

なんだろう、レトアの事を思い出したら寒気が止まらないよ？……

はっ！？まさかこれはフラグ！？……いやいや、それは無いだろ

……アイツ今何処にいるのかな？……これもフラグだけど、うん、まぁ、会って損は無いからね、うん、まぁ、会っても仕方ない事だし？うん、仕方ない仕方ない

「そんじゃあ、帰りますわ」
「ああ、香織さんと……東間さん、だったか？お二人にもよろしく言っておいてくれ」
「あいあい、お邪魔しました～」

「で……こうなるんですね」
「……お前は馬鹿だな」
『おい、聞こえないぞ、ちゃんと近付け』
「なんで終わったはずなのに使われてるんだよ俺、千冬さん、これ以上近付くとばれますよ？」
『なら音を拾え、妖幻があるだろ』
「こんな事にＩＳ使うのかよ……」

そう言いつつも妖幻の腕……今回は左腕を展開、集音モードなんて作った俺が馬鹿だった
こう、なんだろう、スパイみたいで格好良いかな？なんて思って作った俺が悪いんだよ、親スパイだし
ってか、何でまだ俺使われるんだよ、もう事件は終わったじゃんえ？状態が知りたい？篠ノ乃神社だよ、一夏と箒だよ、ストーカーじゃないよ、探偵だよ、右手にはあれだよ、マイクがあるよ、そし

て耳にはインカムだよ
いきなりさ、千冬さんがさ、一夏と箒の仲を調べて来いって、何でも、前回は箒をかばって起きた事件だ、ひょっとしたら……
この辺りから手の中の缶が潰れてて怖く覚えて無いんだけど……うん、箒焦らないでくれよ？もうちょっと辛抱してくれよ？
原作だったら……名前で呼び合うようになる回だったけど……それでも千冬さんが生で聞いたら……ってか、千冬さんが止める気が無いから止められないし
うん、俺の人生どうなるんだろうね……明日は良い事がありますように

「あん？何がだよ、馬鹿じゃねぇよ馬鹿」
「あんなことをすれば、後で面倒な事になると考えないのか」
「ん？ああ、あのことか、そうだな、考えねーな、許せねぇやつはぶん殴る」
『流石は私の弟だ、そうでなくては』
「それで、前回思いっきり怒ったのは誰だよ」
『っ！……な、何の事だ？』
「惚けない、周りの住民が聞いていたんですよ、俺が居なくても周りには情報源が沢山あったんですからね」
『……あ、あれは、だな、その、常識として知っておかないといけないことをだな・・・・・大体、ゴミを外に捨てたからって、殴らなくてもよかった事だ、今回とは違う』
「へー、そうなんだー……で、心の中では良くやった、と？」
『ま、まぁ、何だ、悪い事をしている奴を見逃さなかったのは誉めたがな』
「結局甘いんですね……やっぱりブラコン」
『ブラコンではない……ただ、少し甘いだけだ』
「ふーん、まぁせめて、高校までには何とかしてくださいね？いや、中学だな」

『何でそんな確定できるんだ……まぁ良い、努力はしよう』
「まぁ、今はそれで良いですけど」
「大体、複数でってのが気に入らねぇ、、群れて囲んで陰険なんざ、男のクズだ」
「ごめんなさいねクズで、国との話し合いとか思いっきり武装で行きましたよ、ええ」
『い、いや荒榎、それは関係ないと思うぞ？』
「あ？すいませんね陰険で、それしか思いつかなかったんで」
『……その、なんだ、すまん』
「ケッ、別に子供の意見だから良いんですけどね、現実を知らないとも言えますね」
『普通は小学二年生では現実を知らないのが当たり前だと思うのは私だけか？』
「いや、うん、そうだよね、言っておいてなんだけど、普通は知らないよね、うん、すんません」
『いや、これは痛み分けだな、私も一夏に現実を教えるか……』
「良い出しっぺは俺ですけど止めようよ、うん、小学生は夢を持って生きれば良いと思うよ？」
「だからお前も気にすんなよ、前にしてたリボン、似合ってたぞ、またしろよ」
「荒榎、静かにしろ聞こえない」
「何この人、超自分勝手」
「ふ、ふん、私は誰の指図も受けない」
「うわ、何この子、超千冬さんに似てる」
「そーか……」
『おい、一夏が黙ったぞ、何があった』
「いや、顔を洗ってるだけですって、あんたドンだけブラコンなんだよ」
『一夏は箒と急接近しているんだ、これくらいは誰でもする』
「しないって、普通はしないって、ってかこんな事普通の人は出来

ないって」
『……まだか』
「この人聞いてないよ……もう嫌、帰りたい」
「じゃあ帰るわ、またな篠ノ乃」
「――――だ」
『何て言ったんだ、聞こえないぞ？おい荒榎どうなっている』
「いや、俺も聞こえませんでしたから……ってか、発音して無いでしょ、言ったの、だ、だけでしょ」
「うん？」
「私の名前は箒だ、いい加減覚えろ、大体、この道場は父も母も姉も、全部篠ノ乃なのだから紛らわしいだろう、次からは名前で呼べ、良いな」
『……おい荒榎スピーカーの音量を上げろ、箒と話す』
「いやおい、待てこのブラコン馬鹿、それは駄目でしょ、一発でバレますってかバレなかったら凄いって、と言うかそれがバレたら一夏を付けてたのもバレて一夏に嫌われますよ？」
『……むぅ』
「大体、今時名前で呼び合うくらい普通にありますよ、良くある事ですって、逆に同じ道場で今まで名前じゃなかった事の方が驚きですよ」
『……なら良い』
「ってか、そろそろ弟離れしたらどうです？一夏も男の子、好きな子くらい出来ますよ？その子が千冬さんのせいで別れたらどうするんですか、即座に嫌われますよ」
『その程度の女、と言う話しだ、そんな女を選んだ一夏が悪い』
「おい、待てコラ、アンタの目は怖いんだから、人が殺せそうなほどなんだから小学生が耐えられる訳が無いでしょうが』
『いやしかし……一夏だぞ？あの騙されそうな一夏だぞ？本当に大丈夫と言えるか？』
「……大丈夫でしょ、逆に言いますと、あの一夏ですよ？フラ

グ乱立しておいて、一度も触らない一夏ですよ?変なのに掴まると?逆に惚れた女がその捕まえた女をどうにかしそうですよ、こんな中に千冬さんが居たら余計に大乱闘でしょうが」

『……それもあるな』

納得した!?この説明で納得!?あれ!?自分で言っておいてなんだけど結構矛盾点があったよ!?……いや、嘘は言って無いんだけどね、クラスにも一夏を好きそうな奴がチラホラとえ?何時見たかって?いやいや、見てませんよ、ただ道場までの道で一夏にわざとぶつかって話をした子とか、偶然を装って一夏と話したことか、道場を見るとか言って見に来てる子とか凄い目がね……うん、分かりやすいんだよ、話によると7割がクラスメイト3割が一夏が助けた人、人気が凄いね

これならクラスメイトに恨まれるんじゃないかな?……まぁ、今更だけどね

ってか、今時の小学生は凄いね、まるで大学生のナンパだよ、家が近いの良かったら寄って行かない?、良かったら一緒に遊ばない?、今度お家に来ない?

見てて可哀想なほど気づかれてないけどね……まぁ、スピーカー越しの沈黙が怖くて可哀想なんて思ってる余裕は無かったけどね

凄いシーンとしか感じがしました、はい、周りは五月蝿かったのにね

「分かった、俺は割りと身近な奴の指図は受ける――じゃあ一夏な」

「な、なに?」

「何でだよ、いやまぁ、間違ってはいないけどさ、それがフラグを立てるんだよ」

『……荒榎』

「今さっきの言葉を思い出せ」

『……はぁ』

「いや、まぁね？気になるのも分かりますよ？心配なのも……一夏だから」
『ああ、一夏だからな』
「……これで納得できるもんね、アイツ大丈夫かな、将来背中から指されてｎｉｃｅ　ｂｏａｔなんてならないよね？」
『ここでゲームに例えるのかお前は……でも有りそうだな』
「でしょ？……ってか、知ってるの！？」

あれってこっちにもあるの！？え？マジで！？途中までしか出来てないからやりたいんだけど！
コラそこ！遅いって言うな！前世でも死ぬちょっと前まではギャルゲー全く興味無かったんだからしょうがないでしょ！
学校とかネットで良く聞くからやって見たいなーみたいな感じで始めたんですよ！……Ｒ１８の方じゃないよ？そっち買えないからね

『あれは人気作品だからな……高校で知ってな、束が持っていた』
「……」
『……どうした？』
「束さん……まさかだけどやらないよね？大丈夫だよね？やるとしたら俺のみが超危険なんですけど」
『いや、それは大丈夫だ』
「え？そうなの？」
『ああ、殺すなら監禁した方がずっと一緒に居られるし一人占め出来るのに、ってぼやいていたからな』
「それフラグ！滅茶苦茶フラグ！何それ怖い！……あ、でも俺じゃない可能性もあるか、好きな人にやるんだろうね」
『……はぁ』
「ん？何ですか今のため息は」
『いや、束も大変だと思ってな』
「ああ、まぁ、あそこまで頭がよくなるとね……」

『いや、お前は絶対分かっていないな・・・・・・はぁ』

へ？何がです？ちゃんと分かってますよ？束さんが頭が良過ぎて、話が合う人とか
話せる人が少ないから大変だろうなー、って話でしょ？……ん？
千冬さんと何か違うような

「だから、名前だよ、織斑は二人いるから、俺のことも一夏って呼べよな」
「う……む」
「分かったか？箒」
「おおう、出ました一夏の落とし技、名前で呼ぶ」
『……荒榎』
「黙れ、そして黙れ、ついでに黙れ、さっきの言葉を思い出せ……ってか、もう良いでしょ？」
『まだだ、もうちょっと……』
「何この人最後まで粘る気だよ」
「わ、分かっている！い、い、一夏！これで良いのだろう！？」
「おお、顔真っ赤ですね、これは落ちたね」
『……』
「千冬さん？黙られるのもそれはそれで怖いんですが……」
『今は気持ちを落ち着けているんだ、話しかけるな』
「いや、だった止めれば良いじゃん、何でそこまで拘るし」
「おう、それで良いぜ……指図じゃなくて頼みならちゃんと聞いてくれるんだな
「ふ、ふん！」
「あ、箒帰った……道場だから目の前だけど」
『……よし、終わったか』
「終わりですね、……あ」
『どうかしたか？』

えー、現在お答えする事が出来ません……いや本当に
目の前に……束さんがね、居るんですよ、何でだろうね、鼻とか
当たってます
何故に気が着いた!?そして何故にばれた!?ここ道場の屋根の上
だよ!?

「……なんで居るんですか?」
「あっ君がそこにいるからだお!」
『……』
「あ、切った!?切ったよあの人!?やらせておいて見捨てて逃げ
たよ!?」
「やるだなんて、あっ君大胆だよ~」
「何を想像したんですか!」
「イタッ!チョップは痛いよあっ君!そしてこれは二度目だよ!」
「……そういえば、前にやった覚えが……ってそれは良いの!って
か帰る!」
「えー、お話しようよあっ君~」
「だが断る!家に帰って飯なんですよ」
「じゃあ束さんもあっ君の家に行くお!」
「何でそうなった!?今日はやけに食い付きますね、どうしました
?」
「だってさー、箒ちゃんとかが、家から出しません!、って言うか
らあっ君にあえなかったよ~」
「ありがとう箒ちゃん、君のおかげで幸せな一日だったよ」
「酷いよあっ君!?あっ君は束さんが居ないが良いの!?」
「うん!」
「即答は酷いよあっ君~!」

あ、いじけた……勝った!

初めて束さんに勝った！よっしゃぁ！……あれ？なんだろう、ぜんぜん喜べない
まぁ、一応束さんとはいえ、泣かせておいて喜ぶのは……

「ほら束さん嫌ってないから、泣き止んで」
「え？目が痒かったんだよ？」
「またそのネタ？！」
「そっか～、あっ君は束さんが好きなのか～、このこの～」
「ちょ！？くっ付くな！ってか当てるな！あんたは痴女か！」
「ん？あっ君がそっちがいいなら良いけど？」
「ごめんなさい、普通で居て下さい、ってかお願いします」
「あっ君がそう言うなら……脱いじゃお～☆」
「ちょ！？……上着かよ」
「ビックリした？ビックリした？束さんが本当に脱ぐと思った？」
「……」
「あっ君！？何も言わないで妖幻を起動しないで！……あ、帰っちゃった」

残ったのは束一人、一夏も何時の間にか帰っていた
静かな夜、束がひとり佇む、そこが何処であろうと、それはとても美しく纏まって見えた

「あっ君以外に肌なんて見せないよ……あっ君だけ……」

いつものふざけている束とは違った雰囲気、まるで逆
にぎやかとはかけ離れた状態、静かのなかに捉えさせない雰囲気を孕んだ少女
その目はとても色っぽく、何処までも綺麗で、何処までも澄んでいて、何処までも無邪気で……何処までも濁っていた

「あっ君……ずっと一緒だよ……」

学校面倒です、はい・・・ってか、これ千冬さんの所為じゃん（後書き）

やっちまったよおおおおおお！！！！！！
束さんがあぁぁぁぁぁ！・・・・・と思っている人！
ヤンデレじゃないからね！・・・・・・多分
あれ？ヤンデレか？いや、でもまぁ、うん、ｎｉｃｅ　ｂｏａｔは
無いからね！
最後の意味ありげの終わり方？・・・・・そ、そうだよ！思わせたんだよ！うん！

てな訳で、いや分からんか、今回は長編です☆
いやさ、早く書いて欲しいって言う人が多くてさ、うん、頑張ったんだけどね？
昨日までは・・・半分位しか書けて無くてね？今日頑張ったんだよそれで、本当は二つにする予定だったんだけど・・・・・ひとつにしました☆・・・・・・・ウゲェ

さて、今回は頑張った学校です！ってか、でした！だね
うん、ゴタゴタというか・・・・・・ダラダラだね・・・・・ヤヴァイほどにね
ま、まぁ！頑張ったんだよ！・・・・・成果がついてこなかったけど・・・
先生の名前？・・・・・ああ、あれね
うん、適当に打ったら出てきたんだよ・・・・・考えてないんだ

何時の時代にもいるヒスる親・・・・・なんていうんだっけ？
ああ、モンスターペアレントだ・・・・・いるよね～
まぁ、子供の事を大事ってのは良いことだと思うよ？ただもうちょ

っと周りの事を考えてもらえると良いな～、って感じですよね

やっちまったな！千冬さん壊れてきたよ！あんなキャラじゃないよね！

うん、やりすぎたかも・・・・で、でもまぁ！中学生だし！これくらいなら！・・・・・・あるよね？

この世界はカオスなんだよ、ｎｉｃｅ　ｂｏａｔのゲームがあってもおかしくないじゃないか！良いじゃないか！俺やったこと無いけど！（ヲイ

聞いてばっかりだけど！聞いたのをくっつけて考えてるけど！良いじゃないか！俺高校生だし！・・・・・・・・・いや、全年齢対象？あれも出たけどさ、買うかね無いんだよ・・・・・・

さて、どうしよう、うん、原作がすごいことになったね☆

８日に出るよね？・・・おかしいな、俺の友達は今日買ったって行ってるんだよね、アハハ、オカシイナ

んで、出てくるキャラが楯無さんの妹と言うね！うん、どうしよう！妹がいるなんて考えて無かったよ！これじゃあ作戦失敗かもよ！ってか考えは失敗だよ！・・・・・・・・・・・どうしろっちゅうねん

はぁ・・・・・頑張ろか、皆も頑張ってね！

困ったな

NANDATTE！・・・・いや、マジで？（前書き）

久しぶりのあのキャラ、キタァァァァァ！

NANDATTE!・・・・いや、マジで？

「平和だ……」
「荒榎、どうかしたのかい？」
「いや、最近は色々とあったので」

家のリビング、自分の部屋の次に落ち着ける安らぎの場所……静かだ
悪くない、というか逆に良い、最近は色々と忙しかったからな
束さんと各国に交渉？をしたり、千冬さんに言われて（強制で）一夏を調べたり
その後にもまた使われたり、その時に千冬さんが壊れたし……うん、実に複雑と言うか、素晴らしくごった返している人生だね☆……
…はぁ
それに比べ、今は静か、平和、安らぎ、この三つが揃っている、うん、まさに夢の中の気分
こんな状態だとインターホンの音までもが美しく聞こえるね……誰だ？

「出てきます」
「あ、うん、じゃあよろしくね」

父さんが茶を入れていたので変わりに俺が、ちなみに母さんは出かけている
何で知り合いが近くに来るらしいから迎えに行っているとか……空港まで
おおっと、二度目のインターホン、これは急いで出ないと失礼だね
妖幻もあるから普通に扉を開けたほうが良いんだよね、行動が少なくて済むから

「はいはい、どちら様」
「やっほ～、お姉さんが慰めに――」
「勧誘はお断りです」

即効で閉める！すぐ閉める！さっさと閉める！ってか扉を溶接したい！今すぐにしたい！誰かあれ持って来い！あの……名前忘れた！

「溶接機だね……そのままなのに」
「心を読むな、そして手を放せ」

何でここにレトアが居るんだよ！誰だ連れてきたの！責任者を呼べ！ぶん殴るから！

「放したら中に入れてくれる？」
「おいおい、何当たり前の事を言ってるんだよ」
「荒「即効で閉める」……」

何で自分から最後のオアシスを壊さないといけないんですか？
俺はそんな変な趣味思考は持ち合わせおりません、残念ですが他の方を当たってくださいな

「あはは、荒榎はツンデレだね」
「よし、閉めよう、妖幻を使えば指なんて関係無い」
「待って待って！それＩＳでしょ！？指が取れちゃうから！」
「……で？」
「ん？」
「何をしに来たんだ？」
「荒榎に会いに来た♪」
「そっか……帰れ」

「酷い…せっかく会いに来たのに……帰っちゃうよ？」
「そう良いながら扉を開けるな……力あり過ぎだろ」
「荒榎が弱いんだよ……よっと」

ああ、、最後の防衛線が、扉が……全快になってしまった……
ってか、初っ端からキャラが濃いコイツが来たら……俺の安らぎの場所にはテポドンが落ちてきたんだね
夢が……至福の夢が……

「夢は何時かは割れるんだよ？」
「だから心を読むなて……」
「荒榎のことなら読まないでも分かるよ」
「はいそこで色っぽいポーズとかしない、まだ小学三年生でしょうが」
「ぶー、三年生でも発育は良い方なんだけどな……見る？」
「……」
「ふふっ、冗談……うん、冗談だからその機械の手を戻してもらえるかな？」

え？機械の手？ＨＡＨＡＨＡ、何を言っているんだ、これは俺の手だよ？……妖幻の部分展開で右腕だけ出してるけどうん、俺の腕、だから機械の腕じゃないんだ……

「だから殴っても問題無し」
「繋がらないよ！？話が繋がってないよ！？そして予備動作も止めて！それは流石にお姉さんでも無理だから！」
「五月蝿いなぁ、もう少し静かな方が良いんだけど」
「……」
「いや、だからと言って口を閉じただけでも……動作を止めろよ」

ずっと手を振り回してたら、口を閉じても五月蝿いと感じるんだけど……
これは仕方の無い事、うん仕方ない……

「……はぁ……で？何しに来たんだ？」
「ん？何しにって……報告？」
「・……何を？」
「荒榎の許婚に相応しくなったのと、名前が変わったから」
「……はい？」

え？相応しくなった？つまりあれか？前回言ったあのふざけた良く分から言葉の羅列を完遂したと？
暗部でも取り締まる役にでも就いて、政府に口出しできて、頭が良くて、何でも出来て、フレンドリーで、強くて、何事も驚かずに対応できて……あと何か言ったか？そんな感じのあれだよな？
え？何？この人何？本当に人間？ってか最初に会ったレトア？丸で別人……いや、猫を被ってたんだから当たり前なんだけどさってか……名前って変わるの？ああ、あれか、レトアって名前が変わったんだ、うん、シュノレーゼは変わらないんですね分かります

「で、何に変わったんだ？」
「ん？更識楯無」
「……は？」
「え？だから、更識楯無に変わったんだよ？お姉さんはこれから更識楯無です、どうぞよろしく♪」
「……」

うん、駄目だ、分からん、ってか何を言っているんだ？更識楯無はＩＳ学園に出てくる生徒会長の名前で……
ＨＡＨＡＨＡ……なんでやねん

「あら荒榎、お出迎え？ありがとうね、これお願いしても良いかしら？」
「え、あ、うん、これくらいなら・・・重いな」
「ほらほら、お姉さんに任せなさい♪」
「え、あ、うん、そんじゃあ、よろしく」
「さて、そろそろお昼ね、ご飯作るから待っていてくれる？」
「あ、香織さん、私も手伝います」
「一人増えたくらいなら大丈夫よ、一人で出来るから、荒榎とお話でもしていたら？」
「それも凄く魅力的なんですが……どうせなら作って食べて欲しいな～、なんて」
「あら、料理も出来るの？……じゃあ一緒に作りましょうか？」
「え、いや、出来るなら一人で作りたいな～なんて」
「……そうね、荒榎にどれくらい成長したのか、見せるにはいいチャンスよね」
「はい、落とします」
「ええ、頑張ってちょうだい、好きな物を使って良いわ」
「ありがとうございます、荒榎ちょっと待っててね」
「え、あ、うん、はぁ」
「それじゃあ、拘ったものを作りましょう」
「はい、私としては……」

だめ、もう分からん、料理の話は難しいな……
……あれ？何か忘れてないか？……まぁ、良いや、飯でも食べれば思い出すでしょ

やく３０分ほど経ったかな?部屋に呼びに来ました

「荒榎～、出来たよ～お姉さんの自信作」
「おお、自信作、いかほどよ」
「上手に出来たわよ?荒榎に出すんだもの、上手に出来てなかったら作り直すわよ」
「そこまでかよ……で、何を作ったんだ?」
「見てからのお楽しみ♪」

との事なのですが……聞いたら腹減ったな
さて、一体何が出来ているんでしょうかね・……・ちゃんとしたものだよね?

「さて、荒榎も来た事だし、いただきます」
「あ、いただきます」

父さんの合図で食べ始める皆……なんで父さんはレトアに疑問を抱かないの?
料理は洋風でした、オムライスにデミグラソースをかけたもの……何て言うんだっけ?
あれと……これは何だ?焼いた物だね……何だ?甘いけどさっぱりしていて、それなのに口の中に味が残る……これはさっぱり?
でも、うん、不味くは無いね、と言うか……美味しいね、チーズを焼いた感じ

「……」

「えっと、ジャガイモをすり潰してバターや調味料、チーズと混ぜて焼いたんだけど……どう？」
「……悪くは無いんじゃない？」
「そっか……良かった」

いや、そんなに嬉しそうに喜ばれますとね……うん、ちゃんと美味しいって言ってあげるべきだったね……
でもまぁ、そんなことをしたら将来は一夏と同じになっちゃう気が……唐変朴の中の唐変朴……嫌だな、なりたくないね
うん、これで良かったんだ……良かったのかな？

「良かったわねレトアちゃん」
「はい、ありがとうございます」
「一体何があったし……」

俺の一言でありがとう？……良く分からんな

「荒榎、実はね？このジャガイモの料理、レトアちゃんが考えたのよ」
「……なんだってー」

え？自作？何処かで見た、とかじゃなくて自作？自作ってあれだよね？
自分で考えたから自作なんだよね？……ドンだけ～
いや、うん、何で？何でこうなった？俺の要求には料理なんて……無かったよね？
まさかあれか？何でも出来て、がいけなかったのか？何でもに料理も入ったのか？……いや、入ったとしても何故に自作になった？
いかんな、全然分からん……あ、このタイミングなんだけど思い出した……うん、しかも超重要じゃん

「……楯無」
「ん？どうしたの？急にお姉さんの名前を呼んだりして……あ、アーンして欲しいの？でも香織さん達が居るから、また今度ね？」
「誰がそんな事を一言でも言ったんだよ、ってかお前の名前はどっちだよ」
「どっち？……あ」

さっきから母さんにはレトアって呼ばれてるし……それで反応してるし
一体どうなってるんだよ、あれか？名前が変わったのは冗談か？……ああ、冗談か良かった良かった……んな訳無いよね～

「香織さん、私名前が変わったんですよ、今度からは更識楯無でお願いします」
「あらそうなの？分かったわ、楯無ちゃん」
「はい、義母さん」
「何気に義母さんって呼んでんじゃねぇよ、そして母さんはそんな簡単に納得しないで」
「だって、ねぇ？名前が変わったってレトアちゃんはレトアちゃんですもの」
「いや、まぁ、うん、そうだけどさ……」
「荒榎……」
「父さん？」
「女性はね、神秘の塊なんだよ」
「……え、いや、どちらかというと女の子の方が近いけど……」
「ふ～ん、荒榎はちゃんと異性として見てくれてるんだ」
「……黙秘権を行使する」

いや、だってさ、ぶっちゃけこんなに可愛い子をだよ？異性として

見ないなんて事が出来る？
無理だね、うん、何が何でも無理だ、いや、恋愛感情は無くても異性としては考えるよ？
ってか、そんな事が出来る奴が居るなら会いたいよ、んでもって習いたいよ……

「そっか、荒榎はお姉さんをちゃんと異性として意識してるんだ～」
「誰が意識してるなんて言ったよ」
「え？してないの？」
「……」
「ここでの黙視は肯定を表すよ？」
「……別に」
「そっかそっか、お姉さんピンチだね♪」

そんなに嬉しそうで何がピンチだよ、そしてどうしたらピンチが訪れるんだよ
……って、そうじゃなくて！

「何で名前が変わったんだよ」
「ん？荒榎の言った事が出来るようになるため？」
「……いや、疑問で返すなや、そして訳が分からん」
「そうねぇ、一応許婚だもの、理由位は知っておかないとね」
「うん、僕もそっちの方が言いと思うよ、隠し事は良くないよね」
「東間さん…」
「香織さん…」

うん、お二人さんや、こんな所で甘甘な雰囲気を出さないで、飯食ってるんだからさ
なんだろう、食欲が失せてきた……

「ご馳走様、部屋に戻るわ」
「え？美味しくなかった？」

凄いショックを受けた顔で聞いてくるレトア……じゃなくて更識
いや、さっき美味しいって言ったじゃん……

「美味しかったが何か？」
「でも……」

そう言って俺の皿をみるレトア……じゃなくて更識楯無
ああ、うん、それね、食べ残し、悪いかもしれないけどさ……この
雰囲気で食べろと？
後で食べるから勘弁して……もう無理

「そっか……食べないんだ、その程度なんだ……」
「……」

そんな事を俯いていうレトア……じゃなくて更識…面倒だ！楯無！
これで決定！ってかそれ言いますか！？このタイミングで食べろと
！？この二人の甘い雰囲気がべったりと流れているこの状態で！？
ってか二人とも自重して！なんでリビングで、しかも食事中にこう
なるんだよ……はぁ、不幸だーって言ったら余計悪くなる気がす
るから言わない！

「後で食べるから……」
「後で……」
「……食べるから落ち込むな」
「え？落ち込んでないけど？」
「なんですとー！？」

え？あれ？また嵌められた！？畜生！今日は最初から勝ってたと思ったのに！……いや、争ってないけどさ
やっぱり俺はこうなるんですね分かりますなんて言ったら駄目だよね！

「そっか、荒榎は食べてくれるんだ」
「……男に二言は無い！」

食う！食う！全部食べる！……気持ち悪い、隣から甘い空気が流れてくる
それでも食べます、食べて食べて……・食べきった！
いや、残り僅かっだっだけどさ、結構きつかった……

「……本当に食べちゃった」
「あん？何か言ったか？」
「ううん、別に♪」
「……何で嬉しそうなのかが気になるけど……まぁ良いや」

そんな事聞いても分からないだろうし……それより気になることがあるしね

「んで……まずは俺の部屋に行こうか」
「あら？次はお姉さん食べられちゃうの？いや～ん」
「アホか、ってかお互いの年齢を考えろ」
「ぶー、襲う気は無いんだ」
「全く無い」
「……そんなに即答しなくても良いのに」

知らん、そんな事は知らん、襲う気？欠片も起こりませんがなってか、小学二年生が小学三年生を襲うってどうなのよ

「今なら子供が出来る心配も無いよ？」
「さて、入れ」

無視！即効で無視！今のは聞いてない！というか誰が教えたんだよ！
馬鹿野郎！楯無にそんな事言ったら大変だろうが！俺が！

「ふ～ん、荒榎の部屋はこうなってるんだ」
「別に普通だろ？」
「いや、小学二年生の普通の部屋はこんなに機械で溢れてないと思うよ？」
「……」
「目を逸らすって事は自覚があるんだ……」
「さて、何で名前を変えたんだ？」
「分かりやすいね……えっと」

楯無曰く、自分は元は更識家だったらしい……ロシアで産まれたらしいけど、親が更識当主だったらしいよ？相手はロシアの……これ以上は聞くな
親権は当主が取ったとか、相手が要らないっていったらしい、子供がいると商売が難しいからだとか……クズだね、そんな商売止めろよ
一応、当主は責任を取ると言って結構しようとしたらしいが……断られたらしい……これが分からん、いや、ひょっとして今の生活が気に入ってたのかもね、最低だけど
それで、まぁ色々あり、すくすくと育ち……なんと家出したそうで、理由は好きに恋して好きに生きたいから！という何とも小学生が持ちそうな理想の為
いや、普通の家は出来るだろうけど、運悪く？更識家は普通ではなく、裏を取り締まる家系だったらしく、普通に生活とはかけ離れていたとか

しかも、最近は更識家の力が落ちていたらしく、楯無……は更識家当主の名前だからレトアで良いや
レトアには今までで最も厳しかったらしい、それもあって家出を起こし、何がどうなったかは知らんけどスイスに到着
いや、結構ちゃんと説明してくれたけど良く分からんかっ自分がた、動かせる組織をうんぬんかんぬん、それで旅客機の中でも凍えない様にうんぬんかんぬん
んでもって旅客機に隠れて乗ってスイスに着いたらしいで、流石にスイスには伝手が無くて・…・正確にはあったんだけど逆に襲われそうになったとか
そこを通りかかったギドさんに助けてもらい、事情を話したら匿ってくれたとんでもって、久しぶりにギドさんがスイスに来るからと迎えに行ったら寝た状態の俺が居た、とそれで、俺の言った内容をこなすには更識家が丁度良いから帰ったと、まぁ、ド叱られたらしいよ？
でも、そんな事もあろうかと威厳を出す練習をしていたとか……見事に成功したそうで、親は何も言えなくなったとかそれから一週間もしない内に当主に座について、俺が言った事をこなせる様に努力、見事成功……
それでここに登場……うん、見事にこんがらがった……まぁ、分かったのはレトアが元は更識家で、家出してスイスに着いて、ギドさんが匿って・・…俺に会った
家に帰ってカリスマ発動、親黙らせる、当主の座を強襲、見事得たり、勉強、努力、成功、俺の家に来る、今の状態

「……長かったな」
「お姉さんの人生は大変なのよ」
「まぁ、大変なのは分かった……」

でも、うん、まさかとは思っていたけどさ……
レトアが更識とか……ヤバくね？ってかヤヴァくね？……一夏ハーレムが減るんですね分かります
といってもな、俺が知ってるのって・・…確か六巻だったよな、その先にもまた一夏ハーレムが増えるんだから別段……変わるな、めっちゃ変わるな
うん、ヤヴァいな、内容がわからんな……ってか、六巻より先の話が見たくて・……いや、その話は良いや、もう自由に生きることにしたんだし
まぁ、楯無とレトアが一緒じゃなかったら似たような人が二人になる訳で……そっちの方が大変だな、まぁ、良かったと考えようじゃないか

「で、何をしに来たんだ？」
「荒榎に会いに来た♪」
「そうかそうか……お帰りください」
「ここに？」
「何でだよ、ホテルか何処かに泊まるんだろ？そこに行けよ」
「ここだよ♪」

そう言って指差すは……ＨＡＨＡＨＡ、何を言っているんだい？そこは俺のベットで……あ、ベット買ったんだよ、結構良い値段したけどさ
まぁ、俺の金がだから好きに使うさ、羨ましい？ははは、羨ましいだろ！……俺は虚しい
さて……うん

「帰れ」
「もう着替えも持ってきちゃったのに？」

「早いなオイ！ってかもって来てないだろ！」
「玄関に置いてあるのよ」
「なんですとー……ってか、ここは俺の部屋だ、男女１８にして寝食を共にせず、これの意味は分かるな？」
「ええ、不純異性交遊はいけない、って事でしょ？私は荒榎の許婚だから不純じゃないわね」
「……」
「ぶい♪」

そうでした……うん、許婚だったね……・あＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……はぁ
どうしろと？と言うか、母さん達はどうなんだよ……認めたんですね分かります
シャロも認めてたしな……許婚を許さない理由が無いもんな

「……荒榎？」
「んぁ？ってか何漁ってるんだよ」
「そんなことより……・これは何？」
「これ？……あ」

……あ～、うん、そうだったね……シャロの着替えが置きっぱなしでした……ｏｒｚ
シャロぇ……いや、俺が悪いんだけどさ、ちゃんと仕舞っておかなかったから・……なんだけど
まぁ別に？いかがわしい事は何も無いんだから、普通に言えば良いんだよ普通に

「ああ、それ、前に止まってった友達が忘れて「浮気！これは浮気よ！」……お前と会う前なのに何が浮気なんだよ」
「だって！許婚が来るのに友達の服を出しっぱなし！しかも女の子

！服から想定すると同い年！」
「何故に分かった！？」

何この子エスパー！？同い年まで分かるの！？
え？何？何で分かったの？服の大きさは自由だよ？え？どうなってるんだ？……って、そうじゃなくて

「急に来ておいて何を言ってるんだよ……」
「でも！片付け無かったのね！浮気者！お姉さんにはもう飽きたのね！」
「お前には何もしてないしされてないだろうが！」
「ってことはこの子には何かしたのね！されたのね！」

ミスりました、はい、まぁ、キスされたくらいなんだけどさ、頬っぺたに
した事と言えば……あ、ペンダントあげたわ……それだけだよね？
……ふ、風呂なんて一緒に入ってないんだからね！

「一緒にお風呂も入ったのね！」
「何故に！？」

本当にコイツはエスパーなんじゃないか！？大丈夫か！？俺の私生活全部ばれてるんじゃないか！？

「浮気者！妻には手を出してないのに！」
「誰にも手なんか出してないわ！そしてお前は妻ちゃうわ！」
「……手、出してないの？」
「だしてない！というか、この年齢で何をしろと？」
「……そっか、ならいっか」
「……」

速攻で変わりましたよこいつ、あれか？また演技だったのか？騙されたのか？……そろそろ耐性付けないとなと言うか、分かるようにしないとな・・・・・でもまぁ、演技で涙が出せるのは凄いよな……本当だと思っちゃったわ

「……良かった」
「ん？何？また何かあったのか？」
「ん？何も♪」
「即効で機嫌が良くなると言う事はやっぱり演技だったんだ……」
「ふふん、お姉さんの顔は２０個あるのよ？」
「怪盗２０面相かよ！」
「あれは凄いわよね、思わず真似しちゃったわ」
「出来たの！？」
「どっちだと思う？」
「……」
「ふふっ、冗談よ、それより遊びましょ」
「はぁ……家には面白いものはあんまり無いぞ？」
「大丈夫よ、持ってきたから……ツイスターゲーム」
「何で！？」

NANDATTE！・・・・いや、マジで？（後書き）

さて！ええ！分かってたでしょうね！俺はこれくらいしか思いつかなかったよ！
そしてちょっとキャラが壊れてる気がするよ！でも俺には限界だよ！このリア充が！・・・・・口が甘い（泣

さて、アニメが終わりましたね、さて、小説の新刊が出ましたねもう分からんよ、これからどう書けば良いんだよ
千冬さんとか何か隠し持ってるしさ、束さんと箒の間には何かがあったみたいだしさ、その所為もあって今回の事件がおきたみたいだしさ
束さんが犯人とか・・・・・・どうやったらヒロインに出来るんだよ！
もうあれだよ！？別の作品に変えちゃうよ！？そうでもしないと束さんが！束さんがぁぁぁぁぁぁ！！！！！

はぁ、しかも簪とか・・・・・どうしろっちゅうねん
まぁ、。それくらいなら何とかなりそうな気が・・・・・しないな、うん
どうしよう・・・・・・はぁ

他のＩＳ作品を書いている方々はどう対応するんですかね、ものすごく気になります・・・・・べ、別に真似しようとか思ってないんだからね！本当だからね！

はぁ、どうしよう・・・・・・ん～、さすがに今までの作品を大幅で改造したら・・・・・・読者が怒るよね～

でも簪を無しにすると・・・・・・一夏ハーレムが減るしなぁ・・・・・

難しいね！
うん、でも頑張るよ！皆の応援！感想！アクセスが応援に変わるんだよ☆・・・・ってな訳で

５００，０００アクセス突破！ユニーク５０，０００人突破！ありがとう！オリゴ糖！古かったよ！
こんなに見てくれる人がいるとは・・・・・しかも叩きは一つも無し！ありがとう！オリゴ・・・・・・二度ネタは禁止だね！

感謝感激だお！・・・・・・・・・・ヤヴァい、テンションが止まらないオｓｈｂｊｔｓ@ｇｊｄボｍｊっそげふｓじゃ@ｂｋ：おｓｐ：ｊｂｋ@ｓ

眠い、と言うか寝させろよ・・・・・・・・あ、起きたらこうなるんだ（前書き）

ついついう嬉しくて・・・・・・

眠い、と言うか寝させろよ・・・・・・あ、起きたらこうなるんだ

『あっ君と呼ばれている子はおるかね？』
「で、何か用ですか？即効で切りたい所を我慢して用件を待っているんですが」
『……君があっ君かね？』
「早く用件を言え、脳みそ腐ってるのか？」
『……先日配られたＩＳと呼ばれている戦闘機だがね』
「戦闘機？はぁ？馬鹿ですか？あれを戦闘機と呼ぶなクズが、早く用件を言え」
『……あれのあのだが、動かないがどうなっているのかね？』
「そっちが勝手に改造したんでしょ、しらねぇよそんな事、ってか解体して直せないなんて言うんじゃねェぞ」
『っ！……我が国を愚弄するのか！』
「知るかそんなもん、それならお前は製作した俺と束さんを愚弄してるよな、失敗してるぞって言いたいんだろ？あ？馬鹿ですか？」
『……それは、謝ろう、しかしだな、うんともすんとも言わないのだ、これはそちらが失敗したとしか考えられない』
「は？馬鹿ですか？何で俺と束さんが失敗するんだよカス、そんな事があったら舌を噛んでるわボケ」
『し、しかしだな、動く前に反応せんのだ、流石にこれは失敗作としか思えないのだが』
「勝手に人の子を失敗作扱いか？馬鹿じゃねぇの？ってかクズだな、ちゃんと説明書読めよマヌケ」
『……そんな物は貰っていないのだが』
「は？渡してないし、ＩＳコアを調べろよ、圧縮して仕舞ってあるから、それくらいも分からないのか？お宅の国は技術が無いね」
『っ！……失礼した、ではこれで』
「……これで何度目だよ」

はろ、織斑一夏……のハーレムを壊し始めてる真中荒榎です、非常に眠いＤＥＡＴＨ
昨日の夜中からずっと電話がなりっぱなしだよ……睡眠が取れません、非常に眠いです、口調が荒くなります
まぁ、こんな夜中に電話して来るんだ、それくらいは勘弁してもらおう、というか今の何処の国だ？……まぁ良いや、どうでも良いし

「やっと寝れる……」

と思ったのがフラグとなるんですね、また電話が鳴ると……もうヤダってか、何で誰もＩＳの説明書見つけられとないの？滅茶苦茶分かりやすいようにしたよ？
開いたら目の前に解凍ソフト一緒に入ってるよ？しかも分割してないよ？場所も同じだよ？
武器のは分割してそこら中にばら撒いて隠してあるけどさ……頑張れば見つかるけど
説明書は流石にすぐ見ないと不味いと思って……うん、入れてあるよ？
そして言い忘れていたが、何処かの馬鹿な国がＩＳのコアを壊してくれました
威力を上げる、とか出力を上げる、とか言いながら壊してるんですよ……馬鹿じゃないの？
作りが把握できてからやる事だよね、一日で出来たなら良いけどさ、それなら壊れたときって電話してこないでくれる？
そして壊れたからって直して欲しいとか、馬鹿でしょ、まぁ一番の馬鹿は壊れたから新しいのをくれとか言ってきた国だけど……何処だっけ？
はぁ……こんな事ならＩＳ配るんじゃなかったよ、産みの親なのに……男だけど

ってかさ、まずは普通に作ろうぜ？軍事目的に使えないからってさ、普通に強化から入るか？
多分あれなんだろうな、強化して、他の国では止められない位の力を手に入れ、各国を領地に・・・・・何処の先住民族だよ、戦争しか脳が無いのかよ
普通に作ってさ、高性能な武器を積みこめよ、そうすれば他の国に自分の国の科学技術が見せびらかせるんだからさ……
というかさ、多分動かなかったのって、男性だったんだろうな、説明書には書いてあるのに……馬鹿な国だな

「で、どちら様？」
『真中荒榎様ですね？お久しぶりです』
「……ああ、領地くれた人か」
『まぁ、間違ってはおりませんね、その事で連絡がありまして』
「……作れなかった？」
『いえ、作る事は出来たのですが……その』
「領地が小さいとか？」
『……申し訳ありません』
「んにゃ、どうせあんまり使わないし、君が認められたなら問題無い」
『そう言っていただけると、我が国も喜びます』
「あ、そうだ、んで何処なの？」
『何処、と申されますと？』
「いや、お宅が何処の国なのか知らないんだよね」
『……っ、これは失礼を、わが国はロシアになります』
「ロシアか……」

まぁ、結構土地はあるな・・・・・寒いけど
ってか、あそこ？将来楯無更識が代表になるあそこ？……マジすかこれは原作との重大な差が出来るんじゃないか？楯無が代表になら

ずに俺が代表……なんてことは無いか
俺国違うし……でもまぁ、国、出来ちゃったんだな……

『そこでですが、もし良ければ明日、領地を見に来られませんか？』
「・……ロシアに？」
『はい、ロシアに……良ければ、少しＩＳについて教えていただければ、と』
「良いけど……束さん行くかな……」

ってか、束さんって寒い所って大丈夫なのか？あの人すぐにグズりそうだし
……楯無は母さん達に任せようかな、どうせ何しに来たのか分からないし……なんだろう、今寒気が
ま、まぁ、うん、とりあえず一度は見ておかないとね

『それでは、明日の……１０時程でよろしいでしょうか？』
「はいはい、そんじゃあ、明日の１０時……何処に居れば良いんだ？」
『そうですね……それでは自宅に迎えを向かわせますので』
「あ、どうも、すんませんね」
『いえ、こちらも役目が果たしきれなかったので、それでは』

そう言って切れる電話……さて
この時間って束さん起きてるか？……まぁ、一応掛けてみるか

『……もしもしあっ君～、どうしたんだい☆』
「夜なのにテンションが高いですね、何かありました？」
『いやいや、あっ君が電話を掛けてきてくれたら何時でも元気百倍だお！』
「さいで……ところで、明日って空いてます？」

『……よいしょ、これで空いたよ♪』
「何かあったのか……いや、ロシアに国が出来たそうなので見に行こうと思っただけなので、用事があるなら別に今度でも」
『行く行く行く！行くんだお！あっ君と旅行だ～！アバンチュールだ～……アバンチュールって何？
「いや、知りませんて……それじゃあ明日、朝１０時には家の前に来てください」
『はいは～い、了解だお！何を持っていけば良いのかな？かな？』
「ついにネタが２個同時に……さぁ？向こうには何も無いと思うんで、ご飯と飲み物と、後はＩＳ系の機械を少し持って行こうかと」
『ご飯！ご飯だね！分かったお！あっ君の分も作っちゃうよ！束さんふぁいと、おー！』
「何という徹夜のテンション……飯は自分で用意できますよ、その分ＩＳの機会を持った方が良いんじゃないですか？」
『駄目駄目駄目ー！あっ君のご飯は束さんが作るんだよ！というかもう作ってるお！』
「早っ！？もう作り始めてるの！？ってか何を作ってるの！？」
『あ、あっ君は苦手な物はあるのかね？かね？』
「それもう違うネタになってるよね、苦手なものは……無いですね」
『了解だよ！作っちゃうよー！束さんパワー！』
『姉さん五月蠅い』
『あ、やあやあ箒ちゃん、束さん明日はお出かけだから朝ご飯は入らないからねー』
『うん、分かった、荒榎とデート……ついでに前回ありがとうと言っておいて』
『ねえねえ箒ちゃん、この電話繋がってるよ？』
『……っ！？……そのなんだ……あ、ありがとう』
「どういたしましてー、と言うか覚えてたんだ」
『お前みたいに女が羨ましがるような者を忘れるものか』
「……一夏は忘れてたけど？」

『……一夏は別だ』
「うん、さりげに一夏のも補助に回ったね」
『ま、まぁあれだ、殆どの人は忘れないぞ……髪の艶の良さとか男のクセに女よりも可愛かったりとか』
「……ゑ？」
『学校では良く聞く話だ、真中荒榎は男のクセに女よりも髪の艶があって、そのうえ偶に女よりも可愛いとな』
「……俺は男の娘じゃない！」
『いや、男の子だろ……まさか女なのか！？』
「え、いや、そうじゃなくてな」
『え？あっ君って女の子なの！？じゃああっちゃんって呼んだ方が良いのかな？かな？』
「俺は男だ！」
『……まぁ良い、前回は助かった、礼を言う』
『あっ君ありがとねー』
「束さんのは良く分からんけどどういたしまして、それじゃあまた明日」
『ばいばーい』

……俺は男だよな？男の娘じゃないよな？
え？いや、でも和に似てるけど……ってか、髪の毛とか知らないし、普通にシャンプーだけだし……
しょうも無い所に力を入れてる体だな……頭は良いけど

「さて……寝るか」

「……うぅ、眩しい」

……朝日が眩しい、でももうちょっとだけ寝させてくれ……
もうちょっともうちょっと……

「荒榎、ほら起きて」
「……レトア？」
「そうよ、早く起きて、朝ご飯作ったんだから」
「……もうちょっと」
「……起きないなら起しちゃうわよ？」
「どうぞご勝手に……ぃ」
「そう……」

……あれ？なんでだろう、嫌な予感しかしないよ？ああ、
そっか、シャロと同じ状態なんだ
というか、体にかかるこの重みは何？……

「……レトア？君は一体何をしているのかな？」
「え？何って……朝這いって言えば良いかしら？」
「だぁぁあぁ！止めい！とにかく上から降りろ！」
「え～、もう目の前なのに」
「そう言いながらも進むな！」
「それじゃあ、仕方ないから――」
「フグッ！？」
「―っちゅ、ご馳走様でした♪」
「……お粗末さまでした？」

あれ～？前回よりもひどい事になってるよ～？なんでだろ～な～……
……

ってか、口ですか、口なんですか……ははは、もう無理混乱ですよまぁ、とりあえずやる事があるよね……

「あ、荒榎？何で腕を振り上げてるのかな？しかもグーで」
「え？それはもちろん……殴るために☆」

ふぁいとーいっぱぁぁぁぁぁぁぁつ！

「痛っ！？滅茶苦茶痛いわよ！？何で！？」
「なんでって、そりゃあね、人の唇をいきなり奪う奴なんて……殴られても文句は言えませんよ」
「とか言いながら役得とか思って……もう一回は痛いよ？」

いやねぇ、流石に俺も2発は嫌だけど……仕方ないよねま、まぁ？別に嫌ではなかったけど？役得とは少しだけ思ったりもしたけど？いきなりは覚悟が出来ないって

「じゃあ覚悟が出来てたら良かったの？」
「……で、何の用？」
「あ、そうだった、朝ご飯が出来たから起こしに着たのよ、妻の役目でしょ？それとも一緒に寝たかった？荒榎はえっちぃのね」
「俺に妻は居ない、そしてそんな事を言っておいて顔を赤くするなや」

ポケットから鏡を出して確認するレトア、ってか確認するほどか？
……あ、直ってる、何時の間にだよ……で

「……何のことかしら？」
「目の前で鏡で確認しておいて良く言えるよな……」
「良いじゃない、女の子は好きな人には何時でも可愛く見て欲しい

のよ？」
「そんな事は知らん……で、朝飯は？」
朝はそんなに食べられないからな・・・・・・絶対残るぞ
それで昨日みたいになられてもな・・・・・・どうしようか
「大丈夫よ、簡単にパンを焼いただけだから、食べたい分だけ食べれば良いわ」
「さっきから突っ込まなかったけどあえて言おう、心を読むな」
「読まなくても、荒榎の考えている事くらい手に取るように分かるわ……夫婦だもの」
「色っぽいとか思ってるかもしれないけどそんな事は無視、夫婦じゃないからな」
「まだ、だけどね、もう少しでなるんだから……と言うか、心が読めたほうがすごいと思うんだけど」
「いや、うん、そうだな……」
まぁ、心が読めたら凄い……と言うか怖いよな
空いての全ての行動が判る訳で……と言っても、そんな事はありえないけどね
だって、人間の思考を読み取るんだよ？一人分でも十分に考えられない物を二人分だよ？
頭がパンクするって……ってか、その前に無茶があったわ
一人の考え事と言っても、普通に考えている事の他にもそれにかかる時間とか色々と意識しないでも考えている部分があるんだから……絶対無理だろ
「さて、荒榎も起きた事だし、良い事もあったし、ご飯にしましょう」
「良い事が非常に気になるけど……先に飯だな」

お腹が好いている訳じゃないだけどさ……物凄く良い匂いです
これも手作りか？……となるとレトアだな、母さんは作った事無いしってか、ドンだけ有能になってるんだよ……まぁ、裏を取り仕切る事が出来るんだからそれくらいは……できて当然なのか？
さて、さっさと起きて、飯を食べないとな……１０時には迎えに来るんだし

眠い、と言うか寝させろよ・・・・・・・あ、起きたらこうなるんだ（後書き）

さて、ありがとう！
やったよ！昨日だけでもユニークが２０００を越えたよ！凄いねあっちゃん！
さて、うん、やっちゃったね！つい嬉しくて頑張って書いたけど・・・・・
どうなんだ？ちょっと適当になってるか？ん～
ま、まぁ、暖かく見てもらえたら・・・・・え？遅い？ああ、うん、気のせいだよ！
ちょっと束さんとレトアが壊れてきたカナ？カナ？
大丈夫だと信じたいな・・・・・・・・

さて、次回は！・・・・え？早い？そっかそっか、もっと話したいか！・・・・・・・・ちょ！？何その黒いの！投げないでよ？投げないでよ？フリじゃないから・・・・・・・アー！？
とまぁ、冗談は置いておいて、次回は！

レトアと束さんが衝突！？ドキドキ、結構危ないところにいるんじゃないか？的な感じです

あ、そうだ、前回レトアと束さんの話になるって言ったんだった・・・・・すんません！
そこまでの道のりを書いたら長くなって一つ出来ちゃったんだよ！
で、でも！次回はちゃんと争い？になるからね！本当だからね！

さて、初めて言うかもしれないけど・・・・・・
鐘さん、ＳＲＦさん、ｌｉｂさん、ＩＳさん、ｉｓｈｉｎさん、シートさん、彼岸花さん、月野さん、Ｓｕｎさん、凡人さん、零崎人

識さん
そして、昔から・・・といっても一年も経ってないけど・・・
昔から感想をドンドンくれた
作者さん、カズティック・ベイさん、カリキュラムさん　霧氷黄泉路さん！
感想ありがとうございます！
昔から感想を下さった方々は、もうね、心の励みになったんです！
というか、なってます！

こんな話が書いて欲しい、などの事があれば
出来る限り書いていきたいと思いますので・・・・・・・・べ、別に特別扱いじゃないんだからね！ただ今までの感謝を込めるだけなんだからね！
などと書いてみた・・・・いや、実際
結構な励みになったので、多少の無茶なら通します！というかほとんど通すと思います！・・・・・・・・・・外伝的な短編でそれでも良ければ、ですが言ってもらえたら考えますので・・・・・・これって賄賂？いやいやいや、正当な恩返しＤＥＡＴＨ☆
それではノシ

色々あってこうなった・・・・・・どうなってんだ！？（前書き）

時間がかかった、うん

色々あってこうなった・・・・・どうなってんだ!?

「あ、そうだ荒榎、お姉さん用事が出来たからもう帰るわね」
「……ふぁい？」

今朝のご飯は卵焼きとご飯、王道だね、なんて思って一口食べたら驚きだよ滅茶苦茶上手いんだよ……なんて考えていたら旧に言われました、はい
口の中に卵が入ってるから上手く喋れ無かったよ、まぁ判るでしょ……

「……っ、ふぅ……で？」
「お姉さんは帰ります、悲しい？」
「……神は我を見捨てなかった！」
「喜んじゃうんだ……まだまだ遠いね」

はっはっは、何を言っているかはさっぱり判らんが、これは素晴らしい事だ、うん
だってさ、朝からアレだよ？一日一緒に居たらどうなる事やら……
恐ろしいな

「で、何時に？」
「……今から」
「あ、そうなんだ……へ？」

何でそんなにつまらなそうに言うんだよ……今から？つまりはもう帰るんですか……ちょと急過ぎやしませんかね？
いやね、確かにさっきは素晴らしい事って言ったけどさ……流石に

これはちょっと寂しいような……

「寂しいんだ♪、じゃあ一緒に行こ♪」
「そんなウキウキ気分で言われても無い様が心配だし俺も用事があるから却下」
「ぶー、ちょっと行ってお話するだけなのに」

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩですね分かり（ｒｙ
いや、レトアだと本当にやりそうだから怖いよね……
ってか、お話って言っても更識のお前だろ？本当にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩになりそうじゃん
いや、妖幻あるから安全は完璧だけどさ、と言うかぶっちゃけ俺が武器だけどさ……
いや、流石に……ねぇ？束さんとの約束忘れたら……大変な事になるだろうね
その前にロシアの人に迷惑だろ……いや、流石に迷惑がかかることは控えてますよ？本当だよ？

「俺も用事があるって言っただろうが……超重要だし」
「へ～、荒榎にもそんな事があるんだ」
「お前は人を何だと思ってるんだ？あ？」
「だって、聞いた限りだと各国の代表を脅したんでしょ？」
「何故それを知っている！？」
「お姉さんは更識の当主だからね、それくらいは簡単よ」

お前の簡単が怖いよ、でもまぁ場所が場所だったからな、最後なんて思いっきり人が集まってたし
報道は規制されてるみたいだけどね……まぁ、小学生に脅されるなんて恥ずかしくて仕方が無いよね

「ん～、そっか、超重要なら仕方が無いわね……折角教えてもらおうと思ったのに」
「何をだよ、そして連れて行く気満々だったんだな」
「それじゃあ、また来るわね荒榎、愛してる♪」
「こんなタイミングで言われてもね……」
「顔が赤くなってるわよ、可愛い夫さん♪」
「可愛い言うな！」

別に、嬉しい訳じゃないからな！ただ慣れてないだけだからな！……ツンデレじゃん！駄目じゃん！そしてそんなキャラじゃないじゃん！
でもまぁ、良くそんな簡単に愛してるなんて言えるよな……あ、夫の否定忘れてた……
ってか、どうやって行くんだよ……あ、ヘリコプター飛んでった……流石更識と言えば良いのか？
……またヘリコプター来たよ……あら？違うのじゃん、ってか俺の乗る奴じゃん！
今何時だよ！９時５５分だよ！……まだ大丈夫じゃんかよ、ビックリした～
束さん来てないけど、まぁ来るよね？とにかく支度しないと、何持って行けば良いんだ？

「……適当で良いよな」

適当に、丁度良いの適当ではなくて、本当の意味じゃないほうの適当……これは面倒

それじゃあまぁ、Ｉｓ関係の機器は……面倒だから妖幻に仕舞っておけば良いや
後は……何が要るんだ？服？妖幻で問題無い、お金？問題無い、

と言うか問題が出来たら結構な国が滅んでる
束さん対策?必要だ……けども何があれば良いんだろうね……適当に頑張ろう
弁当……は束さんが作ってくれるって言ってたから良いよね……何も要らないじゃん
あえて言えば妖幻?何時も持ってるけど……準備終わり!僅か30秒!……早くない?
ってか、そろそろ束さん来てるよね?……急ぐか

「あっ君だ、やっほ~い」
「来てたけどさ……」

うん、来てたんだよ?来てたんだけどさ……何だよその袋
何で背中にそんなに大きい・・…風呂敷だな、背負ってるわ……
何で?

「束さん?その背中のものは?」
「ん?これ?お弁当だよ!束さんのラブリーな愛が篭った弁当だよ!」
「うん、言い直さなくて良いよ、と言うか余計に分かりにくくなったから」

とりあえず、早くヘリコプターに乗ってあげようよ、可哀想なほどビビってるから

「やっと着いたよ……」
「あっ君あっ君！広いよ！大きいよ！ご飯だよ！」
「うん、着いた瞬間にご飯は無いから、まずは話を終わらせてからね」
「えー、お話なんてどうでも良いよ」
「一体何しに来たんですか……」
「あっ君とご飯を食べる為だお！」

……言いきったよこの人、間違ってるような、束さんらしいような……
まぁ、うん、話は俺だけでやる事になるよね……束さんの邪魔がある中で……

「千冬さん連れてこれば良かった」
「あっ君はちーちゃんが好きなのかな？かな？」
「その言い方は……好きと言っても、Ｌｉｋｅですよ」
「そっかそっか、なら良いよ♪、束さんは名にも邪魔しないよー♪」

何でテンションが上がるんですか？良く分からんな
まぁ、それが女の子ですよね～……束さんは女の子？いやいやいや、そんな簡単な者じゃありませんよ
ってか、本当に広いな……と言っても、研究施設みたいな建物が多いけど
何処までがタバラカなんだ？……山五つ、よりは小さくなったらしいけど……どれくらいだ？

「ああ、すみません、待たせてしまいましたか？」
「うんにゃ、今来た所」

丁度良いタイミングで代表の……誰だっけ？

「名前なんだっけ？」
「あっ君ご飯だよ！」
「……で、名前は？」
「よ、よろしいので？」
「あっ君！遊ぼうよ！」
「問題無い」
「……まだ言ってませんでしたね、私はエルカ・ランドゥウィークと申します」
「え、エルカ……ランドリーク？」
「ランドゥウィークです」
「……エリカね」
「それで結構です、ではこちらに」
「あっ君あっ君！」
「ほら束さん、行くよ、迷子になら無いように手繋いでおこうね」
「手……了解だよあっ君！」

この人元気だな……まぁ、悪くは無いってか、どんどん進むけど……何処まで行くの？

「……はい、ここがタバラカです」
「……ここって何処？」

目の前には……研究施設・・…ここ？え？狭いなオイ、変わり過ぎだろ

「狭くね？……ってか、これって国？」
「あ、いえ、そうではなく……向こうに塔があるのですが」

「……ああ、あれか」
「見えるのですか？……あそこが中心となっており、ここまでがタバラカです」
「……はい？」

え？あれ？マジで？凄く遠いよ？妖幻のズーム機能を使ってようやく見える距離だよ？
約……１０ｋｍはあるよ？それが半分？……約２０ｋｍ？大きいなオイ、都市位は余裕であるよ？と言うか、下手すりゃ県だね
こんなにあって何をしろと？開発ですか？どんだけやれと？賄賂ですか？仲良くしてくれと？

「こんなに貰って良いのか？」
「ええ、ここは元々何も無い土地だったので、お金はかかってません」
「いやいやいや、思いっきり建物があるじゃん」
「ああ、これは我が国から提供させていただきました、友好の証になれば、と」
「まぁ、うん、悪い気はしないね……後で見繕うわ」
「ありがとうございます」

俺が甘いのか、それともエリカが上手いのか……どっちでも良いやまぁ、どうせだからアクアクリスタルの設計図でも渡すか……途中までので
完成させたら……面倒な事になる気がするからな～、途中までで良いや

「さて……束さんがウズウズしてるから昼食べても良いか？」

うん、すぐにパァァって笑顔になったよ……誰か可愛いと思ってし

まった俺を殴れ！
いや、うん、まぁ、可愛いんだけどさ……性格が……いや、うん、俺は良いと思うんだけど……；いや、あんまり良く無いんだけどね

「は、はぁ、構いませんが……そ、それでは、後はご自由にお願いします！後で連絡しますので！」
「あ、うん……なんでそんなに急ぐんだ？」
「あっ君！ご飯食べようよ！」
「はいはい、何を作ってきたんですか？」
「んーとね、色々だお！」
「色々？……本当に色々だね」

この人……なんで和洋中を混ぜてるんだ？
いや、うん、おいしそうではあるんだけどね？料理も上手そうだし
……うん

「はいあっ君、あーんだよ！」
「いや、一体俺は何歳だよ」
「あーん！」
「いや、だから……」
「あーん！あーん！」
「……あー」
「はい、あーん」
「んむ……美味しいな」
「あっ君のためなら火の中山の中だよ！」

味の付け方が上手いな、濃過ぎず薄過ぎず、まろやか過ぎずにアッサリ過ぎず
いや、これ普通に料理屋で繁盛できるよ、うん、今からでも遅くは……遅いね、うん、ＩＳ作った時点で遅いよね

ってか、火の中とか山の中は違うと思うんだけど……え？俺が食べたの？唐揚げだよ？

「あひ、それじゃああっ君、あーん」
「はい？」

今度は口をあけてのあーん……はい？
食べさせろと？誰が？……俺か、俺しか居ないか……いや、おい、それは無いだろ
ってか、そう言うのは好きな人にやってもらいなさいな……あれ？寒気が
でもさぁ、えー、それは……

「あーん！あーん！」
「……はぁ、はい」
「あーん♪」

適当に肉団子でも……なんでこうなってるんだよ
うん、唐揚げの次に肉団子が出てきてビックリするよね！でもそんなんじゃ終わらないんだよ！
他にも凄いよ？中華パン（どうやって作ったんだ？）とか酢豚（何で？）とか……うん、カルボナーラ（訳が分からん）とか？
とにかく色々あるよ？なんでだろうね

「何でたばあｓんこんなに作ったんですか？」
「ん？あっ君の好きな物を知らなかったからね♪」
「いや、うん、やり過ぎでしょ」

でも、うん、嫌な気はしない、というか、逆に好感度が上がる行動ではあるよね

好きな物が分からないから色々作ってきた……恋人にやってあげなさいよ

「……荒榎？」
「……へ？」

後ろから聞こえたのは……おかしいな、ここで聞こえるはずが無いのに
うん、今日は用事があるからって帰ったのに……何でレトアが居るの？

「レトア？何でここに？」
「お姉さんも聞きたいな……この人誰？」
「え、いや、束さん？」
「あっ君？これは何かな？かな？」
「いや、これって……」

レトアをこれ扱い？……と言うか、すごく寒いですなんだろう、体の震えが止まらないよ？
二人の間に何かがぶつかってるよ？……

「荒榎？」

おかしいな、レトアの後ろに大きなトラが見えるよ？

「あっ君？」

おかしいな、束さんの後ろに大きな龍が見えるよ？
……あ、あはは、あははははははははは

「……何だよこれ」

色々あってこうなった・・・・・・どうなってんだ!?（後書き）

ども、誰かは言うのが面倒だからパス
さて、うん、今回は短いね!ごめんなさい!長らく待たせておいてこの長さだよ!
でも言わせて!言い訳させて!答えは聞いてない!
うん!消えたんだよ!・・・・え?分からない?
んとね、データが消えたんだ!・・・うん、本当に
消えちゃったんだよ・・・・・一回ね!
だから書き直しました!頑張った消えたのを書き直したよ!・・・・
ちょっと変わったけど、うん、問題ない!・・・よね?
さて、俺を殴れ、束さん可愛いよはぁはぁ、とか思った俺を殴れ!
（笑
でも可愛いお!うん、それが自分で書いてるからなのか、それとも元から好きだったのか、それは神のみぞ知る!・・・・ああ、あれ第二が放送されましたね・・・・・・あんまし見る気がしないのは何で?・・・ああ、なんとなくだ
なんとなくならしょうがない、うん、しょうがない、だから俺はあれを見ない!
レトアが!・・・・・出てきたお!でもちょっと予想以上に今回がのびまして・・・・・・うん、ＴＨＥ修羅場は次回になるのか?長々と伸ばして申し訳ない、うん、でも自戒こそは大丈夫!ちゃんと考えて最後には登場させたから!これはもう逃げられないよ!頑張れ作者!・・・・俺じゃん!

うん、穂の津に長らく長らくお待たせしました、あと・・・・・・
うん、１０話書くまでには原作に入りたいな～、なんて考えたり・・・・どっちが良いんだ?
読者としてはどうなんですかね?遅くなってでもオリジナルが読み

たい?その後に原作を書きますけど
それともすぐにでも原作が読みたい?そうしたらオリジナルの話は減りますけど・・・・・・
どっちが良いんだ?これはもうアンケートにするしかないな!うん!是非教えて下せい!
ではでは

女性は怖い、うん、怖い（前書き）

長らくお待たせいたしましたぁぁぁぁぁ！！！！！

女性は怖い、うん、怖い

「荒榎？この人誰？」
「あっ君？これは何？」
「あ、あははははは」

何でだろう、俺は悪い事なんて何もしてないのに……何でレトアと束さんに怖い笑顔で聞かれてるんだ？
……分からない、何がいけなかったんだ？

「あ、あはは、アハハハハハハハハハハ……」

「……はっ！良かった夢……じゃないんだね」

目の前にはレトアと束さん……正確には束さんは隣だけど

「で、荒榎？彼女はどなた様？」

彼女の部分を言った途端に機嫌が悪くなったぞ！？俺何もしてないぞ！？
機嫌が悪くなるなら言うなよ！……なんて言える雰囲気じゃないよね、うん

「えと、束さん、正確には篠ノ乃束、俺と一緒にＩＳを開発した人」
「そう……それで？」
「……はい？」
「何でこんな所に居るの？朝に会ったばかりよね？」
「え、いや、うん、ここが俺達の国になったから様子を見に」
「……荒榎の？」
「後束さんの」
「……二人の？」
「え、まぁ、うん、そうだけど？」
「……」

黙って俺を見るレトア……何処か睨んでるけど……
更識の当主がそんな簡単に怒って良いのか？
この時、俺は次の言葉は、始めまして、等だと思っていたんだ……
なんて伏線を張って見たり
うん、現実逃避です、でも俺は悪くないし！関係無いし！……いや、あるんだけど

「……何てね♪」
「あははは、だいせーこーだね！」
「……はい？」

えと、何でいきなり笑い出すんですか？
そして大成功？何が？……ってか、いきなり仲良くなってない？
え？何？どうなってるの？

「うん、まずは説明を求めます」
「お姉さんたちは一回会ってるのだよ、ワトソン君」
「うん、ネタは良いや……って会ってるの？
「うん、荒榎の家に行く前に寄ったのよ」
「……ちなみに聞きますが、何の為に？」
「荒榎、許婚の近くに仲が良くて、その上引っ付いている人がいたら脅す位はするでしょ？」
「いやいやいや、しないから、そして心配するような仲じゃないから」
「あら、束さんには否定的なのね」
「あっ君が否定した！？……あっ君のバカー！」
「そう良いながら抱きつくな！……これをどう見たらそんな仲に見えるんだ？」
「見たまんまじゃないの……まぁ、束さんには脅しが効かなかったし、逆に手なずけられた感じもするのだけど、一応は共同線を張ったのよ」
「何のだよ、んでもって束さんは離れなさい！」
「あっ君の匂いだよー、くんかくんか」
「口で言う事じゃないよね！そしてそれは変態だ！」
「……思いっきり出遅れてるじゃないの」

何か言ったか？全く聞こえなかったんだけど……束さんがくっ付いてくるから
うん、この人にそんな気持ちが無いのは分かるけどさ……もう男としても見られてないよね
はっ！？まさか好きだからのくっつき！？……んな訳無いか、箒さんや、手助けを所望します

「……ってか、え？じゃあ何？今のは芝居？」

「もちろんだよあっ君！束さんがあっ君を睨むなんてある訳……」
「ちょ、そこ黙らないでよ、ちゃんと最後まで言ってよ！？」
「まぁまぁ荒榎落ち着いて、お姉さんが膝枕してあげよっか？」
「あはは、可笑しな事を言うなぁレトちゃんは、そんな事は駄目だよ、束さんがやってあげるんだから」
「クスクス、束さんこそ何を言ってるんですか？私が言った事なんだから、取っちゃ駄目ですよ？」

あははは、くすくすくす……怖いです、正直怖いです
うん、今までで一番怖いです……あ、二番だわ、母さんが一番でもまぁ、うん、常人とは比べ物にならないほどに怖いです
ついさっきまでは仲良くしてたじゃん、何のかは知らないけど共同線も張ったんでしょ？切り替え早くないか？
そして何で急に目が変わるんですか？俺に対する目が狩人ですよ？
そして相手を見る目はライオンですよ？
え？何この修羅場、訳が分からないんですけど……俺が悪いのか？

「そ、そうだ束さん、ご飯も食べたんだから早く話を聞きに行かないと」
「……？」
「いや、そんな可愛く首を傾げてないで、さっき言ってたでしょうが、ご飯が終わったらまた話すって」
「可愛く……私には言ったこと無いのに……」

いや、うん、お前は行き過ぎだからな、可愛いなんてちゃちな物じゃないぜ、悪い意味でね？
お前の場合は……うん、何処の売春だと言いたくなるときがあるからね、もしそうなったら買った人は殺すけどね……
……ありゃ？何で苛ついた？何処に？何で？あれ？……まぁ良いよな

「……まぁ、お姉さんもここには更識として来たから、どっちにしろ別行動になっちゃうんだけどね」

更識として？……裏か？いやいやいや、例えそうであってもこっちと同じ日には呼ばないでしょ

これで俺と束さんを誘拐、とか言ったら笑えるんだけどな……全面戦争的な意味で

まぁ、エルカを見る限りではそんな感じは無かったし、それは無いだろ

「とりあえず、行くよ束さん……束さん？」

「あっく～ん、早く行くよー」

「何時の間にそんな遠くに！？」

「荒榎がこっちを向いている間ね、それじゃあお姉さんも行くわね」

「ん、……束さん早いな！？」

あの人のスピーど可笑しいよ！？……ＩＳでも使ってるのか？

ってか、何処に向かってるんだ？……まぁ、何時かは着くよね

「なんて考えていた俺が浅はかだった」

「ほえー、広いよあっ君」
「うん、俺は束さんを誘導するのに疲れたよ……」

この人曲がらないんだよ、ずっと真っ直ぐ進むんだよ、その先に行ってちゃんと方向を教えて上げないと何処までも真っ直ぐに行ったと思うよ
まぁ、一番最初に突っ込まないといけない事は、何でタバラカから出てロシアの建物で待たないといけないのかって事なんだろうけどうん、そうなんだここロシアなんだ、さっき連絡があってここに来てくださいって言われたんだ、方法は放送でした、はいと、そんな事を言ってる間に登場したのがエルカです、何という場を読んだ登場、皆に見習わせたいね

「ああ、真中様、待たせてしまいましたか？」
「うんにゃ、今来た所……んで、この後は？」
「あ、はい、せっかくなので我が国を見てもらおうかと思ったのですが、どうでしょうか」
「まぁ、急ぎの用事も無いし、それで良いんじゃない？」
「分かりました、それでは……まずは我が国の研究施設を」

ああ、うん、そういう展開？気が抜けないです
まぁ、ロシアの技術を見て損は無いし、丁度良いと言えば丁度良いか流石に国の技術が分からないと何処まで完成させて良いのか分からないしね……ああ、アクアクリスタルの事ね
ってか、あれって誰が作ったんだ？……まぁ、誰でも良いかこの世界では俺になるだけだ、ロシアに変わりは無い

「こちらが、ＩＳ研究施設です、今はＩＳのアーマー、装備、武具を製作しております」
「……これで？」

「何かご不満な所がありましたでしょうか？」
「……いや、何でも無い」

そっか、うん、俺と束さんは先を行ってるもんね、うん、普通じゃ考えつかない領域だよね
そうだよな、だからだ、うん、まだパソコンと向き合って考える状態でも可笑しくは無いんだ
手を抜いてるとかじゃなくて本当に分からないんだ、考えを覆されると難しいよな

「……よし、これを渡しておいて」
「これは……確かに受け取りました」

渡したのはアクアクリスタルの製作書……の途中までを書いたデータ
これがあれば考え方とか、組み方とかも大体理解できるでしょってか、考えている人がいたらゴメンだけど、未だ居ないよね？
んで、最終的に開発は……あと何年後かな？原作までは１０年弱だけど……遠いな
それまで何やってれば良いんだ？……あ、シャロに会わないと……あれ？ひょっとして期限が切れてる？
期限が切れて機嫌が悪い？……おお、上手く出来たな……って、そんな事言ってる場合じゃないよね！
……明日行こう、うん、明日、場所は母さんにでも聞けば分かるでしょ
怒ってるかな……案外俺のことを忘れてたり……うわ、何この悲しさ、それは嫌だな
うん、せめて記憶には残ってると良いな！……うん、良いな、良いな、良いな……残ってるよね！？

「ところで……」

「ん？……ああ、この人？」

指差すのは俺の後ろ、正確には背中かな？

うん、皆さんの疑問に今お答えしよう！束さんの事だね！

さっきから一言も喋ってないもんね！気になるよね……寝てますうん寝てる、ここに来る前に寝た、歩いる途中で、あっ君眠いよ～、とか言ってもたれ掛ってきたかと思ったら即効で寝た

そして俺が背負ってる……訳無いでしょ、俺はそんなに力がありません、と言うか、小学一年生にもひょっとしたら負けます

うん、普通アレだよね、テンプレだと体が最強！まではいかなくてもさ、頑丈！とか強力！とかじゃん？……俺最弱！あはは……

笑えねぇよ

何で弱いんだろうな、父親はスパイなのに、元だけどスパイだよ？体が頑丈だよ？昔から体だけは頑丈だったらしいよ？

母さん？ああ、あの人はそこまで強くは無いそうだよ、うん……

でも鉄棒は出来たって、俺出来ないｗｗｗ……なんでやねん

俺太ってるのか？いやいやいや、やせてるぞ？格好良くは無いけど、うん、鍛えてもいる……頑張ってるんだよ？鉄アレイを持ち上げたり……五回で限界だけど

うん、俺は頭脳派！……いや、束さんの方が上だ思うけど……あれ？これもテンプレ？……んな訳無いよ、うん、それはない

とまぁ、俺の力が無い事はどうでも良い事、どうやって束さんを運んでるかだよね……浮かしてます

いや、正確には浮かしたものに乗せています、うん、妖幻の肩のアンロックのアレね、名前があったよ、複合型浮遊射撃武器棺戟だってさ、かんげきって読むらしいよ？

で、まぁあの武器、アンロックと言うよりはブルーティアーズみたいな……ああ、ビットとかファンネルの法が通じるな……誰にだよまぁ、あれだ、半自立行動ユニットみたいな？こっちのは数が二つだけど自立稼動が可能・・…らしいよ？まだ使えないけど

うん、適正が８６％位無いと無理だってさ、無いですはい、今は６８％だとさ、うん、無理だと思うよ？
まぁ、それは置いておいて、つまりだ、勝手に着いてきてくれたりもする訳で……な？
束さんをそれに乗せて歩けば、あら不思議、勝手に着いてきてくれるよ？的な感じで

「無視しておいて……と言うか、そろそろ帰るわ、束さん寝ちゃってるし」
「そうですか、それではヘリの方を用意しますので」
「いや、面倒だからＩＳで行くわ」
「そうですか……失礼ですが、見させてもらっても？」
「別にそれくらいなら良いんじゃない？ってか見た事無いの？ネットにあるのに」
「いえ、見た事はありますが、目の前でそれが見られるのなら見てみたいな、と」
「ああ、うん、まぁ良いと思うよ？別に見る事までは怒らないし、そもそも隠す必要が無いし」

まぁ、見たいなら勝手にどうぞ、的な？そこまで酷い男じゃないよ？
まぁ、うん、レトアの方も気になる事は気になるんだけど……帰るか妖幻を起動してと……棺戟二つで束さんを拘束……言い方は酷いけどただだゆれないように固定しただけだからな！

「そんじゃ、俺は帰るんで、後はよろしく」
「あ、はい、タバラカは友好の証としてわれわれロシアが全勢力を持ってしてでも守りきりますので」
「いや、そこまでしなくても良いけど……そんじゃ」

とりあえずは……建物から出よう、うん、中で飛ぶのは難しいから

ね……なんでこんな事してるんだろうな

女性は怖い、うん、怖い（後書き）

はい、長らくお待たせしました！うん、長かった、長かったね！
女性って難しいよ、しかもレトアと束さんだよ？どうなるんだろうね・・・・・こうなります
うん、難しい、というか難しかった
うん、書きにくいネタでした、でも頑張ったよ！・・・・・・・遅いけど
さて、次回は・・・・・・・ひょっとしたら次々回は！
久しぶりにシャロが！出て！くる！・・・・・・かも
でもなぁ。書けるのかな俺・・・・・・・うん、そうなんだ最近スランプなんだ
でさでさ、その状態で紗、次回は何時ですか？って聞いてくる人が居るんです
いや、良いんだよ？というかうれしいよ？滅茶苦茶送ってくれるからうれしいよ？
こんなに待ってくれてる人が居るんだな～、って思うからうれしいよ？滅茶苦茶うれしいんだよ
でもさ、うん、お願いだからさ、せめてまだですか？って聞くのは減らしてください（泣
あれを聞くと早く書かないとって思う分だけ失敗するんだよ
書き間違えたりさ、これじゃあつまらないとか思って書き直して失敗とかさ
うん、うれしいことだよ？でもお願いです、そんなに急かさないでなんて思うんだけどこれは・・・・・・・罰当たりなのか？

この番組はシャロの提供でお送りいたします（前書き）

純粋、純粋？純粋！・・・・俺は何が言いたいんだ

この番組はシャロの提供でお送りいたします

「荒榎、来ないのかな……」

こんにちは、シャルロット・デュノアです
日本で友達……本当はその先に行きたいんだけど、まだ友達の真中
荒榎
私は荒榎って呼んでる、代わりにシャロって呼んでくれてる、とっても仲が良い友達……

「の筈なんだけどな……」

荒榎との約束、私が帰った2ヶ月後に、荒榎が遊びに来る約束……
約束したんだよ?
えっと、うん、そろそろ来ると思うだけど……そう思って待つ日も待つ日も荒榎は来ません
もう10日くらいが経ったと思うな……遅い、ひょっとして忘れてるのかな……荒榎のバカ
えっと……何を言えば良いのかな……最近はずっとそればっかり考えてたから……あ、勉強はしてるよ?
今回のテストも14位だったんだ、もちろん学年でだよ?……荒榎遅いな
もう待ちくたびれたよ、来たら怒るんだから……来なかったらもっと怒るんだから
ああ、そうそう、私シャルロット・デュノアは転生者です……多分前世の記憶はありません、でも生きてたことは覚えてます、物の名前とか、言語とか、そういった情報の記憶はあるんだけど
自分の事とか、人の事とかは何も分からないから『多分』転生者、だから良くシャルロットちゃんは大人だねって言われるのかな?

そして多分、荒榎も転生者、あの人は違う、何かそう思わせたんだ、
この世界の中で一人、皆とは違う存在に感じたんだ
だから興味が出た、初めて会った時、お母さんに連れられてお母さ
んのお友達のおばさんの家に行った

『始めまして、シャルロット・デュノアです！』
『……なんで？』

そこで初めて荒榎に会ったんだ、容姿は普通だった、良くも無く悪
くも無く、学校にいる男の事同じ感じ
でも違った、学校の男の事は違った、何処が？って聞かれたら、全
部としか言えないけど、違ったんだ
見た瞬間に思ったのは……なんだっけ？とにかく、何処か惹かれた
んだ
それで荒榎が着替えに行って、おばさんに呼んできてって言われて、
少し緊張して、部屋の扉を叩いた
返事が無かったからいないのかな？って思って

『もしも～し、いないの～？』

って聞いて見た
そしたら自分がした事が急に恥ずかしくなって戻ろうと思ったんだ
けど
いないよ～って帰ってきたんだ

「アレはビックリしたな、本当に返事がくるとは思ってなかったの
に」

ちょっと面白いかなって思って話を続けて見たんだ

『そっか～、いないんだ～』
『うん、いないよ～』
『じゃあ君は誰？』
『……』
『おばさんが呼んでるよ、はやくきなさ～い、って』
『ああ、うん、今行きます』
『は～い』

これだけの話、だけどとっても楽しかった、学校で男の子と話すよりも、仲の良い友達と話すよりも
誰よりも楽しかった、だから惹かれたのかな？それともう惹かれてたのかな？どっちだったかなんてどうでも良いやとにかく、その時には私は荒榎が好きになってた、一日も経ってない、多分１５分位かな、ただそれだけの短い時間、まるで魔法の様に一瞬だった
降りてきた荒榎はとても格好良く見えた、何処にでもいるような普通の子だったのに、何時の間にか世界にただ一人の私が惚れた人になっていた
初恋が小学二年生って普通だよね？少なくとも遅くは無いよね？
そんな状態でお母さんが言ったんだ

『ふふっ、そうだシャルロット、荒榎君と遊んでもらいなさい』

とってもビックリした、さっきまで考えていた人しかも目の前にいる人と遊んでもらいなさい、ちょっと難しいよ……
だって、何時の間にか私は荒榎を好きになってたんだよ？その荒榎と遊んできなさいって……難しいよ？
好きな人と遊ぶんだよ？気配りが出来てない女だなとか、つまらない女だな、なんて思われたくないし、可愛いって思われたいのは可笑しいのかな？

私だって女の子なんだよ?好きな人からは可愛いって思われたいよ、
だから最初の挨拶は大切だと思ったんだ

『こ、こんにちは!』
『……ああ、うん、こんにちは』

「……失敗しちゃったんだよね、恥ずかしかったな」

あの時はそんな事は考える余裕が無かったけど
返事がもらえた事が嬉しくて嬉しくて……今思うと恥ずかしいな

「そう言えば、変な人だったよね」

『……えへへ』
『……どうかした?』
『ううん!』
『……そ、そう』
『うん!……えへへ』

これだけ見ると変な人だよね、でも嬉しかったな、荒榎との挨拶
一緒にいるだけで楽しかった、隣にいるだけで幸せだった、どうか
した?なんて声を掛けられただけで顔が崩れた
……まだ来ないのかな?遅いな、やっぱりきちんと怒らないと
!約束は破っちゃいけません!って言っておかないとね!
それと、仲良くなった女の子も聞かないと、只でさえ距離だあって
会えないんだから、こっちに居る間にもっと仲良くなっておかない

と！
荒榎は朴念仁な所があるから恋人まではいけないだろうし……逆にいうと、簡単に彼女は出来ないだろうけど、荒榎だからね、ちゃんと確認しておかないとえ？何で一週間も一緒に居なかったのにそこまで惚れたかって？…分からないけど、断言できるようになったのは公園に件があったからかな

『俺が勝ったらその子を俺の彼女にする！』

あれはビックリしたな、いきなりなんだもん、それに決闘だなんてしかも、前に見られてたのが初めての出会いだったから余計に怖かったな……
でも、その件のおかげで私は断言出来る様になったんだから、感謝の気持ちもあるんだよ？
あの時、荒榎が簡単にやっつけちゃったんだけど、それを見てたら嬉しくなったんだ
荒榎は私を他の人に渡さないために頑張ってる、別に荒榎がそう言った訳じ、ゃない、私の思い違いかもしれない
でも、あの時は私を賭けて戦ってた、荒榎はちゃんと勝ってくれた、それだけの事と思う人も居るかもしれないけど
私にはそれが嬉しかった、それと同時に、荒榎と一生一緒に居たい、そんな風に思った
一時の感情かもしれない、私だけが思ってて、荒榎は迷惑かもしれない、子供には未だ早いかもしれない、でもこの感情は本物
私は荒榎と一緒に居たい、一生一緒に居て、楽しく幸せにのんびり暮らしたい
友達に言ったら変と言われた、大人に言ったら可笑しいと言われた、大人びてると、本気にしないで言われた
確かに、小学生には未だ早いかもしれない、ううん、確かに早い、

そんな事は高校生くらいからで良い
でも私は違う、転生者だからかもしれない、過去の記憶が少しでもあるからなのかもしれない
ひょっとしたら、昔の私はもっと大人だったのかもしれない、でもそんな事はどうでも良い
今の私が考えたんだ、荒榎と一緒に居る、これだけは譲れない、どれだけ馬鹿にされようと、どれだけ笑われようと、どれだけ変な目線で見られようと、これは譲れない、譲らない、譲りたくない
私はおかしいのかもしれないけど、私はバカなのかもしれないけど、私は変なのかもしれないけど、それでも荒榎が好き

『偶に見せる微笑とか、笑顔とか、苦笑とか、驚きとか……三日間しか一緒に居なかったけど凄い惹かれたんだ』

「……なんでここまで思えるんだろうね」

あの言葉に誤りは無い、あの時から……ううん、ずっと前から思ってたこと
一秒、1分、一時間、どれだけ少なくても、少しずつでも荒榎の好きなところが増えた、
一日、二日、三日、どれだけ経っても、その気持ちは薄くならなかった、逆にどんどん強くなっていった

「……フフッ」

なんでなんだろうね、今でも分からない、普通の男の子、クラスの男の子と何ら変わりは無いのにね

でも……何故かは知らないけど、荒榎の行動一つ一つに惹かれて行った
私がこんなに惹かれるんだもん、荒榎のクラスの女の子はもっと……
……

「……大丈夫だよね」

別に、荒榎が誰かを好きになっちゃいけないとは言わないけど……
うん、悲しい、考えるだけで心が痛い

「で、でも！私は他の人よりリードしてるし！」

そう言って視線を降ろす、地面よりも下、私の肌
そこには純銀のネックレス、真ん中にはサファイアが嵌まってる
これは荒榎からの贈り物、ちょっとお願いした感じはあるけど、荒榎からくれた贈り物

「……荒榎」

荒榎はこれの意味を知ってるのかな？知らないのかな？……どっちでも良いや
私が知っていれば良い、これを胸にかけて、この心を一生忘れなければ良い
これに彫ってある文字はＩｃｈ　ｌｉｅｂｅ　ｓｉｅ　ｅｗｉｇ、
ちょっと大人び過ぎてるのかもしれないけど、これは宣言、何があろうとこれだけは譲らない
一生貴方を愛します、荒榎だけを愛します、荒榎どんなに苦しくても、貧しくても貴方だけを愛します
どれだけの苦難があろうとも
どれだけの非難があろうとも

どれほどの苦行であっても
例え、これが結ばれない愛であっても
例え、鬱陶しいと思われようと
例え、この身が滅ぼうとも
例え、例え荒榎に忘れられていても

「……私は貴方だけを愛し、貴方だけの物となります」

荒榎……これだけ思ってるんだから、一回くらい良い夢見させてくれても……まぁ、荒榎だもんね

「……早く来てほしいな」

そしたら、離れていた時間を埋めるくらいに楽しい事をして遊ぼうね

この番組はシャロの提供でお送りいたします（後書き）

さて、今回はシャロのターン！というかシャロオンリー！
べ、別にネタに困ったとかじゃないんだからね！違うんだからね！
・・・・・・・・すんません
いやね、最近は何を書けば良いのかが分からなくなってきまして・・
・・・・
うん、今回も苦行の末にできますた・・・・出来ました
はい、ちょっと・・・というか結構矛盾してるかもしれないけど・・
・・・勘弁してね！ごめんなさい
さて、うん、最近は暑いですね、今日は一番暑いと思いましたよ
半袖で汗をかくって、これ如何・・・運動したんだけどね☆
でもまぁ、最近は季節が分からない、今は夏！・・・・・じゃない
よね多分春・・・のはずなんだけどな
まぁ、それは置いておいて・・・・・これはヤンデレじゃないよ
ね！ちゃんとした純粋だよね！純粋だぁぁぁぁ！・・・・・・・・
よね？
いや、自分としては純粋な気持ちの子にしたいな！と思って書いた
んですけど・・・・途中で欲望が（ダラダラ
ま、まぁ！純粋なんだよ！・・・・・・・・束さんよりは！・・・
・普通じゃないのを基準に考えても駄目じゃね！？・・・・・・・・
純粋だよね！？
え？ヤンデレ？ＨＡＨＡＨＡ何を言ってるんですかそんな事ありま
せんよ第一シャロはそんなキャラじゃないですから！・・・・・・・
・・・・・・・はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・ま、まぁ
？最後の言葉はヤンに近く・・・・え？完全にヤンでる？な、何
を言ってるんだね君達！・・・・・複数として使ってる時点で結構
な人数が言うと分かってる俺が憎い！・・・・・・で、でも、うん、
この話の中では・・・・・・大丈、夫？・・・・だよね！うん！

っと、その前に・・・・・・・・・・シャロ転生者にしてすんません
でしたぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!
いや、でもさ?大人びてる感じで書いてきたじゃん?なら転生者でもよくね!?
ちゃんと記憶はないしさ!・・・・・・・・・・すんません

うん、頼むからそのコンクリートはやめて欲しいな、固まってないし・・・・・・・・・・・・・・え?何で俺に塗るの?このまま一時間待機?・・・・・・・・・・死ぬじゃん

ここでも原作崩壊ＤＥＡＴＨ（前書き）

ようやく完成だお！

ここでも原作崩壊ＤＥＡＴＨ

「あ、あははははは……ごめんなさい」
「……」
「い、いや、忘れてた訳じゃないだよ？……いや、忘れたけど思い出したから！ちゃんと思い出してたからね！ただ色々あって……」
「……」
「ごめんなさい」

はい？今の状況？謝ってるでしょ見れば分かるじゃん……相手？シャロですか何か？
……いや、俺が悪いんだけどさ
束さんとロシアに行った次の日に来ましたフランス！シャロの家まで長かったよ、家の場所を聞いてなかったからね
でも大丈夫、母さんに聞けば一発だったよ、うん、着いた、着いたんだ、着いて即効でシャロが見つかったんだけどいきなりプイッ…
…やっちまったぜ！……はぁ

「そろそお機嫌直してよ……もう１５分経ったぞ？」
「……」
「……シャロ」

とりあえず抱きしめておく……ってオイ！？それじゃあ只の誑し！
でもそれに反応するシャロも危ないと思うんだ……引っかかる的な意味で

「……荒榎」
「機嫌直ったか？」
「……アイス」

「アイスが？」
「アイス２個買って」
「……あ、あはは」

何というか、それは恋人が使う方法じゃないのか？頬が引きつるんですが……
ま、まぁ、うん、俺が悪いんだから……断れないよね？

「よし、じゃあアイス２個ね」
「Ｕｎ　ｆｉｌ　ｒｏｕｇｅのだよ？」
「……良いんじゃないかな？」

いや、そんな店知らないけどさ、多分高いんだろうな……まあ、お金は大丈夫だから良いと思うけど……遠かったら妖幻使っても良いかな
でも、それくらいで機嫌が直るんだったら……安いと思うよ？

「……じゃあ、良いよ」
「うし、それじゃあ改めて、久しぶりだなシャロ」
「うん、久しぶりだね、荒榎」

やっと挨拶が終わった……長い道程だったな、２０分は軽く越えてるし
で……さっきからこっちを見てくるのは何方？目が細い……と言うか怖い

「し、シャロ？何で俺は睨まれてるんだ？異様に怖いんだけど」
「え？……あ、お父さん！」

……はい？あれぇ？また原作と違うよぉ？

おかしいな、原作だとシャロとお父さんは殆ど会った事が無くて、仲がも良くないはずなんだけど……

「もう、お父さん！荒榎を睨んじゃ駄目！」

「し、しかしだなシャルロット、アイツは……」

うん、滅茶苦茶お父さんが弱いね……何で？

もう原作とか知らない世界だね！違うよね！絶対送る世界間違えたよあの神様！

ってか、これじゃあシャロが男装して学校に来るイベントが消えるじゃん！そして一夏との衝撃イベント裸が見られるが！……いや、それは無くて良いや

一夏なんぞにシャロ（娘のような存在）はやらん！……いや、お父さんは目の前に居るけど

と言うか、どちらかというと妹だな……うん、さっきのも妹の拗ねた感じだと思えば……普通だな！間違えても姉とは思えないし……いや、たまにしか会えないから従妹か？

「でも駄目なの！荒榎は大事な友達なんだから！」

「……むぅ、仕方ない」

うん、何が仕方ないのか聞きたいくらいだね！怖いから聞かないけど！……でもこの人男前だな、滅茶苦茶もてたんだろうな……ってか、俺何かしたか？初めて会ったのに？……会社が倒産しかけたとか？うん、ごめんなさい

「荒榎荒榎、私のお父さんだよ」

「え、あ、うん、そっか、初めまして」

「ああ、どうも、君が『あの』荒榎君だね、噂はかねがね」

「それはどうも……」

「えっとね、お父さんはＩＳの会社なんだ、荒榎と話が合うんじゃないかな」

ああ、うん、だろうね、ラファール・リヴァイヴを作るわけだし…この世界でも作るよね？作らなかったらシャロの機体が変わるんだけど……

まぁ、そうなったら俺が適当に装備を作って渡せば……使えるのか？

「うちの子はどうですか？」

「なんとも扱いにくいね、製作情報が全く無いし、改造も無理、その上機嫌までとらないといけない」

なんとも散々な言われようで……俺の意向でＩＳのコアの変わること、この人分かって言ってるのか？ちょっと苛ついたぞ？

俺と束さんが丹精こめて作った作品を何て言い方しやがるんだよ、シャロの親だからって許される事と許されない事ってあるよね

「しかし、その分高性能だ、今までに無かった作り方、法則、情報、全てが今までの上を行っている、しかも空中にディスプレイ、その上繊細に出来ている、ここまで完成されたものは少ないだろう」

「……それはどうも」

……何というか、言いくるめられた？いや、さっきまでは凄い苛ついてたけどさ、今のを聞いたら怒れないじゃん

思いっきり誉めてるし……なんだろう、ムズ痒い、滅茶苦茶痒い気分、ってか恥ずかしい！さっきまでの考えが恥ずかしい！

この人ここまで考えて言ってたなら……うわ、どうしよう、結構気に入ったぞ

「一体何処でこんな知識をつけたのかが気になるが……まだ小学生

なんだろう？」
「……あはは」

この人鋭いだろ……え？本当に原作の人？いいえ、絶対違います、違うだろ、もしこの人が原作の人ならシャロはもっと幸せになって……あれ？一夏と一緒に居られるから、それはそれで幸せなのか？……一夏には渡さんからな！
ってか、今までの人は誰も突つかなかったのに……他の人がバカなの？それとも機嫌を伺ってるからなの？どっちにしろ国が何も調べないとは思えないけど……いや、調べてないから今の状況なんだけどね

「……まぁ、それは良い、そんな事よりだ……シャルロットとはどんな関係だね？」

目が！目が変わった！睨みになった！
娘はやらん！的な目だよ！？俺何かしたのか本当に！

「お父さん！」
「しかしだな、シャルロットがどう思っていようと、こいつがどう考えてるのかで危険にもなるんだ」
「え、いや、友達ですが？」
「……本当に？」
「本当に」
「……」
「……」
「……」

長い、とても長い沈黙です……あと目が……

「……それなら良いんだ、楽しんでくれ」

「え、あ、はい、どうも」

変わりようが凄いね、うん、さっきとは正反対と言っても良いほどだよ
今は滅茶苦茶格好良い笑顔です……と言うか、うん、それほどの事なのか？

「それじゃあ、私は会社に戻らないと行けないので失礼するよ」
「お父さん、また会社抜け出してきたの？」
「う……い、いや、お父さんはシャルロットが心配で」
「ちゃんと働かない人は嫌いです」

グサッ×2
何でかって？おじさんと俺だよ、うん、俺も働いてないからね…いや、働いてはいるけど、ちゃんとじゃないし……あ、ノーベル賞貰うの忘れてたな……まぁ、要らないよな
待て、待つんだジョニー、誰だか知らないけど……おれは小学生、つまりはまだ働く義務は無い、つまりはまだ働かなくてもいい年です！日本では約……俺タバラカじゃん、決めてないじゃん、あれ？ひょっとして小学生でも働けと？
いやいやいや、考えたのは……多分束さんだぞ？あの人が考えたんだ、多分何歳でも働く義務は無いだろうな……うん、実際原作では束さん働いてないし……

「それじゃあお父さん、お仕事頑張ってください」
「あ、ああ……」

しょぼしょぼ帰っていくおじさん……
ってか、そろそろ雨が降りそうな雰囲気……

「あ、雨だ……」
「考えている所に降りますか……」

俺は神様に嫌われてるんだろうな・…・いや、知らんけど
ってか、このタイミングで雨……妖幻も防水加工はしてあるけど、
雨に濡れたら一応メンテナンスしないといけないし……あ、風
も強くなってきたな……

「ってか嵐じゃん！」
「荒榎！こっちこっち！」

シャロが指差す方には……立派な洋館、というかデュノア家…
…うん、デカイ
ってか、俺帰らないといけない……

「何て言えないよね……」
「荒榎急いで！」
「あ、はいはい」

走るシャロ……うん、走ってるんだけどさ、俺達小学生じゃん？ど
れだけ急いでも距離が減ってる気がしない……
あ、そうじゃん、妖幻使えば良いじゃん……もう使っても良いよね、
ってかこのまま濡れるのは……
いや、雨は好きなんだよ？でもさ、シャロまで濡れるじゃん？……
…もう使っちゃえ
棺戟だけあれば良いよね、傘代わりにして……

「……結局濡れるんだよね」
「で、でも、少しだけになったよ？」
「いや、うん、そうなんだけどさ……本体出せば良かったな」

ここでも原作崩壊ＤＥＡＴＨ（後書き）

ここからは暫くシャロのターン！
はい、お久しぶりです、ようやく完成短いけどね、とさて言わせて貰おう・・・・・あんなに良い子の父親が酷いわけが無い！
いや、原作は酷かったけど、うん、あれは嫌だったな・・・・・・まぁ、今回・・・・・というか、この作品では良い人だよ！ってうかそうするよ！・・・・・・・出来るはず、うん、多分今回は・・・・・・・・・・・・・・うん、ちょっとつくりが酷いかな？
で、でも、うん、遅くなっちゃったし・・・・・・余計に良いものじゃないといけないじゃないかよ
うん、ごめんなさい、書けないんだ・・・・最近クオリティが落ちてきてる気がするんだ・・・・・・・・
だから、うん、更新が遅くなるかと思います、できる限りは下げないように、遅くならないように頑張るよ！・・・・・・・・・・でもまぁ、最近は見てくれる人が消えたり・・・・・・・・・・・・・・頑張らないとね

追伸、主人公の名前の読みを書いてませんでしたね・・・・・・書かなかったっけ？
真中　荒榎
まなか　あらか

優しさという名の強制ですね分かります（前書き）

はっちゃけた

優しさという名の強制ですね分かります

「荒榎君、今日は泊まっていきなさいな」
「……はい？」

外は雨、今はシャロの家に上がらせてもらっています
え？そんな事より、状況が知りたい？はっはっは、そうかそうか、
そんなに知りたいか……俺も分からん
いや、だってさ？シャロの家に入った途端にヘレンさんが目の前に、
お邪魔シマスを言う前にこの一言ですよ……誰か分かるなら教えてくれ

「えと……おじゃまします？」
「そんな他人行儀の挨拶はいいわ、それより今日は泊まって行きなさいな」
「……」
「香織にも連絡しておいたわ、雨が強くなったから今日はココに泊まるって」

わーお、手が早いねー……ヲイ
早いにも程があるだろ、ってか俺が居る事知ってたの！？……母さんが言ったのか？
いや、それでも早いだろ、ってか雨が降ってからまだ１５分も経ってないよ？……俺の知り合いは人外が多いね！

「あの、ＩＳがあるんで雨でも普通に……」
「……（じー」
「……普通に……」

「……（じー」
「……泊まらせてもらいます」
「……（パァァァァァ」

うん、なんだよこれ、一種の強制力だよね
シャロがさ、じーって見てくるんだよ？しかも期待に溢れた目で…
…断れないでしょコレ
違います！私はヘタレなんかじゃありません！例えヘタレだとしても
もヘタレと言う名の紳士です！……うん、軽い現実逃避だから
気にしないで

「それじゃあ寝室はシャルロットと同じでいいから……後はパジャマね」
「寝室はもう突っ込まないんで、パジャマはまともにお願いします……」
「そうよね……よし、ちょっとお出かけしましょう」
「……はい？」

おい待てコラ、人を雨で泊めたと思ったら、その雨の中出かけるんですか？……理不尽だろ
いや、まぁ自分が意思をはっきり言えないのも悪いんだけどさ……
シャロまで使うとかマジ卑怯、卑怯過ぎでしょ

「お母さん、荒榎のパジャマはあるよ」
「あら？買ってあったかしら？」
「うん、私が買ったの」
「大きさはあってるの？」
「うん、ちゃんと荒榎のサイズを買ってきたよ」
「お金はどうしたの？」
「私の貯金を崩したよ」

「そう、なら良いわ、それを貸してあげて」
「うん！ちゃんとお母さんが言った通りにやってみたよ！」
「偉いわシャルロット、それでこそ淑女よ」

……怖いです！シャロが怖いです！え？何それどうなってるの！？俺が泊まるのって初めてだよね！？別世界の俺とか来てないよね！？
ってかレトアさん！何が良いんですか！？そして一体何を教えたんですか！？そしてこの状態が淑女なんですか！？ってか俺のサイズは何時知ったんですかぁぁぁぁぁ！？

「荒榎、こっちこっち！」
「え、あ、う、うん？」

腕を掴まれて連れて行かれてる荒榎です……この館に監獄とか監禁所とか無いよね？
拘束具とか見たら即逃げますからね？……何時の間にかシャロがヤンデレに、ついさっきまではあんなに純粋だったのに……

「ほら荒榎、どれが良い？」
「……はい？」

えっと、目が可笑しくなっちゃったみたいだね……
シャロが持っているのは五着……五着？四着？、ま、まぁコレだけ買ってるのはビックリだけどさ……服が
1、猫耳の着いたパジャマ……ぶっちゃけ原作でラウラと着た服の三毛猫版、製作者の頑張りが凄い
2、女の子向けの……フリフリの付いたパジャマ……うん、そうだね、プロテインだね
3、所謂アンダースーツ……寒いだろ、ってかパジャマじゃないだろ

4、普通の服……なんだけど何処かSを思わせる……と言うか、滅茶苦茶危なそうな服
5、ちょっと大きめのYシャツ、でもサイズは合ってるな……裸Yシャツだと!?シャロが分からない……

「……とりあえず、2は戻そうか、それはシャロの着る服だから」
「え?荒榎に買ってきたのに……」
「うん、コレは駄目だろ、俺は男だし」
「でも、荒榎って見た目は女の子って言われても分からないと思うよ?」
「男の娘だと!?」

あれ!?俺ってそんな外見だっけ!?たしか『けいおん』の和に似て……和は女だね!うん!男の娘だね!
いやいやいや、今まで言われた事が無いぞ!?普通に男だろ!……服で見分けてたとしたら悲しいな
え?つまりアレか?俺が着ても問題無し?……いや着ないけど、ってか着たくないけど

「問題は1と3、4、5だな」

1はまぁ、悪くは無い、ってか寧ろ良い!……え?普通は無し?俺は猫好きだから良いんだよ……いや、うん、真面目に好きなんだけどさ、近寄って来ないんだよね猫に嫌われる体質?
3……うん、寒いから無しだな
4は……着るとキャラが変わりそうだから無し、ってか呪いがありそうな感じだし
5……いや、誰が俺の裸Yシャツ見て嬉しいの?少なくとも俺は嬉しくない……いや、着ている人は嬉しくないのが当たり

前か
シャロだって……あかん、これ買ってきたのシャロだった…
……だ、大丈夫だよね！

「……1だな」
「猫さんだよ」

うん、まぁ猫好きだし……コレくらいなら妥協点だよね……あ～猫がモフモフや
ってか、一体何処に行ったらこんなマニアックな服が売ってるんだよ、裸Yシャツの為のYシャツとか……誰が買うんだよ……シャロは買ったけど
……と言うか、このアンダースーツどこかで見たことあるな・・・・・・・黒くて……あ、下のズボンと腰のマントもある、うん、アンリミデットな剣の人ですね……分かると良いなうん、もうコレ只のコスプレだよね……今度から妖幻に生活品も入れておこうかな……

「それじゃあ荒榎、お風呂入ろ！」
「え、あ、ちょ！？」

またまた引っ張られる俺、行き先は……うん、聞かなくても分かるだろ？

「～～～～～♪」
「……」

後ろからすっごい嬉しそうな鼻歌が……
え？場所？大きな浴場がありましたが何か？……うん、可笑しいとは思うけど、とりあえず言おう、考えるな！

「荒榎？何で後ろ向いてるの？」
「ん？いや？特には何も無いよ？だから先にお風呂に入っちゃってて」
「……荒榎も一緒」

「気持ち良かったね」
「……え？ああ、うん」

入っちゃった、入っちゃったよ、入っちゃったんだよ俺、シャロとお風呂とか
でもまぁ、今更な話し、日本では一緒に入ってたんだけどさ……でも違うよね
女子ってすぐに変わるよね……シャロも変わるんだよね、うん、前とは違ったん雰囲気だよね
ってかさ、幾ら風呂に一緒に入るって言ってもさ、背中の洗いっこは無いと思うんだ……そういえばシャロの背中、木目細かかったな……

「……誰か俺を殴ってくれ」
「……んと、えいっ」

「ああ、うん、ありがとうね」
「どういたしまして♪」

やっぱり良い子だわ……でも本当に殴るとは、やっぱり天然も入ってるね
これはある意味朴念仁にもなりそうな感じで……一夏に似てきたか？
ひょっとして性格が似てたから惹かれあったとか？…兄さんは許しませんからね！

「……（うずうず」
「……」
「……（うずうず」
「……」
「……うずうず」
「発言した！？」
「……うぅ」
「いや、うん、言ってほしい事は分かるから」
「……荒榎のいじわる」
「……」

今のグサッと来ましたよ？うん、上目遣いのちょっと涙目……こんなこと教えたの誰だよ！ヘレンさんですね、本当に（ｒｙ
うん、なんだろう、キュンと来たって言うのか？あれだな、コレが友達（前世）の言っていた萌えだね！超萌えた！
危なかった、もう少しで抱きしめたい衝動に駆られて……この思考が変態ですね分かります
でも、うん、服も関係してると思うよ？……

「何で猫のパジャマなの？」
「荒榎とおそろいだね♪」

萌え～……すんません、留置場ってどうやったら入れますか？自分が危ない人だと思います
うん、猫のパジャマ、しかも性格にはお揃いじゃないね、絵がプリントされているタイプ……でも可愛いな、猫は良いかぁいいよ～……これは束さんだな、うん、可愛いな……

「荒榎？何で抱き着いてるの？」
「猫がモフモフ……猫がモフモフ……」
「あ、荒榎？」
「モフモフ……モフモフ……」

でも

「……猫がモフモフ」
「荒榎そろそろ起きないと、朝ご飯だよ？」

「猫が、猫が……モフモフ」

モフモフ…モフモフ……モフモ…ん？
腕の中に柔らかい感触……ああ、猫をモフモフしてるんだ……猫？
家に猫なんて居たか？それにちょっと大きいような……まぁ、モフモフだから良いや
それにしても、シャロの声が近くから聞こえるな……シャロ？
何でシャロの声がするんだ？……あ、そっか、昨日は泊まったんだった……シャロの家の猫か……ちょっとポッチャリ系なんだろうなでもまぁ、触れるだけ良いや、猫は久しぶりに触るし……今までの猫は何故か逃げるんだよね、あれは……五才位からかな？一夏の町に引っ越してきてからは猫が触れなかったな……
それにしても……モフモフや……ってか大きいな……まるで人くらいはあるぞ？……人？
いや、でもモフモフ……ニギニギ

「荒榎、くすぐったいよっ」
「……」

よし、ちょっと落ち着こうか、ようやく頭が冴えてきた…シャロの家に猫は居たか？いや、見た限りでは居なかった
シャロは何処に居る？…声の感じからしてすぐ近く
俺には拘束具なんて趣味は無いが、背中に回されてる紐は？……
いや、紐と言うより二つの……腕？
ここから考えると……よし、一番簡単な方法を取ろう、即ち目を開ける事！まだ開けてなかったからね！

「……よし！」
「おはよう荒榎♪」

腕の中にシャロがわーお、見事なトリックだね、一体誰がやったんだ？……すんません俺です、思い出しました
昨日猫を……と言うか猫のパジャマを着たシャロを抱き枕に……
…死んで詫びるか？

「……おやすみなさい」
「荒榎！？寝ちゃ駄目だよ！ご飯だよ！荒榎が起きないと動けないんだよ？……私はこのままでも良いけど」
「よし起きよう！おはようシャロ！」
「……何ですぐに動くのかな」

はっはっは、何を仰る猫さんや……モフモフしたいな
……いや、変な人だと思わないで！俺はただ単純に猫が好きなんだ！
五才までは良く野良猫を触ってたんだよ！あの頃は猫に好かれたからな……あはは、心の汗が流れそうだよ
こっちでは全然触れないな……前の所に優しい猫が集まってたのかな？……なんにせよ、五才までずっと猫をモフモフしていた俺が、いきなり猫が触れなくなったんだ、そしてこの状況
これは触りたくなるだろ？禁断症状だよ！仕方の無い事だよ！ごめんなさいだよ！
まぁね、俺はエロゲーの主人公じゃないからね、これからちょっとしたドキドキイベントで感情が変わるとかはありませんよ……ありませんよ？

「さて、目が覚めてしまったし……ご飯？」
「うんご飯……もうちょっと寝ても良いよ？」
「よし、ご飯を食べに行こう」
「……ケチ」

何がケチなんだろうね……腹減ったな、何でだろうな……昨日は晩飯食べて無かったわ
あれ？シャロも食べてないよね？……食べてない筈なんだけど

「シャロ、昨日は晩御飯食べた？」
「え？うん、食べたよ？」
「何時の間に！？」
「えっと荒榎が私を抱きしめて寝てるとき、ほら、ロリーメイト」
「……うん、そっか」

そうなんだ、そんな方法で……
え？ロリーメイトが分からない？アレだよ、あのチーズとかポテトとかの味がある奴
こっちのはもっと小さくなってるよ、なのに味は美味しくなってるし、満腹度も上がってるんだよね……小説の世界って怖いね！
ちなみに、ロリーメイトだからって小さい子が乗ってる絵とかじゃないからね、より小さくなったから子供みたいにロリーになったんだってさ
ついでに言うと、コマーシャルは小さい女の子、小さい子でもすぐにお腹一杯……うん、是非逃げて欲しいね、捕らえ方では危ない意味でもあるしね

「ってか、それ一体何処から出したの？」
「お母さんが持ってきてくれたんだ」
「……レトアさんが？」
「うん、お母さんが」
「……ち、ちなみに聞くけど、レトアさんは何かした？」
「えっとね、ご飯だよーって呼びに来たんだけど、荒榎が寝てて私が動けないからロリーメイトを渡してくれて、写真を撮って帰ったよ」

「……うん、ありがとう、自分のせいだね」
「え？え、うん？」

うん、写真か～……燃やそう！危ないから燃やそう！主にレトアとかレトアとかレトアとかついでに束さんとか……
いや、束さんは大丈夫か？まぁ、レトアは危ない、色々と危ない、自惚れとかじゃなくて、本当に危ない気がする……主にシャロの家系が
いや、でも、ん～……流石にフランスには手を出さないか？しかもシャロもそんな写真を持ち出したりはしないだろうし……うん、問題はないな
あるのは俺の後悔だな！うん、やっちまったな！……はぁ

優しさという名の強制ですね分かります（後書き）

なんと！１００，０００突破！・・・・・・も、盛ってないからね！ちゃんと行きました！そして読んだ人は結構逝っていますね！・・・・・・・すんません生言いました

ってな訳で、今回はちょうハイテンションで書いたからね！苦情は受け付けないよ！いや受け付けるけど・・・・・・今まで以上にダメージを受けるからね！本当だからね！

さて、うん、まぁ、あれだ・・・・・ごめんなさいいやね、荒榎が猫好きは前から決めていたんですよ？本当だよ？ただ書くときが無かっただけだからね？・・・・本当だよ？べ、別にちょっとキャラが壊れるようなことが無いとヒロインがかわいそうとか思ったから足したとかじゃないんだからね！最近こんな事を書くのに抵抗がなくなってきた自分が怖い・・・・・・

ま、まぁね！作品を書くに当たって恥じは要らないよね！うん！問題ない！・・・・・・・・・・・はず

で、うん、シャロが・・・・・・じゅ、純粋なだけだよ？ただ純粋に、荒榎は何が良いのかな？とか思って買った服なんだからね！ちょっとネタに走った感が否めない・・・・・・・

ロリーメイト・・・・・・うん、空が綺麗だな、今は夜だけど・・・星が綺麗だな！

さて、写真の伏線を張ったは良いが・・・・これは不味かった？今更ながら、本当にレトアが怖くなる気がしてならない・・・・・・・

頑張れ荒榎！負けるな荒榎！”荒榎の冒険はまだまだ続く！・・・・・・うん

さて、ここまで支えて下さった・・・・・・というか見てくださった方々
そんな方に一言！・・・・・・・・・・・・・・・暇人万歳！（笑

暇人ならば何でもできる！暇人ならば小説も書ける！（アントニオ風
うん、まさかこんなに壮大な話になるとは・・・・・
最初のうち・・・と言っても五話辺りまでですが、それまでは２０話にはとっくに原作に入っていると考えていました
しかしいやはや・・・・・・続くもんですね
まさか、こんなに読者がつくとは思ってなかったのが本音ですね・・・・・・・
うん、こんな作品がここまで売れるとは・・・・・・ビックリだお！
そして、この作品が読者の影響を受けているのは明確、うん、優柔不断でごめんね！
最初は楯無さんが途中で出てくる事なんて考えてなかったし、シャロのお父さんも原作通りに書く気でした・・・・・・・・何時の間にこんなに変わったんだろうね

しかも、まだ原作に入っていないしね！うん、遅いな、でも飛ばし飛ばしは嫌だしな・・・・いや、この後結構飛ぶ気満々ですがねおやおやｍ何時の間にかこんなに長い後書きに・・・・・・・うん、後書きじゃない気が
それじゃあ今回はこの辺で・・・・・・・・・・・・・・・・タバラカ！（笑

久しぶりに使ったなこれ

遊園地には危険がいっぱいです（前書き）

長らくお待たせしました！

遊園地には危険がいっぱいです

「おはよう、良い朝ね、とても気持ちが良いわ」
「おはようございます、とりあえず写真は燃やします」
「良いわよ、ネガが残ってるから」
「……」
「お母さん、私も写真欲しいな」
「ええ、勿論よ、額にでも入れておきましょうか」
「それは、ちょっと恥ずかしいよ／／／」

うん、こっちの方が恥ずかしいからね……はぁ
昨日取られた写真が机の上に広げられてます……一体何枚焼いたんだ？
ひぃふぅみぃよぉ……メンドイから止めよう、とにかく四人用の小さな丸いテーブルだけど……それでも写真を置けば大きく感じるないや、写真が多いだけなんだけど……あれ？少なかったら余計に大きく感じるのか？

「今日は晴天ね、どこか出かけてきなさいな」
「いや、俺はそろそろ……そうですね、出掛けようかな」

シャロの目が（ｒｙ
昨日の夜と同じなんですけど……

「っ！じゃあ荒榎、昨日の約束！」
「昨日……えっと、アイス？」
「アイス食べよう！」
「あら、もう予定が入っていたのね、それじゃあコレは要らないわ

ね」

そう言ってポケットからチケットを出して……チケット？

「……お母さん、それは？」

「コレ？遊園地のチケットよ、良かったら行ってきなさいって言おうと思ってたんだけど、必要無いわね」

遊園地……小学二年生が二人で？いやいやいや、危ないでしょうが、すりとか引ったくりとか色々と集まる場所なんだからってか、入れるの？普通は保護者同伴じゃにと駄目って言われる気が……

「お母さん、それ貰えるかな」

「良いけど、予定があるんじゃなかったの？」

「それはまた今度！」

「そう、じゃあ楽しんできなさい」

と、言う訳で、本日はシャロと遊園地に行く事になりました…アミューズメントパーク…マジかよってか、俺は一体何時になったら帰れるんだ？

「……ってか、遠い？」

「んっと……うん、凄い遠いね……」

「……よし」

遠いなら時間がかかる訳でして、そんな時間は勿体無いんで……あとシャロが疲れるしとまぁ、色々な言い訳をしてまでやりたい事が……妖幻の起動なんだよね

「妖幻……部分じゃなくて良いや、全展開、装備は無し……桜花があれば良かったな……」

あれはブースターだし、結構速くなるんだけどね……まぁ、消えてしまったものは仕方が無い

・……なんて考えていましたよ、はい

「……綺麗な翼」

「……・え？」

うん、あれ？俺翼あったか？いや、昔はあったんだけどさ……今ってあった？

よし、後ろを向こう、ってかセンサーで確認しよう……何で前回は束さんに見てもらったんだろう、自分で見れたじゃん

……よし、第一声は思いついたぞ、いっ、せい、のー

「なんでやねん」

……でー、なんでやねん……うん、口が滑ったごめんなさい、言う気は無かったんだよ？ただ口が滑って……

ま、まぁ、突っ込みは出来たし良しとしよう！……そして本題忘れてたね、うん

あらあらビックリ、何時の間にか桜花が背中に登場ですよ女将さん

あらやだ、それは大変ね、それより女中の仕事は終わったの？さっさと終わらせちゃってね

……何をやってるんだろうね、うん、今後からは他の方法にしよう

でもさ、なんでさ、ありえないからさ、だってさ、キャパシティがさ、零なのさ……さで縛るのって難しいね

でも、うん、何でだろうね……ひょっとしてだけどさ、武器としての登録になってるとか？だからコールするまでは顕現しないとか？

……・わーお

うん、これぞチート、最高なるチート、まぁ俺としては、自分で作った力作が消えてなくて良かった！位な感じなんだけどね

ってか、それも良いけど棺戟は何処に行った？頑張って動かす練習したのに……いや、脳内だけど

でもまぁ、このノリだと武器として登録されてるよね……あ、あったあった……あった？

ちょっと形が違うような……いや、でも登録名は棺戟だし……あ、そういえば桜花もちょっと変わってる気がするな

なんでだ？……成長機能なんてある訳無いし……無いし……無い、よね？

自己成長とかしないよね？最終的には喋ったりとか……無いよね！？

「荒榎は妖精さん？」

「……人間だよ？」

うん、この子天然だね！普通だったらコレは何？とか聞くよね……妖精さん？いいえどちらかというと未だ人間です……だよね？

最近色々と人間の枠から飛び出てる気もしてきたけど……うん、人間！大丈夫！

国籍もあるし！……作ったけど……仕事もあるし！……半ニート生活だけど……大丈夫！……とは思えないけど

「さて、シャロ、お空を飛んでみたい？」

「飛べるの？……危なくない？」

「安全……とは言い切れないけど、危ないとまでは言わない」

「……それじゃあ飛ぶ」

なんというか、思いきりが良いんだね……ま、まぁ危なくは無いよね……多分

「良し、そんじゃあ掴まって……ってか、俺が抱っこするから」
「荒榎が抱っこ／／／／／／／／／／」

ヲイ、一体何を考えてるんだ？ぼうっとしてるぞ？大丈夫か？
ってか、抱っことは違うけど、寝るときに抱きついたじゃん、不本意……ではないけど
猫のためなら言い訳も弁解もしない！それが俺！……いや、うん、最近末期だなと思ってきた
昨日の件が防波堤をぶっ壊したね……そりゃあもう、完全に

「そんじゃ、飛びますか」
「荒榎の抱っこ／／／／／／／／／／」

うん、箒も原作ではこうなってたんだろうね……もうちょっと一夏も接し方を変えてあげれば良いのに……俺は変えないけどね！
いや、酷いとか思わないでね？これでも頑張って耐えてるんだから、流石にここで対応を変えるとなし崩しに……
まだ小学二年生だし、もうちょっと先までは恋愛は考えたくない……とか理想論を語ってみたり！ファーストキスはもう無いけどね……
ってか、レトアが怖い、前にも言った気がするけどレトアが怖い、本当に怖い、なんだろう滅茶苦茶寒気を感じるんだ……
ま、まぁ、第一はもっと良い人を探して欲しいだけどね……本当だよ？
俺と一緒とか、絶対政府に利用されたり、危険な目に遭ったりで災難になるからね……誘拐とか
しかもシャロだよ？このカワエエ子だよ？危ないおじさんとかがうろついてるこの世の中だよ？危険だよ

まぁ、兄（自称）または従兄（自称）としてそんな事にはさせませんけどね！……うん、自称なんだけどね
でもまぁ、うん、本当にさ、恋愛は未だ要りませんよ？シャロも従姉感覚が強いし
何だろう、自分で自分の首を締めてる気がしてきた……

「……あ、アレだよ荒榎」
「……アレなの？」

何時の間にかついていた様子……方向があってて良かったよ、全くもって忘れてたし……
で、Ｕｎ　ｆｉｌ　ｒｏｕｇｅがそこに在るんですが……
意味は知らん……調べてみようとは思ったけど感が止めろと訴えたから止めた
うん、我ながらすばらしい感を持っているね！……もっと他の所で働いて欲しいんだけどね
ってか、遊園地のすぐ横にアイス屋があったんだね……今日で両方行けるんじゃないかな

「……ってか、大きいだろ」
「大きいね……」

デカイ、一言で言うならデカイ、もしくは大きい、まぁどっちでも良いんだけど
どれくらいと聞かれると……名古屋ドーム五個位？いや正確じゃないけど、　見た感じそれくらいはあるんじゃないか？
いや、遊園地の方だよ？まぁそれでも大きいんだけど

「流石に街中には下りれないから……あそこに降りよう」

近くに林が在って良かった、降りるときなんて何も考えてなかったからね
正直、街中に下りても良いんだけどね、流石にシャロが居ますからね……政府の犬に見つかると面倒な気がする
あれ？政府の犬って誰なんだ？人なのか？それとも本当に犬？……
ひょっとして軍？
どれにしろ大変な事になりそうだね……とりあえず、妖幻を解除して、っと

「さてシャロ、空の旅はどうだった？」
「面白かったよ、風が気持ち良かった」
「それは良かった、それじゃあ歩こうか」

まずは遊園地だな、ってかこのチケットで何ができるんだ？
見た感じアトラクションは沢山在ったけど、全部に使えるなんて上手い話とは思えない
そんな事をしたら赤字だろうし……チケットの値段が高くないし
ここは店員に聞くのが一番だろうな、丁度良く……いや、自分たちから近付いたんだけどさ
入り口の店員に聞いてみようじゃないか

「すいません、このチケットって何が出来るんですか？」
「はい、こちらのチケットですか？こちらでは……ちょっとすいません」

話しかけたばっかりなのに何故か去る店員……ああ、連絡があったんだろうな、インカムで話してるし
……ん？何でこっち向いた？そしてすぐに逸らした？……何かあったのか？

「……失礼しました」
「あ、良いんですけど……何かありました？」
「え？いえ、何もありませんよ？」

チラチラ、と視線が動く……その行き先は俺の体とか、となりのシャロ、とか
シャロは分かるけど……俺の体？何で？しかも一箇所じゃなくて色んな所を見てるし……変な格好なのか？
特には変じゃないと思うけどな……Yシャツにジーパン……変じゃないな
すっごいジロジロ見られてるんですけど……

「えっと、そんじゃあ、はい」
「え？あの？……」
「……入ります」
「あ、はい！失礼しました！」
「ほら、行くぞシャロ」
「あ、うん」

一体何を見てるんだ？俺の体が可笑しいのか？……ちょっと痩せてるかもしれないけど、可笑しくは無い……はず
力も弱いし、体力も少ないけど……そんなのは見たって分からないし……分からない……
まぁ、そんな事は良いや、知っても知らなくても変わらないし……
多分

「さて、何に乗る？」
「えっと！えっと、えっと……えっと」
「うん、決まらないよね、多過ぎるし……」

入れば目の前にはアトラクションやらショップやらで……先が見えねー
ってか、人が多い……一体何人いるんだろうな
「……とりあえず、近くのものから乗ろうか」

「……疲れた」
「疲れたね……」

途中からノリノリで乗りまくってたからな、体が気持ちに付いて行かなかった……つまりは疲れた
最後にジェットコースター五連発はきつかった……
さっき買ったコーラを飲んで……駄目だ目が回り始めた

「あー、目がー……気持ち悪い」
「あ、荒榎、私ちょっとお手洗いに……」
「あいよー、ココにいるわ」

シャロがどっかに消える、目が回ってるから、と言うか気持ち悪い

から何処かなんて分からない……
あー気持ち悪いー。そして未だに目が回るー……あれ？

「……」

よし、落ち着こう、結構深刻そうな状況だ

シャロは手洗いに行った、俺はココでアウト、じゃあ……

「他の客は何処に行った？」

見渡す限りのアトラクション、目を張るほどに様々なものが在る売店……でも人がいない
おかしい、売店には人が欠けることは無い、何時泥棒にあるか分からないし、店として成り立たない
それなのに店員一人も見当たらない、あれだけ人で埋め尽くされていたこの遊園地、何時の間にか誰もいない
何で気が付かなかったんだ？人が消えたら普通は気が付くはずなのに……目が回るからか？
そう考えると、おかしく幾つかちらほらと、ジェットコースターから降りて少ししてから目が回るなんて初めて聞いたぞ
……炭酸がいけなかったのか？そんな事は初めて聞くけどな……
それに、もし炭酸が原因なら危ないから何処かに書いてあるだろ、売店ならそれくらいは当然だと思う
……炭酸？炭酸って確か、シュワッとするから……薬が入っていても気づき難いんじゃなかったか？
もしコレに薬、あるいはそれに準じる効果を持つもの、まぁ混ぜるな危険的な物が入っていたら？……
つまりは狙われている……

「まぁ、狙われてるからって問題は無い」

妖幻も在るし弾は全て修復済み、エネルギーも飛んできただけで殆ど減ってないし、殆ど使わない
戦車だろうと戦闘機だろうと敵じゃない、シャロを連れ帰るまでに片手で対処出来る

「……シャロ遅いな」

そう言えば、入り口の店員がチラチラを見てきたのは俺が分かったからなのかな？
ひょっとして体を見てたのって妖幻を探してたのか？残念な事に妖幻は服の中だったからな、見えなかっただろうに
でもどうして俺だと分かったんだ？……インカムかきっと誰かからの連絡は俺の子とを知らせる為だったんだろうな、だから妖幻を探した

「……待て待て待て」

あの人は俺を見ていた、でも途中でシャロも見なかったか？
そしてココは遊園地、監視カメラは幾つでも在る、何処でもどんなときでも起動している、どんなときでも見る事が出来る
つまりは、誰かの監視も出来る、だからおれの居場所は分かってるだろう、だがもし……シャロの場所もわかってるとしたら？

「……これ不味くね？」

久しぶりに冷汗ダラダラですよ、滅茶苦茶ヤバイでしょこれ！

「と、とりあえず……探さないと」
「あら坊や、何処に行くの？」
「ちょっと友達をさ……アンタ誰だ？」

ついさっきまでは誰も居なかった場所、アトラクションが立ち並ぶ
その中心
何時の間にか居たのは黒人の女性、フランスに黒人は珍しいが、それよりもひときわ珍しいのが……

「その手のものはなんなんだ？」

その女性の右手、そこには青のリストバンド、そしてその中心には
光る宝石のようなものが見える
見た目は普通、普通なはずだ、普通の人が見たならば、に限るが

「ああ、これ？……まぁ、種明かしと同時に――」

そう言って女性が光に包まれる、何処かで見たような、慣れ親しんだ光

「――少し遊んで行かないかい！」

その光から、女性は飛び出してきた
ただし、その身は機械に包まれていた

遊園地には危険がいっぱいです（後書き）

さて、次回はシリアスだお！・・・・・・・・・・しまらねぇ・・・・・・

えと、はい、お待たせいたしますた！

えっとですね、言い訳としては・・・・・・・・・・え？言わなくて良い？

み、見捨てられたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！これはもう首に輪をつけるしかないな！

いや、しませんけども

えっとですね、ここんとこスランプってまして・・・・・・

その上でただ今テスト週間なんですよ・・・・・・

つまりは、全く書けないんＤＥＡＴＨ！本当に、マジで、ヤヴァイほどに

てな訳でして、見て下さっている方には悪いんですが・・・・・・

書くのが遅れます！

え？止めないのかって？ははは、やだなぁ、俺が書くのを止めるわけ無いじゃないですか

最近では緋弾のアリアも書きたいな～、とか思ってるんですから！

時間無いけど・・・書けたら良いな～

そうそう、最近暇なときにグリーの緋弾のアリアをやっています

名前は断耶なので、見かけたら仲間にでもなってくださいな（笑

さて、次回は
誘拐、戦闘、アイス、後は・・・・・・・ダークマター？
それじゃあ次回にまた会いましょう！

初めてのＩＳ戦闘・・・・と言っても良いのかな？（前書き）

テストオワタ・・・・ハハハハハハ

初めてのＩＳ戦闘・・・・と言っても良いのかな？

第三者視点

光から飛び出してきた女性は、直線的な行動だった
そして狙いは荒榎、動きは速いが、常人でも動けない事は無い距離
ましてや荒榎には妖幻と言うＩＳがあるのだ、避けられない事は無
い、やろうと思えば反撃も出来る

「っ！？危なっ！？」
「へぇ、避けるだけなのかい？」

反撃の場合、これに普通だったら、と付くのは仕方が無い事かもし
れない
荒榎にとって敵はほとんど全て、しかし武器は銃や飛行機、潜水艦、
コレだけでも大変ではあるが、その中にはＩＳがない
そして相手の武器は体の装備、何処を見てもＩＳにしか見えない
今まで戦った事の無い相手、千冬と荒榎自信しか持っていなかった力
使ってきた分強さは分かる、体が理解している、
でも戦うのは初めて、知ってる強さよりも強かったら？知ってる強
さよりも速かったら？
始めて見る世界自分たち以外のＩＳに恐怖が表れる

「妖幻全展開！コール焔顎！」

攻守どちらにも対応できる様に妖幻を起動、取り回しの楽な焔顎を
両手に持って標準を会わせる
ＩＳを持っているって事は何処かの国家からの攻撃と判断して良い

だろう
そして、ここはフランスの外れ、そんな所を見ている国は……

「……フランスか」
「おや、もう分かったのかい？流石に頭の回転が速いねぇ」

自国の事ならすぐに伝わるだろう、場所が何処であろうと、同じ国の中なら直ぐに動ける、そして証拠の隠滅も容易い
狙いはきっと俺の拉致監禁、もしくは殺害
どちらにしろシャロがあぶないのは確かだな、速く倒して探さないと……

「何処を見てるんだい？」
「っ！？」

少しの油断、ちょっと思考に入っただけ、それでも戦闘では許されない事
相手がプロならそれは大きな過ちに繋がるからだ、そして敵はプロだった

「食らいな！」
「ぐっ！？」

何時の間にか女性は荒榎の目の前で腕も引いており、気が付いたときには胸に鈍い衝撃
絶対防御により死ぬことは無いが、痛みは届く
ましてや、ＩＳ同士の戦闘は初めて、しかも小学二年で大人の力で叩かれる等と言うことは無かった荒榎には初めて知った強い痛み
幾ら前世で痛みを知ろうと、それから七年も経てば忘れてしまう
知らない痛みほど痛く感じるものは無い

「っ……」
「おや、強くやり過ぎたかい？」

この状況で初めての強い痛み、それはタイミングが悪すぎた
何時もの用に冷静に対処すれば倒せない敵じゃない
初めての戦闘、１５５２３５６５３４発のミサイルの群れを撃ち漏らし無しで落とす
コレに比べれば簡単な事、武器がＩＳになった代わりに個数も一に減ったのだ
一点突破で行けば問題無い、むしろ余裕だろう、それでこそ妖幻、それでこそ荒榎の専用機なのだから
ただ、今の荒榎には余裕が無い、空回りしているだろう所もあるたかがＩＳ、されどＩＳ、今の荒榎はＩＳを危険視し過ぎなのだ、だから……

「ほらほらほら！逃げないで攻撃してきなよ！製作者なんだからさ！」
「っ！……っ！」
「良く逃げるね、その手の銃は飾りなのかい？」

焔顎をコールしてながらも撃てない、撃った直後に攻められたら？
それが強かったら？
負の矛盾連鎖に捕われてゆく、幾ら強かろうと、幾ら頭が良かろうと、小学二年生
その体でさっきよりも強い力で殴られたりしたら、どれほどの痛みになろうか
逆に、女性が武器を未だ出していない事に喜ぶべき所だろう
たとえ、武器が未だ作成できてない等の理由でも、武器を使われないだけ痛みは低い

「ほらほらほら！」
「……」
そして、今回はそれが有利に事を運んだ
幾ら痛くても、痛みは一時的なもの、それに荒榎は力が無いだけで体は頑丈
普通の小学二年生よりもはダメージが少ない、と言っても普通の小学生では骨が折れるほどの強さだったのだ、荒榎だから痛いだけで済んだものの、それほどの威力だと流石に痛みが長かった
だが、それもココまで、痛みも引いてきて、頭も切り替える事が出来る、攻撃も今では当たらないで避ける事が出来る
だから、ここからは反撃の時間
「……あら？」
「それじゃあ、俺の痛みを味わって貰おうか？」
右手を引いて、荒榎の腹を殴ろうとしている女性、この瞬間に動く、左手の焔顎で右手を弾く
右手に持つ焔顎の銃口が女性の左肩に当て、即座に引き金を引き左手の焔顎で腹を打つ
「がはっ！？」
一体何が起きたのか理解出来ない様子の女性
それもその筈だ、普通の人なら痛みが怖くて避けるか逃げる所を、荒榎は反撃に出たのだ
しかも、反撃してこないから油断したこの瞬間を狙って、小学二年生の行動とは思えない
軍人なら出来るだろうが、荒榎は違うし、軍人に関係しているなん

て話しは聞いていない

「よし、久しぶりにやったな」

荒榎の行った事は感情操作、普通はこんなに速く出来ない
人格が改変できる荒榎の家系だからこそ、戦闘で使えるほどにすばやく出来る
色々と心配していた父、東間から教わった方法

荒榎視点

戦闘中に感情を変えることによって攻撃の仕方が読まれ難くなり、すばやく対処できるから
そう言って父さんは色々教えてくれた……殆ど使えなかったけどねどうしてかは知らない、家系の者は殆ど使えたそうだけど、使えなかった人もいたらしいから、俺もそうだと思う
まぁ、生きる分には問題無いから、気にしてない……貰った力があるしね
で、まぁ感情も操れるようになって何処に行きたいのかは分からないけど、まぁ落ち着いた

「痛かったかい？大丈夫？……まぁ、やったのは俺だけど」
「……坊や……なんでっ！」
「見ての通り……じゃないから分からないよな、まぁ色々あるん

だ」

流石焔顎、威力が半端無いな、腕に来る振動は結構あるけど
大人が2発で行動不能って……強過ぎたか？

「……フ、フフフ、アハハ、ハハハハハハ」
「狂った～」
「ハハハハハハ、いや、狂ってなど無いさ、むしろ坊やのほうが狂ってる」
「人を狂人呼ばわりか、酷い大人だ」
「なに、坊やが言い出した事なんだから酷くは無いさ」

確かに……
俺が言い出したからこの場合は俺が酷いのか？……まぁ、そう思っても仕方の無い事だ、うん、仕方ないってか、この人突っ込みしてくれないんだな……いや、そんな状況じゃないけど

「……さて、そろそろかな」
「早いなオイ……焔顎の威力もうちょっと上げようかな」
「それは勘弁して欲しいね、あたしだって限界なんだから、それに、そろそろの意味が違うよ」

そう言って、手を上に伸ばす、その先には……

「……それは不味いんじゃないか？」

えっと…ひぃのふぅのみぃの……16機かな？
え？何がかって？そりゃあ……爆雷機？
確かそんな名前だったかな？うん、爆弾落とす奴……

「これ……どうしろと？」
「さぁねぇ、どうせあたしは死ぬだろうしね……ほら、もう限界だよ」

纏ってたＩＳが消える……ああ、待機状態に戻ったんだ……え？
何で？ＩＳってもっと頑丈なはずだぞ？あら？ん？え？……ひょっとしてだけど……

「……まだ試作段階とか？」
「そうさ、まだ一機出来たばっかり、しかも経った今破壊だけどね」
「……」

ま、まぁ、自己責任って事で……うん、かかって来たそっちが悪いせめてちゃんと作ってからにしろよ、もう恐怖も無いけど、耐性みたいなのも出来たけど

「……ってかシャロは？」
「シャロ？誰の事だい？」
「……え？」
「私の役目は坊やを拘束、もしくは抹殺、その為に軍から来たんだよ、まさか小学生に負けるとは思わなかったけどね」

俺関係だけ？……つまりシャロは問題無い？

「まぁ、私は、だけどね、他の誰かが誘拐に来てるかもしれないよ？」
「・……さっさと捜さないと！」
「後五分もしたら爆弾が落ちるよ、ちゃんとＩＳ用に強くされてるから気を付けな」

シャロはＩＳ持ってないし！余計にヤバイじゃん！シャロ死ぬよ！？

「シャロが死んだらフランス滅ぼすからな！」

「あたしに言われても坊やの攻撃で動けないんだけど……出来ればやめて欲しいんだけどね

「そうならない事を祈ってろ！俺も祈る！」

「じゃあ問題無いね、だって……」

アンタは良い男だからね、そんな言葉を聞きながら飛ぶ、空高く飛ぶ良い男……何処がだ？そして何で問題無いんだ？……まぁ、そんな事は後で良い

上空、遊園地が見渡せる所まで上がり停止する、ココからなら見付けられる筈、ＩＳには視覚が無いんだから

映像は異端空間とインディゴ・シンフォニアの処理機能を使えばゴミだって見分けられる

問題は時間、後五分でアウト、今でももう連れ去られてるかもしれない……もしくはシャロも殺すのかもしれない

どっちにしろ捜さない訳にはいかないのが俺の性分……なんだけど

「広過ぎるだろ……」

ココから見るだけでも大きいのに、この中から人一人、しかも小学生を探すとか……コレなんて無理ゲー？

「制限時間は五分とか……鬼畜ゲーだろコレ」

幾ら処理能力があっても目は二つ、しかも近くについてるんだ……

最高でも四画面までしか見れないし

その上ズームして捜すとか……キツイだろ

「もっと効率的な方法……」

何か無いのか……一気に大量の場所が見れる方法……
いっその事全てが見れたら楽なんだけど……全て？

「……そうじゃんそうじゃんそうでしたぁぁぁぁ！インディゴ・シンフォニア接続！」

超高速処理能力により画面が妙にクリアに見える、これで画面内を一発で見れる
それにＩＳのハイパーセンサーで３６０度全てが見れるんだから、見えない所は無い！
ただ、やっぱり時間がかかる、幾ら見えると言っても見るのは俺の視力、両方２．０だけど……今は足りない
でも視力はどうにもならない、だから……

「……時間を取るしかないよな！」

インディゴ・シンフォニアのフル稼働による体感速度の高速化
やった事は無いけど、理論上では可能な事、ならば今使わないで何時使うんだよ！

「……いっだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？」

痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイ！何でなんで何でなんで何で！？
気の緩みで稼動率が落ちる……痛かった……

やっぱり人の脳じゃ限界があるんだろうな……使いにくい能力だなオイ！
どうせなら時を止める程度の能力とかその辺が欲しかったよ！無かった事にする程度でも可！
……あ、ミサイル落ちてきた……えぇぇぇぇぇぇぇ！？！？！？！？！？
未だ四分だよ！？そんなに変わらなかったよ！……不味いでしょ！

「……ああ、もう、うん、どうでも良いや！」

、もう一度フル稼働まで上げる、やっぱり痛い……でも動けない程じゃない！
頑張れば動ける！でもその前に捜す！……あ、居たって、トイレに居たァァァァァァ！？！？！？！？！？
さっきの近くじゃん！全く危なく無かったじゃん！……ああ、目が痛い
もう解除して良い・……訳無いね、もうミサイル落ちてきてるもんね、この状態じゃないと死ぬね

「シャロ！動くなよ？」

一気に急降下！止まる事は考えない！……考えてなかった！？
と、とにかくシャロを掴んで逃げる！……よし、掴んだ！

「あ、荒榎！？何処から来ｔ「口閉じてて！」」

今喋ると舌噛むぞ！……ミサイルの範囲って幾つだよ！……ああ頭が痛い！
ってか、女性置いたままだったし！……ついでだからな！

「おや坊や、さっさと逃げ「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ！」……やけにハイテンションだね」

ああそうだよ！良く分からないけどさっきから叫びっぱなしだよ！しかも気分が高揚してるよ！……副作用だと思う！感情すらまともに操作出来ないよ！……いかん、これは不味い、起動率を下げないと

「荒榎、上から爆弾が……」
「ああもう、飛ぶぞ、掴まれよ？」
「無駄だよ、アレ一つ一つの威力が高い上に、数が多いんだ、逃げても当たる」
「周りも巻きこむ気かよ……」

アイス屋とかあったのに……言い訳も考えてあるんだろうな……

「……ココもクズだな」

やっぱり国は汚い、別に俺が綺麗とか、粛清してやろうとかは思わない
どうでも良い、全くもってどうでも良い、俺に関係無い事ならどうぞどうぞ、ご自由にやってくださいな
でもまぁ、今回は俺が狙いな訳でして……どうでも良いとは言えないよな
しかもこれだけの戦力、今回で決める気が凄いね……まぁ、実際ピンチなんだけどね
いや、逃げ様と思えば簡単に逃げれるよ？その代わりにシャロとこの人危ないけど
滅茶苦茶スピード出せば問題無いんだけどね……何の保護を受けてない二人には

俺はＩＳの保護があるからね……いや、前回束さんにやったみたいに出来れば良いんだけどね……あと一人位しか入らないんだよねだからと言って、助けると言った二人のどちらかを置いて行く訳にも行かないし・・・……俺を抜いたら動かなくなるしうん、逃げるのは無理だね……そんじゃ、壊すか

「どうやって、が問題なんだよな……」

「さて、後十秒くらいだね」

「……荒榎」

摩來で撃滅……いや、破片が危ない
焔顎で……同じ
凍らせる？…やり方が分からない

「……けど、それしかないよな」

よし、凍らせるか……頑張れ俺！後通る所を五秒くらいだぞ！
右手を伸ばして……分からん

「……て、適当に念じとけ！凍れ！」

「……は？」

「……綺麗」

「……早くね！？」

念じて一秒も経たずに出来た！？あれ？俺が悩んでたのって一体何！？そしてデカ！？
……ってか、手っきり時間がかかると思ってミサイルが凍らせようとしたから……

――――――――――爆！！！！！

「……うわ～お」
「凄い音だねぇ」
「耳が痛いよ……」

うん、ミサイルが凍るじゃなくて、ミサイルと俺達の間に壁を作る、に変わっちゃったぜ！
凄い音が耳を……今度は耳が痛いし
ってか、前回は小さいのを作るのに五秒はかかったのに……俺もレベルアップしたんだな！……どちらかというと人外化だけどな
妖幻とかあ、もうテポドン並に危険になっちゃったよ……
おかしいな、俺は身が守れれば良かったんだけど……・やり過ぎたな！

初めてのＩＳ戦闘・・・・と言っても良いのかな？（後書き）

シリアスなんてぶち壊せ！それが今回のテーマです
うん、なんか微妙に感じてきたな・・・・・・
ま、まぁ、うん・・・・・・・・うん
ちょっと今回は荒榎がヘタレに見えてきたな・・・・
さて、今日やっとテストが終わりました！
つまりは！これからの！投稿が！早く！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なるといいね！
いや、書けるか分からないんですよね、前回書いたようにスパルタ？じゃないスプラッタ・・・・じゃなくてスランプ！そうだスランプになってるんです！
今は書けない・・・・までではいかなくても書くのが遅いんですよねだから・・・・あんまり早くならないかと思います
それでも見て下さるという方、ありがとうございます
疲れたから見るのを止める方、お見苦しいものを今までありがとうございました
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これじゃあ終わりじゃん！

いや、何でこんな事を書こうかと思ったかと言うと・・・・最近見てくださる方が減っています、もしレベルが下がっていて、つまらないと感じた方は、どしどし苦情を言ってくださいな、うん、それが言いたかったんだよ

つまり、苦情尾でもどしどし下さい
怒らないよ？本当だよ？

後片付けって必要だよね（前書き）

・・・・・・・・・出来た、だと・・・・・・・・・

後片付けって必要だよね

さて、我輩はマナッカ・アーラカ、一般人でありながらも実は……

「荒榎荒榎。コレからどうするの？」

「・・……うん、せめて現実逃避だけはやらせて欲しいな」

「……？」

「ぼうや達は状況を理解しているのかい？」

いや、うん、どうも真中荒榎です……いや、当たり前だけど

うん、ミサイル防いだは良いんだけどさ……この後考えてなかった

さて、どうしよう……とりあえず

「あんたどうするよ？」

「あたしかい？そうだねぇ、軍にはもう戻れないだろうしねぇ」

「戻りたいなら話はつけるけど……人間関係は知らん」

「軍？なんの話し？」

「シャロには未だ早いから、うん」

ブ～、っと膨れるシャロ……見てて微笑ましいな

ってか、軍……軍人だって言ってたよな？

「その割には若そうだな……」

「あたしは未だ１７だからね」

「軍人若いな！？」

１７で軍人！？しかもＩＳ操縦者！？……エリートだな

もしくは親のコネ……には見えないし強かったけど

ってか、フランスで褐色系って……親は何処の人だ？

「まぁ、ＩＳの為だけに軍に入れられたからね、元は孤児さ」

「孤児まで使ってくるのかよ……」

この国ウザイ、ってか本当にクズじゃん

人情は無いのか！俺は無い！……駄目じゃん

そっか、孤児か……褐色って理由で捨てたとかじゃないよな？

「だから、軍に帰っても居場所は無いのさ、孤児院はもう戻れないしね、人数が多過ぎる」

「もう行き場所なくね？」

「そうさ、それだけの覚悟はあったよ、上手く監禁できたら一生遊んで暮らせる金があったんだ」

「……ちなみにもう片方は？」

シャロが居るから直接は言いませんよ？流石に小学二年生に殺しなんて聞かせられないしね

いや、この時点で大人の黒さはもう分かってると思うけど……く、国とはばれてないよね？

「……ああ、そっちだと生活には問題無いくらいだね」

「どっちにしろ生活は保証されてたってことじゃん」

「そうなんだけどね、お金は多いほうが良いんだよ、孤児院にもまわせるし」

「ふ～ん、じゃあとりあえず……どうするよ」

「どうしようかねぇ……坊やについていくのも良いかもね、どうせ戻っても殺されそうだしね」

おい１７歳、ずいぶん達観してるな、ってか学校行ってないのか？

……行ってないだろうな、軍に居たって言ったし
……俺何考えてるんだろうな……良い人過ぎ…じゃないけど、逆に非道だと思うけど何でだろうね……まぁ、正直なんでも良いや、なんとなくで

「よし、とりあえず家に来い、んで学校でも行って来い」
「……は？」
「大丈夫だろ、そんだけ日本語が話せれば問題無いし」
「え、あ、え？」
「そうだ、タバラカの国籍作るか、そうすれば殺されないと思うし」
「え、ちょっと……」
「金は問題無い、俺が出す、よし、問題は無いな、ついでに孤児院にも寄付するか、場所は何処だ？」
「え、あの……」
「そうだな、ついでにその子達の将来も考えて里親にでもなっておくか、万単位の子供を援助すれば大丈夫だろ」
「……」
「でもこの場合足長おじさんだな、まぁそれで良いや、どうせ変わりないし」
「……」
「さて、新しい名前も要るな、流石に同姓同名の姿が同じ、何てのは不味いからな」
「……」
「新しい名前か……思いつかないな、何が良い？」
「……」
「黙られると何も分からんのだけど？」
「……何でそこまでしてくれるんだい？」

うん、正しい反応だね、皆そう言うと思うよ
でもさぁ、なんでか知らないけど連れて帰ろう、なんて思っちゃっ

たわけですよ……難儀な性格だね～
なんでなんだろうな……なんとなく？よし連れて帰るか、みたいなノリで、だから返事は一言

「さぁ？」
「さ、さぁって……」

いや、だってさ？
特に何も考えてないよ？どちらかというと面倒になったら放り捨てるよ？
いや、鬼畜とか言わないでよ、一応殺されかけたんだから
だから助けるのは同情でも色目とかでも何でも無く、只の気まぐれですよ
べ、別に褐色系が好きとか、そんな訳じゃないんだから！……ごめんなさい好きです
昔から漫画は褐色系のキャラが気に入ってました、まさかココまでとは思わなかった
いや、漫画の中で見るから可愛いとか、第三者視点だから可愛いとか考えてたんですよ？
現実……と言っても小説の中だけど、滅茶苦茶良い！いや、別に恋愛感情とは違いますよ？
どちらかというと……萌え？前世では可愛いな～程度だったけど、生で見ると萌え～みたいな？
ん～、俺の感性はずれてるのかな、メイドにはなんとも思わないし、ニーソックス？だから何？ガーターベルト？必要性は？うん、こんな感じです

「……ずれてるのかなぁ～」
「間違い無く坊やの考え方はずれてるよ」
「……マジか」

「マジだろうね、普通はあたしなんか助けないよ」

あ、そっちね、ビックリした……てっきりお前はおかしいって言われたかと思ったよ

まぁ、今の世の中簡単にメイド服が手に入るしニーソックスはコスプレ用品になるし、ガーターベルトはエロスだと語られるし

うん、この世の中がおかしいんだろうな……あれ？じゃあその中の俺は？

「何が目的だい？まさか体！？最近の小学生は進んでるね……」

「いや、絶対ありえないから、ってか小学生をなんだと思ってるんだよ」

「え？孤児院には小学生で付き合ってる子もいるよ？最近は胸を触るようになったって嬉しそうに報告してきてねぇ」

「お前の孤児院は一体何だ！？」

「孤児院は孤児院だよ、最近では流行ってるんだよ？大人の関係」

「孤児院は何に進化したんだよ！」

「ん～……ソフレ？」

「よし、潰そう」

「流石に冗談だよ、あたし達には未だ早いさ、体的にも精神的にもね」

冗談怖いなオイ……まぁ、うん、冗談だったら問題無いよなってか、小学二年生だぞ？そんな感情があるとでも？ナンパじゃないんだから、ありえないっての

「で、理由は？」

「いや、適当に……あえて言うなら暇つぶし？」

「ひ、暇つぶし……それだけの理由であたしや孤児院は助かるのかい」

「ん、そゆこと、俺の気まぐれ」
「……気まぐれ、か」
「さて、お前の前には二つの道が……正確には沢山あるけど、一つは俺の手を取り家に来る、二つは軍に戻って働いてなんとか頑張る……残りは適当に埋めておいて」
「……まともな道が一つだけじゃないか」
「そうおもうならそれを選べ、道は考える数だけあるからな」
「……孤児院も助けてくれるんだね？」
「適当にな」
「本当の意味の適当だと信じていいかい？」
「……お好きにどうぞ～」
「それじゃあ道は一つだ、よろしく頼むよ」
「代わりに命が狙われても俺のせいじゃないからな」
「……」
「てを途中で止めるなよ、ちゃんと握手」
「……もうちょっと考えても？」
「残念ながらもう答えは聞いたので無理～」
「……あんたは鬼だね」
「鬼畜と言った方が近いと思うぞ」
「自分で言ったらお終いだよ、所でこの子はどうするんだい？」

可愛く頬っぺたを膨らませたシャロの事かな？
……もうちょっとこのままじゃ駄目？
なんだろう、ちょっと涙目が可愛いと思ったり……
でもまぁ、うん、コレ以上は……駄目なのかな？

「それじゃシャロ、帰ろうか」
「……荒榎のバカ」
「青春青春、これぞ小学生だね」
「普通は中学生くらいからだと思うぞ？」

「だから言ったんだ！マナカ・アラカをそんな簡単に倒せる訳が無いと！」
「なっ！？貴様だってさっきまで勝利は目前、なんて言ってたではないか！」
「わ、私は逃げるぞ！未だ死にたくない！」
「待て！一人だけ逃げる気か！」
「元はと言えばお前が言い出したのではないか！」
「う、うるさい！私は未だ死にたくないのだ！」

ごちゃごちゃと五月蝿い会場……と言っても、小部屋だけどねそこにむさ苦しいデブっとした男が五人ほど集まって騒いでますよえ？二人は何処に言ったかだって？一端シャロの家に行って置いてきたよ
流石にこんな気持ち悪いものは見せられないからね……見てて吐き気がするわ
同じ人間とは思えない……ってか人じゃないよね？

「大体、小学生に負けるあの餓鬼が行けないのだ！孤児なんぞを使ったのが原因だ！」
「そ、そうだ！何処の誰かも分からない、薄汚い餓鬼にやらせたから失敗したのだ！」

「なっ、孤児でやれと言ったのは貴様だろ！金がかからないからと孤児を適当に取ってきて訓練をさせろと言っただろうが！」
「じゃあ訓練がいけなかったのだ！もっと厳しくやれ！」
「あれいじょうやったら壊れていた！第一アレも五個目だったのだ！」
「孤児など捨てるほどいるのだ！壊れても構わん！さっさと作りなおせ！薬付けでもなんでも言いから早く作れ！その間私は隠れる！」
「一人だけ逃げる気か！」
「わ、私も逃げる！」
「わ、私だって！」

わ～お、アレ扱い＋替えはいくらでもいる……ってかサイテーなんですけどー
今時のギャルはこんな喋り方らしいね、見たこと無いけど……ずれたな
さて、このゴミどうすれば良いんだ？壊すか？潰すか？面倒だから消す……のは無理、流石に殺しは出来ないし
うん、無理無理……だけどやりたいな……でもなぁいや、
とりあえず……殴るか？力が弱くても体全体を使えば結構な力に……なるとは聞いたけど出来ないな
うん、とりあえずは捕まえてフランスにでも渡して、ついでに負い目を感じさせておこう

「ってな訳で突入しに来ましたー」
「だ、誰だ君は！」
「あんたらに殺されかけた人」
「……っ！？真中荒榎！？」
「大正解、正解のご褒美に……」
「ゆ、許してくれるのか！」
「私、私を助けてくれ！」

「黙れ！私が助かるんだ！」
「貴様！言い出しておいてそれか！」
「うるさい！」

……帰って良いかな？
いや、もうヤダし、こいつ等とか喋りたくないし……その前に捕まえるし
どうやって捕まえよう……凍らせて良いかな？死ぬか？腕と足を凍らせれば問題無いか？

「……よし、そうしよう」

ってな訳で、まずは足を固定、続いてを固定……あ、外れた
あれ？何でだ？上手く合わないな……まぁずれた

「……あああああああああああああ！！！！！！」
「あしが！足がぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ひぃっ！？助けてくれるんじゃなかったのか！」
「この化け物が！」
「貴様なんて居なければ良いのだ！」

お～、　怯えたのが三人に反抗が二人、二人面白いな、見てて面白い言ってる事が化け物、居なければ良い……

「……で？」
「……っ、さ、さっさと消えろ！」
「死んでしまえ！貴様など誰も悲しまん！」
「……だから？」

いや、だから何？化け物？どうぞ言ってくださいな、もともと子の

世界の住人じゃないし
この世界からしたら化け物でも合ってるし？そもそもチート的な能力だから化け物で正しいと思うし
居なくなれば良い？いや、そんな事言われてもね、どうでも良いし、知らないおじさんに消えろって言われたら消えるの？
俺は消えないよ？ってか誰に言われても消えないよ？他人は他人、どうでも良い
知り合いだったら……ちょっとショックくらい？そこまでしか着いて来られないだったら仕方ないことなんじゃない？
まあ、俺の周りにはそんな事を言う人は居ない、恵まれた状況なんだけど

「化け物、居なければ良い、死んでしまえ、消えろ……他は？もうお終い？」
「……ば、化け物」
「いや、それはさっき言ったじゃん、他は無いの？」
「た、助けてくれ……」
「今度は見逃せ？……罵倒はもう無いの？久しぶりに聞いたんだけど」
「ひ、ひぃっ！？」
「何で怖がるんだよ、何もしてないよ？動いても居ないのに……小学生に怖がるとか」
「……っ、た、た、たたたた助けて」
「言えてないじゃん、言葉はチャンｔ発音しましょうね、と」

あ、黙っちゃったよ……ツマラナイナ
で、この後はどうしよう……政府まで連れてく？触りたくないから却下
放置？……何時の間にか逃げそうだから却下

「……誰か呼ぶか」
「その必要はありません」
「……ありゃ？」

何時の間にか後ろに男性……あと下の音からして軍か何かが来てたみたいだね
えっと……誰？

「申し送れました、私はフランスの大統領、ルガリエ・フォングラーゼと申します、マナカ・アラカ様とお見受けしました」
「あ、はい、そうっすが」
「この度は我が国が貴方様にご迷惑をおかけいたしまして、心からお詫び申し上げます」
「……」
「しかし、今回の事件が国の意思で無かった事をご理解頂けないでしょうか、この五名、による独断なのです」
「……」
「……申し開きはいたしません、どうぞ好きなようにしていただいて結構です」
「……」
「……」

えと、国の大統領……ルなんとかが頭下げてますよ、俺が喋らなかっただけで……
あれ？俺ってそんなに凄いの？今ではＩＳのコアが世界中にあるんだから、そこまで重要じゃないような……作り方か
まぁ、作れるのは俺と束さん……作る気があるのはゼロだけどね、俺？作りませんよ面倒だし、第一作ったって何処に渡すんだよって話になるしね

「……とりあえず」
「はい……」
「あの五人はそっちで管理して、殺さずに、あと遊園地は直す、住民にも謝っておいて」
「……」
「俺の知りあいには絶対手を出させるな、次は知らん」
「まことに申し訳ありませんでした」
「あと……あ、そうだそうだ、俺を襲ってきた女性・・…といっても17歳の孤児なんだけど俺が引き取るから」
「……はい」
「えっと……そんなもんかな、後は貸しで」
「……分かりました」
「そんじゃ、そろそろ戻らないと心配……してると良いな」
「この度の失態、何時か必ずや返させてもらいます」
「ういうい、あ～そうそう、この五人の足なんだけど、凍らせちゃってるけど大丈夫？」
「問題無いかと、大佐、さっさと連れて行け」
「はっ！」

おお、やっぱり軍なのか？スネークみたいな人とか居ないかな～ってか、この五人って何処の人？いや国じゃなくて職業と言いますかおお？五人の前に一人ずつ立ってるよ……銃持ってるけど殺さないよね？

「国際防衛大臣、エルトガ・ワグリス、世界重要人殺害未遂で逮捕する」
「防衛省、ワルトゥモ・エガールズ、世界重要人殺害未遂で逮捕する」
「同じく、ドルギノ・エグリアス、世界重要人殺害未遂及び無申請無許可によるミサイル製造で逮捕する」

「同じく……」

……殆ど国を守る人じゃん、何やってるんだよ
そんな事に金をかけるならミサイルをどうにかして欲しかったよ、
ついでにミサイル作るなよ
ミサイルなんて直ぐに作れないから……戦争でもする気だったんだろうね

「さて、疲れたから帰る」
「この度は本当に申し訳ありませんでした、それと民を救っていただきありがとうございます」
「へいへい、そんじゃ、お疲れ～」

さっさと帰ろう……・シャロの家だけどね
さて、女性の名前を考えないとな、何時までも女性は駄目だし……
父さんと母さんが許可くれると良いな……

後片付けって必要だよね（後書き）

さて即効で質問！
フランスって防衛省とか国際防衛大臣？とかっているんですかね？
そして言い方は同じなんですかね？・・・・・・・・いや、書いて分からなくなっちゃいまして

さて、それはともかく・・・・・・・・・・・書けたね
久しぶりに沢山書いたから内容がやや不安だけど・・・・・・・・・・・・早めに書けたね
いやはや、まさかテストがなくなるだけでこんなに早く書けるとは・・・・
いや、うん、テンションだろうね
ついノリで敵まで仲間にしちゃったしね☆ごめんなさい
いや、うん、ぶっちゃけます、見切り発車です！見切り発車ＤＥＡＴＨ☆・・・・・・・・・俺が死ぬね、主にレトアとかレトアとか束さんとか束さんとか束さんとかに早く出せって言われながら殴られて・・・・・・

さて、うん、これ以上ハーレム増やして良いのか？
そんな人数で大丈夫か？
一番良い人数を教えてくれ
・・・・・・・・・・・・・・俺もそうとう病んでるね
今回は外人の名前が沢山思いついたよ！これぞまさに厨ニ病だね！
蛙だ～って、鯨だ～って、アメンボだ～って～、皆皆～、厨二でいるんだ妄想生きるんだ～・・・・・・・・・・・・・・・はぁ

さて、この流れで大体分かってると思うけど・・・え？分からない？
全くもう、駄目じゃないか作者、もっと分かりやすくまとめなさい

な・・・・・・・・・俺だけど

まぁ、アンケートと言うことですよ内容?女性の名前に決まってるじゃにぃか

いや、まぁぶっちゃけ?女性の名前を考えると、あの微熱さんになるんですよ、はい

胸が大きくてサラマンダーが使い魔のあの方です・・・・・・・・・

おかしいな、俺のキャラ設定では全然違うのに・・・・・・・・・

え?体系?

ん~・・・・・微熱＞女性＞虚無、みたいな?

んで肌の色は微熱、髪は・・・・・虚無をちょっと薄くした感じで

体格はメイド、目の色は黄土色・・・・・あれ?ほとんどがゼロで出来てるよ?

おかしいな、一度も読んだ事が無いのに・・・・・・・・・・・・・・・

はっ!ついには妄想で現実を知る事が出来るようになったのか!・・・・・・・・・・・・ないわー

ええ、まぁ、はい、そんな感じです、それでは次回、ばっはっは~い

もう古いな

さて・・・・・・三回目（前書き）

ちょっと・・・・・・うん

さて・・・・・三回目

「……で、どうするよ」
「荒榎、話しが繋がってないよ」
「というより、戻ってきて第一声がどうする、って言われても……なんの事だい？」

うん、俺の話しは適当なんだよ……じゃなくて

「いや、今だ名前不明の女性Ａの名前」
「女性Ａ……あたしの事かい？」
「いや、他に居るのか？名前不明の女性」
「はいはーい、私はもう女性だよ？」
「シャロは名前不明じゃないでしょうが……」
「……あ」
「ってな訳で、早速名前を決めないと……なんて呼べば良いのか分からないし」
「……ルーミア？」
「そうなのかー……却下だろ」

ってか、何でシャロがルーミア知ってるし！あれってこっちにもあるの！？
と言いつつも、思いつくのがキュルケの俺には言える事じゃないけどね！見た目似てるし！髪の毛は虚無だけど！
……なんだろう、某作られた猫耳の神のイラストみたいな？まじしゃんずであかでみーな学校のイラストが実体化するとこんな感じじゃないか？
いや、見た目はまさに微熱なんだけどね……微熱７６％虚無１５％まじしゃんずであかでみー９％みたいな感じですはい

でも背丈はメイドだね、あの色々と危ないメイド、虚無と喧嘩が多いメイド……だったよな？もう覚えてないけど
あれだね、今更ながら言い難いね！色々と混じった感じだから余計に言い難いね！

「……名前」
「名前ね……」
「あたしの名前ねぇ……って、あたしの名前変えないといけないのかい？」
「え？そりゃ狙われるし？」
「……ああ、うん、関わったらそうなるんだったね」
「そゆこと……思いつかねぇ」
「わかんないね……」
「あたしの名前ねぇ……」
「なんかもう適当で良くね？」
「よくないよ！？」
「坊やが言い始めてそれかい！？」

いや、だってさ、ねぇ？……なんで連れてきたんだったかも忘れたし……なんでだっけ？
ああ、なんか気分だったような……気まぐれだっけ？……なんだろうどうでも良くなってきたな……
ってか、自分を殺しかけた人を助ける俺って何？……うん、ただのバカだね
某正義の味方を志す無限の剣の人的な感覚は持ち合わせてない……はずなんだけどなぁ
……俺狂ってる？いやいやいや、この程度で狂ってるなんて言ったら……ねぇ？思いつかないけど
どちらかというと歪んでるだね……いや、歪んでるのは当然だと思うよ？だって俺だし

いや、そんな感じと言うか……なんだろう、心を切り替えた感じに近かったな……俺は変えてないぞ？
なんだろう……思い当たるのが一つあるわ……まさかだけどね、うん、ありえないよな！神様が変えたとか無いよな！

『大正解～、それじゃあ一端こっちに来ようか！』
「……あ、あははははは……はぁ」
「……荒榎？」
「坊やどうしたんだい？いきなり笑い出して……」

うん、まただね……

「……増殖した？」
「してないよ？元から居た存在だね」
「ってかよぉ、なんで押し倒さねぇんだよ」
「うん、知らない人に初めて言われた言葉がそれかよ……」

三度目の……どこだっけ？天国？
目の前には三人……三神の神様？それとも三柱の神様？まぁどっちでも良いんだけどね

その中の一人は初めて見る人……初めて見る神だった

「そんなことはどっちでも良いんだよ、なんで押し倒さねぇんだよって聞いてんだよ」

「なんか…神様にも色々いるんだな……」

「で、何でだって聞いてんだけど」

この神様面倒だなヲイ、何で押し倒さないのかしか聞いてこないし……押し倒す？誰を？

シャロ？いやいや、それはロリコンだよ、束さん？いやいや、立ち位置逆だよ、千冬さん？死ぬよ？レトア？色々と大変な事になるよ？

さて……この状態で誰を押し倒すんだ？俺に死ねと？

「しんだって本望だろうが、滅茶苦茶良いゾーンの女子に囲まれて死ぬんだぞ？コレ以上良い事があるか？」

「あるだろ！？普通に生きようよ！」

「女子なしの人生とか……なんのために生きるんだよ！」

「楽しみ捜せと言いたいよ！」

「楽しみが女子を抱く事だろうが！」

「えぇぇぇぇぇ！？！？」

「他に何があるんだよ！」

「いや、ゲームとかあるだろ！？」

「ギャルゲーなんて抱けねぇじゃねぇか！」

「抱くのは決定事項なの！？」

「当たりめぇだ！それ以外に何が・・…ムガッ！？」

「……神様弱いな」

え？何が起きたかって？神様（三号）が神様（二号）に潰されたんだよ

いや、本当に潰したんだよ、何処からともなく大きなハンマー取り

出して……

「いい加減に止まったら？話が進まないし」
「て、てめぇ……」
「あ、生きてた……神様固いな」

ハンマーの下から這いずり出てきたよ……さも普通に立ったし
神様って固いんだな……さっきは弱かったのに……神様って不思議だな

「ちっ、まぁ良い、それよりもこっちだ」
「……え？俺？」
「てめぇ以外に誰が居んだよ」
「……」

隣に神様（一号）がいらっしゃるんですが……神様可哀想

「分かってくれるのは君だけじゃ……」
「うん、辛いよね、この仕事辛いよね、でも頑張って」
「あ、ああ……お二人とも、何でこちらに来たのでしょうか？」
「ああ、そこからなんだ……」
「え？私はこの子に会うため？」
「俺はコイツに引きずられて見てたこのガキに聞きたかっただけだ」
「それなら、こちらでなくても……」
「「面倒」」
「……」

神様負けた……うん、この戦いは無理があったね

「で、ガキはなんで押し倒さねぇんだよ」

「……えっと、誰をでしょうか？」

今思ったらこの人も神様だったね、滅茶苦茶突っ込んでたけど……

怒られない？

「そんな事は気にすんな、それよりもあの女だ」

「読まれてる……そして指差す先には名前を考えていた女性がいたー」

「折角くっ付けてやったのによぉ……もったいねぇ」

「いや、年齢考えてよ……」

「あ？年齢がいけねぇのか？だったら同じにしてやるよ」

「いやいやいや、それは不味いでしょ、俺がいきなり大きくなったら母さんと父さんが気づくし」

「……じゃああの女だな」

「ヲイ、替えなくて良いから、ってか止めてください」

「……」

「振りじゃないからね！？その『分かってるよ』みたいな顔は止めてね！？」

「それじゃあ折角くっ付けた意味がねぇじゃねぇか！」

「何が理由でくっ付けたの！？」

「そりゃあ、なぁ？」

「いや、分からない、それじゃあ全く分からない」

ってか、くっ付けた？……くっ付けた！？

え？何？じゃああのときの心の変化は……

「おう、俺がやった」

「……マジですか」

「当たりめぇだ、褐色なんてレアを見逃すお前がおかしいんだよ」

「褐色なだけでレア扱い……」

うん、これじゃああれだね、何でそんなことしたんだよ！とか、人の心を勝手に操るなよ！とかの主人公的台詞が言えないよねってか、俺って時点で言えないね！普通に改変してるしね！……うん、なんだろう、この能力が今鬱陶しい……

「いいじゃねぇか、褐色だぜ？お前が好きだったタイプなんだからよぉ」

「勝手に人のプライバシーを言わないで！……って、何で二人も分かってるような目をして見るの！？」

「そりゃあ知ってるし」

「人生を見たからの」

「……」

あ、あはは、そうだよね、神様だもんね、時間軸とか気にしないで人生が見れるんだもんね……

ヤヴァイ、何この恥ずかしさ……うん、親に得ろ本を見られるとこんな感じなんじゃないかな……お、俺は持ってないからな！

「持ってないのかよ……やろうか？」

「いらないです！まだ小学生ですからね！？」

「ん～、でも精神が大人に近いんだから、持ってても良いと思うよ？」

「そのフォローはいらない……」

「頑張って生きとくれ……」

神様（一号）貴方だけが味方です……

「え～、私は？」

「いや、色々と無茶苦茶にしたのに？」

「俺は違うのか？褐色やったぞ？」
「褐色だからって要るって言うと思うなよ！？」
「が、頑張るのじゃ……」

うん、俺頑張るよ！……頑張るよ……頑張、る？
多分、おそらく、　メイビー、可能性事件……は違うな

「それで、あの褐色の女性はどうしろと？」
「ん～、実を言うとね、あの子は存在していない子なんだよ」
「……はい？」
「いや、あの子は世界には実在しないはずの子なんだけどね、なんの因果か生まれて、しかもここまで育っちゃったんだ」

あれ？何か重い話になってません？存在しない子？世界に存在しない子？……はい？

「えっとね、人は生まれる瞬間に世界が認識するんだよ、そしてその人が世界に関わる様に未来が変わるんだ」
「ん？人を作るのは世界じゃなかったの？」
「世界だよ、人を創るのは世界、でも元を創るのは人間なんだ」
「……分からん」
「人って言うのはね、世界がその生命を認識めた瞬間に人になるんだ、認識するまでは人じゃない存在、それが魂だね」
「……魂の進化ー」
「うん、そんな感じだね、強い存在の近くに居たり、強い存在に認識されるとその存在は強くなるんだ、それで魂から人に進化する」
「で、あの女は生まれる瞬間に世界が認識しなかったって訳だ、そのころは色々あってな、世界の管理が停中だった、と言っても人にとっちゃあ０，０００００１秒にも満たない時間だがな」
「その時間に生まれたわけ？……なんか凄い貴重だな」

「いや、貴重だがなりたくはねぇ存在だ、世界から認識されねぇから人になるのも時間がかかって、その間にどんどん弱体化していった」
「生まれた時は凄く弱っててね、だから捨てられちゃったんだよ、まぁそのおかげで人の多い孤児院で過ごせたんだけどね、孤児院の多くの人に認識されて、少しだけど力になったわけだし」
「……」
「まぁ、それでも軍に入れられちまって、人からの認識が弱まったおかげで壊れやすくなり、さっさと戦いに連れて行ったわけだがな」
「……俺との戦いに？」
「うん、あの為にあの子は軍に入れられた、扱いも酷かったけど、なにより認識が弱くなって弱体化した」
「で、マジでヤバくなってきたから、さっさとお前に合わせようって話しが会議で出てな」
「神様の間で？」
「ああ、と言ってもあれだ、一部だけの会議だ」
「え、ああ、そうなんだ……って、なんで俺？」
「君は転生して、世界に溶け込んで、その上で流れの主格にまで上ったんだ、存在としては世界の次くらいに強いんだよ」
「……何時の間にだよ」
「何時、と聞かれると……生まれた瞬間だね」
「それどうしようもないじゃん……」
「ま、諦めろ、とりあえずお前に害は無い、お前が一緒にいればあの女も強くなるしな……まぁ、奴隷でも良いから傍に置いとけ」
「いや、奴隷の方が不味いでしょ……まぁ、傍に置くだけなら」
「よし、んじゃお前はアイツを手放すな」
「……ちなみに、何時まで？」
「知るか、あいつが強くなるまでだ」
「ざっと……２０年くらい居れば問題は無いよ」
「その２０年は長過ぎると思うんだけど……はぁ」

「が、頑張るのじゃ、ワシにはそれしか言えん」

うん、俺頑張るよ！言ってる事全然理解できなかったけど！……うん、分からん
よし、まとめよう
世界が認識すると、魂が人になる
それは強い存在から認識される事で進化するから
前に一瞬世界の認識が止まった時間があって、そのときに彼女は生まれた
んで、認識されなかったから弱くて、だから捨てられて孤児院に
孤児院の多くの人から認識されて、少しだけど力になった
軍に連れて行かれて認識低下……で、まずいと思った神様によって俺に会う
俺が認識する事で存在が進化……してるのか？まぁ、そんな感じらしいな
……結局世界からの認識は無し？

「ああ、そうじゃないんだよ、君と一緒に居ると流れに入るでしょ？流れに入ったら世界が認識するから大丈夫」

……その為に２０年かかる、とんで、俺は存在が世界の次に強い……なんでやねんいや、まぁそれは良いんだけど……２０年か……

「もう変えられないんだけどな」
「……へ？」
「お前はさっき傍に置くだけならと了承した、仮にも神の存在との約束だからな、破棄は出来ねぇぞ」
「ま、神との約束を破ったなんてことになったら大変だからね」
「……コレって脅し？」

「が、頑張るのじゃ……」

うん、神様も声が小さくなってきたよ……

「まぁ、２０年待てば良いだけだし……」

「いっその事抱いちゃえよ」

「嫌だよ！」

「俺の巫女が嫌だってのか！」

「いや、そう言う事じゃなくて……巫女？」

「……あ」

「馬鹿、やっちゃったね」

「……終わりじゃ」

えっと……巫女？つまりは神を祭る人……え？

あの褐色が？巫女？……巫女？

「ん～、これは説明しちゃった方が良いのかな？」

「……仕方ねぇ」

「すいません、なんか怖いんで聞きたくないです」

「あいつは俺を祭ってた一族の末裔なんだよ」

「うわ、言っちゃったよ」

「てめぇが言えって言っただろうが！」

「私は説明しちゃった方が良いのかな？って言っただけだよ」

「……チッ」

……うん、神の言い争いって怖いね……なんだろう、波動たいのがバンバンぶつかってるんだもん

……コレって重要な事なんだよね？だからこんなに怖いんだよね？別にコレが当たり前とかじゃないよね……違うよね？

「……おっと、結界張ってなかったね……もう要らないけど」
「もっと早めに気づいて欲しかった……」

結界でも魔法でも五封陣でも何でも良いから助けて欲しかった……
うん

「まぁまぁ、良い情報が手に入ったんだから、ね？」
「……良い情報？」
「……良い情報なんじゃない？」
「「……」」
「……なんでこっち見るんだよ」
「いや……」
「何でも無いよ」

あれだけ凄かったんだから……良い情報なんだよね？

さて・・・・・三回目（後書き）

あれだ、ちょっとはっちゃけた感が・・・・・・ね？
いいあ、でもまぁ、全体の構造は前から考えてたんですよ？本当だよ？

うん、荒榎がちょっと壊れたかな？・・・・・・こんな荒榎で大丈夫か？
前にも言った気がするから却下だな・・・・・

さて、うん、新しい神様・・・・ごめんなさい！
で、でもさ！神様なんだからさ！こんな感じもいたって良いじゃないか！・・・・・良いよね？

世界の作り方？・・・・気にしないでね！・・・・いや、ちょっと気にして欲しいけど
人の創り方とかは・・・・うん、かってな考え、もとい妄想です、
現実ではありえないのであしからず

色々とあったんだよ、色々とね・・・・・・（前書き）

今回は短めだったり

色々とあったんだよ、色々とね・・・・・・

「……何故注目？」
「いや、聞いたんだから注目もするさ」
「うんうん、どうしたの？」

聞いた……聞いた？何を？
……ああ、そうだった、向こうに行く前に俺が急に笑ってビックリして、どうしたのか聞いてきたんだったそうだったそうだった、向こうの出来事が濃過ぎて思い出せなかった……

「いや、何でも無い……名前か」
「……良いの無いかな」
「あたしもさ、自分の名前を考えるなんてやった事無いからね」

だよね～、ってか自分の名前を考えた事がある人って訳あり、もしくは厨ニ病の人だと思うよ
……お、俺は無いからね！……無いからね？

「……巫女か」
「巫女？……荒榎は巫女さんが好きなの？」
「こりゃまた、大人びた趣味だねぇ……」
「いや違うから……」
「じゃあなんでこのタイミングで言ったのさ」
「……」
「……荒榎？」

神様に教えてもらったんだよ……何て言えないよね～……はぁ
うん、ついつい口に出した俺が悪いのは分かってるよ、分かってる
けどさ？……どうしよう

「……なんとなく？」
「なんとなくって……あれ？」
「どうしたの？」
「……いや、何でも無い」
「……？」

なんだ？まさか巫女の言葉に反応……は無理だな、自分が巫女って
事を知らないだろうし
生まれて直ぐに捨てられたんだったら……知らないよね？

「で、名前だよ名前……アルスマグナなんて格好良いよな」

どうせならネタで……うん、ゴメンやめるから睨まないで
いや、怖くは無いけどさ……なんだろう、Sに目覚めそう……え？
もう遅い？
いやいやいや、まだSじゃないですよ？名前もちゃんと考えてあげ
ますよ？
……なんとかティスって格好良いよね……よし、ティス
だな……短いような……あと何か足そう……シェルティス？……
微妙……シャルティス？……シャロと被るな……
でもまぁ、うん……さっきから神様（三号）の声が煩いし！なんだ
よ『シャルティスにしろ』って！シャルティスには重要な暗号でも
あるのかよ！……ってお前の趣味かよ！

「よし、面倒だからシャルティスね」
「何があったんだい！？」

「いや、面倒だから、うん」
「でも荒榎、ファミリーネームが無いよ？」
「……」
「考えてなかったんだね……」

正直要りますか？ファミリーネーム……要るな！結構必要だわ！
ん～、思いつかないね、名前が思いつかなかったのにファミリーネームが思いつくとか無いしね……
……よし、こんな時こそアレだ！

「……何をやってるんだい？」
「見れば分かるだろ？ＩＳ使ってネット」
「その使い方は可笑しいよ……」
「良いんだよ、使い方は無限大なんだから……あったあった」
「……名前変えったー？」

あ、シャロこれも読めるんだ……いや、普通読めないと思うんだけどな
皆が知ってるツウィッターの出番だよ！

「そそ、これで決めよう」
「……あたしの名前を？」
「そう」
「これで？」
「そう……もとの名前は名無しで良いか」
「荒榎、良くないと思うよ」
「その前に何で機械？」
「もう面倒だからさ……メロディアーナ＝シャルティス？」
「……被ったね」
「……もういいや、メロディアーナ＝シャルティスに決定だ、うん、

そうしよう、わざわざ名前をしぇウティスにしなくても良いじゃん」
「……」
「いや、うん、ごめんなさい……で、でも良い名前じゃないかな！」
「荒榎、格好悪い」
「ゲブハッ！？」
「その言い方は初めて聞いたよ……」
「で、コレで良い？」
「回復早いね……コレで良いよ、どうせ名前なんて何でも良いんだから」
「……まぁ、そう言うなら良いんだけど」
「……私考えてない」
「それは今度で……とりあえず、俺はそろそろ帰るわ、こいつ……メロディアーナも親に紹介と行けないし」
「荒榎……帰るの？（ウルウル」
「……か、帰ります」
「帰っちゃうの？（ウルウル」
「……帰る、うん、帰らないとね！」
「荒榎、本当に帰っちゃ……」
「サヨナラー！」

コレ以上は駄目！帰りにくくなるから駄目！ってか今ですら引け目が……とにかく妖幻の全展開でメロディアーナを掴んで飛翔

「ねぇ、ひょっとしてだけどさ」
「ん？」
「あたしの名前、メロディアーナがファミリーネームじゃないかい？」
「……」
「……案外抜けてるんだね」
「……さて、音速の壁でも超えるか」

「あたしを殺す気かい！？」
「大丈夫！ちょっとは保護に回すから三半規管が暫らく変になるだけだ！」
「回る気かい！？って、ちゃんと保護してくれないのかい！？」
「……行くぞ！」
「ちょっと待って！？」

待たん！一気に加速！一直線ならこの程度のスピードは出るのさ！
……あ、本当に音速出たわｗｗｗ
音の壁を破ったぜ……シャルティスが死んでるけどね！仕方ないからもうちょっと保護を回すか……

「さて、二日ぶり？の我が家だ……大丈夫か？」
「死を覚悟したよ……」

あれから……一時間？分からないけどそれくらいかな？経って家に着きました、はい
まずはと思ってシャルティスを降ろしたらダウン……はい退場！なんてことにはならないけど、うん、ちょっとやり過ぎたかな～、何て思ったり思わなかったり

いや、コレくらいなら耐えられると思ってたんだよ、実際ＩＳ使ってたわけだし？……使わせれば良かった……と思ったけど動かないんだったね

「さて、さっさと入って新しい家族的な存在に……面倒だから家賊で」

「動違うのかが分からないよ……よし、もう良いよ」

「まぁ、分からないネタだしね……ただいま～」

「あら荒榎？お帰りなさい、シャルロットちゃんはどうだった？」

「荒榎？帰ってきたんだね、お帰り……その子は誰だい？」

「あら、荒榎が誘拐なんて非行に走っちゃったわ、どうしましょう」

「母さん分かっててていってるでしょ……この人はメロディアーナ＝シャルティス……に改名した、国の所為で住む所が無くなったから……飼っても良い？」

「その扱いはあんまりじゃないかい！？」

「ええ、良いわよ、ちゃんとご飯もあげるのよ？」

「この家族は大丈夫なのかい！？」

「あはは、冗談だよ、えっと……メロディアーナちゃん？」

「あ、はい、シャルティス＝メロディアーナ……になりました」

「そっか、よろしく、僕は……一応大黒柱の真中東間です、こっちが妻の香織、そっちが荒榎……は知ってるよね」

「ええ、まぁ……殺す対象でしたからね」

「……」

「東間さん、そんなに睨んだら怖がっても当然ですよ」

「え？ああ、うん、そうだね」

「……ここの家族はどうなってるんだい」

「え？父がスパイの母が総理の秘書で息子が俺だけど何か？」

「……あははは……はは」

うん、乾いた笑いしか出てこないね……俺もおかしいとは思うけどさ

「フランスはこんな家族に喧嘩売ってたのかい……」
「自分で言うのもなんだが国一つなら余裕で潰せるからな」

ついでに束さんとか千冬さんとかレトアと居たら……世界くらいなら出来そうな気がしてきたな……俺無しでも出来そうだけど

「さて、それで荒榎、この子は家で暮らすのかな？それとも荒榎が連れて行くのかな？」
「え？何処に連れて行くの？」
「え？旅立ったりしないの？」
「「……」」
「あらあら、束間さんも先を進み過ぎたようですね」
「この家族は一体なんなんだい……」

色々とあったんだよ、色々とね・・・・・・（後書き）

さて、うん、前に書いていた作品、というかまだ書いていた作品
つまりは始めの作品を凍結しますた、うん、書けなかった
あの頃はまだ若くてね・・・・いや、まだ若いんだけどね
おかげで読み直すとこの作品よりも酷かった・・・・・・はい、もう駄目ですね
見たいな感じで打ち切りました・・・・・・でも諦めない！というか諦められない！
この作品を考えていたら何時の間にかもう一つの作品の原作で別話を考えていたという落ちです・・・・・書いてたよ
うん、心残りがあるんでしょうね、やっぱり書きたいんだな・・・・・
実際、あの作品は自分の欲望をむき出しの感じで書きましたけど楽しかったですからね
いや、この作品も楽しいんですよ？
でもやっぱり終わってる話で考えるのとは違うでしょ？違いますよね？
その差なんですよ、だから俺はあれを書いたんですよ
うん、何が言いたかったんだろうね・・・・・、ああそうだ
俺はあれなんです、別の作品が頭に思いつくとそれを書かないと他のが書けないんですよね・・・・・・・・・・・つまり？
この作品の投稿がより微妙に・・・・・ごめんなさい
うん、俺が悪いんだよ、なんか久しぶりにマンガを読んだら書きたくなったんだよ！・・・・・・・・・・駄目だね、うん
でもあれですよ、この作品は手を抜きませんよ？ちょっと思い付かなくなってきてますけどね！うん！最近ネタが無い・・・・・・
あ、そうそう、皆さんはＲＩＧＨＴ×ＬＩＧＨＴを知ってますか？

俺は大好きです
うん、大好きなんだ、だから最新刊が出たときにクライマックス的なことが書かれてて、怖くて買えなかったんですけどね、最近かって読みましたよ
滅茶苦茶楽しかったです、そして滅茶苦茶うれしかったです、後書きにこれで一編が終わり、的な事が書いてあり続ける気が見られたんですよ！まだまだ続く！これだけでご飯・・・・は無理だけど妄想１３回はいけますよ！（笑
面白い作品なんで良かったら読んでみてくださいな
感想をつけて送ってね（笑

色々と大変な町だと改めて理解したよ・・・・・・（前書き）

た ☆ ぎ ☆ す ☆ り ☆ や

色々と大変な町だと改めて理解したよ・・・・・・

「えっと……なんで俺が旅立つの？」
「え？いやだって、前に旅立つとか言って直ぐに帰ってきたから今度こそ行くのかなって」
「……そんなこともあったんだった」

うん、そりゃあそう思うよ、間違い無い、間違っても無い、うん、俺が悪い……のか？
ってかコレは誰も悪くないよな、うん、悪くない

「いや、暫らくは旅立たないつもりだから」
「あ、そうなんだ」
「じゃあ家族でのんびり出来るわね、増えたんだし家族旅行をもう一度行きましょうか」
「旅行か……今度は温泉なんてどうかな？」
「あ、それ良い、温泉行ってみたい」
「……え？」

唖然とするメロディアーナ、うん、その反応は可笑しくない、でもこの家では通用しない
まぁ、お祝いと言う事で、温泉ってのも良いと思うんだけど……

「メロディアーナは良いよな？」
「え、あ、はぁ……」
「メロディアーナちゃん、ちゃんと意見は言っていいからね？もう家族なんだから」
「しかも荒榎が連れてきたんだからね」

「父さん、それはどういう意味？」
「レトアちゃんとか束ちゃんとか、沢山居るのにまだ増やすんだから、それなりの覚悟はあるんだよね？」
「……え？」

え？ちょっと待って、何の話し？一体何を言ってるの？……へ？
レトア、束さん……許婚と近くの天才、これとメロディアーナが関係あるの？

「……何も考えずに連れてきたんだね」
「え、ちゃんと考えて連れてきたよ？」

主に生活の場所とか資金とか孤児院とか国とか権力とか
頑張って全部クリアしたよ？ちゃんと考えてるじゃん……

「……多分荒榎の行ってる事と僕の言ってる事は違うと思うよ」
「え？そうなの？何の話し？」
「……うん、何でも無いよ、皆大変だなと思ってね」

あー、確かに大変だな、束さんとか周りが五月蝿いだろうし、レトアはもう就職したような状態だし
俺はメロディアーナを連れてきてしまったからには面倒を見ないといけないし……自分で首をしめたね
いや、でも正確には神様の所為だ！……なんて言えないけどね！簡単に俺が消えるから

「……本当に分かってないんだね」
「……？」
「東間さん、メロディアーナちゃんのお部屋を用意しないと、後家具もですよ」

「ああ、そうだね……部屋は荒榎の目の前で良いよね、家具は……荒榎と買ってきてもらおうかな」
「何で俺!?」
「荒榎、男は口に出したらちゃんと責任を持つんだよ、ちゃんと面倒見なさい」
「……仕方ない、買いに行くぞ」
「なんだかペットの扱いに思えてきたよ……」

「さて、家具と言っても……何がいるんだ?」
「……さぁ?」
「さぁ?って……お前のだぞ?」
「あたしは特に必要なものは無いからね、服も洗濯すれば一着で足りるし、遊ぶ暇も無かったし」
「……今時ソレは駄目だろ」
「だって軍だからね、孤児で拾った物にそこまでしてくれないよ」
「……よし、買おう、適当に全部買おう」
「ぜ、全部?一体何を買うつもりだい?」
「服と……何がいるんだ?」
「あたしに聞かれてもね……」

困ったな、何がいるかなんて……俺男だから知らないし
女って何がいるんだ?服は絶対だけど……・・・・・誰か詳しい人居ないかな
レトア……は聞いたら危ない気がする
束さん……嫌な予感しかしない

シャロ……さっき別れたばっかりだし
箒ちゃん……アリだな、うん、問題無いだろう、口を閉じてもらえば問題無い
……よし、そうと決まれば電話をしよう！

「……あ、もしもし篠ノ乃箒ちゃんは『やぁあっ君！箒ちゃんに用事なのかな？かな？束さんで良かったら２４時間何時でも会いに行けるよ！』……間違えました」
『あっ君？あっ君！あっく――』
「……何で束さんが出たんだ？」
「いや、あたしに聞かれてもね、知らないよ」
「……束さんが電話に出るなんて……」
「知らない人だけど扱い方が凄いね……」
「……よし、もう分かる限りで回るか！」
「坊やは友達が少ないんだね……」

す、少なくないし！ちゃんといるし！ざっと５００人くらい居るもんね！……全員大人だけど
うん、友達じゃないね！……同い年は箒ちゃん位か？……一夏は違うだろうな、覚えられてないし
アイツの記憶力は可笑しいな、きっと女子以外は全然覚えないんだろう……友達居るよな？

「よし、先ずは服だな……あそこから見るか」

ちょうど近くにあった服屋に入る

「いらっしゃいませ、本日はどのような服をお探しですか？」
「え、あ……こいつに似合うような服を、金はそこそこの物で１０着ほど」

「そ、そんなに買うのかい？」
「畏まりました、ではこちらに」
「……怖いな」

あー、怖かった、うん、怖かった
え？今のやり取りの何処が怖いかって？……人数だよ
入った途端に６人ほどが集まりましたよ、いらっしゃいませと言いながらもメロディアーナをじっくりと隅から隅まで観察してその上で俺に話し掛けた……何この凄さ、俺のほうが財布だって即座に見抜いたよ、さすが服屋……なのか？
ソレともメロディアーナが美人だからか？……どっちにしろ集まり過ぎだろ
そして台詞を言う人が全員違うとか……もうチームワークとかの範囲じゃないよね

「お客様どうぞこちらに、衣装をそろえてあります」
「え、あ、はぁ……え？」
「どうぞこちらに」

そう言って連れてかれる……んだけど、俺って必要か？別にメロディアーナが気に入ったならそれで良いと思うんだけどいや、見たくないんじゃないけどさ……

「……見に来るとは思わなかったよ」
「いや……連れてこられた」
「……もうちょっと自己主張はハッキリしなよ」
「い、良いんだよそんな事……その服買うのか？」
「え、いや、コレは……似合わないだろ？」
「……良いんじゃない？」

メロディアーナの服は白い……良く分からないけど綺麗な模様の服に黒いミニスカート
まぁ、悪くは無いと思うし、ドチラかと言うと可愛いと思う、小悪魔系だな
髪の毛にも結構似合ってると思うし……アリじゃないか？

「で、でも……恥ずかしいというか／／／」
「……」

オイ17歳、その急なギャップは止めなさい
一体それで何人捕まる事やら……12くらいはいきそうだな、え？
俺？……
さて、服はまだまだあるんだ、ドンドン見ていかないとな

黒いワンピース

「……どうかな／／／」
「い、良いんじゃないか？」

カジュアルなジーンズと白い袖なし

「これは気に入ってるんだ」
「まぁまぁだな」

メイド服

「……どう？」
「……い、良いんじゃ……ない？」

拘束衣

「……これは？」

「……無しで」

マント

「……どう？」

「……作品帰れ」

制服（某隣人部

「これなら」

「帰れ、作った人呼べ！」

カソック

「オルゴールがついてるんだってさ」

「模倣しないからな！」

ドレス（某腹ペコ王

「……えっと、ご飯は」

「カンペ読みながらネタに走るな！」

赤い服に黒いミニスカ（某赤い悪魔

「……なんで読むんだい？」

「えっと……サーヴァントな」

猫耳

「……にゃあ？」

「……何やってんだよ」

……いや、駄目だろこの店

何でメイド服！いや、それならまだ良いと思うよ？何で拘束衣！しかもサーニャ！

マントとかゼロの時代に帰れ！腹ペコ国に帰れ！赤い悪魔はリアルでありそうだから止めて！

宝石剣とかで来れそうだから！危ないから……この店なんだよ

品揃えが変だよ……いや、普通の服が多いけどさ、何で店の裏からはそんな物しか出てこないんだよ！

「……ジーンズとワンピース、ついでにミニスカは決定だな」

「「「「「「え～」」」」」」

「あんた等ガチオタだろ！」

「「「「「「勿論です！」」」」」」

「……この店もう来ない！」

「メイド服……」

まさかのそこ！？ソレが着たいの！？……いや、うん、それが趣味なら止めはしないよ、ただ黙って受け入れるけど

うん、別に女子でもメイド服が好きなのは可笑しくないよ、うん

「……その優しい目は止めてくれないかい？」

「……大丈夫、それも買ってやるから」
「え、あ、そうじゃなくて！」
「じゃなくて？」
「う……あ…／／／／／／」
「よし、買うか」
「……／／／／／／／／」

さて、これで服は問題無いな、後は家具と……美容品とかいるのか？

色々と大変な町だと改めて理解したよ・・・・・・（後書き）

どうも、作者の断耶改め小説家見習い・・・・・には変えませんよ、
ええ
でも最近頑張って応募してみよかなと思って書いている毎日・・・・
まぁ、そんなことはどうでも良いですね

さて、はい、今回はちょっとやり過ぎたかもしれません
荒榎が今まで以上に唐変朴・・・・・うん、ちょっとミスったかな？
で、でもまぁ、うん、メロディアーナが可愛いから良いんだよ！
そして重要なことを忘れていました！霧氷黄泉路様、メロディアー
ナの名前をありがとうございます！
いやぁ、感想の返信で書いたときに思い出しまして・・・・・いけ
ませんね、はい
すいませんでした！そしてありがとうございます！
メロディアーナかぁいいよ！・・・・俺も重症だな
でも可愛いと思うよ！ついでに赤い悪魔とかも可愛いよ！・・・一
応言うと出てきませんからね！？
一夏の町を魔窟としてしまった俺がいる・・・・・・・

そして言おう！この作品は普段にはよく分からない状態、つまりは
あまり纏まってない状態があるんです！それが今回の旅立ち！・・・
・ごめんなさい、忘れてたんじゃないんです、ただ家のことを放置
していたんです
え？メロディアーナの服？私の趣味全開ですが何か！問題は無いで
すよね！
可愛いは正義なんだから！

では、次回も・・・・・・再来！（何故中国かは言わないでね！

あ、もし書き途中の作品を読みたい方は・・・・・と言うか個人的に読んでいただきたい方はひょっとしたらメッセージで送るかもしれません、嫌であれば言ってくださいな・・・・・べ、別に読んで欲しいわけじゃ（ｒｙ

女子は色々と・・・・・・いや、これは神が悪い（前書き）

たれきっふ

女子は色々と・・・・・いや、これは神が悪い

「さて……家具って何がいるんだ？」
「……あたしに聞かれてもね」

服は買った、ついでにからかった、十分に満足した
次は家具なんだけど……女子の家具って何がいるんだ？
俺の部屋には箪笥と机とベッドと……ああ、本棚が3個ある
同じで良いのか？いや、でも女子だからな……化粧机とかもいるんだろうな
あと箪笥は2個かな……いや三個？女子は服が多いらしいし……経験無くて悪かったな！
前世では彼女なんていなかったよ！どちらかというとリア充爆死しろ！とか言ってたよ！
よし、落ち着け、落ち着くんだ、別にそんなことは関係無いんだ、ただメロディアーナが服をどれくらい買うかが問題なんだ
まだ見せは一つしか周って無いんだ……なんだろう、嫌な予感しかしない
主に服の種類とか服の種類とか店員の反応とか……うん、この町だしな
天才とか異世界人的な俺とか戦闘のプロとか主人公とかヒロインその一とか元スパイとかもと総理秘書とか……うん、元軍人も加わったな
これを混沌と呼ばずに何を混沌と呼ぶんだろうな・・・・這い寄る混沌くらいしか思いつかないな
ってか、あれって猫耳……気にしない方向で行こう、うん、寒気がしたとかじゃないんだからね！

「さて……とりあえず思いつくのを買ってみるか」

「お金は大丈夫……だろうね」
「問題無い、この後足長おじさんになってくるし」

そう言えば、手続きって子供でも出来るのか？……まぁ良いや、出来なかったらタバラカからやれば良いし
さて、先ずは箪笥、机、ベット、本だな……くらいで良いよな

「よし、箪笥だな」
「箪笥……直ぐ横だね」
「なん、だと……」

まさかの目の前だと……まぁいっか、動かなくて済んだし
さて、箪笥……ってか正直家具は何でも良いと思う、俺が選ぶ必要が無いし

「面倒だし……コレで良いか？」
「え、まぁ、別に何でも良いよ、孤児院では共同だったし軍では仕舞う物が無かったからね」
「……よし、やっぱり周ろう」

どうせなら楽しみながらの方が良いよな、初めてなんだし……

「よし、沢山入るコレにしよう」
「え、それなら向こうの方が「甘い！」……何がだい？」
「向こうのは横に広すぎる、アレでは隙間に入らないだろ！」
「……そこまで分からないよ」
「ソレに比べこっちは凹みの所に丁度良くはまるんだ！」
「そ、そうなのかい？」
「そうなんだよ、そうすれば部屋が広く取れるんだ、そっちの方が良いし、二つ買うんだから大きすぎると困る」

「テンション高いね……二つも良いのかい？」
「大丈夫だ、問題無い」
「失敗フラグの気がするけど……ありがとうね」
「え、いや、まぁ、うん、どういたしまして」

なんだろう、面と向かって言われると、ちょっと恥ずかしいな、うん
ちょ、そこ！ツンデレ乙とか言うな！俺はツンデレじゃない！違う
ったら違う！
ただ暇だからテンション上げてみただけなんだ！いつもは出来ない
からちょっとやってみたかっただけなんだ！

「さて、次は……机だな」
「戻ったね……」
「何の事かね……よし、机は好きなので」
「場所とかは？」
「何処でも置けるから考えなくて良い」
「えっと、じゃあ……」

そう言って沢山ある机を見まわすメロディアーナ……ってか何でこ
んなに机があるんだよと言いたい
箪笥はあんまり無かったのに机は……５０くらいあるよね？可笑し
いよね？どうなってるんだよこの店

「……あ」

メロディアーナの眼の先には……それはそれは可愛らしい黒色の机
……
うん、良いんじゃないかな、少女趣味でもヲタク趣味でも……どこ
で知ったのかは知らないけど

「……あれ、買うか」
「え、や、違うよ！」
「じゃあ早く決めようか」
「……えっと」

うん、ちらちら目線が黒に向かうんだよね……別に良いと思うけどまぁ、恥ずかしいなら手助けしますか

「はい時間切れ、面倒だからあの黒いのね」
「……し、しょうがないね」
「はいはい、それじゃあ後はベットだな」
「あ、そうだね……ベット」

ベットは流石に便利性で選ぶよな……うん
大丈夫だよな？……大丈夫と言えない俺がいるけど

「さて……ベットは向こうだな」
「……やっぱりこの建物大きいね」
「だよな、俺も思った」

可笑しいんだって、逆の壁が見えないんだよ、と言うか中心に立っても壁が見えないんだよ
どうなってるんだよこの建物……スーパーじゃないよ？ちゃんとした家具店だよ？

「ってか、まさかメロディアーナに少女趣味があるとは」
「ち、違うんだよ！アレはたまたま、孤児院の妹が見てたから……」
「気になって見たら気に入ったと、そして少女漫画を読んだり？」
「……似合わないと笑えば良いさ」
「別に、笑う気は無いけど」

「……え？」
「個人の勝手だし」
いや、だって趣味なんて個人の勝手だろ？それが他人に弊害が無ければ問題無いだろ
俺だって機械弄りだぞ？小学生とは思えないんだぞ？まだ１７で少女趣味の方が可笑しくないって
うん、外見は妖艶と言った方がまだ近いかもしれないけどさ……男が寄ってきそうだよな
どうしよう、コレは何か対策を考えるべきなのか？流石に神様から預かった巫女を狼共の餌食にするのはいかんでしょ
それに家で過ごす訳で、変なのが家まで来たら大変だし、下手すると外交問題に……なるかもしれないね
外交問題と言えば、まだメロディアーナの国籍作ってないじゃん！
はやく束さんに言って許可を取らないとね、流石に勝手に作ったら怒るだろうし……多分
それはまぁ、帰ってからで良し、その前に考えるのは変な虫が付かない様にする事だな……ＩＳでも持たせるか？
いや、それはそれで狙われそうだけど……千冬さんに頼む？いやいや、あの人の時間をつぶしたら大変なことになるだろ、主に一夏とか一夏とか一夏とかで
束さん……は無理だね、あの人は団体行動が苦手だし、そもそも興味が無い人を助ける訳が無い……
やっぱり護衛手段を考えないとな……某体は子供、頭脳は大人の名探偵が飲まされた薬とかがあれば年齢が同じになるんだけど……
『その薬があれば良いんだな？』
「おおう、まさかの覗かれていたパターン……ってか何時まで見てるんだよ」
「ん？どうかしたかい？」

「いや、ベットは何を基準に選ぼうかなと思ってさ」

あ、あはは……他のものに気を取られてて助かったな……
ってか、今の声は神様（三号）だよな？巫女が心配でまだ見てたのか？……ちょっとまて
さっき結構危ない台詞を言ってなかったか？俺が言った台詞と合わせると大変な事になりそうなんだが

『……ほれ、これを水で呑ませろ』
「……何時の間にか手の中に丸薬が」

この神様本当に持ってきたよ……飲ませるのか？　いやいやいや、いきなり若くなったら大変だろ……

『大丈夫だ、人の認識なんざ簡単に変えられる、そんな事より巫女が襲われたら……ドウナルカワカッテルヨナ？』
「……サー！イェッサー！」
「……本当に大丈夫かい？」
「え、ああ、問題無い、俺の命が危ないだけだ」
「それは大問題じゃないのかい！？」

大丈夫だ、問題無い……失敗フラグ乙！……立てたの俺じゃんか！やっちまったね！これは不味いね！もうこれは年齢を弄るしかないよな！主に俺の安全の為に！

「よし、ちょっとコレ飲んでくれ」
「これって……薬？」
「そうそう、気持ち良くなる最高の薬だよ」
「それはそれで危ないんじゃないかい！？」
「大丈夫だ、問題無い……ほれ」

「え、あ、うん……」
「ほれ一気！一気！一気！一気！」
「わ、分かったから……ンッ」
薬をゴクンッっと飲むと……あれ？
「特に何も起きないじゃん……」
「……一体何を飲ませのよ」
「いや、ちょっと変わった……え？」
「ちょっと変わった、何よ？」
「え、あ、うん、ちょっと、まって……」
よし、落ち着こう、目の前に居るのはメロディアーナ、語尾が大体『だい？』ってついてたメロディアーナ
うん、今のKと場をリプレイしよう
『……一体何を飲ませたのよ』
……うん、喋り方が変わったね！どうなってるんだろうね！外見じゃなくて中身を若くしたのかな！……使えねえぇぇぇぇぇぇ！！！！
どうするんだよこれ！いや、違和感とかは無いから良いんだけどさ！大きさだよ！大きさが問題なんだよ！言い変えると年齢！
これじゃあ解決してないよ！
「……荒榎、ちょっとお手洗いに……」
「え、あ、ああ……あっち」
「ありがと……ちゃんと待っててよ？」
そう言いつつ駆けてくメロディアーナ……どうしろってんだよ

女子は色々と・・・・・いや、これは神が悪い（後書き）

やっちまったぜ！メロたんのロリっ子化！・・・げふんげふん、年合わせ化！・・・うん、遅かったね・・・
い、良いじゃないか！だって考えたらメロディアーナの出番が無いじゃんかですよ！
学校に入ったらどうしろと！？あれですか、教員化ですか、すいません、考えてなかったです！
いや、今思いついたんですよね・・・次話投稿の画面で後書きを書いている今、うん、遅い！
これ以上投稿が遅くなると・・・読者が、ね？反乱を起こして・・・
俺がフルぼっこにあいそうなので・・・すんません
さて、服はやった、家具も・・・一応やった？
女子の家具って何が必要なんでしょうね？考えても分からないんですよね・・・

これはアンケートの出番だな！今使わずに何時使う！今までも使ってきたけどね！

メロディアーナの家具、一体何が欲しいですか？ついでに言うとこの後はどんな話が読みたいですか？ほらほら、ぶっちゃけちゃってくださいよ・・・・・・え？そろそろ原作に入れ？・・・・・・・・すんません
い、いや、でもまだやりたいことが・・・・・色々と追加したからいけないんだね、うん

まぁ、それはおいておいて
ここからはちょっと閑話を挿みたいな～なんて思ったり思わなかっ

たり
メロディアーナの生活品から束さんまで！・・・・・束さんだしてねぇぇぇぇぇ！
そしてレトアとシャロもださないと！・・・・・・俺死んだ？
あ、綺麗な川だなぁ・・・あ、違った俺の皮だったよ、アハハ、
あははは、あはははははははは・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・ぎゃぁぁぁぁぁぁ！

『ってな訳でアンケートは今後どんな話が良いか、ですよ
そこんとこよろしくです！家具でも良いよ！というか家具もお願いします！　　ｂｙ荒榎』

ギャグパートとはまさにこれのこと！

「さて……どうしよう」

一体何が起きたのかは知らないが……知らないが！何かがあってメロディアーナの精神が……ちょっと若返ったのかな？
良く分からないが……良く分からないが！何かの所為で喋り方が変わった、まるで、同い年のような……いや、元からそんなに年は変わってなかったけど、うん
喋り方が普通に成った……だと言い方が酷いのかな？まぁ、詳しいことは（ｒｙ
さて……いい加減現実を見るか、俺が神様に貰った飴を（ｒｙ
そう、コレが問題なんだよな……面倒だから色々と飛ばしたけど……前回を見れば問題無し！うん、大丈夫だ問題無い……失敗フラグだよね
さて……帰ってこないね、うん

「このままだと他の家具を見る時間が無くなるぞ？」

さて、どうする？どうする？俺！……人生カードが欲しいな・・・・・
とりあえず、呼びに……トイレに？……止めよう、うん

「まぁ……待つか」

やる事は無いし、出来る事……も無いな、つまり暇

「お～、本当にあっ君がいたお！」
「……暇だなぁ」
「目が合ったよね！？あっ君のいぢわる！」
「その言い方だと何処か卑猥に感じるから止めて！」
いじわる、じゃなくていぢわる、うん、やっぱり感じる……さってと
「あ～、メロディアーナ帰ってこないな～」
「あっ君？女の子とお買い物なのかな？かな？」
「その目は怖いから！」
……うん、とりあえず無視しようと思って言った言葉がいけなかったね！
そして反応はそこ！？無視にじゃないの！？
「で？その雌狐は何処のどいつなの？」
「いや、雌狐って……それが、トイレから戻ってこないんですよ」
「ふむふむ、分かったお！」
「何が！？」
「それはきっとあっ君を騙すのが悲しくなってきたから帰ったんだよ！」
「いや、俺騙されてないし……」
「だからあっ君！一緒に遊ぼう♪」
それが言いたかっただけでしょ……いや、流石に帰ったとかは無いと思うし……無いよな？
「荒榎」
「ん？ああ、帰ってき……へ？」
「おお～、褐色幼女だね」

……へ？
ん？え？ちょ？は？……んん？

「えと……メロディアー……ナ？」
「どうかした？」
「褐色幼女……萌えだねあっ君！」

アンタは黙ってなさい！今大事な所なんだから！
えー、はい、目の前にはメロディアーナ……と思われる同い年くらいの幼女……じゃなくて少女！
束さんの所為で幼女って言ったじゃんか！……まぁ、代わりに落ち着いたけど

「何があった？」
「何って……変かしら？」
「え、いや、何でも無いなら良いんだ……うん」
「？変なの」
「あっ君！まさか同い年が好きなの！？」
「いやいやいや、どんな繋がりですか」
「言ってくれれば束さんだって同い年に生まれたのに……」
「なんというズレた思考能力」

同じ年に生まれるって……生まれる時間を選ぶのは無理でしょ……
いや、でも束さんだし
束さんが同い年……うん、余計に疲れてる俺が見えた
ってか、神様（三号）一体何をくれてるんだよ……いや、ノリで飲ませた俺も俺だけどさ
本当に……どうしようかな、母さんにも連絡しないといけないのかな？

せめて神様的な感じで記憶改竄……いや、それはそれで嫌だけど……どうしようもないじゃん
まぁ、せめて記憶改竄の方が……少しは良いかな？……ってか、メロディアーナも疑問に思ってないって事は、俺以外にはこれが普通になってるんじゃないか？

「で、この幼女がメロディアーナちゃんかい？」
「……あ、うん、そうですよ」

一瞬前のメロディアーナの喋り方と似てたからビックリしたよ……ジロジロと幼女……になってしまったメロディアーナを眺める束さん

「……どちらさまですか？」
「失礼だね、束さんは束さんだよ、束さんが束さんじゃなかったら一体誰だと言うのかね」
「え、いや、分からないから聞いたんですけど……」

ですよね～、うん、分からないから聞いたらこの答え……さすが束さんとしか言いようがないね
ってか、初対面の相手にこれかよ……やっぱり束さんだからで片付くのが怖いところだけど

「ん～……はっ！まさかあっ君を殺そうとする敵！？」
「え、いや……確かに襲ったけど」
「襲った……つまりあっ君を性的に」
「違うわ！んな訳あるか！」
「え……」

この人一体何を言い出すんですか！？ってか俺未だ小学二年生！そしてメロディアーナも今は小学生……くらい！

ほら、メロディアーナも引いてるし……

「一回殺されかけたんですよ、何処かのアホな軍が試作品として使ったんですよ」

「荒榎、合ってるけどその言い方は嫌」

「ふむふむ……とりあえず殺そうか」

「何で!?」

どんな繋がりでそうなった!?

「だってあっ君を殺そうとしたんでしょ?……せめて壊そうよ」

「壊す!?壊されるの私!?」

「いやいやいや、もう済んだ事だし、色々と理由があったからであって」

「じゃあ潰す」

「何を!?私の何が潰れるの!?」

「だから駄目だ言うとるでしょうが!」

「イタッ!?あっ君が殴った!」

「いや、殴った張本人に言っても」

「むぅ、つまりあっ君は一体どうして欲しいのかな?かな?」

「つまりタバラカの住人にして欲しいです!」

「採用!」

「あるぇ〜!?」

冗談……じゃないけどふざけて言ったのに!?

いや、まさかこんなに簡単だとは……不気味だな

「代わりに束さんの言う事一回聞いてね♪」

「な　ん　だ　と」

「荒榎、それはネタだよ」

「いや、分かってるけどさ……ちなみに内容は？」
「んっふっふ、なんだろうね♪」

分からないだと……えー、なんか怖いんですけど
でも、メロディアーナの国籍を作らないと……今無国籍だし

「……条件を飲みましょう」
「わっかました～♪ほいほいほい、ちょっとゴメンね、はいチーズ
……はい、これで幼女ちゃんもタバラカ国民だお！」
「荒榎、そこまで重い事じゃないよね」

重い事だよ！少なくとも俺にとってはね！
束さんの命令か……無茶じゃないと良いな、少なくとも国を
滅ぼせとかじゃないよね？

「それじゃああっ君！アソボット！」
「うわ、懐かしいテレビだな……その前にメロ……幼女の家具を買
わないといけないんで」
「荒榎？いま幼女って言いなおしたよね？何で？何で？」
「そっか～、それじゃあ幼女ちゃんの家具を買ってから遊ぼう♪」
「あ、それなら問題無いです」
「あの、何で私の名前が幼女になってるんですか？私はメロディア
ーナというちゃんとした名前があるんですけど……聞いてます？」

ちっちゃくなってからメロディアーナ……幼女の立ち位置が変わっ
たね、うん
なんだろう、こう……弄ると面白いんだよね、うん、楽しいんだよね
この変化はビックリだよ、どちらかというと別人と考えた方が良い
かもしれないね、名前は勿論幼女ｗｗｗ

「あっ君と幼女ちゃん！さっさと家具を買って遊ぶんだお！」
「いや、だから買うと言って……もういいや」
「荒榎、頑張って」
「買うのはお前だからな」
「ええ！？」
「驚く！？お前のものだろうが」
「……ああ！」
「駄目だコイツ、速く何とかしないと」

いかん、壊れてきてる……ああ、俺もか、仕方ないな、うん仕方が無い
束さんと一緒に居たら、ね？すぐにこうなるよ
そして今回はおもいっきりギャグの世界になってる気がする……
こんな世界で大丈夫か？

『大丈夫だ、問題無い』
「今誰が答えた！？ってかスピーカーから出てたよね！？」

このデパート駄目だろ！何で校内放送でネタにこらえるんだよ！ってかなんで聞こえたんだよ！
つ、疲れた……もう無理だ、俺を置いて先に行け、バタッ……
自分で言ったら格好悪いよね、うん

「速く買って帰る」
「そしてあっ君の部屋で大人の遊びを」
「しない！そんな年ではありません！」
「荒榎、大人の遊びって何？」
「お前にはまだ早い！」
「失礼な、荒榎だって同い年でしょ、私が知ったって問題無いわ」

同い年じゃないでしょ……いや、多分年齢が下がって……俺と同じになったんだな
ってか、同い年なのか……あるぇ～？背が負けてるよ？俺って……
小さいのね
いや、まぁね、学校で分かってましたよ、五十音ではあ行で一番前に、背の順でも1番前、女子は俺の後ろに来るんですよ……背丈が欲しいです
いや、でもあれだ！男子は中学校から伸びるからな！うん！女子はその分早いって聞くし……まだまだ大丈夫だ！

「幼女ちゃん、ところで何を買うのかな？」
「幼女言わないでください、えっと……確か本棚です」
「本棚？……本って棚に置くのかな？」
「え゛？」
「部屋に置いておけば良いんじゃないかな？そしたら買わなくて良いお！」
「「いや、駄目だろ（ですよ）」」

この人は一体何を考えているんでしょうかね・・…本はちゃんと並べるのもです！
並べないと本が痛むからね！皆も気をつけてね！……誰の事だ？

「とにかく、本棚を買って……ついでに本も買わないと、あと化粧品とか束さん……誰に聞けば良いのか」
「あっ君！？今こっち見たよね束さんだって化粧品くらい使ってるんだよ！ちゃんと分かるよ！」
「……使ってるんですか？」
「使ってるよ、失礼だね！あっ君に綺麗に見える様にちゃんと毎日」
「よし、千冬さんでも呼ぶか、粛清とかの意味も込みで」
「あっ君の鬼！いぢわる！」

「だからその言い方は……もうつかれた」
「荒榎……頑張って」
「そういいながら何気に逃げてるお前が恨めしいよ」
「だって巻きこまれたくないもの」
「言いきった!?言い切ったよコイツ!」
「当たり前でしょ……さっさと買いましょうよ、周りに目が痛い」
「え……よし、買いに行こう」
「おー!」
「束さんはここでお留守番」
「おー!……ってあっ君!束さんも付いてくお!」
「もういいや、お好きにどうぞ」
「えへへ～、じゃああっ君に抱きつくお!」
「それは止め……行動早くないですか?まだ良いとも言ってませんよ?」
「あっ君の匂いだ～、くんかくんか」
「変態だぁぁぁぁ!」
「そう言いながらも振りほどかない荒榎」

うるさいな!振りほどいたら危ないでしょうが!……周りの人が!それに、偶には……ほんっと偶には、こういうのも……悪くは……無い気がするけどやっぱりやだ!

ギャグパートとはまさにこれのこと！（後書き）

・・・・・・・・キャラが壊れたか？
どもテスト期間中、しかも今日からテストの断耶ですｗｗｗ
最近は全然更新できてないですね・・・・・・色々と余分なことを
やってるからなんですけどね
ま、まぁ、夢を追いかけていると考えてください！追いかけてるん
だよ！
自由への翼への一歩を歩くための地面を作ってるんですよ！
えと、うん・・・・・・分かりにくいな
いや、でも本当にそんな感じです、夢はでっかく小説家！・・・・・・
になろうで有名になる！・・・・・・ちっちぇえな

はい、まぁこれで分かる人もいる・・・・・というかほとんど分か
りますよね
無理でも良いんだ！ってか無理だと思うから出すんだよ！
いまならなんと！時雨沢恵一さんが感想を書いてくれるんですよ！
酷い作品・・・・はいやだけど、できるだけ良い作品を書いて感想
貰って！
この作品もグレードアップですよ！・・・・・・・・あるぇ～？行き
先が間違ってる気がしてきたよ？

まぁ、うん、そんな感じで頑張る・・・・つもりの断耶でした

ノシ

・・・・・・・・・もう何でも良いよ（前書き）

ちょっと構成が緩いかも・・・・・・

・・・・・・・・もう何でも良いよ

「……束さん」
「何かなあっ君」
「……離して」
「えー、なんでかな？かな？」
「暑い！そして視線が凄いから！」
「荒榎……頑張って」

うん、その言葉は今日だけで何回聞いた事やら……ちくせう
折角メロディアーナを弄ろうかと思ったらさ、束さんがさ・……背中に、うなーって状態なんですよ
メロディアーナは一応可愛いし、束さんも見た目だけは良いから……周りの目が、ね？
リア充爆死しろ！じゃなくてさ、てめぇ何ハーレム築いてんだよ、的な目なんだよ……変わってくれないかな？
多分1日で壊れるけど……おもに束さんの所為で、気に入らない人にはとことん辛辣だからね……うん
マで始まってゾで終わる人くらいしか喜ばないと思うよ？……その道を開いたら大変だけど
まぁ、見た目だけなら、ついでに今の状況だけなら羨ましいと思ってもおかしくはないのかもしれないけどさ……

「ああ、考えるだけで鬱に……さっさと選んで帰る」
「あっ君あっ君、その後は束さんと遊ぶんだお！ついでに束さん命令が一つ分あるんだよ～」
「え、今日使うの？」
「当たり前だよ！こんな貴重な事が出来るんだから、今のうちに既成事実を」

「駄目だからね？ちゃんと可能な範囲で言ってくださいよ？」
「むぅ……じゃあじゃあ！あっ君から束さんにあっつ～いキッスを！」
「今の話を聞いてたのかな？かな？」
「おお～、あっ君がやると結構怖いね！」

怖がりもせずに何を言いますか……キスはアウトでしょ、駄目でしょってか、今更ながら後悔してきた……束さんの命令って怖い、うん

「後必要なのは……何があったっけ？」
「本棚よ、それを忘れて一体何処に行く気だったの？」
「……空の彼方？」
「……そう、それは頑張ってね」

そんな可哀想なものを見る目で見ないで！ただちょっと誤魔化しただけじゃないか！
べ、別に誤魔化した訳じゃないんだから……ただうろ覚えだっただけで……うん

「さて……本棚って何を見るんだ？」
「知らないわよ……内容量で良いんじゃないからしら？」
「……じゃあコレか」
「荒榎、高さを見なさい」
「……無理だね」

大き過ぎて部屋に入らないわ……流石にこれはどうしようもないからね、家を壊さない限りは
壊すのは無理だからね？幾らなんでも家を壊すと大変だからね……
うん、母さんが凄く怒りそうだし、父さんも……怒るのかな？
その前に済む場所が無くなるから駄目じゃんね……いやいや、家

を壊す事の否定ばっかり言ってないでほかのを捜さないと

「とりあえず、コレが2個あれば良いんじゃない？」
「私、そんなに本読まないと思うけど……」
「……1個で良いな」
「そうしましょ、後は何がいるのかしら？」

他に要る物……部屋の模様か？だとするとカーテンとかソファー……は無理だと思うからクッション、あとテーブルがあると便利だよね
ってか、ベット買ってないじゃん・……あれだけ近くに居て買ってないじゃん！

「ベットを買おう」
「ベット・・…あっ君まさか！一緒に寝るのに小さいから大きいベットを買いなおすの！？」
「……長々と良く喋れますよね」
「えっと、その前に否定しなくても良いの？」
「それはそれで疲れるから……」
「そ、そう……」

否定すると話が続くんだよ……今日はもう勘弁して欲しいんだよってか、なんで束さんはそんなにテンションが高いんですかね？一種の病気って言われても不思議じゃないぞ

「あっ君、無視しないでよ～！」
「……」

無視じゃないよ？ちょっと疲れてるだけだよ？……なんだろう、この感覚

泣きそうな感じの束さんが可愛いと思えるこの感覚……もっと可愛くなるのかな？

……いやいやいやいやいや、何変な事を考えてるんですかこの頭は！

俺は変態じゃない！……よね？

「……あっ君、そんな事するなら束さんだって考えがあるんだからね」

「いや、うん、それは止めようよ女性として」

え？何をしたかって？思いっきり抱き着いてきたんですよ、ええソレだけなら問題無いじゃないか、なんて言う人は考え直せ、すぐに、今すぐ、即効で

束さんだよ？あのプロポーションの束さんだよ？出るところが凄い出てる束さんだよ？……これで分かるよね？

うん、流石に不味いと思うんだ……そしてメロディアーナの目だちょっと怖いんだよね、何処か怒ってるような、何処か引いてるような

「じゃああっ君、束さんとちゃんとお話しようね、それとお願いを聞いてね」

「なんか増えてない！？え？お願い二つ目？それは流石に……」

「……むぎゅー」

「それでお願いします」

俺頑張った！頑張ったけどね！無理は無理なんだよ！女性に耐性とか無理だから！ジゴロとか絶対なれない性質だから！

すぐに諦めてないし！あの束さん相手に頑張ったんだよ？逆に誉めて欲しいよ、うん……誰が誉めるんだろうね

「それであっ君、ベットはどれを買うのかな？」
「えっと……どれが良い？」
「私に聞くの？」
「いや、だってメロディアーナのだし」
「あ、そっか……」

いや、忘れるなよ……自分の生活道具だぞ？

「正直どれでも、どんな状況でも寝れるように訓練したから……」
「えー、何そのどうでも良い訓練」
「よし！それじゃあ束さんが選んで……これだよ！」
「はい、じゃあこれで」
「……良いの？」
「良いの良いの、私も楽が出来るし」

なら良いんだけど……まぁ、束さんも趣味は悪くないから、結構な物を選んでくれたんだけど……

「よしあっ君、それじゃあ束さんの家に行こうじゃないかい」
「え、いや、メロディアーナを家に送らないといけないし」
「あ、私は一人で帰れるから」
「……さいで」

ちょっと位覚悟する時間をくれても良いじゃないか……このままだと束さんの家でなにかお願いと言う名の強制が二つ発動されるんだから……ねぇ？

「それじゃあねー、あっ君行くよ～」
「行くよ、って言いながらも持ち上げておいて何を言いますか」
「ん？大丈夫だよ、あっ君軽いから」

「誰も聞いてないよ、そんなこと……
「……疲れた、あっ君代わって～」
「……歩いて5歩で疲れるなら止めれば良いのに」

「さてあっ君、狭い部屋に男女が二人……」
「ああ」
「やることは一つだよね」
「そうだね」
「優しくしてね？」
「断る」

そう言って、俺は束さんに近付き……

「うん、部屋が狭いのは物が散乱してるからだね、そして中学生と小学生を男女と呼ぶのは変じゃないかな？」
「……やることは分かってるよね？」
「言い直しても何も変わらないからね」
「……あっ君のイケズ」
「ああうん、それで良いから早く内容を言ってください」
「……内容？」
「……お願いね」
「ああ！そんなことがあったね～・・・・・こほん」

わざとらしい咳をして、姿勢を正す束さん

これは真剣な話なのか？でもこの時代に重要事項ってあったか？
なんて考えていたら、束さんは結構凄い事を言った

「あっ君には六年間位いろんな国を回ってもらいます」
「……はい？」

・・・・・・・・・もう何でも良いよ（後書き）

・・・・どうも断耶です
いや～、テストが終わりましたよ！学校のテストが！・・・・・・・
点数は関係ないとして
まぁ、テストが終わったんで、今までよりは少し早く投稿できるかもしれません
というか、アンケートがあるんですが・・・・・・・これは自分の優柔不断の所為なんですけどね
そろそろネタが尽きて来たんですよ・・・・・ええ、はい、ネタがそれでですね、このままだとグダル可能性が高いんです、なので出来たらちょっと飛ばしたいな～って思ったり、五、六年ほどやっぱり調子に乗ってたんでしょうね、できるできると考えていた部分が在ると自分でも思っています
読者の皆様には失礼ですが、最近人気が落ちてるんですつまり、この作品に飽きる人が増えたんですよね、それの元はこの作品がつまらなくなって来ているからでして
自分でも見直すと最近は変だと思うところがあったりするんです
無駄な足掻きをしていたんですよ（泣
だから！読者を飽きさせない為にも、自分がちゃんと書くためにも、少し・・・いや、結構飛びます、ご了承ください
それに、ここまで書いてきて未だに原作の影が見えないとか駄目じゃないですか、うんうん
なので、次回はちょっと複雑になるかもしれませんが・・・・・・
よかったら見てね？

ちょっと経っての・・・・・色々？

「……よし、これで後はドイツにＡＩＣのデータを送って、イギリスにＢＴ兵器を……これ俺も使えるかな？後は適当に」

ども、荒榎ＤＥＡＴＨ、ごめん冗談です
えっと、束さんのお願いから約……何年経ったんだ？良く憶えてないけど
今俺は中学生になった……訳ではないが１２歳になりました、だから多分三年？四年？位動いてたのかな？
といっても、毎日家に帰ってたからな、日帰り旅行を毎日だったね、ある日はいたりあ、ある日はフランス、ある日はアメリカ
楽しかったけど、ちょっと疲れる毎日だったよ、毎回違う国だったからね
そして束さんに渡されたプログラムで国家機密？的なファイルにデータを送りこんだり、ＩＳ科学者の家のパソコンに差出人不明のメールとしてファイルを送りつけたり
それが束さんの願いの為に必要な事だったからね、各国のネットに入りこんで色々とやりましたよ

「コレだけの大仕事が暇つぶしだって知ったら……大統領とかも驚くのかな？」

『折角ＩＳを作ったのに他の国が作るのが遅くてつまらないよ！』
『だから適当にＩＳ製作の手がかりになるデータを作ったから色んな国に送ってきてね☆』
ただ束さんの暇つぶし、世界が付いて来られないなら、ヒントをあげようじゃないか、の心で世界が泣いて喜ぶデータが広まってるん

ですよ
まぁ、その所為で戦争に使おうとした国があったから叩いて来たりと、俺も忙しくなったんだけどね……一回で終わったけど
俺とその国のＩＳとの戦闘シーンがネットで撒かれててさ、他の国もＩＳの危険性をやっと理解したのかな、ＩＳの条約を作ってたよＩＳを戦争に使ってはいけない、ＩＳに使われる技術は開示しなくてはいけない、とか色々
俺には関係無いからね、タバラカは条約を結んでないし……いや、戦争をする気は無いけど
詳しくは知らないんだけど、俺がＩＳを戦争に使おうとした国を全部叩いてたら、タバラカは条約の番人的なポジションになったらしいよ
んで、その番人の技術が開示されると、叩くのが大変になるからって事で、タバラカは法の外、各国を見張る役割に落ち着いたそうでＩＳを戦争の使う国は全て叩く予定だったから、別段困らないし、条件とかも無いみたいだし、こちらとしては好都合なんだよね

「妖幻の技術開示とか……オーバーテクノロジーって言われても可笑しくないからな……」

認めたくないものだな、自分自身の、若さゆえの過ちというものを……反省してます

「まぁそんな事よりもこっちだよ、ドイツ……遅いからもう一回送るか？」

前のデータが壊れたって言ってもさ、未だ出来てないとか遅過ぎでしょ
いや、結構難しい事なのは分かってるけどさ……ドイツの科学力は世界一じゃないのかよ！

これはネタだっけ？思いっきり本当だと思ってたんだけど……間違いなのか？

「一応、もう一回送って『通信連絡アリ』……このタイミング？」

ドイツ……な訳無いよね、妖幻に通信できるのは束さんかＩＳ所持者、しかも俺が認めた人だけ……千冬さんしかいないね

千冬さんから連絡なんて珍しいな……この時期って何かあったっけ？中学生……いや、何も書かれてなかったと思うけど

今となっては詳しい事はあんまり憶えて無いんだよね、原作本持って来れる訳は無いし……とにかく出るのが先か

「はい、何の用ですか千冬さん」

『……対応が早いな、分かっていたのか？』

「それはもう、この通信は束さんか千冬さんだけですし、束さんは最近メールが来ましたよ、沢山お引越ししてるよ☆、って」

束さんの保護、と言うより束さんの家族の保護がもう始まってるんだよね

俺だと……あの二人は手が出せないけど、束さんの家は普通だからね、さらわれたら大変ですよ

特に箒ちゃん、束さんが大事にしてるからね、相手の国が滅びる可能性もあるし、日本が責められる可能性もある

それでもタバラカに国籍を作らないのは訳があるんだろうね……俺は知らないけど

『そうか、アイツはもう消えたらしいがな』

「……はい？」

『家族を置いて何処かに消えたらしい、置手紙があったと聞いた』

「それはまた、束さんらしいと言うか……」

『あいつは縛られるのが大嫌いだからな』
「そっか、束さんが行方知れずか……俺は知りませんよ？」
『そうか、まぁ、アイツなら死にはしないだろう』

まぁ、束さんが死ぬとか考えられないしね
あの人が死んだら子の作品終わるし……いや、もう別作品だけど
俺ェ……何時の間にか普通に原作ブレイクルートじゃん、しかも楽しんでるじゃん
もうあれだよね、外から見てれば良い、とか言えないよね、普通に絡んでるし、ＩＳ作ったし
原作キャラにも結構会ってるし……アハハ、もう原作ブレイク万歳……だけど死にたくないからなるべく原作だと嬉しいな！

「えっと、それで用事は束さんの事ですか？」
『ああいや、それとは違うんだが……暫らく暇か？』
「暇……と言われれば暇ですが？」
『旅行でも行かないか？』
「……何が目的ですか？」
『いや、即効で怪しまなくても……』
「だって、普通の旅行なら一夏と一緒に行くでしょ？あいつも中学生になったんだし、お祝いとかで」
『・……一夏は、家に置いていく』
「……どうしてか訊いても？」
『……私と一緒に居て誘拐された』
「……ああ、モンドグロッソ」
『ああ、知っていたのか』

いや、知ってはいますが……もうやってるのか
モンドグロッソ、ＩＳによる競技の世界大会、この二回目の決勝戦で千冬さんが勝てばニ連勝、当然それを良く思わない人が居る訳で

一夏を誘拐、試合に負けろとでも言ったのかな？しかし、それを知った千冬さんはドイツが独自で入手した情報を得て一夏を救出、代わりに決勝戦は不戦敗
その後、ドイツに貸しを返すために軍のＩＳ部隊の教官を１年ほど行なう
俺が覚えてるのはコレくらいだな……結構憶えてたわ、うん、前言撤回で
ってか、あれって第二回モンドグロッソだよな？つまり一回目はもうとっくに終わってるんだよな？……何で俺を誘わないんだよ！出たかったよ！危険性が低くて、その上世界中の猛者と戦えるんだよ？今後の行動の為にも出たかったよ！
まったく、これだから世界は……俺への連絡方法が無かったね、ごめん、また前言撤回で
俺がＩＳのデータをばら撒きだしてから三年ほどだからな、一回くらいは出来るか

「一夏誘拐の千冬さん暫らくドイツ教官位なら」
『そこが一番重要な部分だな……何故分かってるのかは聞かないで置く』
「そうしてくださいな、それより本当の用件は？」
『ドイツに来ないか？すこし手を貸して欲しい』

おお、千冬さんが手を貸して欲しいとは、珍し過ぎるでしょ
頼られたのって……一夏の監視の時以来かな、あれは酷かったけど……今回はまともだね

「手を貸して欲しいと言いますと？」
『ＩＳの整備が複雑すぎて出来ないんだ、学者がやり過ぎたらしい』
「なるほど……分かりました、引きうけます」

ＩＳの整備なら喜んで、自分が作ったコア……じゃないかもしれないけど
別物じゃないし、整備なら簡単に……ドイツの科学力が世界一じゃなければ問題無い

『助かる、それじゃあ地図の所に来てくれ』

そう言って通信が切れた、千冬さんから地図が送られてくるけど……思いっきり軍の真中だけど大丈夫！？
入った途端に一斉掃射とか嫌だよ？やり返すよ？軍潰すよ？物理的に凍らせるよ？

「まぁ、千冬さんだし……大丈夫だよね？それよりもデータを送らないと」

ＢＴ兵器は前に趣味で作ったら異様にシンクロ率が高かったんだよね……試しに使ってみようかな？
ＡＩＣはいらないな、異端空間があるし……どうせなら呼び方も変えようかな？
ＡＩＣみたいに……駄目だ、思いつかないな
まぁ困る事も無いから良いんだけど……あー、シールドピアース作りたいな
いや、作っても妖幻には使えないけど、盾が無いし、何故か近接武器は全部却下されるし
近接武器が下手なんじゃなくて入らないんだよね……まだブルー・ティアーズの方が可愛いよ
でもまぁ、基本数値が高いし、武器も多彩というか、後付け武器を主用武器にする代わりに本当の主用武器が桜花と剣戟だけなんだけどね
他は全部後付け、焔顎も摩天楼シリーズも・・……摩來と天弦と暗

楼だけど後付けですよ
いや～、今考えると名前が超厨ニだよね、なんだよ摩天楼シリーズって……言わなければよかったじゃん
ま、まぁね、今となってはＡＲＭが無くなったから弾薬補充も遅くなって、使い難い武器になっちゃったから改造しようかな？とか考えてるんだけど……思いつかないんだよね
一番最初に作った武器だし？結構本格的に作ってあるからね、弄るのも大変なんだよ
最近は摩來で施設破壊、焔顎でＩＳ攻撃なんだよね、摩天楼は結構使うからな、その分使い辛いと感じる時がある
偶に使うには良いんだけど、一つの戦いで多用出来ないのが不便、一応妖幻の中の弾薬を増やしたけど……やっぱり連射は無理だね
弾を考えるとやっぱりＢＴは欲しいな、シンクロも高いから曲がるのも出来そうだし……形は何が良いかな？
マシンガンで連射……したらエネルギーが問題になるし、ショットガンで……難しいな
バズーカ……使い所が難しいだろ……やっぱりハンドガン？でもハンドガンなら焔顎が便利だし
二丁だから手が開かないし……二丁？

「……二丁……別にするか？」

右手を実弾、左手をエネルギー……面倒だなやっぱり今はいいや、ネ九手も別に困らない気がするしそれよりも問題は……妖幻の機能だろうな、学園に入ったらやっぱり制限がかかるのか？
妖幻はコアから改造してあるし、他のより古いとしても、まだまだ速いからな
第一世代で第三世代と並ぶんじゃないか？……白式と赤椿を越えるのは無理かな？

前までは勝てるとか思ったこともあったけど……作るには束さんだし、絶対機能も上がってるって

「まぁ、とりあえずドイツに行くか……銀髪大丈夫かな、喧嘩吹っ掛けられたら……多分ボコる」

製作者としては負けられんのですよ……いや、吹っ掛けてこないかもしれないけど

今の状態の銀髪娘の実力も見てみたいな……ＡＩＣが出来てないならいっその事作り方を教えるか？

ちょっと経っての・・・・・・色々？（後書き）

さて、始めに謝るとして・・・・・・六年は飛ばしすぎかな？と思いましてですね
せめて半分くらいで一回書いたほうが良いな、なんて考えてたらあら不思議、千冬さん教官になるの巻があったのを思いまして・・・・・・ごめんなさい
最初から書く気でした、ただ書くまでに時間がかかりすぎて今の状態に・・・・・・
ちょ殴るの止めて！それ一体何ですか！滅茶苦茶痛いですよ！？

・・・・・・・・・えー、こほん、とおきまして
まぁ、ぶっちゃけると『銀髪娘にフラグ立てようぜ☆』的な感じですええ、でも今までのキャラと同じ立場も・・・・・今度はどんな状態にしようかな

こんかいは・・・・短めの後書きでした

ドイツにいっといで・・・・・・・ああ行くのは俺だな（前書き）

銀髪登場☆

ドイツにいっといで・・・・・・ああ行くのは俺だな

「よく来てくれたな」
「そりゃあ、千冬さんの頼みですし」

連絡があってから約5分後、俺はあの場所から飛び立ちドイツに来た
地図の場所はやっぱり軍の中央だった、正直結構緊張した瞬間だった
でもまぁ、入ったら迎撃、なんて事は無く普通に……いや、盛大に歓迎された
いや、横断幕とか作らなくて良いでしょ、なんで軍の偉い人がほとんど集まってるんだよ
俺はＩＳの調整に来ただけで……だけだよね？みたいな事を考えていたら奥から千冬さんが登場した

「ってか、これは一体どんな状況ですか？」
「いや、私も要らないと言ったんだが……最重要人物だからと」
「……俺はＩＳの調整に来ただけですよ？」
「そうなんだが……国を上げて出迎えるのに意味があるらしいからな、私は知らん」
「まぁ、コレくらいなら嫌じゃないですけど」

どちらかというと嬉しいに入る、騒ぎ過ぎじゃないし、かといって静か過ぎない、丁度良い感覚だ
でもなぁ、ＩＳの整備に来ただけでコレだけ歓迎されるとは……

「……いっそ入れ込むか？」
「他の国が不満を上げるぞ」
「大丈夫ですよ、ＩＳ製作のスピードが上がったのは一体誰のおかげだと思ってるんですか」

「……なるほどな」
「だから、別に問題は無いんですけど……やる事が無いよね」
やり過ぎると世界のバランスが壊れるし、ＩＳ以外で出来る事なんて……事業でも起こす？面倒だから却下
面倒だからで事業を却下できるのは俺と束さんくらいだと思うな……ってか、ＡＩＣってちゃんと出来たのかな？
それで良いんじゃないか？ＡＩＣを組み立てればドイツも結構良い感じに纏まると思うし

「それなら、良い仕事があるぞ」
「良い仕事、と言いますと？」
「美少女と一緒に過ごす素晴らしい仕事だ」
「……危ないセールスですか？」
「いや、私の生徒の一人の指導をしてやって欲しい」
「指導？一体何のですか？」
「日常の過ごし方、平日の楽しみ等、当たり前の行動からＩＳの訓練までだ」
「それはそれは……面倒ですね」

日常の過ごし方とか、一体何を教えろと？ＩＳの訓練なら出来ますけど……は意地角楽しみかたって一体何？
でもなぁ……美少女ねぇ……千冬さんが言うんだから凄いんだろうけど……んー
微妙な所だよね、面倒ごとだけど美少女が相手……普通なら飛びつく所なのか？俺としては美少女って結句危険なワードなんだけどシャロとかレトアとか束さんとか千冬さんとかメロディアーナとか……全員美少女と美女じゃんね
普通の人なら泣いて喜ぶ……んだろうね、俺も第三者視点からだったら羨ましいと思っただろうね

でも自分の話となるとね……正直大変なんだよね……まぁ、それは置いておいて

「その美少女って誰ですか？」
「なんだ、気になるのか？」

腕を組み、口をニヤつかせ千冬さんは聞いてくる
そりゃあ、ねぇ？そんな言い方をされて気にならない人がいるとでも？
今男だから、とか考えた奴前に出ろ、今なら焔顎のマガジンが切れるまで撃つだけで勘弁してやる
後５秒遅かったらフルバーストな、桜花込みのフルバースト、総合ダメージは５３万です

「まぁ、性格に難ありだがな、見た目なら……」
「性格の方が気になるんですけど……」

性格に難あり？……え、いや、ちょ待てよ？幾らなんでもそれは無いよな？
会えたら良いな～とか考えたけどさ、いや、流石にそれは……

「ラウラ・ボーデヴィッヒ、遺伝子強化試験体だからな、油断すると危険だぞ」
「……生身だと死ぬかも」
「大丈夫だ、私が余裕だったからな、お前でもなんとかなるだろ」

余裕だったんだね……いや、千冬さんって本当に人間？この世界の人？転生者で色々チート能力貰ったって言われ逆にそっちの方が安心だよ、ってか納得するよ？
いや、でもそれは無いでしょ……無いよね？原作に登場した人物だ

し、何より行動が原作と同じだし……真似してるとかは無いよね！

「まぁ、良いんですけどね、遺伝子強化試験体も会ってみたかったし、越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）も見てみたいし」

「……お前の情報網には驚かされてばかりだな」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

だってね、情報網と言っても原作本だし？高校生で教官の方が驚きでしょ……あれ？学校は？

きっとドイツが手を出したんだろうな……それとも止めた？

「千冬さん、学校は良いんですか？」

「学校？……ああ、高校か、私は行っていないからな」

「……へ？」

行ってない？止めたでも休暇を取ったでもなくて言ってない？……千冬さんって成績悪かったか？

いいや、良かった、とても良かった、上位５人には必ず入りこんでた……なんで？

「ＩＳに集中した買ったしな、そうすると一夏とのふれあいが減るし……」

「ああ、うん、やっぱり千冬さんだ、このブラコン」

「ブラコンではない、今だって２ヶ月ほど会っていない」

「その心は？」

「一夏をＩＳなんて大変なものに巻きこみたくない（キリッ」

「うん、ギャグの世界に行こうか……この世界も今はギャグだね」

「一体何の事を言っているんだ？」

「いえいえ、なんでもありませんよ？そして今の心境は？」

「一夏に会いたい……」

「いや、そんな恋する乙女みたいな言い方をしないで！そして周りの人の目が可笑しいから！」

女子だよね！？俺の目が間違ってなければ周りに居るのって殆ど女子だよね！？ってか女性だよね！？

男は偉い人＋ちょっとだけだよね？そして男も皆目が……見事に振られるパターンですね……あ、幹部足踏まれてるよ

そしてそれに気づかない幹部……いやいやいや、足踏まれてるよ～？

「今会ったら大変だからな、こっちに集中できなくなる」

「なるほど、溢れんばかりの心が止められないと」

「……否定はしない」

「いや、うん、自分に素直って良い事だよね」

「さて、それでは部隊の練習を見に行くぞ」

「ここには居ないんだ……いや、普通はＩＳ関係が集まるべきじゃないの！？」

「さて、こいつ等がお前の教え……私の手伝いで教えるＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』だ」

「いやいや、俺の立場はＩＳ整備なのに……」

「上がどうしてもとな……」

「それは流石に条約違反になるんじゃないですか？」

「問題無い、束の作った国……タバラカだったか？あの国は条約外だ」
「……せけぇ」
「ぐだぐだ言うな、お前は手伝うと言ったんだからな」
「いや、そうなんですけどね……聞いてないよ」
「全員集合！」

千冬さんの一喝で全員がこっちにむかって動き出した…さすがは軍だね、動きは凄い統一されてる

「……ハルフォーフ、ボーデヴィッヒは何処に行った」
「隊長は瞳の訓練に行かれましたが、呼んできましょうか？」
「頼む」
「了解しました」

一人、背の高い女性が隊列から離れて外に出ていった
ハルフォーフ？聞いた事が……あるような、無いような……誰だっけ？
ＩＳは……あそこか、３機もここで使うのかよ……でも人数を考えれば少ないのか？少女ばっかりだけど
まぁ、ドイツは……確か１０機だからね、３機は多い方だよ……それにしても、汚いな
ちゃんと整備してるのか？オーバーホールとか絶対してないでしょ……あれじゃあ動きが鈍るって
なんて考えてたら、さっきの女性が少女……と言うか、ラウラを連れて来た……けど、あんまり仲が良さそうには見えないね

「織斑教官、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長以下１０名、全員集まりました」
「よし、今日はお前達に紹介するものを連れて来た、これから暫ら

くＩＳ関係を見てもらう、失礼の無いように」
『『『『イエス！』』』』
「よし荒榎、自己紹介をしろ」
「えー……真中荒榎です」
「……他には」
「特に無いですね、それよりもＩＳを」
「あ、ああ……では頼んだ、私はこいつ等にお前の事を紹介しておかないとな」
「あ、はい、よろしくお願いします」

特に言う事も無いし、ってかこんな状況で一体何を言えと？笑いを取れるとは思えないし、笑顔を返してくれるとも思えないとりあえず、自分の仕事はやらないとね……ＩＳを見るんで抜けますよ？

「見た感じだと……全部オーバーホールしたいな、金掛かるけど……せめて調整はやらないとね」

見た目が酷いんだよね、凹んでたり、削れてたり、黒かったり、絶対修復機能が働いてないでしょ
少なくても汚れは取れないと可笑しいし……ってか、待機状態に戻そうよ

「……おい」
「ん？ああ、ども」

後ろには何時の間にかラウラ・ボーデヴィッヒ……フルネームは長いんからボーデヴィッヒで
流石に一夏みたく最初からラウラとは呼べませんよ、ええ
でも見てる暇は無いので振り向かない、そんな事よりＩＳの方が大

事だよ

「お前が私の指導官だそうだな」
「んー、そうらしいね、これからよろしく」
「っ、少しはこちらに顔を向けろ」
「いや、今ＩＳ見てるからさ、こっちが大切なんだよね」
「貴様……真中荒榎、私は貴様を認めない！」
「え、ああはい、それで？」
「……っ！私と戦え！お前が勝ったら言う事を聞こう、もしお前が負けたら去れ、ここには教官で充分だ」
「はいはい、そんなことよりＩＳの調子を見ろよな……あ、ここも違う」

さっきから数値が変なんだよね、進化じゃなくて退化みたいな？
まるで機能が押さえられてるんだよ、人為的に感じてしょうがない、もしくはドイツのＩＳの扱いが変なのか
まぁ、どちらにしろ不味いからね、数値は適当に直して……あ、ここだな、コレがおかしいから修復機能が働かないんだよ
よし、これで修復も掛かるし……余分なエネルギーが使われてるじゃん、ここをこっちに……あ、ここは必要でしょ
余分な所の為に必要な所を減らしちゃ駄目でしょ……ん？静かになったな

「……」
「……」

ビックリしたァァァァ！何時の間にか横に居たよ！しかもＩＳを見てるよ！？
ああビックリした、心臓が破裂する事は無いけど脈がずれるかと思った……それなら大丈夫なのか？

「……変なのか？」
「……え？」
「シュヴァルツェア・レーゲンは変なのか？」
「え、いや、変と言えば変だけど……」
「……そうか」

そう言って、彼女、ラウラ・ボーデヴィッヒは立ち去った……なんて格好良く終わらせておこう

ドイツにいっといで・・・・・・ああ行くのは俺だな（後書き）

次回は銀髪娘のターン！

やっとドイツの着ましたよ！

そして俺のライフはもうゼロよ！

ぱそこん時間ももうゼロよ！

ってな訳で今回は後書きがかけないです！

次回は銀髪娘の目線で書こうかな

今回はラウラのターン！

私がアイツに会ったのは、教官が来て暫らく経った時だった

「……クソッ！」

ヴォーダン・オージェの制御、他の皆は出来る事が私には出来ない
しかし失敗、失敗、また失敗
どれだけ頑張っても成果は出ず、不安が大きくなるばかり
私の目は使えないのだろうか、制御する事も出来ないのでは軍には
いられないのではないか
私にとって軍は全て、生きる場所であり、生きる理由……いや、それ
はもう違うな
教官が来てからは、あの人が私の憧れだった、生きる目標だった、
全てを失ってでも辿り着きたい終着点であった
だからこそ、教官が居ないときでも、教官が他の人を教えている時
だろうと、どんなときでも諦めず、屈辱に耐え、瞳の制御に専念した

「もう一度だ……今度こそ！」

ただ酷使するだけ、後の私が見たらそう言うだろうその姿
誰もが止めない、止める事が無意味だと分かっているから？違う、
失敗作少しは役だって欲しいからだ

その為に止めず、逆により困難な指示をする上官は、私にとっては邪魔者でしかなかった

「……もう一度！」

だから、彼らが口を出してこない様に、彼らが望む以上の訓練をした
銃や暗殺術なんて今は良い、そんなことよりもＩＳに集中した
私が作られた存在理由を放棄する事で、より嘲笑が増えたが今は良い
そんな奴等を見返す為にも、そんな奴等を私が嘲笑する為にも、ＩＳの訓練には１２分の時間と、１２分の努力が必要だった
目指す先は教官、他のものに興味は無い
私の見た目で寄ってくる奴はいた、欠陥品扱いされて可愛そうに、そう言っている彼等の目はとても汚らわしく、醜く、怖気が走ったそんな奴等も、相手にしなかったら何処かに消えた、怒る奴も居たが、それでも無視していたら消えていた
雑魚はどうでも良い、私が目指すのは教官のみ、この世界で、ＩＳの世界で教官に敵う奴は居ない
私もあの場所に立ちたい、一緒に肩を並べたい、いや、あの人の下で良いから、あの場所を少しでも味わいたい
どんな敵だろうと、簡単に倒すその強さ、どんな敵が相手だろうと手を抜かない冷酷さ、どんな敵が来ようと焦らず、落ち着いて、状況を見極める心の強さ
あれになりたい、あれに少しでも近付きたい、世界最強の右手になりたい
そんな私の思いは、ある日破壊された

「…認めん、教官以上に強い奴など居る訳が無い、きっと教官が哀れんで言っているだけだ」

教官がある日に言った事、それは自分よりも強いものが居るという

訂正
そんな訳が無い、教官以上に強い奴が居る訳が無い
あの人は最強、あの人こそが真の強者
私は否定した、教官以上に強い奴が居る訳が無いと、心から否定した
教官が言うには、そいつはＩＳの発明者
篠ノ乃束、彼女だと言うのだろうか、そんなはずは無い
彼女はただの発明者、武術家に産まれながら、武術に進まない者
その頭脳は確かに世界最強かもしれないが
武術が出来ない彼女が、世界最強に勝てる訳が無い
ならば、残るは一人、小学二年生にして、篠ノ乃束と肩を並べる少年
異端の科学者、マッドサイエンティスト、クレイジー、学者は彼を
そう呼ぶ
現在の科学を破壊し、新たに科学を作り上げる、大人でも正気の沙
汰とは思えないだろう事を、彼は日本の議員を前にして行なった
狂っている、彼をそう呼ぶ人は数知れず、しかし彼のおかげでＩＳ
という素晴らしいのもが出来たと称える者も居る
皆の考えの共通認識は一つ、ズレている
世界とズレているだろうその存在は、世界を変えてズレを合わせた
篠ノ乃束もズレていたのだろうが、彼女よりもズレていると認識さ
れている少年
だから、だからこそ、教官の言葉に、少しだけだが興味が沸いた
教官より強い強者、ＩＳの設計者でありながら、自ら乗り込み、女
しか扱えないＩＳを制御する少年
彼ならば、彼ならば瞳を直す事が可能なのではないか？彼ならば、
私をもっと高みへと連れて行ってくれるのではないか？
彼ならば、ＩＳを相手に一騎当千を可能にするＩＳを作れるのでは
ないか？
私から失敗作の汚名を取り除いてくれるのではないか？

「……早く来い」

だから望む、教官が彼を連れてきてくれる事を
だから頼んだ、教官からドイツに来てくれるよう説得して欲しいと
だから願った、彼が本当に天才ならば、ズレているのならば……ズレている私の目を治してくれる様に

「……もう一度」

コレ以上酷使しても変わらないだろう瞳
酷使すると余計に悪くなっているように感じる
だからと言って、酷使するのを止める事は出来ない、それは負けを見つめる事だから
最強に近付くならば、負けは許されない
形だけでも、この場所だけでも負けない姿を見せる事で、私を失敗作と呼ぶ奴等を見返してやる
失敗作に破れる成功作は無い、ならば成功作に勝つ失敗作も無い
成功作に勝てば、私はまだ失敗作には入らない
成功作に入らなくても、失敗作とは言わせない為に

「ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、教官から集合が掛かっています」

「……すぐに行く」

教官からの呼び出し、何かあっただろうか？
最近は調子も悪くない、コンディションも問題無い
悪い事で無い事を祈りながらも、シャワーを浴び
途中で待っていたクラリッサと共に、少し急ぎ足で訓練室に向かう

「織斑教官、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長以下１０名、全員集まりました」

「よし、今日はお前達に紹介するものを連れて来た、これから暫ら

くＩＳ関係を見てもらう、失礼の無いように」
『『『『イエス！』』』』
「よし荒榎、自己紹介をしろ」

ドクンッ、と胸が震えた
荒榎、教官と話すときに出てくるその名前は、ＩＳ発明者『真中荒榎』に他ならない
つい、教官の横に立っている少年を見てしまう、私と同いどしの、私達と似た様に片目の色が違う少年
藍色、ヴォーダン・オージェに失敗した……いや、ヴォーダン・オージェの場合は失敗しても金色だから違うだろう
何か他の瞳だろうか？それならば私にも使えるだろうか？そんな期待が膨らみ……萎んだ

「えー……真中荒榎です」
「……他には」
「特に無いですね、それよりもＩＳを」

そう言う彼の目は、こちらを見ておらず、その瞳はＩＳに向いていた
期待した私がおかしい事なのだろうが、それでも失望した
彼はまるで普通、クレイジーなどと呼ばれているとは思えない程に普通
変な所が一つも無い、だから逆に変
狂ってなどいない、どこにでもいる普通の中学生……
三年間に何かがあったのだろう、これでは期待出来ない
頼みの綱が切られた、いや、繋がっていないものに捕まっていただけだ……

「あ、ああ……では頼んだ、私はこいつ等にお前の事を紹介しておかないとな」

「あ、はい、よろしくお願いします」

教官の事を放置してＩＳに向かって歩いていく
教官に対する態度が私を苛つかせる、年上に、しかも教官に取るべき態度ではない
しかし、教官はそれを気にした様子が無い、もう慣れたとでも言いそうな感じが余計に私を苛立たせる

「まぁ、さっきの紹介の通りだ、あいつがＩＳ発明者の一人、真中荒榎だ、今回はＩＳの装備と、その他諸々を手伝ってもらう為に呼んだからな、くれぐれも下手な行動は起こすなよ？ＩＳが消えても知らないからな」

そう言って、解散させる教官、しかし私は残れと命ずる
一体何を考えているのだろうか、ＩＳの整備？今の状況でも好成績を上げているのだ、整備する必要も無いだろう

「ラウラ、今からお前の指導は荒榎が行なう」
「――――なっ！？」

真中荒榎が指導を行なう、他の者なら両手を上げて喜んだだろうが、生憎私は違う
今のあいつには興味が無い、普通の人間では意味が無い
それに、指導に追加ではなく、これは変更
私の指導が教官からあいつに変わる、教官からの指導が消えるのだ

「教官、何故ですか！」
「その方がお前にとって良い事だからだ」

コレ以上話は無い、とでも言いたげに去ってゆく教官

訳が分からない、何故？いきなり過ぎる、理由が分からない
いや理由はわかっている、私が頼んだからだ、私が連れてきてと頼まなかったら良かったのだ
教官は私にとって良い事だと言った、ならば戻す気は無いだろうなら、私が戻さねばならない、すぐに戻し、また教官の指導を受けるのだ
あいつが誰であろうと関係無い、私はアイツを認めない
そうだ、アイツが教官よりも強いと言うのなら、私に負ける事は無いんだ
だったら、私がアイツに勝てば良いだけの事、勝負して、勝てば良い、そうすればまた教官の指導に戻る
邪魔な奴は帰らせれば良いだけの事

「……おい」
「ん？ああ、ども」

こちらを振り向きもせずに答える
この態度が余計に私を苛立たせる

「お前が私の指導官だそうだな」
「んー、そうらしいね、これからよろしく」
「っ、少しはこちらに顔を向けろ」

つい言ってしまった
顔を見て話す気は無かった、ただ態度に苛立ったから言ってしまった
口調も刺々しいが、そんな事はどうでも良かった
態度が気に食わない、ただそれだけが頭を占める
なのに、あいつの態度は変わらなかった

「いや、今ＩＳ見てるからさ、こっちが大切なんだよね」

そんな態度で……

「貴様……真中荒榎、私は貴様を認めない！」

「え、ああはい、それで？」

そんな態度で教官の隣に立つな！

「……っ！私と戦え！お前が勝ったら言う事を聞こう、もしお前が負けたら去れ、ここには教官で充分だ」

コレで良い、こいつに話しは通じないだろうし、私も話す事は無いただ宣言し、こちらが決めた方法で倒し、こちらが決めた内容を守らせる
こいつ相手にはそれで十分……そう思っていた

「はいはい、そんなことよりＩＳの調子を見ろよな……あ、ここも違う」

なのに、こいつの態度は変わらなかった
戦闘に対する恐怖も感じず、戦闘に対する熱意も感じず、戦闘に対する過剰な反応も無い
まるで、そんな事はどうでも良いとでも言わんばかりの態度
顔を一回もこちらに向けず、ただＩＳの整備を行う
話しも流し、戦闘についても詳しくは触れず、ただＩＳを調べ、直すこの時に気が付いた、こいつはおかしい、何かがおかしい
こっちは曲がりなりにも軍人、コレだけ睨めば背中だろうと、一般人だろうと何か変化が出ても可笑しくない
なのに……何も起きない
ＩＳを触り、数値を直し、また調べる、この行動だけを行なっている

ズレている、どれだけ世界を合わせようと、やはりズレているのだろう
もはや、目の前の存在を苛立たしいとは思えない
自己紹介のときとは何かが違う、鬼気迫るような雰囲気では無い、楽しそうな雰囲気でもない
しかし、何処か懐かしむような、優しいような手でＩＳに触れる、まるで我が子のように扱う
機械を、自分よりも大きな機械をだ……普通じゃない、確かに狂っている
だが、嫌な感じはしない、逆に何処か安心出来るような……
ああ、そうだ、これが私の求めていた存在だ
私が憧れた教官、それとは違うが、まさしく私が望んだ存在
そう考えると、何時の間にか彼の隣に移動していた
横で彼がシュヴァルツェア・レーゲンの中身を組替える
私の愛機となる存在、でも……嫌な気はしない
暫らく見ていると右目に異変を感じた……いや、異変ではない
戻っている、右目の感覚が、少しだけ戻っている
ヴォーダン・オージェの酷使により弱った感覚が、再び戻ってきている
何故だ？何のおかげだ？いや、憶測でなら分かる、目の前の存在
世界から狂っていると言われた少年、彼からは、何か懐かしいものを感じる
そんな事を考えていたら、彼の手が止まる
ビックリした様に肩がはね、動きが止まる
どうしたんだろうか？シュヴァルツェア・レーゲンの事だろうか？
そう考えたら、つい言葉が出ていた

「……変なのか？」
「……え？」
「シュヴァルツェア・レーゲンは変なのか？」

「え、いや、変と言えば変だけど……」
「……そうか」

それだけで良い、今はそれだけの会話で良い
多分、きっと、コレからも話す事が増えるだろうから・・・・……
今はコレだけで良い

今回はラウラのターン！（後書き）

書いた後に冷静になりました、ごめんなさい

うん、最初のラウラが怖い・・・・・これって病んでるよね？
あれ？俺が書くと女性キャラは全員ヤンデレにでもなるの？やだよ？

まぁ、ええ、うん・・・・後悔も反省もしている
出来る限り突っ込まないで欲しいです、はい

なんだろう、書いて言う間の自分がおかしいんです・・・・・・・

しゅばるつぇあれーげんって言い難いよな

「……こんな感じかな？」

一応、ドイツに来てから……五日経ちましたよ
何故か知らないけど、軍の中に寝室が用意されていましたよ……
千冬さんの頼みと言う事で泊まる事になりました、そっちの方が長くＩＳを調べられるし便利だし？
メロディアーナの事は悪いけど、父さんと母さんに任せた、学校の準備もやってくれるって言ってたから大丈夫だと思う
それよりも、今はこっちの方が重要なわけでして……

「……何で居るんだよ」
「別に、ただ見ているだけだ」

隣のラウラさん！……何かアニメでありそうだね、一部には凄い人気が出ると思うよ？
って事で……何故か隣にラウラ・ボーディヴィッヒがちょこんと座っています
ちなみに、ここはＩＳ整備室……いや、訓練しろと言いたいんだけど？千冬さんが良く許したな
まぁ、ただ見ているだけなら・……放置しても良いよね？

「……」
「……」

よし、放置決定だな
と言う訳で、とりあえずＩＳの調整に集中しますかね

数値がズレてるところを直して、無駄な機械を取って、無駄な数値を減らして、無駄なパーツを取る
コレを何回か行なって、とりあえずは実践に耐えれて、正確な射撃が出来る用にした
ただ、外したら結構スペース空いたし、処理能力も上がったし、バグも消えたし……いや、普通に使えば良かったのに
改造を一気にやるからバグが起きるんだよ、一つ一つ実践してからやれってての
ってか、これだと武装が足りないな……ってか、レールガンが無いじゃん、あとＡＩＣも無いし……アンカーも無いじゃん！
それなのに銃があったり、ナイフがあったり、バズーカがあったり……これって本当に黒い雨ですか？

「……あー、全部変えたい」
「許可をとろう、少し待っていろ」

……へ？
いやいやいや、そんな独り言にまで反応しなくても良いのに……
ってか足速くないか？もう見えないんですけど
……とりあえず、調整しようかな！

「許可が取れた、とりあえず一機は好きに使って良いそうだ」

「……本当に取れたんだ」

ドイツ大丈夫？まさかそんなに困ってるなんて……
ってか、全部触らせても良いのか？一機を好きにして良いとか言われたら・……オーバーホールして位置から作りなおすよ？

「よし、それじゃあ「コイツを使え」……シュヴァルツェア・レーゲン？」
「私の愛機では不満か？」
「え、いや、良いんだけど……」

一体何を考えているですかね？・……自分の愛機を渡すとか、しかもフルチューンを許すとか、考えが分かりません
まぁ、俺としては大万歳だけどね、改造して原作を同じにしてやんよ！……ってか原作こえてやんよ！

「よし、とりあえずバラすか」
「分かった」
「……いやいやいや、何やってるの？」
「解体する道具を集めているのだが？」
「解体なら俺一人で十分だから、千冬さんの訓練に行ったら？」
「お前は自分のＩＳ以外を動かせないと教官から聞いた、作成途中で動かす場合には人がいたほうが良いだろう？」
「いや、そうだけどさ……」
「何も問題は無い」

そう言って道具を再び集め出すラウラ……えー？
これは一体どんな状況ですか？ってか、千冬さんは何余計な事を言ってるんですか？
コレはアレだな、千冬さんがブラコンだって事も広めないと失礼だ

な、うん
まぁ、とりあえずバラすか

「よし、それじゃあ……ドライバーは「これだな」……どうも」

「次は「レンチ」・……あいよ」

「ふぅ、さ「コレだな」……」

「……終わった」

早かった……うん、手伝いが居ると確かに早い
一時間掛かる事も、二人なら４０分で終わったよ
ってか、約１次間ほどこっちに居るけどさ……

「訓練は良いのかよ」
「問題無い、教官には許可を貰ってある、お前は私の指導官になるかもしれないからな」
「……つながりが分からないのと、何時の間に俺はお前の指導官？になったんだよ」
「最初の会話で言っただろう」
「……よし、良い事を教えてやる、千冬さんはブラコンなんだ」
「……ブラコンとは何だ？」

そこからか！？せっかく復讐しようとか考えたのにそこから！？
もう良いよ！それを知らないなら言う必要も無いじゃん！
ってか、最初のときに会話とか覚えて無いんですけど……ＩＳを弄る事に集中してました
ってか千冬さん、俺は何時の間に指導官になったんで……１日目に言ってたな！

ってか指導ってどうやるんだよ……生活の指導とか言われてもさぁ、何をすれば良いのか分からないし
まぁ、それはおいおい考えるとしよう、まずはＩＳを組みたてないとどうしようもないしね

「よし、設計図でも書くか、どんな武器が欲しい？」
「言っても良いのか？」

そう聞くと不安げで、どこか期待の顔で聞いてくるラウラ
ってか、自分の意見が通らない愛機って駄目じゃん
愛機は自分のマイナーな調整で扱う代物なんだから、使いなれた武器、もしくは使えなれたというメリットを越えるほどの機能を持った武器じゃないとな
機能も自分にあった状態じゃないと、調整するほうが楽でも、使う人が難しかったら調整の意味が無い

「好きなだけ言え、その代わり使うのは少ないけどね」
「……それじゃあ――――――」

「――――後は、長距離に対するアンチマテリアルライフルが」
「もう良い、ってか無理」

多過ぎ！幾らなんでも多過ぎ！１分くらいの間に何で１５個も言えるんだよ！
そんなに入れたら不便だし、クイックチェンジが出来ないのなら邪魔になるだけ

「よし、とりあえずレールガンとワイヤー、ついでにプラズマ手刀で一端決定」
「・・・・・挙げたものが全然入って無いのだが・・・・・」
「いや、アンチマテリアルとか使うタイミングが無いし、マシンガンは最終的に自分が不利になる状況を作り出すし」
「・・・・・・・仕方ない」

最終的な形を教えてはいないが、それはこっちに任せると言う事で無理やり容認
ってか、アンチマテリアルとか使いにくいじゃん、ＩＳ用の大きさにしたら反動が余計に大きいし、反動を逃がすサポートを付けたら一時的に動きが停止する事になるし
うん、やっぱり使い難い、作る気はあったんだけど・・・・暫らくは止めておこう
反動の逃がし方を考えつくまでは手をつけないぞ

「さて、そんじゃ設計図を書きますか」
「レールガンは威力を重視して連射性はある程度落としても良いだろうと思う」
「それは賛成だ、レールガンなんて連射するにも限界が低い、それを考えるなら連射よりも単発の威力を上げた方が良いだろう」
「・・・・プラズマ手刀はリーチを長めに設定して、出来る限り薄く、

切る事を目的とした方が良いと思う」
「いや、それよりも頑丈にして、近距離における防御を目的として作った方が良いと思う、中距離なら他の武器で対応できる」
「……良く考えているんだな」
「当たり前だ、開発者だぞ？」

舐めないで貰おうか、開発者であり、操縦者でもある俺にとって武器は生命線なんだよ！
武器に拘らずに生きて行けると思うなよ！武器良く考えないで作った作品は全然使って無いんだよ！
戦場で趣味前回は妖幻でも無理なんだよ！あの超性能でも無理だったからね

「ワイヤーは１０番の鋼糸をより太く、それに電気が通りやすい様に合金にして作ろう、先端はひし形で良いだろうな、そっちの方が使いまわしが出来そうだ」
「あ、ああ、そうしてくれると助かる」
「よし、それじゃ先ずはレールガンから作るか、主体武器だし、コレが無いと始まらないだろうしな」
「ああ、そうだな」

ふふふ、目が丸くなってるぜガール……止めよ
こんな事で驚くなかれ！俺は開発者なんだからな、コレくらいは分かる……のが普通なんじゃないか？
いや、武器に関しては原作を思いだして、こうしたら強くならないかな？とか考えていたときがありましたからね、余裕ですよ
それにしても……新武器作っちゃ駄目かな？

しゅばるつぇあれーげんって言い難いよな（後書き）

ええ、えと、はい、ちょっと微妙な作品になったかも
えとですね、投稿ぎりぎりのタイミングで矛盾を見つけたので直し
たんですけど・・・・・やっぱり微妙かな？
あー、最近思うんですけどね？鈴が可愛くて仕方が無い！あの子は
かぁいい！
いや、。あの子もかぁいい！スレンダーで何が悪い！ツルペタなん
じゃない！スレンダーなんだ！
もうね、あの子のすばらしさをどうしたら皆に伝えられるのやら・・
・・・・・
うん、この作品では・・・・・・・みたいな？
色々とあるんですよね・・・・・・

さて、今回はシュバルツェア・レーゲンの作成に入ったところです
よ！やっと！やっと黒い雨が！
と言うか、やっぱり新しい武器とか付けたいですよね～
こう・・・・・・思いつかなかったけど、何か変わった武器を
あー、思いつかないー
出来たら新しい武器を加えたいなーなんて考えてます
それにしても・・・・・・前回で良い忘れたんですけどね？
クラリッサをハルフォーフって書いた前々回、皆さん分かりました？
前回の後書きで『前に出てきたハルフォーフってクラリッサのこと
なんですよ！クラリッサのファミリーネームは覚えている人は少な
かったかな？』とか書こうと考えてたんですけどね・・・・・・忘
れてた☆
ま、まぁ、今言ったから良しと言うことで・・・・・・駄目かな？

いざ決戦！（前書き）

ちょっと変かも・・・・

いざ決戦！

「よし……これで問題無いな」
「これが、私の新しい愛機……」

二人の前に立つのはシュヴァルツェア・レーゲンの完成形。
今までの様に傷ついていたりしない、黒の機体に赤、紫、黄色で色づけされたその機体は最高の状態まで調整されている
もちろん、ラウラに最適化する様に調整されたその機体、武器は未完成だが、それでも能力は高い。

「さて、後は武器を待つだけだな」
「ああ……これが」

ＡＩＣも付けてあり、これだけでも強いが、やはり武装が全て揃わないと意味が無い。
武装が揃った時、俺とラウラの戦いが行なわれる。
ラウラが初めて会ったときに言い放った言葉。
『私と戦え！お前が勝ったら言う事を聞こう、もしお前が負けたら去れ』
俺としては大歓迎。妖幻以外で弄ったＩＳ、調整がズレてるかも知りたいし、一度戦って見たいと思っていた。
ラウラがどう思っているかは知らないけど……戦う気は無いように見えるのは気のせいだろうか？

「失礼します。ラウラボーディヴィッヒ少佐はいますでしょうか」

扉が開き、白衣の人が入ってくる。開発部の人だな。
武装の製作を頼んである開発部から人が来るのは珍しい。俺の提案

した武器を作るために人員を総動員して製作中な筈だ。
ひょっとして何か失敗でもしたのだろうか？そんな事を考えつつも調整の手を止めない。

「……」

お、戻って……来た？何でそんなボーっとしてるんだ？
目線が合ってないし……何があった？

「……どうかした？」

つい声をかける、別に心配してるわけじゃないんだからね！ただあんたの事が心配で……心配してるじゃん！
まぁ、それくらい変なんだよ、今のラウラは。
ラウラは荒榎の方を向いたと思ったら、近付き言った。

「……武器が出来た、戦おう」
「……へ？」

武器が出来た？もう出来たのか？早いなオイって、もう戦うの！？早くない！？武器の試し撃ちとか要らないのか？

「……」

ラウラはそれだけ言って部屋から出ていった……ＩＳおいたままだけど？
いや、まぁ武器を取りに言ったんだろうけど……ここにいて持ってきたときに顔合わせとか気まずいから出ますか。
まぁ、戦ってみたかったし……丁度良いな

SIDE：OTHER

「両人、準備は良いな？」
「はい教官」
「何時でも良いですよ」
「よし……開始！」

千冬さんの合図で二人とも動く、荒榎は後ろに、ラウラは前に。
後退しながら焔顎をラウラに向け、引き金を引く荒榎。
前進しながらワイヤーを駆使し、荒榎に攻撃を仕掛けるラウラ。
荒榎が訓練所の端に当たったとき、ラウラのスピードが上がる。
瞬時加速と呼ばれるそれは、ワイヤーで前方を覆ったラウラを一つの弾丸とした。
荒榎は何発か撃つが、ワイヤーに弾かれているのを見ると急上昇。
ラウラの攻撃を避けながらも時々撃ち、ラウラの接近を少しずつ遅くする。
ラウラもその行動を予測していたのか、加速が減ると同じに空へと飛び立つ。
そこからは空中戦に持ちこんだ立体的な戦い。前後左右だけでなく、上下も加えた戦い。
荒榎が手に持つ焔顎が火を吹き、ラウラのレールガンが轟音を放つ。
ラウラがワイヤーを放てば荒榎が摩來をコール、拡散弾にて弾く。
荒榎が天弦をコールすれば、ラウラのレールガンが手から弾く。

無制限の動き、人の限界の動き。
ラウラのレールガンを荒榎が避け天弦をコール、引き金を引いたまま
まラウラを中心に回る。
それをラウラは地上に下り避ける、そのまま荒榎の下に潜りこみ、
レールガンを撃ちこむ。
それを前に出て避ける荒榎、天弦を格納し背中の桜花を開く。
それを見たラウラは手を荒榎に向け、桜花を使われる前にＡＩＣを
発動。
無理に稼動しようとする桜花が悲鳴を上げ、それを聞いた荒榎は桜
花を格納、剣戟をコールしラウラを襲撃させる。
プラズマ手刀でそれを弾いたラウラがワイヤーを使って剣戟を荒榎
に投げ返す。
ぶつかる前に剣戟を格納し、再び焔顎を両手にラウラの足をレール
ガンを撃つ。
ラウラは避けようとするが遅く、足に当たり不安定になる。
それを好機と見た荒榎、焔顎のマガジンが切れるまで撃ち、マガジ
ンのリロード、そしてまた撃ち出す。
不安定な中、荒榎の放った無数とも言えるほどの弾が避けられない
事を悟ったラウラは手を前に出しＡＩＣを発動、それと同じに横か
らワイヤーを放ち、出来る限りの玉を打ち落とす。
ワイヤーとＡＩＣにより全ての弾を防いだラウラが見たのは、背中
を丸め腕を抱いている状態の荒榎。
荒榎の背中の翼が震え、光を放ちながら開かれる。
そして――本当の無数と呼べる数の羽根がラウラを襲い、ラウラ
の意識は途切れた。

「あ、起きた」
「やっとか……荒榎も手加減をしてやれ」
「手加減したら怒るくせに……」

目が覚めると教官と真中荒榎が目に入る。
ああ、そっか、負けたんだ。
武器の製作から1週間経ち、武器が出来たと聞いたとき、やっとだ、そう思った
武器があり、愛機も完全な状態。開発者が弄ったのだ、最高状態だろう。
この時を待っていた、この時が来ない事も祈っていた。
彼、真中荒榎との決闘の日。私が勝てば彼は帰り、彼が勝てば私の指導は彼に変わる。
別に彼の指導が嫌な訳ではない、彼が来てからの生活は、彼の指導とも言える生活だったのだから。
その生活が嫌だった訳ではない、でも負けるのは嫌だった。でも勝つのも嫌だった。
何時の間にか私は彼の前にいた。だから彼に『この戦いを止めよう』そう言おうとした。
なのに、私の口は別の動きをした。自分の意思よりも強い何かに動かされる様に『武器が出来た、戦おう』
自分では止められない口がそう言っていた。そして、彼はそれを了承した。そして、私は負けた。
手を抜いていた訳じゃない、教官の前でそんな事は出来ない。
やる気がなかった訳じゃない、彼と戦える、そう考えただけ気分が高揚した。
慣れていなかったからじゃない、武器を知らなかったからでもない。

ちゃんと一時間の練習はしたし、今まで以上に私に馴染んだ。
武器は全て知っている。真中荒榎が作っていた隣で手伝ったし、形は私に合う様に作られていた。
技術が負けた訳ではない。ワイヤーで弾を弾くのは私独自の技術。
能力が負けた訳ではない。訓練だからＩＳの能力に制限をかけて同じにした。
反射神経が負けた訳ではない。相手の動きに逐一反応して動いていた。
思考能力が負けた訳ではない。次の方法を想定して動いた。
度胸が負けた訳でもない。相手が思いもよらないような方法で攻撃した。
想像のつかない方法で負けた訳ではない。何通りも考えた中に入っていた。
そこまでやって負けるとは思わなかった。何故負けたのか理解出来ない。
いや、多分分かってる。彼は対応が早いのだ。全ての反応が私に対応して変わっていた。
まるで、心を切り替えたかのように。まるで、心を上書きしたかのように。

「おい、さっきから一言も喋っていないが大丈夫か？」
「え、あ、はい教官」
「そうか、なら良い。しゃきっとしろ」

教官の声は私を震わせるが……それだけだ。
今まで感じていた感動も、今まで感じていた感情も、今まで感じていた緊張も感じない。

「さて、それじゃあラウラ・ボーディヴィッヒの指導は荒榎に頼む」
「あ、やっぱり本気なんですか……まぁ良いですけどね」

それは彼の声。何故だかは知らない。
だが、彼の声に教官を見た。
以前の教官の様に、感動し、何かを感じ、何故か緊張した。

「さて、指導官になったわけだけど……何をしたら良いのか分からない」
「はい」

声が震える。目が離せない。彼の藍色の瞳、吸い込まれるようなその目
その目が、私を離さない。私の目が疼く。何かが疼き、チクッとした傷みを感じる。

「……嫌なら千冬さんに言えば変えてもらえるけど？」
「はい……いいえ問題無いです」

彼で良い、彼が良い。彼が私の指導官であって欲しい。
あの強さに、もっと触れたい。あの瞳にもっと近付きたい。
あの手が、彼の力を体現する。あのネックレスが、彼の力。
全てが気になる、全てに憧れる。
だから、だからこそ――

「よろしくお願いします――――――――指導官」

私は彼を指導官としたい。

いざ決戦！（後書き）

あー、駄目だぁー、おーもーいーつーかーなーいー・・・・・・・
はぁ
ども、断耶と名乗っている者です・・・・・・と今更な説明はおいておきまして
新しく読んでくださっている方は初めまして・・・・・だけど読むなら最初から読んでますよね

えーっとですね、作品が止まるよい！書けないんだよい！と言い方を変えても何も変わらないわけですけどね
はい、ほんっとに思いつかなくなってきました
というか、最近は他の作品も書きたくてしょうがない状況なんです！
どうしよう・・・他の作品も書いてみたら考えもスッキリするのかな？
ニ作品以上書いている作者さんがいるのなら答えてください、というかお願いします
やっぱり作品に悩んだら他のものも書いてみたりするんですか？
いや、前提として他の作品を考えてしまう、という条件付なんですけどね
いや～、思うように集中できないんですよね、今回の作品もちょっと・・・・・・ね？

それでですよ、もし書く場合のことを考えるとですね、色々と書きたいという欲望があったり無かったり

1、オリジナルで科学の発達した世界
2、現代召還獣的な
3、いっその事ガンダムで！

4、最近人気な緋弾のアリア！

といった感じなんですよね・・・・・・・
どれにしようかなぁ・・・・・・・

上でこんなのが読みたい！とかあります？
いや、ん～、ひょっとしたら5で『この道一つで頑張って欲しい！』
の方が多かったりして・・・・・・

ノシ

ドイツの科学力は世界一ィィィィィィ！（前書き）

二重の意味でやっちまった☆

ドイツの科学力は世界一ィィィィィィ！

「指導官、おはようございます」
「……」
「今日は一十二〇〇より全体訓練があり、その後一三〇〇から個別訓練があります」
「……」
「訓練室が使えるのは一時間を想定しています。その後、越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）の制御方法を教えていただきたく、ご指導の程をお願いします」
「……」
「どうしましたか？」
「……何やってんの？」
「何といわれますと……指導官のスケジュールを」
「いや、そうじゃなくて……なんでいるの？」
「指導官のスケジュールを伝えに来ました」
「……」
「指導官、二度寝をするのであればスケジュールを変更ますが？」
「逆だろ！？」
「私は指導官のスケジュールに合わせての行動ですので、皆と時間が違おうと問題ありません」
「いや、でも同じ部隊なんだからさ。こう……仲を深める為にも」
「副隊長、隊員ともども仲は良好です」
「……いや、つい昨日まで違ったし」
「つい先日の戦闘後からです」
「……さいで」

いや、うん、もう疲れた。
そしてラウラが部屋の中に居るのは……もう慣れた。

三日前の戦闘？決闘？の次の日からですよ……起きたら横に立ってるんだ。
鍵は千冬さんがスペアを渡したらしいよ……。
そしてラウラの指導と戦闘訓練は何故か、何・故・か、俺に回ってきました。
指導は聞いたけどさ……何で戦闘まで？ついでに言うと瞳とか聞いてない……。
いや、まぁ、良いんだけどさ……なんか嵌められた気がする。
ってか、隊員とラウラって一夏と会うまで仲が悪いんじゃなかったか？
仲良くなる理由は忘れたけど……今回はラウラが簡単にやられて親近感でも出たのかな？
俺としては結構大変だったけどさ、対人戦とか二回目だし。ラウラは訓練でも何回と対人戦闘をこなしてる訳で慣れてたし。

「……今１１時じゃん」
「予定までは後５８分１４秒です」
「いや、そんなに細かく言わなくて良いから」

秒数とか何で分かるんだよ……部屋の時計には秒針ついてないぞ。
まぁ、そんな事は置いておいて、腹が減ったので

「……飯を食べよう」
「了解です」

「遅かったな。遅刻だ」
「申し訳ありません」
「俺は１１時に初めて聞きましたけどね」

１２時……２５分くらい？ご飯を食べて、顔を洗って、色々とやってたら何時の間にかで遅刻です。
急いで訓練室に来たら千冬さん登場！みたいな感じです、はい。

「で、他の人は何やってるんですか？」
「他の部隊との演習だ」

他の部隊？ドイツのＩＳ部隊ってここだけじゃなかったっけ？

「黒兎隊だけＩＳの所有数が多いことにイチャモンを付けてきた奴等が居たからな、今はそいつ等で遊んでるだろう」
「あ、遊んでるって……せめて虐めてるって言ってあげましょうよ」
「いや、お前のほうが酷いと思うが……」
「さて、誰も居ないなら訓練は無いし……帰っても？」
「ああ、他の訓練に回ってくれ」
「……帰っても？」
「使うなら第三訓練室が良いだろう」
「……帰っては駄目ですか」
「あたりまえだ、自分で受けた仕事はきちんとこなせ」
「あいあいさー」

こんな会話の中でもラウラは加わりませんよ。ずっと俺の後ろで待

機です。
時々反応するけど会話には加わりません。と言うか、時たま、ぼーっ、とした目で俺と千冬さんを見ていますよ。
なんだろうね、ちょっと怖いんだよね、千冬さんに対する心酔した目が……俺？俺には変な目ですが何か？

「よし、そんじゃ瞳の制御からで」
「よろしくお願いします」

「さて、それじゃあ始めようかね」

第三訓練室、広さは求めずに便利性を求めた練習室で、ＩＳではなく操縦者本人の訓練をする部屋。
ヴァーチャルシステムによりあらゆる空間を作り出す事が可能で、電磁パルス等のジャミング発生装置も、この部屋限定状態で使用可能だ。
あらゆる空間に絶える為に、部屋に入る時は専用の服があるが……
…正直ＩＳのアンダースーツと変わらない。むしろコレが元の気がする。

さて、その服には様々な装置が組みこまれており、それを通じて、部屋の中では電子パネルの表示が可能。
その電子パネルはドイツのスパコン『オリュンポス』と繋がっており、情報の提示が可能となっている。
また、専用服の中には身体を調べるパットも組みこまれており、使用者の情報を随時更新して提示する事が可能。
つまり、とても便利な服と便利な部屋なんだ。目に悪いけど。
いや、だってさ？ラウラだよ？俺は興味無いけど前世で大人気だったラウラが、ＩＳのアンダースーツ？みたいな服をきれ訓練するんだよ？
いや、うん。太ももとか色々と危ないんだよね。スーツも体にピッタリ、いやピッチリだし。
正確さを求めるのは良いけどさ……見た目も考えようよ。
男の操縦者が居ないからってさ……少しは恥じらいと言うものを持ってくれよ。コレが沢山な学校とか……行きたく無いんだけど
さて、文句を言うのも良いけど……ラウラが見てるんで始めますか。

「インディゴ・シンフォニア、解放６０％」
『瞳の解放を承諾、開放６０％』

え？解放が何かって？……いや、瞳だよ。名前言ったじゃん。
いやさ、前にフル稼働したら滅茶苦茶痛かったからさ、拘束を付けたんだよ。
妖幻から瞳を制御する事で瞳の暴走を押さえると共に、自分で自由に使いこなせる様にしました。
その代わりに常時接続なんだけど……あの痛みよりかはマシです、はい。
そうそう、ビックリの事があるんだよね。
このインディゴ・シンフォニア。交響の藍って名付けたは良いけど……ヴォーダン・オージェの上位版だった。うん。

インディゴ・シンフォニアの能力を少し落としたら、あら不思議！論理上ではヴォーダン・オージェになりました！って事なんだよね。いやぁ、流石はドイツ。劣化版とは言え神様のくれた能力を作るとか。ドイツの科学力は世界一ィィィィィィ！……間違えた。ドイツの化学力は世界一ィィィィィィ！だな。瞳は生体部品だから科学じゃなくて化学だな。

まぁ、それは良いとして。シンフォニアとオージェは近くにあると共鳴が起こるみたいで、上位体であるシンフォニアの稼動が高いほどオージェの効果も共鳴して上がるらしい。

んで、ラウラのオージェは壊れているけど、上位体であるシンフォニア引っ張られる形で近くに居ると正常に稼動する……らしい。

ラウラが言っているだけで、本人の気持ちの問題かもしれないし、本当に起きているのかもしれない。

本当かどうかは正直どっちでも良いんだけどね。シンフォニアを使ってたらラウラの訓練が楽なんだよね。

最初は俺の痛みが安全圏であり、駆動力が高い８０％から始めて、７８％，７６％，７４％って減らして今では６０％でも精密な操作が出来るようになっている。

今までの訓練の何倍かは知らないけど、結構速くなってると思うよ。

「……よし、インディゴ・シンフォニアの解放を５８％に移行」

『解放率の変更を承諾、５８％の落とします』

「……っ……」

２％変えただけなのに……今では顔に余裕が無いね。

そんなに難しいのか？まぁ、失敗だったとしても・……どうなんだろうね。

練習方法は至って簡単、ヴォーダンオージェを使って部屋に付いてる擬似ＩＳセンサーと連結、的を狙ってビームを撃つ。

勿論、難しくなるように的は高機動で動き回るし、中には小さい個

体もあったり、ビームを撃ってくる個体もある。
ビームは避けて、小さい的は中心ではなく移動先を考えて撃つ……
…正直俺には出来ないね。
俺は感覚で撃ってるし……インディゴ・シンフォニアにしても効果は高いけど……使えこなせてないし。
この訓練での命中率は……インディゴ・シンフォニアの稼働率を８０％にして、ようやく８９％。
稼働率が５８％の今だったら……７０％から８０％辺りかな？まぁ、ＩＳ同士の戦闘だと……頑張って５６％位？
低いって言うな！俺は精密じゃないんだよ！ばら撒くんだよ！例えるならデ○ナメスじゃなくて試作３○機！
弾幕はパワーだぜ！精密射撃とかマジ鬼畜！クラリッサさんの精密射撃とか特攻しかなかった俺がいる。
あの人ＩＳの名前が『黒い枝』とか変わった名前なのに精密射撃とか無いわ、マジ無いわ。アレはビックリした。
何でミサイルが追尾するんだよ、しかも長距離……ってか、あの武器ありえん、マジありえん。鬼畜にも程がある。特攻したら楽勝とか無いわ。
俺の頑張りを返せ。遠くからの弾幕はって避ける練習にしてあげようとか思った俺のささやかな優しさを返せ。何で弾幕の中ミサイルが当たるんだよ！どんだけ上手いんだよ……

「……指導官、もう一つお願いします」

ラウラの声ではっと画面を見ると……終わってたよ。
この訓練は使用者以外も見られるように壁にスクリーンが埋め込まれている。
そこに出ている結果を見ると……

「いや、まだ微妙だろ。もう少しコレでやれ」

「……了解」

まったく。命中率が７２％で何を言うんだよ……え？俺よりも高いじゃないかって？

待て、俺の最低よりかは高いが……シンフォニアの補助があってこれだぞ？

補助を無くしたらもっと下手になるんだぞ？せめて９０％はとってもらわないと……被弾回数も６回は多い。

せめて２回……いや、今の状態だとビームを撃ってくる敵は動きが遅いし、撃つときに必ず止まるから簡単なはずだ、１回まで減らすか。

まぁ、何故か三体ずつ囲んでくるが……停止結界もあるんだから、それくらいは当然だろ。

この程度だとだとシャロにボコられるかも……シャロが手加減するとは思えない（ガタガタブルブル

最近はシャロと会ってないけど……ＩＳ適正がＡに近いらしいよ……あれ？原作のシャロってそんなに強かった？

んでさ、学校……初っ端からシャロとラウラが戦闘な訳ですよ……不味いんじゃないか？

原作よりも強い？シャロを相手にするならラウラも強化しないとな。

せめて、共鳴無しで８７％の命中率は出来ないと……レールガンが当たらないとか不味いし。

「……被弾数３回、命中率が８８％か」

「そろそろ、次に移っても良いのでは？」

「……被弾数１を狙え。最低でも２回だ」

「……了解」

鬼で何が悪い！教え子が簡単にボコられるとか見たくないだろうが！……教え子だよな？

とにかく、ラウラにはシャロと同じ程度の力を手に入れてもらわないと……

「……くっ」

「はい被弾3回目。集中力落ちてきたから休憩な」

「まだやれます！」

「良いから休憩。俺が眠い」

いや、正直眠くは無いけど……コレ以上は面倒。

こっちはやる事が無いからな、とっくに集中力が切れてるんだよ。

見て教える……つまんないコレ。暇、流石にやる事が無さ過ぎる。

……俺もやるか？いやいや、ラウラの訓練にならない。

一人用のセンサーだから二人は無理だし……改造するか？いっその事二人で出来るように変えるか？

いや、でもそれだと軍に何か言われる可能性もあるか？……無いな、うん。

でもやっぱりなぁ……改造するとドイツに肩入れしたような形になるし……

「……作るか？」

自作で作るか？そうすれば持って帰れるし、ココの機械は改造しなくても済む。

でもゲームってそんな簡単に作れるのか？……作れるな、束さん作ってたし。

いや、でも束さんだし……俺でも作れるのか？……頑張れば出来そうだな、多分。

まぁ、試しに一回作ってみるか……うん。唸れ俺の頭！頑張って作れ！

と言った後に言うのもなんだが、ラウラの訓練があるから時間が無

いな……無理か？
いや、大丈夫だ。ＩＳの中でデータだけ作れば良いんだ。出来たらそれとＩＣチップか何かに入れて作れば良いんだ。

「よし、それで行こう」
「何がでしょうか」
「……何でも無い」
「そうですか」

……何で隣にいるんだよ！なんでだよ！何でこんなに広い部屋の中で隣に来るんだよ！
あれか？目は離さないってか？逃げるなと言いたいのか？俺の考えがもれてたのか？最終的にはＩＳの中で組むから問題ないんだけど！
……無視しよう。それが良い、そうしよう。
よし、そんじゃあ妖幻の右手と頭の部分だけ展開して、適当に……
…ああ、ここで良いや
新しくワードパットを作って……構成式ってどうなってるんだ？
失礼ながらオリュンポスに接続、ネットへの回線として利用して……
……ゲームの作成。
適当に……ＰＳ系統のゲームだろうな。ＳＯ○Ｙの会社にハッキングして、適当にゲームを１個ちょろまかしてと……

「……うわ、何この複雑な構成式」
「……」

全部は理解出来ないし……いや、そっち系の知識が無いからね。
でもまぁ……束さんのゲームとこのゲームを見比べて……あと一つくらいあると良いな。
どうせなら各会社から一つずつ……あ、これ販売停止のゲームじゃん……ちょろまかしても良いよね？

あとはネットゲームのＭＭＯ系が分かりやすいな……あ、ガンゲーのＭＭＯじゃん。
えっと、後はこれらを見比べて……この二つは構成が同じだな。
コレの構成式の名称は……ＮＥＸＵＳ？知らないけど良いや。
これの構成式と漁って……よし、大体の構成方法は纏まったな。
んで、製作としては武器の大きさ、キャラの動き、撃ってからのタイムラグ……メンドイ

「よし、もう良いや。飽きた」
「……」

内容が難し過ぎるんだって。こんなの分からないって。出来るとしても何日かかるか分からないし……
もっと楽な見本は無いのかよ……あるね。
めっちゃ目の前にあったわ、うん。さっきまで使ってたじゃん。
違うのは人数と武器くらいだし……これをコピーして弄れば良いじゃん！

ドイツの科学力は世界一ィィィィィィ！（後書き）

さて……やってしまった！

内容の修正をしていたら何故か他のコピーに変わってしまったために……後書きを忘れました☆

ひさしぶりな彼女が・・・・・（前書き）

二重の意味でやっちまった☆

ひさしぶりな彼女が・・・・・・

『……飽きた』
『……はい？』
『飽きた、帰る』
『え、あ、へ？』
『後は自力で頑張れ』
『え、あの、指導官？』
『……荒榎』
『あ、千冬さん？俺帰ります』
『し、指導官！？』
『ボーデヴィッヒ、少し落ち着け』
『あ、はい。すみません……』
『まったく。暫らく目を離したら荒榎の事には五月蝿くなって』
『す、すみません……』
『荒榎も荒榎だ』
『そ、そうです！どうしていきなり帰るなどと――』
『ＩＳの為の学園がおまえを探していた。帰るならそこで働け』
『――教官！？』
『……俺に働けと？』
『働かないなら無理矢理残す』
『普通に残す手は無いのですか！？』
『それじゃあ働いてきます』
『指導官！？』

「あれからもう……三日も経ってねぇや」

どんも、荒榎だす……どこの方便だ？知らんがな。
「……真面目につまらん」
ドイツから家に帰ってきて二日とちょっと……多分三時間くらい？
何で帰ったかって？……上にｋａｉｔｅａｒｕｉｆｋｄｊｕｈｄｄ。
……色々と大変な事になった気がするけど……まぁ良いや、きっと世界の心理だろう。
さて、それでだ。俺はハード系専門なんだな……ソフト無理だった（泣
いやね？ちゃんと調べたんだよ？関連雑誌とかも読んだし、途中からはドイツの科学者の方が出来てた……というか、最初から科学者の方が進んでた
うん、俺はＩＳに生きる男なんだよ、ゲームなんて良いんだよ！束さんのゲームは……なんで出来たんだ？
いや、あれは元があったからか……ただ中の数字を見比べて変えるだけだったし。
それにあれだ、数字しかなかったし……あれ？
ゲームってさ、コマンドで作るんだよな？雑誌にもそう書いてあったし……ひょっとしてパソコン表記？
正確な呼び方は二進法……だっけ？アレで書いてあった？え？ひょっとして、二進法なら俺にも作れる？
……駄目だな。分からん。そして作る気がしない。よし止めよう。ってな訳で、ゲーム？シュミレーション？はお終い。作る気が失せました。
こんな主人公だって……良いじゃない、とネタに走ってみたけど……
「暇。暇。暇暇暇。暇暇暇。暇暇暇暇暇暇ひｍ――」
「荒榎、私にもＩＳ……って何やってるの？」
「……メロディアーナ、変だと思うなら扉を引いてくれ」
扉の下に轢かれている手が痛い……自室だからって寝転ぶんじゃな

かったな
ってか、寝転んで転がるんじゃなかったな……寝転んで転がる。
これ如何に
それはそれとして、一つ言っておこう。
うん、メロディアーナがさ……大きいんだ。
前に薬を飲む前の大きさに戻ってるんだよね……喋り方は戻ってないけど。
これはあれだな、小説にしたらブーイングを受けても可笑しくない状態だな。
勘弁してくださいｂｙ断耶とか作者が書くだろうな。断耶が誰かは知らないけど。

「それで、一体何？」
「だから、私にもＩＳ作って」
「面倒だから嫌だ」
「……作ってくれるよね？」
「いや、泣いても駄目だからな」
「作ってくれるよね？　ウルウル」
「言っても駄目だからな！？」
「何で駄目なのよ……」
「いや、だから面倒だし。コアを作るのに束さんの許可も必要だし」
「……そう」

いや、うんそこまで落ち込まれると、こう……罪悪感が。
シュミレーションが出来れば良いんだけど……ドイツでも未だ完成してないし。
例え完成していても……俺の家族？　だからと言っても使わせてくれないだろうし。
作れれば良いんだけど……作れないし。いっその事束さんにお願い……見返りが怖いな！

「……勉強するか」
「へ？」

いや、うん。まぁ……偶には良いよね、勉強も。
この体になってから勉強とかやってない……おかげで社会とか１０点代なんだけどね！
でもまぁ、それを補うほどの才能がプラスされているこの体、悦に浸っても……俺って浸った？
とりあえず、前世でも触った事が無い分野だからな……深長に慎重を重ね……もう何が言いたいのかが分からない。
まずはパソコンでコマンドを調べて。組み方を憶えて。簡単な試作品を作って、それから作成……こんな感じか？

「とりあえずは検索から始めるか」
「だから、一体なんの事？」
「ああ、ＩＳを作るのは無理でも、その練習用のゲーム見たいな物を作ろうかなー、と」
「それで？」
「いや、ゲームとか作った事無いから……初心者コースとして調べる所から始めようかなと」

結構量があるな……サイト数も多いし。コレを全部見るのは一体何日――

「そっか。所で、そこ間違ってるよ」
「……」
「ここの表記は数値計算じゃなくて、ただの表示だよ。ここのサイトは間違いが多いから他のサイトにした方が良いね」
「……」

「やっぱり。軽く見ただけでも間違いが3箇所はあるもの。これなら……ほら。こっちの方が使いやすいと思うけど」

ブラウザの戻るを押して検索画面に『メロディのゲーム講習講座』と打ち込み検索し、一致した一件のサイトを開くメロディアーナ。

……よし、落ち着いたと思うから一言言おう。

「お前のサイトか？　お前のサイトなんだな？」

「ええ。良く分かったわね」

なんて、ちょっと恥ずかしげに言うメロディアーナ。

いやいやいや、メロディって思いっきり分かりやすいわ！

「ってか、何でコマンドが分かるんだよ！　軍に居たんだろ！？」

「……」

ちょ、何で影を背負って目を逸らすんだよ……

まさかだけど、コマンドーとコマンドを間違えたとか？いやいやいや、戦闘方法と表記を間違えたりは――

「コマンドって、コマンドーと似てるわよね」

「してた！？」

頭大丈夫か！？　まず形からして違うだろ！　ってか、それで良くＩＳに乗れたな……

「まぁ、そのおかげでウイルスが作れたから、便利ではあったんだけどね」

「その考えは絶対に間違っている」

「まぁ、そんなわけだから。コマンドは私のホームページを見たが

良いわよ」

そうか。俺の為にココまでしてくれるのか……メロディアーナ。

「よし。とりあえずお前が作れ」

「……出来た」

「お、マジで」

「出来たけど……何で私がやってるんだろう」

「いや、使うのはお前だからな」

「……なら仕方ないかな」

「そうそう。仕方ない事なんだって」

と、メロディアーナを誤魔化しつつファイルを見る……つもりだったけどパソコンじゃ無理だったから妖幻に転送。

転送と言いつつケーブルで繋ぐんだけど……これって転送？

さて……動かない……だと……。つまりあれですか？俺の要望通りに作ったら……新品のコアでしか動かない？

コアか……持ってるじゃん。五個はあるじゃん、ってか２５個あるじゃん……ひ、一つくらいなら。

「……荒榎、それは何？」
「え？ＩＳのコアだけ……ど……」
「……」
「……あったね☆」
「装備は荒榎が作ってね」
「……りぅかい」

うん、メロディアーナもＩＳ持ちになるんですね……

「まぁ、どうせ何時かは持つ事になるんだし……武器は何が良い？」
「え……じゃあ、サブマシンガンを四つと、アサルトライフルを二つ。ついでにグレネードをお願い。後は近接用にトンファーと遠距離用にスナイパーライフル。外付け部分は少なくて良いからその分武器を使いやすくお願いね」

結構多いな……ってか、思いっきり殲滅戦用の装備なんだけど！？ま、まぁ……うん。本人が良いって言うなら……良いよね！

「分かった。それじゃあサブマシンガンは銃口を長く、口径を小さく、肩付けは伸縮可能で弾数は８０。マガジンを安全の為に８個追加で。アサルトは銃口を少し長くして口径は少し大きく。肩付けは同じように伸縮可能で弾数は１００。予備のマガジンを４個とアクセサリーを入れておく。グレネードは空中戦闘では使い難いから空中機雷に変えて本体の後ろから出せるように付けておく。トンファーは腰につけて何時でも使えるようにして、スナイパーライフルはダットサイトとレーザーサイトを即座に変更できる様にしておく。これでおＫ？」
「……意外にやる気満々じゃない」
「そりゃあ、ねぇ？　楽しい事に変わりは無いから」

「ふぅん。まぁ悪い事じゃないから良いんだけど……」
「んじゃ、機体はどうする？」
「そうねぇ……それじゃあ」

「――その為のピックを太もも辺りに」
「いや、うん。もう止めて」

正直長い。どれだけ細かく決めてるんだよ……計画的？
ってか、もう憶えてないのが多いから……いいあ、３０個は言われたよ？全てを憶えろと？

「欲しい能力を紙に書いて提出ね」

メロディアーナが何かを言う前に自室を出て、暇つぶしに外に出る。
やっぱりだけど、主人公の住む所って環境が凄く良い所か、逆に凄く悪い所と極端なんだよね。
そしてここは凄く良い所。緑もあるし、空気は新鮮。機械だってちゃんとあるから不自由は無い。
周りに澄む人達も良い人ばかり……良い人……うん。
時たま変な人とか鬱陶しい人もいるけど……何時の間にか消えてるんだよね☆

え?俺が何かしたかって?残念ながら俺ではない。俺ではないし、俺の家族じゃない。

「酷いあっ君!束さんはあっ君の家族に入らぬぁいんだね!」
「思考を読むな!そして急な登場は止めてください!」
「えーだってー。あっ君との会話は他の誰にも邪魔を去れずに、口を挟まれずにラヴラヴでするんだよ☆」「
「邪魔って……誰もいないじゃないですか」
「え、あ、うん。誰もいない……うん」
「え、ちょ、何その反応!?え?誰かいるの?え、何それ怖い」
「大丈夫だ世あっ君、ここにいるのは束さんとあっ君と彼等だけだから」
「彼等誰!?」
「だからさぁ、あっ君との会話に入ってこないでね?見るのは良いけど入ってこないでね?」
「束さん何処見て話してるの!?そこには誰もいないよ!?」

そこにあるのは只のカメラだから!読者が世界を見るための心の窓だから!……って、なんの事を言ってるんだ?

「ホラ、ナンデコッチヲミテルノカナ?」
「その喋り方が怖い!そして見ている場所が怖い!」

それは只の銅像だからね!良く分からないおっさんの銅像!
なんか、溶けて頭が凹んでて怖いけど……
そして一言言いたい。最近この台詞が増えているがマジで言いたい。

「消したのアンタか」
「いぇーす☆」
「何してくれとんじゃぁぁぁぁぁ!」

町が変わっちゃったよ！原作の町が変わったよ！これだとひょっとしたら一夏の正確変わっちゃ……わないな、うん。
この時から朴念仁全開の一夏が変わるとか……考えつかないな、うん。

「だってぇ、あっ君への態度が最悪だしー。束さんの事ヲジロジロと欲望の眼差し見るしー。面倒でウザくて邪魔で消えて欲しくて…ついやっちゃった☆」
「よし。ちょっと殺してきます」
「うんあっ君。ちょっと止まろうかな」

良いじゃないか。束さんを欲望の眼差しで見るんでしょ？ケセバイイジャナイカ。
しかもジロジロ……よし、戸籍を消そう。殺しに行こう。もしくは海に沈めよう。そうだそれが良いじゃないか。
海に沈めて酸素ボンベを口につけてマラリア海峡に沈めよう。水没死じゃなくて圧死にしよう。

「まずはドラム缶の確保だな」
「一体何をスルのかな！？」
「え？圧死させます」
「それはちょっと惨過ぎると思うんだけど……あっ君がそこまで思ってくれるのなら良いかも／／／」
「さて、まずは一族全員集めるか」
「流石にやり過ぎだよね！？」
「いやだなぁ、冗談に決まってるじゃないですか」
「あ、そ、そうだよね！束さんとした事があっ君にうまく遊ばれちゃって・・・・あっ君にとって束さんはおも「燃やします」ちゃ……せめて最後まで言わせてくれないかな！？そして改変部分が違

うんじゃないかな！」
「そ、そんな訳無いじゃないですか！」
「違うの！？」
「違いますよ！？俺は束さんをおもちゃになんてしてませんからね！」
「そっちなの！？」
「え？そっち以外にありました？」
「あ、えっと……無いんじゃないかな」
「でしょ？一体何を言い出してるんですか」
「あ、あはは。そうだよね☆」

まったく。いきなり俺が束さんをおもちゃにしてるなんて言われても……俺は何も言ってなかったのになぁ。
考え事中にいきなりおもちゃなんて……束さん、恐ろしい子！

「あっ君は考え事をしていると人に話し掛けられても分からないんだね……」
「え？どうかしました？」
「何でも無いよぅ☆それよりあっ君！久しぶりに遊ぼうよー！」
「……えー」
「テンション下がった！？」
「いや、だって……束さんと遊ぶと機械がオーバーヒートするじゃないですか」
「大丈夫ぃ！ちゃんと作りなおして、放熱機も増やしたし。ＣＰＵも付けたしで６個付けたから問題ナッシング！」
「……なら良いんですけどね」
「それじゃあ行ってみよー☆」

ひさしぶりな彼女が・・・・・（後書き）

どんどん断耶です・・・何が言いたいんだろうね
さて、今回はやっちまったぜ☆
ついついメロディアーナを戻してしまった・・・いや、これは前から考えていたんだけどね！
あれなんですよ、前の一話だけ小さくしようと思ったんですけど・・・・戻すタイミングを見失っちまったぜ☆
そんなこんなで今の今まで放置でした・・・・すんません
そしてメロディのホムペｗｗｗ
思いっきりネタです、というかネタでしかありません
特に今後役立てる気は・・・・ネタくらいしか（笑
そして！ようやく！久しぶりに束さん登場！
いやー、束さんを出すタイミングが消えてしまったんですよね・・・・・タイミングをい失うことが多いこの頃ですｏｒｚ
久しぶりに束さんを書いたら・・凄く新鮮な感じがやヴぁい、これは癖になりそうです
レトアも近頃出てくるかも・・・本当は原作に入るまではあまり出さない気だったんですけど、それではいけないと最近気づきましたそして、今回は荒榎をボケにまわして束さんを突っ込みに回してみたり・・・・・正直どうなんでしょうね、ひょっとしたらキャラ崩壊？

さて、この作品はこれｗくらいにしておいて・・・・・アリアを始めますた！
といっても、まだ二話だけなんですけどね・・・・そして原作入ってない
ま、まぁ、気が向いたら見てくれると・・・・いや、でもまだ短

いし・・・・・・・
まぁ
そんな感じで頑張っていきますよ☆
二つ同時平行だと書くのは遅くなるけどネタには困らないと言うすばらしい状況になりますね（キラキラ
うわ、今日のテンションがおかしいぜ☆

一から十まで束さん尽くし！（前書き）

久しぶりに束さんルート！

一から十まで束さん尽くし！

さて……疲れました。
一言目がコレってのも変だけど……疲れました。
いやさ、ただいま束さん家……の束さんの部屋と言う名のプレハブです。
束さんとゲームをしてますた……あ、となりでなってる変な音とか、機械が焼けてる匂いとかは気にしないでね、ＣＰＵが持たなかっただけだから。

「……勝てそうだったのに！っこのゲーム機が動いてたら束さんの勝ちだったんだお！」
「はいはい……ってか、最初から俺防衛戦でしたしね」
「そうだお！あっ君が攻撃してこないのに、守るのが強過ぎたからつい本気で……動かなくなっちゃった」
「最終的には防衛ラインギリギリでしたし……あれで俺が勝ったらある意味凄いですよ」

え？ゲームの内容？ファイヤーウォールとウイルスで戦い合いますが何か？
二つを常時変更しつつ、プログラムは毎回2分で作る自作。
……何でウイルスは作れるんだろうね（泣
そんなこんなで始めたこのゲーム……二つの同時作業は苦手です。
束さんの攻防知ってるか？あの人ボール型のキーボードを両手で使ってるんだぜ？しかも時々二つでプログラミングを作ったり片手で作ったり。
真面目に可笑しいから、うん。あの人、きっと1秒を5秒に感じてるんだよ、だって手が止まらないんだぜ？

しかもプログラムの動きが滑らかなんだよ！俺はそれに対抗するので精一杯なんですよ！束さんのファイヤーウォールに辿り着けないんですよ！
マジ可笑しい……そして束さんが調子に乗って機械がショート。ショートしなかったら後3秒でやられてました。
ってか……束さんってゲームで怒るんだね。いや、怒ると言うよりも……駄々をこねるに似てるけど。

「あっ君に勝ってバツゲームやろうと思ってたのに！」
「聞いていない事実！」
「せっかく勝ってきたのにー！」
「そしてポッキーだと！？」
「あっ君！もう一回だお！」
「そしてバツゲームが出来るまで続くんですね分かります」
「よいしょよいしょ……これでまだ出来るね☆」
「うん、そしてまた壊れるんでしょうね」
「それじゃあ束さんが守るからあっ君が責めで」
「いやいや、そんな決まりは無いじゃないですか、そして責めは違う！攻めだ！」
「あっ君に責められる束さん……はぅ、ドキドキだよぉ」
「そんな内容は一切ありません！」
「あっ君は束さんを捨てるの！？」
「捨てるも何も拾ってないから！」
「拾うだなんて……あっ君の中では束さんは物、そして拾ったものは……きゃ☆」
「な・に・も・無・い！」

速過ぎる！ボケが速くて休む間が無いぞ！
全小説の突っ込み系の子は全員これを味わっているのか！
そして暑い……束さんのプレハブにエアコンがついていることに突

っ込むべきなのか、それとも秋なのに暖房がついていることに突っ込むべきなのか、それが問題だ
あ、リモコンが落ちて……電池が無いじゃないか。

「暑いね～、こんなに暑いと服が脱ぎたくなるね☆」
「ならん！そんな気にはならん！」
「さてあっ君、服を脱ぎ脱ぎだお！」
「そしてまさかの俺に脱げと！？女子脱衣ではなく男子だと！？」
「うっひっひ～」
「束さんが言ってるのに怖いのは何故だ！」
「あっ君でモフモフだー☆」
「そのキグルミどこから出したぁぁぁぁ！」
「あっ君のためなら例え火の中槍の中、ＩＳの中あっ君の中！」
「俺の中には入らないでください！」
「ふむ……じゃあ束さんが脱ぐお」
「やめて！即効で巻きますよ」
「巻くだなんて……おやめになってー、良いではないかー良いではないかー」
「一人で言うのは楽しいですか？」
「つまんないね」
「じゃあ止めましょうよ」
「違うよ！そこは、一緒にやろうか？って言って青春ポイントを上げるとこだお！」
「青春ポイントってなんですか！そして俺はやりません」
「んしょんしょ……おやめになってー」
「……」
「おやめになってー」
「……」
「……おやめに」
「いや、言わないから」

「あっ君のケチ！」
「確かに着物の帯を何処からともなく出して付けた束さんからしたらケチかもしれないがコレが正義だ！」
「そんな正義は燃やして埋めて沈めれば良いんだよ！」
「どれが正解か分からない！」
「「……」」

暑い……どれだけはしゃいでも暑い。というか、余計に暑い。
いや、分かってた事だけどさ、束さんが始めたからなんとなくのってさ……暑いのが悪い。
そして一言。秋に暖房はキツイです。まだ夏と変わらない温度なのに暖房とか……ＩＳの保護が無かったら脱水症状が出ても可笑しくないね
……電池探すか。と考えた目の前に電池が十個ほど落ちてるじゃないですか。
残量が違うのを使うと持ちが短いらしいけど……今はそんな事を言っている余裕が無いから適当で良いや。
束さんはどうする事も無く倒れてるし……

「あっ君暑いー」
「俺が暑いんじゃない、暖房が暑いんです」
「おかしいなー、冷房をつけてるのに」
「だからついてるのは暖房です」
「うー、こうなったら裸に」
「ならんでよろしい！ほら、冷房に変えましたから」
「うー……あ、涼しい」

なんだろうね、この人。本当に、本当に偶にだけど……凄い可愛い顔するよね。
可愛いと言うか、純粋と言うか、綺麗と言うか……ああもう！

「……」
「ふみゅ？あっ君はなんで顔を逸らしているのかな？かな？」
「……なんででしょうね」
「……おお！寝転ぶと胸が強調されるんだね☆」
「あえて言おう、気づいたのは束さんだけです」
「またまた～、あっ君は益せてるんだね☆」
「濡れ衣だ！濡れ衣以外の何でも無い！」
「じゃあ一体なんで顔を逸らすのかな？」
「……」
「なーんで？」

これ……事実を言ったら、それはそれでからかわれる訳で……詰んだよね？

「ほらほらー……見ても、良いんだよ？」
「何でこのタイミングで普通に話すんだよ！」

俺は見ない！俺は変態じゃない！……いや、見ないほうが変態なのか？
べ、別に見たい訳じゃなくてだな、見ないと男として変態なのではないかと考えた結果な訳で……
み、見たくて見るんじゃないからな！

「それじゃあ何しよっか？」
「タイミングが悪すぎる！」
「あっ君が壊れた！？」

なんだよこのタイミング！ちょっと頭がおかしくなってきて仕方ないよな！とか考えた瞬間に終わるのか！

これはアレか！俺の考えがいけなかった事に対する神の罰か！……
いや、冷静になって考えると見ていたら危なかったんじゃ……神様
ありがとう！
あれだな、神様をリアルで見ている分ありがたみが湧くな、

「あっ君……」
「あ、はい、どうしました？」
「あっ君がそんなに考えこんでいると……」
「考えこんでいると？」
「思わず見せちゃいそうになるんだよ？」
「さあ遊びましょう！」

色々とあった後に見るとか最悪過ぎるわ！アレだけ考えて、その後
に神様ありがとうとか言っておいて見るとか……無理でしょ

「んー、遊ぶ道具が無いですね」
「あっ君のためならリアル人生ゲームを作ってくるお！」
「それは只の人生だ！」
「あっ君が結婚した、周りの人からルーレットの外枠の5倍貰う」
「やけに細かく出来てますね！？」
「ちなみに束さんは支払わないよ」
「ちょ、それじゃあゲームにならないじゃないですか。……ああ、
つまり夜逃げもアリと」
「束さんがお嫁さんだお！」
「その分リアリティが上がったよ！？」
「ほぅほぅ、つまりあっ君は束さんとの結婚が目に浮かぶと……ド
キドキ」
「いやいやいや、そんな事は一言も言ってないですけどね！
「新郎、あっ君。新婦、篠ノ乃束。……あなた」
「あなた、じゃ無いでしょうが！結婚してません！そして何で俺の

名前があっ君で固定されてるんですか！」
「してない……じゃあする？」
「そこに反応しますか！？」
「ほらあっ君、あんな所に教会が」
「普通街中にあるかぁぁぁぁぁ！」

何であるんだよ！無いだろ！ありえないだろ！何で町の中に教会があるんだよ！
しかも、何でこのタイミングで式を挙げてるんですか！誰だよそいつ！

『いやー、まさか先生が結婚するなんてな』
『思わなかったよね。先生は何時までも独身だと思ってた』
『まさか朝那珂尚江に告白する人がいるなんてねー』

お・れ・の・た・ん・に・ん！元だけど！
え？結婚？マジで？うわー、超喜べねぇ……タイミングとか考えろと言いたいけど分からないだろうから怒るだけにしておこう！
ってか、結婚してなかったのか……何歳なんだ？

「ほえー、結婚式だね☆」
「うん、そんな笑顔で見られても何もならないですからね」
「あっ君……タバラカに一夫多妻は禁止されて無いんだよ？」
「しらねぇよ！第一そんな人はいませんからね！」
「……あっ君はいっ君を馬鹿に出来ないと思うよ」
「いや、アイツは唐変朴ですからね？自然に大勢を侍らせるようなハーレム野郎ですからね？」
「あっ君だと……４人かな？５人かな？」
「何処の情報で誰の事かが非情に気になるんですけど！」
「えっと、先ずは束さんでー」

「はいダウト」
「……それじゃああっ君！ダウトで勝負しよー！」
「あ、ダウトなら……いやでも束さんだし」
「適当にバラララー、そして適当にあまりを作りまーす☆」
「いや、普通は全部……二人だと無理ですね」
「だから余りを作るんだお☆！」
「それってダウト！？」
「てやんでぃ！束さん特別ルールでぃ！」
「……ルール説明からお願いします」
「んとねー、ダウトッ！ってやって、間違ってたら出てるカード全部と、山札から5枚引きまーす☆」
「ああ、つまり時間が経つほど不利になると」
「それでね、山札が１０枚になったら引き分けなんだお」
「あえて全部は引かせない……これって本当に束さんが考えたんですか？」
「……それじゃあ始めよぉー」
「うん、違うんですね」

きっと千冬さんかな？もしかしたらメロディアーナ……母さん？いや父さんか？
束さんの家族が出てこないのは……ご都合上で良いんじゃないかな！

「全員どっか行っちゃってるよ」
「……へ？」
「箒ちゃんとお父さんお母さんは……今は何処にいるんだろうね」
「……」

始めて見た束さんの寂しそうな顔……束さんの顔って何時もは笑いか無関心なんだよね。
でも……やっぱり家族には無関心ではいられないか。

……ってか、箒ちゃんも消えたんだったよな？……

……だれが束さんのストッパーになるんだ？

さて……帰るか。

「あっ君、そこの扉は鍵を締めてあるからねー」

「素早いだと！？ならば破壊してでも――」

「ちなみに強い衝撃で爆弾に火がつきまーす」

「何で！？」

「えーだってあっ君が逃げそうだったから」

「そんな恋した少女のような顔で恐ろしい事をしないでください！」

「そう、私は恋する乙女なんだよ」

「恋する乙女は右手にスイッチを持っていないです！」

「ああ、これが爆弾スイッチなんだお！」

「もっと危険なものを持ち出さないでください！」

「おっと、いけないいけない。束さんには用事があるのでした」

「そうですか、それじゃあ俺は帰るんで・・・扉を開けてもらえますか？スイッチを押さずに！」

「……あっ君。ちょっとこっち来てくれるかな？」

「あ、はい。分かりましたからスイッチを――」

「ありがとね」

いきなり言われた御礼の言葉、それと同じに唇に違和感。

いや、違和感というより…柔らかい感覚。前にも味わった……ああ、ミサイルが来た時だ。

確かあの時は――――キスだったな。

「……さて、あっ君パワーも充電できたから、束さんは旅に出ます」

「……へ？」

「んとねー、ここにいると知らない人が五月蝿いからね、束さんは

ちょっと遠くに遊びに行ってくるんだお」
「そんな、急に言われても……ってか、さっきの」
「それじゃああっ君！しばらくの、ばいばいきーん☆」

そういって、束さんはプレハブの地かにパイプで下りていった。
これは・・…追いかけられる雰囲気じゃないよね。
まぁ、明日行くのなら、早起きして待っていれば会えるし……その時で良いや。
さて、気分転換は出来たし……よく冷静だな俺。
束さんにキスされたのに・・……いや、うん、冷静じゃないな。
顔熱い、滅茶苦茶熱い、ってか何でされてんの！？普通の男女なら逆……いや、やりたい訳じゃないけどさ！
ってか、急過ぎるだろ！もうちょっと決心してからにして欲しいな！なんて思ったり！
つーか、ファーストキスが海の上、遥か上空でミサイルとか戦闘機とかの危険地帯で。
二回目がプレハブってなんだよ！そして二度とも束さんだし！もう訳わかんないよ！
なんなんだよ！何がしたいんだよ！恋人じゃあるまいし、ってか好きでもあるまいし！
年齢的にありえないでしょ！中学生と……もう大人じゃん！年齢的に離れすぎだって！
普通新人社員が中学生に惚れるか？いいや惚れない！だからありえない！

「……うん、きっとおふざけなんだ」

一から十まで束さん尽くし！（後書き）

どんも、断耶です
うちのパソコンがぶっ壊れますた
いや、書いているのは別の古いノーパソだったんですけどね
今は父のノーパソを借りて投稿ですよ・・・・・・はぁ
なんで壊れたんだろうね・・・いや、それは良いや

さて、今回は思いっきり束さんルートですよ！
そして今更な話題！束さん以外キスしてねぇ！
いや、シャロのほっぺはノーカンですよ？そんな純情な話で納得する読者はいませんよね？俺も納得しない！
いや、ドロドロにする気は・・・・・・ないですよ？
いや、今の間？気にしないでください！
それにしても・・・・・ラウラのフラグたった時にやっておくんだった！
そしてシャロは学校で出来るし・・・いや、ラウラも出来るかさて・・・・・これを投稿し終わっている時にはレトアがナイフを持って近くにいると思うので遺書を用意しておこうかな！
次回か、その次には学校に入ると思います！
結構飛ぶかと思いますがご了承・・・出来ますか？
出来ないのなら伸ばして話を入れますけど・・・・・？

束さんの行動力には唖然です

1日の始まり、楽しいながらも疲れる毎日。
メロディアーナのＩＳを作り、束さんと話した昨日。
今日は寝起きが素晴らしいね。とても良い朝だ。
ベットから起き、服を着替え、下に下りる。
下では母さんがキッチンに立って料理をしている。
何時もは新聞を読んでいる父さん、今日は出掛けているらしい。

「おはよう母さん」
「おはよう荒榎」
「おはようございます……」

素晴らしく綺麗な空、光が差し込む家で母さんに挨拶。
母さんの返事も何時もより綺麗に聞こえる。
それと同じに降りてくるメロディアーナ。
朝は苦手な様で、欠伸をして、眠そうな目でフラフラと席に着いた。
偶には朝のニュースでも見てみようかな。そんな軽い気持ちでテレビをつけ――

『こちら火災現場です。この宅の家族は、かの有名な篠ノ乃家だそうで、運良く引越しが終わった後でした。引火したものが何かは特定できていませんが、燃えたのは庭に立てられているプレハブな事から、中にいれてあった何かが炎上したと考えられています。今も消防車五台による消火が行なわれていますが、どうやら中の火種が燃え尽きていない様で、炎は弱まる事がありません…』
『おい、あそこを見ろよ』
『ん？……おっと！消防員が中への突入をするようです！六人が今、

プレハブの中に！』
『何だコレ！中に入れないぞ！』
『押し返される！』
『諦めるな！中の物を手に入れるんだ！』
『話しからすると中に何かがあるそうですね……おっと！弾かれました！一体何があったのでしょうか！消防員が弾かれてしまいました！』
『クソッ！』
『…おい、あれって消防員か？』
『いや、違う！アレは消防員ではありません！消防服を着た別の誰かです！』
『おい、行くぞ！』
『あのすみません。貴方達は一体』
『テレビ撮ってんじゃねぇよ！』
『あ、ちょっと、乱暴は――――』
「コレが今の篠ノ乃家の現状です。元政治家の田村さん、この件をどう思いますか？」
「いやー、あの消防服の人には覚えがありますね。あの人達は政府お抱えのシークレットサービスですよ」
「政府お抱えですか……つまり、政府が住居に進入しようとしたと？」
「ええ。まぁ、あの篠ノ乃さんのお宅ですし。私が聞いた限りで開発者、篠ノ乃束があそこのプレハブに済んでいたそうです」
「つまり、あの中には篠ノ乃束さんの作ったＩＳの部品が眠っている可能性も」
「きっと日本政府はそれを秘密裏に取りたかったんでしょうね」
「なるほど、つまり――――――」
『只今電波が混乱しています。暫らくお待ちください』
花畑の絵が流れ、川の流れる音がしているテレビ……

「……」

――――――すぐ消した。

「束さんの馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

何で家燃やしてるんだよ！ってか束さん何処！？

死んで……るわけはない、１００％ありえないな、うん。

ってか、あの炎って……前の秘密基地と同じじゃね？……スイッチで燃やしたんだろうね！

ってか、コレじゃ昨日の事が聞けないじゃないか！あの人なにやってるんだよ！

あ、ＩＳの通信で……あの人の使ってるＩＳの製造番号何！？ってか使ってないでしょ！

連絡方法消えたじゃん！何やってんだよ！……いや、待て。

思い出せ。

原作だ。こんな時こそ役に立つのが原作だ。あの人は確か途中で家族を分かれて……何処に行ったんだろうね☆

書いてなかったね！読んだのは６？７？その辺りじゃんね！確か６

巻！
えと、えと……あれだキャノンボールの所までだ。さて問題。束さんの隠れ家は明かされているでしょうか？
……無いね！一回も無いね！場所は書かれてなかったね！ひょっとしたら今出ている本には載ってるのかな？買えないけど。
あれだね、神様にＩＳの小説を送ってくれるように言っておくんだったね……無理か？
流石にその作品の中に居る訳ですから……無理か。

「……つまりあれだ、福音まで会えないんだね」

……あれ？全然悲しくないわ。
寧ろちょっと喜んでる？待て待て待て、それじゃあ俺が非情みたいじゃないか。
良く考えろ、束さんが居る生活と、束さんが居ない生活。
まずは束さんが居る生活。

『あっ君遊ぼうよ☆』
『今ちょっと手が離せないんですよ』
『あっ君、まさか不倫！？……相手の女は潰すから大丈夫だお！』
『何処が！？そして結婚してないからね！』
『そうだったね。まだしてないんだったよ』
『そうですよ。だからちょっと――』
『はい、あっ君の婚約指輪』
『何故にある！？って名前まで彫ってあるし！』
『坊やだからさ☆』
『いや意味不明ですからね！』
「……ここまでは、いかないと思う……多分」

いや、まぁ、うん、感覚でやってるだけだから……大丈夫だよね！

よし、それじゃあ束さんがいない生活

『荒榎、まだ出来ないの？』
『もうちょい待って』
『分かったわ』
『荒榎、遊びに来たよ！』
「シャロ出てきたよ！？」

え？あれ？俺の思考ってどうなってるの！？なんでシャロ！？……
最近会ってないな
いや、まぁ、住んでる国が違うしね……ま、まぁ続けて見ようかな！

『シャロ！？どうやって？』
『ＩＳで飛んできたんだよ』
『……怒られなかった？』
『大丈夫――全部撃墜したから』
「俺大丈夫か！？」

いやいやいやいやいいあいあいあいあいや！、シャロはそんな
性格じゃない！……今も違うよね。
うん、駄目だ。下手に人を入れると大変な事になるな……シャロ抜
きだ。

『はろー荒榎』
「最初がレトアだと！？」

ああ、うん、もう駄目だね俺。まぁ、とりあえずだ……あんまり変
わらないんじゃね？
うん、束さんがいない。特に問題無し。うん、大丈夫じゃん。
いや、でも誰も来なかった場合は……むしろ静かで休めるじゃん。

あれ？ひょっとして……喜ぶシーン？
いや、まぁ遅いけどさ……

「……泣くシーンでは無かったな」
「何の話しか分からないが、そうか」
「そうなんじゃないですか？」

うん、もう遅いよね。千冬さんが普通に隣に立ってるとか気づくのも遅いよね……。
何時の間に居たんだろうね……やっぱり身体能力が可笑しいんじゃないかな。
きっと人を超越した人なんだろうね……。

「私は人間だ」
「うん、人の考えを読める時点で違うと思う」
「……元気が無いな。束の事がそんなにショックか？」
「いや全く」
「……それはそれでアイツがショックを受けそうだな」
「さっきまで色々と考えていたら疲れましてね」
「考えで疲れるお前も可笑しいと思うが……」
「いや、束さんの考えを想像すると疲れますよ？」
「……納得だな」

それにしても……良く燃えてるね
まだ火が消えてないよ。それなのに火が移らないとか……どんな仕組み？
まぁ、束さんだからな、化学の方も出来るのかなぁ……

「……流石にそろそろ鎮火しないと不味いんじゃないか？」
「でしょうねぇ……消える兆しが見えないですけど」

「何で五台もの消防車を使っても弱まらないんだ……」
「坊やだからさ」
「意味が分からんぞ……」
「うん、俺も分かりません」

ついさっきの想像で束さんが言った言葉を言っていただけですが何か。

「むしろ……あの火って、水で増してませんか？」
「……気のせいだ」
「いやいやいや、最初と比べるとやっぱりちょっとづつだけど大きくなってますって」
「……よし、荒榎。――――消せ」
「おおう、結局は俺が消すのか……どうやって？」
「凍らせれば良いだろう」

凍り……ますよね？寧ろ凍らなかったら俺が欲しいです。
その炎を俺にください。便利だって、水をかけても消えないんだよ？
海の中は無理でも、海岸でとか、雨の日にも使えるし……超便利じゃん。
いっその事、それでタバラカにアミューズメントパークでも……タバラカ忘れてたわ。
ひょっとしたら束さんがしたりして……捜すか。まぁ、今は消す事の方が大事だし。
妖幻を部分展開、右手と頭部のみの展開で、一気に凍らせる。

「凍らない！？……いや、違う溶けてるんだ」

熱源感知センサーだと、凍らせた瞬間に周りの温度が急激に上がった。

中の温度を一定に保とうとしてるのか？だとしたら一気に全部を凍らせないと……

「……千冬さん。ちょっと向こうで暴れてきてくれませんか？」
「いや、理由は分かるが……一夏に迷惑が」
「ってか、今更な話し何時の間に戻ってきたんですか？」
「本当に今更だな……家の近くで火事が起きたと聞いたから急いで戻ってきた」
「一夏が心配で心配で……」
「……」
「やっぱりブラコンは認めるべきだと思いますよ……ってか、一夏を誰かに預けましょうよ」
「私以外の誰かが育てるなど認めん！」
「うん、ブラコンは健在。というより……より強くなってる気がする」
「第一、２ヶ月に一度は帰ってきているから問題無い。あいつも中学生だ」
「いや、同じ中学生から言わせてもらいますと……せめて月三回にしてあげようよ」

え？違う？いやいやいや、千冬さんの収入が無かったら生活出来ないじゃないですか、それは不味いからね。
金を上げろ？……千冬さんに殺されろと？

「そうすると収入がだな……一夏の将来の貯蓄が無くなってしまう」
「あんたは一体何処まで面倒をみる気なんだよ！」
「無論、揺り篭から墓場までだ」
「その時あんたは死んでいる！……いや、ひょっとしたら生きてるかも。多分生きてる」

千冬さんだし、寿命の一つや二つは簡単に延ばしそうだよね……まぁ、一夏が死んだら一緒に死ぬかもしれないけど。

「まぁ、それは置いておいて……あの人だかりが邪魔です。下手をすると人が凍る」

「不味いな。炎は大きくなってるぞ」

「……千冬さん、せめて暮桜で木を抜いて投げる。でも良いですから」

「ならお前がやれば良いだろう」

「……妖幻にそんな力は無いんです」

「……」

「普通のＩＳよりも地からが弱いんですよ。その分他に回してあるから」

しかも、束さんの作った暮桜とどっちが強いかって？暮桜に決まってるじゃないか。

メロディアーナの時は、まだ試作状態のＩＳだったから互角だったものを、基本のＩＳと力比べをしたら負けますよ、ええ。

と、言ってもね少しの差だからあんまり関係無いし。第一……妖幻近接出来ないから。

銃とかトリガーを引く力と反動を逃がす力があれば問題ない！

「……退いていろ」

そういって、ちょっと後ろにある木まで歩いていく千冬さん。

そして、右手だけの部分展開で木を掴み、引っこ抜く。

「きゃー千冬さん素敵ー」

「棒で言われても、嬉しくないっ！」

1周回して勢いをつけてからの投擲……千冬さん?その方向には俺が居るんですけど?

「危なっ!?頭掠ったよ!?」
「それくらいなら大丈夫だ。ＩＳの絶対防御もあるのだからな」
「いや、それはそうですけど……心情的な」
「それよりも、ほれ。人垣が割れたぞ」
「え、ああはいはい……それでもやり難い」
「仕方ないだろう、そんな奥に投げれば怪我人が出るだろうし」
「まぁ、こんなもんですよね……センサーを前面以外停止。画像処理機構を連結して前面に回してパネルを使用して拡大」
「……お前のはＩＳを超えていると思うが」
「……もうちょっと拡大、５．０倍まで拡大」

……これを凍らせるのって厳しいと思う、うん。人が危ないしやっぱりあれだ、炎の核を潰してからだな……うん。

「情報処理能力2割を結合解除、その部分で新たな結合を作って情報計算システムを稼動。熱量探知機を中心に起動。熱が一番高いところを特定し、そこから広がる炎の範囲を特定」

センサーを通じて視界に入るマップやレーダー、演算ソフトやらが忙しなく動いて熱源を探知、それと同じに固定すつ範囲を計測する。推測と憶測、レーダーと熱感知機による熱源特定が終わり。熱源の情報が表れる。
熱源が五つ、その内四つは同じ温度、一つは他より高いが、その付近の温度は比較的低い。
同じ温度の四つがプレハブを包む形で表示されており、一つはプレハブの中。

「……なんじゃこりゃ？」

熱源が五つ？でも四つは同じ温度だし……五つ目が核か？
スライドタッチで熱源探知機のパネルを飛ばし、超高度拡大パネルを起動。
別に目線でも出来るんだけど……手のほうが好きなんだよ！

「……機械だね」
「機械だな」

一番温度が高いのは四角い機械。床に太いパイプが……繋がってる？
あのパイプで四つの熱源から炎を出してるんだろう。
中がどうなってるのかは知らないけど、とりあえずアレが核だな。

「んじゃあ、あそこを支点として……凍らせれば、溶ける事も無いだろうな、うん」

とりあえずは核が分かった事だし……そこから凍らせる。

「……やっぱり危険な能力だよねー」

あれだけ危なかった炎が簡単に凍るんだぞ？いや、本当は止まるんだけどね。
後は、家の周りを軽く囲う感じで……ついでにプレハブ内は完全に凍らせて、地下への道は氷で埋めて……もう面倒だからプレハブないを氷で埋めて
暫らくしたら溶けるよな……地下は埋め立てるか。
摩來をコール。弾頭を鉄鋼に変更してさっき観測した地下への入り口辺りに撃ち込む。

……氷も破壊するだよね、再び凍らせないと。

「……こんな感じで？」

「やり過ぎだ」

ゴツンッ、と一夏が原作で味わう鉄拳を知りました……

束さんの行動力には唖然です（後書き）

どんも、断耶です
前回小さく書いたパソコンが壊れた事は皆さん覚えてますか？
今回は携帯が壊れかけてますｗｗｗ
キーが使えないんですよね☆
メールが出来ないとかじゃなくてですね……ボタンが反応しないんです
うわ、真面目に機械類が怖くなってきましたよ・・・・・・

さて、今回は束さんのプレハブ炎上でお送りしました！
いやー、どうせなら派手にと、やっちゃった☆

そしてですね、感想にてこの作品を読み直したほうが言いと言ってくださった方がおりまして、少し読み直してみたんです・・・・・・・・・・・・・・・矛盾の多さが・・・・・・・
つまりですね・・・・・改変が行われることがあります
いや、多分全部改変するかと思います・・・・・・・・・はぁ
ちくせう、ミスの多さが目立ちますね
不味いなぁ・・・・・・・最近は読者も減ってきてますし

レトアとか束さんとかが知ってて俺が知らない俺の事情ってヲイ！

「……」

「……そんなに胸を見られるとお姉さん興奮しちゃう」

「見てないからな！？俺をそんな変態に仕立て上げるな！」

「荒榎、男は潔く認めたほうが良いのよ？」

「無実を見止める必要が無い！」

「それでも僕はやっていない」

「それは映画だからな！」

「女の子の涙は無実を有罪に持っていくのよ！」

「最低だ！最低過ぎる言葉だ！」

「無実でいたかったら、一緒に暮しましょ♪」

「どんな理屈だ！」

……状況説明必要？

「何でお前がいるんだよ……」
「来ちゃった♪」
「来ちゃった♪じゃなくて……タイミングが良過ぎるだろ」

束さんのプレハブを凍らせて家に帰ると何故かレトアがお出迎え。
うん、知りたくもないし認めたくもないが……何でいる？

「べ、別に束さんが消えたからチャンス！とか思ってないんだからね！」
「それ楽しいの？」
「……反応小さくない？」
「いや、だって……ねぇ？」
「……これじゃあ恥ずかしいだけじゃない」
「ならやらなければ良いのに」
「これは仕方ないのよ！」
「何で急に叫んだ……一体何が仕方ないんだよ」
「だって……」

そういってうつむくレトアは顔が陰になって見えないが……なんだろう。少し悔しそうに見えるんだよね。
こいつが悔しがる事って……気になる。

「……だって？」
気になる、滅茶苦茶気になる！
こいつに勝てる相手でも出来たか？いや、話が繋がらないし……

「だって――――――――――――私キャラ被ってるじゃない！」
「……は？」

「束さんとキャラが被ってるのよ！荒榎を弄るし、積極的だしお姉さんキャラ……しかも束さんの方が関係が長いのよ！？」
「意味分からないからな！？」
「だから！荒榎の近くにいる人と被っていないキャラを作らないといけないのよ！そう、つまりツンデレ！」
「どうなったらそんな思考になるんだよ！」
「あ、ツンデレって言うのは」
「知ってるよ！知ってるけどさ！」
「荒榎の関係を洗っても尚、一人として出てこないツンデレ！」
「……あ、確かにいないな」
「だからこそ！私はその枠に入るのよ！荒榎の唯一のツンデレになるのよ！」

いやいやいや、そんな右手で天を指しても意味分からないから！？
ってか……ツンデレ？

「だから、今度からお姉さん……いいえ、私はツンデレになる！」
「その宣言必要！？いや、別にそんな事どっちでも」
「喋りかけないでくれる？別にあなたと話したいわけじゃないんだから」
「……」
「……女性の言うことを簡単に聞くなんて、よっぽどマゾなのね」
「どうしろと！？」
「仕方ないから、独り言でも話しなさい」
「独り言！？いや、それ悲しい――」
「……」
「――最近は色々あったな……」

え？何で独り言を始めたかって？レトアの視線が強いんだよ！
今までのお茶目な感じじゃなくて……いや、元からお茶目ではな

いけど。
今では……んー、なんか何処かで似たキャラを見た気がする。前世の小説で。
まぁ、とりあえず……静かになるのなら良いんじゃないか？

「束さんの家は燃えたし、シャロは会ってないけど想像に出てきたし……メロディアーナにはＩＳを作らないといけないし」
「……」
「千冬さんにはドイツに呼び出されたし……挙句はラウラの指導官とか」
「聞いてない！」
「うわっ！？何だよいきなり」
「聞いてないわよ！ラウラって誰よ！」
「いや、ラウラはドイツの――」
「そんな事より！」
「聞いといてそれ！？」
「その子はツンデレだった？ツンデレじゃなかった？」
「え、いや、ツンデレでは無かったけど」
「……無かったけど？」
「初対面から喧嘩を売られた。途中からは良い子だったけど」
「……堕ちたわね」
「何が！？」
「まぁ、ツンデレがいないのなら……それより、何で私の名前だけ出ないのよ」」
「いや、特に思いつかなかったから？」

想像のときも最初に出てきて止めたからな……特に無し

「今度からは私を一番に出しなさい」
「いや、無茶苦茶言うなよ……」

「仕方ないわね、暫く泊まって一緒に暮らしましょ」
「何でそうなった!?」
「一緒に過ごせば私しか考えられなくなるわ」
「何処のヤンデレ!?」
「いいえ、ツンデレよ!」
「違うだろ!どう考えても違うだろ!」
「本でもこれがツンデレって書いてあったんだから!」
「一体何の本を読んだんだよ!」
「○物語よ!」
「まさかのガハラさん!?」
「あの人はツンデレでしょ!」
「むしろツンドラだよ!」
「違ったの!?」
「阿羅々々々木さんが言ってたろ!?」
「荒榎の間違いで冷静になれたわ……」
「噛みました」
「わざとね」
「かみまみた」
「わざとじゃない!?わけないわね、小説とおりだもの」
「改廃だ!」
「一体なにが!?」
「ところで、改廃って何だ?」
「法律や規則などを改正したり、廃止したりすることね」
「お前は何でも知ってるな」
「何でもじゃないわよ、知ってることだけ」
「よし、ところでツイスターゲームでもやるか」
「ええ喜んで!」
「そこはネタじゃないのか!?」

ここまでの物語ネタを破壊かよ!立場も性別も逆だけどな……

ってか、興奮したような顔を止めなさい……

「さぁ、やりましょう！操を掛けたデスゲームを！」
「死ぬのか！操死ぬのか！？」
「いいえ、散るのよ！」
「誰がいるか！」
「お姉さんの操を要らないって言うの！？」
「むしろ要ると言うとでも！？」
「男はみんなケダモノよ！」
「それは侮辱されてるのか！？」
「むしろ嬉しい事よ！」
「それはただの変態だ！」
「据え膳食わねば男の恥よ！」
「据え膳が無いからな！？」
「あったら食べるの？」
「食べないからな！？」
「嘘だ！」
「おまえのネタは一体何処から見つけてるんだ！」
「2ちゃ○ねるよ！」
「それもあるの！？」
「偶に誰も知らないネタがあったりもするわ！」
「いや、それって悪戯じゃ――」
「くぎみーは俺の嫁！なんて書いてあったり」
「くぎみーだと！？」
「そう言えば、管理局の白い悪魔って何だったのかしら？」
「っ！？」

いやいやいやいや！それって俺の前世じゃん！何で！？ここに繋がってるの！？
え、くぎみーいるの？管理局の白い悪魔ってリリ狩るでマジ狩るの

あの子!?怒ると目のハイライトが消えるあの子!?
もし居たら俺は逃げる、勝てるわけが無い!ってか科学で魔法ですか……いや、凍らせれば何とか……
って、戦うことを考えなくても良いじゃんか……うん、いないさ!
え?なんでそんなことを知っているかだって?俺の友達にヲタクがいたのさ!

「で、結局は一体何が良いたんだよ……」
「……笑わない?」
「笑うような内容じゃなければな」
「やっぱり荒榎はドSね……」
「いや、むしろ正論だと思うが」
「まぁ、簡単に言うと……暫く会ってなかったでしょ?」
「会ってなかったな」
「……随分冷淡ね」
「じゃあ一体何を言えと……」
「寂しかったな、とか……会いたかった、とか///」
「いや、別に特には?」
「……一体誰と過ごしていたの?シャロって子?束さん?千冬さん?さっき出てきたラウラって女?」
「急に声が下がったな……ってか確定?」
「他に誰かいるってのね!」
「何でそうなった!?いや、確かにラウラ……と千冬さんとは同じところで過ごしたけど」
「同居!?後から来ておいてお姉さんより先に同居するなんて……」
「いや、同居って……同じ基地で過ごしただけだって」
「……基地?」
「ドイツの基地に少し行ったんだよ」
「……なんだ、そうなら言ってくれれば――」
「何時も起きたときにはベットの隣にラウラが立っててビックリし

たわ」
「毎朝荒榎の寝顔を見るとか……後から出て来たくせに」
「お前大丈夫か!?」

今日のレトアは気分が変わりすぎだと思う!
ってか、寝顔って……相手が男子で楽しいのか?……何故かは知らないけど寒気がするようなやっぱりしないな!

「で、結局は?」
「……全然会えてなくて悲しいなー、なんて」
「……」

何でそんな頬を赤らめて言うんですかねぇ……

「いや、別に来れば良いじゃん」
「……荒榎は女心が分かってないね」
「うん、男で分かってるのも変だと思うけどな」
「それでも少しは分かって欲しいのが女心なのよ?」
「凄く面倒なんだけど……」
「それが分からないとモテない……うん、やっぱり分からなくて良いわ」
「ヲイ、なんか今変な台詞があった気がするんだけど!?」
「だって、これ以上モテたら私の時間が無くなるじゃない!」
「まるで今でも沢山いるみたいな言い方だな……」
「束さんにシャロちゃんに千冬さんに、お姉さんにラウラって女にさっき会ったメロディアーナちゃん」
「今まで会って来た仲の良い女性が全員言われてるんですけど!?」
「違うの!?」
「いや違うだろ!?そして何気にメロディアーナを認めてるのかよ!」

「まぁ、あの子は束さんが認めちゃったし……お願い一つで」
「お前にとっての束さんは何だよ……」
「何って、本妻？」
「誰のだ！」
「お願い一つで……」
「……話戻った！？」
「お願い一つで……」
「……幾ら繰り返しても駄目だからな」
「だから私もお願い一つで許したのよ」
「聞いていない話に驚きなんですけど！？」
「本妻が許可をくれたから大丈夫よ！」
「え、何それ束さん何にも言ってない……」
「あ、そうそう。その束さんからだけど『タバラカに入れるには側室の許可もいるからね☆』って」
「それを先に言えよ！そして束さんそれ聞いてない！ついでに言うと側室って誰だよ！」
「まぁ、とりあえず私はお願い五回で他の子は――」
「お前の数が増えていることに突っ込みたい」
「私は第二夫人だもの♪」
「それも聞いてない！そして夫人いないからな！最後に久しぶりの音符を最悪なタイミングでありがとうよ！」
「お礼はお願い一回プラスで良いわよ？」
「むしろお前が払えよ！」
「え、じゃあお姉さんの体を一回――」

言うな！それ以上は言うな！頼むから言うな！

「――マッサージして良いわよ？」
「むしろお前が得じゃねぇか！」
「一体何を想像したのかしら？えっちぃ荒榎♪」

「よし、とりあえずお願いは一回な」
「えー……でも一回は認めてくれるんだ」
「……」
「荒榎は優しいよね」
「痒い！体が痒い！」
「それじゃあ優しい優しい荒榎はお姉さんにどんなことをしてくれるのかしら？」
「……へ？」

お願いって普通は相手が考えるじゃないのか？俺が考えるお願いって何？

「荒榎がお姉さんを一番楽しませてくれる事を考えてね♪」

……え、いや思いつかないし。
喜ばせること？え、これは伏線回収なのか？さっきの話題なのか？
……いや、知らんけど。
ってか、家族ぐるみで関係のあるレトアが泊まってないのも珍しい話……なのか？
まぁ、昔は普通の家に憧れてたらしいし……。

「え、じゃあ……泊まる？」
「是非お願い！」

レトアとか束さんとかが知ってて俺が知らない俺の事情ってヲイ！（後書き）

どんも、断耶です
いやー……作成に使っていたノパソが壊れましたｗｗｗ
まぁ、代わりに何故かパソコンは直ってるんですけどね（笑
うん、それにしても……スピード下がったなぁ……
いやー、ついレトア（楯無）を出しましたが……これは後一話で終わるか？

さて、そんなことは置いておいて……久しぶりのレトア参上！そして惨状！
束さんを出したらレトアを出したくなった！反省も後悔も……半分してる
それにしても……レトアの性格が書きにくい！難しいにもほどがあると思いませんか？そこんとこどう考えているでしょうか荒榎君！
「知らねぇよ！？ってか何で今更俺が登場するの！？」
ＨＡＨＡＨＡ、何を言ってるんだい荒榎、毎回出てるじゃないか！
後書きの下書きで消えるけどな！
「それを誰がわかるんだよ！むしろ俺も知らなからな！？」
まったくもぅ、なんですか
「みみかきまで出すなよ！ってか何処から出した！？」
俺のポケットは５３万です
「何がだよ！数か？数なのか？だとしたらズボンの粋を超えてるよ！」
え？ＩＳですが何かｗｗｗ
「人生を見失ってるからな！？それは書いてる小説の世界だからな！？」

フフフフ不二子
「うん、それは反応できないわ」
ケッ、これだからゆとりは……
「むしろお前もゆとりだよ！ってか俺は前世があるからな！？」
……ああ、そんな設定もありましたね
「お前が決めたんだろうが！」
そんなにカリカリしてると胃潰瘍に……
「あ、まぁ、うん。そうだよな、最近妙に胃が痛くて」
しちゃったぜ☆
「テメェの所為かぁぁぁぁぁぁ！」
はい、それじゃあ今迄と変えてお送りいたしました後書き
皆ー、楽しんでくれたカナ？カナ？
「そして斧が突き刺さる！」
……厨二乙
「……もう泣きたい」
それじゃあ久しぶりにこの台詞を言います
良いですか？ちゃんと聞いてくださいよ？超重要ですからね？
今後の話にもかかわりますからね？
「それは是非作品内に書いてくれよ！」
それじゃあ言います！

感想、コメント、感謝、信仰、崇拝、謝礼金等々お願いします☆

「もうこの作品駄目だわ……あ、作者が駄目だな」

原作突入？初っ端から大変ですが何か（前書き）

ようやく突入ですよ！

原作突入？初っ端から大変ですが何か

ここは私立藍越学園……では無くＩＳ学園。
さて、この言い方で殆どの方は気づいただろう。

「原作開始ですね分かり……たく無い部分もあるけどね」

真中荒榎１５歳、高校生デビュー２度目の人生に波瀾が起こる時が来た。

高校生は国に関わらず……じゃないけど、日本だと１５か１６からじゃないと入学出来ない。
それはＩＳ学園も同じで、日本が製作した日本にある学園な為、入学には年齢制限がある。

「まぁ、簡単に言うと俺が普通に入学したいって言って高校生年齢まで待ってもらっただけなんだけどな」

まぁ、普通に入学と言いつつも研究所を貰ったし、寝床も皆とは別の研究所の近くに作られてるし……ＶＩＰ的な扱いですよ、ええ。
いや、まぁ作った一人だしね、それ位は分かるんだよ？だけどさ……何で俺には参考書が来ないんだよ！
一夏が電話帳と間違えるほどだから分厚いんだろうな～、とか思いながらちょっとワクワクしてたんだよ！？
そんなに覚える事ってあったかな？とか、一体何日で憶えられるか

な？とか……結構楽しみにしてたんだよ！
それなのにさぁ……参考書が貰えないってどうよ？
あれか？開発者だから全部覚えてるってか？それとも授業への出席の自由化でいらないな、とか思ったのか？
何故か知らんが授業よりも自由時間のほうが優先されているんだよね、俺。
授業に出るのは週に五回出ていれば問題なし、さらに遅刻は許可、無断欠席問題なし。
……いや、ここまでは望んで無かったんだけどね。
ってか、授業に週五回って……1日で終わるんだよね。そして遅刻許可とかなんですか……
無断欠席見止めたら駄目だと思う。等々の問題発現がある学校なんですよね……
何でそこまでするんだよ、と言いたくなる。むしろ言ったかもしれない。
家に訪ねてきて学校について低姿勢で語られたときに呟いたかもしれない……まぁ良いや。
家に訪ねて低姿勢になるのなら電話にすれば良いのに……それも駄目なら手紙で可。
他の人はそうらしいし……なんて考えている間に学校到着。

「1組、1組1組……ここか」

1年1組……まぁ、一夏と同じになるのは想定内だ、問題ない。
扉を開けて中にはいる……凄く女子が多いです。
早い時間とは言わないけど……この出席率は凄まじいな。
そして一夏がいないんだな……あ、箒ちゃんいるじゃん。
……高校生で『ちゃん』付けは嫌か？『さん』に変えるべき？
いやいや、『さん』って、ちょっと突き放した感じに聞こえたりするのか？

今まで『ちゃん』だったからな……『ちゃん』で良いよね。

「箒ちゃん久しぶりだねー」
「ちゃんって言うな！」

……一番最初から間違えたな、うん。
まぁね、高校生ともなれば『ちゃん』付けは……じゃあ『さん』しかないな。

「じゃあ箒さん、久しぶりだね」
「え、ああ……」
「どうしろって言うんだよ！？」

『ちゃん』だと嫌で、『さん』も駄目？……つまり呼び捨てですね分かります。
そして――――周りが煩いです。
二人の関係が捏造されてるよ……ヲイ、そこの箒ちゃんの兄的ポジションとか言った奴誰だ。
そして恋人止めろ。一夏に殺される……事は無いけど。
それにより箒ちゃんがダメージを受けるのは確実だからな？

「んじゃ改めまして。箒久しぶり、最後に会ったのは……憶えてないな」
「お前とは全然話さなかったからな……そ、それよりもだ」
「そんなに顔を近づけるな、そして落ち着け」
「す、すまない……一夏を見なかったか？」
「ああ、一夏か。見てないな」
「そうか……」

うん、フラグは依然バリバリに立ってるね……寧ろ強化されてない？

凄くソワソワしてて、ちょっと緊張してて……ちょっと妄想に入ってて。
時たま言う台詞は彼女の為に聞かなかった事にしようじゃないか……。
とりあえず、教室なら黒板がある位置にあるグラフィックボードに書かれている場所に座る……。
右から2番目、前から2番目って……あ、セシリア発見。
まぁ、とりあえず知っている人は……もう居ないな。

「荒榎、遅かったわね♪」
「……あー、地球とか壊してぇ」
「何その壮大な台詞!?」
「……何でいるんだよ」
「荒榎がいるところに私アリ、よ!」
「何で1年の教室に居るんだよ、お前は2年だろうが!」
「恋に年の差なんて関係無いのよ!」
「学年には多いに関係しているからな!?」
「そこはホラ、生徒会長権限で」
「先生より強い権限を持つとかドンだけだよ!」
「世界に名の広まった開発者の側室よ!」
「まだそのネタ引きずるのか!?」
「これは事実!事実婚!」
「何が言いたいのかが全く分からん……」

えと、ええ。まぁ知ってましたけどね?レトアが居る事は。
原作にも居ましたし……何で入学式の日に1年の階にいるのかが分からない!
こんな行動を予測できる日とがいるだろうか?いや居ない!↑多分倒置法

「おかげで周りからの注目度が凄い事になってるんだけど……」
「……荒榎、それは元からよ」
「何で俺が注目……されるわな。男子一人とか」
「ああ、この教室の女子一人と変わってもらえないかしら？荒榎の隣の席を希望するわ」

そう言いながらもちゃっかり隣に座ってるじゃんか……。
目は一夏が来れば生贄に出来るのに……まだかよ。
そしてあえて言おう……後5分で時間だぞ？遅くね？
ほら、箒ちゃんもソワソワがイライラに変わってきてるよ……。
これだから最初は怒ってるんですね分かります……いや分からないけど。
ってか、原作の一夏って何時に来るか書かれてなかったな……。

「……あ、そうそう荒榎。式の後に勝負があるから、逃げちゃ駄目よ？」
「初めて知った驚愕の事実……何で俺？」
「だって、この学校で一番ＩＳに詳しいじゃない？そして私は生徒会長、生徒の中で一番強いのよ♪」
「正直3年の方が駆動期間が長い気がする……」
「開発者が使わないでどうするのよ……」

気にするな。使う場面が無かったのと、使う相手が全然居なかったからな。
最初は研究所を破壊してたけど……暫らくしたら違法研究所が消えたからな。
おかげで使う事が無くなったんだよ……ラウラの訓練くらいしか使って無い気がする。

「とにかく。式が終わったら迎えに来るわ」
「いや、こっちから行けば良いんじゃね？」
「夫を迎えに来るのは妻の役目よ♪」
「今日室内で言う台詞ではないな……」
「大丈夫よ。声量からして聞こえないから」
「それがわかるお前も何者だよ……」
「それじゃ、また後で来るからねマイダーリン♪」

最後のダーリンだけ声量が大きくなったと思うのは俺だけじゃないと思う。
ほら、他の子も聞こえた様だし……ヒソヒソ話が余裕で聞こえる大きさに変わってるんだけど？

「ここか……」

俺は織斑一夏、今日からこのＩＳ学園に通う事になる高校１年だ。
本当は女子しか動かせないＩＳを、何故か動かしてしまった事で入学が出来たが生徒は女子ばかり、こんな学校の中で暮らすのか……大変だな。
なんて説明文が入るシーンですね分かります……いや、原作には無いけど。
なんか入りそうだよな……続けるか。

「……あ」

クラスを見渡すと知っている人がいた、俺の幼馴染であり、ＩＳ開発者の一人である篠ノ乃束の妹、篠ノ乃箒。
前に新聞を読んだときに剣道で優勝していたから元気だったのは分かっていたが、手紙を送っても一度も返事が無かったからな、ひょ

っとしたら嫌われているのかもしれない……。
そんな事を考えていると、箒がこっちを向いて顔が合った……けど直ぐに逸らされる。
凄く真っ赤に怒っているが……俺、手紙に変な事書いたっけ？
まぁ、後で謝っておこう。

「……お」

箒を見ていると何か変なところを見つけた。
箒の席の2列右、一つ後ろの席。まぁ簡単に言うと右から2番目、前から2番目の席。
机にうつ伏して座っている――男？
……これやっちまったな。
いやー、一夏を見つかり難いようにうつ伏して見てたんだけど……目が合いましたよ、ガッチリと。

「あ、荒榎じゃん。ここにいるって事は……お前もＩＳを動かせたのか」
「……へ？」
「いや～、久しぶりだな。最後に会ったのが小学三年くらいか？」

とりあえず、と前に席に後ろムキで座る一夏……とか説明してる場合じゃなくて！

「……分かる？」
「分かるも何も、同じ小学校じゃないか」

……めっさ憶えてる。
あれ？今までと同じで忘れられてるかと思ったのに……。

「あれ？でもＩＳを起動できる日本人は一人って聞いたけど……」
「あ、俺タバラカ人？だから」
「タバラカ……ヨーロッパ辺りか？」
「……うん、ごめん。一夏は純粋なんだな」

大人の世界を知らない存在なんだ。だからタバラカを知らないんだ。
ひょっとして誰も知らないのか？俺達の国は認知されていないのか？
……今度回線ジャックでもするか。

「そっか、日本人じゃなかったのか。だから有名だったんだな」
「……いや、どうゆう理屈！？」
「外国人って注目を浴びるもんな。だから学校中で知らない人がいなかっんだ」

……え？知らない人居なかったの？俺何かやった？
失礼な、俺は何にも……何にも……喧嘩したり、先生無視したりサボったり辞めたり誰とも仲良くならなかっただけで、やましい事は何もしていない！
それでも僕はやってない！……これ聞いた事がある気がする。

「ま、まぁとりあえず。日本人初の男子ＩＳ操縦者おめでとうと言っておこう」
「ん？ああ、サンキュー」

だた……ただですよ？出来る事ならもうちょっと……周りを気にして欲しいなー、なんて思ったり思わなかったりやっぱり思ったり。
いや、だってさ……箒ちゃんが睨んでる……殺気？良く分からないけど怖いです。
箒ちゃんがあそこまで……一夏、恐ろしい子っ！

『新入生の諸君、これから入学式を行なうから第二アリーナに集まってもらえるかしら？』

……声が（ｒｙ

言いたくないけど（ｒｙ

『それと、荒榎は別準備とか色々あるから生徒会室に来てね♪』

「……行って来る」

「あ、ああ……頑張れ」

何も知らない一夏に応援されるって……俺一体どんな顔をしてたんだ。、

原作突入？初っ端から大変ですが何か（後書き）

やっとの原作突入ですよ、ええ！やりましたとも！
一番最初からバトルですがね！
いやー、バトルを書くのが下手なのに一番書きたいという馬鹿が俺です（笑
とりま、セシリアと関わらせる気はありますが……フラグ？立てませんよ
これ以上立てたら俺が書ききれないｗｗｗ
それにしても……俺は一体何がしたいのだろうか
この作品を書いていると「こんな感じのＩＳも書きたいな～」なんて考えて
何時の間にか構成を考え出しているという状態……（汗
あれ？おかしいな、アリアも書いているのに……
いや、書いてないんですけどね……
いやぁ、作品を書いていると同じ作品で違うパターンを考えたりしませんか？
ありますよね？……ありますよね！？
まぁ、今は原作に入って落ち着いているんですけど……あー、時間が欲しい！
ちまちま書くのではなく一気に書ける時間が欲しい！

さて、ここで一気に！
ｕｎｌｉｍｉｔｅｒ　さん、ＩＮＦＩＮＩＴＥ・Ｗ　さん、ハルマゲドン　さん、伏義　さん、無零怒　さん、鐘　さん、ながも～　さん、ｍａｒｕｃｏ　さん、作者　さん、ｈａｋｉ　さん、凡人　さん、しがない読者α　さん　、バンク　さん、水無月　蒼　さん　、霊麒　さん、カズティク・ベイ　さん、アギト　さん、月野　さん、多　さん、霧氷黄泉路　さん　、ＩＳ　さん、ｓｅｙ　さん、

多胃我　さん、レフ・アルイ　さん　、ｉｓｈｉｎ　さん、ｋ１さん、一読者　さん、サイザーさんマジ天使　　さん、畏無　　さん、やらないか　さん　　、オルスレイン　さん、シャーク　さん、い　さん、櫛島　御道　さん、マリィ愛してるぅぅぅ！！　さん、ＫＥＮ　さん、オレンジジュース０％　さん、クラード　さん、零崎煌識　さん、ｒｕｒａｔａ　さん、ＡＬＯＮＥ　さん、ウィルメーヴェ　さん、時の秒針　さん、山田　さん、十六夜断空　さん！

……書くのに疲れるほどの人数が見てくれていた、だと！？

今までありがとうございます！皆様のおかげで原作まで続くことが出来ました！（涙

ひょっとしたら、この中に書かれていない方がおりましたら……どうしよう

戦闘前の沈黙？そんなもの存在しませんよ（前書き）

レトアパウァー！

戦闘前の沈黙？そんなもの存在しませんよ

「レトアの唯我独尊は酷いと思いません？」
「ええ。お嬢様が我が道しか見ない所為でどれほど困った事か」
「でしょうね……あ、すいません。お代わりを」
「ちょっと待っててください。お湯を暖め直しますから」
「あ、いや、そこまでやらなくても」
「良いんですよ。お嬢様の婚約者なんですから、もうちょっと威張り散らしても良いくらいです」
「いや、それは面倒ですし」
「それに、紅茶は丁度良い温度で作るから美味しいんです」
「……なるほど」
「なんで二人はそんなに仲良くなってるのよ……」

何時の間に？って、お前が連れてきて直ぐに握手したよ……
はいはい、ここは生徒会室、居るのはレトアと俺と――布仏虚さん。
え？何でさん付けかって？……色々とシンパシーを感じたからですよ。
特にレトアに振りまわされるとか、レトアに振りまわされるとか、レトアに振りまわされるとか。
まぁ、感覚が先輩だと訴えてるし、最初から印象が良いからが理由だろう。
そして、何気に原作キャラで今まで会った事の無かった人。
レトアの婚約者（仮だと思いたい）なはずなのに仕えている布仏家の人を見たことが無かったんだよね……
のほほんさんにちょっと期待……いやクラスで会えるけど。そういや、さっき見つからんかったな……まだ寝てるとか無いよね？
虚さんは学年が違うから会う事も少ないだろうなぁ……

かれこれ一時間位ここにいるけど……まだか？と言うか何が理由だ？
そういや聞いてなかったよ……

「さてレトア、ここでのんびりしている理由を簡潔に答えろ」
「面倒だから♪」
「……虚さん、頑張ってください」
「はい、出来る限りは頑張ります。荒榎様も」
「様付けなんて良いですよ。普通に呼んで下さい」
「いえ、お嬢様の婚約者と言う事は将来の旦那様。これでも譲歩している状態です」
「いや、俺と結婚すると決まった訳じゃ……」
「されないのですか？されないのに、ここまでして下さるのですか？」
「……いや、成り行きで」
「でしたら、成り行きでご結婚される事もありえますよね」
「……」

ヤベ、虚さんマジ強いわ……はぁ
マジですか……マジでマジですか。
言ってる事が分からなくなるくらいマジですか……。
結婚とか考えた事が無いです☆なんて言ったら失礼だろうけど、結婚を前提にしています！なんて言ったらレトアが調子に乗るし……え？なんで今までのキャラを崩す位考えてるのかって？相手が虚らんだからさ！

「……あーもう！二人で話してないで荒榎はこっちを見てればいいのよ！」

そう良いながら俺の首を持って自分の方向へ回すレトア……って、

ちょっと待った！

「その角度は無理！角度がおかしいからな！？」

首は１２０度も回らないっての！出来て９０度だろ！？

「……はぁ、こんな事なら会わせなければ良かったわ」

「……」

ちょ、何コレ……しょぼくれてるレトアとか……不覚にもドキッとした俺がいる。

うん、ちょっと憂いを帯びてて何だか、こう……抱きしめたく――

「却下！即却下！俺の頭よ普通に戻れ！」

「フフフッ、荒榎様も目覚めてはどうですか？」

虚さん！分かっててやってますよね！いや悪いとは言わないし別に嫌いって訳じゃないけどかといって簡単にすきと決めていいのかも分からないしでも嫌いって訳じゃなくて……。

うん、とりあえず……頭でも撫でる？いやいや、年上にそれは……

「……あ、荒榎？」

「……思い立ったら即実行が俺の考えなんだよ、うん、きっと……」

「え…あ……う／／／／／」

「落ちましたね……」

……うん、嵌められた気がしてきた。

なでなでなで、なでなでなで、なでなでなでなでなでなで……

……コレって駄目ですよね？
いかんな、このままだと一夏的ポジションに収まりそうで……それは死ねる。
うん、レトアも俯いてるし顔赤いし……とりあえず、手は止めて、降ろして。

「……あ」
「うん、まぁあれだ。とりあえず……だな」
「……どうしよう」
「……はい？」
「虚ちゃんどうしよう！今すぐにでも襲いたいわ！」
「……状況説明プリーズ」
「簡潔に言うと荒榎様の好みを知る為と言いますか」

意味がわからんが、とりあえず嵌められた事は理解した、うん……
……マジですか？

「萌えよ！シビアな感じの中に出て来る優しい顔！これぞ萌え！もうちょっとでルート入れるわ！それでも今すぐ襲いたい！」
「いけませんお嬢様、ここで襲ってしまっては好感度が一気に下がります。ここは焦らすのです、焦らして荒榎様から求めてくるのを待つのです」
「……そうね、荒榎から求められる。最高じゃない」

皆さん、騙されちゃいけないぜ？声が冷静になっても本人は全く冷静じゃないからな。
ってな訳で鼻から血が垂れてるんですよ……あ、拭いた。
そして素朴に疑問……二人の話しがゲームに例えてる気がしてならない、いやゲームだろ！？
虚さんがゲームだと！？いや良いんだけど……えー。

「虚さん、詳しい説明をお願いします」
「はい。詳しく説明いたしますと、荒榎様のお嬢様に対する態度が平凡過ぎるのと、あまり大切に扱われてない事に不満があったようなので――――――荒榎様にときめいてもらおうかと」
「なるほど……へ？」
「そっくりそのままお伝えしますと――――」

『……はぁ』
『急にどうされました？』
『最近荒榎の態度が冷たい気がしてくるのよ……』
『そうなのですか？聞いている限りでは仲が良さそうに思えますが』
『荒榎の周りには好意を持っている異性が多いのよ。そして今日から女子ばっかりの学校よ？先に出てるはずなのに私のリードが少ないのよ！』
『荒榎様の意見を見事に制覇させたのですからリードは大きいのでは』
『違うのよ……その意見を制覇するのにかかった時間の分だけ、他の子が近付いているのよ！』
『荒榎様には会った事がありませんので詳しくは分かりませんが……それならお試しになっては？』
『試す……そうね、少しは良いわよね』
『はい。今まで一緒に居られなかったのですから、これからどのような行動に出れば良いのかも分かると思われます』

『そうよね……どうしようかしら』
『でしたら――』

「といった感じです」
「うん、全て虚さんが仕組んだんですね……」
「お嬢様は、その……自由過ぎて試す事が苦手と言いますか。情報を引出すのは得意なのですが、それが恋愛となると全くで……」
「……」
「逆に考えれば、荒榎様に尽くす事だけを考えて生きてきた方ですので」
「……ちょっと後悔してます」
「あら、後悔する事なんて無いわよ。私はコレでも自由に生きてるのだから」

うん、自由とは思うよ？何時の前にか背中に抱き着いてるし……
……いや、頼むからタンマ。
ちょっとこの姿勢はキツイと言いますか……。

「レトア……あのだな」
「当ててるのよ♪」
「余計に性質が悪いわ！」
「荒榎は意識してくれてるのね？」
「……」
「ここでの黙秘は肯定と見なすけど？」
「……別に」
「寧ろご褒美よね……私にも」

「その言い方だと俺まで喜んでるように聞こえるんだけど……」
「男の子なら泣いて喜ぶところよ？胸には自信があるの」
「そんな自身は捨ててしまえ！」
「えっとね、確か――」
「言うな！サイズなんて誰も聞いてないからな！」
「え、お尻のほうが良かった？」
「寧ろそれは変態だ！」
「世の中の男は皆女性のスリーサイズを知りたがるのが普通よ？」
「それ完全に欲望駄々もれじゃねぇか……」
「だから違う荒榎がおかしいのよ」
「……んなわけねぇだろ！」
「……一瞬悩んだわね」
「いや、ちょっと正論に聞こえた……」
「つまり荒榎も変態なのね……」
「どんな繋がりだよ！」
「大丈夫よ、私は変態でも愛せるから！」
「その公言は生徒会室の中で言って良いものなのか！？」
「荒榎にしか言わないから大丈夫よ♪」
「虚さんがいるからな？お前は周りを見る目が無いのか？」
「荒榎と一緒に居るときは荒榎だけを見てるからよ」

蕩けた顔と首に掛かる甘い吐息、潤んだ目。
こんな状況で言う事は一つ！

「いや普通にしろよ……」
「……虚ちゃん、無理だったわ」
「ええ、私もビックリです」
「普通なら抱きしめてくれるはずなのに……」

いえいえ、虚さんがいいる前でそれは不味いでしょ。

そして虚さんが居る事を覚えていてのこの行動かよ……なんですか、辱めを受けさせたいんですか？
いや、むしろ発案者に虚さんも入ってる状況……ここ危険区域じゃん！

「しかしお嬢様、これはチャンスです」
「そうね、荒榎は甘えるよりも、ちょっと隙を見せるほうが萌える事が分かった分他の女より進んでいる筈よ」
「いや、そこで俺を見るなよ……」
「それに、ここには敵がいないもの……増えない限り」
「何がだよ……」
「今のうちに他の方より進むのです。上手くいけば本妻並みの扱いが待っています」
「そして荒榎が更織を支配すれば老体もお見合いを薦めてこないし、誰も文句は言えなくなる……最高じゃない」
「ええ、どうせ老体はすぐに消えてもらいますが、発言権を無くしておいて悪いことはありません」
「あの老体達、表世界じゃないからって男の発言権を強いと思ってるからかしら、時々邪な目になるのよね……」
「自分たちの孫を薦める気が知れませんね。しかも孫は孫で老人の権力を自分のものと勘違いしていますし」
「孫は老体を何とかしたらすぐに消すから良いのよ……面倒だけど」
「なるべく早めのほうが宜しいかと……あ、そろそろ始業式が終わりますので行きましょう」
「ええ、そうね」

さて、そろそろ良いか？抱きついている者が誰かを忘れてないだろうな？
ええ、ずっと抱き付かれてますがな……時たま腕に力を入れるから

余計に……な？
んでだ、俺が言いたいことは一つ

「よし、最初から全力全快で攻めるからな」
「……お手柔らかにお願いするわ」

戦闘前の沈黙？そんなもの存在しませんよ（後書き）

更新が遅れてきた俺がいる
そして原作突入して即座に小話？的なものを書いた俺がいます……
原作も伸びて伸びて伸びまくる気がしてならないです・・・・・・

いやー、戦闘シーンが書き難い！第三者視点だと短くなるし……
ラウラの戦いってやっぱり短かったですよね？
もうちょっと長めに、もっと読者が引き込まれるような戦闘シーンを書ける人
そんな人に、私はなりたいｂｙみ○を
荒榎視点だとなぁ・・・・・想像すると臨場感が出ない気がしてならない
出来る限りは荒榎視点で書きたいんですけどね・・・・・・難しいなぁ

そして最近、漫画に嵌りました
え？今までは違うのかって？
小説ばかりでしたね～
家にある漫画の数は８位です
そして小説は……いや、ラノベなんですけど
約５００ですかね？（笑
正直ちょっと多すぎに感じてます
まぁ、それは置いておいて、アラクニドという漫画を知っているでしょうか？
主人公が女子高校生なんですけど、
先天的集中力過剰？を言った能力？を持っているのですが
滅茶苦茶嵌りましたね！面白いですよ！
あらすじとか、内容を語るのは駄目かな？

まぁ、今は止めておきましょう、気になったらお近くの本屋、もしくはブックオフへゴー！

「さてさて、最初はどっち良いかな？桜花？異端空間？」
「桜花って羽根が沢山飛ぶのよね？異端空間って凍るのよね？どっちにしろ虐めだと思うのだけど……」
「気にするな、俺は虐めたいだけだ」
「……荒榎が喜ぶのなら／／／」
「うん、じゃあ喜ぶから虐められて」
「……荒榎、怒ってない？」
「怒ってなんか無いよ？何を言ってるんですか？怒ってませんとも、ええ」
「やっぱり怒ってる……」

失礼な、怒ってなどいない！
別にレトアの人生がどんな状態でも、セクハラを受けていようとも、邪な眼差しで見られる空間で過ごしてた事も、それを一回も言わなかった事も、何も怒ってなどいない！
ほら、滅茶苦茶クールじゃないか、一歩間違えたらＫＩＬＬじゃないか……間違えないか。
まぁ、とにかく怒ってなどいない。別に怒る理由も無いし、必要も無い……無いったら無い！

「よし、やっぱり焔顎だな」

とりあえず――ジワジワ痛めつける。
なんかムカツクから痛めつける。よし決めた、決めたったら決めた！
とりあえず現状説明。今アリーナ上空。前にレトア。

『ＩＳにはＰＩＣと呼ばれる機器が付いており、それによって振動や音を発しないで空中に浮き、移動する事が可能です』

誰かが演説を終えるまで戦っては駄目らしい……面倒な。
誰か。知らん人。まぁなんでも良いや。
妖幻を全展開。武器は焔顎をコール。威嚇の為にマガジンを取り出した後に填める、それからスライドを引いて初弾を装填する。
後方武器は桜花。剣戟は未だに使いきれてない部分があると同じに、正直面倒。
よし、状況説明終了。

「……思いっきり怒ってるじゃない」
「あ〝？」
「……」

怒ってませんとも、声が枯れてるんだよ、きっと。
俺が怒る必要なんて一つもありませんから、ええ。

「一体何が不満なのよ……からかった事が駄目だった？」
「……別に」

正直自分でも分かりませ……いや怒ってませんから！
別に俺の家に来る余裕があるなら、その前に組織をどうにかしろと言いたいだけだし……多分。いや知らね。

「じゃあ、抱きついた事？襲いそうになった事？それとも虚ちゃんの前で恥ずかしい事を言ったから？」
「滅茶苦茶思い当たりあるじゃんか！」
「んー、でも今までと変わらない事よね。今更それに怒ってるとは思えないし」

ですよねー……俺も分からんし……怒ってないけどね！
怒ってないったら怒ってない！
だってこんな事で怒るとか馬鹿みた……理由は知らん！そして怒ってない！

『――それでは、今日から皆さんが習うＩＳ・インフィニットストラトスの性能を見せてもらいましょう』
「手加減抜きで行く……」
「……ちょっとは手加減して欲しいな～、なんて」
「無理。初っ端から本気で来い！」

前傾姿勢になり、桜花のブースターを吹かせる。
動きそうになるのをＰＩＣで止めて、桜花の勢いを上げる。
合図を同じにトップスピードまで上がって攻める！

『それでは、バトル開始！』

『『戦闘許諾が出ました。敵機ＩＳが戦闘姿勢に移行。』』
「インディゴ・シンフォニア８０％解放」
『瞳の解放を承諾。開放８０％』

バトル開始の文字が愛機に流れ、二人は即座に動く。
荒榎が瞳を解放し、楯無がランスを展開。
ＰＩＣにより止めていた桜花を解放、最大速度で楯無に走る
楯無もそれに負けじと、水を前方に展開しつつ上に逃げる。
それからは追いかけっこ状態。右へ左へ、前後上下に目まぐるしく移動する二人。
これを見ている生徒の気持ちや、生徒にＩＳを詳しく教えたかった教師の考えなど忘れ去って攻防は続く。

「……やっぱり怒ってるでしょ！」
「怒ってない！」
「その言い方が怒ってるじゃない！」
「怒ってないったら怒って無いんだよ！」
「一体何が気に入らなかったのよっ！」
「……っ！」

荒榎が追うのを止め、両手を上に上げる。
そして、その上空を支点とし、巨大な氷塊が出来あがる。

「怒ってないって――――――言ってるだろうがっ！」

そのまま荒榎が楯無へと腕を下ろし、氷塊はそれに従い一直線に向かって行く。

「この時点で、怒ってるじゃない！」

それに対し、楯無は水の壁を目の前に発生させ、少し下がる。
そして、氷塊が水と当たった瞬間、ナノマシンに働きかけＩＳから伝達されていたエネルギーを熱へと変換、氷塊を砕く程の爆破を起こす。

「そうだとしたら――――お前が悪い！」

両手に焔顎を展開、即座に連射する荒榎。
楯無は、それを再び水を集めて防ぐ。
焔顎で届かせるのは無理だと感じたのか、焔顎を収納、摩來を展開する。

「多箇所同じ攻撃、水で防げるか？」
「……それはちょっとキツイかも」
「そうかそうか――――――当たってろ！」

引き金を引いた摩來から発射された一つの大きな弾丸は途中で分裂、細かな弾となって半径１０Ｍ程の面による銃撃へと変わる。
面の攻撃と言うのは一つ一つが弱い。一つのダメージを広げているのだからそれは当たり前、それでも強いのはそれが全身に当たる事によって相手の行動を一時止めるから。

「だから、こんな避け方もあるのよねっ」

ランスを前に、そしてランスの前に比較的小さな、しかし厚みのある水の壁を広げ銃弾に突撃する。
大体の弾は水の壁により止まり、抜けた弾は楯無に当たるが、ダメージは小さい。

そして、銃弾の壁を突き抜け、そのまま荒榎に突撃する。

「そんなのありかよ……」

そう言いつつも手を前に伸ばし、楯無との間に氷の楯を作り上げる。
しかし、それは楯無の予想内。
ランスの先の水の壁、それが氷の壁をぶつかった瞬間に再び爆破。
崩れかけの氷の壁をランスで突き破り、そのまま荒榎突き出す。

「ハァッ！」
「甘い！」

荒榎が再び氷の壁を斜めに作る。
楯無はそれをランスに内蔵されているガトリングによって燁をつけ、
そのまま破壊する――――

「ナイスタイミング」
「……それ酷くない？」

少し離れた所に移動していた荒榎の焔顎が火を吹く。
水を集めて守ろうとするが――間に合わない。
1発目、右肩の装甲が弾け飛ぶ。
2発目、腰に鈍い衝撃。ついランスを手放してしまう。
3発目、再び右肩に当たり、絶対防御が発動、エネルギーがゴッソリと削られる。
4発目、腹部の保護パーツが破損。
5発目――。

「――やらせない！」

後ろに回していた手に蛇腹剣を展開、集めていた水を纏わせ焔顎を切りつける。

「チィッ！」

焔顎と蛇腹剣が当たる前に焔顎を手放し、自動収納。
しかし、その所為で蛇腹剣は止まらず荒榎へと届く。

「初めの一発！」
「それでお終いだ！」

レトアが腕を巧みに操り、再び当てに来る。
それに対して荒榎は右手を突き出し氷の壁を作る。蛇腹剣は氷の壁を削り煙を起こし――止まった。

「……それはズルイ」
「ズルくない。正当な攻撃方法……からちょっと外れた方法」
「それを人はズルって言うのよ……」

煙があけた先、そこには壊れかけの氷の壁。それと氷の壁に埋まりこんだ蛇腹剣が姿をあらわした。

「氷を支点とした2重凍結。タイミングが難しいからズルじゃないだろ」
「タイミングがあれば敵の武器を完全に止められるじゃない」
「いや、頑張れば氷が砕ける」
「あ、そう。じゃあ私は逃げ――」

――カァァンッ

何時の間にか左手に握られていた焔顎が火を吹き一発の弾丸が楯無に迫る。
そして――――――

『試合終了。勝者、真中荒榎』

「あー、負けちゃったな」
「アレだけ銃撃を受けていて元気だな……」
「あ、そうよ荒榎！乙女の体に傷をつけたら一大事だって事分かってる！？」
「え、ああ、いや……知らん」
「……はぁ」
「まぁ、レトアなら傷付かないだろうし」
「それは信用と受け取るべき？扱いが雑と受け取るべき？」
「どっちでも可。寧ろ両方」
「……荒榎の馬鹿。しかも乙女を痛めつけてスッキリしてるし……」
「んじゃ、その馬鹿から一言。その……なんだ、面倒なのが居たら片付ける手伝いくらいはしてやる」
「……荒榎がデレた」
「いや、学校まで面倒な場所にしたくないだけ」
「あ、ヤバイ。襲っちゃいそう。いや寧ろ襲いたい」

「よし、異端空間に押しこんでやんよ」
「冗談よ……ありがと」
「……あー、なんか本当に馬鹿なこと言ったかも」
「取り消しは無効よ♪」

戦ったらスッキリするよね！（後書き）

すいやせんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
最後の部分はあれです。エアギアを読んでいたらこうなりました！
でも自分の中では結構上手く・・・・・いや、多分今の俺は変なので普通には見れてませんね

いやー、エアギアがマジで大好きです！
今更！？なんていわないでくださいよ？未だにコミックは売り出されているんですから！
そして嵌りました！ヤヴァイです！大好きです！
毎日読んでいるくらい大好きです！

ところで、話は変わりますけど
二次創作って色々あるじゃないですか
小説が元だったり、漫画が元だったり、アニメが元だったり……する場合は漫画家小説があるか？
いや、まぁとにかく、その中で書き難い作品ってあると思いませんか？
ハイスピード然り、トリッキーな動き然り
エアギアも書きにくいと思いませんか？
たとえばレガリア……漢字が分からないんでカタカナで
あれの発動とか書きにくいじゃないですか！
ってか、あの緊迫感って書き難くないですか？・・・・・・・あれ？
俺だけ？
まぁ、とにかく俺は苦手です・・・・・正直、具体的な状態を書きたくなって仕方が無い！でもそれをやると読者が萎える！
漫画だと一マスで緊迫感、声、脳内思考、その他もろもろを表せるじゃないですか・・・・・だめだ、俺の手には限界だよ！

漫画がこれほどうらやましいと思ったときは無い！
その所為でエアギアの二次創作が書けない！

・・・・・まぁ、先ずは今書いているのを書ききらないとね

うん、今日の俺はどこかおかしい！
（厨二病じゃないですよ？本当に違いますからね？

最後に――――くるる可愛いよ！

武器の辞典は必要だよねっ！

『摩來』
可変式バズーカ
実弾では弾頭に大量の銃弾が詰められており、撃った後に拡散する。
一発一発の威力は弱く、小さい。
しかし、小さい為に散らばった後ではＡＩＣ等でも全て止める事は出来ない。
実弾以外にも弾があり、ネット型、エネルギー型、チャフ型等もある。

『暗楼』
実弾ショットガン
普通のコッキングは手前に引くが、暗楼は外に引く様に作られており、レバーを少し重くしてある
その為、撃った後に振りまわす事で銃の重さによりスライドされ次弾が入るようになっている
弾は量子変換して『妖幻』に詰めてある為、弾数はあまり考えなくて良い

『天弦』
実弾マシンガン
左手でも撃ちやすい様に反動を軽減、トリガーも弱くしてある
これはあくまで囮用で銃口を小さく、銃身も小さくしてある
命中性ではなく、ばら撒いての妨害用。狙えば当たる様には出来ているが、一発の威力が弱い

『星落』
実弾スナイパーライフル

ＩＳのハイパーセンサーとデータを共有、精密射撃と長距離射撃を可能とする
しかし、ハイパーセンサーを直結させている為、使用最中はアラートや報告が出来なくなるため、完全なる狙撃型

『焔顎』
実弾ハンドガン
マガジンタイプの大型二丁拳銃。威力重視の武器だが速度も速い
しかし、その所為でオートマチックを付ける余裕が無く、単発式

『桜花』
翼型複合ブースター
妖幻の背中に取りつける。
妖幻の武器の中では珍しいエネルギーを使用する武器。
方翼のブースターに混じって取りつけられている５０程の発射口から秒速２５発で撃ち出されるビームは大きく広がり、縮まる様に狙った箇所に向かう
一度広がる事で逃げ道を出来る限り減らす殲滅兵器。
ビーム一つ一つの威力が高く、速度も速い、それでいて貫通性が高いと高性能。
しかし、消費エネルギーが激しい為、多用は不可能
一度でも使うと長期戦は難しい。

『剣戟』
柩型ビット
自動追尾、及び撃墜機能を持つビット
非固定浮遊部位でありながら、剣戟によるブーストは妖幻に作用する為、言うなれば軸固定型浮遊部位。

軸固定状態から外す事でビットになり、付けた状態だとブースターとなる
強度も中々ある為、小さな攻撃なら壊れる事は無い。
ブースターは6つあり、一つの枢に三つずつ。
枢の下部分に一つ、左右の横上部分に一つずつ。
攻撃ユニットは妖幻と繋がっており、荒榎の指示で動かす事が出来るが。
詳しく決めていると荒榎の動きが止まってしまう為、荒榎の思考から判断し、自動で動く事が出来る自己判断能力が備わっている。
二つで一つの部品となっているが、増設する事も可能ではある。

『異端空間』
空間凍結能力
空間を完全に止める事により温度を一気に絶対零度まで持ちこみ、氷を作り出す第三世代型兵器
武器の様に持つことは無く、妖幻本体の能力であるが故に空間凍結能力と呼ばれる
空間を止める為に、掛かっている力を逆方向から正確に等しく与える事が出来、その応用により、落下物の方向程度なを少し帰る程度の事なら可能である。
しかし、重力が掛かっているのに上に持ち上げる等の、かき消す力よりの上を力を出す事は不能
これは、この能力が掛かっている力を受け、それを反転させて逆から当てると言う荒業により完全停止空間を作り出しているからで、弱める事が出来ても、強める事は出来ない。

武器の辞典は必要だよねっ！（後書き）

はい、今まで言われて書いていなかったので書きますた・・・・・・遅くなってすんません！

これからは、武器が増え次第こちらを改変していく予定になっています

怒りの方向は沢山あるよね♪

「えー……えっと、織斑一夏です。宜しくお願いします」

うわ、緊張するなぁ……とか考えてるのかねぇ。
自己紹介なぅ……この使い方って合ってる？
まぁ自己紹介中ですって言った方が早いけど。
一夏の自己紹介に皆の視線が釘付けな訳ですよ……多分。
いや、だって俺見てないし……机にうつ伏してます。

「以上です」

――ガタタタッっと女子生徒がずっこける音がしてからの――パアンッ――

「いっ――――！？」

千冬さん登場だぁ！
はい、さっき千冬さんの目がこっちに向いた気がする。
ってか殺気？てきな物を感じた俺は現実逃避に入ってますよ。

「げぇっ、関羽！？」

――パアンッ
実姉を関羽と間違えるってどんな頭だよ……。
そして皆知ってるか？関羽って普通に打つとでないだぜ？関と羽に分けて変換しないと出てこないんだ。
幾ら中国の偉人だからって、知っている人は多いんだから変換文字に作っておいて欲しいよね……え？君のパソコンは出るの？俺の

は出ないんだ～。

「……それで、朝の件の申し開きは？」

「ありません」

――――スパコォォンッ

千冬さんの持っているものには必ず鉄が仕込んであるに違いない。

いや、だってさ？学級日誌でスパコォォンッなんて鳴るか？いいや鳴らない！

断じて鳴らない！もし鳴るとしたら世の中の学校は音で溢れかえってる！

「相変わらず痛い愛の鞭……いや、ニ発目は結構です」

「そうか、ならば今すぐ自己紹介をしろ」

「真中荒榎です。出来る限り関わらないで下さい」

「よし、追加で5発だ」

「それは死ねる！」

「あ、あのー……織斑先生？今は織斑君が自己紹介を……」

「ん？ああ、すまなかったな。コイツは今から消えるから先に終わらせておこうと思ってな」

……殺人予告をされました。

しかも今すぐって……え、何？これクラスから出たら死ぬパターン！？それとも皆の目前で首切り！？

いや、でも消えるって……え、灰すら残さないを地でやるんですか！？いや、千冬さんになら出来ない事は無いけど……。

とまぁ、遊ぶのは止めて……俺何か用事あったっけ？

「真中、お前はこれから生徒会室に向かえ」

「今までありがとうございました。それではさようなら」
「そうは問屋が降ろさないのよ」

……ヲイ生徒会長。
さっき別れたばっかだろ、何でまた生徒会室に行かないといけないんだよ。

「荒榎の特別研究所にご招待♪」
「……え？」

「……どんだけだよ」

何処を見ても機械。機械に始まり機械で終わる部屋……言ってる事が分からんくなってきたな。

「色んな国が荒榎に使って欲しいって渡してきたのよ。それこそアメリカからロシア、ドイツにイギリス、イタリア、ポルトガル、中国、インド、イラク……大体２０ヶ国？」

「送り過ぎだろ……」
「荒榎が使っている事を少しでも口にすれば、その国は世界に進出できる程の後押しになるのよ？」
「……よし、全部の機械の名前を消しておこう」
「国旗が書かれてるけど？」
「ならそれを削る！」
「……全部で１００台はあるのに？」
「何でそんなにあるんだよ！大体２０ヶ国なんだろ！？」
「機器を送る国をくじで決めてたら止まらなくなったからかしら」

１個目、２個目、３個目、４個目…１５個目。あ、ちょっと、１５個目の人２個目と被ってるよ！
仕方ないじゃん、くじだし？でもセコイじゃん！だったらこんな機器も加えようぜ！……的な乗りですね分かります

「……ってか、この機械は何だよ」

目の前にあるのはロールパットとボタンが５個、全部色が分けてあって前に画面……どうかんがえてもゲーム機ですね本当に（ｒｙ
いやいやいや以下省略。機器は分かるけど……ゲーム機？一体何処の国だよ。
えっと、国旗が……知らんな。六亡星の中心に兎……うん、知らない！決して心当たりがある訳無いじゃないか！

「ああそれ、タバラカの国旗よ」
「……認めたくなかった」

分かるよ！分かってたけどさぁ！ああ、これ束さんが書いたんだろうな～って理解したけどさ。

うん、これは国旗と言って良いのか？もう決まったんだろうけど。

「あ、タバラカで思い出した。織斑一夏って知って……るよな」

「世界唯一ＩＳを扱える日本男子生としてＩＳ学園に入学。姉が元日本代表ＩＳ操縦者。第一回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』総合優勝および格闘部門優勝者であり、現ＩＳ学園教師の織斑千冬。ＩＳ開発者の篠ノ乃束の家族と仲が良く、その妹篠ノ乃箒とは幼馴染、ちなみに今は同じクラス。専用のＩＳが用意される事になって、開発元は倉持技研、しかし途中で投げて束さんが作成中」

「ああうん、もう良いから」

そこまで詳しく求めてないから……。

「あいつがさ、タバラカを知らないって言ってるんだけど？」

「……参考書に書いてあるのに？」

「アイツは読まずに捨てたから……ってか、世の中には広まってないの？」

「一応、世界的には容認された国だけど。そんな事を世界中の人が知ったら大変な事になるでしょ？押しかけたりとか」

「だからＩＳに関わる人にしか教えない……と？」

「インターネットで調べれば出るわよ？」

「普通に広まるじゃん！」

「と言っても、場所は教えないし、人数も、誰が居るのかも教えないから、殆どの人からすると噂止まりなのよ」

「んで、知ってる人は知っている。知らない人は覚えてね。って状況か」

「一時期流行った内容だからほとんどの人は知ってると思うけど」

一夏ェ……お前日本唯一の男子操縦者なんだから調べろよ。

ってか、なんて書いてあるのか凄く気になるんですけど！後で調べ

ようじゃないか！ジャマイカ！
んで……さっきからずっと歩いてるのに終わらない機会の山。

「必要な機材を見つけるのに時間が掛かりそうだよな……」
「それは問題ないわよ。ベルトコンベアで必要な物を運んでくれるから」
「歩く意味無いじゃん！」

なんだよそれ！歩いている必要性は！？ってかベルトコンベアとか……便利だなオイ。

「それじゃ、戻りましょ」

そう言って何故か横に移動するレトア……が勝手に後ろ向きに進んでる。
空港とかにあるアレですね分かり（ｒｙ
一体どんだけ金かけてるんだよ……。

「そして移動速度が速いのに安定感がある事にビックリだわ」
「ＩＳのＰＩＣを動いているときだけ擬似再現するのよ。だから反動も抵抗もこの程度なら消せるわ」
「なんというか……ＩＳ様様だな」
「開発者が何を言ってるのよ……」
「ってか、こんな事が出来るのなら他に事にも使えよ」
「使用するのには著作権があるからお金が掛かるでしょ？まずは荒榎に贈って友好関係を築こうとしているのよ」
「これ以上来たら面倒だなオイ」
「大丈夫よ、荒榎が言わない限りは何も送れないから」
「何で分かるんだよ」
「そう取り決めがあるのよ」

「誰が決めた……」
「ワ・タ・シ♪」

「決闘ですわ！」
「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」
「言っておきますけど。わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」
「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」
「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

……俺の現在位置は廊下です。
いや、別に廊下に立って来いって叱られたとかじゃなくて、研究所？から戻ってきて、さぁ扉を開けようとしたその時！がこの状況。
え、ちょっと待って？何で俺がいないのにクラス代表を決め様とかしちゃってんの？是非出たいです、ええ。
いやー、今まで原作通りとか、もう違うから自由にやろうとか色々と言ってきましたけど！

これは出たい、是非是非出たい、是非出たい！
甲龍とか戦ってみたい！ラウラがどれだけ強くなったのかが知りたい！……のは別の戦いか。
ブルーティアーズと戦ってみたいＤＥＡＴＨ！ビームが敵になると強いのか知りたいんだよね。

「千冬さんタンマ！その戦い俺も出たいです！」
「――荒榎！？」
「真中さん！？」
「却下だ」

……

「千冬さん？え、俺の聞き間違いじゃなければ却下って……」
「ああ、間違えてないから安心しろ。お前は駄目だ」
「え、なんで？」
「開発者が試合に出ては意味が無いからだ。第一お前が出たら勝負にならないだろうが」

なん、だと……え、じゃあ大会系は全部無理？学年別トーナメントも？

「先生、その言葉は見逃せませんわ！」

と、セシリア・オルコットが怒りながら千冬さんに抗議！
そうだそうだ！そんな事は認められないのだ！

「その代わりに始業式のバトルをやらせてやったのに……全く」
「え、あの先生？……ちょっと！無視しないで下さる！？」
「……なんだ」

凄く面倒な顔で答える千冬さん……本当に教師だよな？
仮にも生徒に対しての反応ではない……と思うけど千冬さんなら良いんじゃないかな！
別に睨まれたとかじゃなくて普通に良いんじゃないかなって思っただけだからね！

「そ、その言い方だと、イギリス代表候補生である私が、負けると聞こえるのですが」
「ああ。余裕で荒榎が勝つだろうな」
「――っ、確かに真中さんは開発者ですから、ＩＳについては一番詳しいでしょう。ですが！戦いにおいて必要なのは知識より行動力ですわ！」
「……つまり何か、オルコットは荒榎に勝てると？」
「本人を前にして言うのは失礼に値する事ですが、負ける気はありません」
「よし、そうか。そこまで言うのならお前と荒榎で戦ってみろ」
「え……ええ、良いですわ！」
「と言う事だ。荒榎、喜んで戦って来い」
「おおう、まるで狂戦士のような言い方、もしくはバトルマニア。だがあえて言おう、否定はしない！」

バトル、バトル、バットバットバットル♪
凄まじく罵倒してくれたクロワッサンを氷付けにするのは勿体無いからな、きれいに全方位から叩いて伸ばす！
え？怒っているのかって？……ほんのちょっと位なら怒ってるんじゃないかな！

怒りの方向は沢山あるよね♪（後書き）

ども断耶です。
知ってる人は・・・・ってか、この作品を読んでる人はほとんど知ってると思う、いや思いたい！
いやー、更新遅れてすんません。
何でしょうね、最近は何かやりたいことがあるのに、それが分からない、なんてすさまじい状況になっていまして・・・手がつかなかったんですよ
しかもまだ分かっていない・・・なんだろう
皆さんもありません？何かやりたいはずなのに、それが何だか分からないなんて状況
やる気が無いんじゃなくて、他を捨ててでもやりたいことがあるはず！だけど分からない・・・・あれ？これて厨二病？
いやいや、違いますよ？・・・・違うと思いますよ？
とまぁ、その辺は潰して砕いてゴミ箱へ入れておいて。

さて、この作品についての語りは今始まったばかりですよ！
荒榎の研究所！やりたくて仕方なかったです
そして荒榎の試合への欲求、正直どうなんだろう・・・・・・
いや、でもちょっと・・・・んぅ？
あれ？ひょっとして駄目だった？
いや、でも原作は放置して別物を考えないと！的な感じに纏まってる筈・・・・・・・・・・・だよね？

そしてクロワッサンとのバトゥですたい！
ってか、俺は何でクロワッサンと読んでるんだろうか・・・・・くるくるじゃなかったのに。

バトル二連続！（笑（前書き）

事後報告になってしまってすいませんが、ながも～さんの言葉を使わせていただきました！（汗

バトル二連続！（笑

「さて、両者準備は？」
「何時でも」
「同じくですわ」

時は、五時間後の昼放課。
え？それまでの経緯を教えろ？いやいや、前回の会話の後俺は寝た！
千冬さんも俺の状況は知ってるから文句は言えないしね。
授業を受けなくても怒られないって超便利！こんな学校なら毎日通えるよ！やることないけど！
まぁ、そんな事は置いておいて、だ。
只今アリーナにて千冬さん監督の元バトらせてもらう所ですかね。
武装は初期妖幻、背中に桜花を装備してあるだけ。

「それにしても、俺に遠距離で挑むとはね」
「そのお言葉、そっくりそのまま返して差し上げますわ。第三世代を舐めないで下さる？」
「なら第零世代とでも呼ぶべき妖幻を舐めるなよ？」
「お生憎様。あなたの機体情報はインターネットの『白藍事件』で調べさせてもらいましたわ」
「……なにそれ？」
「……最初にＩＳが登場した事件です」
「ああ、あれか……まだ残ってるのかよ」
「母国の作成したエネルギー兵器も、あれを原型とした劣化型となっていますもの」
「劣化させる必要は無いんじゃね？」
「そうしないとエネルギーが持たないんですもの。私のブルーティ

アーズ、青い雫はその名の通り青いエネルギーを主力武器としていますので、一回撃って使えなくなったら意味があるませんのよ」
「あらら、敵に情報を渡しちゃって良いわけ？」
「ええ。寧ろこのまま戦って、後で自分だけ敵の情報を知らなかった。なんて言われては困りますから」
「……ほざいたな、小娘が」
「年は貴方と同じでしてよ？」
「ですよねー。まぁ何にしても――倒すだけだ」
「ええ。シンプルで良いですわ」
「よし、それでは――始め！」

「先手必勝！」

荒榎のうでが前に伸び、焔顎を展開。
左右合わせて１０発の弾丸がセシリアへと走る。
しかし、それが当たる前にセシリアは動きを始める。
上に上に、弾を避けるだけではなく、自分の最高の射程位置に着くために上がる。
それを気づいた荒榎は撃ちながらも接近する。
撃っている分速度は落ちるが、それでも離れる距離は殆ど零。むしろ近付いているように見える。

「――――情報よりも速い！？」

セシリアは気づかない。
その機体が、、荒榎の乗っている妖幻が段階移行している事を。
初めてＩＳが世間に現れた事件『白藍事件』、その時のスペックを想定して準備を重ねてきたセシリアとしては予定外。
あれからの時間を考えればおかしくは無い。
おかしいことではないが、速いとは言える。
ＩＳの段階以降はＩＳと、搭乗者の精神によって左右される。
適応律が高いほどではなく、搭乗者の意思、そしてＩＳの意思がどれほど同じであるか。
ＩＳがどれほど搭乗者の為に働くか。
しかし、時が経てば経つほど速く変化するようになる訳ではない。
時が経つほどＩＳは搭乗者に合わせようと変化するが、それは時間で解決できる問題となる。
ＩＳには、常時使用者に適応しようと少しながらに変化している。
それは時間が掛かれば掛かるほど変化する為、段階以降が必要なほど急激な変化にはならない。
つまり、適切な時間と適切な感情、適切な状況が必要となるのだ。
そして、第二移行、第三移行と変化するたびに移行までに掛かる時間は増してゆく。
それはＩＳ本体の能力が搭載者に合ってしまうから。どれほど搭載者が望もうと、能力が伴っている状況でＨ代わることが無い。

「――――っ、行きなさい！」
「ビットなんざ使ってんじゃねぇ！」

だからセシリアは起こっているいるとは思わなかった。
ワンオフ・アビリティが発現するのは第二移行から。
少なくとも、『白藍事件』の時の異常な動き。過剰すぎる攻撃力と圧倒的な弾数、衛星を打ち落とす圧倒的な射程はワンオフと言われ

ても納得する。
いや、寧ろ普通と言われれば驚く性能。
だからこそ、あれをワンオフと想定したからこそ、まだ変わっていないと思っていた。
一応、変化についても計測してみたが、コレほどまでに上がる結果は一度として出ていない。

「なっ!?ビットを打ち落とした!?」
「気合と根性だ!」

しかし、実はセシリアが思っているほど速くなっている訳ではない。
答えは簡単なもの。動画で見るのと実物で見るのは違うという事だ。
しかも、あの動画は束の手により通常の人が見やすいようにスピードを落としてある。
第三としては、あの時の荒榎は最高速度を出していない。
第一、あの事件では殆ど移動していない荒榎の速度を見る事が出来るのは移動の瞬間のみ。
荒榎が移動したのが行くまでと帰る時、つまり殆ど急ぐ時が無かったのだ。
そして最後に、セシリアが第一世代よりも前の機体だからという理由で、動画の速度が精一杯だと思って油断した事。
あの動画を見ても急いだ様子が無いのは明らか。
それに加えて、一番古い機体だから、あれだけの戦闘能力を持っているには他の部分を削らないと無理だろうから。戦闘中に全然動かなかったから。
そんな理由から速度は余り出ないのだと判断したのが運の尽きだったのだ。

「おらおらおらおらおらおらおらおらおら!」

現に荒榎を見よ。
やる気が無い所か、遊び出しているではないか！
やはり荒榎は子供なのだ、だから馬鹿にされたことが悔しくて仕方ないからこんな風に遊んでいるのだ！

「五月蝿いっての！……って誰だ？」
「油断しましたわね！」
「邪魔！」

いきなり辺りを見まわす荒榎にセシリアがスターライトｍｋ－？を向けるが、荒榎左手で銃口を上に逸らし、そのまま接近し右手で一発。
それによってバトル終了の合図が流れる。

「申し訳ありませんでした」
「分かればよろしい。ついでに大会に出させてくれれば、よりよろしい」

「え、いやあの。流石に私には……」
「却下だ」
「ひゃっ！？……織斑先生」
「どうだ、これで理解したか？」
「はい……」
「大体、お前の稼働時間は精々５００時間辺りか？荒榎の場合１０００は軽く超えているだろう」
「え、いや５００あるか無いか……」
「……時間が違うのだ」
「あの、先生？今５００あるか無いか――」
「使い方が違うのだ」
「――あ、はぁ」
「お前の使用は訓練や起動確認だろうが、荒榎の場合は殆どが戦闘だ」
「アレは戦闘と言うより、ただの――」

――スパコォォォン

「……黙っていろ」
「……へい」
「とにかく、年期が違うのだ、負けて当然。寧ろ良く持ったほうだろう」
「良く持って5分ですか……」
「始業式の戦いは約3分だったがな。まぁ、二人が親しいものだったから、最初からから一撃必殺を狙う感じだったが」
「レトアに力を抜いたら俺瞬殺だしね」
「使用武器が少なかったくせに何を言うか」
「いやいや、武器を変える暇が無かったんですよ。第一他の武器は殲滅用だし」
「せ、殲滅……」

「とにかく。荒榎の力が分かった所で、よりやる気が出て練習する事を願っておこう」
「はい。それはもちろんですわ」

「って会話から1周間も……経ってるか」

でも2週間は経ってないんだよね……一夏を一方的に攻撃出来てるからって油断してたら不味いんじゃないの？
セシリアによる一夏フルボッコタイムですよ……いや、まだ最適化が終わってない状況だけど。
ま、武器になるものが無いからって逃げるとはどうかと思うけどさ……動きがねぇ。
初めてだろうから仕方ないかもしれないけど……遠かろうと当たるんだったら近付いて切れば良いのに。
何で距離を詰めないんだよ……相手の想像以上の行動は相手の動きを鈍らせるのを知らないのか？
効果無いけど……大体の武器ってそんな感じだし。
反射が追いつかなくても基本能力値が高いんだから一つ一つ追っかければ壊せるし……ってかずっと動いてろよ。

あーーーーーーーーー、羨ましい。妬ましい。パルパルシィ……。

白式だよ？束さん手作り？の白式だよ？基本設定が終わる前の強さとかも見たかったなぁ。

この戦いで基本設定が終わるんだよ？つまり初期状態とは戦えないんだよ……。

俺、戦わないと相手の強さとか詳しく分からないし……俺より強いか弱いかが明確だと分かるけど。

まぁ、それも妖幻の能力でカバーできるからあんまり必要性無いんだよね。

とまぁ、それは置いておいて。……キタコレ白式！一次移行完了！ついに登場雪片ニ型……って思ってたより細い。

ま、まぁあれだ。束さんが作った武器だし、細くても強い、うん強い！

紅椿の武器を思い出すんだ俺。名前は忘れたけど完全に日本刀だったじゃないか。

それに零落白夜もあるし！……その所為でこの戦いは負けるけど。

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ』

ええそりゃまぁ、千冬さんですからねぇ。

『俺も、俺の家族を守る』

『……は？あなた、一体何を言って――』

『とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！』

『というか、逆に笑われるだろ』

『だからさっきから何の話しを……あああもう、面倒ですわ！』

ホント、何を言ってるんだと言いたいよね。

うんセシリア、それは間違っていない……うん。

「織斑君何言ってるんだろう」
「分からないけど……ちょっと格好良いよね」
「あ、分かる～！なんだろう、様になってるって言うのかな？」

……今時の高校生では間違ってるのか？（↑現高校生）
最近は変わった奴がモテるんだな（↑転生者）
……なんか、さっきからムカツク事を言われてる気がする。

「……ま、主人公だからな」

主人公補正とかあるんじゃないの？
とか何とかいっちゃってー……何のネタだっけ？
まぁとにかく、そんな事を言っている間に一夏の敗北。
うわ凄い。滅茶苦茶シンとしてるわ、皆唖然ですね分かります。
まぁ、あれだ。

「……俺しーらね」

バトル二連続！（笑）（後書き）

えー、長らくお待たせいたしました！
いや～、自分まだ高校生なんで、テストとかがあったりするんですよね・・・・・
そして、ながも～さん！
本当にすんません！事後報告になってしまいました
第零世代・・・・・使っちゃった☆
あーいや、些細なことかもしれませんけどね。これは言っておかないと

さて・・・・今回は結構な間が飛びましたよ！
まぁまぁ、皆さんが良いたい事は分かります『学校は言ったばっかりなんだからちゃんと書けやボケ』と言いたいんですよね・・・・・
でも考えてください！――――――今出せるヒロインがレトアだけなんですよ！？
レトアが嫌いとか書きたくないとかじゃないんですけどね？一人でそんなに書けるわけ無いじゃないですか！責任者呼べ！
クロワさん？あれはルート入りませんよ、ええ、一夏なままです。
別に、他のヒロインが出てくるまで早回しって訳では無いですけど・・・・・書きにくいなぁ
早めに誰か入れちゃおうかなぁ・・・・・・

体調が悪いと大変なことが起こるんだってさ（前書き）

時間をかけたのにもかかわらず短いです

体調が悪いと大変なことが起こるんだってさ

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

いや知らんがな……。

それより寝させてください。眠いです

「先生質問です。俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

大声で言う必要性を問います。

寝させてください、眠いんです。

え、俺の部屋？……研究所についてましたよ、ええ。結構良い寝室でした。

でも眠いんです。分かってくれ、眠いんだ。何故かと聞かれると分からないが、とにかく眠いんだ。

「まぁ、勝負ではあなたの負けでしたが、しかし考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

惚れているのにこの態度……いや、惚れているからこその態度なのか？

ツンデレ……は箒ちゃんだっけ？だったらこれは何ぞ？

「それで、まぁ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」
反省してたら先ず謝れよ……え、これって一夏が悪い訳？
いや知らんけど……多分セシリアが悪いんじゃないの？

「”一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」
「いやぁ、セシリアわかってるね！」
「そうだよねー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから。同じクラスになった以上持ち上げないとねー」
「私達は貴重な経験を積める。他のクラスの子には情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君は」

おめでとう一夏、君はクラスで一番の人気者だ。
精々女子どもの目を引き付けて釣った女に嫉妬されるが良い。
主に端の席に座ってる刀娘とかこれから増える中国娘とか……そこの金髪は自らだから違うか。
ほらほらほら、こんな事をしている間にも箒ちゃんの目がどんどん鋭く……

「そ、それでですわね」

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるっみるうちに成長を遂げ――」
「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」
おおぅ、箒ちゃんの反撃……ちょっと改変アリだけど。

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ乃さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」
「ら、ランクは関係無い！頼まれたどうしてもとのは私だ。い、一夏が懇願するからだ」
「え、箒ってランクＣなのか？」
「ランクは関係無いと言っている！」

うんうん、ランクなんて関係無いよ……俺は元より無いし。
知ってるか？あれって訓練機で測るんだけど……俺訓練機動かないし。
いやまぁ、妖幻でも測る事は出来るんだけどさ……俺専用に第二移行が終わってる状態で測っても……ねぇ？
さてさて……今の声で結構目が覚めましたよ？セシリアと箒ちゃん、一夏が選ぶのはどっちなんだ！

「座れ馬鹿ども。そして荒榎は起きろ」
「俺の権利の再確認を申し上げます」
「そうか、つまり私の授業で寝ると言っているんだな？」
「さぁ勉強だ！……って授業じゃないでしょこの状況」
「一応授業だ。馬鹿が変に騒いでいるだけでな」
「お前達のランクなどゴミだ、私からしたらどれも平等にひよっこだ。荒榎までとは言わんが、最低でも二年生以上になっていない状況では優劣など関係無い」
「つまり2年以上になれば決めて良いと」
「揚げ足を取るな」

――――スパコォォォォン――――

「……だんだん強くなってる気がする」

「安心しろ、強くしている」
「何処に安心しろと!?」
「そうですよ!荒榎の体を傷つけないで下さい!」
「「……」」

何時の間にいたんだよ！

さて古今東西の読者様方、ここまで来て誰だか分からないなんてオチはいらないし、分からないなんて台詞もいりませんよね？
せーのっ

「なんでいるんだよ!」
「荒榎の居る所が私の居る所よ☆」
「いやクラス違うからな!?」
「社会の壁くらい壊せなくてどうするの!」
「寧ろ壊さないのが普通だからな!?その為の壁だからな!」
「あえて言うなら、だが断る!」
「何で知っているのかはこの際なんでも良い、ただ一言言うのなら断るな!」
「……荒榎がそういうのなら」
「そうそう、さっさとクラスに……」
「荒榎を連れて行くわ」
「どっちにしろ変わらないからな!?いやクラスとか周りの人とか変わるけども!」

――スパコォォォォン×2――

「いい加減にしろ」
「……初めてあたったわ」
「それはそれはおめでとう」
「これで荒榎と同じね」

「どこを間違えたらそうなった……」
「夫婦漫才はそこまでにしろ。というか、生徒会長が1年の見本にならずにどうする……」
「あら織斑先生。ちゃんと見本になってると思いますけど？『好きな男の為なら全てを捨てろ』と」
「お前の場合は尽くし過ぎだ。限度を測れ」
「私の限度は荒榎と別れろが無理な事くらいです」
「……はぁ」

いや千冬さんお疲れですか、俺は疲れてます。
何時の間にか俺の背中に乗っているこの生徒会長マジ疲れる。

「さてレトア、そろそろ俺から降りるとかしないと俺が潰れるぞ」
「あら、失礼ね。私はそんなに重くないわよ。それに女の子の重みで潰れるのなら本望じゃない？」

そういって、より一層体をくっ付けてくるレトア……の体が凄まじい事になってますヨォォッォ！？
こいつ本当に淑女か！？コレで淑女とか言いきるのだったら世の中は結構淑女で溢れかえっているがするぞ！
あ、ってかあれだ。今までも体をくっ付けた事はあったけど……
今回は異常なほど柔らかいＤＥＡＴＨ……。

「言ってる、事と、やってる、事が、違うと、俺は、思います」
「ふふっ♪柔らかいでしょ。付けてないのよ」
「何をだよ！…いや言わなくて良い」
「それは勿論ブラジャー」
「だから言うなって言ってんだろうが！」
「大丈夫、襲わないわ。今日はクラスに宣言しに来ただけだから」
「大丈夫が大丈夫じゃない件について詳しい説明を求めたいんだけ

ど……」
「え、そんな、詳しく言えだ何て／／／／／」
「一体何を言う気なんだよ！」
「何って……ナニ？」
「それは最低でも高校卒業後の会話の時に言え」
「あら、それじゃあ高校卒業までは絶対一緒に居てくれるのね」
「寧ろ逃げられないし」
「ええ、逃がす気は無いわよ」
「じゃあ選択肢は一つだし」

と、ここに至ってようやっく状況把握――――――――教室が静かです。
千冬さんに至っては頭を押さえています。え？クラスメイト？唖然の表情で固定の状態。
副顧問はワタワタしてる……けど放置で良いや。
というか、この状態を直す鍵は俺には無いから……うん。

「さっさと用件だけ済ませて帰れ」
「んー……それもそうね」

そう言って俺の背中から離れて教壇に立つ……多分教壇。

「思えば、一年生と個人的に話すのは初めてね。生徒会長の更識楯無よ」

素晴らしいよね、この身代わり。別人に見えて仕方ないだろうな……。

「このクラスに来た理由は沢山あるのだけど、言いたい事は一つだけ――――――私は荒榎のお嫁さんだから♪」

そして、スタスタスタ、とクラスから歩いて出て行くレトア。
どこからは入ってきたのか、とか、何で他の生徒にバレないで俺の後ろに来れたのか、とか、生徒会長が授業放棄して良いのかよ、とか。
言いたい事は沢山あるが、その中から一番重要そうな一言を取り出して言わせてもらおう。
……爆弾発現で帰るなや。

体調が悪いと大変なことが起こるんだってさ（後書き）

さて、何から謝ろうか・・・・・・いつも謝ってばかりに思えているのは俺だけ？

なんだか、最近上手くかけなくなってきました・・・・・・

何でしょう、原作に入ると急に書きにくくなるんですよね・・・・・・

・始めは自由でも終わりの地点はある程度近づけたいという願望によって行動が邪魔されていますよい

半分以上がネタ作でお送りいたします・・・ってか全部ネタ作？

「……」
『……』

すんばらしい沈黙です……そして視線は固定なんですね分かり……
たくないな。
つまりザ・ワールド！……ごめんなさい詳しく知りません

「荒榎、なんとかしろ」
「いやどうしろと？」
「お前の『嫁』が起した始末は『夫』のお前が付けろ」

千冬さんの『嫁』『夫』の言葉でクラスが再び動き出す。

「え、真中君って結婚してるの！？」
「でもまだ１６歳じゃ……」
「というか、さっきの生徒会長って……」
「いや、しかし一番初めにクラスに着いた私は知っている！」
「おおっ！１年１組２７番橋口佳代さん！」
「今朝生徒会長が『わざわざ』クラスまで来て真中君を『ダーリン』
と呼んでいた事を～！」
「なんだって―！？…いや、それは私も知っている」
「実は私も」
「同じく私も」
「……グズッ」
「「なんだってー！？」」
「……ありがと」
「「いえいえ」」

「皆大好きだー！」
「「「大好きだー！」」」

……このクラス変です。
いや、主人公とヒロインが居る時点でちょっと位なら変わってるとは思うけど……これちょっとじゃなくね？

ＳＩＤＥ一夏

「……荒榎って結婚してたのか」

あれ？でも男性は１８を超えないと結婚出来ない筈……荒榎の国だからか？
確か……タバラカだっけ？昨日の授業で習ったときにはビックリしたな。
荒榎が日本人じゃなかったなんて……ってことは世界初は荒榎だよな？
俺は世界二番目……なんだろう、変な感じだ。
まさか最強が荒榎だったとは……サイン貰っておけば良かった。
でも、そういう事を防ぐ為に千冬姉は言うなって言ったのか？
……良く分からないけど、荒榎が凄い立場なのは理解した……と思う。

「荒榎」
「ん？なんだよ、急に真面目顔になって……」
「結婚祝いって何渡せば良いんだ？」
「俺に聞くなっ！そして結婚してないからな！」
「いや、でも『お嫁さん』って」
「違うから！」
「……否定される先輩が可哀想だろ」
「だとしたら事実無根の虚言で言われている俺はどうなるんだよ……」

ＳＩＤＥ荒榎

何でこんなことに……レトアの所為だな、うん。
何故か一夏まで敵に回ったし……箒ちゃんをけしかけてやろうか。
一夏が生徒会長の事で必死になってるって。
セシリアでも可。どっちにしても死にかけるだろうけど……。
まぁ、死ぬ事は無いから問題無い……よな？

「とにかく、俺は結婚してないし、アイツは嫁じゃないから」

「許婚ではあるがな」
「千冬さぁぁぁぁぁぁん！」
「なんだ。言っておくが私は生徒に正しい事を教えたまでだ」
「だったら何故口が笑ってるんですか！」
「さて、そろそろ次の授業が始まる。お前達も静かにしろ」
「そこで無視！？ってか何で千冬さんが知って――」

――――スパコォォォォン――

「五月蝿い」
「……はい」

コレは俺が悪いのだろうか……。
なんだろう、もうやる気が起きない……寝よう。
椅子を少し後ろに下げ、体を倒して腕を枕に――

――――ガスッ――――

「……何で角」
「寝るな馬鹿者」
「前は良かったのに何で……」
「それは勿論面白いからだ」
「開き直らないで下さいよ……ってか、俺教科書無い」
「ならば隣に見せてもらえ」
「――――っ！？（ビクッ）」

ＳＩＤＥ第三者

「……机動かないじゃん」

「椅子だけあれば問題無いだろ」

こんな会話でもみんなの心は緊張に溢れている。何故なら！真中荒榎が座る席の隣、織斑先生が指差すその席に座っているのは『空建亜子』

超人気動画サイト『ヌコヌコ動画』にて白藍事件を見て感動、バトラーに一目惚れし、『バトラーに仕え隊』なるホムペを作成。

バトラー搭乗者を想像したり、絵にして見たり、合成ボイスを限りなく人に近づけた人工ボイスを作りだし――作成期間５ヶ月――

バトラーの声を想像し流したり。

バトラーを執事とし、自分たちの立場をお嬢様にした環境――その中にはホムペ応援者が多く、男女ともに盛り上がっていた――を考えたり、その状態で叱られる事ヲ考えたりＥＴＣ！

パソコンの表紙はヌコヌコ動画から切り取ったバトラーのバトルシーン！

バトラーのフィギュアを自ら作り上げるほどのバトラーマニア！ちなみに作成期間は３ヶ月！

あっ君の情報をつかみ、そこから真中荒榎の情報を手繰り寄せる。

ＩＳ学園に入学した理由がバトラーに会う為のバトラー信教者！

ちなみに、何でそんなに知っているかというと私も彼女のホムペ崇拝者！

このクラスにも結構混じってます！

「……っ！（ドキドキドキ）」

「「「「「「……（頑張れ！）」」」」」」

「ういうい。んじゃ悪いけど見せてくれる？」

「は、はひぃっ！」
「「「「「……っ！（よっしゃぁぁぁぁぁぁ！）」」」」」
」
「……千冬さん、俺怖がられたよ」
「そう見えるのならお前の目は節穴だ。いいから授業を始める。号令！」
「きっ、きききききききき起りちゅっ！」
「「「「「「……っ！（もう良い！お前は頑張った！）」」」」」
」」」
「っ……ビックリした。号令だったんだ」
「はっはははははぁあい！」
「「「「「「……っ！（もうやめて！管理人のライフはもうゼロよ！）」」」」」」
「何時も隣でやっていただろうが」
「寝てましたが何か」
「……まぁいい。号令」
「れれれ礼！」
「うぃ」
「……ちゃんとやらんか、ったく……さて、前回までの授業では」
「……あ、これって何？」
「……え？」
「「「「「「……っ！（製作者が知らない事って何！？）」」」」」」
」」」
「いや、作成中はこんな単語使ってなかったから……ってか、知らない単語ばっか」
「「「「「「……っ！？（なんですとぉぉぉぉぉぉぉ！？）」」」」」」
」」」
「え、えっと、この単、語は、えっと、えっと……え、あれ？ここだから、えっと」
「「「「「「……っ！（落ち着いて管理人！あなたならきっと出

来る！）」」」」」」」
「……あ、これか？」
「……あ、はい」
「「「「「「「「……っ！（良いの！良いのよ管理人！まだ挽回する機会はあるのだから！」
「へぇ～、こんな機能付いたんだ」
「「「「「「「「……っ？（……え？）」」」」」」」」
「え、あの……製作者じゃ」
「え、ああ、うん。俺のは…ほら、零世代とも言える旧式だからさ、色々と機能が増えてるから」
「「「「「「「「……っ――（そんな事な――）」」」」」」」」
「――そんな事無いです！」
「……そこ、静かにしろ」
「あ、すんません。俺が聞いてました」
「……出来る限り小さな声で聞け」
「あいあいさー」
「す、すみません……」
「ま、俺には要らない機能かな……ＰＩＣのオート制御とか」
「……え、オート制御じゃないんですか？」
「まぁ、昔のＩＳにはそんな機能が無かったから」
「「「「「「「「……っ！？（手動であんな戦いが出来るの！？バトラーの操縦能力は化け物か！）」」」」」」」」
「……凄いです。手動制御であれだけの事が出来るなんて」
「いや、まぁ色々とあるんだよ。逃げ道が」
「あ、あの！もしよろしければ今度――」
「そこ、声量が上がってるぞ」
「すんませーん……んで？」
「あ、いえ、なんでも……」
「あ、そう」
「「「「「「「「……っ！（管理人、あなたは頑張った！現に思い出

して！最初のときよりスムーズに話せてるもの！このまま行けば念願のお友達に！……って私達短い３点リーダーの間にどれだけ語ってるの！？）」」」」」」」

「……ｚｚｚ」

「つまり、ここは……結局寝たか」

「……はぅ」

「「「「「「「……っ！（もう良い！その頑張りだけで涙が出るよ！）」」」」」」」」」

「……寝顔、可愛い／／／／／／」

「「「「「「「「そっちかぁぁぁぁぁぁ！」」」」」」」」」

「……真中様」

「「「「「「「「様ぁぁぁぁぁぁ！？」」」」」」」」」

結局、その日の１年１組の廊下には七名の女子生徒が昔懐かしのバケツ持ちをやっていた。

そして、その日のバトラーに仕え隊は盛り上がり、夜遅くまでチャットが動いていた。

尚、１年１組のバトラー崇拝者が『自分たちはまだ境地に辿り着けていない』と言い出し空建亜子に弟子入りを言い出したのは定かではない。

「良い？真中様に必死に話しかけるんじゃないの！さりげなくサポ

ートし！さりげなく支え！さりげなく話す！自分の意思は後よ！１に真中様！２に真中様！３、４も何でも真中様！世界はあの方で回っている！」

「「「はいっ！」」」

「あの方の笑顔を前から見るのではなく、さりげない微笑を捕らえるのよ！その為ならば国の法など破ってしまいなさい！」

「「「はいっ！亜子会長！」」」

「ここでは部活を作ることが出来る！ならば私達のすべき事は何！」

「真中様を応援する会を作ることです！」

「違う！」

「真中様を守る会を作ることです！」

「違う！」

「えっと…真中様とお友達になる会を作ることです」

「違う！真中様にバレてはいけないのよ！だから名前は全く関係無いものにしないといけないのよ！」

「「「お姉様っ！」」」

「まずは広めるのよ！私がとったこの画像で信教者を増やすのよ！」

「こ、これは……」

「寝てる……」

「……笑ってる」

「「「可愛いっ！」」」

「行くわよ！皆！」

「「「どこまでもお供します！」」」

半分以上がネタ作でお送りいたします・・・ってか全部ネタ作？（後書き）

皆さん、ギルティクラウンは見ましたか？見てなかったら一度は見てください！
ＯＰが素晴らしいです、ｓｕｐｅｒｃｅｌｌさん最高！素晴らしすぎます
涙が止まらないほどには感激しましたとも、ええ
Ｍｙ　Ｄｅａｒｅｓｔ・・・・・これって題名を載せては駄目でしたっけ？
歌っているのは１５歳だそうです
・・・・・ああ、もうＣＤ予約しないと
ギルティの画家も素晴らしい！
アニメも良いですけど、絵も見てみると良いです、俺は大好きです。
ＳＵＰＥＲＣＥＬＬの人なんですけどとても上手です。
今度画集でないかな？即効で買うのに・・・・・・

今回の作品？遊び心２００％でお送りしたので何も言えません

知ってるかい？どれだけ小説が早く進んでも、現実だったら遅いんだぜ（前書き

遅れましたねぇ・・・・・

さて、ここで前に言った言葉を訂正させてください……授業つまんないっす。

毎日毎日、行って、話聞いて、途中で分からなくなって寝て……リピート×3から5

偶にＩＳ訓練の時は……いや暇です。

やる事がつまらない……Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｂａｔｔｌｅ！　と叫びたいくらい暇です。

上に飛んで、下に降りて……知ってるか？ＩＳの練習において、歩く事より先に飛ぶこと憶えるんだぜ？

いや、まぁ簡単だからね。ＰＩＣあるからさ……歩くのは重いけど。

いや、ほんと。ＩＳって重いんだよ。だから先ずは飛ぶことで重力操作を憶えるんだよね。

ってな訳で、現在一夏とセシリアが飛んで……一夏墜落。

一夏が千冬さんに怒られている中俺は何をしているかと言うと……。

「……あ、ビショップ取られた」

オンラインチェスで御座います。

いやー、この人強いな、うん。戦うのは5度目だけど一回しか勝てて無いんだよね。

ひょっとしてプロだったりするのか？……プロがネットはやらないか。

「……あー、また負けた」

なんだろう……こう負けてばっかりだと…瞳が疼く！
というか、痒いというか……使いたくなると言うか…別に厨ニ病が発病したとかじゃないよ？
ただ、普通に……全力で挑んでみたくなると言うか……絶対勝てるけど。
いや、寧ろ高演算処理能力を持つ瞳を使って勝てなかったらさ……世の中勝てる人いるの？
時間が掛かるだろうけど、チェス盤一つくらいなら未来予知に近い事が出来ると思う。
高速演算で各ルートを検出、一つ一つにキャパシティを回しながらもルート時における相手の行動パターンを検出。
相手の組み方を基本として俺に対する反応を提示、それを書くルートと合わせ比較的確率が高いものを取り出す。
……やろうと思えば１０秒で出来ると思う。発動９０％あたりでなら。
現在の最高発動区域、つまり痛くない状況で長時間発動できるのは９２％だから、結構凄い事になっています。
あー、でもこれはズルだよな。流石にセコイ。ってな訳で俺は普通に頑張るさ。

「時間だな今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

……なんて自己解決してたら授業は終わったよ。
本日はコレにて終わり。後は研究室に戻って……やる事ないから寝るんだけどね。

「荒榎、お前は残れ」
「……ゐ？」
「話す事がある」

「……帰って寝たいって言ったらどうします？」
「とりあえず、授業中に寝ているのを起こす」
「契約無視ですよ……」
「教師としてではなく、お前の知り合いとして起こすのなら問題無い」
「……それセコイ」
「これも処世術だ。特に、お前のような特殊な立場を相手にするならばな」
「千冬さん以外だったら世間から消えてますよ……」
「それを言いきるお前も凄いがな……」

いや、政府にちょっと小言を聞かせれば問題無いですし……報酬に適当な機械を上げればやる気も出るでしょうしね。
あー、なんだろう。この立場って凄く便利なんだけど……言葉に気をつけないと怖いよね、色々と。

「さて、そんな事は置いておいて、だ」
「置いておいて良い内容では無かったですよ……」
「ん……ああ、副担任の……」
「ふ、副担任の……」
「まさか、担任の名前を忘れた訳では無いだろうな……」

……その通りですって言ったら笑って終わらないかな？
駄目ですよね～……憶えてないです。
え、誰だっけ？ってか、何時からそこにいました？いや、ずっと居たような、居なかったような……憶えてない。
……1秒ごとに副担任の顔が崩れて、千冬さんの顔が少しずつ呆れに変わってるよ。
ヤベ、マジで忘れましたよ？……名前名前名前……ん？
なんだろう、今キラリと何かが地面で光って……名札じゃない

かっ！
え、つまりこのタイミングからするとだ……副担任か、千冬さんのだよね。
んで、だ。千冬さんの名札は首に掛かってるし……副担任のは掛かってない！
よし、来たコレ！副担任ありがとう！ヒントをくれるなんて！……本気で落としてたら大変だけど。
ああ、なんだろう……山、田、真……那？
最後の字が見難いな……那覇の那か耶……やまだまな、やまだまや。
……どっち！？

「ねぇねぇ！今度の山ちゃんのあだ名何にしようか！」
「やっぱり下の名前でまーやんでしょ！」
「そうだね！下の名前で『まーや』んだよね！」

……そうかそうか、下の名前は『まーや』……真耶だな。

「山田真耶ですよね……？」
「よかったぁ、憶えててくれたんですね！」

忘れてました、とは流石に言い難い。というか……言えない。

「ちゃんと先生を付けろ」
「まーや先生」
「ま、まーやじゃないです！真耶です！……って下の名前！？今時の子は進んでいるのかもしれないけど、私は先生な訳で、いや、でも真中君なら……」
「山田先生……織斑と同じ事を繰り返してどうするんですか」

「……はぅ！？」
「……随分、個性的な……うん」
「とりあえず、お前は隣の席に感謝しておけ」
「隣の席……あ、号令だった人？」
「名前くらいは……まぁ良い」

そういって、呆れた顔で、俺を見て、それからアリーナの席の一角を見て……また俺を見て。
……何かあります？特には何も見えないんですけど。

「それで、話と言うのは？」
「ああ。今日から2組に新しい代表候補生が来る」
「強いですか」
「……そんなに戦いたいのなら楯無を呼べ」
「それは嫌です。直ぐに終わるし……ってか、武器を知り過ぎてあんまり楽しく……」
「一応、学びの場なんだがな……。とりあえず――そいつは無礼だ」
「……知り合いですか」
「一応、な。あまり知恵の回る奴では無いが、悪い奴ではない」
「だから突っかかってきても許してやれと？」
「いや、許す必要は無い。思いっきり潰してやれ」
「……」

鬼だ、ここに鬼が居る……。
ってか、あれだよね？代表候補生・……凰だよね？凰鈴音だよね？
って事はだ……もうすぐ無人が来るじゃんね！バトルですよ！機械だから思いっきり潰して可！
桜花が最大出力で使えるんじゃね？人間相手だからって量を減らす必要無いんじゃないかな？かな？

量を減らしても消費が変わらないのには泣いたけど……今回は制限無いよね！よね！

よしよし、これはあれだ、凰とも仲良くなっておいて近くに居た方が面白いんじゃないかな？

「寧ろ仲良くします……多分」

「……」

「ま、真中君が友達を増やす宣言を……あわわ」

おう、なんだよその態度……。

千冬さんは唖然だし、ま……副担任は慌てるし。

なんですか、俺はそんなに友達が居ない様に見えますか。

居るんだよ、友達くらい。作れるんだよ。

えっとだな。レトア……は違うか？

シャロ……友達だな、うん。

ラウラ……何かが違う。

束さんは悩む間もなく違うと言いきれる。

箒ちゃん……微妙？

一夏……アイツなら友達って言いきりそうだな。

メロディアーナ……は家族だな。

うん！……少ねぇよ。

思いつくのがシャロだけかよ……一夏は微妙、箒ちゃんも微妙。

「……俺、友達百人作って来ますわ」

「そんな時間があるのなら他の事をやれ」

「言外に無理だと言ってません？」

「ならば言葉で言おう。無理だ」

「酷っ！？」

「お前の周りを見ていれば無理な事は直ぐにわかる……いや、少しなら出きるだろうがな、頑張れば」

頑張れば部分だけ強調されたのは気のせいじゃないと思う……。
とにかく、凰とは仲良くした方が楽しそうだから良いんだよね……
明日か。

「……」

千冬さんの言葉はきちんと聞いておくべきだったな、うん。
そうだよ、今思い出せば明日とは言ったけど――今日か明日って
言ってたよね？
よし、コレで分かる人は分かったね……目前なぅ。

「えーっと、受付って何処にあるんだっけ？」

……忘れてるよ。この子完全に忘れてるよ。
ツインテールがピョコピョコ跳ねておりますが忘れてますよ……特
に意味は無い。

知ってるかい？どれだけ小説が早く進んでも、現実だったら遅いんだぜ（後書き

ええ遅れましたよ・・・・ども断耶です
断耶です。最近、書いている部分が思い浮かびません、
断耶です。書いている先の話ばかりが頭の中で暴発しています
断耶です。メロディアーナが全然出せません。
断耶です。番外編は思いついても、このタイミングでやることではないと思うとです。
断耶です、断耶です、断耶です・・・・・

ＢＧＭは芸人ヒロシのあの曲でお願いします・・・・疲れたんで止めようかな。
ともかく、上に全てを込めましたよ・・・・・ガクッ

うん、それが妥当な反応だよ・・・・・（前書き）

早くできた分危険な作品ＤＥＡＴＨ

うん、それが妥当な反応だよ・・・・・

さて、皆なら目の前に困っている女子。
詳しく言うとツインテで小さくて、胸が無い女の子。
が、道に迷っていたらどうする?まぁ、頭の中で何を思うかは知らないが、大抵の人は偽善者振りたくて声を掛けるだろう。
俺も昔ならそう思っているだろう。ましてや凰。
主格ヒロインの凰鈴音だ。主格であるにあたって、他のキャラよりも秀でて可愛い、秀でて強い、秀でて頭が良い、等の能力があるのが良くある例だ。
しかし、それから外れた『地味キャラ』というのもある。
それは、今まで気にならないような、可愛くないと思っていたようなキャラクターをヒロインとして書かれている。
しかし、そんな作品であろうと、イラストレーターは少し可愛く書かないといけない。
可愛過ぎず、地味過ぎないキャラ。それこそが地味キャラとして書かれていると俺は思う。
閑話休題。
とにかく、この作品の主格ヒロイン『凰鈴音』は、地味キャラではないので、可愛さに対しては貪欲に書く事が出来るキャラクターだ。
性格や気持ち、表現方法などは作者によって決まるが、絵に関しては作者の大体のイメージを聞いたイラストレーターが自分なりに書く事が出来る。
どこまでも可愛く、何処までも元気に、何処までも乙女心を忘れず。
人懐っこい猫の様に主人公と関わる。
この作品においてそんなキャラを表現したのが凰だ。そう思う。
ならば、そんなキャラを小説で見た第三者としては、可愛いと思う人が多いのではないだろうか。
そんなキャラクターが道に迷っていたら、助けると言うのが普通だ

と思うだろう。
しかし、ここまで持ってくるのに長く書いたがしかし。
今、俺が居るこの世界においてあのキャラは現実だ。
『転生？んな事ある訳ね―じゃん』とか考えているのも居るかもしれないが、この状態においては現実だ。
幾ら、見た目が可愛くても、幾ら性格が良くても、幾ら強くても、幾ら乙女心を持っていようとも。
それに当たるのは主人公である『織斑一夏』そして、それに繋がるサブキャラクターが良い所だ。
ただ、サブキャラクターであろうと、無かろうと。そんな事よりも大事な事がある。
相性。
相手との性格と書いて相性。
自分と相手の性格が、どれだけ上手く回るのか。
これは生活において重要な事だ。
話しかけても相性が悪い場合は仲良くなれない。

「……とまぁ、色々と西尾さん的に語って見たけど……ただ面倒だから知らん振りするだけなんだけどね」

知らん振り。
それは――

「……あきた」

うん、飽きた。
頑張ってみたけど……飽きたわ。
というか難しいんだよ。うん、難しい。
あの人の才能は神でしたね……刀に化物、偽者傷物猫物。真庭を入れての語りシリーズ。

零崎もありますね。双識、曲識、軋識、人識。全員かっけーよね。
まぁ、戯言だけど。
人類最強、人類最終……みんな大好きだ―！ギロチンもってこーい！……気分修復。
まぁ、数を言ってしまえば『りすか』とか沢山あるし？
とりあえず、俺は知らん振りして帰るんですよ。
酷いとか言わないでよ？もう八時だし……え？寧ろ余計に酷い？

「その情報、古いよ」

こんな台詞から始まるストーリー……とかなんとか言っちゃってー。
うん、凰の心では始まってるんだろうなぁ……。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」
「鈴……？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生『凰鈴音』。今日は宣戦布告に来たってわけ」

素晴らしいよねぇ……中国。

戦いたいなぁ……バトルマニアと言われても仕方が無いと思います。
……そういや、メロディアーナにＩＳ渡し忘れてたな。
ずっと仕舞ってあるわ……今度届けに行くか。

「なんでそんな格好つけてるんだ？変だぞ」
「んなっ！？……あ、後で憶えておきなさいよ」
「後で……何か用事でもあったのか？」
「そうよ。私には代表候補生として、大事な役目があるの」

ちょっとえらぶって言っている割に身長の低さで可哀想な事に……。
俺は大体……女子より少し大きい程度だからな、一夏からしたら余計に小さく感じるだろうに……

「それで、ＩＳ開発者。真中荒榎は何処にいるの？」

……ヲイクラスメイト。即効でこっち向いてんじゃねぇよ。

「……？何処かで見たような」
「気のせいだ。正真証明、初の顔合わせ」
「……まぁ良いや、とりあえず国からは遜れとか言われたけど。それ必要？」
「不必要」
「ＯＫ。それじゃあ普段通りに話させてもらうわね」
「寧ろそっちのほうが楽だからな」
「お互いにね。んじゃ率直に質問――――なんでバトルに出ないの？」
「……」

凰の目が変わる。

人懐っこい猫のような目ではなく、国を背負った『代表候補生』としての目に。
俺は動かない、いや、動けない。――――――だって全然見当違いなんだもん！

「出て支障でもあるのかしら？ひょっとしてＩＳが危険だから？それとも――危険なＩＳを他の国に見られて、敵対するのが嫌だから？」
「いや学園が出るなって」
「……へ？」

素晴らしい唖然の表情だ……まぁ、そうなるよな。
あれだけ格好つけて、裏がある！とか思って探ったら？特に何も無く出られなかっただけ……うわ恥ずかしい。

「別に妖幻を見せる事に躊躇いが無いとは言わないけど……それより出たい」
「……え、ちょっと、ちょっと待って」

そう言って頭に手を当てる。所謂うな垂れポーズ。

「え、どゆこと？私の思い違い？え、じゃあ何、私は恥を晒しただけ？え？うそ？ホント？え？え？え？え？全部思い違い？」
「……ドンマイ」
「うにゃぁぁぁぁぁぁぁ！？」

俺の一言が完全なる引き金ですね……でもドンマイ。
うん、国の為に間違いは無いよ、間違ってはいない、ただ考え過ぎただけなんだよ。
頭脳派じゃないのに頭を使いすぎただけなんだよ……ドンマイ。

――――スパンッ！

「五月蝿いぞ。教室に戻れ」

「何よ！今大事な――」

「ほう、少し見ない間に偉くなったもんだな」

「――ち、千冬さん……」

「さっさと自分のクラスに戻れ、ＳＨＲはとっくに始まってるぞ」

「つまり千冬さん遅刻したんですね分かります」

――――スパコォォォォォンッ！

「面倒だったから外で終わるのを待っているつもりだったんだがな、思いのほか長引いていたから叩いただけだ」

「今までで一番の威力をありがとうございます……馬鹿になったらどうするんですか」

「安心しろ。束が誠心誠意を篭めて直してくれるだろう」

「え、ナニソレコワイ」

「と、とにかく一夏！次の放課にまた来るから逃げないでよ！」

「必要無いのに何で逃げるんだよ……」

「一夏、今のは誰だ？随分と親しそうだな……」

「い、一夏さん！？あの子とはどんな関係で――」

「おお～、朝っぱらからｓｙｕｒａｂａ展開だよ！良いぞ良いぞもっとやれ～こんな現実楽しいぞー！」

「「楽しいぞ～」」

「ああ、叩かれている真中様も素敵……」

「そ、空建さん？その手にある四角い機械は……」

「ああ、これ？小型カメラよ。カード型だから場所を取らないし、画質も良いの。改造してあるからシャッターを切るタイミングで電源が自動で付くわ」

「……空建さんが分からない」
「亜子会長ズルイ！私もそれ欲しいです！」
「「ならば私達にも！」」
「この役は誰にも譲る気は無いわよ！私の唯一の心の救いなんだから！」
「「「ならば勝負！」」」
「良いでしょう！この『真中様を影からお守りする会』。通称『ＭＳＧ』現会長『空建亜子』が勝負『真中様知識勝負』を受けましょう！」
「……亜子会長、まだそれ出来てないですよ」
「良いのよ。これから作るんだから。とりあえず人数８名は集めたわ」
「「早っ！？」」
「なんで『ＭＳＧ』なんだろう……真中様を、影から、お守りする会……だったらＭＫＯじゃないのかな？」
「多分アレだよ、影と守るを英語にしたんだよ」
「……ああ！」
「……ゴメン一夏。昼まで待って。耐性付けてくるから」
「？良く分からんが良いぞ」

この後しっかり全員怒られました☆

うん、それが妥当な反応だよ・・・・・・（後書き）

これは何を語れば良いのだろうか・・・・・・・
ああ、西尾さんだね。
化偽傷猫黒猫白傾囮花鬼の全巻揃えております（ドヤッ
刀も全巻読んでますよ真庭も読みましたよ！
零崎も読みましたね～・・・・語れる人は話しましょう（笑
次回こそ、鈴の激怒シーンまで書きたいなぁ
ＰＳ，鳳と書いてありますけど鈴ですよ？いや、分からない人いないだろうけど

またまたＰＳ，書き忘れてた事に気づいたのは松鳴さんの感想ですが
荒榎は中学時代は仕事ｅｔｃにより鈴と会っておりません

人の視線には威力がある

篠ノ乃箒、セシリア・オルコット共に3回
え？何がかって？千冬さんに叩かれた回数ですが何か。
凄いね、こんな日に限って千冬さんの授業が多いんだよね、そして
俺は隣の空建さんに教科書を見せてもらわないといけないんだよね
……買うか？
そろそろ買ったほうが良いのかもしれない、うん。
そして現在昼放課になりました。ですから、ええ。

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」
「凄まじい言い様……あ、空建さん、今度から教科書買うから良いや」
「……え」

見ていても面白くないし、とりあえずお腹が空いたので食堂へＧＯ。
後ろで何かが倒れた音なんて聞いてないよ？

「あ、ああ……」
「あ、亜子会長……」
「元気を出して……」
「そんな……そんな…っ！」
「亜子会長！？」
「誰か！救急車、救急車を！」
「誰か黄色い救急車を！」
「「それは違う」」

「……そうだっけ？」
「とりあえず保健室の方が楽じゃないかな？」
「「「そ☆れ☆だ！出席番号……忘れたけど秋口真里さん良い事言うね！」」」
「……三人同時で説明口調って……ココ何？」
「会長、死んじゃ駄目です！」
「まだ教わってない事が一杯……一杯…っ！」
「がいじょー！がいじょー！」
「……とりあえず、手伝おうか？」
「「「よろしくです！」」」
「真中…様……」
「「「会長ぉぉぉぉぉぉぉ！」」」
「……うん、なんだろう、この感じ」

「おばちゃん、洋食ランチひとつね」
「あいよ、今日はカルボナーラだよ」

流石ＩＳ学園定食は和食だけではありませんよ。

日替わりランチ、洋食ランチ、ランダム中華……どんだけコックがいるんだろうね。
そして結構美味しいんだよね……手抜きじゃないし。
この学校、お金が半端無いな。うん。
そしてランダム中華……コレ以上は言わなくても理解してくれる事を望む。

「ああ荒榎、ここにいたんだな」
「「……」」
「……え、いちゃいけない気がする」
「ん？いや、そんな事は無いぞ」

何時の間にか真中から荒榎に呼び方が変わっていたのは主人公のお約束。
大抵暫らく話すと何時の間にか名前に変わっているんだよね……。
いやいや、それにしても……二人の不機嫌度が半端無いです。ええ。
後ろの人員はスルーさせていただきます。

「一夏、待ってたわよ」
「……ああ。そういう事ね」
「「……ム」」

口って本当に『へ』の形になるんだな……綺麗に揃っておりますよ。
何この二人以外に息の合った行動が……一夏に惚れたらこうなるの？
つまり、暫らくしたら凰とかも加わって『へ』の字になるんですね分かり……ますけどシュールな光景だな。
そんな、俺が心配している？凰は食券機の前で通せんぼ。
両手でラーメン持ってるから、あんまり格好良くは無いと言っておこう。
んで、俺は既に料理が来ている。箒ちゃんは買った、セシリアも買

った。
つまり買ってないのは一夏……とエトセトラ。
まぁ、何が言いたいのかと言うと、だ。
俺は終わってるから良いけど、他の人に邪魔なんだよね。
俺には関係無いのでカルボナーラが伸びる前に座っていただきます。

「まぁ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」
「う、うるさいわね。分かってるわよ」
「のびるぞ」
「わ、分かってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！何で早く来ないのよ！」
「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸1年ぶりになるのか。元気にしてたか？」
「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ、たまには病気怪我しなさいよ」
「どんな希望だよ、そりゃ……」

いやいや、恋する乙女は好きな人を看病したいんじゃないかな？
つまり、本人としては合っているわけだよワ○ソン君……ここまで伏字にする必要あるのか？
他の小説でも普通に書いてる人いるだろ……。
ってか、この二人の会話が繋がっている様で繋がっていない気がするのは俺だけ？

「あー、ゴホンゴホン！」
「ンンンッ！、一夏さん？注文の品が来てましてよ？」
「ん？ああ、悪いな……空いてるし、あそこにしようぜ」

そんな事を言いながらこちらに歩いてくる一夏達。俺の事は見えて

いない様子で……ところで、何で隣に座っていやがるんでしょうかこの馬鹿は。
そんな場所に座るから……隣の席にどっちが座るかで火花なんて出来るように成るんだよ。
凰は話しやすいように前に座ったけど……ヲイ二人、その方法があったか的な顔をするなよ、話すのは凰なんだから。

「鈴、何時日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」
「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってんのよ。ニュースで見た時はビックリしたじゃない」
その話しを俺の隣でしますか……え、何これいじめ？

「そういや、何でアンタがＩＳ動かせるのよ」
「……さぁ？」
「ふぅん。開発者は分かるのよね？」
「……沈黙とさせていただきます」
「……あっそ」

いや、ホントに分からないし……でもそれはそれでなんだかなぁ、的な感じだからの沈黙。
開発者が開発したものを分からないってちょっと恥ずかしくない？いや俺だけの発明じゃないけど。というか主に束さんだけど。

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明して欲しいのだが」
「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」
「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ・・…」
「そうだぞ。何でそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「……」
「？何睨んでるんだ？」
「何でもないわよっ！」

何睨んでるんだって……睨むのは不機嫌だからに決まってるでしょ。
こんな会話を隣で聞きつつカルボナーラを食べ進める俺ですが、なんとか完食。
トレイを持って机から、抜け……抜け……。

「……」

座った。うん、俺は悪くない。
ただ周りの目が凄いことになってるから出られないだけだ。
今気づけば皆が凄い静か……なのに凄く注目されているテーブルがあるのが分かるだろうか。
おばあちゃんが言っていた、久しぶりな気がする現実逃避は弱めにしておいた方が良い……会った事ないけど。
……うん、ゼクターは格好良いよね！

「幼馴染……？」
「あー、えっとだな。箒が引っ越したのが小四だろ？鈴が引っ越してきたのが小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは1年ちょっとぶりだな」」

わー凄いね一夏君。入れ替えハーレムだねぇ……リア充が。
というか、この状況でそんな詳しく説明してなくて良いからさ、周りを見ようよ。
というか見てください。そして出来れば自室にてお話頂きたく存じちゃったりしますよ？

「んで、こっちが箒。ほら、前に話しただろ？小学生からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」
「ふぅん、そうなんだ」

火花散らすって何処の第三世代？
恋する乙女は無敵です。きっと世界侵略も出来るよ。

「初めまして、これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」

わー凄いなー……よし終了。さっさと帰れ。
もしくは帰らせてください。何この緊迫感。このテーブルは何時の間に戦場になったんですか？一夏が座った時ですね分かりぃ。

「ンンンッ！私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表、凰鈴音さん？」
「……誰？」
「なっ！？わ、私はイギリス代表候補生セシリアオルコットでしてよ！？まさかご存じない！？」
「うん。あたし他の国とか興味ないし」
「な、な、なっ！？」

まぁ、うん。そういうタイプもいるさ。
というか知っているほうが少ないんじゃないのかな？
少なくとも大抵の人は知らないと思うけど……面倒だし。
いや、代表候補生なら知っているのが普通なのか？分からんけど。
まぁ、そんな事を言いながらも覚悟を決めて席を立った俺でした、まる。
……あんまり注目されなかった。

「さて、腹も一杯になったし……寝るか」

人の視線には威力がある（後書き）

テスト週間なぅ。つまり誤字が多い可能性大。
最近進みませんね、うん。
あれなんですよね、先の話は思いついてもどうやってもっていけば良いのか・・・・前にも言った気がする。
さて、今回は鈴のビンタまでやりたかったんだけどなぁ・・・・・・無理っした！
最近内容が少なくなっていっているんですよね・・・・・・
そろそろバトルシーンが書きたいＤＥＡＴＨ☆
うん、やっぱりレトア出すしかないな。
もしくはメロディ・・・・・・あれ？どっちも年上なんですけど。
荒榎君年上に好かれ過ぎなことに今更ながら気づいた私めでございまする

あるいは現在進行形の進出（前書き）

時間稼ぎですんません

あるいは現在進行形の進出

「……そんな簡単には帰れないんですよねー」
「当たり前だ。午後の授業があるからな」
「そして最初から千冬さんですか……」
「嫌なら残れ、居残りは山田先生が教えてくれるぞ」
「居残るのはもっと嫌です」

さて、皆様少し変なところがあるのはお分かりだろうか？
まぁ、長引かせるのは疲れるから簡単に言うと、授業中なのに千冬さんと際している事だ。
ただ、一つ言おう、コレにはれっきとした理由がある。
その理由があるからこそ、クラスの誰もが怒らない訳で、寧ろ心配している訳で……。

「……グズッ」
「「……」」

なんで泣いてるんでしょうかね隣の子は。
より詳しく言うと、隣に座っている空建さんは何故かいきなり泣き出したのである。
もっともっと詳しく言うと、号令をして、教科書を未だ買っていない俺が見せてと頼み、授業が始まって少ししたらこの始末。
うん……分からない。
何で泣いたとかの前に、何でクラスの殆どが哀れむ様な目で彼女を見ているのか。
うん、分からない。何時の間にクラスはこんなに団結したんですか？俺抜きで。

「……うぅっ」
「あー、えっと、空建さん？」
「…はい……なんでじょうが」
「えっとだな……どうしたんかなー、なんて」
「……う、うぅ、ううううぅうううぅ」
「……荒榎話しかけるな、お前は逆効果だ」
「うん、僕そうする」

まさかの悪化！？
え、俺話しかけただけ、ってか泣いてる理由を聞いただけ……これってアウト？
えと、うん不明！分からない！ってか1組ほとんどの目が……！目が！

「……とりあえず今日の授業はココまでだ……号令できるか？」
「はい……問題ありません……グズ……起立！」

皆が立って

「気を付け！」

皆が背を伸ばして

「ありがとうございました！」
「なんで俺に！？」
「空建、授業ごに個人面談だ」

「……午後から死ねた」

うん、俺頑張ったよ、六時間頑張った。
ＩＳの練習は問題無かったから大丈夫だったし。
でもさ、うん、何だろうね……女子って分からない。

「まぁ、とりあえず教科書を買いに行かないとな……それとアリーナか」

今日は凰がこっちに来た日、つまりアリーナでの一夏達の練習後に凰が来る……はず。
その後のビンタは流石に見れないからな、とりあえず……面白そうだから絡んでみよう。

「会長、大丈夫ですか？」
「元気を出してください！」
「まだ大丈夫ですよ！他に力を注ぎましょう！」
「……ありがとう皆。でもね――――――ここ職員室前だから移動しましょ」
「「「……」」」

移動略

「と言う事で、真中様に教科書を見せる至福の時間は消えてしまったの……」
「「「……会長」」」
「でも！私はただでは起きあがらないわ！」
「それでこそ会長！」
「私達のお姉さま！」
「次は何やるんですか？着替えを覗きます？」
「そんな、変態チックな……変態……着替え……男子更衣室、上半身裸、気を緩める空間、汗の匂い……ゴクリ」
「会長それ危ないです」
「うん、流石にそれは……」
「言いだしちゃってごめんなさい……」
「なっ！べ、別にそんな事がしたい訳じゃないんだからね！」
「「「ツンデレ乙！」」」
「まぁ、話を戻すけど、なんと！現生徒会長であり真中様のお嫁さんの更識楯無会長より同好会としての成立を承認してもらえたわ！」
「「「な、なんだってー！？」」」
「対価として真中様のベストショットをネガごと売って欲しいと言

われたけど、私達の目指す先は写真よりも高いの！だから、それをあしがかりとして大きな行動に移すのよ！」
「「ＹＥＡＨ！」」
「ごめん、私それ分からない」
「写真の良さによっては個人的な支援もあるそうよ！」
「個人的な支援……」
「つまり、賛同？」
「えっと、許可が出た？」
「大々的な支援が可能となったのよ！」
「「ＹＡＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」」
「や、ヤホー……私英語苦手」
「だらしない事言ってられないわよ？真中様の周りには様々な国の人が集まってるもの英語がなんぼのもんじゃー！」
「「もんじゃー！」」
「も、もんじゃー……あ、もんじゃ焼き食べたいな」
「とにかく、コレからは全員にこの薄型カメラを渡しておくから、練習しておいて」
「おおっ！これは前に欲しいと言っていたカード型！」
「しかもなんか一つ一つ違う！」
「シャッター音がしない！」
「「「……え？」」」
「犯罪がなんぼのもんじゃー！」
「もんじゃない！」
「「もんじゃー！」
「もんじゃないよね！？」
「とりあえず、先ずは教科書をすべて買い占めるのよ！」
「「「諦めてないじゃん！」」」
「私だけの至福の時間なのぉ！」
「「「それズルイ！」」」

あるいは現在進行形の進出（後書き）

さて、自分断耶はこれから暫く旅に出ます、探さないでください、
沖縄に行きますから
修学旅行ですよ！沖縄ですよ！美ら海水族館年に一度の休日ですよ・
・・・・・
一体何をしにいけばいいんでしょうかね？楽しいことってありますか？
いや、授業の一環なんですけどねぇ・・・・・ねぇ？
同じ入場料を払ってネオパーク沖縄とかいう動物園に行くらしいです、はい
・・・・・・えぇーですよね
自由時間は三時間・・・だったかな？
学生服のブレザーで、ホテル内も体操服だそうＤＥＡＴＨ☆
うわ悲しい・・・・・・
とまぁ、明後日から三日間？旅に出るので書けないんですよね
なので今のうちに時間稼ぎ的な作品を一つ書いて出しておきます
それがこれ！
うん、ちょっと変かもしれないし、少ないかもしれませんが・・・・
・うん！

夢って見てるときは現実に思うよね（前書き）

やっちまったぜ☆
R指定が入りそうなよく分からない境界線

夢って見てるときは現実に思うよね

「荒榎、荒榎、起きてよ荒榎」

名前を呼ぶ甘い声。
もっと聞きたくて、つい寝たふりをしてしまう。
そんな行動が分かったからか、彼女は溜め息とも苦笑とも言えない呼吸を一つ。
何処か嬉しそうに、何処か弾む様に、何処か困った様に。
そんな音でも心地よい。このまま寝ていたい、このまま聞いていたい。
矛盾を孕んだ二つの意見。どっちにしようかと悩んでいると、傍で何かが動く音。
それから生暖かい空気が耳に掛かる。
暖房でも付いたのだろうか、心地よい温度に意識が遠のいてゆく。
もう少しで眠る。そんな時に一つの音。

ぴちゃん。

耳元で——否、耳で鳴った音に目が覚める。
何が起きているのかを確認する前に、耳に何かが触れている事に気づく。
いや、それだけではない——濡れている。

ぴちゃり、ぴちゃ、ちゅぱ

濡れている？——否、舐められている。
濡れる耳を舌が舐める。甘い噛み方が耳に刺激を与える。

それは何処か恥ずかしく、それでいて気持ちが良い。
嫌かと聞かれれば嫌ではないと本心から即答出来る。
ここで、ふと誰が相手なのかが気になった。
本来なら一番初めに気にしないと行けない所なのに、今まで知ろうともしなかったが、そこに疑問は抱かない。
それだけ気持ち良かったと言うべきか、それほど恥ずかしかったと言うべきか。
よくよく考えれば相手が知り合いかすらも怪しい。
だから、目を開ける。辺りが暗い。

「……へ？」

暗い中で見えた金髪。
輝くような金色では無く。包み込むような、優しいような金色。
それを見て思いつくのは一人。昔から遊んでいた、親繋がりで知り合った娘。
おっとりしている様で、狙っているんじゃないかと思わせる行動が偶にある。
親の言う事を信じて、とても綺麗だったあの子。
――いや、しかし待て。
ここまで来て少しずつ頭が働くようになってきた。
髪の毛は似ている、確かに似ている。似ているが……
――髪の毛だけでの判断は違うだろ。
第一、まだ来ていない筈だ。
そんな事を考えつつ、揺れる金髪をぼーっと眺める。
頭は働いてきた。否、働いていた。
耳もとの音と快感で考えが纏まらない。

ぴちゃり、ぴちゃり、ちゅぱ

実際になっている音はとても小さい。
しかし、それを耳元で鳴らされている本人にはとても大きく聞こえる。
そんな音を聞いているほど、頭の動きが鈍くなってゆく。
もうこのままでも良い、そんな事を考え出した時――快感が止まる。
音が止み、彼女が動く。

「荒榎、やっと起きた？」
「……シャロ？」

暗闇の中でも見える彼女の顔はとても妖艶で、無駄な着飾りが無い黒いドレスが今までとは違う雰囲気を醸し出している。
そんな彼女は荒榎の横に寝ていたのだろう。上半身だけを起こして荒榎と顔を合わせている。

「なんで……ここに……？」
「荒榎がいるから」
「……叔父さんは？」
「見送ってくれたよ」
「……学校は？」
「明日から転校だよ」
「……」
「……？」

――いやいやいや
快感が止まった事で次第に頭も働くようになり状況を把握していく。
場所は研究室の寝室。現在時刻は腕時計からして朝の五時。
シャルロット・デュノアが居る以外は何時もと変わらない。
頭をフル回転させていると、動きが無い荒榎にどう思ったのか、シ

ャルロットが荒榎の上に乗ってくる。

「……荒榎ぁ」

「っ、ど、どうしたの？そんなに近付いてきて」

「…近付いちゃダメ？」

上に乗っているのに上目遣い。

顔を少し下に向け、方を少し上げることで不自然さを無くした動き。

昔会った時には思えない行動にドクッ、としながらも反応したことを知らせたくなくて整然とした声を絞り出す。

「え、あ、いや、別に問題無いけど」

「じゃあ近付く」

にこっ、と笑って余計に顔を近づかせるシャロ。

荒榎の体の上をシャロの体が這う。

幼児時代とは違う体つきが動くことでより強調されて伝わってくる。

何とか気持ちを落ち着かせようと下を向いて長い瞬きを一度。

目を開けると先程まで無かった影。顔を上げると目前にシャロ。

「……ちょっと近過ぎない？」

「荒榎はイヤ？」

「え、いや、別にイヤじゃ……」

「じゃ、良いよね？」

さっきと同じ方法に引っかかるのは荒榎の石が弱いからか、はたまたシャロが積極的になってきたからなのか。

ふたたび、にこっ、と微笑まれてしまえば訂正することも出来ない。

何時も以上に、人に許したことがあまり無い距離に少し緊張しながらも頑張っていつもどおりを意識する。

「そろそろ起きるから、ちょっとどいてくれるかな？」
「いや」
「……いや、嫌じゃなくてさ。お茶でも入れるから」
「いらない」

何を言おうと荒榎の上から動かない。
どうすれば良いのか分からず黙ってしまう荒榎。
それに対してシャロは顔を落として抱きつく。

「荒榎の匂い……良い匂いだね」

そう言ってシャロが荒榎に顔を押し付ける。
シャロが顔を揺らすたびに何かの良い匂いが伝わってきて状況をより鮮明にさせる。

「……し、シャロ？」
「荒榎……」

さっきよりも甘い声。
顔を上げた彼女の瞳が潤んでいる。
荒榎、再び名を呼ぶシャロの顔が近付く。

「荒榎、私の事好き？」
「……好きだよ？」
「それは友達として？それとも――」

――一人の女性として？
そう聞く彼女が足を絡ませる。
普通は立場が逆なんじゃないか？なんて事を考えつつも頭が高速回

転する。
一人の女性、つまりは異性。
その問いの意味は誰でも理解できる。
簡単な質問。好きか、嫌いか。
好きかと聞かれれば好きと言える。
しかし、それが異性としての女性かと聞かれれば分からない。
今まで会ってきたのも友達として。これから合うのも友達としてだと思っていた。
今までも過剰とも思える行動も、年が経てば普通になっていると思っていた。
嫌いかと聞かれれば違うと言える。
それは異性としてでも同じ。嫌いじゃない。嫌いじゃないが、好きかは分からない。
簡単な問いであろうと答えは難しい。人の心は好きと嫌いだけでは出来ていないから。
久しぶりに会っての問い。
つまり、それは昔からの思いで、今でも変わっていないという事。
それは、今までの行動が彼女を傷つけていた可能性もあると言う事だ。

「……」
「答え…られないよね」

まるで分かっていたような言葉。
にこり、と微笑む彼女の顔はさっきよりも悲しみを帯びていた。

「でもね、良いんだ。荒榎が好きと言えなくても」

私は荒榎の事を愛していると言えるから。
そういって、彼女の唇が荒榎の――――――

「……うわー」

現在荒榎は悩んでいます。

第一として相手がシャロと現実で知ってる人だから。

第二に目が覚めた時に『もったいない』って思ったこと。

……うわー。

うわーうわーうわーうわーうわー……わー！

「……恥ずかしくて死ねるんだけど」

夢って見てるときは現実に思うよね（後書き）

さて、先ずはこの作品について言うならば、だ
沖縄に行って帰ってきた欲求を迷わずぶつけたらこんな感じに出来上がってしまったんだ！
沖縄大変だったんですよ！自由見学に範囲限定のお言葉を貰いまして、回りたかった店が回れなかった件とかですＹＯ！
沖縄ミリカジは言ってきましたけどね（ドヤッ
ライフル弾のネックレスとソフトポイント弾・・・・・いわゆる通常弾のキーホルダーを一つずつ買ったんですけどね？
お店の人に気になって『これって空港とか大丈夫ですかね？』って聞いたら
『あー・・・・・大丈夫だとは思いますけど・・・・・郵送しますか？』
なんて言うから、つい郵送でお願いしましたよ！
そしたら、空港で飛行機を待っているときに友達が通常弾を見せびらかしてきました・・・・・・郵送代２００円（泣
つい悲しくなって帰りに境界線上のホライゾンを買ってしまった（笑
つながり？考えちゃダメダゾ☆・・・・・ゲハッ！？
ま、まぁ、そんな感じで買ったんですけれども
一巻の上下と二巻の上下を買おうとしまして、手に持って並ぼうとしたときにちょっと電話。
一旦本を置いて携帯使用。
会話終了で本を持って買いました！・・・・・はい一巻の上と二巻の下だけ
うん、厚みで安心した俺がバカだったんですよ！
一巻の上と二巻の下だけで通常本四冊分とか超えてるじゃないですか！
・・・・・・・・・・・・・一巻読み終わって続きが読めない悲しみ

とか何とか言ってる今！一巻の下を買いました！
やったね！ドンドンパフパフ！・・・・え？二巻の上？そんなもの
五件回った本屋のどこにも売ってませんでしたとも、ええ
アニメイトも売り切れでした。メロンブックすも売り切れでした
ＴＵＴＡＹＡとか三洋堂とか売り切れでしたとも！
一巻の下を最後によった高原書店と呼ばれる本屋で見つけて感激で
したよ・・・・・
そんなこんなで境ホラにはまっている作者断耶よりお送りいたしま
した
ネシンバラとか賢姉大好き！
・・・・・・・・・・・・・・・最近自分の好きなジャンルが分から
なくなってきて困っています

荒榎様御乱心の巻（前書き）

なるよね？あんなことがあったらこうなるよね？

荒榎様御乱心の巻

「よう一夏。頬っぺたが真っ赤だぞ」
「おう荒榎。物凄い隈だぞ」

教室前の廊下で出会って一言。
うん、あんな夢を見た後に寝るのは無理だった。
ちなみに夢で起きたのは午前０時。
昨日寝たのは大体午後１２時。
いや、それだと同じ時間になるから大体１１時３０分。
あれか？瞳の所為で夢とかも高速で見るのか？だから短い時間で長い夢を見た感覚になるのか？
うん、素晴らしいほど要らない能力ですね分かりぃ。
夢の中で寝るなら良いんだけどさ、夢の中でアレですよ？
疲れがとれた気がしない。んで寝れないから暇つぶしにゲームとかしてるから目が疲れるし。
視力が下がらないのが奇跡的かもね……うん、なんで下がらないんだろう。
と、そんなこんなで一夏がビンタを受けた後……原作って左手だっけ？右手だっけ？
……幻の左！
テンションがおかしいだけだから放置でよろ。

「ああ、昨日寝れなくてさ」
「ああ、昨日鈴に叩かれたんだよ」
「……女って怖いよな（誘惑的な意味で）」
「ああ、怖いよな（攻撃力的な意味で）」
「おかしいよな、あれは。なんであんなに変わるんだろうな（服に

よる雰囲気的な意味で）」
「ああ、急に変わるよな（気分的な意味で）」
「……お前も大変だな（ハーレム結成後的な意味で）」
「そういう荒榎もな……（会長の行動的な意味で）」

なんだろう……一夏の苦労ってこんな感じなのか？
いや、でも一夏はどんな事があっても気づいてないし……俺に至っては夢だから結構違うのか？
まぁ、うん。何でも良いや。もう良いよ、夢だったんだからさ、ＨＡＨＡＨＡＨＡ……シャロと会った時に普通に出来てれば問題無いよね？
うん、早めに忘れよう……なんて考えてる間は忘れてないじゃんね……。

「……思考って面倒だよね」

さて、時は変わって授業中。
現在隣の空建さんに教科書を見せてもらっております。
え？前回買うって言ってたじゃないかって？ＨＡＨＡ，そんな

事も言ったような言ってないような・・・・・言いました。
けどね、一つだけ言わせて欲しい――――売りきれなんて誰も想像してないじゃんね？

「なんかゴメン……昨日買うって言ったばっかりなんだけど売って無くてさ」
「え、あ、いいえ。大丈夫です！」

……空建さんって以外にドSだったりするのかな？かな？
凄い良い笑顔で大丈夫って……え、俺嫌われてた？
思い返して見れば……人に好かれる事をした憶えがあまり無い。
特に興味が無い人は他人Aで通してきた俺としては結構な進化だと自負している……完全に束さん化してたじゃん。
うん、戻って来れて良かったよ……洗脳なのか？そうなのか？んな訳無いかのアッハッハ・……意味分からん。

「……とりあえず、教科書の製作所に連絡すれば一つくらいは手に入るから明日は大丈夫」
「……あ」

ドS決定……うん、なんでそんな寂しそうな悲しそうな顔……鬼畜って奴ですかそうなんですね。
そうか、だからか。鬼畜だから俺も頭が上がらないのか！だから最初から『さん付け』なんだ！
そうだよそうですそうだもんな！今まで大抵の人は目上だろうと『さん付け』なんて知り合いにしか使ってないし、それも同い年には初めてかもしれない！
箒ちゃんは『ちゃん付け』だし、シャロはシャロ、ラウラはラウラ
……うん！だからか！
……いやいや待て待て俺の数多…俺の頭。

冷静に考えるんだ、きっと睡眠時間が少ないから頭がおかしい人になってるんだ。
ほら、さっきだって『そうだよそうですそうだもんな！』なんて言ったけど――――――何時もだったら最後は『そうですもんね！』まで行けてたじゃないか！
そうだよそうですそうですもんね！これが本当の俺なんだよ！……
……暴走してるのは確実だな。
集中力とか全然ありませんとも、ええ！落ち着こうとする度に夢を思い出しますがなにか！
同い年に！しかも仲が良い、括弧自分だけかもしれないけど！括弧閉じるの女の子だぞ？激しい罪悪感ですよ？
括弧まで口で言うんです別に間違えた訳じゃないんです。
デスマスク超格好良い！……ですます口調格好良い！…どこがだよ……無心ってどうやるんだっけ？

「……」
「……固まった荒榎様もイイ」

とりあえず、落ち着け、落ち着けば何かが分かる……はず。
そうだ、アリーナへ行こう。うん、そうしよう。体を動かせば忘れるはずさ！

「ターゲットは最大数で反撃機能あり命中精度Ａでよしきたこれ！」
「……」

よし、善は急げだアリーナへＧＯ！

「チャイムが鳴ったのに荒榎が何処に行ったんだ……」
「アリーナへ行きました……」
「ターゲット数は最大で……」
「反撃機能をアリ……」
「命中精度Ａで訓練するそうです……」
「……ったく、呼んでくるから自習していろ」
「「「「「やめて！」」」」」

本日の１年１組の教訓――――変な荒榎様は見たくない！

「アイツどうしたんだ？」

……男性一人を除いて。

荒榎様御乱心の巻（後書き）

前回の受けがあまり宜しくなかった用で……一生精進

次こそは鈴のお怒りシーン……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3019r/

ＩＳ・・・・・・・・・・・・・うん、結構辛いね

2011年12月21日18時47分発行